

## 共同研究の経緯・日程・内容

沖縄国際大学（沖国大）沖縄法政研究所（法政研）では、二〇〇九年度から、共同研究の制度が創設された。今回「石川元平氏オーラル・ヒストリー」（「石川オーラル」）を取り纏めた、本共同研究「戦後沖縄政治史の研究」も、五月に発足している。その際の共同研究者は、佐藤学所員／法学部教授、吉次公介所員／法学部准教授（のち教授）、黒柳保則所員／法学部講師（のち准教授）の三名（以下では共同研究者について初出以外は肩書を省略する）であった。「いずれオーラルを取れば」と考えたのである。

本共同研究はこのように発足し、当初は個々人がそれぞれ研究を進め、成果を法政研の研究会で報告したり、紀要『沖縄法政研究』に寄稿したりしていた。折に触れてオーラルの人選について検討していたが、黒柳が二〇一一年四月に副所長となったこともあり、「懸案」の実現を図る機運が徐々に高まった。

しかし、三名から構想は出るものの実現に至らないうちに、二〇一三年四月には、吉次が立命館大学法学部に転出して特別研究員となり、黒柳は副所長二期目に入った。そんな折り、六月に、黒柳は、二〇一一年度から特別研究員となっていた、櫻澤誠立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員と、那覇にて会う機会があった。その場で、櫻澤から、今回の「石川オーラル」に結実する、それまで温めて来た聞き取りの構想が提案されたのである。

石川元平氏は、沖縄教職員会時代にはかの屋良朝苗会長に「秘書」として仕え、一九九〇年代には沖縄県教職員組合執行委員長を務めて当時の大田昌秀沖縄県知事のブレーンとしても重きをなした。本共同研究の趣旨に相応しい人物であることは間違いない。二〇一二年一月六日（火）には、法政研第三二回講演会において、「『復帰四〇年』屋良朝苗が遺したものと題してお話を賜った」ともある。

黒柳が佐藤と吉次に了承を求めたところ快諾を得たので、石川氏

からの聞き取りの準備を進めることとし、櫻澤を共同研究者とする手続きも取った。また、二〇一三年四月から沖国大に採用された、野添文彬所員／法学部講師も、共同研究者に加わっている。

聞き取りの準備は、まず、櫻澤が、二〇一三年八月、石川氏に連絡を取り、実施について了承を得ることから始まった。それを受けて、櫻澤に質問項目の案を提出してもらい、九月に全共同研究者で検討している。こうして、石川氏の出生から現在に至る、五八項目にわたって聞き取りを行うことが固まった。挙げられた項目は、櫻澤から事前に石川氏にもお知らせした。

聞き取りは、各項目ごとに、まずは石川氏のお話を賜り、それを受けて櫻澤が質問し、これに対する石川氏による応答があり、さらに各共同研究者が石川氏に質問する形式で進めた。

聞き取りの第一回は、二〇一三年一〇月一九日（土）一三時〇〇分から一七時三〇分まで、沖国大一三号館研究所会議室（第四回が同館五〇七教室で行われた以外は同じなので会場について以下では省略する）にて行われている。聞き手は佐藤・黒柳・櫻澤・高橋順子日本女子大学人間社会学部助教（櫻澤を通して参加を希望された）である。高橋は、二〇一四年度から特別研究員と共同研究者になっている。出生から教員になるまでの時期について伺った。

第二回は、同年一月八日（土）一四時〇〇分から二〇時三〇分まで行われている。聞き手は佐藤・黒柳・野添・櫻澤である。沖縄教職員会の専従となり、復帰運動や教公二法阻止闘争に取り組み、三大選挙に至るまでの時期について伺った。

第三回は、二〇一四年一月二五日（土）一三時三〇分から一八時三〇分まで行われた。聞き手は、佐藤・野添・吉次・櫻澤・高橋である。毒ガス移送から屋良主席誕生を経て復帰前後に至るまでの時期について伺った。

第四回は、同年三月一日（火）一四時〇〇分から一八時〇〇分まで行われた。聞き手は、佐藤・黒柳・野添・吉次、櫻澤、高橋である。屋良県政の時期について伺った。

第五回は、同年四月二十五日（金）一三時三〇分から二一時〇〇分まで行われた。聞き手は、佐藤・黒柳・野添・吉次・櫻澤・高橋である。日教組加盟から西銘県政の時期について伺った。

第六回（最終）は、同年六月二十八日（土）一三時三〇分から一九時〇〇分まで行われた。聞き手は、佐藤・黒柳・野添・櫻澤・高橋である。大田県政から現在までの時期について伺った。

各回とも、石川氏はノートにびっしりとメモを取って臨まれ、また時には貴重な資料を配布されるなど、並々ならぬ熱意がひしひしと感じられた。ここに深甚なる謝意を表したい。

なお、聞き取りを受けての「石川オーラル」編集作業は、まず、各回ごとに、黒柳が南風原町にある光文堂コミュニケーションズ（株）に依頼して、録音データを文字に起こしてもらった。

それを櫻澤が二〇一五年八月から九月にかけて通して録音を聴きながら全て確認しつつ仮原稿を作成し、九月から一〇月にかけて全共同研究者が確認した。さらに、確認済の仮原稿を櫻澤が再確認し、そのうえで黒柳から石川氏に送付のうえ、一月から二月にかけて確認して頂いている。

一二月三日（木）には、沖国大一三号館五〇七教室にて、佐藤・黒柳・野添・櫻澤が集まって編集会議を開催した。石川氏に確認して頂いた仮原稿は、さらに櫻澤によって、二〇一五年から二〇一六年の年末年始に、本原稿にする作業がなされている。

本原稿をもとに、黒柳が目次や共同研究の経緯・日程・内容といった本文以外の部分を作成した。印刷会社は南風原町にある（株）近代美術に決定し、二〇一六年二月から三月に黒柳と櫻澤が校正作業を行っている。校正作業の過程においては、同年二月二十九日（月）、沖国大一三号館五〇七教室にて、石川氏と共同研究者で最終の確認を行った。

本共同研究については、法政研の稲福日出夫所長、照屋寛之前所長、石川朋子研究支援助手に、ひとかたならぬお世話になった。

また、本文の括弧内の文言は、編集過程において補足されたもの

である。なお、本文には差別的表現も見られるが、時代の制約を前提とする使用法を、当時の雰囲気伝えるためにそのまま用いたものであるとご理解を願いたい。

（黒柳）



2016年2月29日 沖縄国際大学にて



2016年2月29日 沖縄国際大学にて

### 石川元平氏 略歴

■石川 元平 いしかわ げんぺい

1938（昭和13）年3月6日、沖縄県国頭郡東村字有銘生まれ。1957年3月、辺土名高等学校卒業。3年間の代用教員（助教諭）時代を経て、1960年より沖縄教職員会の専従（総務部付会長秘書兼）となる。沖縄県教職員組合への改組後、総務部長、組織部長、法制部長、副委員長を経て、1991～99年に執行委員長を務めた。



# 第一回〜第六回インタビュー目次

共同研究の経緯・日程・内容

石川元平氏 略歴

## 第一回

- 「出生、家族のこと」 2
- 「戦前の記憶」 3
- 「出生、家族のこと」「戦前の記憶」の質問・応答 4
- 「沖繩戦について」 5
- 「沖繩戦について」の質問・応答 8
- 「戦後初期の状況」「小学生時代」「中学生時代」 16
- 「戦後初期の状況」「小学生時代」「中学生時代」の質問・応答 20
- 「高校生時代」 28
- 「教員になるまで（きっかけ、免許取得方法など）」 30
- 「高校生時代」「教員になるまで（きっかけ、免許取得方法など）」の質問・応答 31

## 第二回

- 「勤務した学校の状況」「青年時代の地域とのかかわり（青年団など、土地闘争時のこと）」 34
- 「勤務した学校の状況」「青年時代の地域とのかかわり（青年団など、土地闘争時のこと）」の質問・応答 37
- 「教職員会専従になるまで」 41
- 「教職員会専従になるまで」の質問・応答 43
- 「一九六〇年代の教職員会での日常活動」 46
- 「一九六〇年代の教職員会での日常活動」の質問・応答 51
- 「復帰運動（復帰協大会、海上集会、日の丸掲揚運動、日本語教育など）」 54

「復帰運動（復帰協大会、海上集会、日の丸掲揚運動、日本語教育など）」の質問・応答 59

「主席公選要求闘争」 61

「主席公選要求闘争」の質問・応答 62

「佐藤訪沖（来沖）」 63

「佐藤訪沖（来沖）」の質問・応答 64

「教育権分離返還問題」 65

「教公二法阻止闘争」 66

「教育権分離返還問題」「教公二法阻止闘争」の質問・応答 69

「屋良会長および石川氏の佐藤・ジョンソン会談への印象」 71

「三大選挙（それ以前の選挙への関わりとの比較も併せて）」 72

「屋良会長および石川氏の佐藤・ジョンソン会談への印象」「三大選挙（それ以前の選挙への関わりとの比較も併せて）」の質問・応答 75

## 第三回

- 「毒ガス移送」「核撤去」 82
- 「毒ガス移送」「核撤去」の質問・応答 83
- 「屋良主席時代」 85
- 「B52墜落事件、二・四ゼネスト」 86
- 「屋良主席時代」「B52墜落事件、二・四ゼネスト」の質問・応答 89
- 「屋良主席（および石川氏）のアメリカ観、中ソ観、冷戦観」 92
- 「屋良主席（および石川氏）のアメリカ観、中ソ観、冷戦観」の質問・応答 94
- 「全軍労働争」 99
- 「全軍労働争」の質問・応答 101
- 「コザ事件」 102
- 「コザ事件」の質問・応答 104
- 「国政参加選挙」 105

- 「国政参加選挙」の質問・応答 105
- 「屋良主席および石川氏の佐藤・ニクソン会談への印象」「核抜き・本土並み」返還、「密約」、佐藤、若泉についての屋良知事および石川氏の評価」 107
- 「屋良主席および石川氏の佐藤・ニクソン会談への印象」「核抜き・本土並み」返還、「密約」、佐藤、若泉についての屋良知事および石川氏の評価」の質問・応答 109
- 「復帰前後」 113
- 「復帰前後」の質問・応答 114

#### 第四回

- 「県知事選挙」 118
- 「屋良県政（CTSなどの葛藤、教育委員会との関係）」 118
- 「県知事選挙」「屋良県政（CTSなどの葛藤、教育委員会との関係）」の質問・応答 121
- 「自衛隊配備への反対」 128
- 「自衛隊配備への反対」の質問・応答 130
- 「屋良知事の復帰後における米軍基地問題への取り組みと日本政府の対応」 133
- 「屋良知事の復帰後における米軍基地問題への取り組みと日本政府の対応」の質問・応答 133
- 「屋良県政（および屋良知事という政治家）の成果と限界」 136
- 「屋良県政（および屋良知事という政治家）の成果と限界」の質問・応答 139
- 「屋良知事および石川氏の日米安保体制の評価」 143
- 「屋良知事および石川氏の日米安保体制の評価」の質問・応答 143

#### 第五回

- 「日教組加盟」 148
- 「復帰前後の本土との「系列化」の問題」 148

- 「日教組加盟」「復帰前後の本土との「系列化」の問題」の質問・応答 150
- 「復帰協解散について」 155
- 「復帰協解散について」の質問・応答 158
- 「革新県政から保守県政へ（この間の県知事選挙、国政選挙のことを含めて）」 159
- 「革新県政から保守県政へ（この間の県知事選挙、国政選挙のことを含めて）」の質問・応答 160
- 「西銘県政の評価」 165
- 「西銘県政の評価」の質問・応答 165
- 「主任制闘争」 170
- 「主任制闘争」の質問・応答 172
- 「教科書問題」 173
- 「教科書問題」の質問・応答 175
- 「日の丸・君が代」闘争（日の丸掲揚運動への批判も含めて）」 179
- 「日の丸・君が代」闘争（日の丸掲揚運動への批判も含めて）」の質問・応答 175

- 「屋良知事と石川氏の天皇制についての認識」 180
- 「日の丸・君が代」闘争（日の丸掲揚運動への批判も含めて）」 180
- 「屋良知事と石川氏の天皇制についての認識」の質問・応答 183
- 「一九七〇～八〇年代の教組内部の変容（日教組との関係、管理職との対立、内部対立）」「四〇〇日抗争」、連合結成前後」 188
- 「一九七〇～八〇年代の教組内部の変容（日教組との関係、管理職との対立、内部対立）」「四〇〇日抗争」、連合結成前後」の質問・応答 192
- 「一フイート運動の会（一九八三年～二〇一三年）」 193
- 「ひめゆり平和祈念資料館設立運動」 194
- 「命どう宝」の沖縄の平和思想」 195

#### 第六回

- 「大浜方榮発言について」 202

- 「大浜方栄発言について」の質問・応答 203
- 「教組委員長になるまで」 204
- 「教組委員長になるまで」の質問・応答 205
- 「一九九〇年県知事選、大田県政との関わり」 206
- 「一九九〇年県知事選、大田県政との関わり」の質問・応答 209
- 「一九九五年米兵少女暴行事件、県民大会とその後」の質問・応答 211
- 「一九九五年米兵少女暴行事件、県民大会とその後」の質問・応答 212
- 「屋良朝苗氏死去、県民葬（一九九七年）」 214
- 「屋良朝苗氏死去、県民葬（一九九七年）」の質問・応答 215
- 「革新県政から保守県政へ」 216
- 「革新県政から保守県政へ」の質問・応答 217
- 「稲嶺県政に対する評価」 219
- 「稲嶺県政に対する評価」の質問・応答 220
- 「辺野古移設をめぐって」 221
- 「普天間米軍基地爆音訴訟（二〇〇二年～）」 223
- 「普天間米軍基地爆音訴訟（二〇〇二年～）」の質問・応答 225
- 「教科書問題、「集団自決」、県民大会（二〇〇七年）」 227
- 「教科書問題、「集団自決」、県民大会（二〇〇七年）」の質問・応答 229
- 「民主党・鳩山政権の評価」 232
- 「民主党・鳩山政権の評価」の質問・応答 233
- 「反基地運動の高揚、県民大会（二〇一〇年、二〇一二年）」 234
- 「反基地運動の高揚、県民大会（二〇一〇年、二〇一二年）」の質問・応答 238
- 「戦後沖繩の「革新」と「保守」それぞれの成果と限界」 239
- 「「復帰」とは何だったのか。自治州構想や独立論などをふまえて」 241



## 第1回 インタビュー

---

日 時	2013年10月19日（土） 13:00～17:30
場 所	沖縄国際大学13号館1階研究所会議室
話し手	石川元平
聞き手	佐藤学 黒柳保則 櫻澤誠 高橋順子



## ■「出生、家族の二つ」

○櫻澤 誠

今日からこちらで行う聞き取りについては、私が中心になってお伺いをしていくという形をとらせていただきたいと思っております。事前にお送りしたメモに沿う形でご用意もいただいているようですので、基本的にはこのメモに沿う形でお伺いをしていければと思っています。

まずはじめに、どちらでお生まれになって、その後どちらでお育ちになったのか、ご家族のことなど、そのあたりのことからお伺いできればと思います。

○石川元平

私の石川の姓名の中で、元一から元樹までいて、元康（幸）なんという、それはいとこたちを含めて無数にいるんですけれども、元平という、それは私一人ですね。非常に珍しい。昔名付けする時に沖縄でシムチと言いますけれども、三世相みたいな、見る人などがいて、うちのオバーの、祖母の兄弟のオジーが一応名付けしたらしいんだけれども。そうしたらこれが母親からずっと遺言のように聞かされてきたものですから、いい名前だと。将来お前は上々の偉い人に引き立てられる、こういう運命をたどるであろうと。ところが育て方を誤ると、ウンタマギルーというのはわかりますか？

○黒柳保則

ウンタマギルーですか？

○石川元平

義賊です。

○黒柳保則

義賊ですね、はい。

○石川元平

義賊のようになるかもしれないから、十分気を付けて育てなさい

と言われたというんです。これがうちの母親は非常に心に残っていて、男では末っ子なものですから、ほかのいとこたちから、お前は目に入れても痛くないという、そういう育て方をされたよ、と。

そういうことで一九三八年三月六日、国頭郡東村字有銘で、貧しい農家の父親、石川元松と母ツルの七人兄弟の三男として出生をいたしました。

私ども石川家は、一八七九年のあの廃藩置県の約三〇年前に首里からヤンバルの屋我地島へ移住をしたようです。これは家譜の記録の中にも残っています。なぜ屋我地島か。伝承によると島流しに遭ったのではないかと。首里士族であったわけです。ヤンバル入りしたこの我が祖先は、結婚はしたものの、酒と三線に明け暮れたために、妻は実家に引き取られたと。その引き取られた妻のことについては、後ですと私の親の代まで門中でいろんな騒動があったこと、これは私自身も見てきましたので、確かにこういう祖先がいたのだなど。そのことがありまして、実は石川家では、私で一〇代ですけれども、親の代まで三線はご法度なんです。私の代からようやく許された。

今、本籍は有銘ですけれども、東村有銘に行ったのは廃藩置県の直後です。これは当時、九歳の時に有銘に行ったという、いとこ叔父の証言を私は聞く機会もありましたので、間違いなく廃藩置県の直後に有銘に、石川家一族数十名で行ったというんです。そんなに大きな村ではないんですが、元々の村人にユイクサ、招かざる客。これはどういうことかといいますが、沖縄は海に囲まれて海藻がいっぱい生えています。台風之余波などで底が荒れますと海藻は根っこが切れるんですね。そして藻が押し寄せてきます。海岸を埋め尽くすんですよ。ユイクサと我々は言っていました。これが畑の肥やしにもなったりしましたけれども、要するに廃藩の落ち武者たちのことはユイクサーと言われて非常に嫌われたと。したがって、いわゆる平地に住みませんので、一〇〇メートルぐらい山の上に石川家の古屋敷の跡があります。この首里、那覇から、特にヤンバル、

これは中部でもありますけれども、士族が居住していた区域を屋取、ヤードウイと。そこに暮らしている人々のことをヤードウイシンカというふう言っていて、これは今でもいろんな書物などに出てきまますし、民謡などでもヤードウイというようなことがよく出てきまます。

## ■「戦前の記憶」

### ○石川元平

あと、二番目の戦前の記憶、大きく二つに分けて申し上げたいと思いますけれども、戦前の有銘はいわゆるターブックワー。田園地帯という代表するのが羽地ターブックワー、ものすごく広大な、次に広いのが国頭村の奥間ターブックワー、有名でした。おそらく三番目ぐらいに有銘ターブックワーは有名だった。その田園地帯に住みまして、前には有銘川、そして三方は山に囲まれている、こういう幼い頃の思い出ですが、この遊びの中で今の中国の影響を強く受けたなと思いますのは、トーヤマー遊びというのをやったんですね。これは後に色々調べたら県下であったようです。これはどういうものかといいますが、力草という道端に生えている、根を張って葉っぱは大きく伸びませんが、すごく根強いんですね。根っこに茶色のさなぎがありまして、ちょうど蚕の繭の中に入っているさなぎに似たようなもので、この尻をつかみますと、くるくる回るやると言ったらこうやるんですね。これが一つの遊び道具として、これがすごく今でも印象に残っています。

祖母は非常に厳格な人で、僕が生まれる二年前に亡くなったようですが、そのオバーの妹二人は健在で、この厳しい躰を受けたんですね。うちの祖母のことを、これはまた他の年寄りたちが言うんです。「イッターウンメーヤ、ワラシンブーサーイ、ウチナーマチュ

ンデイイミセータン」と。あなた方のおばあさんは、藁の芯、藁の芯って短いですよ、抜いたらね。藁の芯で沖繩を巻くと。要するにすごい女傑であったと。いつもクバオージをやって、働きはしなかったというんです。だからうちの母などはものすごく苦労したと、嫁たちがね。オジーはまたものすごく苦労したようです。これは同じ士族でも、第一尚氏の孫氏なんです、佐敷の当真で。これは私も調べました。祖母の妹も大柄の女性たちでしたけれども。

またこういう表現をしました。「唐ヤ唐傘」、昔の蘭笠のね、唐傘。「ヤマトーウマヌチマゲ」、ヤマトは馬の蹄みたいなものだと。「ウチナーヤ、ハーイヌサチャヤサ」、沖繩は針の先みたいだと。当時、日清両属の論争の中でもおそらく親中派だったんでしょね。そういうことなどを強く教えとして受けました。「ワカトミ」、こういうことだよと、わかっているかという。

一方、私、四四年の国民学校一年生だけでも、もう幼稚園、その前あたりから戦時のおい、戦争のにおいを実は子供心に感ずるようになりました。私の兄たちも、腹違いの兄がいるんですが、兄たちも私が三、四歳の頃には二人の兄が中国戦線に出征をしております、非常に印象に残ったのは、学校の先生もやはり学校から出兵をしていった。石嶺伝慶先生、ご夫妻が読谷の出身ですが、有銘の学校に勤務しておられて、この伝慶先生が出征の際、朝礼の式台で出征兵士の挨拶をした。当時自動車もないですよ、有銘から源河まで約二里余り、我々が小旗で見送る。一キロぐらい追っかけていって見送ったわけですが、一つびっくりしましたのは、奥さんの千代先生、僕らは式台に向かっていきます。そして先生方は前を向いているわけです。奥さんがしくしく泣いているんですね。これはもう非常にびっくりしましてね、先生でも泣くのかという、そんな情景等が非常に印象に残っています。

その頃の私たちは、特に幼稚園の頃からグーサンという木の杖を担いで、兵隊ごっこです。「♪鉄砲担いだ兵隊さん、足並み揃えて歩いてる。とつとこ、とつとこ歩いてる、兵隊さんは勇ましい」と

いう歌を歌いながら、一方、これがまた他県にはない沖縄の大人の影響、ウチナー社会の影響でしようけれども、こんな小児軍歌をウチナー的に歌ったんですよ。「♪ワッターオットーヤ」、自分たちのお父さんは、「♪上等兵ヤシガヨ」、上等兵なんだけれども、「♪アンシガヨ」、しかしながら、「♪ウンマヌクスーヒーリヤー」、馬のくそ拾いというわけですよ。これは子供たちが遊びの中で歌ってしまってますね。こういうことをやりながら結局、今考えるところと刻々と戦時が迫ってきたというふうな、そういうことを実感したということです。

## ■「出生、家族のこと」「戦前の記憶」の質問・応

答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。今までのお話のところで質問をさせていただきます。ありがとうございます。まずは私のほうから基本的なことですけれども、一九四四年に入られたのはどちらの国民学校でしょうか。

○石川元平

東村の有銘国民学校です。

○櫻澤 誠

それから今のお話の中で、お生まれになった時には亡くなられていたということですが、そのおばあ様の妹さんから色々お話を聞かされたというか、教わったというお話がありましたけれども、それは時期としては、この国民学校に入るか入らないかぐらいですか。

○石川元平

その前ですね。

○櫻澤 誠

その前に。五歳、六歳ぐらいまでの間にもう教え込まれたという

ことですね。

○石川元平

ひざまづきさせられた。学校に入るまではみんなウチナーグチ、方言です。当時は例えれば家のお祝い、誕生祝等々が親戚のがあります。でも、伝達する方法はみんな子供を使っさせたものです。ですから、ひざまづきをさせられて、今日は家でどういふことがあるから、どこどこにちゃんとそれを伝えてきなさいと言っつて、ヒサマンチューしまして、こんなことの繰り返しがしょっちゅうあるわけです。行って来たらちゃんと確認するわけですね。じゃあお利口さん、お褒めの言葉などをいただいで。食事をする時などもひざまづきを、クワツチーサビラという。非常に厳しかったですよ。また、父の兄弟の中でも、いわゆる石川家の長男の家、ウフヤーと言いますけれども、そこで集まりがある。そうすると長男、僕らからすると長男伯父さんだけはタカウジンですよ。お膳の中でもこのぐらいのものではなくて、もうタカウジン。これにちゃんと入れて、中身も違っていたという話もあるんですけども、それぐらい非常に厳格なあれが残っていましたね。そういう中で祖母の妹二人にとりわけ厳しい躰を受けてきました。

○櫻澤 誠

祖母の妹さん二人も近くに嫁いでいらした？

○石川元平

同じ村に。

○櫻澤 誠

それともう一つは、父方の祖先のお話がありましたけれども、母方はどちらでしょうか。

○石川元平

屋我地ですね。現在は名護市屋我地、戦前は屋我地村宇屋我地ですけれども、その玉城。そこもちよつとこだわるんですね、土族だったといつて。

○櫻澤 誠

ありがとうございます。他に質問はいかがでしょうか。

### ○高橋順子

兄弟は七人兄弟で、お兄様は二人も出兵されていらして、先生が男の子では末っ子の三番目とおっしゃっていたので、下の四人のご兄弟はみんな妹さんでしょうか？

### ○石川元平

我が家だけじゃないけれども沖縄は非常に複雑な、異母兄弟が兄たち二人いて、母は連れ子が一人、兄がいるんです。その兄が働き者で僕たちを育ててくれました。だからそれを含めて異母兄弟を除いて七名兄弟という中で、元松とツルの間には男の子、僕一人という、後は女の姉妹だけでした。

## ■「沖縄戦について」

### ○櫻澤 誠

そうしましたら、引き続き沖縄戦のお話をお願いいたします。

### ○石川元平

さつき申し上げましたいわゆる四四年の一年生という体験ですが、大人が忘れていたことも子供は忘れないということなども幾つもありまして。これは親や、あるいは特にうちの兄など、四つ違いの兄ですが、確認などをするうちに次第に自分の思いとして間違いじゃなかったという、こんなことが実は度々あるものですから。

私にとつての沖縄戦ですが、四四年四月に有銘国民学校に入つて間もなく、学校が兵舎になりました。一階の瓦葺きだったんですけど、れども、学校は民間人を含めた訓練の場になったんですね。お母さんたちまで動員して行軍をさせている姿もよく見かけました。それから兵舎も学校だけではなくて、特に大きな家、私の家のすぐ隣の伯父の家、うちの親父は三男でしたけれども、二男伯父の家にも五名前後の日本兵が駐屯をするという、これがずっと続くんですよ。

食糧や何やのことで大変な状況にますます。避難民も那覇、中部からどんと来た中で、こういう兵隊に対する供出などがあって、大変な苦悩があったわけです。

有銘というのは三角の入り江になっていて、三方を山に囲まれていて、前のほうは田んぼ、川が流れていましてね。陣地づくりで非常に子供心に理解しやすかったのは、湾に沿って壕を掘ったんです、すべて。これを戦車壕という人もいますけれども、おそらく幅はこのぐらいで深さは大体メートル五〇センチぐらいの深さですと張り巡らされて、湾の入り口の山の上には高射砲陣地、これで迎え撃つ体制できていたんですね。

もう一つは、三方を山に囲まれているから、絶対安心だとも言えますよ。兵隊も大人も先生方も。そう言いながら、校舎は瓦葺きでしたけれども、偽装したんです。木の葉っぱ、枝や葉っぱで。空から見ると青ですね。沖縄一のデイゴというのが四本ありまして、それでもなお、空から見ると空いた所があるもので、それは畝をつくって蔓を植えていました。こういう場所だったものですから、海からアメリカ兵が上陸しようと思っても一歩も入れない。それからアメリカカーはウランダーという。当時は西洋、欧米人のことをウランダーと言っていました。ウランダーや、ユースンディから、夕方から物が見えないんだと。目も引っ込んでいて、しかもヒージャーマー、ヤギの目玉をしているということなどがありまして。だから鉄砲を打つのも友軍。友軍と言っていたんですね、日本軍のことを。友軍はもう百発百中ということなどのイメージをどんどんつくられたら、そんなものかと。

ところが、これはもろくも崩れていくんですね。崩れていったのは十・十空襲、四四年一〇月一〇日に有銘湾の北東の方向はるか上空を、朝日を受けて回る、雲霞のようなイメージ、大編隊で、あれは南西の方向に飛んでいったんだと。どこの飛行機かわからんです。大演習万歳ですよ、大人も子供たちも。朝日をきらきら受けて。夕方には有銘湾に一艘の輸送船が止まっています。これは朝鮮人を



利用して働かせて、松の幹を六尺ぐらいでしようか、これを切つて中南部の陣地構築のためにやる、そのための舟艇があつて。朝鮮人の軍夫も実際見たんですが、あの十・十空襲の時は見ていません。十・十空襲の時に、それは直接見ていませんけれども、爆弾を落として二八〇メートルの山をずっと上がっていったというんです。有銘は三方を山に囲まれて、絶対大丈夫といった所がまず崩れていくんですよ、一つずつね。敵機がいきなり来たものですから、船が狙われるということでもみんな海に飛び込んだんですよ。そうしたらうちのおじも内臓をかなりやられていまして、命は助かりましたけれども、二人の犠牲者が出ました。神村のおじさんは遠縁にも当たるものですから、戸板で実家まで運ばれていくんです。僕ら子供心追っかけました。物もわからない、善悪もわからないような年頃で、体に砂がめり込んでいる状況を見ました。ですから初めて死人を見て。こういうことなどがありまして、その後、飛行雲、あれは毒ガスと言ったんですよ、大人も兵隊もみんな。毒ガスやと大騒ぎですよ。タオルみたいなものを水に濡らして口に当ててね。散つたらもう下におりてきたんだと。ところがちつとも大変ではないわけですよ。こんな状況で。

そして十・十空襲の後、私の家には一〇月一二日に、那覇の出身でしたけれども六名の兄嫁の家族が避難をしてきたんです。これはもう一番早かったです。ほかの疎開計画、避難計画というのは何か月遅れなんていうのがあるんですが、我が家には翌々日来ました。もう一つ印象に残っていますのは、この兄嫁家族が、巻きたばこ、ガソリンの染みのついたたばこを持ってきたんです。これをうちの親父などはうまいうまいと吸っていましたね、あのおいを私は覚えてるんです。

そんなこんなで、学校がいつ燃えたかということについては、これは一〇〇周年記念誌も調べてみたんですけども、実は定かじやないんですね。四五年のとにかく三月ごろまでには学校はもう焼けていたと。あるいは本当はもっと早いかもしれませんが、ほとんど

山の中に避難をしている状況等もありましたので。子供心にまたびっくりもしましたのは、ガラスが割れて焼けると玉になるということを知りました。焼け跡を見ますとガラスの玉がいっぱいあるわけですよ。あとは瓦とか何とかが散乱しておりましたけれども。

話がちょっと前後しますが、十・十空襲を経て、特に那覇や中部あたりから避難民がどつと押し寄せてきます。我が家でも六名の話をしましたけれども、最初は疎開計画が県であつたようですが、疎開なんていうものじゃないです。十・十空襲でいきなりやられたものですから、後は大混乱の中でもうどこに行くとも決められずに、どつと押し寄せましてね、たちまちのうちに、おそらく村の人口の何倍かになったと思います。

持ち込んだ食糧なんていうのは、これは何日もたないですよ。その中で我々が見てきたのは飢餓地獄ですね。だから沖縄戦というと、よく中南部の話が主になりがちですが、違うんだと。沖縄戦は、よく七つの地獄を重ねたなんていう言い方がありますが、まさにヤンバルでは飢餓地獄を我々は見てきた。例えば一家全滅なんていうのも、我が有銘に疎開した人たちの中にもいるんですよ。夕方になると葬儀ですね。葬儀といつても墓地の近くに行つて埋めるだけのあれですよ。こういうことを何度も見て。避難民といったら、若い男はみんな戦争に引つ張られて、ほとんどが女と老人ですよ。飢餓の中で亡くなつていく避難民のことをよく見ました。ある母親などは塩を炊くために、海水を汲んでいってこれをつくったんですよ。子供たちが亡くなった後もずっとこれを繰り返していたよという話も聞いたことがあります。そして哀れな歌を歌っているんですよ。これは直接耳に残っていますね。おそらく家族、自分以外の家族をみんな失った後だったんだらうと思えますけれども。こういうことなどを含めて、大変な地獄を見てきたような思いがいたします。

これはほとんどの体験も同じですけども、三カ月は山の中での

避難生活です。これはおそらく四月から六月。そして六月から九月が捕虜収容所。我が家は、源河山と言われる一番山深い所の川べりに山小屋をつくって、竹茅ですけれども、それでも立派な避難小屋でしたけれども、そこで三カ月。夜は里に下りて食糧を取ってきたり、その繰り返して親たちは苦勞したようです。米軍による降伏勸告はもうしよっちゅうあるんですね。大人はそれをよく聞いて、山深い所の近くまで米兵が徘徊をするようになって、ある日、あと何日で下山しなければ山自体に攻撃を加えるなんていうことが大人の耳にも入って、みんなで吟味をして、それじゃあもう下山する以外にないというようなことで、下山をしたのが東海岸ではなくて源河です。ちようど有銘の逆の源河。

そこに下山をしましたら、黒い電線が。今なら電線とわかりますよ。これに触ると死ぬと言うわけですよ、また。だからこれぐらいのレベルですよ。あれはちゃんとゴムでやられているから感電死することなどないが、これが源河の下山する所まで引つ張られていました。下山をした所に米兵のトラックがありまして、大きさはジープとGMCの間の、四分の三とか確か呼んでいたと思います。この軍用トラックに乗せられて入れられたのが羽地の田井等収容所でした。沖繩には十幾つかの、特に北部東海岸を中心とした収容所ができますけれども、七万人の収容所、最大だったようです。最初、羽地国民学校がすべて焼けた後に鉄条網が張り巡らされて、下山した人たちはまずそこでチェックを受けました。チェックを受けて、おにぎりをつつみんもらいました。そこからその近辺の集落に、君たちはどこへ行きなさいと割り振りされて、その数が約七万人というわけです。

せつかく捕虜になって収容されたけれども、そこで死人がたくさん出たんですよ、また。これも沖繩戦の中で私の思いとして一番印象に残っていますのは、広大な豪農の屋敷、みんなもう焼けていました。そこに一〇〇名ぐらいが入る大きなテントが張られて、そこへ我が家は収容されました。ゆっくり寝れないぐらいいっぱい詰

まっています。我が家のそばに那覇の人がいましてね、老人と母親と幼い子供がいて、ほとんどマリアにも罹っているわけですよ。この若い母親は亡くなっているんです。その幼子が母親のおっぱいをしゃぶっている。年いったオジー、オバーがいるんだけど放心状態。私たちが何か遊びにか、外へ出てやっているうちに片付けられていました。こういう状況。せつかく収容されたのに、命を落としたという例も実は各地にあるんですね。これは栄養失調とマリアによる、いわゆる飢餓地獄の中にこれも入ると思いますけれども、そういうことなどがあって。

もう一つ、これは戦後教育の始まりかなと、私にとってはアメリカ統治の始まりかなと思うようなことがあったのは、子供たちがみんな集められてアメリカがつくったテントの学校に、学校の名前はついていませんけれども、後に羽地の田園地帯のちよつとした小高い丘があつて、今でも稲田小学校というのがありますけれども、ここにテントが張られて、我々はそこへみんな通つたんです。最初に習うというより、歌わされたのが讚美歌です。これは日本の、いわゆる友軍のあの我々が体験したあれとはもう正反対。これも歌を覚えていきますよ、讚美歌ね。「♪小さい私の口は、毎日讚美歌を、悪口などは言わないように、神様守りたまえ」と言っていました。これが戦後初めて習った。しかし、アメリカはこのことは徹底したと思います。沖繩の至る所の眺めのいい所、例えば琉球王朝の御茶屋御殿（ウチャヤウドウン）というのがあります、あれも教会にしたんです、その後ね。玉陵（タマウドウン）の前も聖公会の教会を建てようとして、後で僕らは闘いまして、止めましたけれども、至る所にそれはあるんです。アメリカとしては戦略的なそういうあれをもって、まずはアメリカ讚美歌、そしてヤマトのあれを断ち切るというふうなこういうことから始めたのかな。至る所に教会が建つたんですよ。こういうことが沖繩戦と捕虜収容所を経過して私の体験でした。



## ■「沖縄戦について」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。今までの部分について、確認も含めて質問させていただきたいと思えますけれども、一つは有銘で陣地構築が行われる際の一般住民の協力というのは？

○石川元平

これはなされています。日本軍の兵士だけでは数が足りないです。

ですから今もって未解決なのは、朝鮮半島から強制連行された軍夫、慰安婦の問題ですが、有銘にも朝鮮人軍夫が配属されていて、特に重労働、松の木を切ってこれを運搬させて。十分な食事も与えられずに。僕などは母親が炊いたサツマイモを持って行って食べさせたこともあるので。そして学校のそばに、ちようど軍夫が休憩している近くに、うちの祖母の弟の屋敷がありましたので、沖縄では屋敷内にある野菜畑のことをアタイと言いましたけれども、そこに生えているコーレーグス、トウガラシですね、それを採っていいかというようなことを僕は尋ねられて、オジーから許可を得て、これを食べていいと。これをそのまま食べて、またびっくりですよ、沖縄の人には考えられないのに。

中南部の軍事構築のために材木を切り出したんですが、有銘の中での陣地構築に、残っていた人たち、これは婦人まで動員されています。福地ダムというのがありまして、五つのダムから最後に受け入れ、それが中南部に今送られている。このダムの湖底も、元々は内福地という集落があった場所なんですが、東あたりは戦闘がなかったと、そう言う人がいるんですがこれは違うんです。そこでも一定の局地的な激戦地だったんですね。特に県立農林、嘉手納にありました、その学徒たちを動員をして、その犠牲になっているという。その福地ダムには四本の支流が流れ込んでいまして、そのうち

の支流の一つにエーラ川があつて、その奥のほうに日本軍の部隊が何百人も、朝鮮人も、それから地元から動員をして、大がかりな伐採、中南部の陣地構築のための木材切り出しがなされていて、そこには製材所もあつたと。馬を持っている人たちは、特に喜納昌吉のお母さんも、女性でしたけれども引張られて、馬を使って向こうで仕事をさせられたという話までも。僕の家のお隣なんです、昌吉のお母さんはね。いずれにしても地元の人たちもある意味で総動員。じゃあ我が家の親父はどうしたかといいますと、伊江島の飛行場建設にずっと行っていました。だからやがて犠牲になるところなんです、遅れたら。帰ってきたところにそれが始まったものだから助かったわけですが。

とにかくもう総動員体制で基地建設にも、それから食糧の増産などにも。こんなこともあつたんですね。飛行機はあると。ところが油がないんだという。ひまし油というのを聞いたことはありませんか。ヒマです。相当伸びますけれども、二メートルぐらいになって、葉っぱはすごく大きいんですが、大きな実がつくんです。これはすごい油がとれるんです。要するにこれでひまし油をつくって、これが飛行機の燃料になるんだということ、子供たちまで動員して、かますをもつてヒマの実をとったり。それからこれは僕は直接経験はしませんでした、松脂、これもいっぱい探したんだそうです。松の下のほうには油がいっぱいあつて、沖縄ではトウブシと言いましてね、これに火をつけると消えないんです。これはおそらく使われることはなかったと思うんですが、こんなことまでも。そういうことからこの戦はと、また一方では見えてくるわけです。子供心に一つ一つ剥がれていくわけです、毒ガスって言って騒いだり、有銘で言っているのはみんな嘘だったということ。

沖縄が取り囲まれて、ヤンバルの海ももう埋まっているんですよ。アメリカは上陸はしたものの、友軍に殺されてはならないということ、それを乗せに来たなんていう、こんな嘘まで平気で兵隊などが言うんだよ。神風が吹く、大反撃なんていう、そういう宣伝を

うんとやるんですよ。一度もそんなことはなかったです。食糧の供出、自分たちは食べなくても残り少ない米を、こんなことを各家庭みんなやっていましたが、これは四月、アメリカが上陸した後でも、切り込みに行つて戦果を挙げてきて何倍にもこれはお返しをするからと、一度もお返しされたことはありませんでした。結局、戦う姿は見えてなかったです、その攻防はなかったです。

ただ一部、狙撃は実はあつて。日本兵が狙撃して、アメリカ二人を殺して、もう一人のアメリカ兵は久志の方向に。県道もない時代ですけれどもね、有銘の隣の有津という所には湾があつて、もう道がないんです。避難民二人を何か後ろ盾にしてか、残つたアメリカ兵一人は久志のほうへ逃げたという。ところがそれを追つかけていつて、泳いで行つて残りのアメリカ兵一人を撃ち殺して、これだけではなくて避難民の二人は驚いて逃げています。これも山の近くまで行つて虐殺をしたと。これは随分後で知りました。これはヤンバルの学徒が見ているんですね、その状況をね。そんなことなども実はあつて、あの小さな村の中でも。

○櫻澤 誠  
先ほど少し出しましたけれども、従軍慰安婦の話で、丹念に調査がされていて、沖縄戦の時には本当に兵隊がいる所には、あらゆる所に慰安所がつくられている。そういう中で有銘あるいはその周辺にもつくられた記録というのには。

○石川元平  
有銘にはないですが、さつき話をしました内福地からエーラ山という、そこには日本軍、朝鮮人、ウチナンチュを含めて数百名が材木、いわゆる基地構築のための木材切り出しのために製材所もあつたという。料理屋もあつたと。そこには慰安所があつたというんです。

○櫻澤 誠  
では本当に身近な所にあつて、大人たちにあそこには近づくなとか、そういう形での接点ということとはなかったんでしょうか。

○石川元平

ほかではいっぱいあつたようですが、僕などは、有銘では、東村ではそれはなかったですね。

ただ朝鮮人軍夫、今もつて沖縄戦は終わっていないという理由の一つに。礎もありますけれどもね。今年も韓国をはじめ、向こうから遺族も参加しませんでした。これは日本政府の今の対応の問題もありますけれども、七七年に僕は初めて北朝鮮に行きまして、あの時帰つてきて沖縄タイムスに二〇回、連載レポートを書いたんですが、あの時代から僕は強く指摘していったんです。琉球政府、当時は厚生局援護課だつたと思いますが、発表した記録があるんです。沖縄戦で幾らという。これには決定的なものが、朝鮮半島からの犠牲者の数が含まれていないことだと。ですから四四七名以下です。あの礎に刻まれているそれもね。つい最近強制連行の学習会をやつたんですが、今時点で私が掌握している数は、死んだ数だけで軍夫で一万三〇〇〇ですね。ですから全体で二四万幾らと言いますけれども、これから本当はうんと加わらないといけないのですね。ウチナンチュを含めて非常に被害者意識が強いですけども、これは現在の基地問題を考える上でも加害性ですね、これを忘れてはいけません。これの根っこになるのが沖縄戦でのいわゆる強制連行問題だと見ているものですから、このことを私も口酸っぱく今言つて、明らかにしていこうと。

○櫻澤 誠  
十・十空襲以降に北部に疎開者が増えていく中で、飢餓地獄が起きて、お葬式をしたりというお話がありましたけれども、それは四月の米軍上陸の前の話ですか。

○石川元平  
そうですね、直接的にはね。上陸後はこんなに自由でできませんので、上陸前ですね。

○櫻澤 誠  
前の段階でもう食糧が足りなくなつて。

## ○石川元平

那覇、中部から来た人たちは、馬や馬車のある所は荷物一杯積んでありましたけれども、これだけ持って山越えしたりできないんですね。それで例えばうちの畑が、もう避難民がどんどん取って。そうしたら、ある時うちの親父は畑の見回りに行つて、避難民の哀れな話を聞いたら一緒に取ってやったというんです、もつとね。そうしたらうちの母親にこっぴどく怒られていましたけれども。那覇からの六名の親戚を抱えていながら、あの大変な状況でもあった。しかし、このようなことはどこでもあったと思うし。

よくソテツ地獄という話がありますけれども、那覇や中部の人たち、これの料理の食材にする要領がわかりません。これは毒素を持っていくんですよ。周囲の皮をみんな削つて、あとは輪切りみたいにして、これを太陽に照らしたり、雨に打たれたり、そしてくたすというんですか、発酵させるんです。発酵させて毒素を抜いて、それででんぷんだけ、こねて丸めて団子状にして、そうなるって保存食になるんです。ここまで待てればいいんですか、ここまで待たないで食して、中毒を起こして亡くなったという例もたくさん聞きましたよ。

疎開のことで少し申し上げると、例えば対馬丸が沈められましたね。あれは四四年八月二二日です。疎開計画というのは、内閣で決めて、軍部を通してこれを守らせたんです。あの対馬丸もそうです。だからものすごく箝口令を敷かれるけれども、後でわかるようになったらこの校長などは責められますよ。だからあの当時、「校長、なぜうちの娘たちを無理してやったんだ」ということを責めた親、僕はあれを見て非常に偉いと思つています、あの時代に。もう完全に軍、一般行政はないですからね。すべて知事が、各市町村でも兵事主任というのが置かれて、もう指揮を執つたのが軍の力という状況の中で。

もう一つ、ぜひ知ってほしいのは、日本軍は現地調達主義なんです。ですから僕らの学校が兵舎になつて、家も兵舎になつただけ

れども、食糧もそうなんです。当時は最初のほうは兵隊さん、兵隊さんって崇めもしたけれども、あとはもう強盗みたいなものからね。例えばうちの妻の一家も読谷からやったようですが、やがて日本刀で父親もやられよつたらしいですよ、真つ先に捕虜になつたようですけれどもね。あとは日本軍同士で弾の撃ち合いまでやっている、北部で食糧確保のために。また、有名な渡野喜屋事件というのがありますけれども、大宜味村の現在、塩屋湾の南側の白浜という。戦後、部落の名前まで変わりました。元々は渡野喜屋という集落名だったのが、今は白浜になっています。ものすごい虐殺事件があつたんです。もう捕虜が始まつて、浦添、那覇あたりの人たちが下山してくるところをアメリカ兵に見つかつて渡野喜屋という集落、大宜味村の、そこに一〇〇名余りです。たまたま夕暮れですからそこへ今日は泊まつて、明日また迎えに来て、収容所に連れていくという。収容所というのは僕がさつき話した田井等収容所です。行く予定の人たちに食糧を与えていくんです。その民家の人たちは山にみんな逃げているものですから、家は空いていたわけですね。そこにみんな泊まつていたわけです。すると夜中、日本兵に叩き起こされて、すぐ前が浜なものですから、暗い浜に並べられて。食糧をとるならば、食糧を奪つていけばいいんですよ。どうしたかといつたら手榴弾を投げて、県史によると三〇名以上とありますけれども、浦添の仲村渠美代さんというオバーに直接会つて話を聞いたことがあります、生き残つた後を数えるともつと死んでるよという。やはり目的は食糧強奪。このようなことも至る所でやっているわけですよ。

だから避難民、その足跡をたどるだけでも、この友軍と言われた日本軍の残虐行為というふうなもの、これが染み込んでくるものですから、我々が復帰運動をした時には非常に困つたんです。日本が生まれ変わった、天皇主権の国家ではない、平和憲法国家になつたんだと言つても、民主主義の国家になつたと言つても、アメリカーたち、戦後確かに悪いことをやっていますよね。だけれども、



あの日本軍よりはましだという、これが復帰運動の初期の大きなブレイクになりましたよ。これは私の親族の関係でもいっぱいあったんですから、このような反応は。沖縄戦における友軍と言われる日本軍が鬼畜のようなことをやって、鬼畜米兵と言った人たちに食糧を与えられてという、何とも、そんな経験がありましたね。

○櫻澤 誠

北部に避難してくる人たちというのは、親戚を頼ってとかそういう形のものじゃない。

○石川元平

いやいや、全く関係ないです。

○櫻澤 誠

関係なしに。

○石川元平

向こうの部落ごとです。

○櫻澤 誠

どんどんどんどん入ってくる。

○石川元平

はい。

○櫻澤 誠

有銘の中にも親戚でもない見ず知らずの人たちが入り込んで、どこかに勝手に住みつくような状況ですか。

○石川元平

そんなことでした。

もう一つ印象に残っていますのは、具志川の人が有銘にやってきたんですね。これは後で新聞にも写真入りで出ましたけれども、終戦後間もなく、恩返しをしたということ、具志川から歩いてです。有銘は命が助かった場所だということ。今、僕の頭に残っているのは、大豆をたくさん持ってきてくれたの。大豆の種類でも「オオヒグ」という名前を覚えています。これはものすごい貴重だということ、うちの母などは喜びましたけれども、これをお札に

持つてきて。これはおそらくほかでもやられていると思いますけれども、こんなことなどもありましたね。

○櫻澤 誠

恩返しといって来たというのは、どれぐらい後になってからなんですか。

○石川元平

これは終戦直後ですね、最初は。直後ですね。しかし豆ができる、一定の耕作ができた後だという、思いとしてはある意味で直後という感じですね。新聞にも出た、それはもう復帰前後じゃなかったかなという感じですね。

○櫻澤 誠

それから四月以降、三カ月ぐらい山に避難をされたということですが、それでも、その避難をするきっかけというのはどういう形ですか。軍から避難せよというふうに言われたのか、あるいは自発的に移ったのか。

○石川元平

これはみんな自発的です。

最初は米軍の機銃とか爆弾を逃れるために、学校には全校生徒が入る、裏の山に横穴式のでっかい防空壕がつくられていて、そして不意打ちもあるというようなことで、急に飛行機がやってくる場合には裏山までは間に合いませんので、学校の周囲に小さな壕がいっぱいつくられていました。一年生まで腕立て伏せの稽古ついでちやあ、耳を押さえて、目を押さえて、腕立て伏せですよ。この訓練までさせられました。

我が家では一族の入る、ちよつと段になった畑、そこをくり抜いて横穴式の防空壕をつくって。上は畑ですから、上から見たら何もわからない。入り口だけは木の枝で塞いでこういうことから。まず家から離れてすぐに一族の防空壕、それから昼間だけは近くの山の上。谷間がいっぱいあるものですから山の上から下もよく見えるわけですよ。晩になったら家に帰る。ところがアメリカ軍が上陸して

徘徊をする。こうなったら家にも帰れないということで、山の中に山小屋をつくつてという。

それから下山して収容所に入れられて。僕は三カ月のうち二カ月ぐらいは那覇の親戚と一緒に。僕は食糧が比較的豊かだったものだからね。それでも田井等収容所の中でも三カ所ぐらいに移動しまして、もう子供ですから大変危ないことも色々やりましてね。遊びもあの戦争の延長線なんだけれども、すごい遊びなどもやって。古我知という村にある大木の松が五、六本あった中で、炭焼き小屋、タンガマーというんですが、僕は下級生だったんだけれども、これをつくつて火を燃やしたら、トウブシという松脂、火がついたらもう消せないんですね。水の用意も何にもなくて、後は逃げましたけれども。これは後でみんな知られて、頭から水ぶっかけられた。戦争中だけれどもいろんなことをやりましたね。それからベトナムの枯葉剤の話が出ると、田井等収容所に入れられた頃のそれを思い出しますのは、山から下山しますと何カ月も浴びていませんで、人間は痩せているけれども、シラミは脂肪太りしているんですよ。行列をつくつていましてね。普通見ませんもの一々ね。みんな頭からDDTかけられました。一般的にぶっつと白い粉が出て、これで普通は済ませましたけれども、これだけではとまらないんですね。アメリカは飛行機で低空飛行でばーつと撒いていくんですよ。そうすると、川の小魚がみんなぼいぼい死んでしまいました。その油が川面に、あれが目に見えるようですよ。ベトナムの枯葉剤を撒くあれとほとんど似たような低空飛行でこう撒いていきましてね。

#### ○櫻澤 誠

私のほうからは最後にもう一つ。沖繩戦の直前に日本軍が有銘にも駐屯する時に、元平先生のお家にも日本兵というのは。

#### ○石川元平

うちの隣の伯父の家。

#### ○櫻澤 誠

隣の伯父の家だけですか。

#### ○石川元平

はい。

#### ○櫻澤 誠

その日本兵の振る舞いが、時間が経つにつれてどう変わっていったのかであるとか、もう少し具体的なことを、もし覚えていらっしやれば。

#### ○石川元平

最初は軍服を着ての出入りをよく目撃しました。ところが、上陸後は山に閉じこもって、後は軍服を脱いで着物を着て、ただピストルを忍ばせてというふうな格好では何名か見ましたね、そういう日本兵を。

#### ○櫻澤 誠

それは民間人に紛れ込んでということですよ。

#### ○石川元平

そうそうそう、民間人の恰好で。

それとね、これも言わないといけないですね。学校に四四年ですよ、登校をする校門のそばに指揮刀を持った配属将校が毎日立っているんですよ。そして、お前は将来何になるんだと。必ず何かの軍人になることを言わせるんですよ。私は少年航空兵になると。これをおうむ返しのように毎日言っておりましたね。そうしたら、どこの誰か知りませんけれども、白い帽子をもらいました、鎖のある。要するに七つボタンにあこがれたんですよ、歌を歌ったりもしています。これを今持っていたら小さな文化財になったかなと思うんですけども、うちの親などは兄貴たちの写真まで処分しようなんです。こういうものなどもみんなまとめて相談もなく処分してしまつて。やはり子供心に七つボタンには非常に憧れましたですよ。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。ほかにご質問はいかがでしょうか。

#### ○高橋順子

日本兵が入ってきてから先生のお宅でされていた畑とか田んぼと

かで何かこれをつくりなさいみたいな命令というか、指示というのはあったんでしょうか。

○石川元平

食糧の関係で？

○高橋順子

はい。

○石川元平

それはちよつと具体的には見聞はちよつとやっていないですね。これはほとんど残った婦女子がやっていましたので。だから軍隊が戦う姿はあまり見ていませんしね。飯はよう喰っておりましたが。アメリカ上陸後の切り込み戦果も一度ももらったこともありませんでしたし、だからそういうことなど色々あつて、印象としてはもう非常に悪いですね。これはまた僕だけでもなくて、うちの妻ともよく話をするんですが、家族の体験を聞いても、沖縄戦の上陸後の末期になつていきますと、怖いのは友軍だよということがほとんど口づてにね。みんなこういう警戒心を高めたようです。

○高橋順子

収容所に入ってからなんですけれども、収容所の中で朝鮮人の方をお見かけしたことはありませんか。

○石川元平

これはうちの羽地では全く見ていないですね。

あれは特に南部に追い詰められていって、それで一般の人たちも南部から舟艇などでみんな北部へ送られるんですね。陸は一部あつたんでしょうが、ほとんどは舟艇などでヤンバルにやられて。有名な所が屋嘉収容所で、日本軍、ウチナンチュ、それから朝鮮人というふうに一応分けたけれども、トラブルが色々あつたようですよ。その一部はハワイに強制労働に引っ張られていったんですね。これは例えば師範の学徒もいますしね、一般の青年もいるし、それから朝鮮人の軍夫もいます。これは記録上はつきりしています。

○高橋順子

先生のご家族とかご親戚で戦争でお亡くなりになつた方はいらつしやるんでしょうか。

○石川元平

我が家で、例えば少ないほうだけでも妹一人、せつかく収容所から帰ってきたのに、その年の暮れ、一二月にマラリアで死にました。あの時は病院もないし、薬もないですからね。目の前でですよ。高熱とひきつけを起こして亡くなりました。

あとね、我が石川一族ですと、ほとんど我が家の長男、次男、いわゆる中国戦線、あるいはうちの長男などはソビエトなどにも行って戦後帰って、向こうで教育まで受けてきたんですね。ロシア語もしゃべれて、帰ってきたらアメリカの諜報機関かな、隔離されてかなり詰問されて、何日か取り調べを受けたようですけれども、それでもうちは長男、次男は帰ってきましたよ。そのほかのね、うちの石川一族、有銘の中で数軒ありますけれども、ほとんど長男は防衛隊。沖縄では兵隊にヒータイという言葉を使いますが、ボーヒータイ、正確には防衛隊に引っ張られて、つまり法令上の、召集令状の対象にならない残った七五歳まで引っ張られたというんですから。しかも一四歳からですよ、下はね。ですから現地司令官の一つでも赤紙じゃないんです。防衛隊に引っ張られたうちの一族のうち、長男はほとんど帰って来ていません。戦後は、ほとんど次男か三男かが仏壇を継いでやっていますね。ですからどこで死んだかもわからないんです、またほとんどが。そのために魂魄の塔は、やはり沖縄の塔的な非常に意味を持つ塚だと思えますよ。

○櫻澤 誠

米軍の上陸以降に家族を含め一族で避難をしているという中で、同じ集落の、村の人たちがある程度分かる範囲で近くにいるんですか。それとも完全に一族だけで数カ月間過ごして。

○石川元平

例えば山への避難も一族みんなじゃないんですよ。うちの場合は長男の家と私の家とそれから那覇の仲本家のそれで。そしてかなり



離れた場所に次男の、うちの隣なんだけれども、平田という所はまたかなり離れた、ばらばらですね。

○櫻澤 誠

ばらばらで。

○石川元平

収容所もみんなばらばらです、もう全く。下山したのも、我々三家族ぐらい一緒で、あとはばらばらでしたね。

○櫻澤 誠

その時は、別のお家の人たちと話し合って、投降したんでしょうか。

○石川元平

アメリカはかなりビラなどで、何日までに下山しないと山自体を爆撃するというふうなことを盛んにやっていますので、それに危機感を覚えてもう諦めて下山しようという、こんな話になっていましたので、ほとんどタイミングは一緒だと思います。ちよつと離れていたけれども、連絡は取り合ったと思います。

○黒柳保則

では私も一点。石川先生がアメリカ兵に最初に遭遇した時の体験、それもぜひお願いします。

○石川元平

ですから鬼畜米兵だったんですけれども、山に避難をして、仲本家の人たちもいましたよ。何のタイミングか、一旦うちの里に下りてきましたら、たまたま米兵に見つかりましてね。見つかった、特にうちのきれいな兄嫁などは顔にナービヌヒングを塗って、みすぼらしい恰好をしていましたけれども、僕などは見つかったもびくびくすることはなかったですね。最初は怖いですよ。ところがちょうど家の前の蔓畑の所で生きているニワトリがいて、アメリカカーがそれをふざけた格好で追っかけてっこをしていた。僕などは抱っこされましたよ。

○黒柳保則

そうですか。

○石川元平

抱っこされました。そうしたら自分のポケットからチョコレート。これもあちらこちらで似たような話がありますが、僕も同じ体験をしまして。そうしたらこれ自体、触っても食べてもいいけないというふうな。こういうものにも万年筆爆弾があるという話もあるんですよ。だからアメリカカーのものはビラも触ってもいけない、後はこれが爆弾なんだと、一切触っていけないと。ああいうことで植えつけられている中でしたので。だがしかし、食べて見せるんですよ。そうしたら、生まれて初めての味でしょう。これはもうたまらない。だから何ていいますか、もう本当に呪縛から解放されたあの気分、あれはたまらなかつたですね。

○佐藤 学

それはやはりおいしく感じられましたか？

○石川元平

ええ。もう生まれて初めての味ですから、例えようはないですけども、どんな味だったか。とにかくもうすごい飢えている時期の中で、ああいうふうなものをね。そんなこともあって、戦後一時期は解放軍というあれを持ちましたよ。私自身、讚美歌も歌わされてアメリカカーたちが次第に犯罪を犯す前までは、本当に鬼畜米兵の反対のあれ、日本軍のそれもあって、そういうイメージを持ちましたけれども。しかし彼らも軍隊の正体を次第に現すようになって今に至っているわけですけどもね。

○黒柳保則

では身近で米軍の側から暴力を振るわれたとか、そういうことはその頃見聞きはされませんでしたか？

○石川元平

いや、全然聞いてないですね。

○黒柳保則

そうですね。

### ○石川元平

全然聞いてないですね。それどころか、狙撃に遭った二人の兵士、一人の米兵は逃げて、後で追っかけられていって殺されますが、二人、即死じゃないわけですよ。

### ○黒柳保則

はい。

### ○石川元平

即死じゃない米兵に対して、かつてロシアとの闘いに参戦をしたどこかのオジーが、アージンという米を、あれで頭を打って殺したなんていう、こんな残酷なことなども。これは本当に鬼畜米兵と思っただけでしょうね。こういう話も実際あったですよ。そのうめき声をうちの兄、直接見てはいないだろうと思うけれども、おそらく近くで聞いたんですよ。僕は聞いていないけれども。うちの四つ上の兄はすっかりおびえていましてね、あれから夕方からは外に出ない。飛行機がぱーっと来たら、昔の沖縄の家、母屋のほかに豚を養うそれがあるんですよ。人間のふんも食べさせていましたからね、豚にね。そのようなつくりになっていまして、もちろん家は危ないというので豚小屋を掃除して、僕は昼間は最初、避難しておりましたから。もちろんきれいに洗っている所ではありますけれども、うちの兄は、ふんをするそこだけは、ちゃんと上からは守られますから頭を突っ込んでいましたよ。僕なんかは平気にいるのにね、豚小屋の。こういう非常にPTSDに罹っているんじゃないかなと思うぐらい、そういうこともありました。直接、アメリカ兵が民間にということとは、うちの周辺ではなかったですね。

### ○黒柳保則

はい、ありがとうございます。

### ○佐藤 学

黒柳先生から数字は信用できないって教えてもらったことがあるんですけども、戦争が始まる前と戦争が終わった後で、豚と馬と牛とヤギの数が戦争の前と戦争が終わった後でどれだけだったかと

いう統計があつて、二桁減っているんですね。豚が一〇万頭だったかな、それが一〇〇頭ぐらいになっていて。家畜、食べるためのやつがもうみんな戦争が終わったらなくなっちゃっていると。だから戦後その豚をハワイからとか、それからポークの缶が振る舞われたというふうに理解しているんですけども、その家畜はどの段階で誰が食べたんでしょうか。それとも戦闘で死んだのでしょうか。

### ○石川元平

大体どこの家でも馬か豚、ヤギは我が家でもそうですが、養っていますね。この十・十空襲の後学校が焼けて、いわゆる本部落と言いますけれども、山の裾などに幾つかヤードウイがあつて、学校の近くにまとまった元々の地元の人たちの、僕らは村と言っておりましたが、そこは一軒も残らず焼けました。人間は避難して無事でしたけれども、家畜はすべて、みんな焼けたという、これは見ました。あとね、あれも非常に不思議なんです、豚などはかなり早い段階で食糧に、塩漬けにしていたという経験があります。

そしてもう一つ、うちの親戚、那覇の仲本家は、どういうルートで来たかという、一方はトラックでも来たというので、一方は馬も持ってきていました。これは日にちがどのぐらい遅れたか何か、それはちよつとはつきりしません。いずれにしても馬も持ってきていて、この馬も食糧になりました。これは特に山の中に行つてからの食糧になりましたけれども、足などの骨の部分はそのすごい時間がかかります。というので、あれはもう埋めたんですよ。足とかそういうのはね、頭の部分だとかね。ほとんど肉を中心に、馬の肉をとということが実はありましてね。そういう食糧問題では、確かに豚はみんな無くなって、その後の物語、ハワイからのそれに繋がっているんですけどもね。

有名な波照間島での悲劇は牛、馬、ヤギ、豚などを日本軍が食糧にするために島から追放して、マリアアの有病地、南風見田という所にやるんですね。これは識名信升という校長の記録にも、今碑もありますけれども、はつきりこういうふうに現地調達主義でやられ

ているものですから。しかし、宜野湾でもあちこちに壕があるんです。日本軍が駐留した、食糧がいっぱい貯えられていたんですよ。糧秣、これは南部の糸数壕でもそうです。残ったままで敗戦を迎えるんですよ。住民からは食糧強奪なんだけれども、今の記録の上では提供になって、何かお金を政府なりからもらったりとかがありませんよ。石原（昌家）先生だとか、よくその研究してやっておられるけれども、これは怖いんです。だから現地で調査をする名のもとに、やはりいろんなことがあって、戦後は本当にびっくりする。ヤギもザーネン種というようなのは戦後に入ってきたんですよ。

○佐藤 学

そうですか。

○石川元平

たしかイギリスあたりから入ってきたんじゃないでしょうか。耳が垂れて、あれは戦前はなかったです。ああいうヤギだとか、それからヨークシャー、パークシャー、豚も白豚が、これはハワイからありましたけれども。うちのあれでは日本軍が食べるということはあまり見聞しなかったですね。

○佐藤 学

時期によって、あるいは地域によって違うわけですね。

○石川元平

と思いますね。有銘はどちらかというと、比較的田畑は多いほうでしたから、おそらく大宜味などよりはずっと食糧は豊かだったと思いますよ。

## ■「戦後初期の状況」「小学生時代」「中学生時代」

○櫻澤 誠

用意をさせていただいたメモからすると、先ほどは「戦後初期の状況」の初めぐらいまでお話いただいているかと思えます。さきほ

ど学校で讚美歌を歌ったというようなこともおっしゃっていました。改めて学校にもう一度入る経緯なども含めて、続けてお話しただければと思います。

○石川元平

わかりました。戦後初期の状況ですけれども、四五年の九月下旬ごろ、田井等の捕虜収容所から郷里有銘のほうに戻ってきました。戻った後、まさに故郷の廃化、あの集落の状況でして、特に中心部の家々はすべて学校を含めて消失をして、我が家も焼けていました。そこでちよつと印象に残ったのが、焼かれるかもしれないということ、母が嫁入りに持ってきたセンダンの木でつくった小さいタンスですけれどもね。今、これは我が家の文化財なんです、これ外に出しておいたんです。だからこれはね、残っていましたね。まだ有銘の家の実家にそれはありますけれども。それとも一つ、油壺という、豚を殺して白身の部分をラード状にして保存食に使ったという、その油壺の幾つかと、これだけは残っていました。

我々は子供ですから、あの荒廃の中でしたけれども、野っばらや、そういった所で遊びましたし。見た物はですね、軍刀ですよ、日本軍の。それから鉄砲。鉄砲でも九九式というやつと、三八式という鉄砲がありまして、実弾もちゃんと籠のサックに入ってたまま、そのまま大量に見つかったり。手榴弾は非常に恐れられましたけれども、こういうものが野っばらにごろごろしているような、いわゆる収容所から戻ってのあり様でした。

それで、アメリカ軍の靴墨、これはもう戦後いろんな所で使われましたけれども、これを使って鉄砲を磨いたんですよ。磨きますとね、黒光りします。もう「ガチャ」、そして実弾を込めて「ガチャ」。二年生になって、戦後も僕、学校また一年歩き直すんですが、この一、二年生の子供たちで実弾を込めてカラスをめがけてこれ何発も打った経験があります。野っばらには大人が仕事をしています。ある日、当たるはずもない実弾を打って、大人をびっくりさせて、棒を持ってずっと追われて、伯父のうちのメーヌヤードグワート



いう隠れ家がありますが、そこへ隠れていた。こういう時代ですね。それからね、もう職がほとんどない時代ですので、特に友軍、日本軍が残した弾薬ですね。この頭の部分を回転してこう叩いていくと、後はゆるんで火薬だけを抜くことができるんです。大人はこれで急造の魚を捕るための、これを僕はダイダマと呼んでましたけれど、魚を捕るために詰めて、火をつけてこれを投げて。これは事故も何回もあったようですが、これで失明したり、腕を失くしたりあったようですが、ポポーンという音すると「ウリヒャー」と言つて、子供たちも一斉に海に向かいますと、魚がいつぱいいるんですね。これを持ち帰つてという。大人もそういうことをやりました。

僕ら子供たちはどんなことをしたかといつたら、これもまた遊びですよ。特に機関銃は鉄砲の弾より一回り大きいですから、穴を掘つて固定をしましてね、土の中に。釘を硬い針金で巻いてですね、かなり鋼鉄製の強いあれで巻いてやると、弾があんまりガタガタ動かんで、これをハンマーで上からゴツン、バーンと。こんな危険な遊びもやりましたし。それからまた女の子たちを脅かすためにね、火薬をずっと練つてこちらで火をつけるわけですよ。やつたら、シユシユシユシューと行くわけですよ。そんなことも遊びとしてありましたしね。

それからもう一つ、僕、今タバコやらないです。やらないのは理由があるんですよ。もう二年生になった頃、ラッキーストライクを吸いました。チビレットかなり探せました。これを柔らかい紙はどこから手に入れたのか知らんけども、これに巻いて何本か親父にやる。そうするとまたポケットにも入れるわけですよ。これを吸いませした。ラッキーストライク、アメリカの両切りのやつです。赤いのアカダマーですね。だから、あれ以来、僕は吸わないんです。タバコは。物心ついたら吸いたいと思わない、今も。だから、肺がんにかかる確率は低いかなと思つたり。

それとですね、もう一つ、一刀流じゃなくて二刀流ですよ。酒も

タバコもだから。今、酒はたまに飲みますけど、好きじゃないんです。酒はね、密造酒を、我が家はつくつていなかったけど、うちのおじの家でつくつていて、大人は度数の強いのを、最初は強いのを入るんですね。この密造のあれもアメリカ軍が残した真鍮のパイプなど色々利用しましてね、いわゆる麴をつくり、もろみをつくり、これを炊いて、蒸留酒ですから、最初に出てくるのは非常に度の高いアルコール。これがね、次第に一〇度以下ぐらいになりますと大人も取らないんです。ずっと流れ通しですよ。どうしたかというのと、これをコーラ瓶に詰めましてね。コカ・コーラ瓶はいろんな利用の仕方があつて、あれはコップにも使いましたけれども、半分から切つて。我々コーラ瓶に詰めて蓄えていて、これをまた一杯飲みましてね。田んぼがもううちの所有名でしたから、ユビタといまして、浅い田んぼじゃないんです。結局「お前、酔っ払っている」「酔っ払っていない」「いや、大丈夫」「じゃあ」と言つて田んぼに。田んぼに行つたら酔っ払つていますからね、真つ直ぐ走れるわけじゃないですよ。そうしたら、家はすぐわかるわけですよ。泥んこで帰ってくるわけだから。「またやつたな」と。そんな、こういうこと何とこのかな、今考えたら非常に愉快な話で、大人はね、子供を取り締まるどころじゃないんですよ。もう生活するためにいつぱいでね。子供は危ないながらも自由だったんですよ。こういう過ごし方をね、実はやつたものですから。

あと教育的なこれに立ち返りますと、戦前、国民学校に入ったけれども、戦後、我々が有銘の当時初等学校と言つていました。小学校でもない。この四七年三月から学校名が変更になつて、小学校、中学校になるんですね。ですから戦前、国民学校であつたのが、戦後、四七年までは初等学校というふうに呼んでました。そこにまた一年に入りました。当時はですね、台湾から、外地から帰つたらもう押しなべて一級下に入りました。二、三年歳の違いはあつたりもしました。これは高校卒業する年齢まで、五〇年の後半までそういう状況が続きますけれども。一〇〇周年の有銘の学校の記念誌を

確認をしたんですけれども、学校が再開をされたのが四五年の一〇月とあります。これはほぼ我々が九月に捕虜収容所から戻ってきて、翌月あたり、おそらくはみんなもう戻ってきたんだなと思います。そして学校といってもないですよ、何も。すべて青空です。青空教室。先生の生き残った人、あるいは大人をかき集めて、教育の始まりというような、こういう状況です。教科書もここには何もありませんので。

最初の文字とかかわりは、浜に連れて行って、先生ね、砂文字から始まりましたね。砂文字から。これが何年経過したでしょうか。茅葺き校舎ができるのはそんなに待たない。おそらく一、二年で茅葺き校舎が残った大人たちがつくりました。じゃあ学ぶ、教具、教材はどうだったかといえますと、まず教科書ありませんから、ほとんど先生方が。とにかく今の教育課程みたいなあんなことの教育では全くない過ごし方を学校ではやっていたように思いますし、まず鮮明に記憶にあるのは、教材・教具を自分たちでつくったということです。まず黒板はどうしたかといえますと、米軍からもらったベニヤ板に、テングサという海藻をですね、これを炊いたら糊状になるんです。これを炊いてですね、これと黒い混ぜた何かがナービヌヒングウー、鍋のススです。これ良質じゃなかったですね。がさがさしました。だからよくチョークが減る。なめらかじゃないわけですよ。しかし、それでも自分たちで一生懸命黒板をつくりました。

ノートはね、セメントが入ってくるようになると、あれは何重かに紙が重なっているんですから、この紙をこう四角に切つて。やんばる竹グワーというやんばるの山に竹が、これ二つに割りまして、挟んでくくって固定しましてね。これがだから真っ黒くなるまでノートですよ、ノート代わり。鉛筆、これも私の記憶ではコーリンという、戦後あったのかな。コーリンと言っているんですよ。これはカタカナでね。ゴムなどがついていない。それをね、これも最後まで使い切るんですよ。どう使い切ったかといえますと、その前に鉛筆は何で削ったかといえますとね、アメリカの缶詰、缶詰は鋼鉄

製の硬いバンドでね、帯で、これでアメリカ軍はやる。これを実は切りまして、鋼鉄ですから、これで三角のキリを自分たちでつくったんですよ。これもものすごく切れました。これ鉛筆削りです。だから、そういう道具も自分たちでつくつて、削つて、これがもう使い使いして、最後の所はこんなに短くなるわけですね。短くなった所を、今度はやんばるの竹をね、刺して、最後までですから使い切った。たまに学校に子供たち呼ばれて話をする時は、こんなことまでして大事に使ったよと話をすると子供らびっくりしますけれども。

ですから、黒板からノート、鉛筆、こんなことなども一応もう本当に自分たちの手で。それから段階としてはやっぱり石積み校舎の前にですね、上級生はほとんどがもう鉄、つるはし、スコップ、最初はそうでしたが。僕らが中学三年卒業するまで工事整備はずつと続きました。裏山はもう大雨のたび崩れて、大体教室まで、コンクリートの一応平屋ができた後まで流れ込んだり、校庭もアメリカがトラクターか何かで整地もしたりもしたんだけど、もうしよつちゆう、とにかく作業していたというイメージです。

あとそうですね、今度は自分の服装です。アメリカ軍のHBTです。うちの母は裁縫が非常にうまかったです。自分で着物を縫ったりやつてまして、後に僕らの浴衣なども縫ってくれましたけども、その母親がいわゆる半ズボン、HBT、アメリカの軍服のそれをつくりましてね。上はといいますと、この前若い子たちと話をしましたら、メリケン粉と言ったらわからないですか？メリケン粉と言ったら。

#### ○黒柳保則

小麦粉ではないのですか？

#### ○石川元平

いや、今の小麦粉、僕らはメリケン粉と言っておったんですよ。これを入れる袋です。これは丈夫なんです。一定の厚みもありますしね。洗えば洗うほど白くなりました。立派になります。これを着て通学、運動会でもみんなそれですよ。だが靴はしかし、いつごろ

履いたか記憶ははっきりしないんです。ただ、履くものは、これまた沖縄の伝統的なあれでね、貧しいながらも旧正月の前になると下駄をつくるに最適の材木が山奥にあるんですよ。これはちょうどね、本土で言えば桐のような木目のない、軽いけれども割れないんです。これアサグラという木です。この木を何カ月前に、もう正月下駄用ということで、切って乾燥させておくんです。下駄屋が各村々にみんなあるんです。うちの有銘にも下駄屋がありましてね、何日前に予約でこれ持って行って、オンリーワンですよ。自分の足裏に合わせて、これちゃんをつくってくれる。それと紐はうちの母親がつくる。ですからこれはね、脇に、大事に懐に入れて行きましたよ。非常に大事に履きました。次第次第にあれば減ってはいきますが、簡単に割れないんです。戦後の厳しい、貧しい時代ではあつたけれども、ある意味で今考えたら、かなり鍛えられて学ぶこともあつたかなという感じはしますよ。物をまず大事にする。

それからですね、小学校は年代的にいうと四五年一〇月から五一年三月までです。中学校は五一年四月から五四年の三月まで有銘中学校。小学校の延長線が、学校長も一緒でしたけども、そこへ通いましたけれども、学習環境はもうある意味、遅々として進まなかつたという。またやんばるの辺地でもありましたので、道路事情もよくなくてですね、よく物資などが海路を使って運ばれてましたね。舟艇などもよく利用されていて。

非常に印象に残っているのは最初の校舎建築。有銘でも一九五三年から建ち始めるんです。私たちが中学三年の頃。この校舎で僕らしかし勉強はしなかったです。どういう具合に作ったかといえますと、セメントとかそういう材料は琉球政府が出したのか、とにかく運ぶやつがいて、後は材料とラワン材です、当初の。石積みの校舎をつくる。壁は石積みなんです。中のほうはみんなラワン材を使いましたので、有銘の湾の舟艇が入れる所まで入ってきて、今度是我々が泳いでいてこれを引っ張ってきてですね。学校までは約数百メートルですね。引っ張っていったり、担いだりで、それはも

う生徒の役割みたいになっていて、請け負った人たちもいましたけれども、ある意味では総動員ですね。校舎建築などは総動員をして、茅葺き校舎、我々はまだ高校、中学三年の時の受験勉強で、この頃まではまだ茅葺き校舎が幾つもありましたので、その天井の上での寝泊まりもしたりしましたけれども。

それともう一つは村全体にかかわること、発電機がようやく有銘の字にも入るようになりまして、これは夕方から何時までという時間制限でしたけれども、発電機が入ったことで映画興行ができるようになったんです。私の今記憶ではバンツマ、坂東妻三郎のね、「妻恋坂の決闘」というのが印象に残っていますね。それと「暁の脱走」ですよ。この二つが戦後見た映画としては強く印象に残っている。

中学三年になりますと高校受験という話もありまして、当時は中学校ではほぼ三割ぐらいが高校に進学をしていくというふうな、こういう事情で、もう社会的には非常に貧しい時代でした。これも個人的に少し申し上げると、かなりウーマクだったかなと、なお中学生なつても。茅葺き校舎のこのケタがあるんだけど、これに鉄の棒を動かんように固定、もう本当に検証もしないで、かなり運動能力はありましたのでね、回転したんですよ。これがもうぐるっと回ってしまったって、どこでどう回転したのか、とにかくやがて結果として落ちた。今度はこの両膝をね、強く打ってしまったんですね。特に一方の膝、うんと膨れまして、これは受験直前です。運悪く、もうやがて死んでいたかもしれんよと言われたり。松葉杖を初めてつきました、受験しに。いわゆる東の有銘から学校のある辺土名高校とあって、国頭村の辺土名にはないんですよ、大宜味村の字饒波という所。だから、中部、南部から来た人が辺土名高校とあって、辺土名まで行って引き返してきたとよく聞きますが、北部三村の中間地点、そして寮などをつくるのにみんな三村のPTAが協力をしてやったもんですから、じゃあここにと決めてやったというのが辺土名高校設置の始まりなので。



## ○佐藤 学

初めから寮があるわけですね。

## ○石川元平

ええ、そこにいわゆるかやぶきの寮がありましたけれども、当時、体育の受験科目が三つあるんですね。一〇〇メートルと、走り幅跳びと砲丸投げ。ですから、走るのも飛ぶのもできませんので、これは棄権をしまして、砲丸投げは一定程度投げられましたけれども。こういうことで、単なるいたずらじゃないけれども、それが少し過ぎて、こういう大事な時にひどい目に遭ったという記憶などもあったりもします。

あとしかし、またすごいまじめな話もありますが、中学校卒業する時にですね、伝統的に学校に記念品を送る。それから三年生の時に修学旅行行きました。那覇に二泊三日ということで、そうしたら那覇には今のようなホテルはありません。神里原には木賃宿みたいなあれが、隣では酒飲んでワーワーして、もうそういう時代ですよ。その適当な部屋に我々が二泊やっていると、こんな状態の中の修学旅行でしたけれども。申し上げたいのはですね、修学旅行費を稼ぐために地元の先生方のね、田畑を請け負って、ここを耕したら幾ら、そこで植えつけたら幾らというふうなことで、それで稼いだんですね。これかなり稼げました。あとプラスして、これだけではなお足りないということで、山国ですから、三方ね。炭俵をですね、女生徒も一緒になって、それを山からですよ、担いで、これでもまた稼いだんですね。結局、その稼いだお金で学校への記念品を贈り、それから修学旅行費も一切親からはもらわなかったです。これは今もって大したことをやったというふうな思いですけれども、そういうこともやりましたね。

あと一つね、僕、本当は一番何が好きだったかというのと、勉強より釣りが好きでした。これ同級生たくさんいるんですが、一番最後まで残るのは私でしたね。みんなが「ああ、もう釣れんから今日は帰ろう」と言って帰るから、僕は最後まで残ってやったら釣りの名

人と言われているオジロがいましたけれども、あの人といい勝負するぐらい。五寸もあるフナがですね、あの手応えはもうすごいですよ。あれが忘れられずに日没までついつい夢中になって、日没が一番釣れるんです。釣りにもまたいろんなコツもあるもんですから。そうしたら、やんばるですからね、危ないんですね。ハブが出る夜はね。親はそれを心配したけれども、釣果を上げる。これを見たらまた喜びましてな。帰りなどでどうしたかと言ったら、やっぱりハブに噛まれないように。飛ぶんですよ。ハブは待ち構えてこうやるんですからね、ゆっくり歩かんでトントンやったら絶対噛まれない。こんな格好で家まで逃げるように。それぐらいフナ釣りにハマりましたね、本当にちよつと何かやったら、ハマる癖は今もってあるんですが、そういう何とも羨ましいような、そんなこともやったりしました。

## ■「戦後初期の状況」「小学生時代」「中学生時代」

### の質問・応答

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしますと、一つ気になったのは、戦後の初めの頃にお酒、タバコも含め、相当な。

#### ○石川元平

タバコは卒業した。タバコ止めて六十何年なると言ってるんだ。

#### ○櫻澤 誠

もちろん、当時、いろんな所でそういう経験のある人がいるとは思いますが、とはいえ、そういう中でもかなりやんちゃなほうだったと思うんですが。

#### ○石川元平

だったようです。

## ○櫻澤 誠

周囲の友達との関係であるとか、あるいはそのご両親がそういうことに対してどういう対応をしたのか。お生まれになった時に、もしかしたらどつちに転ぶかわからない、ウンタマギルになるかもしれないとか言われた中で、何かむしる懸念している方向に進みそうな感じもするわけですけども。

## ○石川元平

そうですね。母親は、尚巴志の子孫だと威張っておったという姑に相当きつくずつとやられたようですから。ただ、やっぱり私にもその意味ではしつくとしては厳しかったですよ。僕はあんまりケンカはしなかったですね。ただね、僕が一度泣いて帰ってきたことがあったようなんですよ。そうしたら、「ケンカして、泣いて帰ってくるやつがあるか」と物すごく怒られた記憶があります。そして「もう泣くのは止めなさい」と言ったらびしゃつと止めたよ。これはまたね、誉めるんですよ。その後はね、あんまりそういう経験はないんですね。ただ、しつとだけはね、貧しいながらもこういうものになすごく厳しくてですね。これずつともうあれですよ、母親が一〇〇歳になつても僕が何だか変な格好して行ったら怒られましたし、髪も変なカットやったら「何で、ダン。パチデーネードウアミ」、散髪代もないのかと。そして、帽子などもかぶって行ったら、「この帽子はお前に似合わん。捨てなさい」とすぐ言われたり、厳しかったですよ。すごく服装、身なりに対しては。だから、行く時は一応注意をしたりやりましたけれども。

それともう一つはね、また食に関してでもですね、これは兄弟でもよく話したりしますけれども、ヤギ肉買う時はメスヤギの肉は買わないんですよ。体によくないと。というよりは、オスヤギのほうが体にはなおいいんだという。また豚肉を買う時も、その貧乏世帯であるくせに、例えば自身の多い安いものは買わないですよ。肉の中でもいわゆる煎じ物ですよ。豚肉や、豚肉だけじゃなくて内臓の何かな、タキーマーミというのがありますが、豆のような。そ

れからニンジンなんか入れてね、本当に煎じ物ですよ、食事だけのね。こういうものをつくるのがすくうまかったです。沖縄では旧の大みそかはまだ集落によって色々つく。我が家では骨汁つくりますけれども、どうしてこのような味が出せるかと、うちの妻でもね、かなり自分でうまいと自認していますが、あの親のあれは出せないということに感服していましたが、とにかくいい肉を買いました。だから、頻度としてはあまり回数多くは食べてないはずですよ。とにかく買う時はね、非常にいい肉を買って、また料理に自慢があるもんですから、沖縄でよくティーアンドというんですね。手の油が入っているから味が何だと、ティーアンドが入っているという言い方をしていますね。そういう家庭内ではそんな育ち方しましたね。

## ○櫻澤 誠

色々悪いことをする時に一人でするわけではなくて、常に仲間がいたわけですよ。

## ○石川元平

はい。マーサーという、度の弱い酒を飲んだり、タバコをふかふかやる際も、それから、いわゆる軍隊的なあれが戦後まで残っていましたね。子供の遊びの中でも陣取り、宝取りなんて言って、これはある意味では相当実力を発揮しなければ勝利できないような遊びとして実はあったり。それから平たい石を探して、そこに国取りと言ってますね、このおはじきみたいなあれでやって、一回勝ったらこれだけ国を取ると。この勝負をやつて、あとはみんな取ると。やっぱり国取り、陣取りのあれも戦後ずっと残っていました、我々やりましたね。やんばるですから、またガジュマルの木に登つてぶら下がつて、もう川面の近くまであるもんですから、これにぶらぶらとちよつとターザンのようなあれで、反動をつけて飛び降りたり。いろんなことをやりましたね。

それからね、これはある意味で生き死にかかわることなんだけれども、台風がやって来たからね、昔の台風は必ず何か返しがあつたんですよ。吹き返しが。ちよつと台風の眼に入ると何十分かは風が

ぱつと収まるんですね。そうしたら、その間に「それ」と言つて海に魚を捕りに行くんです。もう台風の荒波にもまれた魚が波打ち際でもうバタバタしているんですよ。これを捕る喜びがまたありましてね。これも少し夢中になり過ぎて、返し風が吹き始めて家に戻れなかったことがあります。これおそらく何時間かかったのかな。それと一度は波に飲み込まれたことがあるんですよ、五、六年生の頃。僕を助けた三期先輩がいたんですがね、あれは命の恩人でしたけども、亡くなつてしまいましたけれども。あの怖さはわからなかったんです。入り江ですとね、入り口が広いでしょう。たくさん勢いのある波が押し寄せるんですね。押し寄せてきたら水位も高くなります。今度はこれが引く時ですよ。引く時に足場が、砂利、砂、それがガラガラと引つ張られていく。これはもうどうしようもない経験。一度だけでも、その経験やりましてね。しかし、魚はまたたつぷり捕りましたよ。

ウーマクーの話もう一つ。映画の興行の宣伝をするのに、この隣の久志村に天仁屋の小中学校ありましたので。ポスターでちよつとした小遣いがもらえたもんですから、自転車を借りて行って、ちゃんと届けてきて。同級生なりがこの久志、天仁屋の学校に、有津という所の出身ですが、ちよつど帰り一緒になつたもんだから、僕の自転車に乗って一緒に帰ろうということに乗せたのはいいんですよ。やんばるのあの道はね、大体二キロぐらい坂、今度は逆に二キロぐらい下り坂なんですね。自転車がね、ブレーキが利かなくなるということをおぼえなかったです。最初は利くんですね。あとは利かなくなるんですよ。かなりの勾配のあれを。そうしたら、あとは崖ですよ。そこで制御不能になりましたね、幸い崖でない所に二人すぐ転んだからよかつたんですが、もうわずか間一髪ですよ、本当に。柵も何もないですから、当時はね。ちよつと怪我しましたけども、家では知らんふりしたりもしましたけれども。

#### ○櫻澤 誠

またちよつと別の話なんですけど、戦後、有銘に再び戻つてきて

生活を始める時に、戦前に遊んでいた人たちと久し振りに再会をして、また戦後も関係が継続していったということでしょうか。もしくは、やはり沖縄戦を経て、亡くなった人がいたり、新たに別の人が入り込んできたりしてがらつと変わつていくのか、そのあたりのことについて。

#### ○石川元平

幸いね、同級生で死んでいったのがほとんどいなかった。ところが、戦後に新しく、台湾からの引き揚げ者が加わりました。僕ら同級生なんだけど、歳は一つたしか上だったはずですよ。数えられるぐらいの死者は幸いうちの所ではなかったかなと。これは少なくとも、まず食糧を初めとして、かなりほかの所よりは恵まれていたからだろうと思うんですね。

#### ○櫻澤 誠

有銘の小学校は一学年で大体どれぐらいの規模なんですか。

#### ○石川元平

二〇名ぐらいでした。私たちより一個下の人たちは、また二学級ありましたね。A、B、二クラス。僕ら、私一三年の早生まれなんです、一三年といたら直接出生のあれに何かあったのか、とにかく一個下のクラスの約半分でした。

#### ○櫻澤 誠

共学で大体男女半分ずつぐらいですか。

#### ○石川元平

男女は数の上ではそうですね。

#### ○櫻澤 誠

私のほうからもう一つだけ。小学校の最初の頃の教具や教材の話をおぼえていましたけれども、例えば教科書なんかが普通に一人一冊ずつ手元に届けられるぐらいになってくるのはいつごろの時期ですか。

#### ○石川元平

これもね、ガリ版教科書で「首里城のアカギ」というのの記憶が



あります。これは沖縄の戦後の行政組織の始まりで（沖縄）諮詢会というのが石川に設置されますけれども、仲宗根政善先生、ひめゆりの引率教師などがそこに加わって。「首里城のアカギ」はこれ、仲宗根先生の執筆だという。何年ということははっきり覚えていませんが。

すべての先生方はガリ版を使って、鉄筆と、それを修正するにはろうそくという、これでもって試験問題をつくったり、いろんな通知表、なんやかんやのあれで間に合わせていますが。まともなね、教科書はちよつと。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。ほかにご質問、いかがでしょうか。

#### ○佐藤 学

炭を運んで修学旅行のという、炭、薪がかなり商品として、売ってお金になるものという認識はあったわけですか。

#### ○石川元平

これは特にやんばる、うちの有銘だけじゃなくて、町方、都会のほうでは極端にそういうのが不足しているわけですね。材木、いわゆるいろんなものをつくるための、太いものから細い木、これはキチといっておりましたが。それから竹ですね。一丈ぐらいの竹を切って、これをまたこう束ねまして竹運びもしました。その中の一つとして炭。炭俵でちゃんと包まれているやつを運搬するというふうな。これも非常に町方でも、またうちでも使いました、炭は。しよつちゆう五徳を入れてね、そこにもう寒い冬の中でしよう。そういう火鉢の中にも。貧乏者は特に火で温まるようなことをうちでもやってましたね。

#### ○佐藤 学

東村に行くのと山と水の生活博物館に随分大きなスペースが。

#### ○石川元平

あの生活博物館。

#### ○佐藤 学

非常に大きなスペースが薪の採集・積み出しの様子に使われているのですが、自分の理解が正しいと、六〇年代以降、那覇で薪は使えなくなっていたはずで、商品としての薪とか炭とか、船で那覇に持って行って、交換に商品を何か仕入れてという物流が止まっていくのが五〇年代なのだろうと思うのですが、何かそういう実感、薪が、あるいは炭が売り物にならなくなるというようなことで、地域で何かその大人が話しているようなことは記憶されていますか。

#### ○石川元平

僕らね、五〇年代も盛んにそれやりましたもんね。やんばる船がその輸送手段ですよ。町方から日常雑貨がどつと来ます。陸路はね、道が整備されてないですから、ほとんどやんばる船を使って、今度は材木や炭などをね、町方に逆に運んでいくという。いわゆる平安座経由ですね。西海岸じゃなくて東海岸沿いにその物資を運んで、あるいは平安座、それから与那原まで行って、与那原から那覇に行ったようですよ。

#### ○佐藤 学

このやんばる船が一九五〇年代まで使われている写真を見てびっくりしたことがあってですね、商品として売り物となるその特に燃料の部分が売れなくなるというのは、地域にとつて相当その大きな打撃だったのではないかとというふうに仮説を立てていますが、これはどうだったんでしょうか。

#### ○石川元平

いやいや、そのところはちよつとよくわからんですね。全体の、町方との全体の傾向はわかりませんが、先の生活博物館は、宮城茂という村長がいます。東村は旧久志村から大正の一二年に分村したんです。分村七〇年記念でシンポジウムをやりましてね。東村出身の沖国大教授の宮城辰雄氏がコーディネーター、琉大の池原（貞雄）元学長や、それから経済学の大城常夫、亡くなりましたけどね、二人とも。それに、あと一人は那覇の渡口初美という、御拝をする本たくさん書いていますが、料理研究家でもある。この四名がパネ



リストでシンポジウムをやりましてね。

ふるさとに対する提案もこの際やってくれというんですよ。私が提案をしたのが、水のもとじゃないですか。辺野喜ダムからフンガーダム、安波ダム、新川ダム、最後に福地ダムでね。それをもちろんあれはやんばるの子孫も、中南部にもたくさんいるわけだけれども、僕はある意味では水をみんなぶっ止めてね、やんばるの言うことを、東の言うことを聞かんならば、こんなことでもやったらどうかということも言ったりもしたんですよ。しかし、自分たちの子や子孫がみんな町方に出ているわけでやれなかったようだが。ただね、僕が提案をしたのは、この水のもとを、もっとそれを波及して、付加価値も与えるような。これも今はポツカという東のやっているんですよ。あれももう僕が言うから十何年、ほかに先を越されてしまいました。そして一年に一度、つつじ祭りをやっているんです。一カ月の間に、当時、僕に報告があったのは六五〇〇万円金が落ちるといふんですよ。これをね、つつじの一過性のもんじゃないって通年的な、水信仰のある沖縄だからね、そういう場所をつくつたらいいじゃないかと。それで提案をしたのが山と水の生活博物館で見事つくつてくれましたよ。

#### ○佐藤 学

本当に当時の生活がよくわかるのですね。本当にすごいびっくりしたのは、木ですね、山でその木を切る、炭を焼くということが生活に非常に大きかったのだと、それも随分後までそうだったということが非常に印象に残っています。今は学生、東村に沖国大セミナーハウスという施設があります。

#### ○石川元平

はい、そうですね。

#### ○佐藤 学

この数年、学生を無理矢理あそこに連れて行って見せたりしているんです。

#### ○石川元平

今、例えば早稲田の学生たちはもうずっと続いていきますよね。あれは何十年も続いているんじゃないですかね。有銘に、学生、それだけじゃなくて一般の修学旅行などでも受け入れをして、交流型農村のそういうことを、ホテルがないもんですから民宿でね。こういうことでもかなり村おこしやっているんですね。

あと一つね、僕はこの前、百何十年かという有銘に伝わる大綱引きがあるんですよ。それに今、郷友会長もしているもんですから、案内を受けて話をしてくれというから少し。しかもまた字史なんていう村の歴史の本がない。

これだけ言うておくよということ僕がちよつと言ったことは、有銘と源河の間に立派な横断道路があるんですよ。これはね、「選挙道路」と言われて長いことほつたらかさかされたんです。両方から用意ドンで始まってくる予定のものが、有銘は一期工事進めましたけど、源河は止めたんです。補償問題でもめて。一〇年以上もほつたらかさかされてね。後はもう、砂防ダム何も役に立たんで、台風や大雨のたびに土砂が流れて、美田である田んぼをみんな埋め尽くしたんですよ。農地改良して今は畑になっていますけれども。この選挙道路でほつたらかさかされたものはどうしたのか。これは私に関わったんですよ。幸い行政主席の屋良朝苗の側近としておりましたのでね。地元の出身の吉田光正という立法院議員と有銘の出身の平田と田場という二人の村議会議員も引き連れましてな。琉球政府の大嶺土木局長に会って、やったほうが早道だということをやったら、もう幸いなことに、「実はそれは測量したのは自分が係長時代の仕事だったんだ、長いことほつたらかして誠に申し訳ない、すぐ調査費をつける」と約束して、すぐ始まりましたよ。それが今のあの源河線だと。八〇周年の座談会の中で、私はこれ記録残しました。コピーして自治会長などにあげましたけどね。少しは郷里のこともやったよというこの話、これ色々ありましてね。

#### ○佐藤 学

もう一つだけ、コカ・コーラとの出会いというか、その瓶を使う

という、この瓶を切るというのはどこから知恵を得られましたか。

○石川元平

これはね、針金でやったという話は聞きますけれども、僕らはアメリカの野戦用のありますね。僕らよく一〇四号の鬮いの時にあれを着て実弾砲撃阻止闘争に参加しましたが、あれのこの紐の部分です。ものすごい頑丈なんです。これをですね、真ん中のくびれた部分をこうやって、水にやるとポキン。それをちよつと切り口危ないですから、やすりで削りましてね。これがもうコップです。丈夫なコップ。

○佐藤 学

それを自分たちでこう編み出したものなのですか。

○石川元平

ええ、自分たちでやりました。

要するに、ジュラルミン製のヤカンとか、鍋だとか、アイロンだとか、やっぱりそういう、これが物づくり。僕はアメリカのバラ線のあれで小型のつくったという話をしましたけれども、人間、やっぱり色々やったら、色々そういう工夫が生まれてきますよ、知恵が。

○佐藤 学

生活博物館にそういう展示品がいっぱいあって、どこからかこう指導でもしたんだと思っただけですが、そうではないわけですね、あれは全部。

○石川元平

どうか。どこでもしかし、ありましたのでね。

○佐藤 学

どこの資料館に行っても、その同じような形のそのジュラルミンのものとかあるので、これは何かそういう指導でもあったのかと思っただけですけど。

○石川元平

いい形してますよね、またね。

○佐藤 学

コカ・コーラを最初に飲まれた時のことを覚えていらっしやいますか？

○石川元平

瓶は昔のようなコカ・コーラ瓶じゃないですけど、これ一つ私持ってます。コカ・コーラと書いた、色は全くああい薄緑色が入った。あれをですね、花壇にも使ったんですよ。いろんな用途がありましたね。

○佐藤 学

東村の日常生活にコカ・コーラの瓶が入っていたわけですよ。

○石川元平

そうですね。

○高橋順子

小学校の頃のお話なんですけれど、習った先生というのはどんな方だったんでしょうか。

○石川元平

これも後でちよつと話しますけど、沖縄戦で今言われておりますように四分の一死んでしまったわけですね。学校の教員はもつと多く死んでいきます。大田知事も話をしたことがありますが、約三分の一死んでますね。加えて、いわゆる教員の卵である師範学校があるという形で、あれは半分以上亡くなっていますから、平均してね。ですから、これは戦後、需給の関係からも足らなかつた。ですから、そこにもうこれは僕自身にもかかわってくるんだけれども、文学校というのもできたり、半カ年の教員養成所なんていうのもできますけれども。

まず戦後の一年、戦前から有銘の教員しておった一番先輩の翁長ナエ先生、親戚の関係でありますけれども、が一年の担任であって、寄川ハツという、こういう方々などが戦前からの教員としていて。後はもう本場に若い、戦後の代用教員からみんな始まったんですよ。あるいはまた軍隊から帰ってきた人たちも、また代用教員になった。

これ免許の関係じゃないですよ。そんなことが始まって。ですから私が小学校、中学校までの有銘の終戦直後のわずかな時期、正式な名称で校長という名称はついていませんね。生き残った新里という後に琉球政府に入るんですが、彼が校長代理として戦後の一時期です。その後、他の市町村の方々などが、上原亀吉というのは渡名喜の出身、宮城政忠は大宜味の方でしたけれども、あと古堅宗徳という校長は国頭の出身とかで、ほとんどがもう地元の教員。

これは資格のあるなしにかかわらず、そこに始まって、教員に就いてから今度は認定講習とかという大学単位を取得をして、仮免から二級免許等々というようなことなどでいきましたから、もう教員組織の実態を見たらこれはもういわゆる沖縄戦の影が直接戦後をそういうことに移りましたね。

#### ○高橋順子

小学校の時の授業で習った内容で印象に残っているものはありませんか。

#### ○石川元平

教科の中では、僕は、ですからガリ教科書に出た「首里城のアカギ」ぐらいのイメージしか残ってないな。だから、はつきり教科書もちょうど文教図書が購入して入れた教科書でも最初、本当はもつと思うんだけど、あんまり印象に残っておらず。

#### ○高橋順子

沖縄に関する内容も「首里城のアカギ」ぐらいでしょうか。印象に残っていらしたものは。

#### ○石川元平

強い印象に残っているのは、あとはこのまじめに勉強しなかったのかなと思ったり。

#### ○高橋順子

小学校の時は修学旅行というのはなかったんでしょうか。

#### ○石川元平

小学校はないです。小学校の時はない。中学になって三年の時に。

#### ○高橋順子

一九五〇年代だと、政治的に沖縄が東アジアの中で色々な影響を受け始めていく時期だと思うんですけど、国共内戦とか朝鮮戦争で何か身近で感じたことはありませんか。

#### ○石川元平

これは中部ではいろんな話聞かれますが、中部のようなそれは、直接まず僕らの日常的な中には見えませんでしたね、全くね。いわゆる、もう新聞、テレビのない時代でした。ただ朝鮮戦争も五〇年から五三年ですが、灯火管制ということはね、これは何度もありましたよ。要するに、我が家、ランプはつけておりましたけれども、昔の家は二重に障子とかガラス窓ないですからね。すぐ雨戸ですから。雨戸にはまた節もありますしな。そこはみんなカバーしてました。消防隊だったのかな、「明かりが漏れてるぞ」みたいなことなどがあつた。実際はまた朝鮮戦争に沖縄が深く関わっていくわけだけれども、やんばるではそういう兵隊の動きやその他は感じられませんでした。

それとね、また直接は関係ないけれども、四月一日、四月バカ、エイプリルフルですよ。津波が押し寄せてくるという。五〇年代前後じゃないでしょうか。この時は大騒ぎをして、夜中山の上で避難しましたよ。後でこれは、ですから四月バカということも初めてわかったんですね。

#### ○佐藤 学

そんな話があつたんですか。そういうその、本当に誰かが担ぐとかいう。

#### ○石川元平

いいえ、もうみんなおつた。山の上に避難をし、いつまでたってもその様子ないので降りたら、どこからともなくあれはエイプリルフルとかいって、四月バカと言うらしいよという。

沖縄戦、本島上陸四月一日ですよ。色々。

#### ○黒柳保則

そのような記憶があつて、危機感をあおられたのでしようね。色々な記憶が重なっていったのでしようね。

○高橋順子

先生が小学校の頃、同級生に台湾からの引き揚げの方がいらしたという話を聞きましたが、ほかにもいらつしやったんでしょうか。

○石川元平

うちのほうにはなかつたですね。やんばるのああいふ場所ですから。これは那覇、中南部ではかなりあつたと思います。

○高橋順子

さきほど新聞の話が出ましたが、『うるま新報』とかはいつごろから各家庭に届くようになりましたか。

○石川元平

いや、これは各家庭には、我々最後まで届いていませんね。やんばるまで。我々の周辺では。

○高橋順子

学校で一つとかでしょうか。

○石川元平

学校でとつていましたかね。とつてなかつたんじゃないかな。『うるま新報』というの。いわゆる『琉球新報』や『(沖繩)タイムス』以外。

ほとんどやんばるでは、新聞を通してやるといふことはほとんどなかつた。

○高橋順子

情報が入ってくるのは小学校とか中学校の時はラジオとか。

○石川元平

もうラジオも高校に入ってからでも、土地闘争のあれも、やんばるの僕ら大宜味までは伝わってこなかつたですからね。あれだけの大闘争のあれでも。

○高橋順子

そうすると、情報が全然伝わってこないような感じだったんです

か。

○石川元平

でした。逆にいえば、それぐらいアメリカが占領統治してるんだけれども、そういう民生のことなどについて、ほとんど手を差し伸べなかつたという。学校の校舎建築等々、これはみんな民間の教職員会からこういうのやつたんですから。いわゆる決起によって。ですから、教育のことを陳情したら民生第一でということ言うんだけれども、やっぱり民主主義の国家、アメリカが施政権を握って統治しているんだから、むしろ日本よりも民主主義は沖繩から学ぶべきだということ、研究教員制度などを屋良先生が強く要請した時には、こういう対応で米国民政府情報教育部というのがあつたんです。非常に対応悪い、生かさず殺さずのこういう状況だつたと思いますよ。

一方では、共産圏向けなど、その他情報はあんなに流しているわけですよ。やんばる奥間のほうにもVOAの巨大なアンテナ群がありましてね。何か裸の蛍光灯を持ってそれが自然に発光するんだとか、色々芭蕉の葉っぱも音楽流れるんだとか、いろんなことがうわさされたりもしましたけれども。外に向かつては民主主義のショーウィンドウなんですよ。ところが、マスコミも一切入れません、本土の。渡航制限でこちら側勝手に出しませんから。という時代ですから。

だから、解放軍というイメージを持った時期もあつたと言いましたけれども、もう好きなだけ基地、囲い込みをみんなやって、あとまた新規で土地接収も五五、六年で仕上げていくわけですから、こういう状況の中では、全く沖繩人のための施政というふうなものも一切なくて、すべて軍事優先。だから、今の五八号線は軍用道路一号线と言っておつたんです。

○高橋順子

中学校の時、日本が一九五二年に独立するような形になって、生活の中で変化はありましたでしょうか。あと、沖繩でも琉球政府が



できていって、政治機構がちよつとずつ変わって、変化を感じたようなことは。

#### ○石川元平

後で見ますと、琉球政府が五二年四月一日、教職員会もできて、教職員会というようなことは、これは後に僕らも高校卒業してすぐ代用教員になりまして、教職員会会員にもなり、青年団にも入ってということ。

ところがやんばるの私の東の周辺あたりでは、講和条約に向けての運動の、こういうことなどについてあんまり、我々にまで伝わってこなかったですね。青年団非常に頑張っていますけれども、結果として、それが土地闘争にも発展していくことになるわけだけども、琉球政府ができてすぐ、沖縄戦終結から数年たってという状況の中で、そんなにまだ僕らが十分わからない面もあったと思うけれども、あんまり実感できるようなものは少なかったですね。

#### ○高橋順子

小学校と中学校時代のアメリカとの関わりで、コカ・コーラとかいろいろなお話が出ましたが、ほかに小学校とか中学校時代で米軍と関わるようなことはありましたでしょうか。

#### ○石川元平

もういわゆる校舎も校地も、みんな焼けて荒れ果てていましたので、アメリカ軍がトラクターと、それからもうトラクターの後にうまく敷きならす、齒を横にして、こういうものを持ってきて、校地整理等に。そういうことは具体的に受けましたね。それから野球かソフトボールだったかな、というふうなもの、これはある意味で宣撫工作的なものもあったと思います。そういうふうなものは米軍だったのか、この民間だったのかはつきりしませんが、そういうことが学校にまでありました。

### ■「高校生時代」

#### ○櫻澤 誠

大分時間も経ってしまったんですけど、「高校生時代」のお話と、「教員になるまで」のところまでお話しただいて、今日は終わりということにしたいと思います。

#### ○石川元平

高校生時代はですね、一九五四年四月から五七年三月までです。何回か出ましたが、国頭村、大宜味村、東村の三村の合意でもって大宜味村の字饒波という所に、四六年、辺土名高校が設立をされます。そこに入っていくことになるわけですが、本当は西海岸の辺土名高校よりも地理的な面からすると、この東海岸の宜野座高校が我々は便利でありましたけれども、ただ、高等学校設置のそういう理由などが明確にされましたので、私なども辺土名高校へ受験をするということになりました。五四年当時の辺土名高校のまず校舎の状況は、今考えたら非常にみすぼらしいんですが、一応、一階平屋のコンクリート造りが主であって、一部にコンセット校舎ですね。米軍払い下げのかまぼこ型の、こういうコンセットの校舎も使われれておりました。

ある冬の日ですね、国語の授業のさなかでしたけれども、激しくコンセットを打つあられの音で授業を中断するということがありました。一斉に外に飛び出しまして、女生徒はスカートを広げまして、これを溜めました。そうしたらね、簡単に溶けないんです。高校設置された大宜味村の饒波という所は、沖縄の三大寒所といわれる寒い所だったんですね。あられ自体、玉が荒いんです。大きいんです。くぼんだ所にそれが溜まって溶けないんです。この状況を見ましてね、いわゆる琉球の文学で琉歌というのがあります。特に古典音楽などに雪、方言でユチと言いますが、この三・八・六の琉歌の中に雪を詠んだのがたくさんあるんですよ。あのふわふわ、あの降るあの雪が本当に沖縄で降ったんだらうかと。これ記録的にはあるんだそうですよ、気象台ね。あるんだそうですが、あの琉歌を

詠んだ歌人たちは、こういう状況を見て雪、ユチと言ったのではないのか。今、大体もう確信みたいな感じを持つてるんですけども、そういう経験をやっぱりですね。

それから寮生活、約一〇〇名が、特に遠隔の生徒たち寮に入っています。僕は寮長なども三年の頃やった経験がありますけれども茅葺きで、電気水道はない。水は井戸の水を使っていますけれども、あんなに寒い所、風も強いんですね。床にはもちろん畳とかそんなのありませんからね。この板の間から吹き上げてくるんですね。そこは毛布を敷いたりいろんなことやりましたけれども。両側天井のほうはトタンを敷いたり、それから缶詰の箱のあれを間に合せて。とにかく蚊帳ですからね。何もないといろんなものが落ちてくるんですね。これを防ぐためにとにかくできるだけのことはやって。それでも風の強い日は室内でランプがつかまぜんから、自分のテーブルのあの周囲だけこう囲って勉強をするみたいなことまでも実はあつたりで。食べ物ほとんどが素麺です、主食。それとダシは、ちよつと大きめの三角のね、イワシの缶詰。油はラード。野菜は学校園というのがありましたので、これをうまく盗んだり、こういうふうなことなどで使って。たまにカレーライスみたいなものがありましたけれども。

非常に欲張った。部活などでも、バレーと陸上に運動面ではやりまして、それから文化面では演劇と文芸やつたんですよ。生徒会をやり、寮長などもやつたりで。これは時期的に必ずみんな一緒に重なりませんが。朝は、学校のある饒波から喜如嘉まで一・五キロぐらいありますけど走って一〇〇段階をのぼって、また降りてきて走っていく。かなりの距離なんです。昼間はかなりハードなバレーボールや陸上競技をやる。そうしますと、ほとんどが露出した土でしたけど、たまに芝があつたりしますから、その上で柔軟体操を色々やっていましたけど、起きようとした時に失神をしてしまう。何度かそういうことなどがあつて。これはもちろん栄養不足だったんだけれども、とにかく非常にハードな生き方をやってきたなとい

う、そういう経験がありました。

当時、生活費として寮費がB円でいわゆる軍票なんです。B円で五〇〇円でした。これはかなりの額で、ちょうど私の姉が一緒の高校に入っていました。二人で一〇〇〇円です。これは一つ上の兄、四つ上の兄がいきましたけれども、彼が非常に働き者だったために二人も高校に出してくれたんだ。そんな思いで、兄貴には頭が上がらないんですが。そんなこんなで設立当初からかなり知られた学校だったんですね。これは陸上競技その他でも自慢話をうんと先輩たちから聞かされましたが、僕らがちょうど一二期になつてもですね、インターハイで僕らバレーボール、チャンピオンになつたんです。女子テニスも優勝しまして、バスケットボールが女子二番ということ、駅伝が優勝なんです。そんなことなどがあつて、この小さな学校でこれだけみんな全国派遣できないということ僕らは諦めさせましてね。あの時のだから照屋という校長、につき校長ということバレー部員などはね。ほかは行っているんですよ。テニスなど、駅伝やね、行つたんですが。

それから学業。僕らの一期先輩たち、一期は、おそらく琉大合格率トップと言っていました。僕らの同級生でもかなり琉大にも入りましたし、そういう意味では、いわゆる運動だけじゃなくて、学業、勉学の面でもかなり上位の高等学校で学んだという。これはね、教員組織が私は影響があつたと思いますよ。優秀な教員が集まっています。

一部不良教員もいました。琉大をちよつと休学をして、こういう先生方も二、三名いました。高校の先輩なんだけれども、料亭通いをするような不埒な教員も中にいましたね。僕なんか生徒会をやっていましたので、ストライキの話も実はやつたんです。けれども、またすごい尊敬すべき先生方も、校長、教頭以下ね、生徒会担当、あるいはクラス担当とかいたものから、ストライキまでは発展しませんでした。農業高校じゃないけどよく農業もさせられました。その教える側の先生が一度も裸足になつたことがなく

て、いつもポマードをやつて、ピカピカの革靴を履いてということがありましたから、この先生の言うことは聞きませんでした。列をつくつて前ならえと言つたつて、うまくこういうジグザグつくるんですよ。S字型つくつたりね。ただ、明らかにみ出しはせんわけですよ。誰かが少し歪んでるわけですよ。そんなからかい方もしよつちゆうやりましたけど。しかし、全体としてはいい教員組織であつたために、色々運動、学業の面でもいい成績が上げられたんじゃないのかなと思います。

あとまたね、私個人のことを少し話しますと、ちようど三年に上がつた直後に父親がちよつと病に倒れて、頼りの兄も交通事故に遭つた。この不幸が重なつて、結局もう大学は諦めざるを得ないと姉が中部の看護学校に進学をしておつたんです。姉を諦めさせるかと色々あつたようですが、これはもう僕があつさり、おそらくこのところは決断をしました。今、東村の有銘に実家があるんですが、これ戦後四八年ごろ建てられた家、もう七〇年近くになります。最近、今年の六月ごろまで本土の機織りの女性が住んでいました。人間が住まんと家が弱るといふ話もあつたもんです。終戦直後の家ですけれども、木自体は非常に太い立派な家。規模自体は一五坪ぐらいですかね。当時としてはいい家でした。これちようどその家をね、親戚のおじさんから買って。金を稼がなきゃならないという、そういうこと等々色々重なりましたので、これはもう諦めて。

ちようど、五五、六年、いわゆる島ぐるみの中部、あるいは伊江島、土地闘争があつただけけれども、さつきも情報の話出ましたけれども、僕ら生徒会の役員したけれども、その話を先生方からも直接聞くということはありませんでした。これは、ですから非常に残念な僕らの経験なんです。あの当時何かやれば、その元氣はあつたのにという思いはあるんですよ。伊江島もやんばるのそれですしね。そういう、ただ体験としてはそういうことは伝わってこなかったという、そんなことです。

それから、ある意味では非常にいい思い出のそれは、三年の直前

に沖縄教職員会主催で名護高校でいわゆる日本で一番偉い矢内原忠雄という東大総長の講演があるという。要するに、その時は教研集会と、教育研究会の講師を地方にまで講演をやつたわけですけども。この教研のことを犬が狂つた狂犬と、僕らはそれで揶揄したりして、でも顧問の先生に、クラス担任でもありましたので、行って。講堂も体育館もないような中で、グラウンドに式台、それで矢内原先生はお話をされましたけれども、中身ははつきり覚えていません。ただ、非常に優しい口調で激励をされたという気持ちが強いですね。子供心に非常に励まされたという、こういう講演会に、これはある意味で戦後初めてですね、自らの経験として持っている。これまではそういうことはありません。後々、私、矢内原忠雄講演集という本を買うことになつたんですね。

あと高校の思い出の一つの締めとしては、僕、五七年三月から卒業して以来ずっとね、一昨年まで同期、一二期の同期会長をしておつたんですよ。一昨年、やつと後任を見つけてまして、高教組の副委員長経験者でもある那覇市議の、今度トップ当選をした平良識子の父親の平良昭男君というのがおりますが、彼をすかしまして、「お前は平良識子の父親で、同期会長をしておつたら悪いことはないから、僕らがまたうまく利用するから引き受ける」と言つたら、「わかつた」ということになって。だから五〇数年、そんなことなどもあつて、だから少しほつとした面もあるんですよ。

## ■「教員になるまで（きつかけ、免許取得方法など）」

### ○石川元平

次の教員になるまでですが、高校卒業して、私がそういう決断もしたものですから、辺土名地区の教育長、私の恩師の上原亀吉とい



う校長に声をかけられまして、ふるさとで教員になって頑張れという。渡りに船のようなことで、ありがたくそれを引き受けました。

僕が学校の元校長から声をかけられ引き受けたというのは、私のある意味の友人なんですよ、恩師でもありね。何の友人かと言ったら、タウチーというのがいましてな。闘鶏です。闘鶏タウチーという。あの上原校長もタウチーを持っていて、私も果敢なタウチーを持っていて、これをね、学校でケンカさせるわけですよ。一定、勝負決着つくまでじゃなくて、「はい、今日はここまで」と言つて、大体5分ぐらいケンカさせましてね。この上原校長がよそへ転出していつて代わりの校長が来た時、それがちよつとわさになつて、最近「雌鶏までケンカさせる子供がいるらしい」といつて、朝礼でそんなこと言つて、間接的に僕を叱るんですよ。いや、これは前の校長の置き土産でね、前はやっただけど今はやっつてないよということでしたけれども。そういう間柄でもあったもんだから、僕はもうわかりましたということ、じゃあ頑張りましたよという、そんな話になつて。

まずふるさとの有銘の学校で四年生を担当することになつて、もう地域ではみんな知り合いの子供たちですから、お兄ちゃんみたいな。だから、何をどう教えたのかということもわからんような状況の中で、あつという間に一カ年を過ごしたような状況ですね。

当時、前に話しましたように、我々がなぜすぐ高校卒業して教員になれたのかといつたら、圧倒的に約三分の一の戦前の教師が亡くなつて、教員の卵の師範学校の学徒たちも半数以上亡くなったことが影を落として、文教学校というのも設立をされたり、あるいは教員、短期の教員養成所も設けられたりしましたけれども、それでも足らなかつたんですね。足らずに、ストレートに僕らを迎え入れる状況あつたりもしたもんですから。

## ■「高校生時代」「教員になるまで（きつかけ、免

### 許取得方法など」の質問・応答

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございました。そうしましたら、また質問をさせていただきます。それにお答えをいただいで今日は締めるという形にしたいと思います。

まず簡単な確認からですけれども、辺土名高校の寮生が一〇〇名ぐらいということでしたが、それは三年年で合わせてですか。

#### ○石川元平

そうです。一年から三年まで。もちろん男女。別々の、二つの棟がありましてね、茅葺きの。そこに約一〇〇名が。多少はちよつと人数の変化はありますが、およそ一〇〇名。

#### ○櫻澤 誠

じゃあ、生徒全体でいうと寮生はどれぐらいの割合で。

#### ○石川元平

約五分の一ですね。約五〇〇名でした。校歌の中でも五〇〇の健児というふうに歌ってましたので。

#### ○櫻澤 誠

となると、ほかの生徒というのは家から通える状況にあるわけですね。三つの村からといつても。

#### ○石川元平

はい。西海岸はもうバスももう開通しています。それから自転車通学もかなりありました。かなりの遠距離、国頭の謝敷というところの距離です。辺土名よりさらに二、三キロ、向こうからも通っているのもたくさんいましたのでね。もちろん、また南側の津波。あれは同じ大宜味村であります、それでも塩屋湾も当時は橋がありませんのでね、塩屋湾を回つてといつたら、あれはかなりの距離なんですね。そこも通学をしておりましたので。

#### ○櫻澤 誠



代用教員をされていた時期というのは、ひとまず仮免許という形ですか。

○石川元平

いや、仮免許もまだ。ですから、そのまま残ってやれば仮免許はとれたんです。取ることを諦めて僕は那覇にもう飛び出していった。当時は三五単位が大体めどなんです。後で認定するにはチェックが必要だったと思いますけど、およそ三五単位満たせば仮免許に達しているというふうに理解をしておりましたから。

○櫻澤 誠

その前の、臨時免許みたいな形ですか。

○石川元平

あのね、代用教員というのは俗称であって、助教諭という、たしか辞令にはそうなっていたと思います。

○櫻澤 誠

何かしら免許が出されている状態ではないわけですね。もうその助教諭としての辞令が。

○石川元平

こういう辞令もらいましたよ。ほとんどはね、二級免許を持っていたと思うんですね。二級免許をもらって、それからまた大学単位、そういうふうなものを積み重ねていって一級免許を持つとかね。あるいは中学に勤めていたのが、高校の免許にまた挑戦をするとかというふうな、こういうことは確かにありましたね。

○櫻澤 誠

もう一つだけ、上原亀吉先生という、当時の教育長に声をかけていただいて、渡りに船という言い方をおっしゃっていましたけれども、それまでの間にその教師になりたいのであるとか、そういうことをそれまでに思っていたとかいうことはあまりなかったんですか。

○石川元平

二年、うちの親父が倒れて、兄貴がそうなるまでは、まずはそういうことは思っていないで、まずやっぱりちゃんとこの友達と一緒に、

みんなが目指す方向で。そういう意味では、かなり進学校でもあったんですよ、当時ね。僕らの中で一個上は那覇、首里じゃなくて、辺土名高校が一番らしいよという話を聞きましたので。

○櫻澤 誠

大体同級生の中で何割ぐらいの人が大学、琉大を含めて進学を。

○石川元平

当時ね、一五〇名ぐらい入るには入りましたけれども、卒業する三カ年経過の中で、ほとんど那覇あたりに出たのがおそらく三〇名、四〇名ぐらいいたんじゃないかと思えますね。卒業する頃にはかなり減って、それでも二〇名前後が大学に行きました。当時としてはかなり多かったと思います。

○櫻澤 誠

そうしましたら、予定よりも大分時間を超過してしまいましたけれども、本日はこれで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

## 第2回 インタビュー

---

日 時	2013年11月8日（土） 14:00～20:30
場 所	沖縄国際大学13号館1階研究所会議室
話し手	石川元平
聞き手	佐藤学 黒柳保則 野添文彬 櫻澤誠

## ■「勤務した学校の状況」「青年時代の地域との

### かかわり（青年団など、土地闘争時のこと）」

○櫻澤 誠

前回は教員になられるまでをお話ししていただきました。今日はその次の「勤務した学校の状況」のところからお願ひできればと思います。

○石川元平

それじゃあ、勤務した学校の状況、次の青年時代の地域とのかわり、これは全く一緒になりますので絡めて。

まず最初に私が勤務した学校では、五七年四月から五八年三月三十一日までの一カ年でございました。有銘小学校というのは、沖繩県下には小学校と中学校の併置校ですけれども、読み方としては小・中学校なんて言うんですね。本土の人にはちよつと耳慣れない言葉で、「焼酎？」お酒をつくるなんていうことと絡めてよくからかわれたりしましたが、そういう小・中学校の中の小学校へ勤めまして。郷里の学校でしたので、そこで担任をしたのは四年生一クラスでしたけれども、ほとんどが知り合い、親戚の子供たちですね。兄さん気分で、特に教師というふうな意識はほとんどなかったんじゃないのかという、今考えてもそんな気持ちでおります。

その時の校長は国頭村出身の、私の辺土名高校時代の、そして寮生、同じ寮に住んでいたクラスメートのお父さんでして、古堅宗徳というんですけれども、そのもとで、その学校の教員も殆んどがその、僕は部落と言いましたけれども、有銘の出身。二、三名がいわゆる名護あたりのやんばるの出身という。こういう家庭的な雰囲気の中の学校の状況でした。

村の出身ということもありまして、僕はその年に青年団の会長をやったんです。一カ年はですね。この青年団はどういうことをやっ

たかと言いますと、主なのは村の陸上競技大会の参加と、それから旧盆のエイサーです。ほかに村行事などには色々協力をしてきたという記憶がありますが。

ちょうど私が有銘にいる時に、東村といひましても七里半あるんですね、南の有銘から高江までですね。六カ字ありますけれども、その村の陸上競技大会、ちょうど有銘の学校であったんです、幸いに。私は元ハイジャンプ、バレーボールとかそれをやってきましたので、高跳びに出て一メートル七一を跳んで優勝したんですね。その時までこれも教員ですけれども、有銘から浦添市に行っていた私の従兄弟が一メートル六八で記録を持っていました。私が一年でこれを破って。身長は僕一メートル七二なんです。大体、その身長程度はいつも跳べましたので。それから当時はやんばるはまだ栄養状況もあまりよくない時代ですから、特に選手に選ばれたらまかないと言ひましてね、色々とおいしいのを食べさせてくれるんです、練習の後に。こんなことがあったり。これには失敗談もありますけれども、ヤギは絶対だめです。一番食べたいおいしいものなんでしょう、一度は失敗をしたことがあるんですよ。これは塩屋の最初の年かな、あまりにも栄養が効きすぎまして、二、三日はドライバーとなるんです。ですから、とてもハイジャンプなんかでバネを要求するものにはだめですね。そんな苦い経験なども有銘でもやりました。

それから、一年で有銘を終えまして、次の五八年四月から五九年三月まで、これも塩屋小・中学校ですが、塩屋の小学校の四年生、これも一クラスでしたが、担当することになりました。辺土名高校が大宜味村にあります、いわゆる大宜味村にある北部三村の一番我々がよく接した学校でもありましたので、そこでも多くの学校の教員自体がほとんど知り合い。校長は宮城久勝といひて非常にお堅い人。バンジウガネといひて大工さんなどが使う鉄の蝶番といひのかな。要するに角が角ありすぎまして、人間が丸っこくないわけですよ、非常にお堅い、そういう人でしたけれども、しかし僕は非常

に可愛がられました、どういうわけか。何でも「ハイハイ」聞いたつもりかなど。

そういうことで四年生を担当したけれども、中学生のバレー部も面倒を見て、とにかく若い男教員が少ないものですから、色々走り使いをたくさんやっていたなというふうな感じで。

塩屋は有名な沖縄八景下に入る風光明媚な所ですけれども、当時は大橋はかかってなくて。ずっと入り江の奥深くまで回っていつて、すぐ見える所なんだが、そこをバスで行っても約半時間ぐらいかかるぐらいのそういう内海でありましたけれども、塩屋のちよつと尖がった所に学校がちよつとあって、目と鼻の先、約二〇〇メートルぐらいの所に宮城島という離れ島が。今は橋が架かっていますけれども、僕などは、僕などは、いわゆる「アギツチュ」と言いまして、僕らは首里士族なんですよ。だから海、全く縁がなかったですね。目の前に海があつても。ところが大宜味の子供たちは、小さい時から泳ぎが上手なんです。ですから宮城島まで子供たちは泳いで行つて渡っていくんです。僕はこれできなかつたですね。これだけはもう情けない思いもしましたけれども。

その学校には戦前の二階建ての校舎が一棟だけ残っていました。僕はその残っている校舎の二階で四年生を担当することになりました。ここでも、いわゆる子供たちの教育の面からすると、いい教育、いい教師であつたかなということよりも、子供たちと多くは遊んで過ごしたんじゃないのかな。子供たちからは人気がありました。多く遊んであまり叱りもしなかつたんですよ。これが中学へ行くとちよつと違うんですが、そういう小学校。

ここでも塩屋の青年会に入りましてね、大宜味村の陸上競技大会では、僕はハイジャンプと砲丸投げ、あるいはバレーボールをやっていましたので、体重は六二、三キロなんです、一六ポンドを一一メートルぐらい投げたんですよ。これには皆びっくりしました。大宜味村の記録を塗り替えて、これもかなりの期間、私の記録が残つたようです、ということなどもあつて陸上競技に参加したり。

それから国頭郡と言いますと、金武、恩納から北部一〇カ村ぐらい、離島を含めて、バレー大会が辺土名小学校、それから国頭中学でありまして、大宜味村の統一チームをつくりましてね。僕は塩屋におりましたけれども、そこで私はアタッカーとして活躍した憶えで。こんなことをやっていたから、皆からよく覚えられたんですよ。高校時代も相当暴れたという経験などもありまして、そういう、これは青年会活動ではそんな思い出ですが。

学校で宿直もやるんですよ、よく。独身ものでしたから、当番を決めるんですが、一番私が多く学校の宿直もしました。天気の良い夏、そういう時は廊下テーブルを並べて、そこで寝ていて、月の光でね。宿直室じゃなくて廊下に出て過ごすこともありましたが、それでも、そうしたら村の青年たちが酒瓶を引つ提げて来たりもしたんですよ。僕は酒を飲んでの付き合いはしませんでした。ただ、来て色々何やかんや色々な話をしてという。学校と集落との距離は全くありませんので、こういう感じで、ある意味で地域とは非常に濃密な関係もあつたなという感じの塩屋小学校時代です。

翌年、中学校へ。五九年四月から六〇年三月までですが、この時はかなり色々な強烈な思い出がいっぱいあります。また中学一年生のクラス担任でありまして、中学一、二年の国語と体育を私に担当しなさいということ、これを持ちました。この一年生のクラスの校舎はまだトタンです。雨などの時は本当にやかましい。生徒たちはたしか一八人ぐらい、少人数でした。この子たちは、いわゆる四五年生まれなんです。私と歳の差七歳で、防空壕で生まれたとか、そういう子たちでね。すごく馬が合います、よくついてくれたなという。中学生でも一緒に遊んだという憶えがありますが、ここからはある意味でかなり自分の持てる範囲の技量を發揮して教育をしてきたなという思いで。

このトタン屋根の教室のちよつと黒板の後ろに、クラス目標ですよ。あちこちの教室でみんなやっていますけれど、私は「自分の目で見、自分の頭で考え、自分の手で実行しよう」というスローガ



ンのものを掲げましてね、これは後に何十年かたって、この子たちが還暦の祝いだとか、何回か僕は呼ばれますけれども、この話を懐かしそうに覚えていてくれて、これは私が編み出したそれは、高校時代の生徒会活動だとか、それから寮生活時代の寮長等をやった、ああいう組織活動、自主的な組織活動などがかなり僕は役立ったと見ているんですね。後の子供たちの評価を聞きましても、そんな思いでおりますが。

ある時M君という、この一八名のクラスの中では、今で言えばちよつと皆に中々ついていけないという子が一人いましたけれども、ある意味、この子が非常に私を慕いましたね。このM君は将来、卒業してもちゃんと仕事に就いているかなという気にはなりませんでしたけれども、本土でもう何名かの従業員も抱えて頑張っているんだと。このM君が帰ってくるついでに結婚の披露もやりたいという、そんなことがあって、私と数学の先生、数多い恩師の中でも二人だけ呼ばれてですね、この披露宴にも行きました。そして修学旅行気分でやんばる一周を改めてやりたいと子供たちが言いましたね。車を借りたりしまして、辺戸岬から北部三村を周りました。その中学校にいた時代もそんなことをよくやっていたと思うので、子供たちを引つ張ってあちこちに行きましたので。この一八名の中で二人は学校の教員になります。女の子ですけれども。この子たちから褒めというか、先生の教え子でよかったというふうな感謝の言葉をいっていて恐縮しきりだったんですが、そういう非常に中学に勤めた時は思い出も大きかったです。

ただ、五九年というのは沖縄で大変な自然災害の年でもありましてね。台風シャーロットというのが、あの時、大雨で山があらちちらで崩落が起こったんですよ。そして私の友人の玉城君というのが大宜味村田嘉里にいましたけれども、前にその家に遊びに行ったりもしましたが、木造の二階建てのお家というのはやんばるでは少なかつたんですが、非常に丈夫な二階建ての家が埋まっていますね、たまたまこの親父は移民課長をして那覇に出て、妹は琉大に

行って二人だけ無事。あとはおじい、おばあからみんな亡くなりましてね、そのうちの一人が玉城君という同級生で、これが元気であれば高校生の頃から「自分は将来大宜味村の村長になる」という夢を持っていた男ですが。そういうのがあらちちらであって、私の郷里の出身の有銘でも犠牲者が出ました。現在まで、戦後ああいう大きな台風による災害は沖縄ではないぐらいの。ですから名称も覚えていて、シャーロット台風です。

これがちよつと台風があつて、沖縄教職員会というのは一年おきに陸上競技と球技、球技といってもバレーボールとバスケットとテニスですけれども、これを交互に開催して。私の所属している所は国頭三村の辺土名地区という所でした。一二地区対抗の陸上競技大会がある年だったんですね。開催の場所がちよつと北部名護ということもあって、名護では台風の影響は何もなかったですが、向こうに行くまでの源河までの間が寸断されているんですよ、山がね。どうして参加したかという、船をチャーターして源河まで行きましてね、源河からは車で行きましたけど。教職員会の中に体育部というものまで置かれていて、これは非専従の校長が。あの時の教職員会は大体部長クラス、校長、教頭、とりわけ校長が多かったですね。校長が体育部長で教職員会主催。僕はあの時三種目出たんですよ。高跳びと砲丸投げと四〇〇メートルリレーと。三回表彰台に立ったという、あの時は最高に自分が元気な時代。それで沖縄相撲も強かったですよ。六二、三キロ、僕よりずっと大きなものを僕が足を引つ掛けて倒したりやりましたのでね。国民体育大会の中に教員種目になったんです。これで一生懸命になったんですよ。ところが、僕は高跳びで二番にはなりませんでしたけれども、飛び方が違う。背面跳びはその後ですけれども、ベリーロールが流行っていました。金城幸明というのが、国頭の出身なんだけれども、これがどこからか出て、私などは体全体を持ち上げる正面跳びですからね、七五ぐらいまででした。

もう一つ、塩屋は本当に風光明媚な所で、そこはあれだけの内海

ですからカキ養殖がされていたんです。台風に遭ってカキが壊滅したんですね。その前まで私は下宿先で何度もそのカキの酢の物だとか、カキフライだとかってご馳走になりましたね。カキというのは塩屋に行つて初めて、こんなのがあるのかとびっくりした。ところがシャロット台風でこれもみんな潰されたりという、そういうことなどもありましたし。

それから学校のすぐ裏にですね、大橋を通つてバスからもすぐ分かりますが、丘があつて大きな松が生えています。これは向こうの言葉で「ハーミンジョー」という。これはちよつとどういうふうに訳したらいいか分かりませんが、向こうはカーミ、つぼですね。つぼのことを首里、那覇ではカーミと言いますが、向こうはハーミと言うんですね。だからハーミンジョー。ジョーというのは普通、門という意味ですから、カーミのジョー入口という。とにかく部落の中にこんもりした丘がある。その丘に現在は琉歌の石碑が立っているんです。これは塩を炊いた場所、昔ですね。沖縄県下あちこちありますが、この歌碑の中に、これは琉歌ですが「ユイン、アカチチン、ナリシウムカジヌ、タタヌヒヤネサミ、スヤヌチムリ」宵も暁も、煙が立たない日はない。慣れ親しんできたこの煙ですね、これが絶えることはない、というふうな、こういう三・八・六、琉歌の碑が立っていて。私が下宿している所で。現在はこの碑は機械彫りですね。あの時は石工がいたんです。那覇の松尾に住んでおられた山城さんというおじいさんが石ノミを持って、何か月かかつたかな。食事は私と一緒にだつたんですね。色々な話を聞きながら。

いよいよこの学校を三年でそこを去るといふ時に、非常に激励された言葉が「君ならどこへ行つても大丈夫だ」という。これは辺土名高校の先輩の同僚からそんな激励を受けたこともありがたかつたし、それからこの一八名の教え子の中の女の子のお母さんから琉歌を贈られたんですね。子供がノートに書いて持ってきたんです。これはどういふ琉歌かと言いますと、「ワカリテイヤイチュイ、又ニナサキカキガ」別れてはいくんだけれども、何に情けをかけましょ

うか。「ワカリテイヤイチュイ、又ニナサキカキガ、ウタニウミカキテイ、クリドウナサキ」上句の八八はですね、歌に思いをかけて、これこそが情けなんだという、こういう「ワカリテイヤイチュイ、又ニ」又ニというのは何にといい意味ですね。「又ニナサキカキガ、ウタニウミカキテイ」歌に思いをかけて、これこそが情けなんだという、そういう、こういうことなども実に中学一年生を教えた、その学校で最後のお別れをする時にあつたりしまして、やはりこういうことが後々、今でもぱつと言えるんですね。自分としては非常に心に刻まれたものがあつたなという感じで。ですから、いわゆる先ほどの青年時代の地域との関わり含めて、こういうことをやってきたなど。

学校の特に若い教員はですね、青年会員なんです、ほとんどが。これが非常に大きかったと思いますね。これで有名なのは中頭青年団です。これは例えば今の基地問題なんかでもですね、山内徳信氏を参議院議員に送る時も中頭青年団がまず決起したんですよ、実は。その後色々社民党とかなんとか広がって行つたんです。今はもう何かにつけて中頭青年団。その中心人物は中根章、あの県議会議員もやつた社民党の。で、教職員組合で私が委員長になつた時に中頭支部の委員長であつた有銘政夫。反戦地主でもありますし公用地違憲共闘の議長も長くやりましたが、そのグループはまだ健在なんですよ。今でも何かあつたら、例えば今年の四・二八、辺戸岬に行こうじゃないか。大型バスを貸し切りして行きましたよ、私もね。こういうことなどで、今の基地問題への対応含めて、当時の教職員会そのものがオール学校にいるすべての教員だけじゃなくして職員で組織してましたけれども、その組織は地域の青年団とまた結びついてたということなどが、これはやはりすごい裾野のある組織になつてたのかなというふうなことで。

## ■「勤務した学校の状況」「青年時代の地域とのか

## かわり（青年団など、土地闘争時のこと）の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。もしましたら、また前回と同じように、まず私のほうから質問させていただいて、その後、他の先生方からご質問いただければと思います。

少し基本的なところの確認をさせていただきたいと思うんですけども、有銘小学校に最初に赴任をされた時の話は前回も伺っていると、思うんですけども、その次の塩屋小学校、小・中学校に移られた経緯というのはどういふようなことなんでしょうか。

### ○石川元平

これもね、いわゆる前回にも話したと思いますが、教員不足の時代ですから、自分が残りたいとか何とか一切それは言えませんでした。ですから、本当に機械的に一番動かしやすい存在の身分でしたのでね、今度はこっちのほうが必要だということ。配慮は受けたつもりですよ、隣の東村から大宜味村ですからね。その小学校に行ってくれという、嫌とは僕は全然言いませんでした。「わかりました」という、そんな格好でした。

### ○櫻澤 誠

正規の免許を持っていて教諭をやっているよりも、むしろ動きやすいというか、そういういろんな所へ移動するような。

### ○石川元平

いや、これはね、今の学校の教員は非常にうるさいですよ。当時は、もう子供たちに割り当てられた授業をやれば、あとはどこに行こうか。僕はとにかく山に連れていったり、あるいは塩屋ですと大保川と一緒に行ってエビをとったり。焼きガマも始まっていますからね。江洲という大保からかなり、二キロぐらい山の上ですけれど

ども、そこへ行ったり、またちようど塩屋湾を望む押川という、いわゆるシークワサーのミカンどころがあるんですが、その山へ行ったりで、こんなことで子供たちから人気があったかなと思うぐらい。子供らと一番多く遊んだと思います。若くない先生方、特に女の先生方がとてもそんなこと真似できませんのね。そのことで挽回したんじゃないでしょうか。専門的な教えができない部分は。学校嫌いな子供は一人もいませんでしたよ、ですから。ある意味では何の問題もありませんでした。家庭訪問ももちろんみんなやりまされども、そこでも非常に和やかに、みんなよく頑張っていますよというふうな、そんな感じでおりましたね。

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。青年団の活動をされる時に、最初は有銘で所属をされていて、その後、塩屋のほうでも青年団をされたとおっしゃっていますけれども、要するに塩屋小学校にお勤めの時は、引越してその近くに住まわれたと、そういうことですか。

### ○石川元平

学校のすぐ近くです。学校の近くで一軒家を借りまして、寝泊りはそこで。そしてすぐ隣のそこで食事はとってというふうな、そんな状況でした。

### ○櫻澤 誠

青年団活動のことですけれども、地区の青年団の会長をされていたんですよね？

### ○石川元平

これは有銘で。

### ○櫻澤 誠

有銘で。

### ○石川元平

塩屋では会長ではなくてね、活動に参加をしたという。

### ○櫻澤 誠

その青年団の活動の際には有銘の会長で、そのさらに上の組織と



して、東村の青年団であつたりとかそういう所とは。

#### ○石川元平

それもあるし、あとは郡ですね。国頭郡。ちよつと言ひ残しましたが、現在でも続いている沖縄県青年団協議会の全島一周駅伝というのがあるんです。これはずっと昔からありまして、これも例えば国頭郡のそれが対抗でありましたよね。そこにも参加しました。各市町村から選手団をえりすぐって、そこで参加をして郡の駅伝大会に。これも一応盛んでしたが、これは現在も続いています。これはいつの頃からですか、沖縄陸連の公認のあれになっていると思ひます。

#### ○櫻澤 誠

それから青年団にかかわって、少し細かいことを一つお伺いしますけれども、有銘や塩屋の青年団の団員の年齢の制限というのはどういう形になっていましたか。

#### ○石川元平

年齢制限はほとんど覚えていませんね。

#### ○櫻澤 誠

ほかの場所ですと大体、例えば高校に行っていないければ中学校を卒業してからすぐ団員になるとか、高校に行っていたら高校の時は入らずに卒業してからとか、上も三〇歳までとか三五歳までとか地域によって違うみたいですね。

#### ○石川元平

特に私がやった東や大宜味ではそういう制限のあれはなかったと思ひます。例えば今でも、今は宜野湾に住んでいます、青年エイサーというのが各集落ごとにあつて、私の愛知地区でも高校生が参加をします。愛知地区青年団エイサーののぼりがあるんですが、そのもとに、特に女の子が多いですね。手踊りをするのが若い一般のあれでは少くないんでしょうか、声をかけやすいということもあるのかなと思ひますが、高校生の女の子たちが多いですよ。

#### ○櫻澤 誠

それから、青年団の特に国頭での活動などで、陸上やエイサーなどの話があつたわけですが、例えは同時期、先ほど出てきたように中頭郡などであれば、やはり政治的な活動というか、色々な運動にも関わつたりという特徴があつたわけですが、国頭のほうではあまりそういうようなことというのは行われていなかったんでしょうか。

#### ○石川元平

そうですね、国頭で唯一、米軍の関連施設と言へば奥間にヴォイス・オブ・アメリカですか。VOAが、そのアンテナ群が田んぼの中含めて何十本も立っていてということがありましたけれども、直接的な被害がないということのせいでしょうか、ほとんど向こうで米軍基地反対の取り組み等々についてのあれは、組織的なものとしてはなかったですね。

#### ○櫻澤 誠

もう少し私のほうで、今度は学校のことについてお伺いしたいと思ひますけれども、三年間現場にいらつしやつた時期の教職員会としての活動というのは、もちろん校長というのがおそらく。

#### ○石川元平

分会長が割と多かつたですね。

#### ○櫻澤 誠

ですよ。そういう形でおそらく職員会議があつて、その後、教職員会の会議になつてという繋がりもありながらの時期だと思ひますけれども、そういう中で実際に教員をされていた時期も職員会としての活動の様子というか、どういふふうな経験をされたのかというのがもしあれば伺いたいと思ひますが。

#### ○石川元平

これもさつき話した体育関係のあれで、分会会議というのをやつたかなと、分会長は誰だつたかなと。とにかく何をやるにも校長が大体中心で皆動いてはいましたのでね。大宜味塩屋の小学校、中学校へ行つても非常によそからはバンジョウガニ、難しい校長と言わ



れていましたけれども、僕は望む以上のことを色々立ち回ったという事などもあって、非常に可愛がられましたよ。年のいった女の先生方がまた多かったものですからね。その分、かなり色々なことで体を動かすことは私がかかり引き受けてやったということなどもありました。

#### ○櫻澤 誠

最後に一つだけ。学校現場で中学校では国語の先生をされていたということもあるんですけど、後に色々批判もされる国語教育というのは日本語、方言を使わないようにということも含めて、そのあたりの教育というのは現場ではどういうふうなことをされていったか。

#### ○石川元平

よくね、中部で戦後も方言札、ある人に言わせれば、教職員会がその音頭を取ったんじゃないかというふうな、それがありませんけれども、私の経験からは全くそういうことはやりませんでした。全体として、学校現場で。私がかかわった現場では全く方言を禁止するんだとか、標準語を励行するんだとかということなどは全くなくて。特にこの件は僕は中部でよく聞くんです。標準語励行。これは宜野湾でも非常に盛んにやられたようです。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。

#### ○石川元平

やんばる、特に大宜味は戦前、翼賛村と言われたんですよね。大宜味村と南部の高嶺でしたかね、三つぐらいの村が指定されて、年寄りまで日本語が上手という。大宜味が革新村になったというのは、その反省だと思うんですよ、実は。だからよく福地（曠昭）氏自身が、翼賛村だったんだよという。そこで何が出てきたのかと言ったら、女傑の宮里悦婦連会長なんかも、彼女も学校現場の小学校の教員なんです。だから佐藤総理などにもずばずばと物を言ったという、本当に女傑だったんですが、私の高校時代の同期生のお母さん。

旦那は大宜味の宮里金次郎という村長でしたけれども。ですから大宜味は戦後非常に革新的な人物を多く輩出した。社大党初代委員長の平良辰雄氏や高原久男委員長とか、またある意味で変わり者のいわゆるブナガヤー、キジムナーにこだわった山城善光とかね、大宜味はとにかくたくさんの傑物がいるんですよ。ですから女性でもこの革新村になったというのは全く戦前の逆の方向でずっと現在でも頑張っていますから。戦前はしかし全くお上の言うとおおり、これを徹底したらしいんです。

#### ○櫻澤 誠

先ほどお話しいただいた学校教員として勤務されていた時期のこと、それから、それとかかわって青年団とのかかわりのことに関して、ご質問があればどうぞ。

#### ○佐藤 学

青年団の方達は地元の出身でもあるわけで、そういった意味で軋みたくないものはなかったでしょう。教員が地元の青年団に入るという部分で、何か地元の人たちとの間ではうまくいかないような例というのはあったでしょうか。

#### ○石川元平

当時は、この大幅な人事異動はないんですよ。学校でも。

#### ○佐藤 学

大体、じゃあ皆さん地元ということですね。

#### ○石川元平

ええ、ほとんど。おそらく八割、九割ぐらいは地元じゃないですか。しかし、これも今現在は全く逆なんです。広域人事で今疲弊の原因の一つはそれなんです。当時はですから、部落も小さく分けましたよね。どこの担当ということでみんな決めてたんです、職員会議です。ですから、学校で教える時も先生、地域に帰っても先生で通ったんですよ。現在はそうじゃないですよ。校長先生だった人も地域では分かりません。ただのおじいですよ。ところが、あの当時は地域に入って、学校を終えてからでも見えない指導がやれて

いたわけですよ。日常生活の中で。これが今との大きな違いだと思いますね。

#### ○佐藤 学

それと、大宜味村で戦前に青年会、青年団の率いる村政改革運動があったということがあって、それは例えば予算の説明会を開かせるとか、それが今に通じるような自治の改革を大宜味村で青年団がやったと。大宜味村から大阪等に繊維工場に行く人が結構多かったりして、それで、その人たちの影響なんじゃないかと読んだことがあるのですが、そういう伝統とか、さっきお話あったのが、大宜味村が標準語教育をやった反動で革新村になったというお話があったんですけど、村政改革運動の名残みたいなものは何か感じられましたか。

#### ○石川元平

これは、私は直接塩屋にいる時は感じませんが、ただ、国頭郡青年団協議会の会長をしているのが大宜味村のたしか根路銘に宮城伝雄というのがいますね、国頭郡の青年団の会長等をやっていますから、そういう、その宮城会長のいるあの時代には多分そんなこともあったんじゃないかと思えますね。具体的な中身はちよつと知らないんですよ。かなり知られた会長がいましたので。

### ■「教職員会専従になるまで」

#### ○櫻澤 誠

そうしましたら続けて、教職員会専従になるまでをよろしくお願います。

#### ○石川元平

私がですから三カ年やんばるの学校で勤めて、色々送り出されたということがありますが、最初に尋ねたのが那覇の今の教育会館なんだけれども、当時はですね、区画整理地域でして地番が美栄橋

と読んでいました。これは後で松尾にも変わるし、現在は久茂地なんでしょうけれども。僕の記憶ではC―一四番地と覚えていますが、ここに教育会館が実はありまして、二階に教職員会の事務所がありました。

会館建設は後でお話しする機会があるかと思いますが、一九五四年に建設をされて三階建ての一階は教職員会の事業部が文字通り事業をしております、そこは印刷所も経営していました。日の丸、それから竿頭、竿、三点セットを一括で購入して子供たちを通して家庭にとりふうな。それからもちろんん学校で使う、いわゆる教材、教具、その他をみんな一手に引き受けてですね、それは教職員会事業部ということで、その場所が会館の一階でした。その一角を借りてまた現在もありますけれども食堂、レストランがありました。

二階が事務所なんです、そこもいわゆる東西に分けてね、二階へ上がっていったら右側、東側に沖縄教職員会の事務所。左側に教職員共済会の事務所。いわゆる教職員共済会と言いますのは、八汐荘、那覇の松尾のですね。向こうへ行く前はみんな一緒なんです、あの建物の二階に。しかも会長が屋良。共済会の会長も屋良、そういうことでしたので、そこに両方合わせると約五〇名ぐらいおりましてね、教職員会だけでも三〇名近くおりましたので、今考えると本当にどこにあればだけのスペースがつくれたかなと思うぐらい。三階はホールになっていましてね、そこは慰霊ホールと呼んでいたんです。ホールの向かって一番奥のほうに慰霊室をしたらええんです。教育関係戦没者之霊位という、大きなこれはマキの木ですね。沖縄ではチャージと言いますが、これは白蟻も食えないんです。戦没者之霊位と書いて左右に、いわゆる建物の幅いっぱいですよ、慰霊室で、市町村別のいわゆる戦没、死没者の名前、名札が、これは位牌ですよ、お一人ずつの名前が書かれていますから。それでも終戦直後の調査だったようで、徹底しきれなかったんですね。これは少なくとも県民の四分の一は死んでいますから。だから万余です、本来はね。万余になるべきだけれども、実際、そこにいわゆ

る名札がかかっているそれは七六〇四柱。この会館をつくる大きな一つのこれが目玉になったわけですね。そういうこともあったものですから、このホールのことを慰霊ホールと。毎年一月の第一土曜日に教育関係者戦没者の慰霊祭、これは今も続いています。

ここが非常に重要だと思っただけですが、南部戦跡にはいわゆる石の碑がたくさん立っているんですね。最初は慰霊塔という形で話が進んだようです。ところが屋外に立てますと、日々に大事にすることができないんですね。ちょうどそこで沖繩的発想が出てきたんだそうです。沖繩の家は、家をつくる時は上座、イージャーと言いますけれども、そして下座の間に、真ん中に仏間というのがあるんです。仏壇のある部屋ね。沖繩の家は本来、玄関はありませんのですね。イージャー、仏間、シチャジャー（下座）、そして裏座というのがあって、台所がある。こういうのが大体沖繩の構造ですが、沖繩の家を建てて仏壇に匹敵するような、そういう感じで、入ったら真正面の奥のほうに慰霊室をという発想になったようです。そうすれば日々、弔うことができるし、反戦・平和の誓いもできる。それで尋ねて来る人に、そこに案内をしてというふうな、これが反戦・平和教育の誓いの場になっているんですよ。色々戦争責任だとか、そういうことで非常に不十分な点がたくさんあるんだけど、これは日々こういうやられたということでは、ほかではやれていないようなことを教職員集団は、私はやってきたと。僕自身、八カ年責任者としてそれをやってきましたのでね。また下つ端の初期の頃から、そういうお世話をずっとやって、また屋良会長の話等々をずっと聞いてきましたので、そういう建物自体がそういう構造になっていて、それが教育の殿堂とも言われたし、それから復帰闘争や主席の公選やもろもろの闘いのこれは拠点になったんです。

ですから、教育会館といわゆる琉球政府、米国民政府のあった所は、直線距離にしますとね、ちょうど元の琉球政府、これは第一庁舎と言っていました、第二庁舎は東南の方向に第二はありました。今の県庁が建っているあたりに実は琉球政府、四階建てだったんで

す。この一階の入口の壁には、この建物を琉球住民に謹呈するという銅版が貼られてあったんですよ。ところが、やはりこれはアメリカの支配の構造の象徴的なもので、一、二階が琉球政府、三、四階が米国民政府なんですよ。その屋上に星条旗が翻々と翻っているわけ。ですから、琉球政府の機構図と、それから米国民政府の機構図、その上に高等弁務官がいるわけですよ。高等弁務官、施政権者がね。そういう機構図の中で、その距離一〇〇メートル、直線距離。途中で阻む高層のものがありませんよ。ですから、米国民政府からこう見えるわけだ、教育会館が。好ましがらざる連中が住んでいる場所。だから、革命政府と揶揄されたんですよ、教育会館のことを。

だから教育会館を建てる場合も琉球銀行、五一%の株は米側が握っていますから、そのために教育会館建設資金の融資が受けられなかったんですよ。で、初めの融資をやったのが現在の海邦銀行ですよ。前の沖繩相互銀行、具志頭得助という。そんなことがあってですよ、道徳的とまでは言わないが義理を感じてね、革新的、革命的義理を感じて、今でも沖教組や学校生協、学校用品は日常取り引きのあるのは、労働金庫もあるけどね、海邦銀行ですよ。これは私は遺言のようにして、この恩義を忘れちゃいかんぞというふうなことですね、今でも取引はこういうふうにやっていて、しかしそのかわり具志頭得助頭取はディフェンダーファアという米国民政府の情報教育部長がいますね、ものすごく人間も悪かったそうですが、いわゆるものすごく教職員会に対して色々な弾圧をし、ちよっかいを出したり、これに呼ばれて海邦銀行の、今の相互銀行の頭取は油を搾られたという、そういうことなども実は、建物一つ建てるにもこういう占領下、アメリカの軍政下における大変な苦労があったという。長くなりましたが、僕が教職員会の専従の職になるために、これは運が本当によかったなと思うのは、今の久茂地、教育会館を訪ねて行きましたら、たまたま職員を採用するという話が進んでおりました。私はすぐ履歴書を提出したんですよ。ところがです。その履歴書の中に、やんばるから出てきて、現住所は読谷村宇都屋四一〇



番地、古堅宗善方と書いたんですよ。これは後でわかったんですけれども、実はこの読谷の古堅宗善という人は、屋良教職員会長の従兄弟に当たる人でしてね、数いる従兄弟たちの中でも特別に親しい間柄だったんです。だから、屋良会長からね、「君はどうして現住所はそこになつてゐるんだ」というふうなことをずばり聞かれました。そうしましたら、「付き合っている彼女が実はおりまして」というふうな、こういうことになつて。ただそれはそれで終わったんじゃないやなくて、六一年にですね、私はこの古堅宗善、つまり屋良朝苗からすると従兄弟姪になるんですね。この古堅宗善の三女、古堅吉子と結婚することになるんですね。その時の媒酌人、仲人が屋良先生ご夫妻ということがあつて。お母さんは次男が戦死をした後、三男、四男が外地へ兵隊で行つたり、色々心労が重なつて、戦後間もなく亡くなるんですね。ですから、一応相談をしたんですね。「屋良先生、結婚はどこでどうしましよるか」と言つたら、お母さんならばちゃんとしていいんじゃないのかということになりました。だから僕の結婚式は読谷の古堅のワイフのお母さんの仏前で屋良先生立ち合ひでね。こんなことなども実はありまして、こういう不思議な縁なんだけれども、ただそれだけではなくて、やはり僕の三カ年の現場経験、これも僕は評価してくれたと見ていますね。誰でも採用すればいいというあれではなくて。ただこれは僕の前の福地沖教組委員長やその他のほかの職員も、「違ふんじゃないの、あなたは屋良先生から引つ張られてそこになつたんでしょ」という。今まで大体そういうことでしか皆さんは納得していませんね。

事実はそういう経過で、私が採用されることになつて、教職員会のポジションは総務部付けというふうなことで、会長秘書というのは専任ではなかつたんですね。ですから会長秘書を兼ねるといふうなことで、このほうが後で随分忙しくなつたわけですが。ある意味で僕としては非常にいい経験をさせてもらったというふうな。専従になる経過は大体以上です。

## ■「教職員会専従になるまで」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら、また少し私のほうからお伺いしていきます。

まず、一九六〇年三月まで塩屋中学校で先生をされていて、その後、「送り出された」というふうなおつしやり方をされておりましたけれども、つまり、次の仕事を、言い方は悪いんですけども、自力で探さなければいけない、そういう状況になつたということですか。

### ○石川元平

そこがだから不思議です。ただ、教職員会のこととはよく知っていましたので、共済会の活動なども学校回りをずっとやってきておりましたから、まず尋ねる場所はという思いがありました。

### ○櫻澤 誠

その後も何か教育にかかわるような、教師にかかわるようなことをしたいという、そういうお気持ちがある。

### ○石川元平

これは後で述べようと思いますが、私はやはり結果としては、僕が那覇に出てくる決意をしたのは、琉大二部にも十分通つて、働きのながらいわゆる国語の教師の免許が取れるという。というのは三五単位の教職専門科目はほとんど履修しておりましたのでね、あとは働きのながらも十分それはやっていける。こんな計算で実は来たんです。ところがやってみると、こういう生易しい場所ではなかつた。夜に昼、昼に夜を繋ぐような場所で、家に帰れないような日もたびたびありましたのでね。一教師になるといふ以上の、沖縄全体の子供たち、そして教育のこと。いや、これだけでもないよと。沖縄全体の抱えている、かつて歴史で体験したことのないような、この難問題に立ち向かう屋良先生のもとでということに対しては、もうあ



る意味ですごく私の中での意識変革が起こって、当然働き甲斐を感じてというふうなことになるのでね、いわゆるきっぱり教師になるというあれはもうあきらめがつかましたね。

#### ○櫻澤 誠

それからですね、当時、教職員会、共済会合わせて五〇名ぐらいの方が働いていらっしやったということでしたけれども、そこで働いている方というのは大体皆さん現場を経験されている方なのか、そうではなくて最初から事務でという形も多かったのか。

#### ○石川元平

後でね、六〇年代の教職員会での日常活動などを話したいと思えますけれども、教職員会、あの二階の中に総務部というのがあり、それから政治経済部というのがあったし、これは政経部と略しましたけど。教育文化部、教文部となつて、事業部という、こういうふうな部がありましてね、その部長はこれは校長です。学校現場の校長、副部長が大体教頭クラス。若手のばりばりですね。その下で僕たちがいました。多いともう三段階ぐらいに分かれていました。

共済会にはいわゆる屋良会長のもとに専務、常務というのがいまして、部長たちもいましたけれども、専務、常務はやはり学校の校長ですね。校長たちがあつていて、部長クラスは教員の免許を持つていました。大半はそうじゃなかったと思います。銀行から引き抜いたりね。そんなことで国内では唯一のユニークな共済制度という、かなりまた実績のある、いわゆる経済的にですよ。金融的な面含めて、ほかの職域で真似できないぐらい非常に羨ましがられた。そこに入っていれば家を建てるにも、車を買ったり何をするにも困らないぐらい。会費もちろん出しますけれども、色々な融資や給付とか、そういうふうなものにも非常に恵まれていましたので、そういうことでは私自身も非常に幸いしましたね。そういうセクシオンがあつて。

ですから日常活動は、そういう状況の中で、あと特別な場としては、そういう事務局組織の中にはないけれども、別途体育部会とい

うのがあつて、これはいわゆる、これも現場の校長が部長をしていて、年に隔年ごとの陸上と球技のそれをやったりというふうな、こんなことでした。

#### ○櫻澤 誠

ちよつとそれるかもしれないんですけど、五〇年代ぐらいの職員録なんかを見てみると、教職員会のところで運転手とか、そういう形の肩書の方がいらっしやったりとかするんですけど。

#### ○石川元平

運転手はね、名前もはっきり思い出せる。永山君とかという運転手。これはプロの運転手ですね。屋良という教職員会長は、ある意味で沖繩で一番忙しいと言われている人でもありましたし、それから主席と同格、それ以上だという世間の評価を受けていましたから、それなりの。

といいましてもね、実は事務所には、外観はある意味で立派ですけど、冷房も何もないんですよ。しかも仕切つて、オープンでもなかったですからね、会長室は個室で。ごみは大嫌いな人だったのでね。舗装もされていないものだから、そのままだったらほりが立つんですね。ですから窓はいつも閉めて。いつでも外に出れるようにというふうなことで、夏、冬、長シャツです。半袖は着ませませんでした。それから上着、帽子ですね。夏はパナマ帽、冬はちよつと冬物の帽子。これはいつもそうです。暑いですよ。ガタガタする扇風機を回して。喜屋武事務局長以下、皆で相談の上、せめて会長だけでもクーラーを入れようという、そういうことで話を持っていた。したら一蹴された。だからこれも僕はたまに話をしますけれども、なぜ一蹴したのか。子供たちのことをそれほど考えていたんだという一つの証明なんです。一蹴した言葉に「お前たち、子供たちがどういう所で勉強しているのか知っているのか」と。やっぱ暑いあの校舎の状況。だから、そこで校舎問題などにも非常にエネルギー、一緒に取り組まなくちゃならないというあれ

がまた湧いてくるんですね。これがですから義務教育費獲得期成会。五三年度の闘いで戦災校舎のあれは行われましたが、次の大きなあれが六〇年代半ばの闘いになるわけですが、そういう直前の話なんです。クーラーを入れようとした時一喝された。二度とそのことは持ちませんと。暑かったと思いますよ、それでも。こういう格好でいましたし。

それから会館はちゃんと管理人と掃除婦がずっといて。今は警備でこうやっていますけれども、いつでも何かあったらと、管理人は常駐ですよ。掃除をやるおばさんがこのようにしていてというふうな。共済会にもそのような人たちがいて。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。あと、実際に履歴書を書いて職員採用を受けるという時の話として、屋良会長が住所を見て色々話をされたというふうなことがありますけれども、実際にその職員採用現場において複数で面接を受けたりとかそういう形だったんですか。それとも屋良さんとの一対一の面接。

#### ○石川元平

直接最初にすぐ屋良さんが面接してはいけません。総務部長の面接を受けて、その後と呼ばれたような記憶ですね。おそらく読谷の親父などからそういう連絡が、僕自身は分かりませんでしたよ。屋良朝苗とそんな関係にあるということは知っていませんでしたので。ところが皆は、「いや、知っていてこうやったんだろう」と。「やめるから、出てきたら、すぐ屋良先生にこうやられて、お前は採用されてよかったねー」なんて言う。福地曠昭が先頭になってそんなことをいつも、今でもそう言うんです。

#### ○櫻澤 誠

当時の総務部長というと、新垣孝善先生でしたか。

#### ○石川元平

新垣孝善。色々トラブルを起こした人で、後で少し選挙の時の話もやりますけどね。その頃はそれぞれ皆すごく有能、屋良先生から

しても優秀なそういう部下、職員に恵まれて、こんなことができたんだというふうな。うんと叱られましたけど、またそういうお褒めも受けたりしましたのでね。

#### ○櫻澤 誠

次の日常活動のほうでは、五〇年代のことでおそらく触れられないと思うので、ちょっと事前にお伺いしておきますけれども、六〇年四月、春に採用されたということで、六〇年というのはちょうど事務局長がかわる時期でもあるわけですよ。新里清篤さんが立法院選挙に出られて、かわりに文教局に行っていた喜屋武真栄さんが戻ってこられて事務局長になれる。その辺のかなり教職員会がばたばたとする時期だと思えますけれども、その頃について、何かご記憶のことがあれば、お伺いできればと思いますけれども。

#### ○石川元平

今、こういう説明をされると非常に大きく動いたと思いますが、新里清篤氏の家は会館のすぐ北側にありましたよね。三八坪のうちの赤瓦でこうやっていましたけれども。

喜屋武真栄氏は、事務局次長とたしか最初は政経部長兼ねたと思います。これは僕らの前の話ですよ。ところが、新里清篤の話は皆分からないんですよ、ほとんど。その一時期、戦災校舎運動の時は非常に大きな存在ですよ。だけれども、教職員会は屋良会長、喜屋武事務局長だったという、あまりにも強烈な六〇年代。喜屋武真栄はいわゆる復帰運動の一番重要な時にずっと、復帰協は会長として、教職員会は事務局長としてやったものですから、そういうことなどがあって。

そうですね、新里清篤という事務局長は、ある意味で戦災校舎復興運動の時には非常に活躍をしたという評価がされています。その面では。ただ、あれだけ屋良と組んでやりながら、いわゆる時の権力の側に行つて。やんばるの出身なんですね、大宜味の根路銘の出身で、僕は非常に可愛がられましたけれども。奥さんが戦前に有銘の学校の先生をしていたんです。三高女を出てね。そんなことなど

があつて奥さんも知っていますし、新里事務局長もよく知っていましたから、晩年まで。本人は晩年は杖をついての存在でしたけれども、一階の食堂に来て、僕はちよつと呼べたりしてね。下に行つたら、「石川君、この本をまとめた。これを読んでくれ」というふうなことで。対馬丸で妻子を亡くしまして、僕らが国民学校の時、後の奥さんだった人と再婚されて。ですから、昔の奥さんのことはよく分らないんですが、そういうことなども色々ありまして、あの変わり目のことについてはそんなに。ただ、結果としては、教職員のために事務局長までした人が、幹事長。あの時は自民党とは言っていないですよ。民主党、たしか。

#### ○櫻澤 誠

いや、当時は自民党です。

#### ○石川元平

ああ、自民党。この後に民主党になつたわけ。教公二法の時は自民党なんですよね。ということなどでしてね。

#### ○櫻澤 誠

そうなると、客観的に見ると六〇年に石川先生が教職員会に入られて、その後というのはもう一切影響力がなかったというか、新里清篤さんのことは完全に過去のことというか、あまり組織の中では。○石川元平

逆な意味で反発をし、結束を強めることになつたんじゃないでしょうかね。というのは六〇年、復帰協が結成される。そして、夏にはアイゼンハワーが来たんです。もちろん本土のほうでも安保のニュース、死者も出ましたし、それは伝わりましたけれども。とにかく六〇年、アイゼンハワーが来た。それだけでも大変な迎え撃つ請願行動が、いわゆる嘉手納の基地に降り立って、オープンカーに乗つてこう来て、特に現在の県庁前の十字路ですよ。そこで大変な請願デモに遭つて。だから、そういうふうなことでね、あと私の意識変革が出てきた直接のきっかけは、僕は国語の教員になる志を持つてきたけれども、いや、それ以上のもつと価値のある生き方が、

そういう場所にありついたらんだなというふうなことを、実感を感じたりじわりやるようになりますけれども。

それからね、教職員会は、ある意味ではオール学校職員と言いましたけれども、その中でさつき青年の話があるから申し上げます。校長部、そして青年部。青年部というのはですね、校長部以外の教頭以下、オール男子部です。だから、数も多いんですよ。婦人部というのはオール女性ですよ。ということだったものですから、いわゆるすべてこれらに関わっていくという。そういう中でも高校部というのがあつて、現在の高等学校障害児学校教職員組合、略してあれは高教組と言っています。あれは教職員会高校部だったんです。

小中の教員には身分法はないんです。教公二法つぶしましたからね。六七年の二月二四日につぶしましたから、復帰までの五年間、身分法はないんです。だから、政治行為も自由、ストライキも自由、やろうと思えば。勤務評定などのあれはない。本土では教育二法というのが既にあつたわけだけれども。しかし高等学校の場合は琉球政府立でしたから、琉球政府立公務員法というのがあつて、ここでは政治活動とか何とかと一定の制限条項は当然あつたわけですが。ですから現在の高教組と言われるのも、かつては教職員会高校部。今年亡くなつた宜保幸男さんは、その初代の高校部長だったんですね。

### ■「一九六〇年代の教職員会での日常活動」

#### ○櫻澤 誠

それでは続けて教職員会の日常活動についてお願いします。

#### ○石川元平

六〇年代の教職員会でのいわゆる日常活動、さつき大変な時期に入つたという話をしましたけれども、日常的には各部署があつて、そこで決められた教育文化部は教育研究について一生懸命やつ



たし、政経部は、ほかの県教組にはないです。これは政治的・経済的・社会的地位の向上を図るといのが教職員会結成の目的の中にちやんと入っていましたので、そういう部もあつて。総務部というのは、ある意味では「何でも屋」部でしたし、それから事業部というのはさつき申し上げた子供たちの教材教具、直接印刷所まで経営しておりましたから、学校で使う主要種類すべて含めてですね、こういうふうなことを。

そしてユニークなところでは、いわゆる商売人はアメリカに生まれるようなことは一切しないんです。教科書もそうだった。日の丸を取り扱うなんていうのも、もう全く。中で教科書を輸入するために、学校の教員で株式会社をつくって、大校長、初代の社長當銘由金。屋良先生の無二の親友ですけども、こういう流れでやってきて。日の丸一括三点セット購入などを事業部として。これは五二年から始まって、教職員会設立と同時にということなどもやってきました。

こういう中でも、さつき教育会館と琉球政府、米国民政府の位置関係のことをちよつと申し上げましたけれども、やはり常時、見張られているような感じで。いわゆる革命政府がすぐ眼下にあるわけですから。特に屋良、喜屋武のことなどに対しては、この諜報機関C I Cが常時出入りですよ。

ですからね、僕は今でも一般の皆さんに戦後史の話をする場合、施政権者、さつき琉球政府と米国民政府の機構図の話をやりましたけれども、このトップにいる高等弁務官の権限というもの、いわゆる全能の神と言われたんですね、別の言葉でね。立法府があつて、そこで全会一致で決めたようなこと、これを一蹴して廃案にすることができるわけですから。だから、一方では民主国家、自由と民主主義の国ということで、外国に対しては、本土からマスコミなどは入れない時代ですよ、どんどん宣伝をしていながら、うちなる沖繩では完全にそういう専制的な、しかもいわゆる徹底的な軍事優先で、事件・事故が、民の裁判所でやって、アメリカ側に不都合なことが

あつたらアメリカ側に移送です。裁判移送ということもたびたび起こるんですよ。で、アメリカの裁判所でやったら確定するわけですよ。生命財産、生殺与奪の権利を持つ権力者という、僕らの認識はね、そういうことでしたから。だから、施政権者、司法・立法・行政を米国が握っていたという、簡単に済まされない実態は、それぞれ色々な経験をやりますから。交通事故に遭ったり、色々何かにぶつかつて初めて、こういう沖繩の地位ということを思い知らされることになるわけです。

これは後で知るんですが、アメリカの現在のキャンプ・キンザーの中に第七心理作戦部隊があつたんですね。そこでね、あらゆる懐柔策がとられるわけけれども、『今日の琉球』だとか、『守礼の光』だとかというカラー物ですよ。当時、いわゆる八重山、宮古含めて六カ所に琉米親善センターというのでつかい建物が建てられて、そこでさまざまな行事が取り組まれたわけですね。うまく利用されて。だから、そういう中で学校には英語を教えるというようなことで、バレーボールや野球道具などを持っていつてやりながらですよ。あるいはまたグラウンドを整地してやるとかというのをやりながら、あらゆる宣撫工作をやられるんですよ。

アメリカの情報機関のC I Cが、名前も覚えていきますよ。南部出身の二世、教職員会担当は儀間という。顔も覚えてる。だから、こういう人って本当はちよつと会ってみたいですよ。「あんたも苦労しただろう」って言って。「苦労しただろうが、しかし、ちよつとこういうことを聞かせてくれないか」というような。第七心理作戦部隊にいる職員は、これはマスコミを通して入っているんですよ。残念ながらちよつと記録を持っていませんが。自分たちがこんなことをやっていったんだということを、おそらくアメリカは退役して、もう大丈夫なのかと吐いています。それで、キャンプ・キンザーのどこに実はそれがあつたんだということも分かつたんですが。

一見、教職員会の何か大きなことがない時代は平穩なように見え



ましたけれども、絶えずアメリカ側からは監視されているし、こういうCICが事務所に自由に入出入りするにも、今の若い子たちにこんな話をする、「何で、これをとめなかつたんですか」と言うんですよ。とめられないんですよ。これが施政権なんです。そう言うてきています。

あと一つ、屋良の教え子で、例えば台北師範の教え子で教職員会の副部長をし、あとは学校現場のまた校長などになった人などもあるんです。マスコミの教育担当記者、編集長、専務などになって、現在でも文化関係でも活躍している、もう九〇過ぎの方などもおります。こういう屋良のことをよく知っている、新報、タイムスなどでも非常に優秀な、屋良の時代に教育を担当した人たち、この皆さんがね「屋良学校」というんです。教育会館を屋良学校と。

確かに、沖繩でかつて経験したことのないようなことをどう解決していくかで、教育に関することだと、法律からつくることから始まるんですからね。教育基本法、学校教育法、教育委員会法、社会教育法等々。あるいは校舎を建てる、義務教育を勝ち取る、また復帰も勝ち取る、主席公選も勝ち取る、悪い法律はつぶす。土地闘争の中でも屋良も会長にもなるんですからね。土地を守る会のね。ですから、僕なども実感として闘って学び、学びて闘うというふうなその繰り返しだったように記憶しますね。この教職員会。私はもう三〇年余り、卒業するまで年月を費やしましたけれども。ですから、こういう屋良学校と言われた。我々は屋良の門下生を自認もしたんです。部長たちはさすがに言いませんでしたが、教頭クラスの副部長たちからは、やっぱり我々は屋良の門下生だなというふうな、こういう自負もありました。

これは私個人で申し上げますと、つまり志を持って那覇に出てきた当初の思いなどはもう本当に吹っ飛んでしまうような。六〇年から六八年、屋良会長が主席に就任するまで、ちょうど私はそばで色々な世話を、かばん持ちをやるというふうな、ほかの人が経験したことのないような経験をさせていただきましたのでね。遺言の

ように聞かされて色々な思いを、そういうことがあるものから、私は今色々なことに足を突っ込んでやっています。そういう私の今の生き方に通じるようなことを教職員会に、屋良学校に入ったことで現在の私の生き方にも繋がってきたというふうな、そんな思いです。

ちよつと、余話みたいな話も少しやりましょう。実はいっぱいあるんですよ。

仕事にはものすごく厳しいんですよ。妥協を許さないんですよ。出された公文を破棄をさせて、追加でまたこれが正しいんだというふうな文書を出させたこともありますね。印鑑のそれでも、今はそういう言葉、「めくら判」、現在は問題あるが、会長も印鑑をちゃんと押しているんですよ、決裁のあれね。

見落としてもあったんでしょね。この時には再度担当が呼ばれて、会長室のテーブルの底に白いボタンがあつて、これを押すとビーツという音が事務所に聞こえるんですよ。そうしたら、ウリヒヤート。ウチナーグチでウリヒヤートと言ったら、そら来たみたい。すると皆、一瞬びくつとして、そしたら一応僕が行くんですよ。僕が行ったら、僕に対するそれもあるけれども、〇〇呼んできなさいと。そういうものの中で、例えば「これは何だ」という。会長に文句を言った人が「会長もちゃんと印鑑を押してあるじゃないですか」と。そう言える人はごくわずかでした。「やはり大事なことは大事なことで、口頭でもってちゃんと一言もなくちゃだめじゃないか」と。そんなことが色々あつてですね、非常に厳しい。

その時に事務所に残って、今日は屋良会長に文句の一つでも言つてこようというので酒を飲みましてね、酒を飲んだ勢いで会長の家に行つて一つの文句でも言つてこようと言つたら。「いらつしやい、いらつしやい」慈父のごとくこう言う。そしてね、かけられた言葉が、沖繩で言えば、アルムン、ネームン出すんですよ。奥さんは一生懸命こうして、お酒は何でも出して。ご本人は酒を飲まないんです、タバコもやらない。「君たちにいつも苦労をかけてすまん

な」と。皆すつとして、今までの気持ちがあけて、この繰り返しでしたよ。こういう声掛けはね、また優しい言葉で言ってくれるんですよ。そんなことなどがあつたりで。

ご本人は沖繩相撲が得意で、ナンミン相撲のシージマと言いますと大関、横綱のそれを張ったという話もあるし、それから広島高等師範の時には柔道部で先鋒を務めて、非常に強かったという。そういう、これは記録としても写真もあるんですが、じゃあそれ以外、教職員会をやつて何かあつたのかと言つたら、たまにピンポン、卓球をね、たまにご機嫌がよくて暇な時は「石川君ちよつと」と言つて、準備しなさいと。幸い三階には卓球台ありましたのでね、行つてこれをやりました。そうしたらカットマンですよ。会長ですからね、こつちは手を。「ちゃんと真面目にやれ」と言つて、上手かったです。聞いたたら、「知念高校時代、実は卓球部の顧問だった」と、校長で、やれるのはそれぐらいですかね、会館内ですね。ほとんどその相手を僕はさせられて。

それから、非常に厳しい時代だったけれども、教職員会と共済会が一緒になつて本部と支部、一緒になつてのピクニックを年に一回はやりました。よく行ったのが恩納の伊武部ビーチと宜野座の漢那ビーチ、それから糸満の名城ビーチ。ビーチをよく利用しました。名城ビーチの近くに体育館はありませんが、漢那ビーチの近くにすぐ学校があるわけです。学校は平日であつても、ちよつと交渉して、一日の中でそこでバレーボールの日程を組むとか色々。やんばるですから、ヤギを潰してお昼なんだとか。非常に多忙な中でもそういうことで、いわゆる事務局としての体制固めといえますか、これはばつちりやりましたよ。

さつきタバコも酒も飲まないという話をしましたが、屋良朝苗は聖人君子、そういう側面があるんですよ。騙し騙してでも一度連れていこうじゃないかという話をやったこともあるんですよ。ところが途中で気づかれて、絶対私など最後までご一緒することはありませんでした。

我々はたびたび行くんですよ、桜坂へ。四・二八の復帰大会。海上大会、かがり火大会やつて、辺戸からパレードで教職員会バンドがこうやつて、道々太鼓や日の丸で歓迎をされて、県民大会でも教職員会バンドが色々なことをやりましてね。この皆さんは中部の音楽教師が中心でしたけれども上手いんですよ。夜はね、軍のアルパイトの人たちが多いわけですよ。当時は議員にもなれたんですよ。学校の教員をやりながら。市町村会議員をやっている人たちも何名かいましたし、縛るようなあれはほとんどないですからね。だから、復帰後よりはもっと自由な面があつた。教公二法はないしね。那覇の一〇〇名以上入るようなキャバレーがあつて、ステージもあつて、その専属の人たちがいるんですよ。教職員会バンドが来ると、この人たちは小さく隠れて、得意げにやっているわけ。上手いんだ、またそれが。こういうこともやりながら、かといって学校の現場で怠けたわけじゃないと思います。そのように元気があつて、色々とかく頑張っている中でそういうことなどありました。

それから、六二年の一月の九次教研に特別講師で呼ばれたのが湯川秀樹博士ご夫妻でした。琉球大学体育館で初のノーベル賞博士が来るといふもので、教員だけで本場にいっぱいいます。一般も押し寄せて館外に溢れましてね。結局マイクだけ流しました。中にも入れないものですからね。話だけは聞いてもらえるようにとやりながら。当時はホテルなど大掛かりな歓迎会をやる場所がないんですよ。ですから那覇料亭で歓迎会をまよりました。この時八友会という、八つの友の会という教育団体の組織をつくりましてね、教職員会、共済会、子供を守る会、この三つは屋良朝苗が会長ですから。そのほかにPTA連合会とか、自分たちでつくった会社、文教図書株式会社とか。あと三つが僕もちよつと定かじやないんですが、教育関係ですからおそらく琉球大学は入っていたと思います。教育研究集会の指導班という、共同研究者の主流は琉大とそれから文教育局の指導主事クラスでしたのでね。あと、この八友会のメンバーも皆参加して歓迎会をやりました。そのほかに特別に琉球料理もご馳

走という話になって、現在はずぶれていまずけれども「風味」という、おばあさんが料理人ですってね、昔からの伝統的な琉球料理のお店があつて、そこでご夫妻を招いての夕食会をやったんです。その時は教育文化部長とね、部長だけでもみんなじゃないですよ、ここに私はかばん持ちで行つて、その時、かなり時間を費やして色々な談議をして。湯川博士がね、こういう歌を詠んだ。湯川博士は歌人でもあられたんです。竹がちょうど和室のそばに見えるんですよ。「軒近く、竹の葉ずれのさらさらと、世の平安を語るひねもす」という、そういう歌を詠んだ。奥さまが、ちゃんと持っているんですね、何とかセットをね。色紙に、これだけじゃない、竹のちゃんとカラーのあれまで持つて、これは屋良家の家宝です。そういう役得です、かばん持ちの。主席公選の時は京都大学まで尋ねて行つて、また激励を受けましたけれども。

そういう余話ですが、そこでね、教職員があれだけ屋良のもとに結集したのは、屋良という人間があれだけの統率力があつたからだと思います。私は当時歌われた歌ね、それにもまたかなり皆を引きつけるそれがあつたんじゃないのかと。当時は復帰闘争の時には、我々はよく唇に歌をと言つて、ロシア民謡をたくさん歌つたり。闘いの中でも歌は切らさなかつたですよ。歌声サークルがあちこちにありましたよ。酒を出すような店も、そこでも色々あつたりしたけれども。

教職員会歌の冒頭はですね、「世紀の空に陽は燃えて、れいめい告ぐるうるま島、明日の教えの栄光に、立てよ今こそ一万の、真理の灯りふりかざし」という、これは一番ですが、そういう教職員会歌があつて。「立てよ今こそ一万の」、もう一万になつていたんですよ。僕が入つたその頃ね。

もう一つ、これが日の丸闘争と関係のある歌なんです。前進歌とあるのがある。この二つはいつでも歌うんですよ。会歌を歌つて前進歌を歌う。この前進歌の歌詞が一番がですね、「友よ肩を互いに組もう、道は遠く吹雪はたける、前進前進前進、スクラム前進

だ、だれも皆心から楽しいからだ」と。前進前進、スクラム先進だと。その四番がね、「♪友よ仰げ日の丸の旗、地軸ゆるがせ われらの前進歌、前進前進前進、輝く前進だ、だれも皆心から楽しい：」四番目にそれがあつて、復帰後それが歌われなくなること繋がつていくんですが、復帰の直前まではそれが歌われていました。この両方の歌にも見られるように、教研集会でたびたび、皆合言葉のように言つたのは、「一人の百歩前進より百人の一步前進だ」という、これは生協運動の「一人は万人のために、万人は一人のために」と共通するような、そういう社会主義的徳律、資本主義的なアメリカのあれがないような、そういうのを感じましたよ。

こういうことなどがあつてですね。屋良は物理、化学の教員です。植民地、台湾でも台南二中と、あとその教壇実践が評価されて台北師範の教授に抜てきされますけれども、帰つてから、最初の知念高等学校の中でもそれを実践するんですよ。教職員会に入つても、理念としては物をちゃんと形にして、この目標達成のためには布石をしていくんだという。それが日本国民教育の教育基本法の立法化に後は義務教育費獲得に結びついていく。こうして具体的な成果を導き出すんですよ。

もう一つは、いわゆる土地闘争から復帰闘争、教職員会あるいは教職員会を中心とする県民大衆運動を先導をしていく中で、鈍角的態勢という。沖繩は十重二十重に鉄筋コンクリートのようなもので囲まれている。これが沖繩の障害である。これ乗り越えていかなければ目標は達成できない。したがつて鋭利な刃物では刃こぼれがする。だから鈍角だと。鈍角なもので何度でもぶち当たりぶち当たり、そしてひびを入れて、それを壊して乗り越えていくんだ。これが鈍角態勢なんです。

また、こういう説明をしていました。指導部、先端ですね。指導部と大衆の間が離れてすぎちゃだめだと。大衆に依拠せんといかんと。だから、これは大衆路線ですよ、別の言葉で言えば。そういう、これも見事にこういう屋良の運動理論でもつて、幾つもの物事を解決



していった例が具体的にありますから。これは教職員会を離れた後も、やっぱり本人としてはそういう沖縄県民の支持を受けて主席になり、知事にもなっていくんだけど、また本土政府とぶつかる単純にはいかなかったというような、色々な苦労なども出てくるわけですが。とにかくそういう状況の中で、日常活動みたいなことではありました。

## ■「一九六〇年代の教職員会での日常活動」の質

### 問・応答

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。まず私のほうからの質問ですが、一つは教育会館が絶えずUSCAR側からの監視対象になっているという話がありましたけれども、以前、私が石川先生にお話しを伺った時に、例えば屋良会長が重要な指示を出す時には紙に残さなかったで、あるとか、もう少し具体的なやり取りの方法などを伺ったことがあったかと思うんですけども、そのあたりのことも含めて、もう少し詳しく話をいただければと思います。

#### ○石川元平

重要な文書の起案、これは当然、各部それぞれあるわけですから、さつき屋良の教え子も優秀な教育担当記者としていた。これは教え子であろうが何であろうが、当時の記者たちは今の記者とは違いますね。「クンクンクン、ん？ ちよつとおうぞ」とか、こういうふうなことで入ってきたり、どこかで情報をちよつと聞いたら、で、テーブルで広げた状況で、ちよつと用足しとか何とかというふうな、こういうことには厳に気を付けましたね。

一二六冊の「屋良朝苗日記」を新聞でご存じだと思いますが、これは新報に三〇回連載されて、これは近々単行本になります。ご

本人自体が、ちよつと大きめの手帳ですね。使っているあれは4Bの鉛筆です。4Bの鉛筆でも本人は癖があつて、こういうやつていましたよ。また、大学ノートに別途色々なメモをやっていましたね。これは数冊。これも読谷に行っているんですよ。実はそれは別に、本人が何かを発表したような、研究論文もあるんですよ。そういうものを含めると本当はもつと、この後はおそらく記念館みたいなものが建てられて展示されるようになる、こういうものを皆が詳しく知ることになると思います。本人はとにかく几帳面な人でした。家計簿みたいなものを付けて、それぐらい徹底してやっています。本土で勉強している、大学行っている、どれだけ送金をしてどうやったということまでね。事務局内では、はがきなど、もうこれも公私の別をきちんと分けて購入簿にチェック入れて、というふうなことなどがあつて。

また大事な例えば「教公二法について県民に訴える」。非常に重要な課題に対する起案はご本人がなさいましたね。そういうことでは非常に気を使われた。でありながら、若い人たちの意見も非常に本人は気にしましたから、皆に言う前に必ず私に「これを読んでみなさい」と。生返事して「立派です」と言ったら、一喝されました。「何が立派か」。だから、一度叱られてからは、僕は丁寧に読むようにして、気がついたことは申し上げるようになりました。ということなどがあつて、これは晩年まで自分がやってきたことに対する後世の意見、批判というようなものを非常に気にもされていました。だから現職の頃も、こういう起案文書、そういうものに対しては非常にうるさい、厳格な面が非常にあつたです。

それとね、マスコミの皆さんとは年に一度懇談会を開いています。これはいわゆる機密が守られるような八汐荘で開いて、そこで色々運動の中の苦労とか、そういうまた自由にできないような、色々なことなどを率直に意見交換しておりましたよ。マスコミの皆さんもそういうことも承知の上でまた一生懸命。新報もタイムスもですね。現在は教育の欄が一面にたまに出来ますね。常時二面ぐらい



は毎日あったという記憶です。そして教育研究集会の場合は何名投入したんでしょうか。三日間やりましたが、総動員ですよ、記者はね。何面にもこれが出て来るんですよ。教科別、教科外の分科会の状況等。すぐその意味では両紙は教育に関してものすごく力を入れて。だからこれが双方でなくなつて、週に何回か。あの時は非常に寂しい思いをするようになって。

#### ○佐藤 学

追加の質問ですが、それは、ある種の教育そのものへの関心が強かったということなのか、それとも屋良先生の存在があったので、石川先生は組織に関心が強かったのか、どちらだったんでしょうか。

#### ○石川元平

これはある意味で両方だったんじゃないでしょうか。屋良は教育にすべてをかけるというふうな、ですから子供を守る会長もやったわけですよ。あまりにも子供に関する事件・事故が多すぎましたしね。それから教育の格差があまりにもひどすぎた。ですから、四五年の終戦、六五年には、屋良は二〇年教育の格差のあれを特別に組んでやって、それが義務教育獲得期成会の運動に繋がった。その時には福地曠昭部長などが中心になって、奄美の調査などをやったんですね。沖縄より一足先に復帰した奄美の教育の現状がどうなっているのか。教育環境、特にね。もちろん本土の状況などは日教組から資料で来ましたし、そういうことで格差がますます開いていつているといふ。ですから復帰に対する思いというのがますます募るようにもなつていったんですね。教育基本法では、アメリカに施政権を握られていても、日本国民教育をするということになつていけるけれども、本土政府の施しは一切ないという、こういう状況のもとでしたので。

#### ○櫻澤 誠

あとですね、先ほどの質問とはちよつと違う伺い方になるんですけど、USCAR側から監視をされているという中であつて、常に色々聴取をされたり、やり取りがあるわけですね。屋良会

長がUSCAR側に何か聴取をされた、質問されるという呼び出されたりとか来たりとか、そういう形で、そういう関係性がある中で、もちろん圧倒的な権力の差はあるんだけど、時にはそれを逆手に取るという。

具体的な事を言いますと、例えば一九五八年の教育四法ができる時に、ちょうど那覇市長選があつて、その時に瀬長亀次郎さんの後に兼次佐一さんが出ていて、屋良さんなり、新里清篤さんなりがUSCAR側から呼ばれて話をした時に、ここで教育四法をもう一度廃案にしてしまうと、そのUSCARに対する反発というのが民連側に行つて、兼次が当選するかもしれないという、そういうように逆に圧力をかけるという。もちろん権力差はあるんだけど、そういう中でも巧みに色々なことをしていこうという、そういうやり取りの場というのは要所要所にあつたと思うんですけど。

六〇年代に入ってから、秘書というような形で御一緒に行かれたりとかする際に、USCARであつたり、あるいは日本政府の南方連絡事務所とのやり取りとか、色々な所も含めて、そういうむしろ逆手に取ろうというか、単に監視されているだけではない、したたかさみたいな部分もあつたとは思ふんですけれども、そのあたりはいかがですか。

#### ○石川元平

確かにそれはありました。これはやつぱり五三年からのあれだけの運動をやつて、これはアメリカもこれを無視できずに、それで校舎建築含めて教育三原則という「よい校舎、よい教師、よい待遇」というものを出して、これが本格的に条件整備を始めることのきっかけ。アメリカとしては民主主義のショーウィンドウで善政を敷いているから、当然本土の人は、本土以上にある意味でアメリカが面倒をみているんだからと思つたんだらうけれども、実態は全く逆で。民生を優先と言つたけれども、アメリカは極めて不十分な対応しかしていない時代です。だから、そういう時代にあれだけの運動を起こして、その後の土地闘争等を踏まえてきているわけですね。

やっぱりね、これは後で触れますが、日の丸論争の中でも弁務官と全く後に引かずにこれをやっているし、それから、情報教育部長なんていうのは、もうほとんど「こいつはー」と逆に見下しているような感じで。後で、クロフォードという学者先生が、非常に沖繩に思いやりのある教育部長などが来たり、こういう人たちとは非常に仲よくしたりもしていますけれども。

何と言つても、あれだけのバックがあるというふうな、「我に組織の力あり」と言っていました。これは公言はしませんでした。僕に「石川君、我に組織の力ありだよ」という、これだけの自負心を強く持っていたと思います。教職員集団を一束ねにして、その父母、大衆をまた従えているというふうな、それもまたこれまでの一つの実績ですよ。

しかし屋良はまた、是々非々でいく人ですから、反米では僕はなかったと思うんですよ。ランパート高等弁務官、最後の高等弁務官などは、深夜ですけれども五月一日、午前〇時を期して嘉手納基地から飛び立つんですね。ちゃんと見送りに行っています。本人にも会つてですね。だからそういう義理は。そういう意味では表も裏もあるような人じゃないんですよ。そこが僕は日本政府との間では非常に苦勞し、ある意味で騙され、これがまた県民の逆評価になったりもしたのが間々あると思うんですね。アメリカはですから堂々と闘つて勝ち取ったものは認めて、だから教公二法など五カ年間、話はありませんしね。教育委員会制度も公選制を、これは間接公選ではあるけれども、残したままずっと認めました。だから、ヤマトは五年ぐらいに公選制がなくなっているんですよ。そういうことなどを含めて、闘いによって勝ち取ったものに対してアメリカはそれを認めて、そのうちの一つが教育基本法を初めとする教育四法。二度拒否したけれども三度目はちゃんとそれを民立法として立法化を認めて、その後、許容していくわけですから。アメリカは要するに日本教育を嫌って、日本との接触も嫌って、できるだけアメリカの教育制度に近づけて何とかやろうとしたんだろうけれども、あの

大きなうねりがそれを許さなかったと思うんですよ。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。ほかにご質問、いかがでしょうか。

#### ○野添文彬

先ほど鋭角ではなく鈍角とか、大衆路線を行くといった屋良先生の運動理論というのは、特に誰かから影響を受けたといったことがあったのか、教えていただきたいんですよけれども。

#### ○石川元平

これはご自身で。本人は物理、化学の教員ですから、絶えず形にしてコマを進める。布石論もそうです。教育基本法というものの中に日本国民を教育する。施政権はアメリカが握っている地域の沖繩であつても、教育をやるのは日本教育ですよ。ところが、その直前に布令で教育をという時代もあるんですよ。そのほかの法律が何にもない時代。アメリカの布令でもつて、その時に非常に厳しいチェックが色々入つたり、これはほかの労働法関係でもあることですが、復帰とか基地に反対するような勢力はみんな抑えこもうというふうな労働布令を出したりですね。

だから、屋良がつくりだしたこの運動理論は、これは後にですね、主席公選の時の本土にあいさつ回り、美濃部東京知事、飛鳥田横浜市長や京都の蜷川知事にお会いしまして、あの時に湯川博士だとか色々な人にも会いしましたけれども、立命館の末川博士などにも会つたりやりましたけれども。非常にご本人も印象に、私も印象に残つたのは京都の蜷川知事との話し合いの中で、蜷川知事はこういう豪快な人ですよ。体も大きいしアハハと言って笑つて、こんな激励をやっていましたよ。「志は高く、俗につけですよ」と。これは形としては大衆路線ですよ。屋良が進めていた、進んできた道。あの鈍角体制、まさにそれですよ。ですから、その後、選挙の最中にも、色々な中で「志は高く、俗につけ」と。

屋良が主席に当選をした時に、こういう扁額を贈った人がいるんですよ。これは論語か何か知らないけれども、「天動衆得」というあ

れです。天を動かす、衆を得ると。大衆の力を得れば、天をも動かすという。理屈の上では全く屋良が進めてきたその運動。屋良が初めて公選主席に当選をした喜びを、ある書家がそれを扁額にしてプレゼントした。そういうことも重なりましてね。本人はですからおそらく非常に大事にされたと思います。

## ■「復帰運動（復帰協大会、海上集会、日の丸掲

### 揚運動、日本語教育など）」

○櫻澤 誠

それでは続いて復帰運動のところからお願いします。

○石川元平

復帰運動といったら思い出しますのが当初の一般の住民、民衆の受け止め方でしたけれども、私が直接受けた印象は、後ずさりしましたね、まず。六〇年、復帰協もできた、それに親戚関係、身内からこういう呼びかけをしたら躊躇する人が非常に多かったという印象です。この理由は、確かに戦後のアメリカたちの事件事故やあの横暴、横柄な態度も、これも許せないけれども、沖縄戦当時の日本軍の蛮行、それに比べるとまだいいという、そう受け止めて、ある意味で拒絶をする人が非常に多かったというのが印象です。ですから、実はもう違うんだと。日本は平和憲法を持つ国に生まれ変わった。天皇が主権を持つ国から、我々いわゆる国民が主権者なんだと。平和憲法ができた民主主義の国に生まれ変わったんだと。これには随分と時間を要しました。何か体に埋め込まれたあの沖縄戦の体験というものが、これを払拭するのになんかエネルギーを費やしたというふうな印象です。

ところがいわゆる復帰運動を先導したといえますか、中心になったと言われて県民から評価されている教職員会。これはちようど琉

球政府の設立も五二年の四月一日です。琉球政府設立のために、四群島ですべて復帰を主張する知事が誕生したものですから、そういう群島政府を潰したんですね、実質ね。臨時中央政府ができて、五二年四月一日に琉球政府が発足し、アメリカの気に入る主席を任命しという。ですから傀儡政府ができた。教職員会も設立をし、屋良朝苗が専任の会長になって、文教部長から今度は野に下って。

これも復帰運動との関わりでは非常に重要なことですが、文教部長時代の一九五二年の一月に第三回全島校長会という校長先生方の会を開くんです。そこで屋良朝苗氏が当時文教部長ですが、記録によると火を吐くような演説としたと。あるいは熱血溢るる演説をしたという。そして、こういう熱気の中で復帰決議がされた。基本的にそれが教職員会の基本目標として引き継がれている。これが沖縄県教職員組合の受け止め方でもあります。だから屋良がああ演説をし、そしてあの全島校長会の復帰決議後、教職員会もそれを踏襲して復帰運動の中核を担うようになったと。この演説は非常に有名な演説だったものですから、屋良先生が亡くなられた県民葬のパンフレットの中にも全部入れてあるんです。

例えば今年（二〇一三年）の安倍首相が四・二八を完全な主権回復の日としてやるうとしたのはお祝いですよ。沖縄県は議会もほとんどの団体、その中でも実は僕は四・二八（よつや）会のメンバーでもあるんです。これはもう天国に行った人もいますけれども、この四月二八日を「屈辱の日」として、我々は生ある限りこの「屈辱の日」を忘れまいということであることをやってきましたけれども、そういう屈辱の日というのはいつから使われたのか。これは最初からではないんですね。復帰協結成の翌年の六一年の祖国復帰県民大会の宣言文の中に、情勢分析をしたり、そういう中で「屈辱の日」ということが打ち出されて、あれ以来もう四・二八「屈辱の日」、それを忘れまいということのようなことで復帰運動が燃え盛っていくということになっていきます。

こういう闘いの中でもとりわけ全国に大きく波及したのは六三年



です。一般によく知られている人為的な分断線、辺戸と与論の間の北緯二七度線。これは二八日ですが、我々はその前日から辺戸へ行きまして、そこがかがり火を焚いたんです。地元とも連携をとりましてね。松の木やいろいろなものを、あれは五メートルぐらい積んだんでしようか。それに火をつけると本当に一〇メートル、二〇メートルといって炎が上がる。そうすると、与論からも見えたと言うんです。逆に本土側、これは奄美や鹿児島や、これは全国の代表がそこに来ていますが、海拔一〇〇メートルぐらいの所に琴平神社という神社があります。一番高い所です。そこで最初がかがり火を焚いて相呼応して。人間は感情の動物でもありまして、こういうものにはやはり魂に点火されますね。眠っていた、埋もれていたものに点火されるようなそういう気持ちになって、翌日未明から艇、船を借りて、ほとんどが漁船です。あちこちから行っていきますが、マスコミ等ではみんな我々がつかめませんが、ほとんど復帰協に結集する船は宜名真の港から、あるいは奥の港から二七度線目指して。非常に荒れた天気でしたけれども。びっくりしたのは中間ぐらいが二七度線だろうと思っていたんです、我々のグループはね。ところが行けども行けどもヤマトの側の船団が見えない。ずっと進んでいくと、もう与論の浜に人影が見えるぐらいのわずかに二キロぐらいの地点が実は二七度線だったと。伊平屋、伊是名は二七度線より上なんですよね。

地図の上で後で見たら、なるほどそうなんだがとわかる。その日、多くの人が大体同じ思いをしたようです。そして本土の側は何千トンの母船があつて、艇が数十艘あつて、二七度線を人為的な分断線だということで大変な怒りをもって踏み潰してやるんだという思いで船をぐるぐるぐる回して。行く時から色々論議もしたんですが、パスポートはみんな持たんよなど。パスポートを持っていないです。その二七度線を超えているわけですよ、逮捕も覚悟で。こんなことなどは全く問題にしない。じゃあ官の側、ヤマトの国家権力の側はどうだったかといいますと、海上保安庁の船を二隻、

我々が与論に向かうと右前方に、右側に二隻もう既に停泊していて、別に警告も何も聞いた覚えはありません。ただ静かに見守っていた。ということ。予定どおりのことをみんなこなして。

その中で私などは確認できていないんですが、一方では、復帰協の後に会長になった桃原用行、もう亡くなりましたけれども、会長時代に辺戸の碑文を書いた人です。あれはすごい詩ですよ。名文だと思います。彼は元海軍なんです。だから、桃原会長が手旗信号を海上保安庁、あの船に送ったんだという。エピソードとしてまだ裏付けはとれていませんけれども、そういうことなどもあって警告とか注意も何もしない。ただ眺めていただけかなという、噂としてそういうことまであります。この海上集会で両方とも色々アピールをし、握手を交わし、歌を歌い、シュプレヒコールをやつて、それを持ち帰って今度は辺戸から那覇までの、那覇では夕方もう県民大会が準備されているわけ。この道すがら、船にも教職員バンド隊が一隻に乗ったんですね。「沖繩を返せ」だとか、トランペットをはじめ、そこでも色々やつて、那覇までの復帰パレードと言いましたけれども、各村々、太鼓をたたいたり日の丸の小旗を振ったり。道は舗装されていなくて、しかも車はいえ、三トンの半の南山というトラックを借りて、教育会館の三階の折り畳みの木の椅子、座り心地はよくない、板ですから。これに座ってトランペットですからね、休むわけにはいかんですよ。待っているんです、次々、各々集落ね。ですから帰ってくるまでに、こういう人は割かしよかったですと思うよ。トランペット吹きはもう口が膨れていましたよ。ご飯も食べられないというぐらいの。そういうことで県民大会会場。結局、六三年からこれが六九年の四・二八まで続いたんです。

これは去年の復帰四〇年で私がマスコミ関係はかなり統一的に納得させました。あるところは七二年までやったのではないかと、色々なことが実際書かれたんです。実際、最初から最後まで経験者だから、私。そして復帰協の資料を念入りに調べてもそう。ということ、去年のマスコミ、テレビ、NHK、本土の三大紙も含めて



すべて取材を受けました。すべて六三年から六九年まで七年にわたってというこういうことなど、やはり体験者の出番というのが大事だなという感じも受けたんです。

こういうことをやってきたりしまして、いわゆる燎原の火のようにといいふうな言い方がありますよね。まさに運動はそういう広がりがありましたね。その後、私自身が北海道、青森から各県行きましたけれども、当初行ってびっくり。あの当時、六〇年代の半ばになろうとしている、労働組合の役員ですよ。会って沖縄の復帰の話をしたら、沖縄に対する認識が全くないんですよ。沖縄はハワイのどのあたりにありますかとか、去る戦争で沖縄の土人はみんな死んだと思っている。僕などは、戦後ヤマトから沖縄に行つて復帰運動をやっている人間という、かなりそういう受け止め方がありました。ですから、これは容易なことではないなという思いがしながら、とにかく復帰協は全都道府県にオルグを何年も送りました。こういうことの突破口を開いたのはやはり復帰協結成であるし、六三年からのこの海上集会等々であるし、もちろん僕らのあの復帰オルグであるしというふうなことがありますけれども、やはり燎原の火のようなどというふうなことの受け止め方。

一方には大きく復帰協という、これは昔の社共、対立の社共もみんな入っているんです。一つですよ、復帰協の中では。ところが本土の側にいくと、総評社会党系では沖縄連というのがありました。もう一つは沖実委というのが共産党系のそれがありまして、向こう行つたら分かれるんですよ、那覇から一緒に行つてもね。那覇から鹿児島経由で普通は行きました、汽車ぼつぽに乗ってね。だからそういうことなどがありましたけれども、これを繰り返す中でかなり全国的に政党や労働団体、市民団体に連帯する一つの輪ができて広がっていったという。

その時復帰運動に果たした役割の一つに日の丸があると見ています。沖縄戦が始まった四五年三月二六日、慶良間、そこから地上戦が始まっているけれども、ニミッツ布告で日の丸も君が代も禁止を

されている。日本の行政権は止められている。元を正せば、しかしそこまでの認識はない中で日の丸の掲揚運動は始めましたけれども。教職員会が五二年に結成されて、ある意味では間もなくという。この日の丸を掲げる運動というのは、これは当然五八年のあれ（教育四法）にも結びついていくわけだけれども。

日の丸掲揚といいますが、三点セットですよ。日の丸を掲揚するためには竿が要りますね。竹竿なんだけれども、黒いあれが節々の間についていて、見ても立派な竿であるし、それから竿頭です。竿頭は金の竿頭ですよ、すごい立派なものでした。これを教職員会事業部で学校を通じて注文をとって、一括購入しましてこれを配布する。そうしたら子供たちはこれを担いで得意気に家に帰ったという、本当に絵を見るような思いですが。

これはちやうど教科書と同じようにアメリカに睨まれるようなことは商売人はやらないんです。本土の日本人教育をするのはアメリカは嫌いましたから、教科書を輸入するためにも教員でもって琉球文教図書株式会社というのをつくつたんです。その時大校長と言われた當銘由金というやんばるの校長を呼んで社長にし、あとの三名ぐらいも校長です。復帰前までは、学校の大きな教職員会事業部が取り扱えないようなものは文教図書がみんな発注しまして、オルガンとかピアノとか、学校で使う大きなもの、あるいは公共施設で使う大きな備品なども。

だから教科書がそうであったように、日の丸についても商売人は取り扱わないんです。教職員会の事業部がこれを取り扱って、アメリカには睨まれながら日の丸三点セットを一括購入する運動を始めたといい。これはちゃんとした布の三点セットだけではなくて、簡単に紙でつくることができる、台紙を含めて。学校の運動会などで日の丸を立てたらすぐC I C、琉球警察からすぐ警告です。ですから現場ではそこでトラブルを起こしてまで、一定の騒ぎはあったようだけれども、大きな問題になるような騒動ではなくて。ならばということでも万国旗を利用したんですね。万国旗の中の日の丸と

いうことであれば言い逃れができてほとんどの学校がやっています。僕の子供たちが宜野湾の学校でやる場合もやっていましたから、六〇年代です。

教職員会が始めたこの日の丸掲揚運動、これをどうして復帰協としても使ったかという、復帰協に提起したんですね。復帰協としてもこれはこの物をもっての運動の有効性を認めて、復帰運動の中で例えばデモ行進をします。その中でちようちんをつくるにもちようちんの四面に丸を書けば日の丸になるんですよ、周囲にね。これは高校生まで参加しましたよ、あのデモ行進。印象に残っているのは首里高校などが非常に元気がありましたけれども。そういうことでもちろん手づくりの小旗や、そんなことまで含めて。

琉大の赤嶺先生、まだお元気かな。米留から帰ってきた教育学部の教授でしたけれども、貸住宅が泊にあったんですが、泊小学校のあの丘にね。隣にアメリカ人が住んでいる。向こうは星条旗を掲げるわけですよ。そうしたら日の丸を掲げたんだそうです。こういうお互いに感情的なものですよ。そこまで大学の教授だってそんな話までやっていますね。冷静に見てもこれは抵抗のシンボル。

ところが屋良とブース高等弁務官の論争があるんですよけれども、これは記録にも残っていますけれどもね、アメリカはこれを許さん。元を正せば沖縄占領のあの時から禁止をしているものでもあるわけですね。そして高等弁務官は、国旗というものは行政権のシンボルだと言ったんです。これは大きな理屈ですね。アメリカが施政権を握っているんだから、星条旗を掲げよと言わないのはせめてもの慈悲だと言ったらしい。それに対して屋良朝苗は、アメリカは多民族国家だと。これが行政権のシンボル。しかし日本の場合、これは民族のシンボルと言ったというんですよ。これは現実突き詰めていけばおかしい論理ではあるが、とにかくあの論争の中でこれは民族のシンボルだと。これはもう引き分けです。どっちも引つ込めない。こんなことまでやっているんですよ。これは五二年一〇月に教職員会がオグデン民政副長官に国旗掲揚の自由を特別陳情した

と。その要請したことに対してアメリカ側の回答が、いわゆる五二年の四月二八日のあれですよ。平和条約には何ら琉球政府が日本政府と同じ機関か、あるいはその代理機関かについて規定をしていないと。だから琉球政府の施設である学校の行事の際に、校舎に日本国旗を掲揚することは不適当だということ却下したということです。長い対応の中で、特別陳情ということに対するアメリカ側の対応がそういうことです。

あと一つ、私自身が経験をしたことで、当時の立法院は北向きになっていましたけれども、その西の壁は午後になったら日が当たるんですよ。僕はテントを張って渡航制限を撤廃せよというふうな自治権拡大の一環としてそういうハンガーストライクをやったんですよ。バックにアメリカのベニヤ一枚に白いペンキを塗って丸く日の丸の形を書いて座り込みをしたんです。そうしたらCICと琉球警察が飛んできて、直ちに撤去せよ、いや、撤去しない、かなり論争しました。後はどうしたかといったら半欠けにした。丸くないだろうと。いや、それでも日の丸と言ったんですよ。もうそこまでやった。あの時ね、O TVには僕が携帯マイクを握っている映像があるんですよ。後で僕、見せられましたけれどもね。とにかくいろんなことをやりました。

申し上げたいのは、やはり基地権力者に対する抵抗のシンボルですよ。外に対しては民主主義のショーウィンドウと言っている。ただ本土から沖縄の基地の、占領軍の行っている施政の実態をマスクも入れていない状況の中で、一方的に民主主義のショーウィンドウと。これに対して我々は大変な怒りを持ってね。ですから、これは後に冷静に評価しても、やはり抵抗のシンボル、これは屋良朝苗が言えないわけですよ。抵抗のシンボルとして使うんだとはとても言えませんから、屋良朝苗は民族のシンボルと言ったんだけど、実際にそれを使用した、それは抵抗のシンボルとして日の丸を掲げた、これを振ったというふうなそういうことで、これは復帰運動の中で具体的に威力を發揮したというふうに見えています。

ちようどその前後、私が六〇年に入ってから、それでは子供たちの意識はどうなっていたか。やんばるではそんなにまでではないけれども、特に中南部の子供たちは生まれた時からフェンスがあり、基地の中には星条旗が翻っているわけです。これは何度もこの子供たちから、平和教育を僕らが実践する際に、教師の教え方として子供たちから指摘されたこともありませうけれども。そういう基地の島で生まれ育った子供たちのこの帰属意識を教育研究集会の中の各教科以外に特別分科というものも設定をしてあります。その特別分科の一つに国民教育分科会というのを置いたんですね。そうしたら、この国民教育分科会での六五年の第一次教研集会で発表された児童生徒の意識調査、そうしますと、自分たちは日本国民だと思っている子供たちは圧倒的に多いです。日本国民教育をずっと現場では教えているわけです、日本の教科書で。それでも七八%です。ところが米国民だと回答したのが一%いるんですね。あれにはさすがにショックです。沖繩と答えたのが7%です。だからこういう状況の中で運動をやっているわけですから、日の丸を振ってもね、復帰協結成六〇年から、これを調査した六五年時点でもこういう状態だったということですから、当初はもつとこれが容易に推察できます。五八年に教育基本法の中に日本国民教育をするという、そして日々の教壇実践の中で日本の教科書を使って日本人教育をしている中でも、こういう状況があったということも冷厳な事実としてこれも語っておかなければならない、こういうふうに思います。

それから余話を少し申し上げると、さっきの教職員会歌と前進歌のことを話しましたよね。いつから前進歌が歌われなくなったのかが定かではありませんが、復帰後間もなくですね。その前進歌の四番に「友よ仰げ日の丸の旗／地軸ゆるがせわれらの前進歌」というくだりがある、復帰運動がかなり盛り上がっていく過程の中で、本土との交流も非常に頻繁になり、政府の沖繩に対する施策も次第に見えてくるようになりますと、いわゆるこの日の丸は侵略戦争の血塗られた旗だという、そこに到達をするんですね。当初は沖

繩の教育界も沖繩戦を含めての総括はきちんとはしていないんです。ところが、きちんとはしていない中でもあの教育会館を建てる際に、そこに慰霊室をつくり、そして慰霊ホールと称して日々に反戦平和の誓いを立ててきたというふうなことで、きちんとした戦中戦後総括というふうなことではなされていないけれども、おそらく屋良会長の思いとしてはあの教育会館建設の中にそういう思いは当然込めたんだろうというふうに思っているわけですね。

あとね、七五年に復帰協解散もし、祖国復帰闘争史、私も編集委員になりましたけれども、そして与論に碑を建てたり色々やってきましたが、復帰闘争史の中に単年度の情勢分析、運動方針、そして総括をみんなやってきたんです。それとしてはみんなやってきたんだけれども、全体を通しての総括は成し得なかつたんですね。ただ、概略総括はやったんですよ。これでいいという人もたくさんいたものだから、それ以上突っ込んでやればおそらく社共のああいうことまで触れざるを得ないという。一方では革新統一候補で既に一つになつて社共が戦っている大事な時でしたから、やはりこれが成し得なかつた理由の一つなんです。

そういうこともあって、これは復帰協で成し得なかつたならば教職員会としては少なくとも日の丸掲揚運動に対する総括は、私が委員長を八年やっている中でやろうとしたんです。そうしたら約一〇名の専従がいますけれども、賛同者は得られなかつたんです。理由が財政問題でした。離島をたくさん抱えている沖繩ですから、離島からもたくさん代議員が来る。二日間の中でいわゆる総括、決算、それから運動方針、予算、その他決議を上げていく。たっぷり二日かかっただけですね。これを特別総括を入れると三日がかりになる。財政負担が大変だというのが一つの理由。これは私までがプロの専従で、直接日の丸掲揚に関わった人間ですから、これはあなたの方に責任はない、直接自分の代でこれをやりたいんだが、私が起案もするということ、こういう提案までやっただけですけども、賛同を得られませんが、できなかつたんですよ。私はこういう総括、こうい



うあれをやるとういうことで骨組みはつくつてあるんですけれどもね。個人でやるものではないものですから。

## ■「復帰運動（復帰協大会、海上集会、日の丸掲揚運動、日本語教育など）」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。幾つか質問をさせていただきたいと思えますけれども、一つは、あえて飛ばされたのかなとは思ったんですけれども、やはり復帰協を中心に海上集会とかをやっていく際に、一九六四年に分裂をしますよね。そのところをお話されていなかったんですけれども、そのあたりについて補足をいただければと思います。

### ○石川元平

沖実委、沖縄連の受け入れ側、一応はヤマトウではこう分かれてやっていると、これがまた総括ができなかった理由の一つにもありましたけれども、これは必ずしも復帰運動だけではないんですよ。基地問題、いわゆる原水禁問題、根っこの深い所があって、そしてそれぞれの組織が実は固まってきたんです。政党とそれを支持する労働団体、市民団体が、平和団体ですね。非常に深い根っこがあったりもするものですから、これは我々の中ではそんなに深くそれに対して、しかし当然僕らは社共グループでしたからそういう中でのこと。

当時、僕は直接復帰協の、その時代は役員としてではなくて、沖教組からは長年、福地調査研究部長として派遣しましたし、その後、嶺井政和氏を派遣してきましたけれども、これも後の本格総括に結びつくようなのが根っこにあったと思いますね。しかし、これはいけないだろうという我に返るような、これは当然出てきたと思

ます。これはまた県民全体の意見として、そういう分裂したようなことがいかにマイナスになるかは非常に重要な時点です、これは六五年に佐藤が来るという、あの時点ですごい盛り上がるの状況ですから、ある意味ではどかがキャスティングボードを握るといっても本当はいいんですよね。

それぞれの勢力は当時としては、社会党はすごい勢力を持っていたような、労働組合の総評もですね。ところがまた共産党も根強いそれは持っているんです。沖縄でも、うちの教職員組合の中でも三分の一の勢力はありましたから。だから瀬長さんなどが、古堅実吉さんなどが衆議院で一議席をずっと守っていたというそういう状況がお互いありましたので、わかっていますから、一方ではやはり統一しないと保守勢力に勝てないという、こういう状況等色々ありましたので、これはみんな後はよきに計らったんだと思います。

### ○櫻澤 誠

いわゆる原水禁運動とか、あと労働組合なんかは分裂してしまうけれども、それはやはり本土の上部組織があつて分裂してしまうけれども、復帰協に関してはそういう意味では、沖縄連、沖実委というのは別に復帰協の上部組織ではないわけですから、そういう部分で。

### ○石川元平

確かに沖縄からはもっと強く復帰協としては物を言うべきだと、上部組織にも。そういうことは間々聞かれましたよ。

### ○櫻澤 誠

あともう一つ、話を伺っていて大変興味深かったのは、復帰協が一九六〇年にできて、その後しばらく躊躇する人が非常に多かった。その時に沖縄戦の時の日本軍の行った犯罪的な行為というのが非常に根深くあったというところが非常に印象的だったんですけれども、それは石川先生が具体的に直接接する中で実際に感じられたことなんですか。

### ○石川元平

一番私の身近な人、親戚関係、まずはこれを強く感じました。これはやんばるです。そしてもちろん中部に出て後も、復帰協を結成した後も普通の一般の人たちと接していくとこういう反応は非常に強かったですよ。アメリカ人たち確かに悪い、これも我慢ならんがあるけれども、しかしあの日本軍よりはいいんだというふうな。そこに我々が平和憲法もつくり、民主主義の国に生まれ変わったんだよという、これを繰り返して、繰り返して、また復帰運動、そういうふうなものが次第、次第に、じわりじわりという人たちを目覚めさせるようなことは、マスコミの力や、具体的に平和行進するにも網の目行進なんていうものまで。大きな道路だけでやらないで、かなり住民と接するような、辺戸から那覇まで一週間かけて行進したこともありますし、宿泊する場所では必ず懇談会を開いていくという様々な手立てをやってきて、それではというような。

体制を決定付けたのが、復帰の可否を、対応を問われたのが主席公選だったんです。後で屋良は核も基地もない復帰、自衛隊もノー、安保条約もノーと。これは即時無条件全面返還という復帰協のスローガンを前に掲げたんです。ところが結果として保守の側の西銘順治、屋良の教え子です。師弟対決になったわけですが、彼はバックに日本政府がいたんです。そして、アメリカがいたんです。また、琉球政府がいたんです。だから我々は三権力を向こうに回したような闘い、文字どおりそれをやって勝ったわけだが、その時西銘さんが言ったのは、彼は復帰尚早論者です。復帰反対だけではない、復帰は今早い。一部の経済人などは、沖縄はまだ戦後で瘦せ衰えている、もっと太ってから、力がついてから復帰してというふうな、ますます格差が開いていくのに。これは教育の中では目に見えて、我々は危機的な感じがしたんだけど、彼らはそう言った。つい口を滑らしたんです、西銘は。これが幸いしたけれどもね。今復帰するとイモとハダシになると。これがイモ・ハダシ論でマスコミを賑わすんです。これは非常に助かりました。非常に効果的でした。相手をやっつけるのに効果的でした。ということな

ど色々ありましてね。

#### ○櫻澤 誠

中々お答えしにくいかもしれないんですけど、元平先生自身もまだ小さかったとはいえ、前回お伺いしましたけれども、沖縄戦を経験されて、その中で日本軍が食べ物とかを奪って行ったのであるとか、そのほか戦後に見聞きしたことも含めているんな認識がおりになったと思うんですけども、元平先生自身は実体験とか身近なところで見聞きしたことを、戦後日本は変わったんだということと完全に払拭し切れたんでしょうか。やはりそうではなくて、沖縄戦の問題はそのままどこかであったんでしょうか。

#### ○石川 元平

教職員会に入って我々が復帰を訴えて、こう変わったんだというふうな本土をイメージさせるようなことを言って復帰運動の裾野が広がって、屋良先生自体が我々の目の黒いうちに復帰というのが叶うのかなと言ったりもしていたんですが、足音がもう聞こえてきたという表現をしたんです。復帰の足音が聞こえ始めてくればくるほど、どんどんどんどん右傾化していく状況、これは何とも言えない。これが実は今、私の中では大変な負担にもなっていて、ですから何であな方は復帰運動などをやって煽ったのかという、ずばりそういう詰問をする人も出てきますし、実際そういうふうになっ

ているんですよ。教育自体も教育委員公選制は、アメリカの調査団が来るのがたしか五一年ごろですよ。あの時からうんと右転換をしていくことになるけれども、教育の憲法と言われた教育基本法自体が形骸化されていくというふうなことも、復帰運動の高揚の時期に本土側との交流の中でもそれが一段と知らされてくるようになるし、だからあの時のああいふ思いは非常に矛盾を感じながら。ですから沖縄の運動、そういう両大国の中で翻弄されつつ、この矛盾相克の中の運動であったというふうなふうに思うんですね。私自身、これはどうなるんだろうかと大変な危機感を持つての運動に次第になっ

ていったというのはありますね。要するに「母の懐に帰っていくん

だ」みたいなセンチメンタルなそういうことなどを話す人もあったし、また歌の中にも日の本へという、これは何の歌かな、その歌の中にもあるんですよ。

屋良先生がこういうことをおっしゃったのも非常に印象に残っています。いわゆる日政援助というやつですね。六六年から実現をする義務教育費半額国庫負担の憲法で保障されたお金。他県と違って沖縄は灰燼に帰したわけですね。校舎やその他街もみんなね。ところが日本国民を教育している、五八年にそういう基本法を打ち立てた、それに対して日本政府が援助する。母親と子供、乳飲み子のお話をしたのを記憶していますよ。こう言っていましたね。自分の子供に、沖縄はいうなれば子供だと、乳飲み子に例えて。ヤマトの側を母親だと。「母親が自分の子供にお乳をあげるのに、「はい、援助してあげよう」と言うか」と。それは援助ではないんです、それは当たり前のことだと。そういう言い方を屋良先生時代にやっていた覚えもあります。あれは五三年の震災校舎復興運動の中でもうんと言ったらしいんだけど、それ自体がまたアメリカの癩に障ってパスポートを取り上げられた弾圧も受けるんだけども。

これは言わなかったね。復帰運動の前に屋良朝苗が会長になった沖縄諸島祖国復帰期成会というのをつくるんですよ、これは五三年その中には政党などは入っていません。それは政党を入れると、アメリカから直接、いわゆるイデオロギーを持つ運動体だということとで弾圧を受けるということが入れなかった理由の一つらしいけれども、政党から、特に人民党からは批判もあるんですよ。屋良に対して、なぜ入れないのかという。ところが全体として力が弱かったと。いわゆる力を持つようになったのは、土地闘争ですよ。これが六〇年の復帰協結成には、たくさんの団体が入るようになった。ところが五三年の期成会の頃には、そういう抵抗をするまでの組織体ではなかった。アメリカの弾圧にあつて、屋良は期成会の会長も辞めざるを得ない。教職員会長も辞めざるを得ないところまで追い込まれる。ところが辞めさせてはいけないという教職員会の再度の

信任投票によって彼は会長に戻る。さすがにアメリカは、そこまでは追い込めなかったですね。二度目の会長になったものをまた辞めさせることはできなかったと、こういう前段のそれがあるものですか、もうアメリカがそれを面と向かつてこれを潰すということではできないぐらいに闘いは前進をしていたというふうな、こういうことになっていたと思うんですね。

## ■「主席公選要求闘争」

### ○櫻澤 誠

そうしましたら、続けて主席公選要求闘争についてお願いします。

### ○石川元平

琉球政府が五二年に設立された。先ほど申し上げたと思いますが、これは米国の傀儡政権であった。アメリカの気に入る人しか主席にはなれなかった。こういうことで、主席が任命されるという時には立法院へ、我々特に労働組合、民主団体等は動員をしてそれを阻止しようという闘いを何度も組みました。ある時は、ちょうど立法院の二階に傍聴席がありまして、傍聴席の前には銅板が張られていましたね。これは太鼓のように鳴るんですよ。だから議長が何かやる時にはそれをババン、バンとそうやったら、また議場に飛び降りていくのがあるんです。ある時はこんなことがあります。立法院の正面の、今みたいに頑丈ではないんです。ガラス張りでした。丸太を何名かで持ってこれを突き破って突撃したことがあるんです。阻止をしたことがあるんです。ところがこういうものはみんな警察の手入れを受けて、後で逮捕されて裁判闘争になりました。有罪判決を受けます。実はこういう繰り返しの中で決定的だったのは、これも後で詳しくやりますが、教公二法阻止闘争が引き金になって、任命権者である、特にアンガー高等弁務官がゼネラルメッセージを発する二月一日、立法院開会の初日に高等弁務官が施政方針演説を



するんです。これはその前のアメリカの大統領教書を引き継いで、沖縄統治に関する弁務官のそれをする習わしになっていたけれども、それができなかつた日があるんです、教公二法闘争絡みで。これを米国民政府、そこから高等弁務官が見ているんです。立法院が取り囲まれている。だからこういう状況が色々ありまして、外に向けては先ほども申し上げたように、民主主義国アメリカが統治をしている琉球であるから、琉球は民主主義のショーウィンドウだよということを感じて盛んに宣伝を出して、『今日の琉球』とか『守礼の光』だとか、盛んにそういうふうなことを、銀行とか郵便局、いろんな所にこう積まれているんですね。いろんな団体を通じてもばらまかれたりもするし、ということがありましたし。

例えばキャラウェイは実質、更迭を後でされるんだけど、過激な発言をして。いわゆる米留組の集まりの中で、金門クラブというのはハーバービューの近くにあるんですけれども、そこで「自治は神話」なる発言をしたものですから、大変な県民の反発と怒りを招くことになって。

こういうことなどが起こって屋良朝苗、それから仲村栄春という市町村会の会長という、後に屋良の琉球政府の選挙の時に局長入りする人がいるんですけれども、北中城の村長でもありましたけれども、屋良朝苗、仲村という市町村の会長、それから沖縄タイムスの上地一史という社長、琉球新報の池宮城秀意社長、それと琉球大学のまだ文理学部長だったと思います。学長ではない、池原貞雄、五名で五人委員会をつくったんです。代表が屋良朝苗なんです。主席公選を訴えるという小さなパンフレットですが、かなりの部数でつくってばらまいたんです。もちろん本人たちが記者会見をし、タスキングとしてももう発する時期だという、いわゆる両新聞社の社長や琉大の人気のある池原学部長なども動員してこういうことなどもやって、そういう機運はつくられていったと思います。

ずっと復帰協結成から、六五年にはまた佐藤の来沖、義務教育費獲得期成会の大きな盛り上がり等もある中で、一方で進んだのが、

当然これは日本側の自由民主党等々の連携はもう時の琉球政府や与党もこういう頻繁な繋がりを持っていますから、これをどう抑え込もうかという、そこで持ち出されてきたのが数年がかりの教公二法です。

## ■「主席公選要求闘争」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。教公二法については、また後ほど詳しくお伺いするとして、私のほうから一つ質問させていただきますけれども、五人委員会が一九六五年秋の立法院選を前にしてつくられて本土のほうに渡って色々活動もされたりしたわけですけれども、主席公選自体はいわゆる保守側も含めて県民すべてが求めるものというか、批判し得ないものとして、それは復帰もおそらく同じことだと思えますけれども、あつたわけですよ。ただ実際、いわゆる自民党とか民主党に連なるような人たちというのは、どちらかというと腰が引けているというか、抑制しているようなところがあつて、そこでの対立というのはあるわけですけれども、そうした当時の保守側の主席公選に対する態度とか、そうしたことに関わってもう少し補足してお話をいただけるとありがたいなと思いますけれども。

### ○石川元平

六〇年代半ばからいわゆる任命阻止闘争等があつて、具体的にこれは議会の中で、本会議場の中で闘いをやりました。それが必ずしも適切かどうかはあるが、要するにこの流れはかなり前進をしてきている。こういう状況の中でやはり良心的な人たちは、私はそういう時代だという認識は非常に持っていたと思います。ただアメリカの体制の中で甘い汁を吸おうという人たちだつて、数の上ではそれはもちろん多かつたと思いますよ。そういう状況でしたので。

これ（主席公選）が決まって保守側の人選の中で、ある意味で屋

良にぶつけるような形で西銘という。彼らは勝てる候補、しかも師弟対決とも騒がれましたし、那覇市長の現職でありましたし。当時彼の前歴は社会大衆党ですよ。社会大衆党でかなり活躍してきたということ等々もあって、勝てる候補者として自民党の役職の誰かではない、あるいは松岡行政主席でもない、あるいは立法院の議長とかという経験者でもない人を立ててきたという、こういうことがありましたから。

私は数の上ではいわゆる民主党の中では消極的な人が多かったんだらうと思います。非常に良心的な、教公二法のあの裁きをやった長嶺議長などは、私が『教公二法闘争史』などを出す時など、僕はわざわざお電話をしたぐらい。僕も相手には非常に敬意を表して気を遣いましたけれどもね。こういう良心的な人たちが保守層の中にもかなりいたし、それから新里清篤氏の話もしたけれども、晩年、彼は杖について私に会いにもきたりしたんです、会館に。もう杖について二階まで上がれないものだから、一階の食堂にいて僕が呼ばれて、これは自分の書いたものだから読んでくれ、参考にしてくれというふうなことは、やはり一種の自身の反省だと僕は踏まえられた。奥さんは僕の恩師だということもわかっていますから、そういうこともあって。そういう良識的な人、これはね、警察官の中にもいるわけですよ。あれがなければどうなっていたか、ようやくってくれたという。

## ■「佐藤訪沖（来沖）」

○櫻澤 誠

このあたりはすこし話が重なってきませんが、続けて「佐藤訪沖」についてお願いします。

○石川元平

沖繩はね、我々は「来沖」という言葉を使いましたので。佐藤来

沖は教職員会、沖繩の教育界としては非常に願っていました。復帰協はある意味、期待と警戒が半々だったと思います。教育界としましては、いわゆる日本人教育をやったけれども、政府の施しを一切受けずに、『戦後二〇年・教育の空白』というパンフレットなどを出したりで、そしてこれを行政、文教局や教育長協会、教育委員協会、市町村のあらゆる所にこういうことをずっと宣伝をして機運を盛り上げておりましたのでね。佐藤総理が六五年に来る前から義務教育費獲得期成会というのをつくってあったんです。そのような運動も始めて、文部省にもそのようなことも既に運動を開始していました。

佐藤総理がたまたま六五年夏に来沖した時に、教職員会長の屋良朝苗は、義務教育費獲得期成会の会長として空港で出迎えたんです。出迎えた後は、現在は天久の杜という、元参議院の大浜方栄関連の巨大な施設になっていますが、その前は東急ホテルでした。その東急ホテルで沖繩の各界各層の陳情を受けるということで設定をされたんです。総理の日程が、屋良期成会会長は、前から要請をし続けてきた義務教育費半額国庫負担の要請をそこでやりました。それは大きなものは、子供たちの教科書の無償配布、それと校舎建築費等の国庫負担ですね。それから教員給与の半額国庫負担です。三つの大きな柱をもって要請をしたことに対して、たくさんの各界各層の要請を受けたんだけど、屋良朝苗にだけは「わかった」というふうな返事をした。これはたちまちみんなに伝わったようです。非常に羨ましがられた、そしてまた喜んだという。自分たちのものは聞き置き程度にされたけれども、屋良に対してはわかったという。これは事実、翌年からも予算化されるんです。

ただ受け流されたのではなくて、これが実際、結果をしていくことに繋がったということで成果を収めたわけですが、なぜ佐藤総理をして、前年からの運動が、県民的な教育界を巻き込んだの運動として広がっていたとは言っても、その訴えが非常に功を奏したと。これが屋良先生からも直々に聞いたのは、日本国民教育を五八年の

あの立法以来ずっと続けてきながら、本土各県はその施しを受けて順調に戦後のこういう復興、歩みを続けてきているけれども、沖縄は置き去りにされてきたという、こういうことに対して非常に申し訳ないというふうな対応をしたようです。それで「わかった」という。

これは松田竹千代という文部大臣がいるんですが、八汐荘の二階大広間の中に松田竹千代の扁額があつて。彼が沖縄に琉大の何かの行事で来た時に、屋良会長が教育基本法制定の苦労話をしたようです。そうしたら、アメリカの施政下においてこういうことができたのかと。驚異的なことだと。文部大臣がものすごいそういう驚きの気持ちを発しておられたというぐらいですから、当然総理もそういうことに突き動かされたんだろうという。当然、政府として責任を感ずるべきそれを、アメリカに委ねたけれども、アメリカの対応は全くやられていないというふうなことなども一切含めてそういう説明を受けたものですから、一つは義務教育を中心とする、また屋良がその訴えたことが結実をしていったのは、屋良の布石論が功を奏した一つの大きな例としてこのことが申し上げられますし。

あと一つは、一方まるつきり反対で、復帰協は那覇高校で県民大会を開いたんです。僕なども当然そこへ行つて。那覇高校は比較的与儀公園などよりも五八号線に。当時は軍用道路一号線と言っていました。県民大会が終わって向かう先は東急ホテルです。佐藤総理が宿泊する場所がそこだということをみんな聞いていましたので、そこへみんな押しかけようと。今みたいなデモではないです。フランスデモといましてね、道いっぱい手を広げて、ですから車は一切、みんなシャットアウトです。こういうことで何キロでしょうか、東急ホテルまではおそらく二キロ前後だと。教職員、我々は一番先頭部隊ですね。我々は浦添市のキャンプ・キンザーの入り口まで、そこで座り込みをしたんです。もう当時の東急ホテルの入り口を含めて、ずっと泊のあたりまでみんな座り込みですよ。そのために、宿舎に帰ってきたら直接復帰協の陳情を受けると。ところが

こういう状況を見て佐藤総理は帰つてこなかったです。帰れない状況もあつて、しかし陳情を受けると言つたつて、そんな大衆の前で受けられる状況でももちろん、判断もそうだったと思うよ。どうしたかといつたら、基地内のゲストハウスに泊まらざるを得なかったんです、佐藤総理は。

そこまではいいんですが、その後、一定の締めをして解散をしたんですが、我慢できなかったのが琉球警察の警察官ですよ。非情な乱暴、横暴を振るいました。警棒を振るつて解散遅れた労働者に対して警棒を振るつて、かなりの怪我人もこの日出したんですね。こういうことなどがあつて。六〇年から七二年、返還までのちようど半ばに現職の総理が初めて来て、これは復帰協でもそういう位置付けをしています。私は個人でも復帰運動から復帰闘争への大きな質的転換を遂げた時期だというふうな見方、位置付けを実はしています。ですから復帰闘争、そして本土側とのお互いの言葉の中、文章化の中でも、本土側も沖縄奪還と言つたり、それから返還闘争と言つたり、こういう言葉として。ですから復帰運動の質的転換を遂げた、それをもたらしたのが佐藤来沖であつたと、こんな位置付けですね。

## ■「佐藤訪沖（来沖）」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。お話の中で復帰協が佐藤来沖の時に県民大会を行つて、座り込みをして最終的に警察官から解散命令が出て。○石川元平  
すぐ帰らない人たちがいたわけです。

### ○櫻澤 誠

それで遅れたところに警察官が突入して、怪我人が出るという状況が起こるわけですが、その翌日には復帰協の中では反対だったけ



れども、当時の喜屋武復帰協会長は陳情をするわけですよね。そのあたりについては、具体的な当事者としてのご記憶は？

#### ○石川元平

それはあまりないですね。ただ、僕らも寸前のところだったと思う、一番先端にいたから。解散命令やったら大半が帰っているんですよ。ところが我々も平穩のうちに帰ろうというふうな状況の中で、しかしあのトラブルを見てしまったんですね。警棒を振るって血を流しているというふうな状況等も見まして。

これが後々にはかなり。請願運動する側にも普通のプラカードではないようなもの、これは二通りありますが、直接警官に対するそれというよりも、右翼の妨害等も何度もありましたのでね。普通の細いものだったらこう折れます、彼らとチャンバラする時にも。ですから、かなり頑丈な角材にプラカードなどを掲げて、いざとなったらこれが木剣以上の力が立つような、こういうふうなものとしても実はある中で、警官隊のこういうことなども引き金にもなっているんですよ。正当な請願運動に対して何事だというふうな、こういう警官隊の行動に対するそれもありましたね。後では山川巡査というのが殉職をするという事態まで起こったりもしますけれども、これはまた屋良さんが主席になって後のことでもあるけれども、非常に心を痛めていたりもしましたね。

#### ○櫻澤 誠

右翼からの攻撃に常に警戒しなければいけなくなつたというのは、大体いつごろからですか。

#### ○石川元平

これは選挙の時もあります。やんばるで山川勇という浦添の社会科の教員を引つ張り出して立法院に出しましたけれども（一九七〇年一月の第一選挙区補欠選挙）、国頭、奥間の出身でしたけれども、あの時も那覇を含めてかなり教職員を動員をして支援にも行ったりしたんですが、一つにはやんばるの保守的な所ではよそ者を入れないというふうな、いわゆる支援者ですよ。当時は道一本しか

ないものですから、五八号。集落に入っていく所には松明が焚かれたりというふうなことがあったりし、動員をしてみた車、それをみんなアイスピックみたいなものでパンクをさせたりもしたり。一般の人はこんなことまではやりません。これは中部、那覇あたりからきた右翼勢力は地方でもそういうことをやっていたし。だから教公二法の時は福地部長もやられたりもし。それから全軍労は各支部の強力な青年部がありますけれども、バスで与儀公園などへも動員をしていきましたけれども、それが右翼に襲われたこともあるんですよ。だからそういうふうな反省を踏まえて、逆に右翼が半殺しに遭ったこともあるんですよ。そういう備えをやって迎え撃たれてという。直接的なそういう妨害、後はちよつと陰湿な妨害をするようになっていった気もしますよ、右翼がね。

これは今でも思うことですが、右翼というのは元々民族派でしょう。なぜアメリカに向かわないのか。鬼畜米兵のアメリカ、今でも居座つて、それを反対している、なぜ我々のほうに矛先が向かうんだという。これは右翼の中でもはっきり批判している人がいますね。一水会の誰だったかな、かなり批判をしている。ああいう良識的なわかる右翼もいるわけですね。ところが全く何なのか、金を握らされたただ暴力を振るっているあれなのかという、そういうのが実は多いんですよ、今でも沖縄でも。

だから本当は三権力プラス、それを含めての闘いをずっと続けました、選挙でも、運動でも。今でもそうです。

### ■「教育権分離返還問題」

#### ○櫻澤 誠

そうしましたら、「教育権分離返還問題」と「教公二法阻止闘争」まで続けてお願いします。

#### ○石川元平

はい、続けていいですがね。ただね、教育権返還のあれはもう大筋わかっておられる。一言申し上げると、いわゆる復帰協が、これは僕の記憶では六七年と覚えていますが、即時無条件全面返還と言うのは。ヤマトの総評、社会党、あるいはもちろん共産党関係を含めて、その論議の中で即時無条件全面返還という。復帰協の中にも運動方針がたくさんあるんです、実は。渡航制限撤廃、自治権拡大とかたくさんある中で、もうメインのスローガンの基本方針として、即時無条件全面返還が出た背景のうちの一つが教育権返還なんです。

これは、最初は誰も復帰ということとは実現するとは思わない。屋良さん自身がそう。目の黒いうちにはどうのこうのという話を直接聞いたこともありますから。できるものからということなんですよ、一つは。基地に直接の差し障りのない、しかも教育基本法も日本国民をうたっているし、教育権は先に返して、これだけではなかったですね。戸籍みたいなものまで、直接基地に差し障りのないものは機能別に先に返していいのではないのかという。実はこれは政府の森総務長官、彼の構想として打ち出されて、これは一定、組織論議も、復帰協でも論議をし。

あと一つあったのは、これはぜひ本土の側にも覚えてほしいんだけれども、宮古・八重山には米軍基地がないんです。ないから米軍基地のない先島を先に返していいのではないのかという地域分離返還ですよ。

この地域分離返還というのは、絶えず日本の明治からの体制の側が考えたことです。明治政府と清国政府との交渉の中でも、分離する案を日本側が提示したんだと、宮古・八重山は中国側に。これは最終的に琉球王府も拒否したんですよ。だから中国の側で自決した人までいるんです。中国側にこのようなことにイエスと言わせなために。明治政府が提案したとおり、清国政府が応諾をしていたならば、もうニーハオと言って、宮古・八重山は中国語、台湾と一緒にこういう地域になっていたであろうということも実は無きにし

も非ずだったんですよ。だからこれは今でもそういうふうなことは絶えずやりかねないものとして、やはりこの歴史的な経過はちゃんと知っておいてほしい問題として教育権の分離返還が、地域分離返還を含めてそれがあつたと。

ところがこれは復帰協、教職員会もそうですが、復帰協の論議の中でこれは潰されていって、即時無条件全面返還する、復帰、即時だと。分離とか、教育、地域、機能別とか、こんなのは一切することなくて全面返還だというふうなことで収まって、これが復帰の対応を問うことになった主席公選でまた前面に掲げられることになっていくわけですね。

## ■「教公二法阻止闘争」

### ○石川元平

まず教公二法というのは地方教育区公務員法と教育公務員特例法、本土の側では既に教育二法ということで法制度化されたそれを沖繩に持ち込もうとした。一方では教員の身分法であることは間違いないんです。ただ教職員会や、そして後に多くの県民が反対するようになったのは、その中に三つの大きな反対の要素があつた。

いわゆる争議行為を禁止をする。これは最終的に我々は大きな反対をしませんでした。もう一つは、勤務評定の実施ということについても反対したけれども、最後までその阻止行動をとらざるを得なかったのは、アメリカの施政権下でありながら教職員を縛る政治行為を禁止する。最初は制限でしたが、これは禁止という条文に民主党は変えてきましたから、これが禁止となると、アメリカ側がみんな評価をするわけですから、復帰運動も、平和運動も、人権を、アメリカの施政に反対するようなものは反米的な政治活動とみなされて抑え込まれる。そうなたら大変だという意識を学校の教職員だけではなくて、労働組合、県民大衆が持ってくれたということで、

実は教公二法阻止県民共闘会議まで組織されるんです。この中心の勢力は県労協、亀甲康吉という議長がいましたけれども、これは労働組合だけではなくてあらゆる団体に共感を呼ぶようになって、やはりアメリカが狙っている、復帰を叫び、県民の先頭になっている教職員を抑え込もうとしているこれは何としても、逆にこれを阻止しなければならぬという。

一方でこれを通そうとした側は、当時の行政の仕組みは、この法案の最初はどこで決めるかという中央教育委員会です。当時、琉球政府文教局があり、そして一番権限を持っているのは中央教育委員会だったんですね。文教局は事務局的な、わけても教育委員は公選制のそれを持っていましたので、司法、立法、行政に次ぐ教育四権的発想が非常に強かったです。非常に強い思いで教育は見られていたんですよ、本土の任命的なあれとは違って。ですから、そういう行政機関である文教局をある意味で縛る権限を持つ中央教育委員会が教公二法の原案をつくったんですね。これをつくるのに教職員会はうんと反対したけれども、これは数の力で押し切られてしまった。そして、その中央教育委員会の成案したものを立法院に送られて、これを通そうとしたんです。

これを阻止するためにはただ、そういう大衆闘争として力のそれだけをやったのではなくて、教職員会、各一二地区ありましたけれども、隅々に至るまで各校区ごとに教公二法というのはこういうものだという、これを潰すために支援をというようなことで。教職員会は地域懇談会というものをずっと伝統的にやってきたんですよ、全県下で、離島を含めて。こういうことが非常に役立ちました。これは戦災校舎復興運動の時に、そして少年会館建設の時にもずっと地域まで、市町村までやっているんですよ。その末端のPTAや青年会や婦人会や、あるいは教育委員会や、そのそういう賛同を集めているというこういうのがありましたから、大体それはもう手慣れたものでもあったし、この教公二法についても全県下に思いを広めていると。

これは実は小さなパンフレットがあつて、なぜ反対するかという、これを書いたのが屋良先生ご本人です、基本的には。たくさんの情宣資料も出しはしましたが、ご本人がこれをみんな執筆をし、これを印刷してばらまいたわけですけれども。

特に一番ピークを迎えたのが六七年二月一日。二月という沖縄でもさすがに寒いですよ。しかも立法院は北に玄関が向いています。そこでハンガーストライキをやったんです。夜はひさしの所に移ってね。そうしたら、さすがに女教師や屋良先生の教え子などはもう泣きすぎるようなことで、先生それだけはやめてくださいと、我々がやりますということ。しかし屋良朝苗は体を張ることに対しては若い者には負けないぐらいのそれ持っていますから。だから文部省にも五〇日、座り込みをしたという、頭がおかしくないのかと言われる、色々なことをやりながら、貫徹する人なんです、懊悩、苦悩しながらね。そういう二月一日のそれも、当時いろんなことを強行しようとする中で、高等弁務官はゼネラルメッセージを発するために民政府で見ている。囲まれているんですよ。だから簡単に主席公選を許してはいけません。まずそれを見ている。

最後の決戦場になった二月二四日、本島内の学校にも当番を残して総動員をし、労働組合、民主団体、平和団体、いろんな人たち、農業、商売をしている人たちも二万五〇〇〇で取り巻いたわけですよ、立法院を。民主党は議員総会にはかつて二月二四日にはぜび突破するんだと言つて、約一〇〇〇名の警官隊で立法院を取り巻いているんですよ。最初のうちは我々も八汐荘、少年会館、教育会館で寝泊まりをして、最初はこつちが劣勢ですよ。未明のうちは動員をかけて、すぐ何万人も集まるわけじゃない。そこでいざこざがあつて女教師などもうんと殴られたり色々あったらしい。それを後でまた挽回するんですけどもね。最終的にどうしたかといいますと、労働者を中心約二万五〇〇〇名の大衆をもってガードしている警官隊をごぼう抜きしたんです。これは日本の歴史上初めてですね、大衆闘争で立法化、そういう意味で阻止したのは。



あれは映像などを後で見たらびつくりですよ。やはりあれだけの人の数が警官に、一番若い者たちを前列に加えて、スクラム組んでぶつかっていきます。もうガードするのに精一杯で防ぎ切れないですよ。彼らが完全にそこで断ち切られて、たった一人になったのを引き抜いていくんです。波で押し寄せて、返す力で引き抜いていく。特にヘルメットなどしてはいますから、こちらに手を入れられるともう息ができないような格好でパタパタして自分で歩いてくるような、こういうふうなことでみんなごぼう抜きしていった。ヘルメットなどは、構内にあるデイゴの木などにみんなぶら下げて見えるんですよ。こういうことで警官隊を完全排除して、それで我々は立法院内に突入ですよ。

そうしたら、もうそこです。いろいろなことがありますが、民主党の幹事長などは裸になって屋良にもう殺せと詰め寄ったぐらい、そんなこともあったらしい。当時、長嶺秋夫という立法院議長です。非常に冷静な人で、うまく彼がさばいてくれた。屋良朝苗、喜屋武真栄、福地曠昭、亀甲康吉と各党の代表などが行って、立法院議長とそこで談判、最後の折衝をし、この状況をどうするか。もつとひどくなるわけだから。議長はまた民主党の議員、イチムドウヤーしましてね。行き来をして、それで最終的に廃案協定なるものを勝ち取るんです。これは後で尾を引くことにはなるが、実質もうその日に勝ち取った成果なので。

後でアメリカの公文書館から出てくる資料によると、首謀者である屋良と喜屋武真栄事務局長と、福地か亀甲か、この指導者たちは逮捕すべしということを高専弁務官に松岡主席が直に要請をしたけれども、逆にアンガー高等弁務官になだめられて、こんなことをやったらもつとアメリカとしてもひどい状況に追い込まれるんだというふうなことで、もちろん逮捕に至らないけれども、後は裁判闘争には教公二法闘争はずっと続いて、屋良も主席になってから証人にも立つんですよ。当時の気が済まない人たちは、やはり屋良逮捕というふうなことを強く願ったようだけれども、それはさすがにそ

んなことまでは基地権力者も成し得ませんでした。そういうことなどが実はあって、これはさつきも屋良の秘められた運動力学理論が地で行くように、先頭に立ってそれを実践をしたために、この戦後最大の教育闘争と言われる教公二法阻止闘争は勝利したんだと思いますね。

僕が沖教組委員長を退任する前年に『教公二法闘争史』というのを世に送りましたけれども、あれは終章という、最後の章だけ僕が書いたんですね。逮捕者もたくさん出ましたから、闘いの中で。一〇年近くも裁判闘争が続くんですよ。裁判闘争記録も十何冊もあるんですよ。こういう闘いの経過と総括を踏まえて、闘争史では、終章の中で「教公二法の阻止闘争の成功無かりせば、主席公選も七二年復帰もなかった」と結論付けました。

高等弁務官はこういう状況を見ているものですから、アメリカの現地の施政権者としても無視できない状況になって、翌年の二月一日のゼネラルメッセージで主席公選を許可すると発表するんですよ。これが大ニュースになって、さてどうするんだと。それから革新側の統一候補をどうするかというふうな論議が始まって。三党プラス公明党も後は加わってきて、あと労働組合、民主団体が結局戦後の沖縄の歴史を切り開いてきた屋良朝苗にこれからの沖縄の運命を託すというふうなこういう決断をして、統一候補、屋良が受けるようになったわけです。

その状況なども私もつぶさに見てきていますが、那覇の松川に屋良家があります。この家は有名な宮里栄一という後の琉球政府建設局長になる、元東大大学院出の一級建築士です。八汐荘、少年会館などを建設した人ですが、あの屋良家は玄関は北向きなんです。松川の学校の森があるんですが、庭になって、北向き。玄関口は石を敷いてあるんですよ。切られた石を敷いて、冬だったら冷たいです、やはり石は。厳しい時は何度か石の上で夜を過ごす。そういうことがあったんです。本人はあくまでも自分は教育者であって、この政治の世界には向かないという、断りの理由にずっとそう言っていま

した。本土に行っている人の方にも、自分は教育界を歩いた人間であって、政治の世界ではずぶの素人であると。ところがこういう要請を受けてどうしたものかという、そういう指導を色々仰いだんですよ。そして本人は亡くなる寸前まで、評価として後世に、政治家的な評価は受けたくない。自分は教育者ということで幕を閉じたかった、そんなことをずっと言っていました。だから若い人たちの復帰に対する思い、それを気にされたわけだけでも。

教公二法闘争であれだけ廃案協定、勝利を収めたものですから、革新の支持、いわゆる党派を超えて屋良朝苗に、救世主という言葉が非常に多かったですね。マスコミのある優秀な政治記者は、これも僕の印象に残っていますけれども、モラルの改革を期待すると言っていましたね。これは実は直前の琉球政府の中に黒い霧事件というのがあったんです。副主席を務めた小渡三郎という中部出身の人間が、タクシー汚職があつて。それだけではなくてアメリカに寄りすがつて、県民の復帰でもない、基地権力に寄りすがつて甘い汁を吸つてというふうなそういう生き方に対して、やはり人間的な生き方を本当に求めるという、モラルの改革と言った人の中にはそういう思いが込められているというふうに理解しました。こういうことで期待をされたりということがありましたので、どれだけ主席公選に対する県民の思いが高まったのかという。実はその高めた五人委員会の中心が屋良朝苗でもあったわけですね。後で蓋を開けてみたら、本人がまたそこに出ざるを得ないという状況にも追い込まれたわけだけでも。

屋良朝苗に対しては屋良天皇という人までいたんですよ。これは冗談半分ということもあるが、半ば真面目なという、ある意味で確かに近寄りがない人ではあったわけですよ。これは事務局内でもピーピーピーが鳴ったら「ウリヒャー」と言つてみんなが緊張するぐらいの、緊張感を持つて仕事をやっていましたから。やはり天皇も近寄りがない人ですよ、現人神もね。それぐらいとにかく近寄りがない雰囲気を持つている人でもあったわけだけでも、屋良の

育ちから僕はわかるものですから。読谷の瀬名波という、渡慶次小学校の校区ですが、その中のさらに残波の根っこなんです。残波岬の北側の根っここのヤードウイなんです。ヤードウイといったらもう首里士族で何軒かあるような、開墾をしなければ生きていけないようなこういう所で、シベリア下ろしの寒風にさらされて大変な寒い所です。こういう場所で鍛えられた。すぐ望みどおりの進学もできなかつたものですから、そこで学校の給仕をしたり、その学校で自分の同級生がもう先生をやっていたりね。こんなことで、戦後、教職員会長になつてからでもやはり権力に寄りすがつた人たちはいい思ひして、いい服を着てやっている中でも、隠忍自重しながら冷房機もないような部屋でね。私はだから立法院の前にハンガーストライキを二月にやったあの姿を見て。ただの反骨ではないですよ。ただの不届とも言い難い。そういう権力に対しては強い反骨の、一種のレジスタンスのダブるような姿を私は見てきました。

## ■「教育権分離返還問題」「教公二法阻止闘争」の 質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。このあたりのことについては私も以前に書いたりもしたこともあるんですが、もう少し詳しくお伺いしたいなと思うのは、地域懇談会での話し合いとか、そういう部分がある。すごく大事だったという話もありましたけれども、もう一つ、子供たちに対して二月一日、二四日の十割年休で学校を休みにして闘争を行うというところについて、やはり屋良さんは大分そこはぎりぎりまで苦悶したという。

### ○石川元平

最初は民主的な立法要請をしたんですね。ところが交渉を重ねて

やっついていくうち、また相手の出方の中で、これは我々の要望は通らない。むしろ政治行為などは制限から禁止に見られるように、そういうところまで行く段階で、これは何度も全役員合同会議を開くんです。教育会館はいろんな監視されているものもあつたし、場所を八汐荘に移したり、あるいは少年会館で。

全役員といいますが、まずは理事です。各一二地区の会長がいるわけですね。そして各専門部の部長がいるわけです。当然、本部は部長たちがみんな入ります。そして各一二地区の支部から、一二地区から、当時は支部とは言っていないませんでした。一応独立した地区教職員会としてありましたので、この各地区教職員から理事のほかに、総会に次ぐ第二の決議機関で中央委員というのを置いていたんです。これは会員に比例して何名、何名と決めていましたけれども、この中央委員を含めて、これを全役員合同会議というもの。これはしょっちゅう、何回も開きましたね。

この中で一番問題になったのは、十割年休、実質ストライキですよ。この件に際しては、かなり屋良は反対しましたね。これはおっしゃるように子供との関係です。父母との関係です。さつきクローを自分の部屋に入れないのも、彼の頭からすれば、どういう場所です子供たちが勉強しているかということがすぐ頭にあるわけですよ。こんな行動をやるとどんなに正しいと言われても、子供たちはどうなのかという。そこで編み出されたのが、ですから十割年休ということですよ。ただ十割年休するだけではない。学校の保安要員を残し、やった後は必ず償いをする。補習をしていく。これを徹底したんですよ。これで実は父母の、県民の評価を高めたんですよ。こういうことまでやって屋良は後は折れたんですよ。だからわかったら自分が身をさらすという戦術までいくわけです。ぎりぎりのできるところまで徹底してやって、最終的にどうにもならない最後の手段ということ、これは県民が、いわゆる子供たちを持つ父母も理解をしてくれるであろうという、そういう戦術に対してわかったということになったわけですね。

#### ○櫻澤 誠

その合同会議が何度も行われたりする中で、当時の新聞報道でも、例えば一二地区あつたらその地区によってやはり温度差というか、より積極的な地区もあれば、そうではない地区もあつたり、専門部であれば、青年部、高校部とか。

#### ○石川元平

青年部、高校部そして中頭などは一番元気のある、貫徹、非常に出していました。思い出しましたよ。つい最近亡くなった初代の教職員会の高校部長だった宜保幸男、彼は後で高教組の初代委員長になります、彼はまた大きな声でね、屋良先生の説得に当たっていましたよ。

#### ○櫻澤 誠

大体青年部、高校部と中頭あたりが強く主張して、それが通るというか、説得を受けて屋良さんが十割年休ということ。

#### ○石川元平

最後はおそらくそうだったと思います。数の上で、そんなに強くというよりも那覇も当然それはやるべし、そういうことでは中頭に引けを取らないぐらいの体制は当時ありましたので、やはり小さい地区のほうではね。あとはやはり屋台骨を自認しているそういうところ、反対するようなふうな、これはそのほかのことでも大体そういうことで収まりましたよ。

#### ○櫻澤 誠

そのあたりというのは、当時次第に明確になっていく教職員会、沖教組の中でのいろんな党派の違いというか、そういう部分に繋がってくるんでしょうか。

#### ○石川元平

教公二法の時までにはさしてそういう感じはしませんでした。日教組加盟の論議の中、特に教組の中にあつては、そういう中頭、那覇とかという言葉が使われるようになった。



○櫻澤 誠

まだ教公二法のあたりはそこまで明確にわかるようなものではないということですか。

○石川元平

なかったし、那覇の当時の教職員会長が仲間智秀という、ものすごく穏やかであるが、しかし非常に芯の強い方でしたから、元々は久米島の出身でしたけれども、また一定の統率力をかなり持っていましたので。これも六七年ですが、私は総務部で数年勤めて後、教育文化部の副部長と青年部の副部長をやったんですよ。だから青年部のことはまたある意味でよくわかります。元気なところ、酒を飲んだりいろんな論議の中で、校長以外はみんな青年部でしたから。

今四・二八会の中に山城清輝という、もう今九〇歳になりますけれども、諸見の校長をやったり、沖縄市の教育長もやったり、市長候補にもなった人ですが、僕らの四・二八会の最年長者がいるし、三代目の青年部長ですよ。もう一人、三線で今一緒の中石清重（せいじゅう）というのがいますけれども、まだ元気で今度トーカー、八八歳を迎えますが、うちの三線の幹事長をしていますけれども、あの時の僕が副部長なんです。

副部長が僕ともう一人、現場出身のがいて、これは間もなく校長になりますけれども、那覇で勤めていて、やんばる、今帰仁の出身でしたが、青年部の雰囲気はよくわかります。あの時も確かに元気がありました。会議は早々に切り上げて酒を飲んで頑張ろうというふうな感じでやっていましたよ。そのために出席率も非常によかったです。あの時は難しい論議をしないで、もう決議、決めて。あの時まではそんなに那覇、中頭というふうな、後に尾を引くイデオロギー的なそのような形は。後でうるさくなるのが、セクトが入ってきたからです。非常にややこしくなったのは。

○櫻澤 誠

そのあたりはまた次回に復帰前後の中で伺えればと思います。

## ■「屋良会長および石川氏の佐藤・ジョンソン会談への印象」

○櫻澤 誠

そうしましたら、これは外交史が専門の吉次先生の特に具体的にご質問で、今日はいらっしやっついてないですけども、六七年の一月の佐藤・ジョンソン会談についてですね。その時の「両三年内」という、それについての印象ということなんですが。

○石川元平

特に佐藤・ジョンソン会談に対する屋良先生の直接的な、私の印象に残るコメントはなかったと思います。ただ六五年、佐藤総理が来てからの流れですよ。駐米大使、政府の側の動きを復帰協は非常に警戒心を持って。ですから即時無条件の大きな基本方針が決まっていくなのはそういうせいでもあります。日米は非常に危険な方向で沖縄を処理しようとしているなという危機感を当然持っていましたので。こういう認識だけは、確認したわけではないけれども、その時の会長は喜屋武真栄、自分の部下の事務局長ですから、持っていたと思いますし。

私は後に復帰闘争史の編纂にも加わったりしていましたので、この件に対しては六九年の佐藤・ニクソン会談のルールを敷くためのそれにもなったと思うんですよ。時期をめぐりにしていくことにも繋がったんでしようけれども。対米従属のそれを敷く、一歩踏み出したことを確認した首脳会談にもなったというふうに思って、これは実態として幾らでも証明できるものですから、そういうこととしてこれは県民要求とはかけ離れた、反するようなことを復帰の要求が高まっているこの状況の中で、これに対してはもう何とも、復帰に対して気乗りしなかった人たちを含めて、非常に複雑な気持ちになる状況ですよ。むしろ六九年に至る始まりだと思います。そう

いう県民の要求に反するような対米従属の路線にし、沖繩の欺瞞的な核抜き本土並みのそれを政府として固めていった、ルールを敷いていったこういう首脳会談であったなということ。

○櫻澤 誠

このあたりについては、六九年の佐藤・ニクソン会談への印象という項目もありまして、次回、吉次先生がいらっしやると思いますので、その時にまた改めてお伺いできればと思います。

## ■「三大選挙（それ以前の選挙への関わりとの比較も併せて）」

○櫻澤 誠

それでは三大選挙やそれ以前の選挙のことについてお願いします。

○石川元平

いわゆる三大選挙、それ以前の選挙の関わりとの比較ということでもありますが、主席公選、立法院議員選挙、那覇市長選挙、これを三大選挙と言いましたけれども、ここから初めて沖教組が本格的に選挙に関わったんです。

その前はどうかといったら、沖繩では公明選挙推進協議会というのがありました。これは例えば官公労、教職員会、あるいは全通労というのがありました、郵便関係ですね。それに青年団、それから婦人会、沖婦連ですね。沖繩は小選挙区制なんです。恣意的な小選挙区割というのは誰がつくったかというところ、グリーというアメリカの知事が編み出したんですね。これは誠に、沖繩で実際やられたことなんだけれども、こつちとこつちを組み合わせたら与党が勝利するというふうなことなどの区割りを色々やって、とにかく体制に都合のいいような区割りをした。これがゲリマンダーと言われる小選挙区制を沖繩でも敷いたわけです。公明選挙推進連絡協議会を

つくって、堂々と、今でも一番の選挙違反に問われている買収とか、供応とか、地位利用とか、こういうものはせずに公明な選挙をしましようという。

そういうことで実は私が具体的に関わって、後でこれは裁判闘争にもなるんだけど、（一九六五年に）我々の総務部長である新垣孝善を島尻の南風原の選挙区から出したんです。そうしたら保守側の応援弁士は瑞慶覧長仁といまして、元青年団の会長ですよ。もう一つ大きな肩書きを持っていたのは青年開発隊。沖繩は移民県ですからね、大宜味村の江洲という所にある、これは大保の上の山ですが、そこに今でもあります青年開発隊、彼はその理事長をやっているんです。彼が新垣孝善のライバルなんです。保革一騎打ち、あの時は体育館もありませんので、学校のグラウンドに裸電球を吊るしまして、式台が演台です。一人何分というようなことで立会演説会をグラウンドにみんな座らせてやったんですよ。そうしたらこの新垣孝善は口も悪かったですね。瑞慶覧長仁が結局、革新的なことをやった人間が保守に寝返りしたということとでこつ酷くやつけたんですよ。だから島尻ジュームツカーと言われるんだと。島尻の人間は尻尾がない。尻尾のないネズミの話みたいなのをやりましてね、すごく湯気の出るような真赤な顔をして瑞慶覧長仁が、新垣孝善候補者を式台から引きずりおろして、そこで両方相乱れて乱闘ですよ。全通の委員長をしていた亀甲さん、後で県労協の議長をする、彼がその責任者で、私は教職員会を代表して行ったんですよ。僕が副部長になったのもその翌年ぐらいですから、まだ総務部の一介の書記ですよ。屋良の秘書役をやっていたとは言ってもね。僕が教職員会の代表として行って、協議をしてこの演説会は中止。

後で裁判になったんです。こちらは訴えられたほうね、新垣孝善。新垣はまた暴力的に引きずりおろしたのを逆に。あの時の証人、亀甲康吉、私、それから青年団からやってきた金城義夫というのがいる。三人、裁判の証人に引っ張り出されまして、相手側の証人は農

民が多かったんです。そうしたらね、相手側の弁護士、中村眺兆と  
いうのはご記憶ありませんか。自民党の副幹事長ですよ。ものすご  
い切れ物でしたよ。彼が元氣だったら主席に、あるいは国会議員に  
でもなっている。出身はやんばるですけどもね。とにかく弁論を  
やっていて、僕はたじたじの面もありましたけれども、彼は後で  
立法院で決議したことを本土に行つて国会政府に陳情に行く時に  
方不明になったんです。これが歯医者という理由だったんですけ  
れども、あれで命取りになったんですけども、彼が保守側の弁護人な  
んですよ。色々誓いをさせられて、亀甲さんから金城さん、僕など  
をこうやっているうちに、我々は行く前に一定の備えを当然やつて  
いつて、相手の暴力の件を責めるわけです。正當な、こつちは別  
に孝善の味方でもない。公正な立場で公明な選挙をさせようとい  
う、こういうことでああいう事態が起こった。確かに新垣の口も悪か  
たかもしれないけれども、直接的に乱闘が起こったのは瑞慶覧長仁  
の暴力行為だということで論陣を張りまして、こうやつたら中村眺  
兆が、印象に残っているのは、相手の証人はみんな一定の指導的な  
立場の物を言うことを職業としているような、こういう人たち。し  
かし自分たちの側の証人は思っていることでも正直に言えない農民  
たち。あれが非常に印象に残っています。結局は不問に付されまし  
たよ。これは両成敗になりましたね。こんなことで直接タッチはし  
ませんでした。

もう一つは、学校の教員の身分でありながら、教公二法もありま  
せんので、市町村の議員になることもできたんです。現にいました。  
三大選挙のそれ以前はそういうことだったんですけれども、いわゆ  
る三大選挙で屋良朝苗教職員会長が革新統一候補に推されて初めて  
ですね、本格的にどう関わるべきか。そして事務所も教育会館の三  
階に置いたんです。

後援会長は平良辰雄、五〇年の沖縄群島政府の知事。非常に印象  
に残つて写真も持っているんですが、今の琉球新報、泉崎ビルの二  
階で開いた時に、平良辰雄後援会長はこんな趣旨のことを言つたん

ですね。「歴史的に差別と犠牲を強いられてきたこの沖縄にあつて  
は、国家権力の与党となるような人を沖縄にあつては出してはなら  
ん」という、非常に高尚な歴史的な挨拶をしたものですから、強い  
印象に残っています。そういう体制をつくつて革新共闘会という  
ふうなものをつくつて、この議長は喜屋武真栄です。あと、各党の  
党首がそれを取り巻いて、政党、労働団体、民主団体、婦人団体等  
を網羅した革新共闘会議がそこでできて、また屋良さんを励ます会  
という後援会ができて。これで最大の争点になったのは復帰の対応、  
復帰をどう思うかと。屋良は即時無条件全面返還、核も基地も認め  
ない。安保条約も自衛隊も認めないと、こういうことを掲げて平和  
な沖縄を、いわゆる基地からの脱却をし、平和憲法体制への復帰を  
ということ、その過程の中でさつきモラルの改革という話もしま  
したけれども、そして屋良に救世主の夢を託する人たちのいろんな  
思いがあつて。

それに屋良は復帰運動以来、教育の中でもそのことをずっと訴え  
てきたことの締めくくりとしてこんなことをずっと訴えていまして  
ね。私が屋良の人間性をまた改めて再認識させられたのは、行く  
先々、それぞれ人数の集まりは違ふんですよ。一〇〇〇名近い所も  
あるし、そして一〇〇名足らずの所もあるわけです。そうします  
と、その選挙スケジュールを選対から持たされていて、これに合う  
ような時間配分をして何とか乗り切ろうとするんだけど、聞か  
ないわけです。人数の多寡によつて時間の制限などがあつてはな  
らんということ、同じような時間の長さで同じような話をされる  
わけです。やはりこの人はという、そんな思いで、結局後ではこ  
れを随分練り直したりもしましたけれども、徹底した正論を、自分  
が教職員会長を務めて復帰運動をやつた頃からの復帰への道筋を  
ずっとはいて、今そのチャンスだというふうなことで。

復帰の対応、即時無条件全面返還、相手の時期尚早論である師弟  
対決と言われた西銘順治候補に三万余票をつけて、当時大差で勝利  
というふうな言われ方で勝利をしたわけです。何といつても、即





党に負けているんです。これはゲリマンダーのせいです。これも多くは申し上げませんが、そういうことで負けたという。僕らはあまり大きな敗北感はなかったですね。それ以上に主席を取ったというのがまた大きかったせいもあるし。

次に、最後になったが那覇市長選挙です。県都ですから。平良良松という社会大衆党の会計長を長く務めた実に人格円満な、ところが内に秘めた闘志は、これは戦前の特高などにマークされて、後は南米に逃げたのかな。振る舞いはニコニコしながら、敵対する人物に対しても余裕を持って対応をして。教育会館にはいつもニコニコして、「はい、元平先生」と言っただけで入ってきて。日本と朝鮮の日朝国交正常化要求県民会議をつくって、平良市長が会長になり、佐久川沖大学長が副会長になり、僕などが常任理事を担当したもので、それから、また特に親しい関係もありましてね。家も屋良の家と五〇メートルしか離れていない関係にあります。お互いによく励まし、励まされたりもしておりました。沖縄にとつては非常に大きかったです。県都を取ったということも。

## ■「屋良会長および石川氏の佐藤・ジョンソン会

### 談への印象」「三大選挙（それ以前の選挙への関わりとの比較も併せて）」の質問・応答

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら最初に、一九六五年の立法院選だと思えますけれども、新垣孝善さんの選挙に関わるところで、後に裁判になったというのは、選挙は新垣孝善さんが勝つわけですけれども、これは相手候補のほうに訴えてきたんですか。

#### ○石川元平

訴えられたのはそうだと思います。こちらからは訴えていないから。僕らは新垣の応援として行ったわけではなくて、申し上げたように、公明選挙推進協議会として行ったんだけど、ただ実際裁判になって弁論の中では、中村晁兆、相手の主任弁護士はやはり復帰、その側に立ってやったのではないのかぐらいのあれは持っていたと思います。どうということでは有名な裁判になったかといったら、島尻ジュームツカー裁判と呼ばれるようになったので、新垣孝善の口の災いが世間には非常に問われたことでもありました。相手としては我慢ならない屈辱を受けたというふうな、こういうことだっただろうと思うんですね。

#### ○櫻澤 誠

それは相手側からすると、もちろん選挙は無効にはならないですけれども、その裁判であわよくば辞職させるなり、そういうことも

#### ○石川元平

そう思ったと思います。ところが裁判結果としてはそうなりませんでしたから。

#### ○櫻澤 誠

なるほど。新垣孝善さんは次の三大選挙の時も勝っているわけですよ。

#### ○石川元平

勝ちました。

#### ○櫻澤 誠

二期目も勝っているわけで、そのあたりも含めて、あまり有権者に対して批判的なものはそれほど高まらなかったと見ていいんでしょうか。

#### ○石川元平

これはあまり政治的な素養はなかったと思います。私は弁論もそう立ちませんでした。ただ実務は屋良先生に大変評価、いわゆる総務、庶務的なそれはかなり評価されましたけれども。私の直接の上司の部長でしたけれども、弁論は関心させられたようなことは。

茶飲み話はうまいですよ。だからそういうことではあまり大衆受けはしなかっただろうな、当選して後。南風原の与那覇という所に住んでいましたけれども、熱狂的な人を集めて何回も当選するというふうな、そういう人ではなかったですね。

○櫻澤 誠

ありがとうございます。屋良さんが革新共闘候補を受諾をしてから、本土のほうに色々挨拶回りに行ったことをお話されていましたが、けれども、そのあたりで加えて何かあれば。

○石川元平

そうですね、これは非常に屋良もある意味で運がよかったというふうな、ヤマトがそういう革新的なムードに高まっていた時代、東京に美濃部あり。印象に残っているのは青空を取り返すというのが大きなスローガンになっていましたね、東京でね。

○櫻澤 誠

公害問題ですか。

○石川元平

四日市公害とか、これが非常に関心を寄せた時代でもありまして、青空、そのバツジなど、僕もらってきましたよ。美濃部知事は美濃部スマイルを発揮して迎えてくれましたよ。東京の都市センターで激励もしてくれたんですよ。もちろんそこにはうちの福地もかなり彼と接触していますから、県人会やそういう屋良をこの間、戦災校舎だとか色々運動で励ましてくれた人たちがいますね。たちまちのうちに大きな一つの都市センターの講堂を埋め尽くすぐらいのそういう集いになっていましてね。

お隣の横浜に行きましたら、社会党の党首だったと思います。市長をしながらね。非常にびっくりしたのは、自分は社会党の党首だけれども、沖繩のことにあっては、党利党略のことがあってはならんというふうな、やはりそういう占領体制の中ではみんなががっちりスクラム組むべきだという。そしてそれに対して抑圧をするようなことがあったら石でも何でもぶつけて投げるぐらいの、こういう

闘いを展開すべきだという大変な激励を受けましたし、事実、この主席選挙が始まったら本人は杖をつけて応援に来ました。飛鳥田一雄（いちを）というんですね、正式な呼び方はね。

○櫻澤 誠

そうですね。

○石川元平

横浜の何とか公園の海に見えるレストランへ行って御馳走をしてくれました。

○櫻澤 誠

山下公園？

○石川元平

山下公園、はい。非常に激励を受けて、政党にあまり気兼ねせんでいいというふうな発言を。あの時一番元気のある社会党の委員長でしたから。

それから京都では湯川博士にも会いまして。立命館大学にも行ったら、学長は腰を痛めて休んでいるところですよと言ったら自宅まで押しかけてきてね。そうしたら痛い顔をしながら玄関まで出てこられて、立ち話で終わりましたが。そこでもこの方が六法全書と言われる人かと思いましたが。京都の庁舎を訪ねて蜷川知事に言葉自体も大変な激励を、「志は高く、俗につけ」という、屋良さんは我が意を得たりというふうな感じで頷いていましたのでね。

そのほか県会にもたくさん会いました。東京県人会、それから大阪県人会、兵庫県人会の方々にも会って激励を受けて。もうどこへ行っても激励でした。一緒に頑張るといふふうなね。後でまた実際の闘いになっても大変な支援が物心両面でありましたしね。

一抹の不安を持って、たしか四月三日から上京したんです。一つは身体検査でした。身体検査したらもう甲種合格です。どこも異状なし、太鼓判を押されて。それで後は教育者の自分が、沖繩みたいなああいう所で、占領支配下でやっていけるのかどうかという。これはある意味で県民の復帰運動をまとめてここまで来たあんなれ



ばこそ、やはり先頭に立ってやるべきだという、そういう激励を受けてましてね。ある意味で安心してというか、全面的なと言わなくても、自信も固めて帰ってきて選挙戦に突入することができたんだと思えますね。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。

#### ○石川元平

もうちよつとね。あの当時、ちようど宮古へいきましたら、前年に八〇メートルを超えた宮古島台風と名のついた、そうしたら何か月か経っているんですけども、青いのが見えないうですよ、畑もね。砂漠のようでした。びっくりして、ただ死者が出ませんでしたね。屋根が飛ばされた家は非常に多かったです。周囲はブロックの家が多かったですね。瓦はほとんど飛ばされたり。

そこで立法院議員選挙と一緒にしたのだから、池村正義という宮古教職員の事務局長が立法院議員選で当選はできなかったんですが、屋良と一体だったものだから霧囲気なものすごいよかったです。僕以上に何倍もそういう被災地を見て心を痛めたと思うんですが、元氣付けられましたものね。もう本当に、「主席は屋良を」という宣伝マイクをつけてやったら、馬にすきを引かして畑を耕しているところ、それを見て走り込んできましたよ、握手をしたらね。ご婦人が畑仕事を休んで沿道に飛び出してきたり。そして今橋が架かっている池間島という、ちよつとした湿地があつて、バードウォッチングなどで注目されているきれいな島がありますが、港へ着いたらもうオジー、オバーが何十名も集まっているんですよ。そして屋良先生が来たということでそこで舞うわけですよ。勝利も何もしていない、迎える中でオジー、オバー踊っているわけだ。もうね、みんな涙を流して迎えてくれて、こういうのがあつて。

西表には、今は一周道路がありますけれども、舟浮という所はまだ陸の孤島、学校もあります。一期工事の途中でした。浦内川なんていうのは橋が架かってないんですよ。たまたま満ち潮だったも

のですから、白浜に泊まつて、白浜から一期工事のブルの敷きならした道を、ちようど天気も悪くて、ズボンをまくつて、靴も、天秤棒みたいなのに荷物も担いで、浦内川の近くへ行つたら、もう川の土手まで満潮時で見えないんですよ。ただ、マンダローブが生えて、空いている所、ここが道だということ歩きまわしたけれども。十何歳かの未婚の娘が渡しをしてくれて。白浜から船浮という東部にも行きまして、そこから電灯も何もない時代です、だから星がね。沖繩のオバーたちは自分の愛する子供や孫たちにはあの天の星をいであげたいという表現があるんですよ。金も何もないけれども、こういう気持ちだけを持っていた心豊かな時代のオジー、オバーたち、あれを見ました。そんな感じを受けました、西表で。

西表からの有人島で一番南にあるのは波照間島です。不幸な戦争中のマリアのそれもあるんですが、向こうへ渡るのに、前津という教職員の事務局長をしていた人のお父さんのカツオ船。カツオ船は荒波でもひっくり返ることはありませんから、うんとこしも揺れるけれども、立っていられますよ。もちろん座つてもいられない。本当に這うような形で波照間に渡りまして、当時電氣も何もないんですよ。ところが発電機はあつたんですね。発電機を利用して、僕は全県回りましたけれども、幻灯というのをやりましたよ。どんなことをやったかといいますと、写真の幻灯用のフィルム、これに私が手書きの屋良の名文句を出して、これを幻灯で説明するわけですよ、屋良の演説の始まる前に。後援会結成の写真なども織り交ぜたりしてね。これを一つ一つ入れて交換、こういうふうなものも見せながら、波照間島でクドウチに会ったら、私は認識不足で八重山の文化に対して全く勉強してなかったということもあつて。今はクドウチといったら全国的に知られているのは、ちゆらさんの鳩間島で国仲涼子さんがやった、あの中で後はメロディーがたくさん出てきますが、このクドウチの中に、「♪ヤーラーヨー」というのが何回も出てきます。私は屋良朝苗を迎えるために誰かがそんなすごい曲をつくったのかと思って、このことまで問いました。違うよ

と。これは竹富にあるクドウチだと。だから実にいい思いをしまし  
てね。こんな思いもしながら県下回りましたね。

ある時は読谷の屋良先生のおばさんが五八号線の大湾という部落  
の近くにおいて、かなり年いっています。自分の甥御が主席になる  
というので沿道まで来て。これは私がカメラに収めて、私たちがつ  
くった主席公選のパンフの中に入れましたけれどもね。今帰仁など  
ではいわゆる芝生の上ですよ、芝生といってもきれいな芝生ではな  
くて、モーと言われる、そこに屋良の演説を聞くためにおじいさん  
がリヤカーに乗せられてきて。いろんなそういう時代ですね。体育  
館とか何とかがない時代。

ただ、那覇では体育館が一定できていて、そこでは立会演説会が  
非常に盛んでして、いい意味でも合戦みたいなものがあったり。こ  
れは後では、ここまでは慎むべきではないのかという、両方に対す  
る、それがあつたりもしましたが。本格的な沖縄での現代的な選挙  
の始まりであつたのがその三大選挙であつたということですね。

#### ○櫻澤 誠

三大選挙の時に、特に屋良さんが色々回る中で、いわゆる保守地  
盤の強い場所に行った時でも、やはり風は感じられたわけですか。

#### ○石川元平

それもあつたし、かなり野次、妨害みたいなものは立会演説会で  
もありましたが、ただ、これは屋良のことだから普通の人よりは少  
なかつたと、これは言えると思いますね。そんなに悪質なあれはな  
かつた。ただ、いわゆる共産党に乗せられたという、こういう中傷  
みたいなことは、これは屋良が関わった選挙の中でいつもありまし  
た。こういうことによって少し分断をする、いろんなことがあるん  
でしようけれども。

それから言い忘れたけれども、屋良を落とすために、例えばアメ  
リカから数十万ドルの金が送られてきた。日本政府、自民党を經由  
して。これは沖縄の新聞でも米公文書館から発掘されたものとして  
紹介されました。二度にわたってです。

高等弁務官は西銘も呼んだという、選挙の前に。屋良も呼んで、  
選挙についてどういうことで臨むか色々弁務官とやりとりしている  
んですよ。その中で弁務官自体が、自分は中立の立場で臨むという  
ことを言ったんですけどもね。しかし、実際は高等弁務官資金を  
屋良朝苗の出身地の読谷の瀬名波の公民館をつくる金にも使ったん  
ですよ。あっちこっち弁務官資金を出して。だからこれを利用した  
わけです。弁務官資金ももらえない、またこれをもらえたというこ  
とで票集めに繋がるという。そういう三権力を向こうに回しての闘  
いでしたから。

これからまた教職員会、屋良だけを徹底的に潰そうと、石井一朝  
という、日教組の役員だったという触れ込みで、沖縄に長期滞在し  
て教職員会攻撃、あることないこと。このために新聞までつくった  
んです。『沖縄時報』だったと思います。これをばらまいたんです  
よ、ずっと。だからもうね、三権力だけではないですね。こういう  
右派勢力、暴力団みたいなものを含めて。これをまた支える側があ  
るわけでしょう、財政的に。あれだけの金を出してずっとやってい  
るわけですから、考えてみたら大変な状況の中をくぐって勝利をし  
てきたと思いますね。

当選したらね、私かばんを持ってまた高等弁務官に会いに行きま  
したよ屋良先生と。司令部の二階建ての建物があります。高等弁  
務官の執務室は一番右の奥です。僕らはたまに向こうで抗議集会や  
る時があるんですが、今は海兵隊の司令官、四軍調整官の部屋に  
なっているんですよ。ニコニコして会ってくれました、アンガー高  
等弁務官が。だからわかるんですよ、弁務官も見えてね。そういう役  
得を私、もうかなり受けたわけですね。有名人にもたくさん会った  
し。

こういうことなどが実は、後に私が沖教組委員長になったことに  
結果したようなんです。大学院卒の教員も随分出たんですよ、九〇  
年代、県内にもね。そういう時代でしたけれども、なぜ石川が沖教  
組の委員長になったんだと。いろんなことがあつて、あんたが一番

適任だという。

○櫻澤 誠

今までずっと積み重ねてきた経験や人脈やいろんなことが。

○石川元平

私は誰とも表立っての喧嘩はあまりしませんので、そのバックに屋良を見たかもしれないけれども、あるいは大田を見たかもしれないけれども、そんなことが実はあつて。

○櫻澤 誠

そうしましたら、本日はこれで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。





## 第3回 インタビュー

---

日 時	2014年1月25日（土） 13:30～18:30
場 所	沖縄国際大学13号館1階研究所会議室
話し手	石川元平
聞き手	佐藤学 野添文彬 吉次公介 櫻澤誠 高橋順子

## ■「毒ガス移送」「核撤去」

○櫻澤 誠

それでは、早速始めさせていただきます。本日、三回目ということになるわけですが、実は、前回の後に、追加項目として、毒ガス移送のことと、核撤去の問題を、きっちり触れないといけないというお話をいただいていた。その点も含めて順々にお伺いをしていければというふうに思っています。

○石川元平

毒ガス撤去闘争という、これはお聞きになられたこと、文献などであると思いますが、沖縄に毒ガスが米軍基地内、特に嘉手納ですけれども、貯蔵されているというふうなことが、軍の雇用員などがずっといるものですから、これがばれてきて、大きな運動となったのは復帰前です。七一年ですね。

アメリカはレッドハット作戦なる作戦を立てて、それを米領、太平洋のジョンストン島、そこへ撤去するという。嘉手納基地から、何せ毒ガスなものですから、既設の道路では住民の合意が得られんというふうなことで、特別に倉敷ダムという県のダムがあるんですけれどもね、新たな道路をつくって、沖縄市の池原ですか、軍用地内ですけれども、そこ通って、最小、人家のある所は避けるような形で、金武湾の天願栈橋から、これ二度にわたって撤去された。

ただし、我々の認識では、レッドハット作戦はあくまでもアメリカの戦略上のそれであって、在沖米軍基地内に貯蔵されている毒ガスが全部撤去されたと思っていけないんですね。詳しくはわかりませんが、

屋良主席時代の、これは大きな反基地闘争の一つとして知っておいてほしいし。それから七〇年一月二〇日にコザ騒動という大きな暴動がありました。これもその前日の一九日に沖縄市の美里中学校の校庭で毒ガス撤去県民大会を開いた、実はその晩、深夜なん

です。

ですから、ちよつと結論的なことを申し上げると、NBCというんですかね、核・化学・生物兵器の総合しての名称ね。あれは確かにマスタードガスだったと思います。要するに致死性のやや低い旧型の毒ガス、これがあの作戦名で撤去されたであろうというのが大体、当時、民主平和団体、労働団体等での認識ですから、今もって私などは結論的には新しい毒ガス、それは貯蔵されていると、こういう認識を持っていることを、まず申し上げてですね。

次、核・化学・生物兵器という、この非人道的な、その中でも県民は復帰前、非常に強く核基地に対する不安を抱いておったんですね。ですから、教職員会二代目の会長が喜屋武真栄、七〇年に初の国政参加選挙で参議院議員になった方ですが、私その後援会の事務局を長いことやっていた関係等もあってですね。彼はちやうど六〇年代後半から七〇年、復帰の大事な時期に復帰協会会長を長いこと務めたことなどもあって、それを受けて国会議員になったものですか、ある意味で、国会を通して政府を正し、国民に対しても啓発をしたということでは、いい貢献をしたなとも思っていますよ。彼が、「小指の痛みは全身の痛みだ」ということもよく言いました。それを感じてくれた人がいるし、受けとめ方、さまざまですが。あわせて彼が言った言葉で「沖縄県民は核をまくらに寝かされている」というふうな、これも非常に印象的なことで。これは県民大会等々でも彼が演説の中でもたびたび繰り返していたことです。

この核は、じゃあどうなったのか。原水協の常任理事も長いことやりましたけれども、現在は核と言いましても弾だけじゃないんですね。システム化されているんですね。これを運搬する、例えばB52みたいなものがあるし、原潜みたいな発射のそれがあつて、あるいはまたトマホークみたいなそれがあります。それにしてもアンテナとか、そういうシステムの中で核というふうなものが認識をすべきだというふうな。こういうことで、実は海外基地の核を撤去したと言ったのは、ブッシュの親の時代ですね。これ一方的な



発表であつて、いわゆる国連などでも、それを査察、検証したという、こういう報告ありません。

ですから、我々は在沖米軍基地の、特に嘉手納貯蔵庫、それから今、問題の辺野古ですね。そこには、私はやっぱり化学兵器と一緒に、なお核基地だと思つているんですね。

## ■「毒ガス移送」「核撤去」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。このあたりのことについては私などよりも、御専門の方々がいらつしやると思つたので、何か御質問などがありましたら、お願いします。

### ○吉次公介

つい最近、屋良さんの『回想録』と『激動八年』を読み返していたのですが、その毒ガス撤去に関しては、やはり相当その地域の住民の方から不安の声があつたようです。それで、その移送の予定日を延期することまでやらなければならなかつた。屋良さんが、その地域住民の方に、色々説明されることがあつたと思うのですが、実際その地域の住民の方の不安、反発というのはどれぐらい激しかったのでしょうか。実際、屋良さんと地域住民とは、どういうやりとりをしてきたかというのを、お話しただければと思つています。

### ○石川元平

屋良さん自身が地域へおりてということとは、あまり詳しくは承知していませんけれども、とにかくアメリカ軍とは何度にもわたつて、こうやつていますし。ある意味でまた私たちも沖繩市、さつき言つた移送道路から今三三〇号あつて、東恩納という所があるんですが、そこから金武湾におりてくる天願棧橋でと。美原という集落がありますけどね。ここなどへは実際行つて、住民の皆さんと話し合いましたことありますが、これ、やっぱり何ていいですかね、目にも見え

ないでしょう？

### ○吉次公介

はい。

### ○石川元平

だから、そういうものに対する不安というやつが一番ね。近いんですよ、あれは一〇〇メートル離れてない所に家があるような場所ですから。そこだけはどうしても迂回路がつくれないうな所だつたんですよ。一番そこなどが不安を抱いたんじゃないかと思うんですが。

ですから、そのために、いわゆるトレーラーですね。それはカバーしているんですけども、一番後ろのほうにはね、ウサギを箱に入れて見える形で、これやつておつたんですね。ですから、こういうことで、もしか何かあつたら、すぐこれが反応するからという、これも一つの地域の人たちを安心させるための、それとして使つたんだらうと思うんですね。

これ以外にも、あの手この手やつたと思つすけどね。監視を十分に置くんとかね。あれ、たしか二次にわたつてやられましたけれども。映像、写真なども残つていますね、弁務官と一緒に屋良さんもパナマ帽をかぶつて。

とにかく大変な不安、これだけはもうやっぱり美原という集落のあれを見て、あれはまたウサギをという。米軍は、嘉手納や辺野古の二重フェンスの中でヤギをというようなことなどもよく言われていましたのでね。毒ガス、ウサギなのかという、そんな感じで我々は見えていたんですけどね。直接集落、また行つて、やられたかもしれない。そこるところちよつと私も全部承知していませんけどね。

### ○吉次公介

ありがとうございます。

### ○野添文彬

先ほど嘉手納と辺野古に核兵器があるということをおつしやつたんですけども、沖繩に一九五〇年代後半に核兵器が設置され

て、その時からいつぐらいに沖縄のどこに核兵器があると言われていたとかということをお聞きしたいと思えます。次に、先ほどまだ実は核兵器は撤去されていないんじゃないかというふうな話を、僕もほかの人がそういう話をされているのを聞いたことがあるんですけれども、一九七二年に沖縄返還がされて、「核抜き本土並み」と言われたのにもかかわらず、当時から沖縄から核兵器が撤去されていないんじゃないかという話はずっと言われていたのかどうなのか。この二点をお伺いしたいのですが。

#### ○石川元平

二点目の件については、これは復帰協の私は役員もやっておりましてけれども、いわゆる運動している者たちからすれば全く信用できないということがあります。それから、これはもう常識的に考えれば。例えば朝鮮半島をよく例に出しましたけれども、その前にまたベトナムもありましたけど。一たん何かがあった場合にアメリカや、あるいはより近い所から、もちろん海にもいろんな配備はされているんでしょうけれども、第七艦隊その他から嘉手納基地まで運んできて積んで、ちよっと間に合わない。こういうことはね。

それと、沖縄近海で水爆が、これ船からですけれども、海中に転げ落ちた。これ新聞にも大きく出ましたけれども。要するに艦船は絶えず核を積んでいるというふうなことを証明したようなものです。

それからB52搭載型の、D型色々ありますけど、というあれが絶えず嘉手納にも配備を、いわゆるゴムから来るB52は核搭載可能機だということなど含めて。これは去年、年末だったと思いますけれども、アメリカの基地内で水爆を積んだB52が墜落をします。墜落を察知して、搭乗員が安全な場所に、牧草地みたいな所に落下させるんですね。安全装置を入れたはずなんですけれども、四つある安全装置の中で三つまで外れていた。最後の一つ、これでもって爆発は免れたと。爆発したならば、ワシントン近郊にもあるんですよ、米軍基地ね。で、ニューヨークまで大変な被害をこうむって

いたであろうということが、これは事実として去年、年末だったと思えます、明らかにまりました。

それからもう一つは、あの核については、すごく小型化されているんですよ。例えば劣化ウランです。久米島の近くの鳥島、あれもものすごい数の、いわゆる葉きょうが発見をされて、これはやっぱり劣化ウランの発射実験だったという。で、久米島の漁業者に対して、これもこの不安を払拭されないと思えますよ。これは実際に中東、湾岸戦争から使われている、劣化ウラン弾は。特にあの対戦車砲などに対して、すごい破壊力があるんだということ等々含めてのそれですね。

それから、最初のあれは何ですか。

#### ○野添文彬

嘉手納とか辺野古に核兵器があるということはどのようにして知られたのでしょうか。

#### ○石川元平

具体的にはですね、これは強く印象に残っていて、私はまたその証言した人にも会いましたけれども。本村さんというね、浦添市に住んでおられる一級建築士の方が『琉球新報』に、いわゆる告発をしたんですよ、写真入りで。彼は自分で設計、施工してですね、これをカメラにおさめて。やっぱり核に対するあれが県内でもかなり論議されている中で、心にしまい込んでおくわけじゃなく。これはペンタゴンから直接発注を受けて、日本政府を通してないと言っています。ですから、その文書などみんな持って、こういうものですよ。言ってるね、見せられて、これは本物だよ。

で、どうしてじゃあ発表したかといいますと、家族会議をしたという。小学四、五年の男の子が「お父さん、これはぜひ発表すべきだ」という、子供のその声に押されて、いわゆる告発をすることになったということ。

#### ○野添文彬

それは何年ぐらいの話でしょうか。

## ○石川元平

復帰前です。ですから、これはマスコミ発表されて、我々がもつと大事にサポートしたらよかったと思うんですが。あれやこれやある状況の中で彼を十分に見守って、守って、いわゆるあれだけの極秘のものを発表したわけですから、彼の身辺自体をきちっとしないといけないという。ほんとはそういうことなんでしようけれども。二度会ったんだけど、電話等で色々話をしたところによると、周囲から非常に警戒をされたという、そんな話をされてね。彼は住所もちよつと変えたと思います、浦添からね。

こういう方の具体的な告発の例もあるものですから、いわゆる一方的なブッシュの親の時代のあの発表は、これはやつぱり信じるわけにはいけないし。あとやつぱり七二年返還の核疑惑等々ね。また、現在の基地の対応をみんな含めて考えても。ほんとにもう戦略じやなくて戦術核として多様に使えるような状況にあることなど考えるよね。ベトナムでも実際に使用する直前まで行っていた。そういうことは具体的に色々あるものですから、いざとなったら何をするかわからない。例えば北朝鮮との関係などでもそうですよ。

ということなど含めて、そういう意味でも在沖米軍基地の、これ海兵隊だけじゃなくて、まだ隠された部分の実態がまだまだ。もう最近では辺野古だとか、普天間だとかということでもやられていますけれども、そういうことに対しては、前にいろんな事情を知った者としては、やつぱり何らかの経緯で新たにこれをやらないといけないなどという、こんな感じにいるんですね。

## ■「屋良主席時代」

### ○櫻澤 誠

「屋良主席時代」という項目は、ちよつと書き方としてはあまり適当ではなくて、この後の項目も、いまの毒ガスの撤去の話である

とか、核の撤去をめぐる問題というのも主席時代のお話の中の一つになると思います。主席時代ということで何かあればお話したいので、続けてB52墜落から二・四ゼネストのあたりの話をよろしくお願ひします。

### ○石川元平

戦後のアメリカの施政権下で、ちよつと二三年振りに沖縄の民意に基づく行政主席がというところ、その前は任命であったり、あるいは指名であったりというふうな、こういうことでやられていたんですけども。まとまった沖縄の民意が示されて、そこで公選主席になったのが屋良朝苗だということ。

あの当時ですね、「世替わり」という言葉を沖縄でよく使うんですよ。今でもね。いわゆるあの明治の琉球処分と言われた、あれは武力併合なんだけれども、その当時のことを「世替わり」というようなことでお芝居の題材になったりもしますけれども、沖縄の民謡などで「唐の世（ユー）から大和の世、大和の世からアメリカ世」言うて、アメリカ世から、また大和の世になって、今があるわけですね。本当は、しかし沖縄の人間が願うのは、よく「弥勒世（ミルクユー）」と言う。平和な世の中、沖縄の世の中、今、その渦中にあると思うんですね。

そういうことで沖縄の民意が大国に翻弄されて、この間来ておりますが。しかしみずから立候補し、主席公選当選をして、その中に入っていくことになったのが屋良朝苗なわけですけれども。主席公選の際にですね、西銘順治という那覇市長、保守の候補、自民党の候補と、屋良と師弟対決になったわけだけれども、高等弁務官が二人を個別に呼んでですね、色々なことを、物の考え方だとか、アメリカに対してどう思っているんだとか、また主席になったらどういうことをやるうとしていられるのかという、そういうことを質したりやっているんです。当時アンガーという高等弁務官ですけれども、「自分は公正、中立の立場でいたい」とこう言っているんですよ。実際は、やっていることは違うんですよ。高等弁務官資金を出した



り。アメリカ政府は本土の自民党を通じて数十億円の屋良を落とすための資金を提供しているんですね。これはもう後でみんな、アメリカの公文書館で資料が出てくれるんだけど、こういうことなども実際ありました。

それから、屋良が当選すると革命が起こるといふ、赤攻撃がすごい強かったですからね。もちろん瀬長那覇市長は追放されたといふことなどもあり。とにかく労働運動、この我々自身にも、我々がつくった教職員会がつくった歌の本は、これは共産主義を謳歌しているんだとか、けちをつけて回収命令が出されたり、ロシア民謡とか、何かこういうふうなものなどに対して。実際それは施政権上こんなことまでできたんですよ。色々あったものですから革命が起こると、こんな不安をおり立てて保守候補の有利に導こうとしたんでしようけれども、実際は何も起こらなかったという。県民のあれを一身に受けて、とにかく堂々と真つすぐに交渉によって解決をしたので。後でアメリカ側も屋良の手法は随分これを知ることになって、屋良は積極的にみずから交渉するということを申し入れて相手を応じさせますから、そういうことなどによって最初の屋良に対する共産党の手先みたいなね、あるいは躍らされているみたいな、それは払拭されていくことになり。こういうことは、ぜひ承知しておいていただきたいし。

これは後で屋良の功績のところでも少し触れたいと思いますけれども、県民の総意を、県民の願いを、各階層でそういうのをみんなまとめて、これを実現して、いわゆる復帰後の沖縄、こういう沖縄にしたいという願いがこもったのが俗に屋良建議書と言われる「復帰措置に関する建議書」なものですから。あれは特に前段の作業はもう屋良自身がいわゆる立案をした。私はですから今でも非常に大事にそれはたまに読んだりもしておりますけれども、その建議書のことも改めて紹介しておきます。

## ■「B52墜落事件、二・四ゼネスト」

○石川元平

それからB52の墜落事件と、それに絡んでの二・四ゼネストの問題が、これが屋良、八年間、主席と知事を二期やった激動の始まりになったんですね。先生方御承知のことだと思えますが、B52墜落事件というのは、屋良が六八年の十一月一〇日の投票で、即日でみんな決まらなかったんです。翌日、当選が決まって。その一週間後の一九日に嘉手納基地から北爆のために、当時は渡洋攻撃なんていう言い方してましたね、爆弾を積んで飛び立とうとしたB52戦略爆撃機が離陸に失敗をして爆発、炎上するという、その事件なわけですが。

上原康助さんも家近くなんですよ、屋良に住んでいてね。周辺の住民は、大変な被害も出ている。ガラスが割れたとか、塀にひびが入ったとか。しかし夜中であつたために、それは最小に抑えられたと思います。私、宜野湾ですけれども、わからなかったです、音も相当大きな音だったんでしようけれども、周辺住民はもう戦争が来たというふうなことで、右往左往したらしいんですね。一方で、飛行場の南側ではなくて北側に飛び立とうとした。そこに滑走路の最後の所で、草むらに墜落をしたものだから、この左側の延長線上に核、いわゆる弾薬庫があると言われて、距離もそんなに離れていない。ですから米側の化学消防車は、そっちにかなりの台数は行ったということまでね、言われまして。

これによってB52というのが、どういう飛行機なのかという、改めて。あれ見ても不気味なんです、真つ黒くして。この翼の長さが五二メートルあるわけです。もう一見してわかるんですね。こちらから飛び立つと、翌日か翌々日にはベトナムの北爆によって病院が、あるいは学校が、この模様がマスコミを通じて明らかにされてくるわけです。ですから、在沖米軍基地の、いわゆる県民のそ

ういう被害ということだけでなく、我々運動する者にとつては「加害の島」という意識も随分持つようになりました。

一方では全軍労、いわゆる首切りが始まりますのは、七二年返還合意した六九年一月の後なんですね。大量の全軍労の基地労働者の解雇が始まるんです。そういうことが重なっているものですから、この基地内で働いている労働者と、それから全県的に復帰協を中心と頑張っている復帰要求のそれが、もうあの時には復帰運動と言わないで復帰闘争という言葉になつていて、保守的な人たちからすれば、これは階級闘争をやっているんだと、そういう県民運動的な。そんなもんじゃないんだというふうなことで離れていった団体もかなりあるわけですから。それでも復帰協の闘争の方針を曲げずにつつと行くわけです。かなり激しい闘い、加えたのが、いわゆるベトナム反戦闘争との結合なんですよ。これ私は、今もって非常に正しい国際的な連帯の闘いになったんだと、そんな思いでおりますけれども。

それで、このB52のことを「黒い殺し屋」という呼び方しておりましたね。それに対する撤去闘争、翌年の二月四日にゼネラルストライキをやるんだというふうなことでの決起、これが俗に言われる「二・四ゼネスト」なんです。六八年のB52が墜落した翌月の一二月七日にですね、復帰協とは別にいのちを守る県民共闘会議というふうなものが結成をされます。それは当然、復帰協自体もそこに参加をし、もう二重参加も色々あるわけですが、社会党系、共産党系と二つの原水協、県労協、全沖労連、革新三政党。社会・社大・人民。市町村長会だとか、同議長会だとか、一三九団体をもつて結成をされます。そして、そこで決定されたことが六九年二月四日を期してゼネラルストライキを執行するという決定です。

屋良主席の出身母体の私ども教職員会も、当然そのゼネラルストライキ参加を支持をし、そういう準備に取りかかっていたという。このことに対する屋良政権の対応ですが、当時のアンガー高等弁務官、それから嘉手納空軍司令官等にも、県民のその怒りに対してB

52を撤去してもらいたいという強い申し入れをいたしますが、米軍はまともな対応をしておりません。ゼネラルストライキをやる前の月の一月四日に、ちようど主席就任（挨拶）を兼ねて本土に上京いたします。この屋良主席の状況と相まって、共闘会議参加の各代表と立法院代表も上京して政府にB52撤去の要請をしていくことになりまして、確たるこれに対する明確な返事をもらえないというふうなことになりました。

屋良主席自身は一月二八日から三〇日まで、三度目の上京になるわけですけども、いろんな人と会っていますね。総務長官・副長官、愛知外務大臣、佐藤総理まで。ところが、佐藤総理に会っても、外務大臣に会っても撤去の明確な答えは得られなかったということなんです。本土のマスコミの共同通信や、朝日や毎日、こういう方々、自分の業務を離れた後に、いわゆる主席公選の時に私もおぼん持ちで行きましたけれども、いろんなおぜん立てをしてくれて。沖縄問題を、やっぱり応えてあげたいというふうな、そんな方々がおられ、そのOBの一人が当時官房副長官の木村俊夫氏に会ったかどうかという紹介をし、また取り次いでくれるんですね。マスコミいろんな批判を含めてありますけれども、木村という官房副長官は非常にまじめで、屋良の意向を受けて撤去のために、彼の官房副長官という立場で頑張ってくれた一人だと僕は見えています。実際に会った状況の中であって、その絡みもあるけれども七月ごろまでにはB52は撤去されるというふうなことを屋良に伝えるんですね。これ自身が、屋良がそういう感触を得たという。後で「感触」という言葉がマスコミに躍るだけけれども。

そういうことなどがあって、屋良自身は、私は行ってかなり納得したと思うんですね。明確な答えじゃないけれども、非常にいい感触を受けて、それで翌日一月三十一日に局長会議を開いてそのことを報告し、その局長会議の結果として共闘会議に対してスト回避の申し入れを文書でやるんですね。これが屋良主席政権の最大の回避要

請ということになるわけですが、

一方です、屋良は、弁務官に会って空軍司令官等にも会うんですけれども、一方では労働総合布令という布令を出して。かつて教育に關しても教育布令を出したりもしてやったことがありますが、これも。全軍労結成自体はアメリカは認めてないんですね。加えて、このゼネスト絡みで、このストライキに基地労働者が参加するようなことがあったら、これはもう解雇の対象になる、嚴重な処分をするというふうな、こういうことを言明をしたんです。これが非常に大きな圧力になって。いわゆる一三九団体が参加したと言いましたけれども、その中でも何と言っても数の上では、あるいはまた実力的にも県労協なんです。その県労協の過半を占めるのが基地労働者なんです。当時はたしか二万を超えていたと思います。これだけの、ある意味で闘う部隊に影響を与えるようなコメントを出されて。上原委員長自体は亀甲さんと一緒に東京行動にも参加しているんですね。要請に行つて二人は決行するというふうな固い決意でやりましたけれども、帰ってきたら全軍労の内部でかなりの動揺が広がって。委員長自体その状況を知らなかったようです。

そういうことなどがありまして、結局全軍労が下がるという、こういう状況の中で県労協はじゃあどうするのかという。県労協は、いわゆる機関会議を開いて、やっぱりそこで亀甲議長などの判断が出るわけですよ。それを決行したことによって組織維持が図れるのかということが最後にすごく悩んだようです。結局結論としては組織の維持、守り切れないと。結果として県労協幹事会として、いわゆるゼネストという参加はできない、もちろんその次の闘い、統一行動という、これはやるべきだというふうなことなんです。実際ゼネストに参加する労働、平和、これは全県民的な那覇の市場の小さな商店街まで対応して、ゼネストにならなかったけれども、ただいまスト決行中というのがむしる旗でね、示されたりもしましたのでね。

こういう状況の中で、特に県労協の苦悩が強かったなど。これに

比べると、我々教職員会というのは屋良主席の出身母体でありながら、一方ではちよつと非難もされたんです。県労協に決断を預けてね、その結果で何ていうか、あまり苦勞もしないでというふうなことで批判をされました。これはある意味で事実なわけですから。当時、屋良の後を受けた喜屋武二代目の会長がいて、色々ありましたけれども、これは現在、教職員会、沖教組としても一つの反省事項というふうには私自身は認識をしております。

それで、じゃあ二・四当日どうなったかといいますと、どしや降りの雨の中、沖繩はいつでも基地絡みの大きな闘いはどしや降りなんです。七二年、五・一五もそうなんです。滝のような大雨が降る中で、嘉手納の総合グラウンドで統一行動をする。一応の総決起大会、そこでやりました。万余の人が集まって、そこで統一行動を決行した後、嘉手納基地に対して、特にデモ隊のメインは嘉手納のロータリーから知花に向けてですね、いわゆる基地のあの墜落した現場、また弾薬庫の。そこはね、復帰後ですよ、地下トンネル、弾薬が自由に運べるのは。あの復帰前は、道路を封鎖すると弾薬運搬できない。ベトナム戦争の時、実際我々やりました。座り込みをして、弾薬を積んでいるトレーラーをとめるということも実際やりましたのでね。こういうことができたんです。主力はそこへ行つて、我々は気がつきませんでしたけれども、学生集団は当時あれ二〇〇〇名ぐらいですか、フェンスを倒して基地内に突入しているんです。そこでMP隊との間でトラブルがあつて、負傷者なども出たようです。

教職員会、私自身を含めて、ちよつとB52が飛び立つゲートの前に我々は座り込みをして旗を立てました。ですから県が出した大きな写真集などがある。この中にも教職員会旗が見えて、そこB52が飛び立つ、その真下にちよつといましたのでね。写真としてもこれは残っていますけれども、こういうことで座り込みをして。一方では学生集団が基地内に入つてというふうな、こういうゼネストにはならなかったけれども、壮大な統一行動が展開をされたとい



う、こういうことは是非ね。

そして、かなり屋良主席は批判も浴びました。「感触」「感触」という。ところが、あとのコメントでは、僕も実際ちよつと聞きましたけれども、屋良は五〇年代の初めからさまざまなことを、復帰期成会をつくってつぶされて、教職員会長もある意味で追放された形になったり、そうしながらも負けたようなんだけど、闘いで勝っているんですよ、次ね。いろんなことで闘い続けているんですよ、幾つもの。七月に撤去すると言ったのが翌年の九月からですね、B52が撤去されたのは。一年ぐらい延びたわけですよ。だけれども、沖縄問題ということを考えれば、それぐらいの遅延があったことについては、遅れたけれども実績はちゃんと上げたじゃないのか。これが、またある意味で屋良の考え方だろうと思います。これは過去の闘いの、幾つもの成果があつて、すぐにはできてないんですけど、みんな数年で。主席公選自体がそうです。任命主席、あの闘いをやつて、裁判闘争になつて、その後で屋良朝苗を中心になつて五人委員会をつくつて、公選要求して、やつと六八年二月一日に許されて。その前年は教公二法闘争という戦後最大の教育闘争があつたのでね、そしていわゆる反動法をつぶしてという、こういうことがあるんですから。やつぱり屋良のそういうことを含めてみないと、本当の意味で、彼がどういう判断をしたのか、事後のまた評価をどうしたのかということなどを含めて、ちよつと一般の人には中々理解しがたいこともあると思うんですが。

## ■「屋良主席時代」、「B52墜落事件」、二・四ゼ ネスト」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら、私のほうから二点伺

たいと思います。一点目は、途中でおっしゃっていたように二・四ゼネストの回避をめぐる県労協、亀甲さんが撤回の決断をされて、それで批判を受けたわけですけど、その前段階として教職員会も批判をされたという中で、私の記憶としては教職員会の立場として県労協の判断に従うという立場をとったんですね。

○石川元平

はい。

○櫻澤 誠

それで批判を結果的に受けたということなんですけれども。

○石川元平

そういうことです。

○櫻澤 誠

当時、会長はもう喜屋武さんになつていて、その時の教職員会の中でのいろんな議論というのは覚えていらつしやいますか。中でも、やはり回避せずにゼネストすべきだという意見と回避せざるを得ないという意見と、かなり激しい対立があつたと思うんですけども。

○石川元平

青年部、中頭等々については、かなり決行というふうな、そんな思いますし。また、ある意味で喜屋武さんの存在がちよつと大きかったと思うんですよ。復帰協の会長もやられて。そういう意味では組織の統率というふうなことでは、かなりきいていたかなというふうな感じを受けるんですね。これに結局従つた。

○櫻澤 誠

そのあたり、屋良さんは屋良天皇と呼ばれたような人でもあつたわけですけども、カリスマ性とか、最終的には屋良さんが判断をすれば、ほかの人はみんな従うという、そういうところがあつたと思うんですけども、喜屋武さんになつた後も、同じではないでしょうけれども、やつぱりそういうことがあつたというふう

○石川元平

これも同時に子供たちの参加については非常に警戒する、それが印象として残っていますね。あの復帰運動を、復帰闘争を進める中では、これは一つの高校じゃなく、高校生のグループをつくって、かなり県民大会に参加する等々のあれが出ていましたので。ちよつと明確な論議のことは覚えていません。こういう一つの懸念は、確かにあったように覚えていきますね。

#### ○櫻澤 誠

それから二つ目ですけれども、B52墜落があつて一二月七日にいのちを守る県民共闘会議がつくられたわけですけれども、その際に市町村長会とか議長会とかが参加していても、結局自民党は参加をしていないわけですよ。

#### ○石川元平

はい。

#### ○櫻澤 誠

そういう意味で、保革の中で革新側を中心にという形にはなつたわけですけれども、核の問題は沖繩の中で当然保守も革新もないわけです。いわゆる保守側の支持者だったり、議員だったとしても、共感する人たちは当然たくさんいると思うんですけれども。当時の県民の中で、このB52に対しての共闘会議の動きをどのように見ていたのかというのを実際に現場で体験されている中で、何かお話があれば伺いたいと。

#### ○石川元平

これは、例えば自民党県連、いわゆる今度の基地問題でも一番近いわけですね。また自民党の国会議員が一番直接なわけですよ。こういう形での、一定、ブレーキはかかっていたと思います。

ところが、その末端の市町村長会、ほとんど保守が多いんですよ、議長会も。それも参加しているんです。末端はやっぱり県民のそういう心情といいますか怒り、そういうふうな結集の中に参加をしてきたと。いわゆる商売をしている経済団体等々みんな含めてですよ。大体そういう理解。

それからもう一つはですね、回避の県労協は最大組織であつたわけです。それ以外に総評ですね。総評は当時は太田薫、岩井章の議長、事務局長体制です。総評自体がこのことを真剣に論議して、例えば亀甲さんなどは東京へ行つた時には総評の幹部ともいろんな論議をして、支援要請をやっているんです。最終的に、これが回避という状況になってくると、安恒（良一）さんという沖繩担当の、彼は事務局長でした。もちろん私も会つたりもしましたけれども、彼を遣わしてきたんです。これがですから県労協説得というふうな、一面ではとらえられたりしましたけれども、とにかく総評としても全軍労が参加できないという状況等々の中で突っ込んでいくことによる、いわゆる最大組織の県労協がまた瓦解しかねないというふうな、いろんな懸念をして。元の県議会、立法院の道向かいに瓦屋の二階があつて、そこが復帰協の事務所だったんです。二階で会議をしていて、私は執行委員じゃなかったですけれども近くにいて、この安恒沖繩事務局長は学生集団、この状況の中で一生懸命説得をしているようなことも実はありましてね。それ自体、彼は議長、事務局長の意を体して、「この際」というような、そんなことでやっていますけれども。それはしかし全く通用しませんでした。彼は引きずりおろされていきましたから。後で靴も遠くへ行っているような、こんな状況でしたので。あと、亀甲さん自体もそういうような状況があつたりしたのは、私なども現認をしましたしね。あの時の状況は、中々厳しいものがありました。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら、先生方のほうから御質問をお願いします。

#### ○吉次公介

じゃあ、一点だけ。いや、ほんととは色々聞きたいんですけども、時間があるので一個だけ。

先ほど木村官房副長官は、俊夫さんは非常にまじめでよく頑張ってくれたというお話がありました。一般的に言つて本土政府の側で

沖縄のために尽力した、この頃というのは、やっぱり山中さん。

○石川元平

はい。

○吉次公介

が、まず出てくるんですが、ほかに？ 例えば屋良さんとの会話の中で本土政府のこの人はよくやってくれるとか、あるいは外務省なり、どこなり、この頃、その屋良さんから見てよく頑張ってくれているという、そういう本土政府の関係者は、ほかにどなたかおられましたか。

○石川元平

色々上がっていますけれどもね、佐藤総理や当時の外務大臣は一番の担当は基地問題外務、愛知で。

○吉次公介

はい。

○石川元平

総務長官とかいますけれども、こういう人たちには全くいい印象は持たなかったと思います。山中さんはもちろん。

政府の姿勢も、沖縄に対しては非常に差別的な、あの当時から感じますよね。そういう状況の中でも在京の、政府とも南方同胞援護会というのは当然仕事の関係がありますから、その吉田嗣延という方は、戦災校舎復興運動、義務教育費獲得運動等々、非常に何ていいますか、すごい屋良に対する世話をしてくれたと。B52のあの関係などでも、いろんなことで出てきます。私も一度お会いしたことがあります。沖縄に対しては、いわゆる島の沖縄の出身だというようなことで、彼は、いわゆる保革を越えて色々世話したと思います。団体でも、個人的にもね、力になってくれた方ですね。

○吉次公介

なるほど、ありがとうございました。

○野添文彬

それとの関連でお聞きしたいんですけど、南援で、その吉田嗣

延が事務局長だったと思うんですけども、会長は大浜。

○石川元平

大浜信泉さん。

○野添文彬

大浜信泉さんは、佐藤のブレインとかをやっていたと思うんですけども、大浜さんと屋良先生との関係はどのようなものだったのでしょうか。

○石川元平

いわゆる教育運動の中では、戦後、施政権者のアメリカは何もやってくれない、校舎建築から、その他ね。本土政府も潜在主権を持ちながらアメリカに気兼ねして何にもやってない。それで五三年の戦災校舎復興運動をやりました時、それから大きなことでは、いわゆる義務教育費獲得期成会、ほぼ同時期に沖縄少年会館建設等々に対してはものすごい力になっています。

全国的には五三年の戦災校舎のことで一応名は通っているんですけど。屋良は沖縄の戦災の状況をつぶさに六カ月かけて北海道から鹿児島まで回りましたし、これはもちろん文部省等々みんな含めてですが。その後の義務教育費等々でも戦災校舎のあれが一応ベースみたいになって、大浜信泉先生、東大の茅学長、とにかくかなりのトップクラスの人たちを屋良は教育研究集会の特別講師に招いていますから。教育だけじゃなく経済学者と幅広くですよ、憲法学者等々含めてね。こういう方々の力も得ています。お尋ねの大浜先生に対しては、やっぱりかなり屋良のために力を尽くされた。

ただ、佐藤総理が返還問題で首脳会談から帰って、羽田空港に向かうかどうかの圧力に。上京しているんですけども、結局県内の意識で屋良は迎えに行かなかったんですね。そのことでは、かなりの不満を持っていたようです。これ屋良自身が、それを感じています。



## ■「屋良主席（および石川氏）のアメリカ観、中ソ観、冷戦観」

○櫻澤 誠

それでは次の項目、屋良主席と石川先生のアメリカ観、中ソ観、冷戦観についてお願いします。

○石川元平

屋良朝苗は、その前の五〇年の沖縄群島政府文教部長をし、教職員会長になってからも、研究教員を派遣したりだとか、校舎建築とか、いろんなことをやるんですが、アメリカ側の対応は、もう極めて冷淡であったようですし、屋良に対する大変なブレイキをかけた。全国行脚をした校舎建築の際にも、沖縄の戦災状況にとどまらず、それを復興してくれないアメリカの占領支配のあの状況を全国でやってきたわけですね。アメリカとしては、沖縄で施政権を握ったアメリカが善政を敷いているということ、民主主義のショーウィンドウだということのようなことを盛んに流している中で、屋良にあいふふうなことをやられて恥をかいた。ほんとのことなんですけどね、実態をあげられて。

ということ、パスポートが効力を発しないようなことでみんな関係筋にやられて、実質渡航拒否をされるとか、五三年の沖縄諸島祖国復帰期成会の会長になるけれども、これも弾圧によってつぶされるというふうな、こういうことなどが続きますので。ほんとに危険人物という、アメリカが一番恐れた共産主義の浸透ですね、そういうふうには当初は見られていた。

組合へ移行したい、教職員会、これもつぶされる。しかし次のことをまた色々。最大のものは、六七年二・二四の教公二法。復帰運動をこれは政治闘争だということで、教公二法の中にそれを打ち込んで、教職員会の運動をとめようとした。県民的な反撃でこれを廃

案にして、結果としてこういう闘いが、六八年の主席公選、これ許さざるを得なかった。アンガー高等弁務官は見ているんですよね、直接ね。ところが、こういう実力のある人だということもアメリカ側は承知をして、高等弁務官と日の丸、国旗問題では談判もしているんですね。

屋良は問題解決のためには積極的にこちらから交渉を持ちかけて難題を解決していくという、こういう手法を彼はとってきていますから、具体的に。衝突がありながらも、屋良としましては自分に託された権限、これを行って、復帰や、あるいは自治権の拡大、人権をしてきている。大きな障害なんだけれども、これを乗り越えていくしか沖縄の復帰の道はないというふうな。これは一応アメリカ観でもあり、もちろん安保体制観と言ってもいいと思いますけれども、そういうふうに見ていたと、私はそばで感じてきました。

あと、この中国、ソビエト、あるいは朝鮮半島のこと等々を含めてですね。教職員会の運動方針の中でも我々は実際闘いの中でずつとロシア民謡をはじめとして、世界の労働歌や、こういうのをたくさん歌ってききましたし、そういう歌声の中で、また労働者や県民を集集し、いやされながら、またこの闘いを挑んでいくというような、こういう繰り返してありましたので。

例えば教職員会ですと、多くの労働団体もそうですが、運動方針化をして日朝、日中友好運動。ですから、七二年の日中国交回復の前から、私なども経験がありますが、五〇名前後で日中友好の旅なるものを組織をしましたし。それから日朝国交回復運動は、那覇市長の平良良松氏を会長として副会長に沖縄大学の若い佐久川政一学長、私などが常任理事を務めてですね。県労協にも元気者の小波津君、県会議員になっていながら死んでしまいました。ああいう人たちと一緒にあって国交正常化を図るんだということで、これも年間通しているんな働きかけ、集会をやり、また直に訪朝の旅をしたりありまして。それからロシアに対しても、当時は復帰前後、平和友好祭なるものが非常に活発に県内も全国的にも、あるいは国際的に

もありまして、そういう時にも例えば教職員会でその代表を派遣し。私は一度、県内の若い労働者を含めて山中湖の全国の祭典に何十名か連れて団長として行ったことがあります。こういうこと等も非常に重なりまして。

一方ではすぐく社会主義にあこがれましたね。アメリカのあの蛮行に対して冷戦時代でもありましたけれども、すごい、やっぱりインターナショナルをうたいながら、そういう中ソ、朝を含めて非常に我々としてはあこがれを持って。一方でアメリカと対峙をしてきたという、そういうことがありました。

こういう運動そのものを、屋良は非常に暖かい目で見守ってくれました。ブレイキをかけられることなど一度もないし、屋良自身、鄧小平の中国のあの頃に、本人は招待を受けて行ったりもしているんですね。要するに沖縄の伝統的、歴史的なそれに対しては十分な認識は持っておりますから。ただ軍事基地を置かれることによつて、県民の人権や、あるいは復帰のそれを抑圧する存在、それを取り除く、国際的には連帯をしてきている国なわけですよ。中国やソビエトや、そこであっても。そういうことなどがありますので、我々としては非常に運動がやりやすかったというふうな、こんな感じでおります。

戦後の沖縄の実態をずっと見続けてきて、またこういう教職員会、労働運動、平和運動等々にも参加をしていて、もつとね、ここで感じ切れなかった驚きというふうなものが。僕は沖縄を十字路の真ん中において、東西南北から実は眺める機会もありました。それぞれの国から見える所へ行きましてね。

太平洋の南の島。パールハーバー見ました。隣に一五〇メートルの所にボーフィンパークがあるんですね。対馬丸を沈めたボーフィン号が公開展示されて。近くの丘、パンチボウルの丘というのがありますけれども。伊江島で銃撃のあったアーニーパイルの墓などその一角にある。このアリゾナ記念館ですね、パールハーバー内ですね。この塔を見て驚いたのは、あるいはまた実際船に乗って、あ

のメモリアルも千何百名が犠牲になったアリゾナの上です。遺骨の収集もしないで、そのままその上に立っているんですね。

ですから、「リメンバー パールハーバー」「アメリカよ油断するな」という、これが実は私は現在の地球的な防衛機構をアメリカが、日米安保や、あるいは米韓やANZUSやNATOやという。地球的防衛機構のもとに日本は甘い汁を吸っている、この庇護のもとに。ですから、そのもうけの一部、これは例えば、対外純資産とすることでの表示をされているんですかね。日本は世界一の海外に対する富を、利権を持っているんですね。その一部をよこせというのが、私は現在も続いている思いやり予算に繋がる、それだというふうにも思いました。ですから、あのパールハーバー、これは遊びの場所だけじゃなくてすぐれた学習の場にしないといけないなという思いを強く持ちましたし。

それから世界教職員連盟、WCOTPという組織があって、そこがワシントンで総会を持つ際に日教組一〇名ぐらい、私は九州ブロックと代表して、そこに参加をして、ほんととは向こうへ行つて演説をする予定だったけど、用意していたけれども、クリントンが急遽、大統領です、彼が来たために時間をカットされてできなかったんだけれども。このワシントンを見ての驚き、昔のまんまの街と建物が残っているんですよ。第一次・第二次世界大戦、その後も幾つもあったじゃないですか。弾一つ落とされてない。あの姿を見て怒りましたね、やっぱり。これはヤマトの連中の怒りじゃなかったな。私が、特異な怒りを、話を聞いて、みんなそう思ったらしいですが。僕は物すごく怒りましたね、やっぱり。

だから九・一一であれだけの慌てぶりだと思っんですよ。九・一一を見ても、自分が向こうへ行つた当時の、その雰囲気と比べてアメリカ人というのはやっぱり自分の国ではイクサをしていないんですよ、この間ね。何だそれはという。だから、アメリカ帝国主義なるものを改めてすごく実感させられましたよ。

## ■「屋良主席（および石川氏）のアメリカ観、中

### ソ観、冷戦観」の質問・応答

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。皆さん、色々伺いたいことがあると思いますので、私のほうから一点だけ。途中で社会主義に大変あこがれたというお話をされていて、それはおそらく石川先生の実感としてのお話だと思うんですけども、屋良さんは社会主義に対してどういうような印象とか認識、立場をとられていたのでしょうか。

#### ○石川元平

特にそれに対するコメントは、あまり聞いた覚えがないです。

#### ○櫻澤 誠

例えば少し具体的な伺い方をすると、主席になった後も、県知事の時期もそうだと思いますけれども、革新三党に押されてはいるけれども、自分は県民党的な立場をとるんだということを明確にされて、実際に行政に挑んでいかれるわけですね。その中で、政党の側から革新勢力としての具体的な要望があったり、いろんな交渉があると思うんですけども、そういうことを求められた時の屋良さんの態度みたいなものはどうでしたか。

#### ○石川元平

例えば彼自体が教職員会出身、教組では日教組が社会党出身という、ある意味で幅広い革新勢力に押されているわけですね。ただし、しかし保革で言えば革新だけかというところ、そうでもなくて、バックには彼の考え方を支持する保守的な層まで色々あったから勝っているわけだから。

#### ○櫻澤 誠

そうですね。

#### ○石川元平

ですから、彼はね、B52もそうだし、後で出てくるCTS問題が一番悩ましいこととしてありますけれども、いろんな状況の中で関わっていますよ。例えば自民党の政敵である人たちにも会いますし。体自体も丈夫ですよ。もともと柔道、沖繩相撲で鍛えられたという。だから危ないような時には、これは大事なべつこの眼鏡、持っていましたから。割られてはいかんということ、こういうふうなことで対応したりもしていますね。ちよつと暴力団みたいな自民党の青年部などに。私の記憶では、彼はそういう意味では求められたらほとんど日程、いろんな事情の許す範囲では、これ会ってたと思います。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。ほかに御質問いかがでしょうか。

#### ○吉次公介

屋良はアメリカに批判的だったと捉えてよいでしょうか。たとえば、日本社会党は、アメリカに頼らず、冷戦の中立を保つべきだといいました。屋良先生は、日本社会党と同じで日本は中立でいくべきだ、とお考えになられていたのでしょうか。

もう一点お尋ねします。革新系の方とお話した時に、確かにアメリカは信用できないが、でも自分たちはどこかでアメリカ民主主義を信じているところがあると聞きました。日本政府はなにもやってくれない、でもアメリカのほうがむしろ聞いてくれるのではないかというような気持ちがあるかというようなことをお聞きして、アメリカに対する見方は非常に複雑なんだと感じました。屋良さんも、アメリカと闘わなければいけない、アメリカは克服すべき対象だと思っ一方で、信頼のようなものもあつたのでしょうか。

#### ○石川元平

アメリカに対しては、当初、随分厳しく見られてパスポートを取り上げられたり、やることなすことすべて、こういう感じでしたよ。うけれども、これ重なることによって、そして直接高等弁務官と論争をやる中でも、やっぱりお互い立場があるけれども、わかると思



うんですね。

国旗論争したら、アメリカは多民族ですからね。行政権のシンボルだと。行政権はアメリカは持っているんだから、それを掲げよと強制をしないのは、せめてもの慈悲と思えと言う。ところが屋良は、民族のシンボルだと言った。こういうことはかなり積み上げてきているわけですよ。そして、対米を中心に、闘って、勝ち取ったあれが実はたくさんあるわけで。アメリカは布令でもって教育をしていた。日本との接触を嫌って、教科書も何も取り入れさせなかったということがあって。それどころか安上がりな基地労働者養成のために日本の教育制度にない産業技術学校という、中学校と高等学校の中間の、こういう学校。今の那覇の県立那覇工業高校、それなんです。

ですから、それ以外に六つの拠点のブロックに琉米（親善）センターを開いたり、あるいは『守礼の光』、『今日の琉球』というカラーの冊子をつくって。これは今、キャンプ・キンザーの第七心理作戦部隊、そこが拠点だったんですね。英語センターをつくり、アメリカの軍服を着た人たちが、我々阻止ができない状況の中で、教壇にも立ったりしたんですね。野球ボール、プレゼントして、あるいは校地を整地をしたり等々ありますけれども。

例えば二度拒否されて三度目に、沖縄でも日本人教育をするんだという教育基本法と学校教育法、社会教育法、教育委員会の四法を最終的な闘いで勝ち取ったわけですよ、四度目に認めさせて。いわゆる五八年の一月一〇日公布されますが。

質問の答えになっっているかどうか。最初のアレが何だったか。

#### ○吉次公介

最初のお尋ねは、屋良さんは、社会党の中立路線に何かコメントされたことがありますかというものです。

#### ○石川元平

これは教職員会自体が、いわゆる一党支持の組織じゃなかったです。これは教職員会自体が、いわゆる一党支持の組織じゃなかったです。喜屋武さんなどが七〇年に

日教組の支援、あるいは屋良さん自身も主席になる時、いわゆる財政的なものを含めて大変な支援を受けましたけれども、この喜屋武さんが日政連の議員として、いわゆる日教組出身の議員の一議席として認められましたけれども、これを期に実は、社会党への入党の加入が強くなったんですよ。私は後援会事務局長もしておりますので。これはある意味で丁重にお断りしました。支援して下さったことに対しては非常にありがたく、それとまた議員として二院クラブというところに所属はしているけれども、その後は教育問題、その他に対して連携はぜひまた引き続きお願いをしたりしまして、沖縄の教組のその立場をよく最終的に理解をしてくれて。ただ一方では、どうして社会党と一緒にやってやらんのかという批判も受けたよう、執行部はね。

そういうことと実は関連をしまして、屋良本人が具体的なそういうことかと思ひ悩むとか、あるいはまたそういうコメントを発したり、こういうことはほとんどないですね。

ですからね、主席になる前に美濃部東京都知事、社会党の飛鳥田市長や共産党の蜷川知事など、党派を越えて、みんなお会いをしているんです。ですから、こういう人たちが沖縄では右も左もがっちりスクラム組んで、目の前の障害に対してぶち当たっていかないといけないという励ましを実は受けていてですね、励ましてくれた党派の人たちが自分のところに引っ張ろうというふうな、それも感じませんでしたね。これ非常にありがたく感じました。本人も最後までその思いだったと思います。

#### ○野添文彬

屋良先生の当時の国際情勢認識みたいなことについて、お伺いしたいと思います。屋良先生が主席になって、その後、沖縄返還が実現する時期というのは、東アジアにおいては、ちょうどアメリカと中国が接近したりとか、ベトナム戦争が激化から終えんに向かつていく時期ですが、屋良さんが沖縄返還とか、あるいは基地の撤去を訴えるその背景に、当時の国際情勢が、やがて緊張緩和に向かつて

行くというような認識があったのかどうなのか、これについてお伺いしたいです。というのは、当時、佐藤栄作首相も六〇年代後半ぐらいからベトナム戦争も終わるだろうし、やがてアメリカと中国も対立から緊張緩和に向かって行くのではないかという認識を持っていたようなんですね。屋良さんは、どうだったのかなど、これについてお聞きできればと思います。

#### ○石川元平

これはもう屋良本人自身が、復帰協の動きなども十分承知をしていますから。主席になったあのメーソンのスローガン「即時無条件全面返還」を掲げたのは、復帰協の基本政策、基本スローガンなんです。ですから、その後を含めて政府交渉の中で十分感じとったと思います。B52撤去の中でも、ちよつと僕も言ったかと思いますが、アメリカの、いわゆるベトナム戦争、その絡みね、そして沖縄の返還は動くという情勢は、何度も彼自身が直接総理や外務大臣等々と。それから沖縄にね、実務をやって取り仕切っている北米局の何て言ったかな、北米課長が何度も来ているんですよ。

#### ○吉次公介

千葉（一夫）さんですよ。

#### ○石川元平

はい、千葉です。こういう情勢は、もちろん県内のいろんな運動体の情勢のあれも把握しながら、我々がまた把握し切れてないようなことを、直接政府の筋からも聞く機会は多々持っています。これ何度も何度も。ですから、B52がおきて、佐藤総理が交渉を、日米首脳会談で帰ってくる、ああいう対応を含めて本人は十分その動きは把握していた。

#### ○野添文彬

アメリカの戦略が変わりつつあるとか、そういう動きも見通されていたのでしょうか。

#### ○石川元平

はい。これはまた、高等弁務官とも彼は、最後はこのランパート

等々とも積極的に対話はしているんですよ。また、アメリカの軍人はいいなと思えますのは、彼は七二年五月一五日午前〇時を期して嘉手納から飛び立っていったんですね。施政権者がこっちにいたらいけないという、このことまで彼、発しているんですよ。そんなことなら大した者だと。屋良はまた見送りにめちゃんと行っているんですよ。色々我々がまた、多くの県民、指導層が感じてないことまで彼は政府交渉やら、対基地司令官やら高等弁務官等とのあれを通じて、その大きな胎動といえますか、その動きについては。

ですから、自分が、いわゆる先導してきた復帰の足音は、そこまで来ているというふうなことを、この頃は何度も聞きましたし。六〇年当初は自分の目の黒いうちは、復帰というものがどうなのかという。だからそれがいつも曖昧模糊とした沖縄の情勢。『琉球新報』の「屋良朝苗日記」のメインのタイトルになった「一条の光」というのは、実はそれなんです。真つ暗やみの中に今、置かれているんだと。ところが、復帰という目標を掲げ、教育がそこに向かって行かなくてはならないということで、教育基本法制定とか、具体的な復帰運動を幅広く、こういうことに繋がっていくわけですが。これが一つ一つ本人自身がむしろ先頭になって布石を打ち込んだことによつて目標達成に、そこまでもう見えてきたと。この実感は、本人がまだまだ語り尽くしていないようなものもあるんじゃないかと思えます。

#### ○吉次公介

高瀬（侍郎）さんという大使が沖縄にいらしたと思いますけど、高瀬さんと屋良さんは親しい関係でしたか。

#### ○石川元平

はい、親しくやっていますね。

#### ○吉次公介

色々な情報を交換されていたのでしょうか。

#### ○石川元平

高瀬さん自身が人間的にも非常に信頼できる方だったんじゃない

かと僕らも感じてますよ。彼の対応を見てですね。普通の政府の官僚とは違った対応、もちろん屋良に対しても。沖縄問題もそれでやってくれたんじゃないかと思えます。

○吉次公介 外務官僚の中では、高瀬さんは、沖縄の皆さんから見ても、かなり高く評価できるのですか。

○石川元平 はい、高くというか。とにかく、はい、屋良と。

○吉次公介 よく頑張ってくれていたという感じなのです。

○石川元平 屋良と心をほんとに割って話ができて。数少ないうちの一人だと思えますね。

○吉次公介 ありがとうございます。

○櫻澤 誠 ほかに、いかがですか。

○高橋順子 教組が一党支持ではないというお話に絡みまして、日教組の委員長が総評の議長に就任された時があつて。

○石川元平 誰かな、具体的には。

○高橋順子 榎枝。

○石川元平 榎枝、はい。

○高橋順子 その頃になると、関係性に影響があつたりしたんでしようか。

○石川元平 榎枝先生は亡くなる直前まで、直接もお会いできませんでしたけ

ど、広範な国民連合の実は設立者でありまして。私、今、広範な国民連合の全国世話人しているんですよ。あれ超党派組織です。という事などもあつて。

特に榎枝さんと屋良さんの関係では、六八年の主席公選で本土へあいさつ回りに行く時に、ちょうど四月の初めですけども、日教組は中央執行委員会を開催していて、ある意味で非常に助かったのは委員長が宮之原貞光という奄美大島の出身なんです。もともと琉球王国の同じ島ンチュで、そのもとで書記長をしたのが榎枝さんだったんです。そこであいさつをし、ですから支援が非常に順調にいききました。宮之原さん御自身も教育研究集会に来て、会員を激励するということもありました。榎枝さんは総評議長になられた後、いわゆる右翼からかなりねらわれた時期があるんですが、榎枝の沖縄問題に際する対応等を見てですね、右翼の一部から「絶対に自分たちがガードしてやるんだ」というぐらいの直接私はコメントいただいたことがあります。実は私も心配されるコザの所、街頭へ行きましたら、やはりいました、あの周辺ね。もし、暴力的に邪魔しようというんだつたら、別の右翼が右翼を抑えるような、こういう、これ具体的なコメントとしていただきましたので、すべて予定どおりの。何度も榎枝さんは来ましたけれども。

そういう党派的な面で、榎枝さんになったから社会党への勧誘とか、これ直接的な教組全体が一本化するということとも違う。教組が推薦して当選させた喜屋武みたいな人が日政連議員として社会党と直接関係を持つとかというふうな、特に強い要求は感じませんでした。はい、これは直接私が担当したことなどもありますけどね。

○高橋順子 今、右翼の話があつたんですが、沖縄でもいろんな先生方が刺さ

れたりとか。

○石川元平 これは私の前の委員長の前、教公二法の際に右翼に右太ももを刺されて。



○高橋順子

はい。

○石川元平

屋良の家には、教公二法闘争の時は教職員会の青年部、空手とか達者な、それを寝泊まりさせました。それでずつと防衛をして、そして多くのそれもみんな私的な警護員をつけました。警護員にはちやんと、ばつと伸びる鉄の棒がありますけどね、十手じゃないけど、そういうものを携帯させるんだとか。これは後には喜屋武につけたこともありますし。面会を強要するわけですよ。事務所に入ってきてテーブルひっくり返すのは何度もあるものですからね。

ですから前は木の枠で教育会館はありましたけど、これをアルミにして、それからルーバーで、一応こんな格好で、外から投げても大丈夫なように。二階の入り口のドアも鉄の扉に今やっているのは、押しかけられて何度も、そういうことがあるものですから。我々がよそで会ったことあります、八汐荘で会おうと。そうしたら、物すごい脅しですよ。「夜歩けんぞ」と言われて。ですから、車運転するとか、うちに帰る時はいつも警戒をしながら、違ったコースを通ったりということ等々を含めて。右翼勢力は、これは相当、彼らなりに沖縄問題を日本の中でやられていますから、これで旗上げればかなり功績を認められるのかな。

日教組の教育研究会等を開いた時には、何十台としてやりました。ところが、こちらの商売をやっている人は、店を閉めないんですよ、ガーガー言っても。驚きもしない。本土のほうでは何度もよその県の大会行ったことあります、みんな閉めるんですよ、シャッターね。ところが、こちらは、最後は沖縄の民謡を流して恩納のビーチで海水浴して帰ったという。それからコザのホテル、ホテルと言っても大きなホテルじゃないですよ。大体二、三〇名しか泊まれないような、あんなホテルの玄関でオバーに逆に撃退されるとかね。そういうことの話がいっぱいあります。ところがやっぱりいるんです、それは。金もらって。

ですから、金城実がつくった平和の像ね、あれを破壊した。壊したのは青年二人、ボール持ってやって。このバックで、させた人がいるんですよ。等々色々あつて、そういう泳ぐ場所なんですよ、沖縄は。

○高橋順子

はい。

○石川元平

これ左右の中でも全国的には左寄りの、復帰時には赤旗とか青ヘル、いろんなセクトがたくさん来たけどね。今、その勢力が少し弱まっているんじゃないですか。

○高橋順子

右翼の人たちは、沖縄の人もいらつしやるでしょうし、本土から来た人たちも活動していたんですか。

○石川元平

県出身です、直接危害を加えたのは。これはもう名前も公表されて裁判にもなつて。

○高橋順子

七五年にも、右翼の人から沖縄県教組の人が暴漢に襲われたと出ていたんですけれども、七〇年代に入っても続いていたんですし、か。

○石川元平

復帰後も、それは衰えてないと思いますよ。右翼にも離合集散がありますけどね。浦添に拠点があったり、それから読谷に拠点、これがどこに移ったりだとかということとは色々ありますけれども。しかし最近はまだ僕ら気にはしていませんね。彼らにあまり気を使わないほうがいい。簡単には、県内在沖の在来右翼も簡単に動けないような一つのオール沖縄のあれがあるものだから、その意味では沖縄は先鋭化はしていないですよ。

○高橋順子

はい。

○石川元平

強大なバックで今、みんな進んでやっているような状況があるから。

○高橋順子

先ほど国際情勢のことを屋良さんがどのように把握されていたかというお話が出たんですけども、六八年に小笠原が返還されたことについて、沖繩の返還と関わってどういうふうにとらえていたのでしょうか。

○石川元平

おそらく著書などの中にもありますし、また直接言われたりしたことがありますけれども、彼はある意味で、いつ実現するかというこれ全く曖昧模糊としているけれども、沖繩は復帰しなければならぬ、いや必ず復帰するんだという、復帰させるんだという、そこに指導者としてのすごい主体的なコメント、決意があったと思うんですね。ですからさっき話しました新報の「一条の光」という中に彼はすごいみずからの信念と、ちゃんとまた同じように分離されていたのが、いわゆる返還をされた。彼の鈍角的体制というのは、そういうことなんです。この鉄筋コンクリートのような、これをぶち破るためには鋭角なものだけじゃだめだよ。これは運動論としても、一部の例えばセクト的な、そういう人たちだけの運動じゃあ後がついてこないよ。だから指導部と大衆との距離は、鈍角であって、これで当たればコンクリートだろうがひびを入れて、これは後で乗り越えていける。また乗り越えてきたわけ、実際ね。

○高橋順子

はい。

○石川元平

第一目標を彼は復帰ということに置いていましたから。ただ、本当は基地のない、そういう復帰だったんだけど。勝ち取ったけれども、県民の願ったそれにはならなかったから残されたのがこうだよということも、ちゃんともう遺訓として発してきましたのでね。

## ■「全軍労働争」

○櫻澤 誠

そうしますと、屋良主席とUSCAR・高等弁務官との関係は、これまでも色々触れていたというところがあるんで、次の全軍労働争のところですよ。事前にちよつとお話しておくよ、ちよつとこの後、幾つかピックアップしている部分、時系列にきれいに並んでいるわけではないんですけども、一つずつ伺って、また御質問していければと思います。

○石川元平

全軍労働争、これは六九年のですね、佐藤・ニクソン日米首脳会談後に、実は当時、私の認識では二万を超える基地労働者が、現在は八〇〇〇ちよつとですね、いたけれども、この基地労働者に対する首切り合理化が始まるんですね。ですからこれは首脳会談で、そういう約束がされたのではないのかという怒りが強く出たわけですよ。教組を含めて我々県民に強く全軍労働争、印象に残りましたのは、土地をケーサーという沖繩の方言のあれで、「首を切るなら土地を返せ」という、これがすごくて、すんと僕は落ちましたよ。ヤサ、ヤサって、なるほどな、そうだろうという。これで結局軍を相手ですから、途中いろんな軍に対するそれがあった、あと安里衆議院議員だったかな、銃剣でこうやられている、そんな色々ありますね。ですからこれを、やっぱりみんなで支えようというのが母体の県労協をはじめとして我々沖教組は、教職員会は県労協に入っていないかったけれども、独自にそういう判断を機関会議でやりまして、ストライキの支援をしてきた。

軍司令部と言っても、弁務官のいたあの司令部もありますし、海兵隊司令部は当時、現在うるま市、元具志川市の川崎小学校の近くにありましたよ、当時キャンプ・バトラーと言っておりましたね、私は大体そこを担当したんです。前夜から寝泊まりをして、早朝か

ら行つて全軍労の仲間と、あと動員された仲間ゲートをね、封鎖をするというふうな。終日、近くでずっと。たまに右翼らしき者から投石があつたりもしましたけどね。

だから、あの時もそうですね、今もそうだが、右翼のだらしなさですよ。アメリカに立ち向かえばいい。しかし、基地に反対する、それに対してこうということは、これは全くだらしない存在になつたなという、これは余計な話ですが。こういう状況のもとで、この拠点を中心に全軍労を孤立させないための組織的動員を、特に労働組合がそれをやってきました。非常に、あれはもう物すごい強化をされて、二四時間、四八時間とかも、無期限的なストまで、こういう膨らんでいくような、こういう状況の中なども実はあります。

もう一つ、こういう闘いの中で、ある意味でまた非常に全軍労としても強化をされたのがあると思いますね。裏話も色々聞くんですよ。私の妻も実は基地労働者でした。キャンプ・桑江という、これは軍属が中心の米陸軍工作隊という、そのライブリアン、書類を扱うそれをやっていたものだから、重要機密の書類まで色々見たらしい。そのうちに沖縄戦フィルムもあつたと言うので、何とかということでは僕はやつた。自分だけじゃなくて、その話を持ちかけた上司まで、「そんなことやったら俺が首になる」と、だめになりましたけどね。

事情を直接聞くと賛否あるわけですよ。労働組合に入っている人の中でも、色々あつて、あるいは入っていない人も全部ストップですから、戦術は。こういうことをやったかといえますと、アメリカ人関係の車のトランクに乗って入った人もいるわけですよ。その後でみんなばれたそうです。私の妻などは、大きなべを扱って、かなり得意としておりましたから炊事班長などをやったという話をよく聞きましたけれども。

こういうことなどで、団結は非常に固まっていた。これを示すのが一〇四号線闘争というのを御存じですか。恩納村の安富祖から金武の中川、県道一〇四号線ですよ。これを越える中川の発射地点か

ら恩納岳、あるいは手前のブート岳とありますけれども、一五五ミリ榴弾砲、主に二〇〇ミリを超えるものもあつたそうですが、一五五ミリ榴弾砲が主力でぼんぼん打ち込んだわけですよ。

#### ○吉次公介

県道を封鎖したんですよ。

#### ○石川元平

県道を封鎖して。いろんな闘いやりました。あの封鎖ですけども、我々は車で突破して、車でデモをするとかね。一番これが強烈だったのは、あの頂上に上つて阻止をするということですよ。入っているぞということのろしを上げながら、それでも打ち込んだんですよ。

#### ○吉次公介

復帰してすぐですね。

#### ○石川元平

これはね。だからアメリカというのは、これ許せんぞという、また怒りがね。入っているとわかりながら、なおぶち込んでくる。もう命がけの、こういうことなどをしかしやつて、直にはとめたんですよ。沖縄にはおれなくなつて本土へ、五カ所で日出生台から矢白別までということになりますけどね。

沖縄の僕らがとめた一つのエネルギーは、わずか四〇〇メートルそこらの山だけでも、沖縄戦をそこでしのいだ人たちがいっぱいいるんですよ。いわゆる北部への疎開、避難のためにね。私も古典やりまされども、恩納岳は母なる山です。そういう存在なんです。そこへ打ち込まれるということに対して、我々はもう肝をひりひりさせたわけですよ。

その一〇四号線阻止闘争の主力が全軍労ですよ。これ四、五〇名、刑特法違反でね、刑事特別法という違反でつかまって、最終的に裁判になって四名が裁判にかけられたけれども、その四名のうち二人は全軍労の組合員ですよ。これが物語っている、主力として、その闘いに体を張って参加したんだという。



これがありますし、もう一つはベトナム戦争、ちょうど七〇年からアメリカの敗戦の色が濃くなっているなというふうな感じも受けるようになりましたね。あの当時、この基地の内でもベトナム反戦のあれを上げるといふことと、基地の外での呼応するものとの物すごい力ですよ。ですからアメリカは、基地の中からある意味で崩壊をしようかな、こういうふうな悩みを抱え込まざるを得なかったわけです。沖縄人を働かせることによって。

ということ、僕らも基地の外で感じて、だからまた全軍労に対する支援も非常に強力にやってきたなというふうな、そんな思いなどやりましたのでね。これ、復帰後、いろんな元気のあった組合も、今はどうなっているかというのがありますけれども、復帰後、系列化されたことによつて骨抜きされたのが、今の全軍労だと思います。また、第二組合もできましたよね。沖縄労というあれができたことなどもあつて、このほんとに夢を再び見たいような思いなんですけどね、本当は。

## ■「全軍労闘争」の質問・応答

○佐藤 学

ちよつと話ずれるんですけれども、半月前に国頭村の安田区に聞き取り調査へ行つたんです。

○石川元平

安田、はいはい。

○佐藤 学

安田で、七〇年ですか七一年ですけれども、住民たちがみんな出ていって、海兵隊と取っ組み合いですよね。

○石川元平

はい。泥んこの中で、こうやっています。

○佐藤 学

それでそれを演習場拡張をやめさせたという話、そういう思いの強さというものが。安田って別に活動の中心でも何でもない所じゃないですか、それが。

○石川元平

労働組合が中心でも、何でもなし。地元の人たち。

○佐藤 学

それがその兵隊、米兵と首根っこつかんだという、でもほんとにびつくりするようなお話で。本でも読みましたけれども、びつくりしました。

○石川元平

伊部岳ですね、あれがちよつと北側。そしてその南側の安波に続くんです。ですから、実力阻止、米兵營の関係含めて今、一〇四号ですね。あとは恩納側にも実はつくろうとしたんです。恩納村、あの西側にね。これも実力阻止ですよ。

それからもう一つは、自衛隊基地がね、これは本部の桃原という所で、あれは旧日本軍の飛行場もちよつとあつたみたい。そこを自衛隊の通信基地に使うとしたんです。これも長い闘いでとめました。だから、こういう闘って勝ち取つたのが幾つもあるものだから。

○佐藤 学

どれぐらい。

○石川元平

幾つもあるんです。その復帰というのは、いきなりそれだけじゃなくて、幾つものそういうことを勝ち取つて。こういうことは一応知っていますからね。僕らは今の若い者たちにこれをぜひ、僕ずつとやってきていますけどね。これはまた僕らの任務だと思つていますから、現地にももちろん行きますけどね。こういう過去の闘いをくぐつて今があるわけだから、残された、ある意味で最後の全体を追いつ闘いの始まりを今やっているような気分ではありませんけどね。

○櫻澤 誠

もう御質問も始まっていますけれども、ちよつと確認をしたら、県道一〇四号線越えの話は項目として具体的に入れていなかったの  
で、伺えてよかったと思います。

私のほうから一点だけ具体的な話で恐縮なんですけれども、途中で奥様が基地労働者であつて、機密を扱うようなライブラリアン  
だったというお話でしたけれども、素朴な疑問として上がったのは、  
当然そういう機密を扱うところまで入っている中で、身辺調査とい  
うか、思想調査みたいなことを事前にやるわけで、だんなさんが教  
職員会の専従だということは当然わかるわけですよ。その辺は特  
に何もありませんか。

#### ○石川元平

沖繩タイムスが最近、連載しているものを一つにまとめましたね。  
うちの妻も、そのまま二回にわたつて、これやつています。ちよつ  
と本人もコメントしていました。わかっていたようです。僕などが  
もちろん何回も旗持つて歩いているわけけれども、僕などが歩い  
てなくても当時の軍用道路一号線を、この赤旗や緑の旗と、こうや  
ると、「ヨシコ、ヨシコ、あなた方のあれが、『ヤンキーゴーホー  
ム』言っているよ」という。だから、そういうことだろうと思いま  
すが、首になるのは非常に早かったです。身辺調査、きちつとやら  
れていますよ。

アメリカは、これも言ったかなと思いますけど、教育会館に何か  
につけてC I Cが常時出入りをするんですから。これをとめられな  
いんですよ、施政権なんですよね、その力が。ですから、入つてき  
ても都合悪いようなものは板書をしないと。こういうふうなこと  
などで防御するしかなかったんですよ。

#### ■「コザ事件」

#### ○櫻澤 誠

呼び方は色々あるんですけども、ここでは「コザ事件」とい  
う形で書いています。引き続きお願いします。

#### ○石川元平

さつきも少し話しました七〇年の一月二〇日の深夜です。前  
日、現在の沖繩市美里中学校の校庭で毒ガス撤去県民大会を開いた  
晩ですよ。日にちとしては二二日になっているけれども、二〇日  
の深夜に発生した。発端は、現在の中の町ですね、いわゆる沖繩市  
のメインの所、飲食店が、バー、キャバレーなどが、大きなものも  
なくなつたけれども、飲食店が非常に集中しているような、こんな  
場所です。そこで米兵が運転する絡みの交通事故が発生して。この  
前に糸満市で主婦の轢殺事故があつて、加害米兵が軍法会議によつ  
て無罪判決が出ることの怒りが充満している中で、これが発生した  
ものだから、みんな飛び出していったんですよ、近隣にいるのが  
ね。これは、もちろん県民大会に参加している労働者もいるし、そ  
の他この周辺でやっている、そういう飲み屋の従業員のホステス  
や、捕まつた人を見たら、寿司を握っている青年もいましたね。こ  
ういう人たちが出て、この状況に対して、いろんな言い方をして  
います「ヤンキー、ゴー、ホーム」、糸満のあれを繰り返すなどど  
か、やつぱりさまざまなことを叫んで、怒りをぶつけようとしたら  
憲兵が空に向けてだけでも短銃を発砲したんですよ。これが、も  
う爆発の瞬間になつて、MPカーもひっくり返されて、これからど  
んどん入ってくる車を。あれほどまでに整然と、今のようなきちつ  
とした歩道は当時はない。けれども、周辺の商店街、建物の中に全  
く危害を及ぼずに道の真ん中ですね。当時は分離帯はありませんで  
した。真ん中でひっくり返して、映像などで後で見ると、若い女の子  
が自分のコートを脱いでガソリンやつて車に入れたりもしているん  
ですよ。こういう怒りまで。

当時、大山というコザ市長、社会大衆党の市長でした。市長がう  
ちで寝ているのをたたき起こされて、行つてみたら、近寄れない。  
市の消防署があるわけですよ。消防車も一たん火事ですから、立

ち寄ったんだそうです。ただの火災じゃないわけですよ。そういう怒りなものですから、消防車はすぐ立ち去っているんですね。立ち去った消防車に市長は乗って、もう様子を見るしかなかったという。今、例えばコザといいますとね。プラザハウスから一〇〇メートルぐらい行ったら、元中央高校、左側に行く道があります。三差路があります。このあたりから始まってね、コザの入り口。今の胡屋の十字路、二キロメートルぐらいありましようか、十字路を行って、それから左折すると嘉手納の第二ゲートなんです。第二ゲート通りと言われておりました。第二ゲートを通って、基地の中のそのゲートを突破しているんですよ。何百人かが入って学校やその他、焼き討ちをしている。

そういう事件でした。これに対して弁務官は通報を受けて、ヘイズと言ったかな、この少将、それもベトナムなどでそういう鎮圧とかで関わった専門家の少将を呼んで、対策、深夜会議を開いて、この少将はみずからヘリコプターを操縦して、何機か飛び交ったようですよ、その状況をね。だから、武装しているんだったら、自分らは反撃しただろうというふうなことまでコメントを残しましたけれども。

結局、我々からすると、整然と焼いて、しかも黒人兵は見逃したというんですよ。白人のみ。ナンバーがね、すぐわかるんですよ、黄ナンバーですよ、車が。現在、みんな「Y」ナンバーと書いてあるけど、白でわからないですよ。黄ナンバーだからすぐ見分けつくわけさ。乗って、それはひっくり返して、これはみんなガソリンで燃やして。基地の中のそれまでですから、もうびっくりしたのは、ほんとにほとんどもう全く周辺の住宅、商店街には危害を及ぼさずに見事にこうやってるものですから、しかも前晩にそれがあつたということ。

首謀者がいてですね、組織的に計画的にやったら、これは騒乱罪の要件に達成するんですよ。ところが、その動きがあつて、宮城という喜屋武真栄の教え子でしたけれども、彼が幹部ですよ、琉球警

察のね。彼が応援でコザ署に配属されて、いわゆる騒乱罪適用をやるうとしたんです。私なんか各団体と一緒に行って、彼に騒乱罪適用という動きもあるようですが、まかりならんというようなことで。私自身がそれを知らずに、実家の東村の、有銘の実家まで行つたんです。こういう密議が何かあるんだつたら、大体知っているよ。それから中頭支部の教組の有銘政夫、彼たしか、あの時書記長していたと思うけど、彼もうちに寝ていた。確かに中の町界隈で県民大会参加者の労働組合員なんかたくさんいる。学校の教員もたくさんいるんですよ。捕まってもいますけどね。これは事前に図って、組織的、計画的にやられたものじゃないということは、それは認めてくれました。

また、たくさんの数十名が逮捕されたけれども、これはまた私自身もつと検証したいけれども、比嘉良仁という検事長。この方は、今は一〇〇歳ぐらいになるんですよ。ちよつとタイミング悪くて、直接お話しする機会得られてなかった。教育福祉会館で比嘉良仁氏をちよつと招いて意見を聞く集会があつて。そこで、やっぱこの比嘉検事長があの時いたんじゃないかと思ひましたのは、いわゆる琉球人ですよ。琉球人意識を丸出しにして、短いスピーチだけたけれども、あとは「ていんさぐぬ花」を大きな声で歌ひましてね、みんなから大喝采を浴びましたけれども。主席公選の時に実はあいつに行つたんですよ、屋良先生一緒に。だから、僕は声、顔も覚えていきますね、ほとんど変わっていない。細身で、変わっていないこの方は。あれだけの元氣のある、要するに今の日米のそれに対する物すごい怒りをね、ぶちまけて「ていんさぐぬ花」を歌つた。

ちよつと調べてみてください、比嘉良仁といいます。屋良も私もお会いしたことがありますし、これはこの前、久しぶり会つて、一〇〇歳だけでも、あれだけの氣概をみんなに示してくれたとか、こういう人は塩漬けにしても頑張ってもらわれないといけないなと思つたんですよ。いや、ほんとに大変な激励を受けますよ、ああいう方からね（比嘉良仁氏は二〇一五年七月四日に死去）。



ですから、騒乱罪適用を、一部それをやったから何十名か捕らえられたけれども、要するに毒ガス撤去をやった、革新系の首謀者を捕まえてやろう、これは早々と打ち切りました。これはまた私自身もそこへ行つて、談判をしたそれがありますので。直接また、そこにいなかったということなど、主力であるうちの中頭の幹部もね、残念がっていたわけさ。しかし、そんなのがいたら、また後でやっぱり相手は何やかんや。写真は相当撮られているんです、知らないうちにね。

その中にはブタ箱に入れられて。真壁朝昭つて、普天間爆音の今、幹事の一人、元高教組の書記長ですよ。それから安里といつてね、彼は元高野連の理事長をした、彼その後、あれで英雄みたいになつてね、これ。新聞にも大きく、逮捕された時はどうしたと。これが高野連の理事長になつたんですよ。高校野球の指導者になつてね。そういうのが色々ありました。

ああいう武装兵待機をさせての、それもありましたけれども、ランパート高等弁務官はコザ一帯にコンディション・グリーン1という外出禁止令を出しているんですね。ですから、さっきの南側の発生の拠点入り口、島袋、要するにそこへの進入はみんなとめられています。車はみんなとめられてという。我々はわかりませんでしたけれども、武装米兵との衝突もあったようで、けが人なども一応出ているんですね。詳しいことは全然、その後まであまり我々には知らされていませんでした。

CSガス等々鎮圧用、これは実際使用したと言われています、武装米兵はね。それからこの対応いかによつては、ランパートの首まで飛んだであろうと言われているんですよ。

## ■「コザ事件」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。石川先生の話の中で比嘉良仁さんについては印象よくおっしゃっていたんですけど、騒乱罪の適用に関わつて、もうすこし複雑な状況があったような感じがするんですけども。

○石川元平

そうですね。いや、本当は僕もちよつとお会いをして、最後の、昔のこともちよつとお聞きしたい人のお一人ですね。まだ元気に昔のことを、ちよつと覚えてもらっていますから。

○櫻澤 誠

その方よりは、むしろお話に出てきた警察のほうの、実際にコザに派遣されてきた方とのやりとりのほうが印象としては強かったですか。

○石川元平

だから宮城さんなどがね、一番的確で、いやお元気かどうかのあれが、その後わからないです。ただ、教公二法の闘争などでは長嶺だとかね。特に彼は人相も悪いし、警備の責任者だったものだから、我々から相当うらまれたけれども、しかし、後を終わって何十年かな、たつた後の座談会などでは、むしろ負けてよかったというふうな、こういうコメントをやっているんですよ、警察幹部がね。

ですからさっきのCICの話もしましたけれども、教育会館に入りをして、屋良、喜屋武などの行動チェックを、動きを探っていた儀間という、僕はどこかで話を、「G」という話は「儀間」というんですけどね。この二世、ほんとに元気だったら、ほんとにちよつとお会いをしてね、あの時どうだったお互いって言つて、腹割つて酒飲みながら話してみたいなつて。ウチナンチュですよ、二世。

○櫻澤 誠

何か御質問があればと思いますけれども。

○吉次公介

屋良さん御自身が、このコザ騒動について直接何かおっしゃつて

いるのを、お聞きになられたことがありますか。

○石川元平

そんなにちよっと印象に残っていませんね。

○吉次公介

ありがとうございます。

○石川元平

そういうことには非常に、いわゆるたくさん沖縄の返還闘争の中では、例えば右翼と、さつき全軍労の話もしましたが、全軍労の県民大会を与儀公園でやろうとした時に、右翼に襲われたことも何度もあるんですね。それを知って、よし、このやろうと思っ行って、全軍労の仲間はかなり太い角棒に、もちろん見てはプラカードですけど、プラカードは形の上だけです。いざと来たら、これを右翼を殴り返して退散させたことがあるんですね。こんなことなど、しょっちゅう起こっているものですから、こういうことには屋良は心痛めましたよ、全部ね。そういうことには、聖人みたいな人でしたからね。そういうことには非常に、教育者であったわけだから。

## ■「国政参加選挙」

○櫻澤 誠

それでは続いて、国政参加選挙をお願いします。

○石川元平

国政参加選挙、これは主席公選の翌々年、七〇年一月から戦後初めて衆参両院選挙に参加する、沖縄県にそれが認められて。これは主席公選の後だったものですから、ほとんど革新側の要求としては復帰問題を面前に出しての保革の闘いになりました。

この革新側からですね、社会党の上原康助、これ全軍労の委員長ですよ。ですから全軍労が委員長を出すまでになつていたという。人民党、後に共産党に移りましたが、瀬長亀次郎という。社会

大衆党、ローカル政党、人民党もどちらかというとローカル政党ですが、社会大衆党の委員長の安里積千代が衆議院で三名。保守の側は主席公選で屋良に破れた西銘順治ですね、これ自民党です。同じ自民党で経済畑の国場組の国場幸昌という、国頭村の出身ですが、で争われまして、一番トップ当選したのは上原康助でしたね。三議席を革新がとって、保守が二議席と。同時に行われた参議院選挙については、喜屋武真栄と稲嶺一郎という、知事の稲嶺さんのお父さんですね、が立候補した。ここでも喜屋武が圧勝でしたね。ということ、国政参加選挙は、いわゆる屋良を当選させたあの沖縄の復帰や基地などに対する思いがそのままあらわれた選挙になったというふうに思っていますし、当選をした、この皆さん、例えば上原康助は弱冠三十何歳ぐらいかな、彼が堂々と衆議院本会議において政府を追及する、ほんとにまだ夢のような感じでありましたけれども。瀬長さんは瀬長さん、安里さんは安里さん、それぞれ頑張ってくれたと思っています。

これは後で返還協定絡みの中でも、沖縄返還協定特別委員会、衆議院の特別委員会、瀬長と安里のまだ質疑が残っているのに緊急動議出されて、ということなど、色々ありましたのでね。こういうことを含めて、やっぱり沖縄の声を十分聞くという姿勢は、屋良に対する対応を含めてですね。後でもっと言いわけなどしておりますが、とてもじゃないけど、今日では堂々と構造的差別ということでは見ていないという。政府のとってきたあれを見ると、なるほどなというふうな、そんなことを過去から知ることができる。

## ■「国政参加選挙」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。私のほうから一点だけ具体的なところで、教職員会としてどういう選挙運動をされたのかということ、

可能な範囲でお伺いできればと思いますけれども。喜屋武さんを応援するというのは、もちろん問題なくできるわけですけど、一方で当時から言われたのは、やっぱり中選挙区制の中で、革新のそれぞれの候補者が出て、実際泥仕合のようなこともあったわけですよ。そのあたりと教職員の立場というか、運動方針、やり方との関係とか、その辺を伺えればと思うんですけども。

#### ○石川元平

まず、主席公選の時の組織内での、ある意味で今では想像できない対応があったというふうなことを少し紹介しますと、教公二法をぶつつぶしたことで、いわゆる地方教育区公務員法と教育公務員特例法、この二つが教公二法と言われるものだったんですね。これはある意味で身分法でもあるんですよ。どういう身分法かという点、組合の専従に、教職員の専従になるためには在籍でできたわけですよ。今、できているわけね、現在ね、在籍専従制度というのが。ところが、その法源を我々蹴飛ばしたのだから、何もありません。だから、当時どういう状況が選挙の中で出たかといいましたら、中頭支部で選挙応援のためだけに現場から、今で言えば専従になつて、もちろん学校ではそういう合意をとって、もう四六時中選挙に没頭したわけですよ。こういう女教師が出たり、色々程度の差はあっても教職員の縛るあれがないですからね、かなり大胆に自由に全県下でやられましたよ。演壇に立つわ、もうあらゆる世話をするということがありました。

そういうことで、最大の主席公選をくぐって、今度は国政参加選挙になると御質問にあるように、いわゆる沖教組の中でも、ざっと三分の一は共産党系がいるわけです。これは運動方針を決定したり、役員選挙したり、こういう選挙闘争等になると必ず。これはね、社会党一党支持、共産党のあれがいたからという、そういうことじゃなくて、主席公選で革新共闘の拠点、自分たちがね、そういう中枢を占めるんだということを、打ち立てたものですから、その後の日教組からの働きかけがあっても、これはみんな体よくお断りをして

きたというような。

じゃあ、具体的にそういう衆議院選挙で党派の対応になりますと、これは組織としては一本化はできませんでした。それぞれの有志会をつくって、ただ方針上は革新の勝利を期すという、運動方針上ね。ですから物差しは、すぐわかるわけですよ。この衆議院選で言えば西銘はどうか、ノーですよ。国場どうか、稲嶺、ノー。後については、みんな我々の教職員会に適応しているわけです。革新という評価。革新共闘会議と、また皆さん、みんな関係を持ったんです。いろんなものを同時に三名、四名一緒にやってね、革新の候補ということ。我々の組織も、ですからそういう革新の勝利を期してというようなことでやりましたので、そこはある意味で割り切ってやってこれたと思います。そして、もちろん成果をまた上げたというふうに思いますし。

ただ、これがちよつと沖縄県以外に全国区選挙があるわけですよ。ね、全国区、地方区という。全国区候補で日教組の推薦、これ日政連という日教組出身組織の政治組織があったんですが、その例えれば宮之原貞光も参議院出たんです。それから安永英雄という。日教組は全国区でも二人当選させる実力を持っていたんです。これ、東西に分けてましてね、西日本で宮之原、そして西日本で、ある時は安永という、こういうふうな闘いをやって、両方とも当選をさせる。こういう時に、やっぱり共産党系もあるわけですから、これに対しては、当初はね、八汐荘の近くにアパートの一室を借りて事務所にして、組織的には、いわゆる教職員会、沖教組としての関わりはできずに、有志会でやりました。やるといっても副委員長や専従の私を含めて二、三名は専従会議の中で了解を得て、この応援するぞという。宮之原氏は奄美の出身でしたから、出身者たくさんいるんですよ。その出身、郷友会とかね。うちの支部とかなんか回る時も僕の車で一周をして、そういう奄美の方々にお会いをしたり、集まりに行ったりというふうな、こういうことなどでやって。ある意味で割り切って上手にもやりましたから、これは共産党を支持する



側からもそうさしてのクレームはなくて済んだと思いますね。

あと、安永さんという福岡県教組出身の彼も、彼は二度にわたってやりましたけれども、二度目は落ちましたけどね。やった時にも同じような手法でやりましたので。ただ、ある意味ではやりにくかったですよ。一党支持している日教組の中で我々が有志会でやると言ったつてもね、ちよつとやっぱやりにくい選挙ではありませんでした。

## ■ 「屋良主席および石川氏の佐藤・ニクソン会談への印象」「核抜き・本土並み」返還、「密約」、

## 佐藤、若泉についての屋良知事および石川氏の評価

○櫻澤 誠

そうしましたら、続きですけれども、「屋良主席および」と「核抜き・本土並み」返還」は一緒にお話をいただいたほうがいいかなと思います。

○石川元平

はい、そうですね。佐藤・ニクソン会談、一九六九年の一月一九、二〇日、二一日ですね。共同声明二一日に発表されました。これは、六七年の佐藤・ジョンソン会談の流れをくんで、その上にとりうふうなね。実は六七年の佐藤・ジョンソン会談から基地の対応については、かなり懸念するような、我々復帰協では分析をしておりました。つまり基地は残して、施政権だけ返還をされるということに対する危機感を持って。ですから佐藤の訪米反対なんです、復帰協はね。いろんな闘いを組むことになるわけですが。屋良

も復帰協のメインの方針を掲げて主席に当選をしたという、即時無条件全面返還も核も基地もない沖繩をというふうなことでやりました。ただ、本人がまた復帰すべし、復帰しなきゃならないというふうな、これまた一般の県民、我々とも違った強い思いがあったと思います。

曲がりなりにも、屋良は「形式的にも」という言葉を使っていたと思いますが、日本に復帰をするということは歴史的なことだというふうな、こういう思いをたびたび聞かされてもおりませんでした。でありながら、ただ県民要求とはかけ離れた内容、特にあの共同声明の中にはたしか韓国の安全は日本の安全とか、台湾の安全、同じようなことを言われていましたね。京都の京都市立大学の。

○櫻澤 誠

成田千尋さんですか。

○石川元平

成田さんのね、彼女の論文。彼女は色々お世話をしたけれども、彼女に逆にまた教わる場所もあつたりして、韓国の側が沖繩返還に対して、いわゆる日米交渉に対して大変な懸念を持って独自にアメリカに対しての働きかけをやってきたんだという。これをね、僕らある意味でこんな目で見きれなかったのかなというふうなことで、これはなるほどアメリカの判断の中には、これは日米交渉だけじゃなくて、米韓の条約に結ばれた、またそこに実際に韓米軍を派遣して、この一番の前線をやっている。こういう国からの働きかけも、これはかなり作用したのかなと思ったりも、率直にいたしました。

○吉次公介

台湾からも、沖繩返還については発言がありましたね。

○石川元平

そうですね、台湾。で、一番後でまた屋良を悩ましたものが県民要求。復帰協は訪米の際にも強い抗議の集会等をやつて、もう結果が出る前から、抗議、糾弾、日米共同声明路線の粉碎という、そういうところまで復帰協としては固まっていたので。屋良はそれ

が出た後からも、やっぱり新たな七二年復帰に向けてのイバラの道の始まりを痛感していたと思いますね。

それでもまた礼を尽くす人なんですよ、不満があってもね。それで総理を迎えるために上京したんです。しかし、上京しても徹底してこちらの県内の声を色々聞いて、羽田に出迎えには行かないんです。そういう決断をしたわけですね。ですから、評価というほどのものにはならないけれども、これも屋良の個人の中では一つの区切りをつけられたなというふうな印象。自分の目の黒いうちはどうなるかということをつたひたび聞かされてもいましたので、県民の復帰協を中心とする大変な不満と怒りはありながらも、本人としては一定そういう評価もしていたと、側近としてはそういうふうに思いません。

それから私は、さつき申し上げた六七年の佐藤・ジョンソン会談からの復帰協が情勢分析をする中で、佐藤・ニクソン会談をずっと見てきましたので、これも県民要求と相入れない。沖縄に核基地は残って、日米共同声明路線による新たな、いわゆる基地を抱えての闘いの始まりみたいな、そんな感じで受けましたし。それから盛んに政府が宣伝をしました「核抜き本土並み」というそれですよ。これは、かなり効いたと思いますよ。

県民要求は「即時無条件全面返還」、核も基地もないであつたけれども、政府の側がそれに代わるものとして核を抜きます、本土並みにするという。これは愛知外務大臣、この北米課長の話もありますけれども、佐藤総理にも会って、自信ありげにそんなことを言うんですよね。基地の整理縮小の約束と僕らは受けとめるんです。結果として違う。復帰協は、そう見抜いていたわけですが、多くの県民を惑わすような効果は、「核抜き本土並み」が効いた面は確かにあるんです。

全国の退職協の婦人部の総会が沖縄ハーバービューであった時に、構成劇をやっているわけけれども、そのくだりを言ったんですよ。僕は、叱りつけてやりました。何を言っているのか、屋良の出

身母体の教組のOBである、復帰闘争を闘ったあなた方がこういう誤ったメッセージを。とんでもない話だと。直ちにその認識改めろ、もっと思い起こせという。こういうのが実はあるんですけど。そこまで巧みに宣伝をされて。

ですから、復帰によって安保が適用されたことで、先ほど申し上げているように核安保体制が変わっていったという、このことね。あれはマスコミがあまり伝えませんよ。これは運動で、そういう認識を持つべきだと思います。今でも。ですから、少女暴行事件でアジア・太平洋安保に大きくまた拡大、変質していったということを含めてですね。沖縄の要求がこういうふうにも何度か逆手にとられて日米の同盟強化に使われてきたという、こういう歴史的な事実については、これは今、改めて復帰闘争等を闘った経験のない人たちに、いろんな機会に私言ってきておりますけれども。復帰四〇年の去年もね、言ってきました。これからもこのことは、ぜひ多く伝えていきたいなと思っております。

屋良朝苗が残してくれた遺訓のうちの一つは、二度と国家権力の手段、いわゆる物として沖縄が、場所として利用されて犠牲をこうむってはならないということ。アメリカは、いわゆる太平洋のかなりめ石というふうなことでしか見ていないという。こういう物として扱われて、犠牲されるということはもう真つ平ごめんだというふうなことの認識を持ってば、これは必ず新しい子や孫たちのための展望が開けるといふ、こんなことを思うものですからね。

それから核の密約の件で、若泉敬については、僕はもちろん保守的な国際政治学者だったから佐藤から頼まれて黒子役を演じたと思うけれども、彼はとにかく返還をして、七二年に復帰する、このことで大半の県民は喜び、支持されると思ったんですね。真面目にそう思います、彼の著書を読んでね。ところが、我々は大反発をしたわけですよ。五月一五日の怒りの抗議集会などは、日米共同声明路線による沖縄返還を糾弾するという、そして佐藤内閣打倒まで掲げてやったわけですから。こういうことに対して、ある意味では非

常に純粋な学者だったと思いますね。アメリカでは、ある意味で外務大臣や、外務省じゃないですよ、重要な役割を演じたのは彼ですよ。だから、何とかして彼は佐藤に、それは密約もあったのだからうけれども、県民要求に近い形での処理を認めさせようとしたのではないのかな。これが、『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』と思うんですね。そうすれば大騒ぎになる、本人の告発ですから。ところが佐藤に無視をされる。もちろん政権政党に無視をされて、マスコミは取り上げないということで彼は失望をし、自殺しようとしたんですよ、南部戦跡でね。しかし、そこで実際しなかった。なお彼は英語版を出そうとする。アメリカにも訴えようとした。その英語版をつくるため、彼がやったのはヤマトじゃないですよ。沖縄の南の果て、与那国の民宿です。一昨年の一〇月に私、与那国へ行く機会があつて、自衛隊反対闘争をしている皆さんとの意見交換をして、実際にまた見てきましたけれども。このことを聞いて、島の人たち、わからなかつたです。そんなに民宿がたくさんあるわけでもないから、ぜひこれを調べておいてほしいと僕頼んでありますからね。

実はこういうことを含めて、ですからそういう告発のものにも、ある意味ではビクともしないというか。でもってノーベル平和賞までもらうんだから、世界一のペテン師じゃないのか。ただノーベル平和賞選考委員会は最大のミスをしたということをやっているんですよ。

## ■ 「屋良主席および石川氏の佐藤・ニクソン会談への印象」「核抜き・本土並み」返還、「密約」、

### 佐藤、若泉についての屋良知事および石川氏の評

### 価」の質問・応答

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。六七年の佐藤・ジョンソン会談のほうは前回に入っていますけど、その時もおそらく次回、専門家がいらっしやるのでというお話で、それほど深く伺っていないこともあるので、もし何かあれば、そちらのほうとも合わせて色々御質問いただければと思います。

#### ○吉次公介

屋良さんが、佐藤首相が帰ってきた時に出迎えに行くかどうかすごく悩まれたということに関してですが、石川先生にも屋良先生から直接何か御相談がありましたか。

#### ○石川元平

いや、その時はないです。

#### ○吉次公介

ないのでですね。

#### ○石川元平

はい。後では、色々聞いていますけれども。

#### ○吉次公介

そうですね。

#### ○石川元平

はい。僕が後援会の事務局長をしたのは、知事の最後の時。ただ、個人的な繋がりも私、屋良家、御本人ともあるものですからね。何かにつけて、事後のいろんな話は聞く機会がありましたけれども、事前にそういうことは聞かされていませんね。

#### ○吉次公介

『激動八年』などを読んでいても、眠れなくてホテルを一晚中歩き回ったなどと書いています。

#### ○石川元平

本人の言葉の中にね、「懊悩・苦悩」という言葉がよく出るんですね。出馬要請の時もそうですし。那覇の松川に自宅がありますけ



どね。玄関は石張りなんですよ。沖繩は冬、寒い時は物すごい寒いですよ。部屋の中の畳の上じゃなくて、ベッドの上でもなくて、玄関のそこに身をさらすと、夜通し。ということなどをなさる人でありましたから。

だからね、まず屋良とはどういう人間かということを知らないといけないと思います。酒を飲まない、たばこやらないです。年中、あることについて考えて、こういうことです。もちろん話を聞いたり、いろんなそれはありますけれども、眉間に縦じわを寄せて、何かこの爪を噛んだというふうな、こんな状況などずっと見てきましたので。とにかく懊悩・苦悩しながら。しかしまたよく使った言葉に「不退転の決意を持って」という、その時の肝っ玉は据わっているわけですよ。相手が誰であろうが、一步も引かないというふうな。ですから、大きな出迎えの時の後の心境などは、非常にあっさりした態度になっていたと私は感じました。当然県民からすれば、これは迎えるつもりで上京はしたけれども、行かんでよかつたんだと。これで気持ちもすつきりしたみたいなの、こういうことなども漏らしておられたし。

#### ○吉次公介

佐藤首相は六九年にワシントンへ行つて、また次にサン・クレメンテに行き、二回目の佐藤・ニクソン会談を行います。その時は、屋良さんはお出迎えに行つていられると思いますが、今回は、さほど強い反対はなかったようです。瀬長亀次郎さんあたりは、出迎えるべきではないと随分強く言ってきたようですが、六九年の訪米と、サン・クレメンテの時は、県内の革新共闘会議のムードは随分違つていたのですか。激しい議論があつたという御記憶はないのですか。

#### ○石川元平

そうですね。確かにサン・クレメンテ会談、二回目のあれは、復帰協でも大きな方針は取り組まなかつたんじゃないかな。

#### ○吉次公介

どうして一回目はあれだけ激しい反対があつて、屋良さんが一晩

中悩まなければいけない状況だったのに、二回目の佐藤・ニクソン会談では、反対が弱まったのでしょうか。やはり、六九年の佐藤・ニクソン会談こそが死活的なものであつて、次の首脳会談はもう七二年返還に向けた事後処理的なものだったから、反対が和らいだのでしょうか。

#### ○石川元平

共同声明自体は細かく分析されて、日米共同声明路線が敷かれる中での七二年復帰になるという、こういうことに対しての怒りが、これは六九年から七二年返還まで続くわけけれども、そんなに強い印象は残っていないところからすると、あきらめとは言わんけれども。

#### ○吉次公介

規定路線になつてしまつたという感じですか。

#### ○石川元平

ええ。これ、確になつたから、同じような取り組みがとれなかつたんじゃないのかな。佐藤総理が六五年に来て、六七年の佐藤・ジョンソン会談あたりから、ある意味で民族闘争から始まつた復帰協の運動からすると、ある人に言わせると、これはもう階級闘争じゃないのかというところまで行つたりもしたものだから。屋良を出した闘いに、いわゆる革命が起こるなんていう相手に利用されるようなことまでなつたりもしましたけど。その過程の中で抜けていった組織もかなりあるんですよ。本土で言えば、あれは同盟系、海員組合とか幾つもあるんですよ。それからすると、佐藤内閣打倒とか、先鋭化をしていったというふうな見方を確かにできるわけですよ、体制打倒ですからね。

#### ○吉次公介

関連しますが、屋良さんが佐藤首相をどう見ていたかというのを伺います。やはり、繰り返しお話があつたように復帰の内容にかなり不満だと屋良さんは感じておられます。しかし、屋良さんの『激動八年』などを見ると、佐藤さんには感謝しているという記述

もあります。両方の気持ちがあったのだと思いますが、屋良さんの佐藤さん評について、何かご記憶のことはありますか。

#### ○石川元平

佐藤自身に対する、それはないけれども、ただ一定で評価したのはやっぱり復帰の道筋をつけてくれたという。本人の持っていた思いと、心情と重なるものがあってのことだろうと思いますが。彼も僕にも何度も言ったし、全県民へのそれとしては知事退任の時のあいさつなどでもね、「勝ち取った復帰」だったんだ。これはたしか二、三度使っているんです。だけれども、課題は残っているぞと、これからも。

これは、具体的に言うと、復帰の中身を勝ち取るのは君たちの大事な責務だという。何かと言ったら、核も基地もない沖繩という意味ですよ。当初掲げた即時無条件のそれですよ。それと私がマスコミ等を通じてずっとまた言ってきたことなどは、政府、日米はまた沖繩基地を強化して、僕などの見方からすれば第二の捨て石にされようとしているんだ。屋良は、「二度と国家権力の手段として」という言葉、「手段」と言ったら「物」ですよ。物として沖繩のこの地が犠牲をこうむるようなことがあってはならないことは、これは何度も。県民には遺訓といいますか、私は遺言のようにずっと聞いてきましたのでね。公の場所、また新聞で僕が論文を書いたりした時などにも、このことだけはきちっと伝えておこうということをやってきましたけれども、その結んだ佐藤の結果としては、大変な不満を持っていたわけですよ。

#### ○吉次公介

ありがとうございます。

#### ○櫻澤 誠

野添先生、いかがでしょうか。

#### ○野添文彬

先ほどの御発言だと佐藤とか日本政府が「核抜き本土並み」ということを言い出した時から、屋良主席は、そういう言葉に対しては

かなり冷淡に見ておられたのでしょうか。

#### ○石川元平

一つ一つチェックをしていますね、核抜き。さつき申し上げたように核に対する恐怖は核をまくらに寝かされているという、大変な不安をみんな感じて。政府、総理を含めて北米局等々、核問題ではかなり神経を使って追及、質していますよ。

屋良建議書の中でも、この核に対する不安、これを強く求めていますしね。そして、もちろん基地はそのまま残るということに対しては、これはもうあまりにも大きなものが自分が退任した後も残るような、結果しますから。

#### ○野添文彬

この「本土並み」という言葉を、もし仮に使うなら、先ほどおっしゃったように沖繩県民は基地も日本本土並みに縮小されるのではないかと期待していたのでしょうか。

#### ○石川元平

これは、政府の説明として屋良にも直に言っているんですよ。本土並みに整理・縮小するんですよ。しかし屋良は信用していませんね。

#### ○野添文彬

日本政府は屋良県政にやっぱりそういうことをずっと言っていた。

#### ○石川元平

やっていますから、そこに僕は屋良の不信は当然増大したと思いますよ、何度やっても。佐藤総理自身までがやっています。愛知外相でしたかは、復帰までに確実に核はなくなるんですよ。ことを明言しているんですよ。ですから後に色々資料等で暴かれる核密約等々見たら、こういう心配がもうさされていたと思うんですよ。事を質したんだけれども、復帰までに撤去を確実にやられるんですよ。こんなことまでやるんですよ、日本の国家権力というのは。

#### ○野添文彬

沖縄返還後、徐々に基地が減っていくという見通しは、もうその時からあまりなかったのですか。

○石川元平  
なかつたですね。

○野添文彬  
そうですね。

○石川元平  
はい。

○吉次公介  
復帰の段階で、一〇%以上は基地の面積は減っていますね。

○石川元平  
ええ。

○吉次公介  
当時としては、一〇%程度減ったところで焼け石に水で、ほぼ基地負担は変わらないんじゃないかという感じでしたか。復帰の時点で十数%減ったことについても、ほとんど評価できないというお気持ちが強かったのですか。

○石川元平  
基地は、確かに一つは面積もありますね。

○吉次公介  
はい。

○石川元平  
我々、特に復帰協、原水協等々での見方では機能強化ですよ。復帰までは、主力は陸軍なんですよ。復帰後、堂々と海兵隊が主力に。その象徴的なもの、先ほどの弁務官がいた場所に座っているのは海兵隊の司令官です。こういう変化に対して、例えば鉄砲一〇〇丁よりももっと怖い一丁のほうが怖いわけです。こういう機能強化です。再編強化されてきたのが、復帰後の米軍基地の実態なんです。だから面積がどうのって、ごまかしてはいけませんね。

○吉次公介

はい。

○高橋順子

沖縄の米軍基地専用の面積は減っても、本土との比率としては沖縄が増えてくるというのも、その当時からわかっていたのでしょうか。

○石川元平

僕の頭では面積がどうのことよりも、さっき言った機能強化ですね。これもベトナム戦争で、あれだけ侵略の発進基地になって、核の不安、その他毒ガスや生物兵器の話等々を含めての、これ自分の周辺、生活圏の中での不安なわけです。

○高橋順子

はい。

○石川元平

本土の海を離れた、また演習場はどこか遠くに離れた、ああいうものとは全然危機感の違いがね。例えばキャンプ・キンザー、そこでもガスも発生したんですよ。おそらく一時的であろうが貯蔵していたであろうと。例えば暴徒鎮圧用のCDガスみたいなね。一〇〇メートルと離れていない、あの五八号と。大騒ぎしたことがあるんですよ。そこはベトナム戦争のさなかには兵站基地ですから、倉庫群の上まで荷物いっぱい積まれていたんですよ。また一方では、戦死をした兵士の遺体を北谷の元陸軍病院、これが今、海軍病院なんです。そこで処理されて、いわゆる遺体のままですよ、本国に送り返される。あの車はその遺体を運ぶ車だという、そんなことまで色々言われてね。

ですから、もうほんとに身近にまくらに寝かされているという、そういう危機感の違い、基地強化のことを、もう実感としてこれを受けとめていましたのでね。僕などは、あまり面積のそれには全くこだわらない。

○吉次公介

復帰前後の地元紙を見ると、おっしゃるとおり「機能強化」



とか、「再編強化」とかという言葉が頻繁に新聞紙上に出てきますね。

○石川元平

はい。

○吉次公介

その新聞の意味がよくわかり、大変勉強になりました。

## ■「復帰前後」

○櫻澤 誠

それでは今日の最後になりますが、復帰前後について、これまでの項目も関連していると思いますが、まだ触れられていないことなどありましたらお願いします。

○石川元平

これは世替わりへの期待と不安という、僕自身はね、受けとめていくわけですが。これも、いわゆる県民の心情をあらわした、よく天気が物語っているなという感じを受けましたのは、五月一日、その日米共同声明路線による沖縄返還を糾弾する県民大会を開いたんですよ。開きましたらね、これ与儀公園で開きましたけれども、どしや降りです。ただのどしや降りじゃないんですよ、ほんとにバケツを、よく滝をとか、バケツをひっくり返したような、いろんな言い方がありますが、とにかくどしや降りの前に、鉛のような雲です、鉛のような雲。沖教組の宣伝カー、亡くなった玉城幸一というのがマイクを握っていたけれども、あの鉛色のような雲、あれを見て自分たちの心は今、重たいんだという、こういう表現をしています。でしたね、玉城幸一、死んでしまったけれどもね。で、後でがばーつと降ったんですよ。そうしたらね、国際通りを通っていきましたら、国際通りの商店街では掲げた日の丸がはためくどころじゃないんですよ、さおにしょぼーんとくつついてね、これなーに？ って言っ

て、注視しなければ日の丸ということがわからないぐらいの、こういう状況です。しょぼーんとなって。

日の丸はね、復帰後、揚がらなくなりましたよ。特定な人しか揚げない、神社とかね。そして宜野湾ですと、こう回つても中々。うちの近くに宮城さんという修理工場があるけどね、そこはこの日の丸揚げてですよ、ああ、実にいいねと皮肉ったりしますがね。ほかでは、何にもないです。集落の中では一軒も揚がらない。だからそういう捨てた人もいるでしょうけど、たんすのどこかにしまいでんで、復帰前は持っている人は、これ、かなりいたはずなんですよ。僕なども持っていたはずだが、もうどこへ行ったかわからないです。捨てた記憶はないけれども、記念に残して、あつたら記念にとつては置いただろうけど、ちよつと見当たらないです。要するに揚がらなくなりました。これがね、七二年を迎えた象徴的なそれで。その後、幾つか復帰に関わるドル切りかえがありますね。

○高橋順子

はい。

○石川元平

一ドル持てばね、大きなたぷりのステーキが食べられましたよ、ステーキ。五ドルを持てば、那覇の桜坂で友達誘って飲みに行きましたよ。今、五ドルって幾らですか。

○高橋順子

五〇〇円。

○石川元平

数百円ね。

○高橋順子

はい。

○石川元平

数百円で沖縄そばしか食べられません。いや、それが実際の交換は三〇八円でしょう。

○吉次公介

はい。

### ○石川元平

だから、大変な不利益をこうむったんですよ。琉球政府は相当頑張ったという状況です。それからもう一つ象徴的なものは、この国の後進性ですよ、ある意味で。七・三〇という交通法を變更、それがありません。我々が外国へ行って、隣の韓国へ行っても、車は右ですよ。だから、アメリカはなぜね、基地を残してそのまま使え、米兵が来てやるんだから、これを右にせよと言わなかったのかな、これは不思議で、七不思議のうちの一つ。日本が国際的なそれに、そういう見通しさえ持ち得なかったということ。今の車の左通行です。これ七・三〇、大きな宣伝、チラシをつくってやって、これはもちろん午前六時にこうやるのを見ましたけどね。

こういうことなどを含めて、確かに、確かな世替わりにはなつたけれども、いわゆる新たな苦しみを伴うそれであって、決して我々が望んだ人権が守られた、何ていいますか、沖繩の言葉では「弥勒」、「弥勒」と言ったら本土でも通じますよね、弥勒菩薩の弥勒。沖繩では「ミルクユガフー」が平和な世の中をあらわす言葉としてあるんですよ。「平和」という言葉は沖繩にないけれども、「ミルクユガフー」って言ったら「平安な世の中」という意味ですが、こういうことを願ったという、それはもうまさにある意味で逆にどん底に落とされたような、こんな状況で今、さっき申し上げたあの五・一五の闘いがあるというのは、まさに県民の復帰への期待がかなわなかったあかしとして、今の闘いが継続をしているというふうな御理解いただければと思います。

## ■「復帰前後」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。復帰前後の話で、ちょっとあえて聞きに

くいことを伺うと、通貨切り替えの話もありましたけど、経済の問題として復帰をした場合に教員とか公務員は、それほど経済的にダメージはないじゃないかというような批判がありましたよね。

### ○石川元平

それ、ありました。

### ○櫻澤 誠

その中で、実際にその教員が復帰をして、復帰の前後で経済的にどういうことが起こったのかというのは。

### ○石川元平

教職員の場合に。

### ○櫻澤 誠

はい、教職員。

### ○石川元平

教職員の場合も、もちろん日本の教育を担う教師としての身分のそれを、教公二法はいや応なく適用されるし、要するに本土の法制下に組み込まれたことで、当然のことながら身分、待遇等に対して、その是正を求めていきました。これは、直接的には琉球政府を通してですけども、復帰の前に、実は勝ち取ったものもあるんですよ。戦前、男女教員の賃金差別がうんとあったんですね。それは、復帰の前に教職員会婦人部などが決起をしましてね、その是正をさせたというのがまずあります。

復帰後は、本土との給与比較等に具体的に基づいて、これは今では考えられないけれども、賃金が最高二〇%、三〇%アップしたこともありますよ。

### ○櫻澤 誠

それ、復帰前後だけで。

### ○石川元平

ええ。

### ○櫻澤 誠

人によつては、それぐらい変わったという。

○石川元平

いや、総体として平均して一〇%という、二〇%というのは最高、三〇%まで上がった時期も、それぐらい格差があったということですが、本土とね。

ただ、一方ではさっきのとおり、一般民衆のほうは、それだけ経済の格差が。いろんな振興して所得が上がったということでもありませんのでね。これが逆に反発を受けたこともありませう。これは直に聞きました。先生方はよくなって、あるいはまた公務員はよくなっていう。

県との交渉などでは沖教組、高教組、県職労と全水道という、この四者共闘を組んでやっていますから、本土とのラスパイレス指数をいつも見ながら、全国の中でどの位置にあるのかということですね、もってやっていきましたから。これは、一般の格差も考えながらではありますけれども。

ただ、復帰前のいわゆる屋良教職員会は、これは教職員会といいますが、復職組合的な組織ですから、待遇改善、経済闘争を、これは本分としてやらねばならぬのに、県民課題を中心にいつもやっているという、人権を守る、子供を守る会、復帰とか、こういうことを面前に掲げてやり過ぎて、肝心な自分たちの労働条件とか給与改善等に対してはおろそかにしている、これは、随分批判を浴びました、内部で。四者共闘の中でも批判を浴びました。だからこそ県民から支持されたことがあって、屋良が統一候補に押し上げられたということになるわけですが、内部ではそういうことがありましたよ。教職員会は、ある意味で乗っかってということになるわけ、官公労などね。ということなども、実はありましたけどね。

○櫻澤 誠

教職員会は、団交権はなかったわけですよ。

○石川元平

ええ。高教組は持っていました、あれは琉球政府公務員法が適用されていましたので。教職員会はそれはなかった。ところが、そう

いうことで拒否ということはありませんでしたのでね。

○櫻澤 誠

ありがとうございます。ほかに御質問いかがですか。

○野添文彬

通貨切りかえの話で聞きたいんですけども、ちょうど返還直前、ニクソン大統領がドルと金の交換の停止をやって、しかもその後、一ドル三六〇円から三〇八円へとドルが切り下げられました。そうすると、沖縄ではドルを持っていますから、その価値が下がるということになりますよね。その結果、沖縄返還の時からかなり経済的な混乱があったというふうに聞いていますが、そういうことについて、屋良さんがどういうふうに対応されていたかお伺いできればと思います。また、そのような復帰前後の経済的な混乱によって、日本に復帰するということのイメージは悪化してしまったのかということについて、伺いたいです。

○石川元平

一般の民衆は、確かにそういう復帰に対する幻滅みたいなものも感じ始めたと思うし、屋良本人というよりも、この件に関しては指揮をとったのは宮里副主席です。彼は、教職員会の顧問弁護士だったものですから、教公二法闘争の時にも、随分といろんな意味で力を発揮してくれたし。彼は政府との交渉、一手に引き受けて頑張ってくれて、その意味では屋良の右腕となってというふうなことで。具体的な交渉の中に引張られてどうということは、屋良本人はさしてなかったんじゃないかと受けていますね。

○野添文彬

はい、わかりました。ありがとうございます。

○高橋順子

ちよつと戻る形になってしまいかもしれないんですけども、復帰運動について、大きな役割を果たしてきたのが復帰協だと思えますが、屋良先生が会長から行政主席にかわっていったりする中で、復帰協自体の変化とか、沖教組の位置付けの変化とか、役割の変化



とか、何かお感じになったことはありませんでしょうか。

○石川元平

これは復帰運動の、復帰協の中核を担ったということ、これは、そう大きな変化はないと思うんですよ。ただ、闘いの一つ一つ、例えば全軍労を中心とする首切り反対闘争等々考えれば、県労協が主力になる。これもまた事実ですけどね。屋良を打ち出していつて、復帰協の会長の喜屋武がいてというふうな、こういう状況の中で、やっぱり復帰協は何と言っても県民を網羅する組織。復帰協に参加している団体だけのそういうのじゃありませんのでね。そういう意味では全県下にあるわけですよ、学校のある所ね。そういうことでは、変わらない役割を、私は果たしてきたと思っておりますよ。

○高橋順子

もう一つ、復帰協に関わりまして、先ほど六八年の一二月にはいのちを守る県民共闘会議を立ち上げたということをお話していたいたんですけれども、復帰協の中でそれをやるといよりは、もうその時点になるとこの目的のためには、こういう新しい組織というかグループを立ち上げたほうが、うまく活動できるというような状況だったのでしょうか。

○石川元平

ええ。これは、復帰協は非常に幅広い憲法適用、その他、渡航制限、自治権拡大、たぐさんの課題を抱えていますから。ある意味で一日共闘、二月四日、もちろんこれは一日で終わらなかつたかもしれませんけれども。B52というふうなものがあまりにも衝撃を与えた。この命の危機を救う、それがゼネラルストライキということこの発想まで行ったわけで、一日共闘的なものとして名称も「いのちを守る県民共闘会議」という、そういうことで最大組織の県労協の議長の高橋順子氏が就任をしてというふうなことです。

○高橋順子

はい、ありがとうございます。

○櫻澤 誠

そうしましたら、本日はこれで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。

## 第4回 インタビュー

---

日 時	2014年3月11日（火） 14:00～18:00
場 所	沖縄国際大学13号館507教室
話し手	石川元平
聞き手	佐藤学 黒柳保則 野添文彬 吉次公介 櫻澤誠 高橋順子

## ■「県知事選挙」

○櫻澤 誠

それでは本日もよろしくお願いいたします。まずは県知事選挙からお願ひします。

○石川元平

戦後初の沖縄県知事選挙ということで、これは一九七二年六月二五日施行の県知事選挙のことですが、六八年の公選主席経験者、屋良朝苗と、任命主席の経験者、第三代目だったと思ひますが、大田政作ですね。その一騎打ちでした。

屋良は出馬に非常に固辞をしました。というのは、社会大衆党の安里積千代委員長が出馬の意向を。この人はいろんな機会によく、あれも出たい、これも出たいというようなことで党内からも批判のある方でしたが、そういうことなどもありましてね。加えて屋良の家族が反対をしておりました。本人も主席の座のあの辛い椅子のことをね、縦じわに象徴される、ああいうふうな経験からもこれは引き受けるわけにはいかんという。当初の強い決意を、私もそれをそばで聞いてきました。

しかし、復帰のルールを敷いて、復帰を勝ち取った本人が、建議書の冒頭の初めの部分、あの中に屋良の思ひが十分伝わるのがありますけれども、復帰後の沖縄づくりの先頭につくべきじゃないのかという革新共闘会議傘下の政党、諸団体からの要請。やっぱりこれはまた、屋良の非常に、もう断るそれができないような、これ突きつけられました、引き受けたというふうな、こういうことでした。

一方の大田政作ですけれども、国頭村奥間の出身です。戦後、熊本県で弁護士事務所を開設をした後に、琉球政府のたしか第三代の任命主席になった方でした。屋良は現職の主席でありましたので、しかも復帰準備というふうなことなど多忙をきわめて、主席公選のような選挙運動はできない状態でありました。また一方、主席

時代のいろんな施策の中で随分この批判を受けたことなどもありまして。ところがその他実績に対する評価は非常に高かったというふうに思う、全体としてですね。これが開票結果にもあらわれていて、七万三〇〇〇票差、これはもう圧勝であつたわけですね。

この復帰後初の選挙には、公明党も民社党も屋良支持に回つたということなどもあの票差に出てきていると思ひます。大体、沖縄の我々が何度かその後も選挙にかかわつて、保革の基礎票は、いわゆる学者先生たちの見方でも、ほぼどっこいどっこいだったんですね。大体三万から四万。ですからこの七万三〇〇〇という差は、これはもう本当に圧勝ですね。

○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら、次まで続けていただいで、屋良県政のもう少し具体的なことまで含めて質疑をしようかと思ひます。

○石川元平

ええ、これが実は一番の屋良が非常にB52と共に非常に悩ましい問題として。よろしいですか。

○櫻澤 誠

お願いします。

## ■「屋良県政（CTSなどの葛藤、教育委員会との関係）」

○石川元平

屋良県政の中でCTSなどの葛藤がすごくありました。『激動八年』という屋良朝苗の回顧録の中でもその件に対する本人の強い思いが記されておりますが、まずCTS誘致というのは、このCTS、セントラルトランスポートシステムという、い



わゆる原油貯蔵基地の件です。その誘致のことについて、この屋良主席の就任前の六八年一月に当時の琉球政府、これは松岡主席ですけれども、その経済政策として世界的な石油会社の四社に外資導入免許を既に交付したことから実は始まったんです。これは非常にもう抜き差しならない状況が初めからあったということですね。

そのCTS問題というのは、いわゆる公有水面埋立免許申請への対応、許可、不許可という、それがまず一点ですね。次に、埋め立て後のタンク設置許可申請への県の対応、これもいわゆる可とするか不可とするか。埋め立てのそれと、埋め立て後のタンク設置、結局その二つの問題です。屋良は最大の難問を抱えることになった。

これも当初、地元、現在はいうるま市に所属しています、当時、ホワイトビーチなどのある与勝半島と言いますが、この与那城村当局が、議会それと地域含めて一致してCTS誘致に動いたということからまず始まるんですね。七二年一〇月一五日には平安座島で沖縄三菱の埋め立て工事の起工式が盛大に行われた。屋良県政も新垣茂治出納長を名代として出席をさせて、そしてその報告等も屋良は受けているわけですけれども。

このシマチャビという言葉聞いたことありますか。字で書くと島の苦しみ、離島苦という意味ですね。そのために離島からすれば、企業誘致をして、しかも橋もかけて、夢の橋がかかるような、そしてまた大変な税金なども得られてという。これは税金の話は後でもう全くこれは予想外のことになってはいくんですが、当初はそういうふうなことで言われて、島を挙げてということになっていたわけです。

ところが事情が一変をしたのは、タンカーによる油の流出事故が相次ぎました。廃油が垂れ流しされて、きれいな砂浜にはこの黒い原油のボールですよ。もう見るも無残な状況を我々はずつと見て、またマスコミ等でもこれをよく取り上げられてきました。

ということとCTSが公害企業であることを知るようになって、七三年九月二五日に金武湾を守る会というものが結成をされます。

もういわゆる地元を二分する抗争へと発展をして、誘致派、反対派による暴力事件まで発生をする。そこには離島にみんな平安座にも宮城にも伊計にも学校もありましたよね。学校の教員はそこを通うわけですよ。ですから、通学、通勤にも大変な差しさわりが出て、沖教組などは青年部を動員をして、いわゆるガードして、教職員の出勤、退庁の安全を図るといいう、こんなことがかなりの期間続いたというふうなことも記憶にあります。

金武湾を守る会、結成前の八月に公害防止対策協議会というのが、平良良松といいますが、那覇市長。これはもう市長をおやめになつておりましたけれども。

県職労等がCTS建設中止を申し入れをしていると、その後高教組、県労協、沖教組が続いていったということなんです。

県議会でも、当時革新与党が多数でありましたけれども、金武湾を守る会からCTS反対の陳情が。これが採択をされた。一方の自民党は推進の立場でした。これに対する屋良県政の対応ですが、庁議や革新与党、本土の首長などの意見聴取を踏まえて、このCTSに反対をする、CTS以外の公害のない、住民のコンセンサスが得られる企業の張りかえをしようように企業側に要請をするというものでした。

そういうことで、七四年一月一九日、一・一九声明なんていうこととでかなり知られる声明にもなりましたけれども、CTS立地反対の知事談話が発表されます。いわゆるこの方針の転換が図られる。

この声明に對しまして、推進派の自民党は七四年二月八日に知事即時退陣要求の県民総決起大会、これは与儀公園で開催されますが、三〇〇〇人規模の集會が開催をされて、一〇〇〇人余が県庁に押しかけて、これは久米島出身の大田、県議會議長もしたこともありすが、当時は自民党の県連會長以下、県連幹部一〇〇〇人余が屋良知事に對して、悪口雑言、乱暴狼藉の限りを尽くすと。当時の知事室、応接室の応接セットの前にあるテーブル、こういうものみんな破壊されたんですね。窓ガラスが割られたりね。保守の側はここまでや

るんです。

ですから、いわゆる平安座島、向こうに通う教職員の通勤、退庁のあれまでガードしなければならぬ状態というのは想像できると思えます。

七四年九月五日には守る会は、知事を相手どって埋め立て無効の提訴をいたします。屋良は本土の首長などの助言などもずっと聞いてくるわけですが、その後九月二〇日に三菱はタンク設置、いわゆる埋め立ての後のタンク設置の認可を県に申請をしてくる。

七四年九月二七日、県議会冒頭、守る会からの提訴について、裁判所の判決が出るまで保留をするという表明をいたします。九月二八日に屋良は三役会議を開いて退陣、つまり辞意ですね、この意志を伝えるという。翌二九日に県議会議長、これは平良幸市、後に知事になる人ですが、に辞表を提出をする。しかし議長は受理せず、口頭で辞任の申し出があったというのを与党会派に伝えて、態度を決めたいということで議長は帰ってしまおうという。

もう、屋良の思いとして、今や私はもう、四面楚歌だと。孤立無援の心境であると。これは出身母体の教組なども、やっぱりその中に我々入ったわけですよ。こうなればもう、いわゆる一面では裁判所に判断してもらいたい、他面では県民に信を問うという、これが最善の道だと思うという。その時はもうみずからは身を引くというふうなことです。そしてCTS問題に対する審判を下してもらおうべきだというふうな三党に伝えますけれども、これがずっと受け入れられずに慰留する。こういう状況でも、どんどん事態は進んで行くというふうなことで、那覇地裁は七五年一〇月四日CTS裁判で判決を出しますが、つまりもう訴えの利益がないということ、結果としても県の主張を認めるといふふうなことになるわけですね。

そして次は、埋め立て認可に移るわけですが、七五年一〇月一日、埋め立て竣工を認可せざるを得ないということで知事公舎でマスコミ関係者を招いて、この埋め立て認可の発表をするわけですが、

抗議団が知事公舎入り口で抗議の声を上げた。

七六年、知事のこれはもう知事在职の最終年でもあるわけですが、三菱のCTSタンク設置許可申請への県の対応に移るわけですが、七六年四月に三菱はCTSタンク設置許可を申請をいたします。六月にいわゆる平良幸市新知事が誕生をしていくわけで、こういう知事のちょうど変わり目までずっとこの問題は引きずり込んで、タンク許可申請については、そこで与党三党、これは社大、社会、共産ですが、この足並みの乱れが生じます。社会党は次期政権へこれはバトンタッチをすべきだと。共産党は保留した後、却下をすべきと。社大党は屋良で処理をすべきだと。つまり次期知事を抱える社会大衆党ですね。冲教組、高教組なども次期政権へ引き継ぐべきだと。もう屋良の長男、これは同じ琉大の物理の、いわゆる屋良と同じ系統の学者ですが、強く、親父が認可をするというふうなことは反対をしていました。私自身も、当時後援会の事務局長をしておりましたので、そういうふうな方向で動きました。ところが社会大衆党の書記長が雲隠れしてしまっただけです。全く社大党の幹部にこちらの意向を伝えることができないまま、そういう推移をして行つて。結局のところ屋良は後継者にもう負担をかけたくない。ただこの与党多数が議会でも反対をしてきたこれだけの問題を、いわゆる与党の了解をなしに処理できないという苦悩が続くわけですね。結局しかし、屋良の思いはかなわぬまま、六月二二日、ちょうど慰霊の前日になるわけですが、CTSタンク設置を許可をするという、こういうことになっていきます。

あと、もう少し別のことをちょっとコメントしておきますと、特に冲教組としましては、屋良の出身母体でもありましたけれども、この反対に加わって、象徴的な人は安里清信という、名前をお聞きなつたことあるかと。興石正という監督が、「シバサシ—安里清信の残照—」という記録映画をつくつたんですがね。この中に出てくるものなど見ますと、日本政府は冲縄県に物すごい圧力をかけているんですね。国策として、いわゆる備蓄分のあれを、これだけ

をもっとふやさなだめだということ、認めるという。したがって、この埋め立て面積自体も当初のよりもずっと拡大されていく。その中で、この記録映画を見たんですが、原発を誘致する区域まで設定されているんですよ。これは驚きでした。

しかしこれはじゃあなぜとめたかという、公害企業に対する県民の反発ですよ。が、なければ、これはどうなっていたかと。

この安里清信氏と一緒に崎原盛秀という、中学校の国語の教員ですけれども、具志川市の出身ですが。私が沖教組委員長をした時に、私より三つ先輩なんですけどね、当時普天間中学に勤めていて、色々組合の中でも、これまた後で、内部のことは後でまた説明しますけど、私を要するに支えたいという、一番ウマが合う同士の人間でもあったもんですから、これは今もつてつとそういうつき合いが続いていますけどね。彼が法制部長として沖教組本部に入ってくる。在籍専従で、籍は普天間中学に置きながら。

安里清信、崎原盛秀が中心なんです、このCTS反対闘争。ところが、これはもう自他ともに代表は置かない、金武湾を守る会の代表なんていう代表は置かない、みんなが代表だということでしたから。そういうのが、今、記録が今進行しているんですよ。金武湾を守るあの闘争の記録を今つくっています。そういうことなども実はあります。

もう一つ、ちょうど私は中央執行委員で、総務部長をして、財政も担当をしておりましたので、もちろん組合方針にのつとつて、どう支援をしていくのかと。現地へ行つて、いろんな集会にも参加をし。そして照間と言ったらイグサで有名ですね、沖縄で一番有名な所。それもまた海岸があつて、漁民もたくさんいるもんですから、例のハーリーがあるわけです、肥竜船ね。そういう所にみんな労働組合や住民も参加をして、ある意味でまたもうお祝いみたいな雰囲気もあつたもんですから。そういうことで私はお祝い、カンパを包んで行きましたよ。何回か経験ありますね。例えば一回に五万円とかね、そういうふうな金を包んで地域の皆さんを激励をするという。

こういうことなどもあつて。

組織なもんですから、沖教組としてはちゃんと定期大会で組合の方針に掲げて、公害企業の進出を許さないという、現地への支援をやつていくというふうな。こういうふうなことの中で、ですからさつき申し上げましたいわゆるそこに勤める教職員の通勤の安全、そのために組織動員をして、青年部ですね、それをガードしてやるとか。こういうことなど実はありました。

## ■「県知事選挙」「屋良県政（CTSなどの葛藤）

### 教育委員会との関係」の質問・応答

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。まず、私のほうから幾つか確認をさせていたただきたいんですけど、石川先生のこの時期のお立場として、総務部長という話と、あと屋良さんの後援会の事務局長という話がありましたけれども、総務部長になられたのはいつからでしたか。

#### ○石川元平

七一年、組合結成の後、すぐですね。屋良の後援会事務局長をやったのは、一番最後のほうです、屋良の。七五年、六年ごろですね。

#### ○櫻澤 誠

まず、県知事選挙のところなんですけれども、教公二法を阻止して、その結果、高校はまたちよつと別ですけども、復帰までというのは、小中学校の先生なんかは、選挙にも比較的、積極的に参加できたわけですね。けれども、復帰後の県知事選挙と言うのは、当然そういうふうにはいかないわけですね。体制として取り組み方を変えなければいけない、切りかわりの部分が大きかったと思うんですけれども、そういうことにかかわつて、どういう取り組みを教組



としてされたのか、どういうことを注意をしたのかというようなことも伺えればと思うんですけども。

#### ○石川元平

屋良自身が、さつき説明しましたように主席公選のような立ち回りができませんでしたので。しかし一定のルールはもう敷かれていたわけですよ。ですからある意味では、楽な闘いと言っちゃあ何だけれども、主席公選のような日、米、琉のひどいあれはなかったように感じています。屋良が、いわゆるもう一つの権力を持っているというふうな、琉球政府のね、そういうこと等もありまして。当時もちろん警察、検察、米軍等々のほうからも主席公選の時とはもう比べられないほどの状態の中で戦ってきたというふうな。私自身がそうですね。

主席公選の頃は、学校現場、あの当時は教公二法、身分法ありませんから、在籍専従制度もないような時代で、要するに長期休暇をとって、いわゆる組合の支部にもう半ば専従となつて何カ月ですよ、こういうのも実はいるんですね。後で組合でみな実際退職する時から引かれるわけですから、後で組合で面倒を見ましたけれども、こういう状況なども知事選挙の頃にはなくなっていました。ただ一方、右翼的な妨害、それはかなり、後でほかの選挙の関係がありますけれども、右翼とだけは言えませんが、そういう陰湿な妨害はありましたけれどもね、いわゆる日米の、大きなそういう障害と言いますか、それはそんなに感じない中での闘いになったと記憶していますね。

#### ○櫻澤 誠

勢いが屋良さんのほうにあったので、余り影響は少なかったかもしれないんですけども、やっぱり本土復帰をして法律が切りかわった中で、教員に対しての、選挙運動をするとか、いろんなことというのは、より露骨にあったと思うんですけども。

#### ○石川元平

これはむしろ、その後が次第、次第にという感じで。当初のあれ

は県教育長の命で行きましたよ、各学校長にね。教育公務員法ですね、それから公職選挙法等々に照らして、それにもとるような行爲がないようにということ、特に校長に注意を喚起するようなところ。ところがまた我々はこれに対しては、一般国民に保障されている権利は教職員といえどもこれはちゃんと保障されているんだという大前提のもとに。

ただこれだけやってはいかんよといったのは、教員地位利用です。直接、子供たち相手にしているわけですから、教室その他で屋良先生のことを支持するような、あるいはお父さん、お母さんにまたよろしくとか何とか、その地位利用になるようなことだけは、これはもう厳に慎みなさい。それ以外のことで何かあった場合、これは組織が全責任を持つ。ここはもうはつきり我々は指導しました、組合員を。ですからそんなびくびくしないです。校長たちも後は次第にちよつと県教委になびいて行くんだけれども、当初のあれは、主席公選からのそれよくわかりますからね、そういう指導が来てもストリートにそれをもってけん制をするというのは、非常に少なかったと思いますね。そんなに問題になりませんでした。

僕ら一方では教育長に抗議に行きましたしね。向こうは一定、このことを出さざるを得ないようなことを形式上やったというふうな感じだったと思います。その頃までは。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。それから、CTSの闘争の中で青年部を動員して、教員たちを守るというお話がありましたけれども、それは組織全体としてやっているわけですよ。中頭だけではなくて。

#### ○石川元平

中心は中頭ですけども、青年部の役員は動員したと思います。ほかに高教組、それから県労協を含めて、現地で万余の決起大会などもやってCTSに反対する世論は地域の中でうんと巻き起こしましたのでね。おそらく当初は村当局も議会も地域も誘致に動いたけれども、事故が起こったり、公害企業だということが知れるよう

になると、署名運動などを展開してね、これは圧倒的多数の住民の署名を集められたということも報告を受けましたしね。だからそれが地元だけじゃなくて、県下はかなり広がっていったものですから、さきに申しましたように、当初の広大な埋め立てを再度やって、そこに原発の立地までもしようとしたけれども、そういうことは結局はあきらめたんじゃないのか。

一方で、平安座島、宮城島、伊計島という三つの、いま橋で繋がっていますけれども、二番目の宮城島という所は高台になっているんですね。すごく平地で、耕作面積も非常に広い、ある意味で非常に利用しやすいような場所ですが、ここにも誘致の計画。これはね、やっぱり闘いによって、こっちが阻止をしたんですよ。会社の名前はちよつと忘れちゃったけれども、そういうさまざま色々な闘いがあったって、三つの島のうちの真ん中の宮城島のそれは阻止をされたという。そんなんで規模としては拡大しようとしたものを防いだというような、こういうことが言えると思います。

○櫻澤 誠  
ありがとうございます。そうしましたらほかの先生方からはいかがでしょうか。

○佐藤 学  
CTS闘争はその当時全国的にもかなり知られた、沖縄県内ではその環境に関する、環境保全の運動の画期となったものだというふうに認識しているんですけども、それで屋良知事としては非常に苦しい立場に置かれたということもよく知られていると思います。新全総、第二次全国総合開発計画に対しての大規模開発への反対闘争ということで、志布志のほうが知られるようになりますけれども、その七〇年代半ば以降、石油基地の後でもその大規模開発に関しての反対運動というのが、全国的にあった中で、県外の環境保全運動との、連携はどんな形があったのでしょうか、なかったのでしょうか。

○石川元平

これちよつと弱かったと思いますね。もちろん、平良良松那覇市長を中心とするその反対協議会というのが設置をされましたけれども。沖縄組の中でも、公害問題の中に追及委員会も確か設置をされて、一方では教育研究集会の中に教科以外の特別分科会というのがあって、公害分科会というのが実はあるんですよ。今でもだから伊波義安、皆さん新聞などでたまに見ると思いますが。奥間川のあの基金の代表です。宜野湾に事務所があつて。私も会員なんだけれども、ほとんど何もやっていないけれども。

ということ、教育研究集会の公害分科会員のメンバーが中心になって、沖縄組、高教組含めてね。公害反対の表明を組織内でかなり盛り上げていったという、それありますよ、ただヤマトとの連携、関連したのは当時、非常に弱かったのかなという。ですから当初はいわゆる金武湾を守る会自体の立ち上がりも非常に遅かったわけですよ。事故が発生して問題になって、それで降組織化されていったということ等々、色々ありますね。本土ではもう四日市だとか、あっちこっち色々ありますよ、九州では志布志のこと等もあつて。

○佐藤 学  
最初その公害問題と言われた頃に、いわゆるイデオロギー的な話として、社会主義の側が要するに生産力至上の考え方があつて、だから環境問題というのに対しての立ち上がりが鈍かったという批判はずつとあるんですよ、ですからそういう影響もあるのかもしれないという話があつていましたね。わかりました。

○石川元平  
屋良自体も、いわゆる関西、関東、あっちこちかなり回って、特に革新首長などにも色々会ったようですが、結論としては、これやっぱり訴訟するのは難しいよというふうな、何かそういうことしか持ち帰っていないようなんですね。

一旦認可されたようなもの、これをとめるというようなことは、これは行政としては無理じゃないですか、みたいな。そういう指導じゃなくて、そういう状況を見て帰ったような感じだったようですよ。

## ○吉次公介

屋良県政期、もちろんCTSもすごく大事だと思うのですが、いわゆる復帰三事業といわれた植樹祭、若夏国体、海洋博について、屋良さんがどうお考えだったか、どういう御苦労があったかをお聞かせください。

## ○石川元平

若夏、七三年ですね。沖縄では五、六月のことを若夏と言いますが、復帰直後のことでもあるから、反対する、これをやめなさいというふうなことには我々も立場上立てなかつたですね。

具体的にそれに対しておそらく屋良知事を悩ませたのは、自衛隊が参加をしていくこと。もつと具体的には、佐賀県の目達原チームですよ。もうあれは具体的な阻止行動を組みましたけどね。ああいうことなどには非常に悩んだ、すごく苦労されたと思います。もちろん、いわゆる皇室、天皇、そこらの参加の問題もあるわけですよ。これはもうやっぱりまかりならんというふうなことなどを基本として労働組合みな持っていたわけですから。

我々、かなりこれはもう本土、佐賀教組なども私などもかなり連携をとってきたという記憶は非常に強いですが、とめてくれと、向こうにはね、沖縄に送るなど。ところが来ました、予定どおりにね。それに対して実力で例えば阻止をする。いわゆる国体は三者ですよ、開催県と日体協と文部省なんですね。自衛隊の参加を阻止するとか、そういうふうなことが行われた場合、これも実際その開催日にならなくても、国体を中止することもあり得るなんていうようなことで、県などへ随分脅しもこれ実際ありましたよ。

そういうことなどがあって、全体としての若夏国体開催反対なんということは起こりませんでしたけれど、とにかく自衛隊問題に限って、それあとはもう運営ですね。いわゆる本土ではよく自衛隊の吹奏楽とか色々やりますが、こういうふうな運営の一切、それから自衛隊員、選手は個々として参加しますから、隊員の参加はまかりならん。これはもう我々が体協その他、地域のチームみなチェッ

ク等々、これはもう完全にできましたので。

ただ屋良の場合はやっぱり、（海洋博に）実際に皇太子が来ましたよね。皇太子が来て、いわゆる火炎瓶事件などが起こったこと等々もありまして、これにはすごく心を痛めたというふうに、考えています。これは、天皇のことという後でまたちよつと具体的に申し上げるつもりですけれども。

若夏国体、それから海洋博、ある意味で非常に沖縄の人間は公害、そういう問題に対して疎いと言いますか、油断があつたような気がしますが。気がついてみたらね、もう怒涛のように、ヤマト資本がね、押し寄せたんですよ。そしてあちらこちらの、特にきれいな場所、土地の買い占め等々、そして乱開発が行われて。

テーマは、「海、望ましい未来」でした。だけれども、全く現状と逆なことが。赤土で、豪雨の後などはもう真っ赤に染まる。海が泣いているみたい、ああいうふうなこと具体的に遭遇しました。ね。これはやっぱりもう沖縄の美しい海、むしろそれを破壊する。例えば那覇から名護までの自動車道ですよ。あれもちよつとそれに間に合わせてつくられたんですよ。そして加えて、米軍の演習、北部での山地開発してのパインの、そういういわゆる赤土流出防止もまだ不徹底な状況の中で、おそらく三者が、三つが一緒になって海の汚染が広がったというふうに見えています。恩納村のビーチ、あの近海は、もう物すごいサンゴが重なり合いましたよね。あれずっと見てきたんです。ところが後を見ますと、サンゴの墓場でした。今やつと再生してツリー状態ですよ。こういうことをもたらした、一大プロジェクトでもありましたから、あれ以来、ですから本土からの企業進出というものについてはかなり警戒をするようにはなつたと思えますけどね。県もかなり、その面では反省はしたと思えますよ。

## ○吉次公介

屋良先生もその本土資本が大量に入ってくるとか、乱開発とか、環境汚染とか、そういうことが起きるとは思っておられなかったの



ですね。

○石川元平

はい。おそらく。

○吉次公介

現場をごらんになって、屋良さんが、石川先生に苦しいお気持ち  
を漏らすことがありましたか。

○石川元平

ちよつと言葉としては、はつきりは思いませんけれども。こちら  
が望んでいるような方向で中々進まないなどいうのを、これ全体的  
に本人が感じたと思っていた。しかしもう、国の協力が何とかある  
けれども、中々そのとおりにいかない。聞かなかつたら引き揚げるぞ  
と、もういろんなそういう状況の中で押し込まれて行って、結果と  
してひどい状態を見せられたとかというのがありますのでね。

○吉次公介

ありがとうございます。

○佐藤 学

私は名護市の第一次総合計画の基本構想の調査研究というのを五  
年がかりでやっています。いわゆる逆格差論と言われたもので  
七一年に名護市ができて、七三年にこの総合計画をつくって、そこ  
でのいわゆる逆格差、沖縄は貧しいと言われているけれど、それは  
豊かな時代になるのだと。名護はこれから第一次産業、自然を使っ  
た、経済発展をしていくのだという、非常に時代を先取りした宣言  
をしたものがあつて、どうも自分が調べている限り、県内よりも県  
外でのほうに知られている実態があるような気がするのです。環境  
関係に携わっているその東京の友人、先輩たちはみんな知っている  
のですけれども、沖縄では余り知られていない実態がありました。

○石川元平

そうですね。名護市のですか。

○佐藤 学

はい、名護市なんです。それで、名護は海洋博のその建築ブーム

に乗らなかつたと。要するにその外からの開発を入れなかつたとい  
うので。

○石川元平

そうですね、はい。

○佐藤 学

名護はこれで、このせいで入れなかつたという、逆にその後で、  
今度は八〇年代になると渡具知元市長が、観光開発に乗りおくれた  
という批判があつて、負けてしまうわけなんですけれども、伺いた  
いのは、その名護のこのいわゆる逆格差論と言われているもの、これ  
は屋良知事、あるいは石川先生の関心の中に届いたものなんでは  
うか、県内でその名護の試みというのがどのような評価だったの  
でしょうか。

○石川元平

あれはしかし、よくわからんですね。一六年善政を敷いたと思っ  
た渡具知市長が負けましたよね。しかし負けたものの、相手の突い  
たのは一六年は長いという一点だと思っただけです。いいことや  
つたけれども、一六年は長いというのが浸透して、と思っただけ  
れど。実は今のようなお話をお聞きしても確かに、途中に至るまで  
の恩納はもう、いわゆるリゾート地に開発されて、そして名護を通  
過して、あとの本部というふうな、ちよつど取り残された感じには  
なつたわけですよ。

しかし、後でも申し上げるつもりですが、自然力という沖縄のね、  
これは私は今こそ文化力とともにこれからの大きな、沖縄再興とい  
いますか、発展のキーワードになると思うんですけれども。軍事力  
に勝るものとして、これをもつともつと自信を持って広めて。

○佐藤 学

そうですね、その名護市に、東京の世田谷区役所をやめて名護市  
に入られた方がおられたりとか、それから京都大学をやめて名護で、  
まだおられると思いますけどオーシツタイに住みついてという、こ  
の方たちは、本当にこの逆格差論に魅かれてなんですよね。それが

その、東京での、あるいは県外で非常にすごい試みとして知られた割には沖縄県内で余り知られなかったのかなというそんな思いをしています。

#### ○石川元平

いや、確かにあると思います。私なども、よくわからなかったですね。渡具知市政のことはかなり承知をしているつもりでしたけどね。

#### ○佐藤 学

ええ、あの当時の市の幹部の方の聞き取り調査で、やはりその恩納なんかにおそらく、もう既に八〇年代半ばでリゾート開発進んでいるのに、名護は乗りおくれたという批判が募っていたというようなお話を伺っていて、県内の今の市町村の五〇代ぐらいの方たちに伺っても、逆格差論で聞いたことがないという方が多いんですよ、県内で。だから本当に知られてなかったのかなというようにこととで伺いました。ありがとうございます。

#### ○櫻澤 誠

天皇制の問題については、海邦国体に向けてのお話というのはよく出ますが、復帰直後にはどうだったんでしょうか。

#### ○石川元平

そんなに。復帰の直後というのは、世の中もう生活を含めてもう大変な流動している時期ですので、そんなゆとりもちよつとなかったような。ということと、これもずっと一貫していることですが、沖縄戦をめぐり抜けてということ、立ちどまって特に教え子を戦場に追いやった教育と教職員のそういう戦争責任を含めてのこういうことなども非常に不十分だったんですね。これ私などですから、現職の頃も一定やってきたけれども、後になって『沖縄をどう教えるか』という本を出しましてね、僕らが現職の頃できなかったことを後輩たちの副読本として残したわけですけどね。

#### ○櫻澤 誠

もう一つ、先ほど石川先生もCTSの問題は、そもそもやはり国

策として石油の備蓄を進めていく中で、沖縄に対しての割り当てが、どんどん拡大をしていったという側面があるという話をされました。そういう復帰以降になって、国策によって、もう問答無用で手続がとられて押しつけられていくという、その日本政府に対しての屋良さんの思いというか、いら立ちとか怒りとかがあるのではないかと仮定するんですけど、そのあたりのことについて、当時でも後でもいいですけれども、屋良さんがどういうふうにおっしゃっていたか、考えていらつしゃったかということは何かあります。県内での支持母体である革新勢力との板挟みになったとか、そういう話はいろんな所であるんですけども。

#### ○石川元平

これが主ですね、僕の頭の中にも。

#### ○櫻澤 誠

日本、ヤマトに対しての思いみたいなものは。

#### ○石川元平

はい。ですから革新首長などの意見等も聞いて、例えば埼玉の畑知事とも会ってどうのこうのとあったんだけど、行政としてはこれをとめるのはちよつと難しいんじゃないですかというふうなかなりの人たちに会ったと思うんですよ。こういう対応でしたので。

#### ○櫻澤 誠

そういう点では、何かおっしゃるようなことはなかったんですね。

#### ○石川元平

もういわゆる県内の、内に。ですから、私自身も屋良家の長男等々ともよく相談をして、どう先送りするか、やっぱ先送りすれば賢明な判断ができるんじゃないのかという、こういうことやったんだけれど、しかしどうも次期知事の、社会大衆党のほうがもう全く逃げ隠れ、どうしようもなかったです、あの頃ね。

あの政党は、西銘知事も元社会大衆党であるし、長嶺秋夫さんなどもであるし、いろんなことでもかなり災いもね、もたらした党でもありますよ。しっかりした人もいますけどね。平良辰雄という主席

の頃の後援会長をされた、大宜味の津波の出身ですけどね。あれなど僕など物すごい感銘を受けた政治家ですけどね。しかし肝心のCTSの時には、全く思いを伝えように、伝わらないんですよ。伝わらないままに時間切れになって、屋良がもうこれを発表せざるを得ないと。もうあの気持ちはもう今でも。名前ももう言っていないと思うよ。

○櫻澤 誠

調べればわかることですけれども。

○石川元平

仲本安一という書記長時代ですよ。

○櫻澤 誠

ああ、はい。

○石川元平

だから参議院選挙などにも立候補したこともあって、友達でもありませんけど、その後縁切りしました、私。

○櫻澤 誠

この当時CTS、そのぎりぎりの段階で、例えば次の知事に出る平良幸市さんなんかは余りかわりはなかった。

○石川元平

本人の直接のコメントはちよつと少ないですね。余り聞かれません。本人はもういわゆるそこにお任せするという態勢だったんじゃないですか。知事、屋良さんが辞表を出した時は一定、いい判断ですよね。あれ普通形式的には受けていいわけだけでも、保留したんですからね。三党に投げかけているんですから、これは賢明な措置だったと思うけれども、しかし一旦、御本人がもう知事の座に着くとなったら、やつぱり、あれ琉球政府の松岡主席時代からやって、屋良県政をやって、三つの県政のこれ引き継ぐというようなことを、これはもう。

平良幸市も、彼いぶし銀のようなプロの政治家でしたからね。だからアメリカの高等弁務官でも、屋良に挑戦をした大田政作、一

ダース持つてきても平良幸市みたいなにはかなわないというよ  
うな、弁務官が評しているのがあるんですよ。だから、そういう  
人でも、「いや、じゃあ俺が」というふうなことをおそらく党内で  
言わなかったんでしょう。だから結局もう、余りわからないまま  
に、屋良が決断をしたと。屋良というのはそういう人間ですよ。ほ  
かの人に泥をかぶせるというようなこと、一切やらない。これ嫌い  
な人で、そういうことはね。何と言われようと、計画、決断はする  
と。

○櫻澤 誠

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○高橋順子

先ほど県知事選挙の時に、この頃は教育委員会なども形式的で、  
プレッシャーはかけてこなかったけれど、だんだんとその後は変  
わっていったというふうなお話があったかと思うんですけども、  
七六年まで屋良県政が続いていく中での教育委員会の変化とか、関  
係について。

○石川元平

六八年から七六年まで、屋良県政時代の教育委員会と、例えば  
我々現場の教組との関係はそんなにひどい状況じゃ私はなかったん  
じやないのかなと。西銘県政になった途端にね、主任制とかいろん  
なものが起こってくるわけですが、直接的に人事で。やつぱり西銘  
もね、屋良氏は自分の教え子なんだけども、僕などに「ゆめゆめ油  
断しちゃいかんぞ」というようなことをいつも選挙の取り組みの際  
にそう言っておられたけれども。「西銘君はプロの政治家だよ、石  
川君」というようなことをたびたびおっしゃっていましたから。

御存じのように、今また教育委員会制度自体を転換させようとし  
ているけど、沖縄で教育委員公選制が守られて、七二年までね。こ  
れはただ、今現在、裁判員制度導入してやっているでしょう、今こ  
ろなぜそれなのかと。これもアメリカのそれですよ。沖縄の教育  
委員会公選制もアメリカのそれです。いいところを取り入れて、あ



これは素人の支配というふうに理解していますよ。プロは教育長としてゐるわけです。教育現場の専門家上がりの各部長、教育委員会の中にゐるわけですね。あれ事務所ですよ、言うならば。その事務所のトップが教育委員会の事務局長的存在の者が教育長なんですね。これはプロとしてゐる。ところが教育委員会というのは、それぞれ各階層の代表です。素人が支配する、最終的に。これがやっぱり民主制度だと思つてゐるんですが。一方ではですから、裁判制度の中で、今アメリカに倣つてこうやろうと、一方では逆なことしよう。これ、まだ頭の中で十分整理しきれない分があるんですよ。こういう矛盾したようなことをこの国は平気でやろうともしてゐるし、やつてきたしという思いですね。

## ■「自衛隊配備への反対」

○櫻澤 誠

先ほど自衛隊については、若夏国体とかにかかわつて、少しお話しされていたところもあったとは思ふんですけれども、改めて自衛隊配備への反対の項目からよろしく願ひします。

○石川元平

復帰後、沖縄へ自衛隊を配備するというようなことがはつきりしてから、もう大変な不安と言いますか、動揺が起こったことを今改めて想起しておりますが、これは何といつても沖縄戦体験ですよね。

沖教組、自衛隊が配備、これは我々の意識の上では、ただ復帰したから日本国になつた沖縄に配備されるという認識じゃなくて、海を渡つて進駐して来るという、日本軍がという。これも率直なそういう思いでした。これに備えて沖縄戦で何が起こつたのか、改めて究明委員会を設置をして。これは沖教組だけですけどね。それでその結果をまとめたのが『これが日本軍だ』なんです。これは私

は、教科書裁判等々にも、あるいはその後の本土の研究者たちにもかなり影響を与えたというふうに見えています。完璧じゃないけれども、しかしこういう具体的な事実が島中にあつたという、それを初めて世に告発をした意義は非常に大きかつたという、そんな思いでおります。

それと、実は復帰運動を我々が始めた時に一番抵抗を示したのがやはり日本軍の沖縄戦における蛮行だつたんですね。アメリカが確かに事件、事故を起こして悪いことをしてゐるけれども、沖縄戦当時の日本軍のそれに比べるとまだましだという。したがつて、いやあんなヤマト、日本などに帰る必要はないという、そこに結びついていった。これを解きほぐすのに、やはり今も天皇主権じゃなくて、国民主権の平和国家になつて、平和憲法を持つようになつたんだという、それであれだけ繁栄してゐるんだという、かなりこれに精力を費やしましたね。復帰運動の初期の過程で。ということも重なる問題なんです。この自衛隊の存在というのは。特にまた、これも具体的数字として上がつていますが、七一年九月の朝日新聞の世論調査が出ましたけれども、自衛隊の沖縄配備について賛成が二二%、反対が五六%。倍以上なんです。ですから当時の県民意識というふうなものは明らかに示してゐるというふうに思います。野呂という防衛庁の政務次官が那覇市で、これ七二年一月ですけれども、「基地問題と自衛隊配備は沖縄返還の根幹をなすものだ」という発言、本音のところですね、吐いたということと、それから米軍が占領し、基地を囲い込んだ、米軍基地をですね。公用地暫定使用法、結局復帰後のいわゆる新しい法律、それ立法できなかつたんです。五カ年の暫定使用法というものの制定過程からも自衛隊配備が米軍基地の存続と一体的なものであるというようないことが明らかになりましたし、諸取り決めや法制上の措置もされてきたという。これはもう当然あれだけ県民が反対しても、自衛隊の強制土地使用も可能にして強制配備の合法性をつくりだそうとしたものにほかならなかつたという。

復帰によって、沖縄の米軍基地も日米安保体制に組み込まれて当然이었습니다。これは核安保体制への変質まで意味をした。先ほどもちよつと申し上げてきたNBC兵器が要するに隠されたまんまで日本に帰る。日本に復帰したわけですから、当然日本の領土になった沖縄、それをそのまま安保適用というふうなことになる。復帰協でも核安保体制という、非常に危機的な捉え方をして、これがあゝの意味では非常に弱いんですね。復帰前後の受けとめ方としては。

それからこの自衛隊は、じゃあ第一陣はどうしたかと言いますと、五・一五の後じゃないんですね。四月一七日に、国防会議で沖縄配備を正式に決定をして、四月二二日に一隊二〇人が配備をされる。こういうことで復帰協は抗議声明を発しております。

具体的に、もう自衛隊がやって来るようになって、復帰協では五・一五の闘争要綱のスローガンに自衛隊配備断固反対を掲げて、沖縄返還協定粉碎と自衛隊配備反対、これはもう具体的にこういう闘いを組んでいくことになりませう。

復帰協は一〇月から一二月を自衛隊反対の闘争月間というふうに設定をして、一月一七日には県民総決起大会を開催すると。一〇月三〇日から年末まで日曜日を除く連日、陸・海・空の自衛隊基地と那覇防衛施設局に波状的な抗議行動を展開してきました。防衛施設局自体は現在が嘉手納に強大なね、あれ少々の爆弾が落ちても壊れんような頑丈な建物ができていますけれども、前は天妃のほうにあつたんですよ。那覇の東町の天妃という、天妃小学校、上山中学の近くそこにあつて、何十回、一〇〇回以上私自身も抗議行動に行つたんじゃないのかなという。しかしそこで立ち向かわせるのは、沖縄出身のね、係長とか。国会議員と一緒にとう局長が会つたりもしましたけれども、そんなこんなでね、これを思い出します。

その他の具体的な反自衛隊の闘い、さつき申し上げた国体もそうですが、そういうふうなことは一切認めずに、この締め出したというふうなことなど。それからあとは自衛隊員として参加をするものですから、特に自衛隊基地のある島尻、那覇などを中心に、具体的

に名簿からチェックをしていつて、ヤマトウンチュウの名字みたいなものがあつたら、これをもうそれぞれの地域の組織で、この点検をし、それを排除していくというふうなことをやってきましたし。

目達原チームのことはさつき少し触れましたので、ここではもう触れませんが、あとは今も行われている全島一周駅伝大会というのがあるんですね。これはスタートは那覇の奥武山なんです。奥武山でこういうことがありました。駅伝ですからバトンタッチをする区域があるんですね。そこに全て配置をするんですね。阻止行動団をね。スタートラインに立ったことがあるんですね、わからずに点検漏れでね、自衛隊員が。それ、気がついたとたんはどうしたかと言つたら、自衛隊のあれは、みんなと一緒にやなくて、コースを外れて行つて、どこかで一緒になつたと思ふんですね。近い区間の所で。これ本当はもうアウトですよ、コースからずれているんだから。あとは、かなり強引に参加をしていったチーム等があつた場合は、ずっとそれを追つかける。宣伝カーをやつて、また県民にアピールをしていくというふうな等々を含めて、もう実はやり過ぎかなと思ふようなことまでかなりやつてきました。

それから成人式参加阻止闘争。これはもう那覇を中心に大規模にやりましたね。ですからまして自衛隊の服装では参加できないし、かなりそれで阻止闘争も成功もしてきました。だけれども後は、そんなに長続きもせず、車でそつと乗り入れてやられるとかね、こういうことなど。特に小禄会場などでそれがありません。

あと、自治体の中では住民登録を拒否するという、自治労中心にこれが粘り強く闘われたということと、あと六者協議会を結成をし、ここでも全県的な取り組みをやつていきました。

また一方では、県議会でもそういう我々の闘いと呼应しての実際この募集業務委託費というものを予算化、これたしか一度はとめて、あとこれは強行されるといふようなことにもなりますけれども、とにかくさまざま闘いがなされていった。

琉球大学でもありましたね、自衛隊の入学阻止。これは我々の闘いとは直接関係ありませんけれども、これは大学、学生会を中心に入学阻止闘争というふうなものを一方では行われていた。これも新聞には大きく出たりもしましたけれども。

こういうことで、反自衛隊闘争、これがありましたね。これは後の課題にも出てきて、いわゆる管理職と、いわゆる教員、この中で沖教組の中、例えば自衛隊募集の宣伝物が学校に送られるんですね。送られますと、校長からすぐ電話がある、沖教組本部にね。あるいは支部の事務所に。ということがこれかなり続きましたよ。あの時まではやっぱり復帰運動など戦った、そういう管理者。校長、教頭がそういう情報提供してくれると。その情報をもとに我々は防衛施設局に行つて、募集事務所に行つて、これは那覇の泊の、とまりんのそばに、もう今はあの建物はなくなりましたけれどもね、あの角に3階建ての2階が防衛、募集事務所でしたけれど、そこへ何度も具体的なそういうものを持つて行つて、やめろというふうな、こういうことなど。そういうことで、学校等を通じての募集はかなりこれをとめることもできた。ただそういう闘い全体が、現在はおそらくはそんなに新聞など、何ももう見えないような状況になつていきますのでね。年月は経つたといつてもさまざま変わりをしたのかなというふうな感じも持つていますね。

## ■「自衛隊配備への反対」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。私のほうから一点お伺いしますが、沖教組が自衛隊への反対の前段階として、沖縄戦の問題について戦争犯罪追及委員会を設置するというのは、非常に画期的なことだったと思います。沖縄県史の聞き取りなんかもまとめたものが出たりし始める、ちょうど同じ時期で。そういう復帰という問題と、ま

た第三の琉球処分とか、そういうような言い方も含めて歴史というものを見直す、そういう中で沖縄戦に注目が集まるという、そういう時期でもあったと思うんです。沖教組の中でこういうものをつくつて、しっかり調査をしようというふうなところまで至る中の議論について、覚えていらつしやる範囲で伺えればと思うんですけれども。

### ○石川元平

これはね、書記長を長いことをやった、いわゆる一フィートの代表、福地ですよね。沖教組の私の前の委員長です。彼は副委員長も長かったし、書記長の経験がありますけれども、自衛隊問題でも彼が、『村と戦争』という本を、これは彼の大宜味村喜如嘉のそれを中心にまとめた。かなり分厚いものですが、そういうことがおそらく本人の中でもあり、それがもちろん組織化されてももちろん、そういう戦争体験はみんなあるわけですから、うまくそういうものに乗つかつて、まずそういう全県的なものをまず発掘をしてみようじゃないのかと。こういうのがあるんですよ。

例えば照屋忠英という、当時本部国民学校の校長だったと思えますが、このヤンバルで知られた校長が日本軍によつて惨殺をされるんです。伊豆味の檜原と言いましたかね、そこで首をちょん切るんじゃない、刺殺ですね。即死状態ならまだいいけれども、こういう状態でうめいて、水を欲しがらる。これを聞いて、子供たちにも知らされたんですね。これは後で新聞にも大きく出たこともあるんですよ。その兄さんも実は狙われて、マークされておつたというんです。直接そこで聞かされたそれでは、「校長のくせに」ということを周囲の人が聞いているんですね。そしてこの照屋忠英という校長は何をしようとしたかと言つたら、北部での激戦地は伊江島といわゆる本部半島なんです。本部半島の八重岳、そこには三〇〇〇名の宇土部隊が駐屯をしていて、そこではかなりの攻防があるんですよ。やられて後、羽地のターブックワーを経由して多野岳に行つて、向こうでは解散する、四月の下旬にね。ということになります。



このいわゆる伊江島のあれもあるし、本部港にも艦艇がかなり停泊をしている。こういうこと、みんなやられている状況ね、こういうことを見た本人なんですよね、本部小学校の校長ですから。やっぱりこれがいわゆるスパイ視されたのじゃないのか。当時刺殺される時に本人が持っていたものは天皇の御真影ですよ。白い布に包んだ御真影を本人は首に下げていたと。このことについて、これはヤンバルでもうかなり知られるようになりましたね。こういう残虐なこともあった。もちろんあつちこつちにあるようなものの中で、象徴的にこれがぱつと、僕なども子供の頃は聞かされましたね。

一方ではそういうことをやったために、非常にそういう関心が持たれていきました、ですから色々現在の今、政府との、文部省の対応、沖縄の歴史教科書改ざんを、この改めるといふことに対して全く答えていないけれども、県史や市町村史や、それから部落史までかなりあるんですよ。

宜野湾の部落史もあります。これには生々しい、僕ら一フィートから提供した映像なども写真の中にありますけど、四四年から四七年まで米軍は空中写真を撮っているんですよ。もうびつくりするぐらいのあれですよ。ある所だったら一軒、一軒わかるような、細かい写真です。ですからどこに何があるというようなことみんな知っている。これ戦争が終わってあと四七年まで、やっぱり基地建设ですよ。こういうことまで全県下を調べてのそれがあるもんですから、こういう市町村史、あるいはまた個人の体験記ですね、等々ありますので。あるいはそのほかに例えば県の平和祈念資料館にはもう数え切れないぐらいの聞き取りや、映像を含めてのそれがありますよ。まだ寝かされています。一部は展示をすることは閲覧もできますけれども、そういう等々がありますのでね、我々として先鞭を切ったという感じもしますよ。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。ほかの先生方から御質問いかがでしょうか。

#### ○野添文彬

当時、日本軍の残虐行為ということがすごく注目されて、それと沖縄への自衛隊の配備ということと繋げて、論じられたということですが、戦前の日本軍ということと、戦後の自衛隊というのは連続性があると強く認識されていたということでしょうか。自身は変わっていないということなんでしょうか。

#### ○石川元平

今、特にマスコミ、それから研究者、文化人、ただの差別じゃない、構造的差別という言葉がよく使われますね。これは私は根っ子をたどっていけば、明治政府の武力併合だと思っっているんですね。これは何のためにじゃあ、琉球処分をしたのか。強行に沖縄県を設置したのかと言ったら、それはこの島自体に魅力があったわけですよ。人間が住んでいなければよかったわけけれども、南進政策の拠点、これは沖縄平和祈念資料館の入りの展示が、そこから始まります。南進政策の拠点づくりのためにいわゆる部隊、日本軍を駐屯させるために琉球処分をしたんです、実は。そしてじゃあ具体的に南進政策、あと南洋、赤道を超えた所まで日本はいわゆる共栄圏、八紘一宇の思想を持って、どんどん具体的に、特に沖縄県民をたくさん移民として派遣したんですね。だからそういうふうなことで、はっきりわかりますし、結果として軍隊のいる島になってしまったわけですよ。

だから、あくまでも日本帝国主義というふうにきちっと捉えておかないと、ヤマトの人には明治の世の中で言うたら、とにかく、いわゆるこの欧米、世界に開国して文明開化を謳歌したというふうなだけどもその実態は帝国主義ですよ。覇権主義ですよ。だからたくさん戦争をしでかす。その拠点づくり、既にあの頃そういう目的を持って沖縄に駐屯させた。だからこれ軍隊のいる所は戦場になるという、沖縄戦の体験のこれはもう大事な教訓でもあるし。これは時代が変わってもね、今そういう危機感を持っているわけですよ。捨て石の記憶をね、持っているものですよ。

○野添文彬

詳しくは忘れたんですが、確か沖縄に自衛隊を配備するために、沖縄県出身の隊長か司令官が就任して沖縄に自衛隊が配備されたと思います。それはたしか日本政府が沖縄県民の自衛隊への反発というのをやわらげるために配置したのだと思うんですけども、それについて日本政府の意図とか、あるいは実際に沖縄県出身の隊長だとか、司令官が来たということに対して何か感想とか抱かれたことはありますか。

○石川元平

ええあります。RBCだったと思いますが、復帰四〇年の、復帰と反自衛隊闘争という番組で私も引つ張られたんですよ。相手はまさに沖縄の司令官を務めた、こういう人たちの顔が出ていました。又吉とか桑江とかがいましたでしょう。また屋良の教え子さんですよ。知念高校時代のね、屋良の教え子でもあつて。結局、復帰闘争の中で反自衛隊闘争をどうしたのかと、結局こちらにお鉢が回ってきて、私がコメントやつて、これ映像が流れましたけれども。

これはね、ちょうど今、国が原発、東北に向き合ってるのと構図は似ていると思うんですよ。一番、大多数な圧倒的な民衆のそれと、いわゆる利益集団とのあれをうまく割っているじゃないですか。割って今、これが進行していると私は見ます。東北の復興の名においてね。沖縄でも常にそういうことですよ。必ず世論を割る。このためやっぱり沖縄出身のあれ確か一佐だったと思いますよ、又吉、桑江もね。これに乗るり込ませてきたというか。

我々はそんなにむしろ、何をするんだというふうな気持ちでこうやりましたが、いやもうこれはやっぱり権力のもう手口は大体そういうふうなものだということを知承知していますので、ただやっぱりこういうことを堂々とやってきました。

○野添文彬

むしろ、沖縄で怒りを注いだということでしょうか。

○石川元平

ええ、もちろん。そういうことを私はコメントしました、RBCテレビで流されましたけれども。

○野添文彬

ありがとうございます。

○黒柳保則

桑江良逢ですね。

○石川元平

桑江良逢、はい。

○黒柳保則

県会議員までしましたね。

○石川元平

はい。

○黒柳保則

はい。又吉、下の名前は先生、何でしたでしょうか。私にわかには思い出せないのですが。

○石川元平

あの屋良朝苗の教え子、知念高校時代の教え子で。

○黒柳保則

桑江良逢もですか。

○石川元平

いえ、違う。

○黒柳保則

桑江良逢は違うと。

○石川元平

桑江は違うと思います。

○黒柳保則

桑江良逢は陸上自衛隊でしたよね。

○石川元平

はい。

○黒柳保則

又吉のほうはどちらでしたか。

○石川元平

又吉も。

○黒柳保則

陸上自衛隊。

○石川元平

陸上だったと思いますよ。

## ■「屋良知事の復帰後における米軍基地問題への取り組みと日本政府の対応」

○櫻澤誠

そうしましたら、続けて「屋良知事の復帰後における米軍基地問題への取り組みと日本政府の対応」をよろしくお願いします。

○石川元平

これはもう、そんなにコメントもないんじゃないかと思えます。ただ、復帰後における米軍基地問題取り組みと政府への屋良の対応ということでは、退任後にも御存じのように、回顧録ですね。それと『激動八年』というのもありますし、知事を退任した時のコメントとか等々、これはもう県民葬の記録などにも納めましたけれども。

ただやっぱり復帰後、国政選挙や知事選挙等があった時に、革新共闘会議の議長を務めて、その候補者、後ろ盾になったと言いますか、屋良がね。僕はこれは非常に立派だというふうにならずと見ましたよ。勝ちとった復帰だったんだけど、「核抜き・本土並み」約束を政府はやったんだけど、県民要求は基地のない沖縄ですからね。だから「復帰の中身を勝ちとるのは、石川君、君たちの重大な責務だぞ」といつもはっぱかけられたけれども、御本人も本当

に強い慙愧の思いを述べておられましたから、みずからがこの議長におさまり、そして支援にも行くわけですからね。こういう状況の中で、これはですから、ただ候補者たちのそれだけではない、屋良の一つの思いを引き継いで、屋良の思いだけではないんですけれども、県民要求を実現しようという国政の場でそういうふうなことで、上原、瀬長、安里等の連続当選。だからしばらくの間は沖縄はずっと革新がパーフェクトで勝利をしてこれが続きましたもんね。

## ■「屋良知事の復帰後における米軍基地問題への取り組みと日本政府の対応」の質問・応答

○櫻澤誠

ありがとうございます。

○吉次公介

復帰後、B52がまたやってくるし、殺人事件は立て続けに起きるし、米軍は容疑者の引き渡しに応じないし、一〇四号線越えの実弾訓練もあり、ラロック証言が出てくるなど、問題山積です。さらに当時の地元紙を見ていると、屋良県政はもつと整理縮小に向けてイニシアティブをとれ、対応が後手に回っているんじゃないかという批判が出ています。私は屋良先生の日誌も拝見していますが、思ったより基地のことが出ていません。CTSや海洋博のことはかなり出てくるのですが、基地は、トラブルが起きた際に「けしからん」と書いてあるというような印象です。伺いたいのは、米軍のいろんなトラブルが起きるし、事件・事故が続くし、縮小に向けて取り組むべきだけど、CTSや海洋博などやるべきことがあり過ぎて、基地対策だけやっているわけにはいかないということなですね。そういう点で、復帰後の知事の在任中の基地問題の取り組みというのは、どうしてもその後手に回ってしまう部分があったのでしょうか。



## ○石川元平

政府との返還協定締結のこれは、特に佐藤総理、愛知外相と北米局は千葉でしたかね、もう何度も会って、非常に強い要求をしているんですよ。核もそうです、安保もそうです、自衛隊もそうです。これ物すごく私も強く印象に残っていたんで、もちろんまたそれはちゃんと文章にも残っていますけれども。

七一年のレッドハット作戦。アメリカは軍事作戦としてあれやっただけですから、隠された意図はちゃんとあるわけで。ですから、何か最新鋭のというのか、もっと小型化されたそういう兵器としてのあれはまだいわゆる嘉手納弾薬庫、あるいは辺野古あたりには貯蔵されていると見ているんですね。これは梅林さんがアメリカの情報公開法に基づいて、あの書物の中にも例えば科学兵器のあれは、辺野古の倉庫番号、何番があれだよという、具体的なそれまで上がっているぐらいですので、そういうことを含めて。

実際復帰してやったこととなれば、もう実際の行政担当をするものは大変なこと実はあったと思うんで、その中でもそういういわゆる科学生物兵器を含めた核そのものに対しても、屋良はまた物理の先生でもありますので、すごい危機感を持っていたことをずっと感じてきましたよ。だから建議書の中でも、佐藤総理にじかに会って、愛知外相などが復帰までには核というのはもう完全になくなっていますというようなことを断言して、約束もしているんですね。あんな密約をしながら。というそんなことを含めてね、基地問題に対する、本人は頭の中では随分思いとしてあったと思いますけどね。ただ、やっぱりやるのがすごく多すぎてという思いもまたありますね。

## ○吉次公介

佐藤総理とはかなりやりとりがあったと思いますが、復帰後、田中角栄さんに総理が変わります。田中さんが沖縄のことに関心をどれだけ持っていたのか疑問ですが、屋良さんは田中さんについて何かおっしゃっていましたか。

## ○石川元平

ああ、ちよっと記憶ないですね。田中へのあれは。

## ○吉次公介

基地のことで、田中内閣が何かやってくれたという感覚はお持ちですか。

## ○石川元平

そんなないですね。また復帰協を初めとして、大衆的に田中内閣に向かつて、余りどうしたという記憶も、ちよっと今、ぱっと思い出せないですね。

## ○吉次公介

ありがとうございます。

## ○野添文彬

一点だけいいですか。ちよっと僕もちょうどこのあたりのことをずっと勉強しているんですけども、屋良さんはもう一応、基地の縮小というところをおっしゃっていたみたいなんですけども、中々それがうまくいかなかった原因の一つとして、基地の、基地を返還してもらった後の、跡地利用の問題をどうするかということと、実際に基地が返ってきた後、その土地が誰のものかという、その地籍が戦争によって焼けてしまって、どうなるかというのがわからなかった中で、その具体的に基地を返還してもらった後、どうするかということの対応がかなり難しかったという記述を新聞などから読んでいて感じる人が多いんですけども、その辺について何か記憶に残っていることはありますかでしょうか。

## ○石川元平

基地問題では、これは要するに、沖縄が戦災に遭ってほとんど各役場にあつたのもまずはないんですね、地籍も。この普天間飛行場も、田畑があつて、丘があつてというか、こういう状況のもとが、ひきならされたって。自分の家や土地がどこからどこまでなのか全然わからないんです。証拠もない。ただ米軍は一応調査をしているんですね、戦後。たしか四〇年代だったと思いますけれど、もちろ

ん地域の人たちの記憶とかそういうふうなものを。一応はどこからどこまでどうだったというふうな。ところが要求を出してみると合わないんです。これは中部だけじゃなくて、よく与那原の例が出されますけれども、海百メートルを埋め立てしないと、申請したあれが合わないなんていうのがあります。これ全県下で言えることですが、基地のある所では特に。だから地籍明確化法案とか、そういうふうなことが色々出されて、これ自体実はもう非常にでたらめな一方的なものでね。

例えばこの森根という、これ有銘政夫、違憲共闘の議長をした私の尊敬する友人がいますけれども。公用地違憲共闘。僕も副議長を八年ぐらいやっただんですが。嘉手納基地の森根という場所があるんですね、九月七日の、沖縄戦の降伏調印をした、あの区域ですが。自分の屋敷はたしか井戸があって、石垣がすぐわかると言うんですね。けれども図面上そこが自分の屋敷になっていないわけですよ。面積は合っている。そういう所がたくさんあるわけですね。ですからそんなことを含めて、一部返還された、それもありますけれど。

もう一つは、その土地問題でちよつと忘れていかんのは、戦後処理の問題でよく不発弾、遺骨の問題が出ます。もう一つは、強制接収された土地があるわけですよ。ほとんど民有地です。だから天皇の軍隊に土地接収をやられたら抵抗をできなかったという、それはたくさん聞いてきました。ところがそれが個人に戻らないんですよ。戻されていないんですよ。これは八重山まで、白保飛行場の跡まで含めて、結局個人には返さず、組合をつくってやるならば応じますよというような対応で。読谷もそういうことで補助飛行場は一応円満か知らんけど、あれはもう今完全に跡地利用は進んで、ほとんどもう道路整備はやがて終わります。もう役場のほかに中学校や陸上競技場、ファーマーズマーケットとか、かなり建つようにもなりましたけれども、要するに個人に戻されていない。だから政府はやるうと思えば、今沖縄以外どこでも個人のもの何でも接収できる体制なんです。こういう法体制になつていふことなども実はあつ

て、一部返還された米軍用地のこれを利用するという、非常に複雑な問題が実際色々あると思えますけどね。

ただ宜野湾の土地の場合はかなりの年数をかけて跡地利用計画というふうなものが市や県や区含めて、三者でもって協議会がつくられていて、僕も基地対策協議会の委員としてかかわって、端々そういうものを聞いてきましたけれども、これはかなりやって、そして関係者にその案が流されてる。こういうふうな状況の中で、今こちら跡地利用されようとしていまして、宜野湾の場合は、私は非常にうまくいくと思えますよ、ほかと比べてね。こういう三者の協議で、しかも地権者だけでもない、市民の声も吸収してこれが今つくられようとしていますから。

もう一つは返還された後、北谷の例えば北です。PCB、枯葉剤の沖縄市のサッカー場のあれが、北谷でも出てきたんですよ。桑江中学校の近くでも出てきたんですよ、ドラム缶が十数本ね。いわゆる帰還米兵がそこへ埋めたと言つて、地図まで書いたものともう合致するわけですね。しかしそういうふうなもの政府は認めない。というふうなことなどで、今サッカー場が一番大きな、八三個ですか、ドラム缶がこの間出てきた。これが米軍の基地内の学校敷地にまで今及んでいるという状況です。それから、そういう返還された跡地にすぐ使えない。この恩納村の通信基地跡もそうです。向こうもそういう有害物質が出て、ドラム缶何十個ですか、今自衛隊基地にまだあるんじゃないですか、恩納村の。すぐには使えない、使えるまでに物すごい年月かけて、というふうなものではありません。

そこにですから地位協定の問題等あるわけですね。この地位協定でアメリカは責任負えない。だから垂れ流しという状況のもとで、日本政府が責任を持つことになつていふけれども、沖縄の立場からすると、全く責任負えないような形で、アメリカのそれを許しているような状況ありますから。そういう跡地利用の問題を含めても、ちよつと返つたからすぐ自由に使えるという状況ではないということをまず認識しておかんとお思いますね。

## ○野添文彬

屋良県政の時はそこまでの意識というのはどのくらいあったんでしょうか、実際にどのような取り組みがなされたのでしょうか。

## ○石川元平

そんなに印象に残っていません。七六年までに返って、象徴的なものとしては、メースB基地などは返ったけれども、しかしあれは自衛隊が引き続きのそういうことがありますのでね。

大きなものは、あれありますよね、補助飛行場の前に残波のナイキ基地があったわけですが、あれはうまく行っているんですね。読谷飛行場は今の役場がある中心に滑走路が三本あったんですね。しかしB29は降りられなかったんです、滑走路が短くて。そのために残波の、いわゆる南側になりますか、ボーローポイントという二〇〇メートルを超える滑走路を新たに作ったんです、米軍が長崎に原爆を落としたB29、それはちよつと九州、小倉とか、天氣の状況、時間を費やして、そのまま落としてテナンに戻る油がないものですから、ボーローポイントに立ち寄って、給油してテナンに帰ったという。あの残波の基地の退去、僕らも参加をしました。たけれども、目の前で強行してナイキの実験などやりましたよ。ナイキのいわゆる地对空実験をね、やりましたけれども、あれも闘いによって返還をした跡に今、日航アリビラ、そして残波ロイヤルホテル、御菓子御殿の本店等々、そしてまた菊栽培のもうメツカになっっている状況。あれはもう非常にうまく、読谷の場合は。

もう一つあれがあります。読谷の中で一番最初、基地撤去をしたのは不発弾処理場です。読谷壺屋村です。焼き物のね。金城次郎さん、人間国宝の。あれは村有地、そこ不発弾処理場だったんですよ。たまに部落に破片が飛んできたりもしましたんです。ゴルフ練習場の近くまでね。こんなことがあったもんですから、我々はだから中央にいる組織まで動員をして、これを抗議行動をやって、返還するのとに合意したもんですから。一方では壺屋は昔は、人里離れてと言いますか、登り窯でまきを炊いても、何の周囲にも気兼ねすること

なく、煙もうもと立てても焼き物は発展したわけけれども、戦後人々が押し寄せてきて、周囲に。もう今、年に窯を保存するために一度、火を入れてという程度で。読谷が村有地を提供しますからいらつしやいということ、金城次郎さんほか、陶工たちが読谷に集団移動したわけですよ。名前も読谷壺屋村という。それが現在も四〇ぐらゐの窯元がありますよ。今、展示即売会などでヤチムン市をやっているはずですよ。そこが始まりですね。基地撤去の始まりは。

あと、基地の今ど真ん中に、通信基地、象のオリがあり、トリイステーションがあり、と連携する通信基地を新たに作るろうとした所をやめさせたんですね、当時のカーター大統領に直訴し、意向が通って大統領から現地の司令官にこの工事の中止が出て。

この建物を建てるために、山内徳信のえらいと言うか、巧妙なところ、相手の司令官などみんな呼ぶんですよ、起工式などに。すると来るんだ、アメリカカーは。日本の自衛隊だったら絶対来ないと思います。アメリカカーは来て喜んで、一緒に酒飲んで、またやーやーするんですよ。何度こういうことやって、あれ全面返還にある時は実力阻止闘争ですよ。不幸な棚原孝子さん圧殺事件とかいふようなことがありましたからね。ですから、読谷は大したものなんです。かなりのいろいろな教訓が。ですから山内徳信氏のあの回顧録はぜひ読んでください。

## ○野添文彬

ありがとうございます。

## ■「屋良県政（および屋良知事という政治家）の成果と限界」

### ○櫻澤 誠

それでは続けて「屋良県政の成果と限界」についてお願いします。



## ○石川元平

恐れ多くもという感じもするけれども、成果と限界ということでも多くの県民がそう認識しているであろうということでも挙げてみましたのは、政治家になる前に子供たちと教育のことを考えて、沖縄の行く道は日本への復帰しかない。そういう『琉球新報』の連載をもつてすれば、「一条の光」を求めてやってきたのかというふうなことがわかりますけれども。つまりその後、たくさんの具体的な成果を出すんですね。今日は多く申し上げることはできませんが、彼はもう物理学者として、本当に目に見える形でわかりやすい復帰への布石を打っていった。

その過程の中で、これは特に主席公選の時にたくさん聞いた言葉でした。沖縄の救世主になってほしいと、こういうことでした。また、当時は本当に日・米・琉、三権力を向こうに回しての闘いに勝利をして、中外に県民意志をアピールしたという、主席公選で勝つてこのようなアピールができた。その公選になる前の任命闘争の時も、もうこの血と汗の闘いがあって公選も勝ちとつたのですね。

いきなりだから公選というふうなことではなかったということも知ってほしいし、それからこういう闘いの勝利が七二年復帰の原動力になって、私は復帰の偉業を達成と、金字塔を打ち立てたとかと、いろんな表現をする書物などもあります。一般的に、もう今の子供たちには忘れられているかもしれませんが、やっぱり復帰の父というふうに呼ばれました。県民葬がまたそういう雰囲気でした。

それからもう一つは、かなわなかったけれども、中身に県民要求はこれですよというふうなこの「復帰措置に関する建議書」、これ「屋良建議書」とも言われる、これで沖縄の思いはきちっと、政府国会に伝えたという。結局復帰の中身を勝ちとる闘いとは違うのはこういうことだろうと思うんですよ、積み残されたその課題。本人がしかし非常に残念がって知事を退任をする時にも、「勝ち取った復帰であつたけれども沖縄が願った復帰にならなかつた」というそういう言葉を発して、次の時代に思いを残して彼は県庁を去るとい

うふうなことになりましたが、これは特にもう私など彼のそういう遺言みたいなことを何度も聞かされた者としては至る所で、そのことをずっと訴え続けて今日にも及んでいます。

そして今に通ずる屋良の思いとしては、沖縄戦で捨て石にされたという記憶。屋良は台湾にいた時に、一夜にして末の女の子を亡くすんですよ、疫病か。それでいわゆる仏門に入るわけだけでもあと一つは、沖縄に残した長女がまたひめゆりで犠牲になるわけですよ。そういうことなどがあつて、遺族連合会の副会長を長くやるんです。沖縄がですから、また戦災にあつた状況、もう捨て石にされたという、これは非常にこだわっておりましたので。この沖縄に二度と国家権力の手段、物として。これは大田昌秀氏は、いわゆる太平洋のキーストーン、キーストーンは、同じようになかめ石、同じように物としてしか見ていない。人間の住んでいる島として見ていないという、これ共通するんですね、屋良の思いと。ですから屋良は国家権力の手段として利用されて、犠牲をこうむるようなことがあつてはならん。二度とそういうことをあつてはならないという、これはもう警鐘とも言える、あるいはまた県民に対して、遺訓を残してくれたこと。まだ終わっていないよというふうな、これはこれはやっぱり屋良が残してくれた成果というふうな受けとめるべきだと思つています。

それから限界ということでは、とにかく復帰前後。沖縄に対する偏見と差別意識、現代的に言えば、構造的差別。もう一つ、国家権力相手に県民要求をバックに誠意と情熱、もう屋良はその塊みみたいな人間でしたけれども、それを持てる力を發揮してやつたけれどもかなわなかつたという、この失意と無力感ということは、もうはた目で気の毒なぐらいでした。

これはもう言いましたかね、本人は結局は酒も飲まないんです、たばこもやらないんです。四六時中もう、いわゆる書いてあるか、もう思索にふけているか、こんな状況。何か奇策はないか、何かいい策はないか、もうこういう中でしたので。ですから、八汐荘建

設で申し上げましたけれども、本人はもう不転という言葉が非常に好きでしたね。好きというより、みずからに不転。だから八汐荘建設の場合、沖繩に帰らない、この確約がとれるまではというこゝとで、五〇日文部省に座り込みましたというんです。だから頭おかしくなっているんじゃないのと言われたり、いろんなこと言われた。ところが言っていることはまともなんだから、こんなことを言ったら、もう沖繩に帰ってやり直して来ると思ったら、帰らんで、うずら荘という、がたがたした一番粗末な共済の建物にそこに泊って、注文されたものを要請書出したら相手がびっくりしたという。沖繩に帰ったかと思ったら、まだいたんですから、また出てきたものがある、官僚が返せないような、そういうふうなことで、色々と五〇日政府を相手に座り込みました人間はいないと思いますよ、沖繩有史以来。

ですから金城実、彫刻家ですが、彼は一〇〇メートルレリーフつくったものの中で瀬長亀次郎、阿波根昌鴻、安里清信、屋良朝苗がいるわけけれども、屋良朝苗は文部省に座っているこういう状況の、そういう彫刻です。等々、色々ありましてね。それまあ生粋の教育者でしたので、そういうまた純粋な県民要求等、だましと欺瞞を本分とする国家権力に挟まれて、痛苦の思いをした。確かに彼はこういうことをずっとやってきたと思っと思っています。

今ひるがえって、しかし、これは今、いわゆる教組の教職員の代表としての屋良、その後を僕らがまた引き継いだわけけれども、戦前の国家権力と沖繩の関係、そして沖繩のアイデンティティーが奪われていったことへの総括と反省、戦後の新たな沖繩県政の中で行政施策として、具現化しきれなかったというようなことは確かにあると思います。具体的な学校教育の中で、沖繩の子供たちに誇りと勇気を培うために沖繩独自の文化ですよ。

沖繩の文化力と自然力という、私は今後、沖繩の切り開く道は、また軍事力を打ち倒す沖繩にはそのエネルギー、もう歴史的にそれが蓄積されたのがいっぱいあると思うんですよ。これはもう保革

を超えてあるんですよ、沖繩には。そういうもの、例えていうと語です。シマクトウバ、これはもう那覇市などは先鞭切ってやっていますね。あれは私は、自民党保守市長と言われたけれども、私など自身見習うことがたくさんあって、新庁舎を建てましたけれども、オスプレイの赤旗をずっと二本ずつ立てているしね。右翼が街宣でもう翁長攻撃ですよ、そこでね。あんなことやっても平気でこれ続けていくし。それから日の丸です。普通沖繩県庁でもほとんどの所では、公の施設で、日の丸を立てるポールが高く、次の県旗だとか協議会の旗は下がっていますよね。那覇市役所の新しい庁舎ですよ。日の丸を掲げるのも、那覇市の市旗を立てるポールの高さが同じです。

あとはですね、ちょっと私的な評価で言えば、あの時代に屋良以外の人が戦後沖繩のリーダーになっていたら、ということ時々考えます。今でも日本政府に対してこうやられているこのジレンマがあるけれども、例えば独立を達成し得たであろうか。あの時は一桁なんです。独立賛成もね。独立を理論的にリードしてきたのは、そして七二年復帰後なんです。『N27』という批評雑誌があります。この第二号に僕もちょっと出て、コメントしましたけれども、あの中に沖繩独立論に対する新川明の論評があります。数名の人を挙げて、彼はこんなことを言っているが、自分はこう思うと。おもしろいです。あれだけ読んでもね。ですから、あの屋良のそれを超えるのはなかったんです。当時。県民を束ねて、引っ張っていきけるようなそれなかったんですよ。しかし、かと言って、今の復帰、そのまま私も肯定する立場じゃないですね。問題のある復帰だという。これからどうやって本当に変えていくかというような。

ですから、私が我が師の屋良を見た場合は、やっぱり沖繩の戦後史を切り開いた人。そんなことがあるものですから私は総合雑誌『赤木』に、歴史を切り開いた人屋良朝苗ということ、これに何回か連載をさせていただきましたけれども。いわゆる復帰四〇年のそこらの中では中々評価しがたいと思いますけれども、私は後世

から、この屋良聖人。沖縄で歴史上で聖人と言われるのは、程順則名護親方ですね。それ以外のは、おそらく歴史的に一致した評価はないと思います。屋良聖人と言われる歴史的評価も期待できるのではないかというなのが、私の私的な評価ということでこれは受けとめておいてください。

このために、屋良に関する色々な話をまずやってきましたけれども、沖縄組教育会館資料室にあった全資料、数万点、紙一枚から冊子といろんなのありますけれども、これを全て読谷村に寄託してあります。屋良朝苗日記もそうです。そして私が個人的に持っていたものも全て読谷村に寄託してあって、私自身が今、屋良朝苗顕彰期成会の顧問なんです。山内徳信会長を中心にね。こうやってやるもんですから、将来的に戦後の学習館をぜひ建ててほしい。これ読谷村が同意したから向こうにやっています。私にはこれを見届ける責任があるもんですから、前の村長などから来て、約束をして。ですからネーミングも大事ですから、例えば屋良朝苗記念館ということであれば、もう今の、あの補助飛行場返還されている、むらづくりを見ますと、あれはまだ新しい道路が役場の東側に大きな道路が今建築中なんです。これはいわゆる観光客と言わんでもいいですから、たくさんの人を引きとめることができるような場所が私はできると思います。今でももう人間国宝のほとんどは読谷にそろっているんですよ。本当に文化村、自治の村ですしね。そういうことまで、見届けなくちゃならないなというふうな思いで、これをちよつと締めくくらせていただきました。

## ■「屋良県政（および屋良知事という政治家）の

## 成果と限界」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。では、今の屋良県政の成果と限界というものにかかわって質問いかがでしょうか。

### ○吉次公介

もし主席が西銘さんだったらどうなっていたかと思つた時に、例えば革新系の反復帰論というのが、もつと先鋭的に激しい状態になったのではないかと思つた。そう考えた時、屋良さんだから反基地感情とか、反復帰論というのを上手にくみ上げながらその復帰の混乱を最小限に抑えられたのではないかと感じます。石川先生は、どのようにお考えでしょうか。

### ○石川元平

はい。復帰との関係では、これいわゆる復帰に関する組織づくり、実は五三年に沖縄諸島祖国復帰期成会というのができるんですね。屋良が会長です。ところがそれはアメリカの弾圧にあってこれは解散させられますが、非常に配慮して、当初の五三年の期成会はつくられた。というのは、政党は非常に主義主張ははっきりして、その中には当然反米基地、強烈なそういうあれを持っていますから、政党抜き組織化するんだけれども、それでも復帰という、それを掲げたことでこれ続かなかつたんですね。

もう一つはそういうことが実はあつて六〇年に沖縄県祖国復帰協議会がかなり底辺を広げて、ある意味で再結成なんです。その時はもちろん政党や、諸団体の人やあらゆる網羅した組織です。比較的緩やかな、右のほうまで含めて入ってきています。ところが屋良朝苗にその会長を要請されるけれども、彼は断るんです。前の経験があるから。もちろん状況の変化はありますよね、六〇年安保、ヤマトでも戦われているし、ちよつとまた夏にはアイゼンハワーが来るぞというふうな、そういうようなことでもありました。ところがこれはとにかく何とか断つて、そのためにちよつと初代の会長割に困るんですけど、何か月かな、あと官公労の委員長赤嶺武次氏が会長になって、その後、赤嶺氏はまた県庁に入つて出納長か、あたりまでなるんですが。ここは非常に配慮して緩やか



な、組合で言えば同盟までみんな入ってきたんですよ。こういう状況までつくった中で、これは当然屋良はまたそういう思いを大事にしてというふうな。いわゆる当時の教職員会の組織のあれ見ても言えるんですが。

今オール沖縄と言いますよね。オール学校なんですよ。学校に勤める全て、校長、管理職から一般の教員、事務、現業の人たち全てを網羅した、そして公、私立、幼稚園から小中高、大学、それがみんな問わず結集をしたんだ。だから網羅組織ですよ。民法四三条に基づく公益社団法人として組織化された教職員会ですが、そこにはオール学校に勤める人たちが参加をしたと。これがある意味で物すごい強みを発揮したと思うんです。ですから復帰協もそういう幅広い組織を結集をし。

今のオール沖縄、この前、準備会の意見交換をやってきましたけれども、去年一月の建白書に勝るようなそれをつくっていきこうというふうなことで進めようと思っと思っていますけどね。だからそういうことが発揮できた場合は強いんだと思うんですね。

○櫻澤 誠  
ここで言う、屋良県政という形でいくと、これは屋良さんの限界というよりは、県になったということが持つ限界というのがあるんですよね。

○石川元平  
もう枠の中にはめ込まれる。

○櫻澤 誠  
枠の中に入ってしまった。要するに復帰前までであれば米軍との関係であったり、あるいは日本政府との関係であったり。相手は対等とは思っていないかもしれないけれども、少なくとも沖縄側からすると、主席として代表して対等に渡り合うという、そういう関係があったものが、復帰をすることによって一県になってしまっただけ。

○石川元平  
四七分の一に。

○櫻澤 誠  
ええ。アメリカと直接やり合うことももちろんできないし、日本政府に対しては。

○石川元平  
それは確かにありますね。

○櫻澤 誠  
四七都道府県のうちの一つでしかなくなってしまふ。そういう扱いをされてしまふという、大きな違い。県政の限界というのがおそろくあつて。

○石川元平  
だからそれはね、それまた政府の、沖縄県がたどってきたそれに対する認識はしたんだろうけれども、この配慮不足ですよ。あれだけ戦災に遭つて、無一物になつて。ところが沖縄県再興するのに一〇年計画の中で、このちよびちよびでしょう。僕など非常に怒りを覚えるのは、新幹線がもう北海道まで延びる、九州はあの枝線をどうするかといった所までいつています。しかも九州でも新幹線、それから在来線、それからいわゆるトラックなど通る、幾つものそれがありませんね。四国には三つの大橋がかかっている。もう全国そういう状況でありながら。

沖縄軽便と言われて、沖縄には那覇から嘉手納までと、与那原までと、糸満、鉄道が走っておつたんですよ。これ生活でうんと貴重通勤、通学にうんと役立つんですよ。鉄道一本ないじゃないですか、戦後七〇年になんなんとするのに。だから僕なんか、基地が邪魔なら地下を通してくれ、金がかかってもいいから、それぐらい本当は。その意味では屋良ももっと怒りを持ってそういう要求はできなかったかというのが個人的には私がありますよ。

確かにもうね、こういう四七分の一的なそれに抑え込まれてしまつて、これ対アメリカの場合には直接ですから、たくさん闘い取つた歴史があるんですよ。あの強大な米国であつてもね。ところが、この国はやっぱり欺瞞国家ですから、どうして抑え込むかが、

どうして離反、仲間同士を、県民同士を、という思いは沖縄だけじゃなくて福島でも私は非常に心痛いことを感じるのがありますね。

#### ○吉次公介

屋良さんはもつと強く主張できなかったのかという部分とかかわるのですが、大田昌秀知事と比べてみた場合、大田さんは少女暴行事件という非常にひどい事件があったがゆえに政府とかなり対立してしまつて、結局、権限を取り上げられる形になりました。屋良さんのほうが、政府との信頼関係を崩さず、基地に関してはきちんと主張しつつ、最後までけんかはしないという点で、より現実的だった気がします。

#### ○黒柳保則

現実主義でしょうね。

#### ○石川元平

あつたし、やっぱりあれでしょう。本当の教育者としてずっと長いことやってきたそういうことあつたかもしれないよ。本当の政治家になりきれなかったという、これは本人が一番またよく承知をしていることでもありましたので。

#### ○吉次公介

政治家になりきれなかったことが、屋良さんにとっては非常に大きな強みである半面、物足りなさでもあつたかもしれない。

#### ○石川元平

だから相手からすると本当は対応でうそついちゃいかんわけだけれども、屋良はもう、自分の持っているこの情熱と誠意を持ってやれば通ずるといふ、そういう信念を持っている人だったんだけれども、相手が相手であつた場合には、中々それが通らないというふうな、こういう中で自分のまた何ていうかな、限界も感じたんじゃないでしょうか。

#### ○吉次公介

なるほど、ありがとうございます。

#### ○佐藤 学

時期的に戻っちゃうような話かと思うんですけど、今のその四七分の一になつてしまつたという話の中でふと思ひ出したんですけど、比嘉幹郎先生が復帰前、七一年だったかしら、沖縄自治州構想。

#### ○黒柳保則

復帰直前には、色々な案が出ましたね。

#### ○佐藤 学

という、その県の一つとして戻るべきではないという論文を書かれたりしていた、久場政彦先生も何かそういうようなこと書かれていたと思うんです。それで、その復帰運動とそうした部分、どういう形で復帰もしくはその米軍の施政下から出るかということに関しては、これらの議論というのは、何かその当時何ていうんでしよう、議論みたいなのはあつたんでしようか。

#### ○石川元平

復帰協に参加する、沖教組もそうですが、そこではね、そういうことが深まることはなかったですね。学者のそういう論文を発表したという、こういう人たちがだから、それをもつと大衆化し、論議を發展させる手だてをとるにもちよつと、足らなかつたんじゃないでしょうか。これ今まさにあることでもあるんですよ、今行政の中でも、それから外部の研究者、その中でもそのほか市民団体の中でも、そういう組織がありますけどね。

#### ○佐藤 学

もう一つ、今、この間、黒柳先生が沖国大公開講座でなされたことなんですけれど。日本の県になるに当たつての、行政の実務というのには物すごく大変だつたと思うんです。法律の書きかえをする、日本の国法にしなければならぬという、この辺のこの作業の大変さというのは、実際知事の立場としてはどうだったんでしようか。その今から考えると、今もしも何かその沖縄を違うステータスの自治州にしようみたいなこと、まあ、提案は幾らもできるんですけど、実際そのところされた主席からその知事になる中でその辺

の本当に実務的な大変さというのは、どんなだったんでしようという、御質問なんですけれども。

#### ○石川元平

いや、そのために官僚を起用したりも一応あるんですよ。本土のほうで、どっかのもで、県民要求、そして復帰後の沖縄の施策にどう反映するか、それがまた批判されるところでもあるんですよ。後でまたこういう人たちがやめざるを得ないというふうなこと、色々ありましてね。

ところがこれは今後のまた沖縄の進むべきそのかわりで、古くは琉球王朝がアジアを中心にする一国としてやってきたというのは、近くは傀儡政権とは言えども、三権を持った琉球政府だったわけですね。そして税関はちゃんとあり、いわゆる一国の体裁をなして、もちろん高等弁務官、米国民政府もあるわけだけでも、こういう実務的経験は蓄積された今でも生かせるのたくさんあると思いますよ。これが実は行政マンたちが中心になっている吉元さんなどがかわっているそれですよ。彼らはだからそういう意味ではかなり自信を持って進むべき道はこれだというふうな、それを持っていると思います。

#### ○黒柳保則

昨年の公開講座で「琉球政府と沖縄県」とのタイトルで話をしましたが、それを全て原稿化することができないので、対象を絞って復帰前後の議会の比較、具体的には琉球政府立法院と沖縄県議会の比較をするという原稿を書き終えたところです。

結局、今のお話では、やはり琉球政府をどう捉えるか、ということとがポイントだと思います。高等弁務官が君臨し、何でもできる沖縄の帝王と言われていたのですが、琉球政府に対して普段から帝王ぶりを発揮せねばならないような不安定状況は、米軍の側もたまつたものではないはずです。琉球政府の側で、頑張って自治権を広げて行ったというのがあります、どれだけのことかできたのか、また限界があったのかということを考えないといけないのではないで

しょうか。やはり先ほど吉次さんが話されたところで言えば、私も調べたのですが、比嘉幹郎先生、あるいは久場政彦先生といった方々が、復帰直前の『中央公論』などに、今の道州制論に繋がるような論考を寄稿されました。しかし、私が調べた限りでは、それについて屋良県政において議論された形跡はなさそうなのです。それは多分、「本土並み」という思考の枠組みがあつて、地方自治法が施行されて四七分の一になればそれでとりあえずいいのではないかと、そういう限界みたいなものが今から思えばあつたのではないでしようか。

#### ○石川元平

いや、これはね、例えば教育現場ですとあるんですよ。いわゆる今学力水準の比較が問題あります。まず条件整備ですよ。六五年佐藤総理が来た時に、屋良教職員会長、教育費獲得期成会会長として、前年に要請しておった義務教育費の国庫負担ですね、半額もあるし、教科書無償配布等々について約束をさせて、六六年からこれ実現されるわけですが。

六五年というところが戦後二〇年ですよ。教職員会は『戦後二〇年教育の空白』という、冊子まとめとしてはそれを出して、実態調査をしたんですよ。そして一足先に復帰をした奄美の調査などもやったんですよ。本土レベルで今こまで行っている、奄美はそこまですべていっている、沖縄はこうだという。当然政府に対する要求とかいうふうなことね、かなり我々のエネルギーもそこに費やされていたというふうな思いですね。そういう運動はいっぱいやってきました。ただ、例えば、校舎建築費の国庫負担のそれを出す場合でも基準が一緒なんですよ。後でいろんな闘いによって、沖縄に対してはいわゆる割増しといいますか、そういうの認めさせることになるけれども、鉄筋コンクリートなどでも海に囲まれた沖縄にあつては、鉄骨の腐食などが進行が非常に早いです。こういうことなども、我々だから、離島、八重山、西表なども行って、学校回りをし、写真におさめてこれをいわゆる行政を通じて、常にそういう運



動を展開してきたことなどもありますけれども。

ただ、この国は基準が一つという、まず基本的に一番沖縄で問題になるのは。これ今道路を走ってみても気がつきません。草ぼうぼうあれも一律基準というんじゃないですか、亜熱帯の沖縄も、草の生え方が違いますよ。その他でも前植えてあった木はなくなっているような状況があったりして。

## ■ 「屋良知事および石川氏の日米安保体制の評価」

○櫻澤 誠

それでは本日の最後になりますが、日米安保体制の評価についてお願いします。

○石川元平

屋良はですね、教職員会に入る前の文教部の時代から、アメリカとの関係をどんどんやってきたわけですが、県民の意見を踏みにじって、もういわゆる日米の両国家で締結をされた実質軍事同盟、その存在が県民の生命、財産、人権を抑圧する大きな障害。

言葉でよく言ったのは、この障害は単なるイバラじゃないよと。

単なるイバラだったら、いわゆるなたや、かまなどでも刈ることができるけれども、鉄筋コンクリートを十重二十重にうち固められたこういう障害なんだよと。だから物理教師らしい、彼はそこで鈍角的体制をもって、何度もぶち当たり、ぶち当たりやっついていかなだめなんだと。鋭角なものでは歯ごぼれがしてということは、要するに突出した一部の人ではだめだという理屈ですよ。これ大衆路線なんです。指導者と大衆が接近をしないでなくちゃならない。それでもってどんどん、でそれを後はひびを入れ、うち砕いて乗り越えてという、こういう障害に移っていった。言葉の上でたくさん残して

います。またたくさん聞かされてもきましたし。

それとアンガー高等弁務官との会談でも、日米安保について、沖縄の米軍基地が日米安保体制のキーストーン、かなめ石になっている現実がある以上、米軍基地の存在を許して安保に賛成できるものではないということを弁務官に言っているんですよ。そういう安保体制に対する言葉としては、そんなにあれもこれもじゃなく、私の認識では大体こういうことに代表されるような捉え方をしていたんじゃないかという。もちろん本人はパスポートを取り上げられたり、いろんなそれありますけれど、個別なね。それありますけれども、基本的なそういう見方、認識をされていたのではと。

## ■ 「屋良知事および石川氏の日米安保体制の評価」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしますと今の点に関して御質問があると思いますので。

○吉次公介

石川先生の日米安保評価、特に①から③あたりに関してなんですけれども、これは石川先生お一人の考えというよりも、教職員会の皆さんとか、復帰協とか、そうした屋良さんを支えていた皆さんにほぼ共通する見方と考えてよろしいですか。

### 《資料》

① 五一年の「サ条約締結」のさい、沖縄県民の「即時日本復帰の請願」(署名)を無視して、沖縄を行政分離した、日米両国による沖縄差別(「第二の琉球処分」)の安保体制。今日につづく「在沖米軍基地の自由使用」(管理権も)を許した屈辱的な対米従属の安全保障体制。

② 沖縄戦につづく占領軍の駐留は、ハーグ陸戦条約違反であり、日本の完全独立をはばむ障害にもなっている。  
③ 七二年沖縄の復帰（施政権返還）によって、日米安保は「核安保体制」に変質した。

○石川元平

②を除いてはね、特に①、③。

○吉次公介

②を除いて。

○石川元平

はい。今、②は普天間爆音の中で非常に今強調してこういうことをやっていますから。

○吉次公介

ありがとうございます。

○野添文彬

雑駁な質問で恐縮ですが、屋良先生は基地の即時撤去ということもおっしゃっておられたと思うんですが、日米安保という同盟体制に対してはどういうふうに見ていらっしゃったんでしょうか。

○石川元平

日米安保体制は、やっぱり沖縄にとって、これは非常に問題だという、戦争に結びつく体制としてこれは認めないという、基本的にそういう立場、はっきりそれはしております。これは選挙等通してもそうですし、日本政府に対する要求の中でもこれは強く出していました。これはやっぱり、四・二八会のうちにあります通り、捨て石にされた、軍隊のいる島が戦場になるというふうな基本的にそういう認識、これはもう学のある人もない人も、沖縄で生きてきた人たちは大体、そういうことは強く骨身にしみて感じてきましたので、戦争体験者は特に。

○野添文彬

その場合、その日本の安全保障のあり方ということについて、例

えば当時革新がやっていたような非武装中立とか、そういうことをお考えになられていたのでしょうか。

○石川元平

こういう論議はかなりありましたよ。だから大田施政の後は、いわゆる非武の文化とかという、これはずっと後になっての話ですが、非武装中立当然、九条の精神を中心として考えるならば。

それと私自身は、小さな国であるけれども、琉球王国が何で生き延びてきたのか。いわゆるヤマトの側はかなり脅されて開国せよとやっていますよね。その前にかんりの期間、アメリカを含めて、オランダやフランス、もちろんイギリスなどもやっています。この修好条約を結んで、大国と平和裏に共存してきたという。東アジアとももちろんそうです。ということなどがあって。ところがある日、武力併合された。そして軍隊のいる島になって、戦争が起こって結局、自分を守ってくれなかった人もいるだろうけれども、これは足でまといにしかならなかった。ということで、命こそ宝と。又チドウタカラというものは、私はだから、これは長いという琉球王朝時代から、それを経て、沖縄戦をくぐり抜けて、確立された沖縄的な平和思想だと思っっているんですね。これは私は憲法九条に合致をする思想だというふうに個人的な思いを持っていますので、しかもそれは普遍的な価値を持つと思っています。国内だけじゃなくても人類共通に。

その意味で、「大震災、地球のもろびと悟りしか、軍事に勝る備えは何かと」、東北の震災を見て思い出しましたのは、もうあれだけの震災に遭って、これはもう世界的にこれは大変な震災。そしてもちろん大地震と大津波と原発ですよね。そういう状況を見てきた世界のもろびとは、やっぱり軍事じゃね、だめよね、本当に命を守るために何をしなくちゃなんのかというふうな。こういうこれだけの、これは何千、何百年に一度みたいなことの有史以来初めてのそれを体験をして、そういうところまで当然到達をして、これからの国づくりをどうするかに国内も国外的にも、そういう契機になっ

てほしいという強い思いから詠んだ歌ですけどね、ですからまあ、あの普遍的な価値というものが私はあると思います。命こそは最大の宝だというウチナーンチュの思いの中には。

### ○吉次公介

関連しますが、屋良さんはやはり憲法九条は守るべきだとお考えだったわけですね。

### ○石川元平

はい。

### ○吉次公介

憲法九条は守るべきで、日米安保はけしからんとした時に、非武装中立がいいというようなことを直接はつきりおっしゃるようなことはなかったのですね。

### ○石川元平

ええ。そういうメッセージは大衆的にも、あるいはまた、個人的にもあんまりおっしゃらなかったですね。ただ、戦争に対する反対する強い思いだけは、久茂地に三階建ての教育会館があるんですね。この存在をまた言うともんなびっくりもされますけれども、この五四年に建てた時に沖縄戦の犠牲になった、それをどういう形で慰霊し、反省し、反戦平和の思いを今後につけていくかの、そういう場にしたということでは外に碑を建てることをしなかったんです。いわゆる沖縄の仏壇を皆さんは御存じだと思います。もう日々に、そこに慰霊ができます。そういう形にして三階ホールの正面に慰霊室をつくったんです。ですから七〇〇〇名余り、あれもいわゆる戦後のどさくさの中の調査ですから、本当は万余の犠牲者ですけれども、当時の調査によって明らかにされたのは約七千六百柱。教職員、僕らの年齢から一年生から師範までね。これは子供たちと学生、教職員を含めて、そこに合祀をされているわけです。位牌ですよ。一人一人の市町村別のそれがあって。いろんな集会所があっても黙祷から始まって、そういう犠牲者に対する慰霊とそのいわゆる反戦平和の強い決意をやって、それからいろんな大きな行

事を始めるといいます。毎年慰霊祭をずっと挙げてきたという。そういうこと等が実はあるものですから、これが形の上で本当は教職員、教育の戦争責任みたいなものもつとはつきりした形で本当は形に出してしるべきでもあったなという思いがあるけれども、一部ではそういうことが行事としてきちっと持たれて、思いとして伝わって、よそからの交流とか来る場合、必ずそこをオープンにして紹介をし、沖縄の反戦平和教育の誓いの場としての教育会館という、そんなことでずっとやってはきていますけどね。

### ○櫻澤 誠

そうしましたら、本日はこれで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。





## 第5回 インタビュー

---

日 時	2014年4月25日（金） 13:30～21:00
場 所	沖縄国際大学13号館1階研究所会議室
話し手	石川元平
聞き手	佐藤学 黒柳保則 野添文彬 櫻澤誠 高橋順子

## ■「日教組加盟」

○櫻澤 誠

それでは本日は「日教組加盟」のところからよろしくお願いいたします。

○石川元平

沖縄教職員会が五二年に琉球政府とちようど一緒で四月一日に設立をして、教職員組合を結成したのが七一年九月三〇日です。前日二九日に教職員会は解散をすね、それから数えまして、ちようど二年半を要して日教組加盟実現したのが七四年四月一日。いろんな論議がありました。日教組に加盟をすべきじゃないというのも内部にはかなり強い、約三分の一ぐらいの勢力、那覇支部を中心にこれはもう党派的に見ると、いわゆる共産党を支持した皆さん。しかし、多数は復帰して、教育公選制度も守るべきだということで屋良建議書などで打ち込んで、それから我々が勝ち取った、いわゆる教公二法を阻止した、そういう権利についても守るべきだということ。これも全て剥奪をされるというふうな状況等がありましたので、あとは否応なく本土の法制度下に入らなくちゃならないということで、最大の組織である日教組との連帯で沖縄、日本の教育をまず守るんだということ。

あと一つは、叶わなかった復帰の中身を勝ち取るという、これからの闘いが継続するわけですから、これも全国連帯の闘いが必要になるといふこと。大きくそういう判断で日教組へ加盟をしてきたと、そういうことです。

日教組はご存じのように、社会党一党支持でした。ところが、教職員会は六八年の主席公選に見られますように、革新共闘方式で、当時は社大、社会、人民、それから公明党の支持まで受けましてね。幅広い支持を受けて屋良朝苗公選主席を誕生させることができたわけですが、あれ以来、日教組加盟に至っても、加盟後もですね、い

わゆる社会党を支持するという基本的な方針を、いわゆる転換を求められましたけれども、これはずっと我々はうまく断ってききました。

一九七〇年に沖縄の初の国政参加選挙がありましたけれども、喜屋武真栄、屋良朝苗の後、二代目の教職員会長ですが、初の国政参加に参議院として立候補して、トップ当選を果たすことができませんでした。その後もすね、日教組の支援を受けてきましたので、財政的にも。あの時は衆参で三〇名を超える日教組の議員がいたんですよ。中に入ってやってほしいとありましたけれども、沖縄の状況からして、そういう革新共闘で出した喜屋武を、いわゆる日政連議員にするということは、社会党と手を組むというふうなことになりますから、うまく断って、私もずっと最後は喜屋武真栄の後援会の事務局長を務めました。私自身にも何度も接触ありましたけれども、これは私が退職するまで、こういうふうなものは、いわゆる沖縄だけのあれはちゃんと守ってきたと。

○櫻澤 誠

ありがとうございます。ちようど系列化の問題と復帰協の解散の問題も絡んでくるので、そちらの話も伺った上で、また幾つか質問をさせていただければと思います。

## ■「復帰前後の本土との「系列化」の問題」

○石川元平

これは全部説明するとかかなりまた長くなりますから、この大きく系列化の問題を政党の関係と労働組合の関係と平和団体という、大きくはもう三つに絞ってみました。個人的なだけじゃどうしようもありませんから、これは沖縄タイムスの『沖縄大百科事典』等もありますので、これもちよつと参考にしながらですね。

政党の関係では、沖縄にローカル政党の社会大衆党というのがあります。これもいわゆる広く県民に復帰政党というふうなことで知



られていたわけですが、ああいう叶わない復帰になったことで、復帰後も存続をすべきというふうな、そういうことになって今日までその政党は続いています。力としては革新政党の非常に接着剤と言いますか、中で相当の発言力を持つていたわけですが、今日では県議会における議席、あるいは四一市町村に占めるその影響力、もう極端に減ってしまいました。ところが、七〇年の初の国政選挙では、委員長であった安里積千代氏を衆議院に送って、現在、なお参議院には糸数慶子さんを送っているというふうな、こんな状況です。

あと沖縄社会党という、これは最初は五八年、いわゆる社大党内紛によってできたものでありますが、日本社会党の地方支部というふうな、こういうふうな認識を持つて社大党から分かれて結成。

その後、六二年に日本社会党県本というふうなことで移行し、現在、日本社会党がいわゆる社民党に改称した後も、名称は社民党沖縄県本というようなことでありますが、ここでちよつと大事なのは、村山党首が自・社連立の中で首相になったわけですが、その際、党の基本的な政策を一八〇度転換をしたという。ところが、沖縄ではいわゆる以前の憲法や安保等に対する方針は変えずに、ずっとそれを堅持して今日に至っている。私からすればそれが県民的に評価されて、県議会野党第一党をずっと維持をしてきているわけですね。照屋衆議院議員は沖縄第二区ですが、この宜野湾市内に事務所を構えておりまして、沖縄を象徴するような基地の中頭を、浦添を含めてですね、中頭と言われる所を選挙区にしていることですが、「ウチナーの未来はウチナーンチュが決める」という、これをずっと後援会の看板、三三〇号から見えるあの看板にずっとこれを最初から最後まで掲げているんですね。今、沖縄のいわゆる建白書に見られる思いに通ずることを、彼は先取りしてずっと発しておったんだなという、そういう感じもいたします。

沖縄人民党、いわゆる現在の共産党であります、四七年結成をされた。とにかく、徹底した米国占領政権との対決というふうなことなどがずっと続いて、その弾圧を受けて獄中へ入ったり、あるいは

は那覇市長に当選しても、この数々の圧力、妨害を受けて、最後は布令を發出されて追放されるというふうな、こんなことなどもありましたが、七〇年の国政参加では沖縄の革新の中の一議席を瀬長、当時沖縄人民党が獲得をし、七三年に日本共産党と合流して、現在はその沖縄県委員会というふうになっています。系列化というふうな方向では、かなり中央の強い影響を受けているというふうには見ています。

公明党、これは創価学会をバックにしてつくられた、ここにも当初からの発足のそういうのもありますが、衆議院議員に玉城栄一氏を送ったこともあり。現在では、国会議席は持っていませんね。ところが一時期、六八年の主席公選以降も保革で言えば革新の側に肩入れしてやってきましたけれども、大田政権の三選の最後の選挙、投票日の前々日までずっと僕等一緒でしたけれども、創価学会のトップなどと、私などは密談したりも色々やっておったんですが、見事に与儀公園で大田が大集会を開いたその晩からこう（手のひらを返す）やりましてね、それが大田の敗戦に繋がったということなどもあって、しかし、もう常に与党ですな。本土でもそんな感じで、沖縄でもそういう感じの政党というふうに見られています。

労働組合では、戦後の始まりは全沖労連というのが六一年に結成されて、ところが二カ年余りちよつと仲間割れしまして、大半の組織と、まだ全沖労連にも入ってなかった組織が県労協に入って。もう主要な公務員関係や、あるいは全軍労等々、大型の組織は県労協に入って。これも県労協組織は全てじゃありませんが、大半が社会党支持でした。

そういうことなどもあって、沖教組は県労協には加盟はしませんでした。友好関係は保っていました、ずっとね。色々学校の教育の問題、子供の問題等をやる場合でも、この労働組合のバックを受けない、支持を受けなければ、本当は教組運動などできないわけですが、色々苦勞をしまして。いわゆる県労協という労働組合の加盟、これが難しければ、労働福祉のまた労働金庫というのがありますね。

そこにはぜひ入ってその力を、いわゆる労働者の金融機関を守るために一緒に頑張ってもらいたいという。これは私などが前面に出まして、あの時はまだ総務部長、総務部長だったと思う。三役等を説得してですね、あと決議機関等も説得をして、労金加盟を実現させたことで、県労協からはいわゆる加盟、県労協に入っていない不満がこれで随分和らげることができました。これは沖教組の一〇年史、あるいは労働金庫の記録などにもここは非常に詳しくやられていますから、そういう見えないところでの苦労も随分やってきたという感じですよ。

平和団体ではいわゆる本土でも知られた原水爆禁止、原水協なんですよ、沖縄でも原水禁運動は一緒でありましたけれども、これもやっぱり二つに分裂をする。いわゆる原水協と、原水禁。森瀧ですか、原水禁はね。広島大学の先生、名誉教授でしたけれども。等に分かれてというふうなことになります。これも社会党系統、共産党系、原水協は一部中立系も入っていますけれども、これ現在のところはこの原水協、原水禁というふうなことでの運動体は沖縄ではないですね。いわゆる社会党系の原水禁は、この労線統一等々の影響ですね。現在は平和運動センターというふうなことにほとんどの組織がそこに行っていますし、あと共産党系の原水協、そこは共産党、あるいは新婦人、民主、民商とか民青等々の組織で構成されて、現在は安保廃棄沖縄県統一連というふうなことで活動しておりまして、沖縄でいろんな大きな超党派で集会等を持たれる場合は、連帯の挨拶、両方とも当然出てきます。現在の状況でしたら、非常にある意味では仲良く頑張っています、基地問題で。対立ということとはほとんどないですね。市民団体が主催する集会の場合には両方呼ぶんですね。これまでのあれとは違った、ある意味で政党も、労働組合も、平和団体もかなりその意味では成長したなというふうな、そういうことでのいわゆる無党派層を含めて、市民、県民への支持が広まっている要因の一つにもなっているんじゃないのかという。こういう所はみんなが来やすいわけですよ、無党派の人たち

はね。いがみ合っているような所は中々入ろうにも入って行けないというような。

現在のこの系列化の問題、これはもう復帰四二年目ですが、私の認識では、かなり薄れてきたんじゃないのかと思いますね。

昨年一月、建白書を持って総理に陳情したわけですけども、四一市町村があれだけヘイトスピーチに合うなんて、想像できなかったはずですよ。ニュースなどでやって、どこか違った雰囲気だと思つた。銀座でもね、売国奴、国賊と言われたり、日本から出て行け。ウチナーンチュが日本から出て行け、僕らからするとヤマトウンチュが沖縄を占拠して、明治からやっているのに、日本から出て行けと言ったら沖縄の人はどこに行くかと。天竺に行くのか。そんなことなど浴びせられて、物すごいショックを受けているんですよ。特に経験の乏しい保守的な人たちがね。その時、だから、ある意味で我に返るチャンスを得たと思うんですね。

## ■「日教組加盟」「復帰前後の本土との「系列化」の問題」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。今までのところで、まず私のほうから質問をいくつかさせていただければと思います。一つは沖教組の日教組加盟について、もう少し具体的に伺えればと思うんですけども、大きく言って教組の中には、社会党系が三分の二ぐらい、共産党系が三分の一ぐらいいて、もちろんその他も含めて若干はいるとは思いますが、そういう支持層の割合というのはずっと変わらないうえ、この時期。そういう中で、加盟までの二年半でどのような議論が行われたのかというところを伺えればと思いますけれども。

## ○石川元平

この政党支持のあれが論議の主流だったように思いますね。と言いますのはね、日教組の、一番沖繩側から多く派遣するのは教育研究集会です。そして次、定期大会。決議機関でもう一つ中央委員会とありますが、これはもう限られた人数で、特に定期大会等でもいわゆる各支部からの代表は必ず入れるようにしたわけですね。うまくバランスとって。日教組の中でいわゆる沖繩だけじゃなくて、日教組の定期大会の中でのあの論議、これが蒸し返してくるわけですよ。ですから、日教組大会でこういう方針が決まったけれども、それをまた我々の機関会議での論議で、これがまた違うわけですね。非常に厄介なことです。同じような大会行って今日聞いてきたはずなのに、Aが言うのと、Bが言うのと、また違う。非常に印象に残っているのは、そういうこと。委員長報告と副委員長報告が違ったりというふうなことがあったりです。結局二カ年半要したというのは、そんなに急がなかったということですよ。性急にやって、組織を分けるようなことになりかねませんから。

やはり日教組以外にもう一つ組織が小さくてもあったわけで。これ十分にそこらを時間をかけて論議をして、そしてさつきも喜屋武のことも言って、あるいはまた主席公選の頃から色々共闘などやってきましたけれども、我々としては根気強く、この間、一番復帰運動、研究集会、その他で多くお付き合いをし、接し、またお世話になっている。これからもというふうな、そういうことなども組合に対して非常に丁寧な時間をかけて、随分説明をしてきた記憶があります。こういう状況の中で、やっぱりもう大体煮詰まったというふうな、こういう状況の中でやっぱり二カ年半かかったという。この政党支持関係のものがある意味ですべてじゃなかったかなという感じですよ。もちろんほかの組織にも入ってどうということはありません。これじゃあ沖繩の問題は全国化できんというふうな、これもまた歴然としていますから。そんな感じだったと思います。

## ○櫻澤 誠

七四年に正式加盟をされる前からもオプザーバーのような形で参加もしているわけですよね。

## ○石川元平

教育研究集会等々では全て招かれて参加をしてくれています。さっき申しましたように、参加をした人たちの報告が違っておったりというふうなことなどが色々あったものですからね。こういうことなどがまた再生産されて、下部のほうで一定の混乱をしたりと、これはありましたけれども、それは何度かやっているうちに、そんなに最終的な混乱はしなかったですね。

## ○櫻澤 誠

ありがとうございます。あともう一つ、系列化のお話の中で教職員会が県労協に加わらなくて、教組になってからも、復帰後もそのいわゆる県評時代ですかね、総評の時代というのは入ってない。

## ○石川元平

入ってないんですね。だから、さつき言いましたように一定の批判はあったんですね。例えば教公二法闘争でも、これは戦後最大の教育闘争でしたけれども、教組の中で守るということだけじゃなくして、教公二法阻止県民共闘会議をつくったんです。その時の中心は県労協の亀甲議長です。彼の影響力、そしてもちろんさつき申しましたように、その他の全沖労連関係の平和団体、みんなもう参加をしますけれども、特に県労協の影響力も強かったですから。あれがまた実際の阻止の力にもなったと思います。

これ一つの事例ですけども、大きな取り組みをしていく中で、県民への共闘と、県民への支援という以前に、まずは労働組合の関係、その賛成があるからどうしようもなかったわけで。そういうことがあったもんですから、このことはもう、私色々な付き合いが非常に多かったせいもあって。ですから組織全体として、いわゆる県労協との協議会ではあったわけです。いわゆる各単組がスト権を持って、穏やかな措置ではあるけれども、指令権などもね、実質持っておったんですよ。これがもう二・四ゼネストで象徴的になり



ますけれども、実質はすごいいい指導者がいて、協議会であるけれどもそこに委ねていく。スト権などはね。そういうふうなことで大きな闘い、力を発揮し、指導性が発揮できたと思いますけれども。

圧倒的多数が県労協の組織は社会党支持でしたので。全部じゃありません。こういう状況でしたので、それではということでも時間かけまして、労働金庫、労働福祉運動で私はこの表の門をくぐる手ができないければ、裏門をあけて、そこで労働者福祉でみんな手を繋いで、少なくとも信頼関係をつくっていかなくちゃならんんじゃないかと。そんなことを強く主張しまして、三役を説得し、決議機関もそれでいいということになりましたね。

労働金庫の私、初代の理事なんです。長いこと沖教組からのですね。また労働金庫の専務になってくれという要請も受けたこともあるんですよ。そういうことなどもあって、労働組合の関係とは非常に仲良くやっている。そういうことなどがありましたね。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら、ほかの先生方からいかがでしょうか。

#### ○高橋順子

日教組に加盟する前からオブザーバーとして教研集会には参加していたと先ほど教えていただいたんですけれども、中央委員会とか定期大会とか、そういう日教組の運営を決める大会にも加盟前から参加されていたんですか？

#### ○石川元平

そうですね。あの時には確かに、これ評決権などはなかったと思いますけれども、一番大挙してやったのは教育研究会ですね。数の上でも圧倒的にそれには参加をして。また沖繩のいわゆる、特に六〇年、復帰協結成からすけれども、頻繁にその交流は、我々も向こうへ行つて、オルグ等へ行きましましたね。それから、逆に向こうからまた来て交流等は非常に頻繁になされましたので。

教育研究会、沖繩で一九五四年から第一回ですけれども、日教

組、いわゆる全国より遅れることわずか三年。全国で始まったのは五一年なんです。これはもう屋良朝苗などの先見性ですよ。教育に對して、当時、異民族支配の占領支配と言われていましたけれども、このまま黙ってちやいかんという。いわゆる平和憲法と教育基本法体制のもとに帰りたいというようなのがアメリカ支配から脱却する大きな狙いでありましたから、まず本土のいわゆる民衆的な、戦前のあれじゃないですよ、戦後の生まれ変わったその教育の状況に對して。いち早くこれを吸収しようというふうな。ですから、屋良朝苗会長が行ったのが高知大会と言っていますから、すぐこちらで教研集会の準備が始まって、そしてやるに至ってはすごいですよ。超一流の人たちを特別講師に招いて、もうだからノーベル学者、湯川博士、朝永博士は、もう一流の。我妻、憲法草案なんかに関わった、こういう人たちをみんな招いてですね。ですから、さすがにアメリカなどもまともなあれはできなかったですね。渡航拒否をするとかね、パスポート拒否をするとか。

もちろん、その前段にいわゆる講師の先生、招請の準備は全て屋良会長本人がしたんです。教育文化部長などに任せないで、全て自分で行って、直に交渉して、そしてこちらでの体制をつくって。ですから、私は沖繩タイムスの文化講演も、教育研究会の記念公演をやつて、これだけでもったいないわけですよ。高校三年の時に名護高校、当時、体育館も講堂もないグラウンドで矢内原先生の、講演式の上でのお話を聞いたことがあるんですけれども。だから、そういうことでタイムスの文化講演の始まりもそれです。そうじゃないことだったのかと、タイムスのよく幹部にも「だはずよ」と言ったんですけれどね。そういうふうなことで、拠点拠点でね、県民にも広くこのお話、ですからこういうことなどが県民にも評価されたと思っていますよ、教職員会運動。

#### ○高橋順子

実際、日教組に加盟した時、沖繩県の教職員組合から離れていった先生方というのはいらつしやったんでしょうか。

○石川元平

日教組加盟をもって、ちょっとそういうことはまだ特になかったと思います。そんなに印象に残るぐらいのあれは出なかったですね。

○高橋順子

すると、この頃は共産党からというよりは、保守から選挙に絡んで、色々あったと。

○石川元平

そうです。今に通ずるあの右派勢力ですよ。この人たちがいわゆる、沖縄にもそういう一定の土壌があるもんですから、アイゼンハワーが来た時はみんな星条旗を振って、嘉手納からね、道々歓迎した人たちですね。佐藤総理が来た時は、逆に日の丸を持ってとうふうな。復帰運動など全く関係のないような人たちのそういう情景がありました。

○高橋順子

日教組にも共産党のグループがあったと思うんですけども、そのグループ化の影響というのは何か。

○石川元平

これは、それぞれ交流はしたと思います。我々があんまり知らないところで、支部間のね。あるいは幹部間の交流はあったと思いますけれども。

○高橋順子

特に目立った影響はなかったというような感じでしょうか？

○石川元平

そう思います。

○高橋順子

日教組の教研集会在沖縄で開催になると思うんですけど、それはもう加盟の時から決まっていた？

○石川元平

そうですね、論議をして、いつ開いたほうがいいのか。今、ぴんときませんが、かなり広範囲に会場を分けてですね、那覇、中頭中

心に。当時は大きなホテルもないもんですから、小さなアメリカなどがよく使ったようなホテルを何か所も借りまして。そこにもちろんもう個別に右翼から、みんな攻撃もされたわけですが、左翼か右翼かわからんようなホテルの経営者だとか、おじー、おばーなどがいたわけですよ。沖縄では効果なかったですよ。本土では驚いてみんなシャッター降ろしたりしますけれども、沖縄では、あとは子守唄とか沖縄民謡などをかけて、恩納のビーチで浴びて、三々五々退散、こんな状況でほとんど影響は受けませんでした。もうコザなどの、もうある意味で忙しい話も、よくおばーに追い返されたという、等々色々あります。ですから非常に広い範囲にわたって会場をうまくやったということもあって、もちろん読谷の会場の中などでは入りやすい状況もあったもんですから、そこには右翼は入れないように、電信柱のあれを何本か並べて、またうちの青年部が沖教組だけじゃなくして、県労協等々の青年部がずっとそこをガードするとか。こういうことは体制とりましたけどもね。

久茂地の教育会館、今アルミのルーバーをこんな形でやっていまして、あれはもちろんその前の教公二法の頃から右翼の潮流がありましたのでね。あの火炎瓶などを投げられても大丈夫なように、この組合の事務所への出入りのそれも、木の扉をみんな鉄の扉に変えましてね。かなりガードを固めて、そういうようなことなど、これは高教組の会館などもそうです。ずっと寝泊まりもさせましたので、青年部などもね。

しかし、その前にやられたことがありましたね。うちの政経部長、福地政経部長が、そんなことなども色々ありましたので。あと県労協事務所荒らし、社大党放火事件等々も前後して、色々あったんですよ。これは本土からの影響を受けて、もちろん沖縄の右派勢力等々もあって。これは基本的にはまだ随分形が変わったそれは、一フィート運動ではかなりやられましたから。福地と私などは個別にうんとやられました。毎日のように、どっかに情報がずっと、世界に流れたような。沖縄の何大悪人というようなことで、福地と私。

ということがありました。これは基本的な今の全国の状況ですから油断はできんと思いますけどね。それ以上に沖縄全体としてしっかりとウチナーンチュに目覚めたそれができているというふうなことを、私は、ですから大いなる展望が持てるという気でおりますけどね。

#### ○高橋順子

県の教研集会の内容ですとか、日の丸をどのぐらい掲げるかなども、六〇年代後半になってくると、日教組の議論との調整、影響を感じるんですけども、実際、加盟後はもつと日教組から影響を受けるようになったんでしょか。

#### ○石川元平

日の丸についてはもう転機迎えたのは六五年と見ているんですよ。大きくはね。佐藤が来ましてね。それ以降、一挙にはなくなりませんでしたが、次第に大衆運動の中からね、これは特に我々の組織の中から日の丸が消えて。もうある意味で今完全に消えていますよ、沖縄でね。宜野湾ですと目立つのは普天満宮、それと僕らの愛知区に宮城修理工場という、三三〇号にあります、二カ所ぐらいじゃないかな。全く正月を含めて祝祭日に日の丸は目にしません。もう本当に嫌気を差してきたんですよ。特に八七年の沖縄国体あの強制ですよ、有無を言わずね。ですから、知花昌一にソフトボール会場で焼かれまして、同じ読谷の高校生が卒業式の壇上のあれを引き下ろして、校門の近くのどぶに投げ捨てたりということ、一時期こんなことが激しくあちこちでありましたけどもね。今はもう激しくやらなくても、やっぱり本土と沖縄との関係について随分目覚めつつあるんじゃないのかなというふうな気がしますけどもね。

#### ○高橋順子

そうすると、日教組に加盟する前と後で沖縄に対する扱いはあまり変化がなかった？

#### ○石川元平

これはね、僕らからするとかなりの不満もあるんですよ。OBからするとね。例えば教育基本法が安倍の前の内閣の時に改悪された

でしょう。ああいう時にきつと我々の現職のところだったら、もうどういう形の抵抗運動、いわゆるストライキですけども、全一打つとか、その前後に何をするんだとか、色々やったと思うんですけど、あるいは国会を包囲するとかね。ところが、そういう行動をとれなかったですね。

僕なんて退職教の中で、日退教、日本退職教職員協議会の集会に行つて、こういう発言をしたことがあるんですよ。沖縄に六〇年来、復帰やその他平和の運動でどれだけの人が来て、泡盛も飲んで、一生懸命安保廃案だとか、沖縄で会議やっているんですよ。たくさんいるはずなのに、どうしてこれを結集できんだと文句言ったことがありますよ。そういう元気がなくなりましたな。これはもう全国共通だと思う。沖縄だけでなく。沖縄もそういう意味では教組の関係は、これは公務員のあれも含めてですけども、沖縄をリードしていくというふうな、こういう闘いのそれがちよつと少ないですね。ストライキがいいということだけじゃありませんけれども、大事などこはやっぱり持っているものを使って、一定の批判を受けながらもまた、我々は十割年休しても、必ず次の休みの時などには子供らに補習丹念にやりましたから。そういうことなどで、子供らの学習面に対するあれは絶対迷惑をかけないという。こういうことなどみんな評価されて、長い闘いできたんですよ。

#### ○櫻澤 誠

一つだけ気になったので追加で伺えればと思うんですけど、全国教研が七八年でしたか。

#### ○石川元平

七八年だったら六年計画ですね。

#### ○櫻澤 誠

その時というのは、石川先生は具体的にどういう役割でそこに関わられていましたか？

#### ○石川元平

七八年は総務財政部長ですね。ですから、日教組との、右翼が



入ってくる時の防衛の関係、金がどれだけかかる、他団体、それから県警ですね。警備との関係で。かなりもう私が行ったり、向こうから来たりというふうなことがあって、頻繁に。本部長以下とは警視、警視正、かなりの人たちと連携とってそういう防備の体制つくったり。金は握ってましたから。ですからこれだけのあれが必要で日教組に要求をしたら、当時、あの時、田中ピン（田中一郎）と言われた山梨出身のね、書記長で彼がおりましたのでね、ある意味でかなり無理言ってもみんな認めてくれたりというふうなことなど。そういうことでは日教組はかなりやってくれたし。

それから個々の研究集会の発表は、それも大事ですけれども、沖縄で集会やるから、やっぱりどれだけ沖縄の現実を見てもらうかとか、あるいは何と言っても、沖縄の文化力ですよね。どれだけそれを体感して帰ってもらおうかというふうなことなどで、エイサーをね、確か中部農林高校だったと思いますが、何百名の子供たちのこのエイサーを集会場で披露をしたりということ等を含めてね。それと会場などでは黒砂糖等、ほかではないようなものをみんな茶菓子に、そういうふうなものをして、土産には沖縄のサトウキビを束ねてね、お土産に持たすとかという、いろんなことをやりました。沖縄の文化にも触れてもらおうと。基地も実際に見てもらおう。随分、そういう担当をしました。

#### ○櫻澤 誠

その県警とのやりとりをする場合に、特に幹部クラスは本土からキャリアなんか来ると思うんですけど、そのあたりは。

#### ○石川元平

本土から来ている幹部とは特に会わなかった。沖縄県警の警備担当の警視、警視正の皆さんとはかなり情報を。ですから、今、東町会館と言われている、あれはもともとは労働者福祉のための革新県政の三つの政策のうちの一つだったんですよ。一つはこの勤労、憩いの村というアメリカのナイキ基地の跡を、とても見晴らしのすごい、羽地内海を見渡せるようなあの場所に勤労者、憩いの村をつ

くつたんですね。労働者福祉の事業としてあれはつくつたんです。あと一つは、いわゆる労働者福祉会館です。あとで東町会館になる。西銘知事の時に取り上げられたんですね。あの福祉会館でいわゆる大会をやりましたよ。その時、あれは道路から勾配でこうやってもう何十度かな、かなり火炎瓶でも何でも投げようと思えば投げられますから、みんなでネットを張ったんですね。かなり何十メートルかのネットを張って、要するに固い物だったら、火炎瓶などは割れて燃えるわけですよ。ところがネットは、ああいうものは柔らかく受け止めてね、白鵬が、相撲取りで受け止める、要するに被害を及ぼさないように全てネットを張りました。あとは青年部にガードを。それで右翼の防衛は完璧にする等々、そこでは不祥事は出なかったですね。

### ■「復帰協解散について」

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。次に復帰協の解散についてお話いただければと思います。

#### ○石川元平

七二年復帰、六九年一一月の佐藤・ニクソン会談、その結果、共同声明路線によって返還されたわけですが、それ以前に六七にも佐藤・ジョンソン会談で、沖縄の復帰についての論議はされているわけです。そういう米国のレールの上をね。最終的に六九年の共同声明で七二年復帰が決まったということになっているわけですが、いわゆる復帰協傘下の団体、ゼネラルストライキを含めて、もう可能な、あらゆる運動と闘いを展開してきたというふうな。これは沖縄だけじゃなくて、全国からも沖縄にも来ましたし、また沖縄側からですね、多い時は船をね、チャーターして、晴海埠頭に乗り入れる、何百人も。もちろん私もそういう体験もあるわけですが、政

府国会への直訴だとか国民へのアピールを、いろんなことをやって。もちろん日米政府等々にも伝わるような、こういうこともやってきました。核も基地もない平和な沖縄という我々の要求、そしてもちろん当時の屋良主席の七一年一月一七日、「復帰措置に関する建議書」というのは別名「屋良建議書」と言われているものですが、それに盛り込まれた沖縄の要求はかなわなかったという、そういうことでですね。

七二年五月一日、施政権返還の日、いわゆる復帰の日当日ですけれども、その時の県民大会の横幕ですね。やっぱりこれにもう象徴していると思うんですね。

「自衛隊配備反対」。ずっと日本軍、この自衛隊の進駐を許さんという闘いがずっと組まれているんです。それから「軍用地契約拒否」というのは、アメリカがいわゆる沖縄を占領して勝手に囲い込んだものに加えて、五〇年代に新たな新規接収した基地が現在の基地なんですね。これをそのまま復帰によって法的根拠もなくてね。公用地暫定使用法、米軍基地使用のために公用地を暫定的に使用しますよという法律をつくってですよ。こういうことを強行しようとしたもんですから、契約拒否で対応しようという。これはそういうことですね。

そして「基地撤去、安保廃棄、「沖縄処分」抗議」で、これは明治から数えてサンフランシスコを二回と考えれば、これは第三の琉球、沖縄処分という位置付け、こういう言葉が使われました。そして「佐藤内閣打倒」ですね、という県民総決起大会であるわけですから、こういう沖縄の復帰に対する主要な思いが全てかなわなかったわけですね。

一方、系列化も進んでいる状況等がありますから、復帰協から脱落していく組織も、これはありました。本土で言えば同盟関係の組織ですね。海員組合とか全繊維などが、それだけではありませんけれども。要するにもう闘いが先鋭化と言いますか、体制と対決をしていくというふうな、こういう状況。この象徴的なものとして当

時の横幕のあれを確認いただければと思いますし。

七五年と言うと、復帰三年経過のそれですが、この一七回総会において、あとはその後の闘いをどうするかという、そういうこと。かなり論議はしていますが、戦後復帰運動の総括を。一定の概括的総括をやられているんです。これは戦後、一九四〇年代から七〇年代にかけてこういう闘いをやってきたなというふうなことでね、かなりのページを割いての概括総括はやっています。

そして、加えて今後の活動をどうやっていくかと。要するに、押し切られた後どうするんだと。そこで復帰協の解散か、継続かという、これを徹底した総括を踏まえて、具体的活動のその中ではですね、復帰闘争史を編さんするということと、それから記念碑を建てるというふうな、二つは大きな事業として論議をされて、これは確認をされます。七七年五月一日まで組織を継続するということを、これは総会で確認をされることになります。

七七年五月一日、解散総会開催をして、六〇年に結成してからもう一七年に及んだ復帰協の闘いにも幕が引かれる。本当は第二ラウンドもあるはずなんだけれども、これはちよつと後で申し上げるとして、一応解散宣言がされる。

この解散に当たって、清算委員会を設置するという。それから闘争史の編集委員会を存続するという、そういう確認などをやって、いわゆる解散総会を閉めてあるわけですが、この記念事業であるこの間もう出ております『沖縄県祖国復帰闘争史 資料編』という分厚いのあるんですけどね。これはあくまでも資料編。さっき申し上げた概括総括はやって、単年度の方針と総括は、みんなこれやってきているんだ、本当は。ところが、復帰運動を通してのいわゆる成果と、それから押し切られた後の課題ですね。じゃあ、押し切られたら、この後はもう闘いはなくなるのかという。こういうのを含めての実はそのをやったかたんです。やることになっておったんですよ。それが実はできなかったということなので、本当の総括ができなかったという。

あと一つは、七六年、国頭村の辺戸岬という所に祖国復帰闘争碑と言われるものが建立されています。あれはかなり立派なものです。与論に背を向けて、沖繩本島の北の先ですから、こう沖繩全体に向き合うような形で。解散の詩を書いたのが桃原用行という、元全通の委員長をおった方で、復帰協会会長です。それを揮毫をした人は、あの一番大事な時期に事務局長をした仲宗根悟。桃原氏はもう亡くなりましたけれども、仲宗根悟氏は今八八歳だと思えます（仲宗根悟氏は二〇一五年七月二五日に死去）。

海上集会の前日二七日には辺戸岬と与論の、最初は与論の琴平神社という、海抜約一〇〇メートルぐらいの所。そこで両方、かがり火を焚いたんです。翌日、海上集会。二八日にやっただけです。そういうふうには沖繩と呼応して、当時、燎原の火のように全国に復帰の火は広まったという。

やっただけの与論のほうには、沖繩と向き合う闘争碑がないというのを、復帰一九九年目に気がつきましてね。四・二八会の中で、これは僕が提起をしまして「何とかせんといかんじゃないのか」と言ったら、「それでは泡盛持って与論へ行って、この話をやりに行こう」と言って、すぐ実現したんですね。復帰一九九年目の四・二八に与論を尋ねました。我々一〇名近く、四・二八会のメンバー。そして、与論の社会党、共産党、あるいは日教組の退職した人たちね。あの議員の皆さん方を含めてその相談をしましたら、もうすぐこれは大変なことになったということで、恥じ入っておりますね。すぐやるということに決めまして。これが奄美に、そして九州に伝わったんです。そうしたら全国的には鹿児島の大衆院議員、日教組関係の大衆院議員で川崎寛治という、京都大学の卒業ですが、が中心になって、実行委員会をつくってね、我々と呼応してくれた。四五〇万円ぐらい集めたと思います。一カ年でね。それで、見事にこれができ上がったということで、実は復帰二〇年の四月二八日に、今度は船じゃなくて飛行機で。前年は船で行ったんです。二七度線はこの辺だったよという話をしながらね。その除幕式に参加を

し、一番喜んだのが与論の町長でした。それから晩は町長主催で盛大な祝賀会まで開催をして、与論献奉という宮古のオトリーに負けないくらい、それにまたね、酔ってきましたけど。そんなこんなでね、実は色々あったんです。

復帰後の事務局としてはね、おそらくこれは仲宗根事務局長ですが、その後の五・一五の闘いをどうするか草案をつくらなかったよ。当然、復帰後の闘い。組織は復帰協ということにならなかった。組織の名称をどうするか含めてね、提起したけれども、もうそのぐらいのエネルギーが残ってなかったんですね、全体としては。ですから、これはもう模索に終わったという。いわゆる復帰の総括と含めてこの件は目の目を見なかった。ただし、五・一五の闘いが今日続いているのは、一方の片割れの平和運動センターが中心になって、多くの団体がそこには毎年の五・一五の、沖繩の三つの平和行進と、最後の、もうほとんどがお決まりですが、宜野湾の野外音楽堂での県民大会には結集をするというふうな、こういうことのある。各派代表みんな来ましたもんね。那覇市長も来たかな。

とにかく五・一五の闘いがなぜ今続いているかという。僕は若い者たちに問いかけるんですよ。これは七二年の復帰が、沖繩の願いがかなわなかったためだということの表れなんですね。

そして解散に至る中で、これは論議の中で系列化の問題と絡んでいるんですよ。もう七二年の前から、いわゆる本土の中央組織に加盟をして支部になったり、こんな関係ですね。こういう影響と、あれはもちろん復帰協がかなり運動が先鋭化と言いますか、復帰闘争史などでは階級的な位置付けをして闘争を組んだというふうな、そういうところもあつたりもしますけれども、上部団体の影響が非常に強かったんだらうと思います。どちらかと言うと。それで、いわゆるそこで結集をして、この後、五・一五押し切られたけれども、なおひと踏ん張り頑張ろうやというふうな、そういう体制づくりができなかったという。ですから、系列化という問題は、復帰運動の



後の闘いにもかなり影響を及ぼしたというふうに言えると思います。

## ■「復帰協解散について」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。まず最初に確認したいんですけども、石川先生は復帰後の復帰協で実際に役員になられてましたよね。

○石川元平

私はね、七二年以降の監事ですね。お金の監事ですね。あと闘争史の編集委員をやりましたので、最後、いろんなことを見届ける役目というふうなことなどもちよつと担ってきました。

○櫻澤 誠

系列化の影響について、例えば具体的に教組に関して何かがあったりとか、今後、復帰協も含めた沖縄での運動をどういうふうに進めていくかということに関して、東京からの具体的な影響であったり、そうしたものもあつたんでしょうか。

○石川元平

日教組の中には、特に日政連議員は送っていますから連携は、我々としてはより強化をしていかなくちやならんというふうな。当時、喜屋武真栄はすごく元気があつて、復帰協の会長を長いことされたことがあつて、いわゆる社会党の持ち分を、時間を割いて喜屋武の質問の時間に充てたりもしましたですね。ですから、テレビなどにも出る回数が一番多かったです。彼が「小指の痛みは全身の痛み」なんて有名ですね。これがかなり通じたようです。沖縄の思いを知ってほしいというふうなことで、非常に注目されたことでもありますので。

我々の側から復帰協は閉めるべきだというふうな論議。それよりもね、僕の印象としては財政問題が非常に響きましたね。ただ、一番頼りになる県労協の関係が、その前だと思えますが、すごい内紛

があつて、幹事会解散という事態を招いたり、おそらくこれは復帰協後の再結成のあれを響いていると思います。それから閉める場合の財政問題、清算委員会等を設置してやりましたけれども、運動は物すごくやったけれども、閉める段階になつたら、やれ闘争碑を建てる。闘争史をつくる。やれ具体的に借金等の清算をどうしていくかというふうなことなどが色々ありましたのでね。そうするとみんな引けてくるんですよ。こういう現実を知るとね。だから再結成が非常にやりにくくなる。非常に内部のこれが大きかつたと思いますね。もちろん、中央の系列化の影響もかなり受けながらという話ですね。

○櫻澤 誠

もう一つは、以前、別の機会に伺つたと思うんですけども、復帰闘争史で通史編というか、本編のほうができなかつた。原稿自体は大分まとまつていて、調整がつかなかつたというようなおっしゃり方をしていたと思うんですけど。

○石川元平

いわゆる原水禁の運動からの色々な話もやりましたけれども、全体を通しての評価ですね。

例えば私自身が全国オルグに行つたのは六四年ですけれども、その前から本土へのオルグも行ったしておりますが。これはやっぱり、こちらから復帰協として何十人ですよ。当時はみんな船ですけれども、復帰オルグということで、当初は鹿児島経由ですね。飛行機などは利用していません。ほとんど東京までおそらく行つたんでしょうね。当時、人民党、皆さん一緒になつて。向こうはね、沖縄連というのと、沖実委というのがあつたんだ。本土のほうにはね、二つあつて、沖縄連は日教組に事務所を置かれていて、中野好夫先生が代表委員されておられた。ところが、沖縄の我々が行つて、東京行つてまず集まる場所は日本青年会館です。日青協は物すごく我々のバックアップしてくれましたよ。そこへ行って、そこで「はい、誰はどこで、誰はどこ」と別れるわけです。行く時は一緒に

行つて、別れてですよ、帰りはそれぞればらばらでいるんですが、こういうこと含めての、つまり復帰協の方針を担つて沖実委で、あるいは沖縄連で受け入れてこうやったんだけど、これを含めて評価の段階になったら、これは微妙ないろいろなことがそれで出ていました。

当時ね、僕などの認識では、やはりこういうことでは色々な小異があつても、当然その沖縄の革新共闘みたいなものでは、これはもうお互い力を合わせて一緒にならんと、どうしても自民党政府相手に、政府に太刀打ちできないもんですから、こういうことで我慢したわけではないが、もうみんなの認識としてそれはね、みんなできておつたと思うんですね。あんまりもう、無理もできないような組織状況でもありましたけれども、ですから本当の総括の部分ではきちんと整理しなくちゃならないもんだけれども、それができなかった。無理してやれなかった。あまりまた無理すべきじゃないという。当時はこういう、経路が執行委員会ですからね。我々のところからも調査部長として、執行委員として一人は派遣しておりましたけれども、一応それを受けて後、僕ら後の清算、そういう事業の手伝いしてきたわけだけども。

これはあるいはまた別で聞くと違つたりあるかもしれんが、大体大筋、教職員会、我々の周辺でなされたのは、大体僕は一応知つているつもりですから、そういうことじゃなかったかなと思えますね。

○櫻澤 誠

ありがとうございます。

## ■「革新県政から保守県政へ（二）の間の県知事選

### 挙、国政選挙の二」を含めて）」

○櫻澤 誠

そうしましたら、「革新県政から保守県政へ」のところをお伺いしたいと思えます。

○石川元平

七六年六月に復帰後二度目の県知事選挙が行われております。屋良さんが琉球政府主席時代から含めて八年で退任をしたもんですから、その後を引き継ぐ選挙と位置付けられました。革新側は平良幸市という社大党の委員長、県議会議長もされましたけれども、一方、ここではもうちよつと複雑なあれですよ。保守陣営はこの政府自民党が民社党を抱き込んで保守連合として安里積千代衆議院議員に、元社大党の委員長ですよ。社大党の委員長と、元社大党の委員長が闘つたというふうなことで、革新共闘会議、この議長には屋良朝苗がついております。結果については三万二〇〇〇票の差で平良幸市ということ、革新県政は継承されましたけれども、その同日選挙での県議選もですね、四六議席中革新陣営が二四議席を獲得。ですから、両方とも革新陣営が勝利をしたという、こういうふうなことになりました。そこまではちよつと順調だったんですね。

七八年一月一〇日の知事選挙ですけれども、バトンタッチはされましたけれども、平良幸市知事が任期半ばにいわゆる病氣辞任したことでの選挙が行われた。そこで革新陣営が知花英夫、これは読谷出身の県議会議長ですけれども、西銘順治、この主席公選で屋良と争つた、西銘との間で闘われて、二万六〇〇〇で西銘が勝利。ここに八年続いた革新県政が保守県政へ移ると。

もう企業ぐるみ選挙がもう徹底したという選挙を初めて見たわけですが、もう一つは敗因に挙げますのはですね、この知花県議会議長は、南米のあれはこの国かの周年行事で視察に行っているんですね。留守中に革新候補者まとまらずに知花欠席裁判されましたね。敗因としてはこういうことが非常に大きかったと思います。この二万票余りというなのは、これはそんな大きな差ではないですけれども。ましてや相手はもうある意味で横綱ですしね。そこで革新県政、頓挫してしまうわけですが。

次は七二年の復帰後、いわゆる初めての国政参加選挙、復帰後の初めての選挙ですね。佐藤内閣から田中内閣のもとにという。

総選挙、沖縄選挙と言われた中で、革新共闘会議、安里積千代社大、瀬長亀次郎人民、上原康助社会、三革新野党候補の公認を立て三人の当選、完全勝利を勝ち取ることができたと。全国的な社会党共産党躍進をしたというふうなことです、これは。

七四年七月の参議院選挙では、喜屋武と、それから尚詮という、これは琉球王の末裔ですけどね。青年団活動など、色々広く知られた人ではあったんですね。でありながらも、これは圧勝をするという。

七七年七月、参議院選挙。私の前任の委員長だった福地が挑戦をしたんですけれども、一万九〇〇〇の差で惜敗をしています。この相手は稲嶺一郎という、前の稲嶺知事のお父さんですね。で争われました。七〇年初の国政選挙からずっと当選した稲嶺ではあったんですよね。全国区では日教組組織の候補の宮之原貞光、これは社会党で、元日教組委員長、奄美の龍郷町の出身で。沖教組では、つまり社会党の候補であるもんですから、正式決定はできずに有志で取り組みまして。これはもちろん専従執行委員会の内々の了解を得まして、田場盛徳副委員長を中心に嶺井という調査部長と私、三名が中心になりました、私のポンコツ車で沖縄県内ずっと案内しました。奄美の郷友のあれがかなりいるもんですからね、沖縄でもかなりの票を獲得することができました。

八〇年六月、トリプル選挙、県議選と衆議院選、それから参議院選があつて。二二対二四で県議選の結果は逆転を許している。参議院選は喜屋武がそのまま勝利をしています。全国的には自民党が安定多数を許す結果となつて、全国区の日教組組織内候補として安永英雄という福岡出身の現職でありましたけれども、八〇年の選挙ではもう惜敗をした。ざっとこんな感じですよとやっています。

## ■「革新県政から保守県政へ（この間の県知事選挙、国政選挙のことを含めて）」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら、ちょっと私のほうでいくつか伺いたいと思います。この時期の革新共闘で、もともとの根本的なところはともかくとして、社会党と共産党に関してはおそろく一九八〇年までは大きな決定的な対立という、東京側からの対立が波及するということはあまり少ないと思うんですけども、そのほかの例えば民社党や公明党の動きというのが沖縄の中でどういふものであったのかというところが、安里積千代のことも含めて微妙に影を落としていくと思います。復帰後の民社党や公明党の動きというのはどういふふうにご覧になっていましたか？

○石川元平

民社党はいわゆる保守の側支持に回つて。これは労働組合の関係がもう復帰協解散の時からそういうふうになだれうちましたから、ある意味で理解しやすいですよ。公明党はね、こういうふうには、こんな感じで繰り返してきたと思うんですよ。特に、国政参加選挙などでも、幹部が候補者選定の段階でかなり隠密に来て。僕には直接会うことはなかったですが。いわゆる各政党幹部や革新共闘のうちの福地などは会ったと思います。とにかく、そういうことで彼らのまた影響力を行使して恩を着せようとしたりと色々あるんですが。

○櫻澤 誠

七〇年代の頃というのは公明党は革新共闘会議なんかにも入って

○石川元平

いわゆる単独支持です。単独支持で、会議に参加するということは全くありません。



○櫻澤 誠

支持を表明して。

○石川元平

はい、単独支持で、個別に我々は会うわけです。一方的に支持をするという言葉だけで実は大きな力なんですよ、それは。もうピシヤツと徹底しますから。ある一定の票のあれが。確実にわかりますから。これ非常に重要視はしましたけれども。

○櫻澤 誠

民社党というのも、共闘に加わるといふ形では。

○石川元平

加わってはないですね。応援には来ましたね。例えば亡くなりましたけれども、帆足計という人など印象に残っています。

革新、いわゆる我々を応援しに。民社党でもすごい人がいるなという印象を持っています。個別に支持をし。ですが、会議などで一緒に参加している人なことを練るとかというふうなことは全くなくて、決められたものに対して、また決めた人物に対して、自分たちとして支持をしますというふうな、こういう形での支持ですね。

○櫻澤 誠

あともう一つ。革新県政から保守県政へ、具体的には西銘順治さんに敗れるということになるわけですけども、その際に、経済の問題が大きくて、県民がそろそろ保守に任せようというふうな、そういう大きな動きがあったというふうなことを言われたりもします。実際に石川先生が当時実感された変化というふうなものがありましたか？ 色々回っている中で支持が少し離れているなという感じとか。

○石川元平

いわゆる経済界含めての、それにやっぱり沖縄の復帰後の、ヤマト政府に財政的に頼らなきゃならないというふうな。僕らは非常にかなわなかつた復帰のあれを訴えたり、平和の沖縄を訴えたりもしたけれども、それ以上に経済が物を言った時代だと思っ

よ。我々の以上に彼らのそのほうが浸透しやすかつたんだろうと思います。また、今考えてみても、なるほど、この時期はそういうことだったかな。

七〇年代前後の県民所得などを見ますとね、いわゆる復帰が七二年ですが、五〇%ぐらいの時があるんですね。あるいは六〇%ぐらい。七〇%をちょっと超えたかと思つたら、復帰後下がったりもしているんですよ。ですから、平均して県民所得は七二年の復帰当時、七〇%そこらです。県民所得は。今現在、そんなに変わってないですよ。七三%ぐらいじゃないですか、今。本土との差。沖縄も確かに所得上がっているけど、本土も上がっているわけですから。東京の半分以下ですからね。そんな論議を随分やった記憶がありますよ。経済的な選挙の中でも、相手が当然そういうことで迫ってくるわけですから。

今私思えばね、これ屋良時代にもこんなことできなかったのかなと残念なんだけれども。本土では全国網の目のように新幹線まで走っているわけでしょう。九州でも新幹線、在来線、貨物、それから陸上、幾つものルートはあるわけですよ。船を含めてね。北海道も連絡船に乗って復帰オルグ行ったことありますけれども、もう今青函トンネルや、また新幹線も走るんですか。もうとにかく表日本、裏日本、こういうふうには張り巡られて、一方では四国へ三本の大橋がかかるといふ。幾らかかったのか、一本ね。

これだったら沖縄まで、海底でも何でもいいから。それぐらいの沖縄の戦災復興とですよ、その戦後のお詫びを含めてね、国はやるべきだよ、本当は。もっと大胆な要求をすべきじゃなかったかなと思います。しかし、実際は一〇カ年振興計画ですよ。一〇年単位のこと。こんなことで細切れにやられてね。ですから、もう相手の手のひらですよ、これは。政権政党の手のひらの中で。こういうことで今日まで来た。

しかし、去年二一世紀ビジョンのあれが沖縄保持が決まった。本当はこれを厳しくチェックしていけば、新基地建設はあれでも拒否

できるはずなんだ。そこらがちよつと足りない。二一世紀ビジョン、これ県が決めたもんですよ。撤回などしてないんです。ですから、もう復帰四二年経過してみても、本当はもつとやれる。革新県政の中でももつと本当は全国の良心に訴えて、政府を動かして、大胆な展開が本当はできたはずなのに。

戦前、沖縄でチンチン、あの軽便鉄道走っていたわけですよ。那覇から嘉手納までと、那覇から糸満、那覇から与那原まで。最近、与那原駅に駅舎を再現するというあれがありますけどね。真玉橋という所に昔の駅舎跡がありますよ。瓦ぶきのね、長屋が残っています。大平の特別支援学校の近くにも、まだ見てないですが、レールが残っております。

○黒柳保則  
見に行きたいです。

○石川元平  
あのパイプラインも鉄道の、元鉄道のなんですよ。

戦前、農林学校は嘉手納にありましたよね。嘉手納農林学校近くまでレールが敷かれています。向こうに。比謝橋の上のほうです。橋自体は落ちていますが、その橋桁などは見ることができず。

○佐藤 学  
屋良県政の時代で、もうその国鉄沖縄線をつくれという具体的な議論は県内では。

○石川元平  
ありました。

○佐藤 学  
どうだったんでしょう？

○石川元平  
ありまして、総評の中にはいわゆる国労などがあったわけですから、調査団も来たんですよ。ちょうど僕らも一度対応したことがあります。僕らが提起したのは通学通勤で大変な支障が出ている。教

員の人事異動等も色々ありましてね、だから何としてもこれは解消してもらいたい。あの時は確かに戦災の我々が出したと思うんですがね。これを何とかやって検討してやったと思うんだけど。その結果、玉城義和県議が、あれから総評の事務局におりましたのでね。彼は今名護まで何としてでもと、一生懸命やっていますけれどもね。これは本当にこんなことで保革の対立せんで、やっとなんといかんのですね。基地が邪魔ならば地下通せばいいじゃないですか。やろうと思えばできますよ、何でも。

○佐藤 学  
復帰した時手掛けて、その時点で作ってあれば、建設費から考えて可能だったと思うんですけどね。今もう鉄道は建設費が大変で、大変厳しいですよ。だから、あの段階でこの自分も図面を見せてもらったことがあって、何か国のほうでは議論があったと。そしてそのつくるべきか、つくらないか。

○石川元平  
ちゃんと要請がされていると思いますよ。まだ社会党、日教組だけでも三十何名の議員を抱えていましたから、その他の自治労含めたら相当な数ですよ。そのあれでかなり政府には訴えられているはずだと思います。

いや、今しかし、非常に大事な話でありますけど。昔のあれがどうだったかという、まず知つたらんといかんですよ。そこにもまだ戻っていない、鉄道は。

○黒柳保則  
そうですね。本当にそうです。

○佐藤 学  
戦災で壊された鉄道を直すというのは、日本全国のほかではやっただけですので、だから、それはその戦災で壊されてしまったのはそのまま全部廃線というのはないはずですよ。だから、そういう意味で言ったら、復帰時にというのは、全然その何か課題でも何でもなくて当たり前の話だったはずなんです。やっぱりそれは嘉手

納基地の中を路線が走ったという話が多分あるんでしようけども、ただ、それは本当にその時点でできていたならば随分交通体系変わってて、そのモノレールを二十年かけてつくりましたという話になっていくわけですけど、全然違うことになっていくと思うんですよ。そのところは本当に、当時としてはその鉄道をつくるということがやれたはずだし、やるべきだったと。今から考えると本当にそのところは大変残念だと思いますね。

#### ○石川元平

思いますね。嘉手納、中部、読谷、そこから師範学校、あるいはまた一高女、それから首里高女なんかありますけど、みんな通学に使ったという記録残っていますからね。話はまた聞きます。

#### ○櫻澤 誠

ほかにはいかがでしょうか。

#### ○野添文彬

櫻澤先生のご質問とすごい関係があるんですけど、僕は外交史を研究していますので、アメリカの公文書を見ているんですけど、この時期のアメリカの公文書を見ていると、櫻澤さんがおっしゃられたようにですね、沖縄県の人は革新が基地反対ばかり言っていて、経済のことは何もやってくれないと不満を感じていると書かれています。しかし、県民は基地のことはもう大分関心がなくなってきたいるんだというのです。経済のこともっとやってほしいというところで、どんどんと革新への支持が低下しているということ、アメリカの公文書には書いてあります。ここに書かれているように、当時の沖縄県民の基地に関する関心というのは、低下していたと言えるんじゃないか。基地問題よりも経済というものの比重がどんどん上がっていったという分析は当たっているとあるのではありませんか。何か肌で感じられたこととしてお聞きしたいです。

#### ○石川元平

あると思います。一定ね、あれだけ激しい復帰運動をやってきて、押し切られての一つの諦観もあります、そしてまた本土と学校の

教員でもそうですが、格差の問題に非常に気がつくんですよ。組織労働者も含めてね。さっき県民所得の話をやりましたけども。例えば学校の教職員ですと、戦前の女教師は男女の差があるわけですね。そういうのも強く訴えて、これみんな是正させました。いわゆる県との交渉等で賃金もね、二〇%、三〇%ぐらい上がっていく時期があるんですよ。ところが、民間はそう上がらないですね。ですから、全体の所得のあれはそう縮まらない。等々があったりで、一定運動に対するちよつと挫折のそれもありますしな。やっぱりまた本土の経済には中々追いつこうにも、中々追いつくことができないなんていう。しかし、これは政府の生かさず殺さずのうまい、これは今も変わらない、そういう政策だとも思いますよ。

例えば三陸ですと鉄道走りましたね。あれだけの津波、震災に遭ってズタズタにやられたところが復興している。沖縄に当てはめると、あれだけいわゆる本土防衛のための捨て石にされて、その後二七年間の占領体制のもとで虐げられてきたというものに対するのなくて。しかし、また基地に頼らざるを得ないような生き方を日米が政策的にやってきてきているわけですよ。これ今日までね。これを打ち砕くだけのあれができてなかったという、それ反省でもあるけれども、実態としてはこういうのが確かにあったわけですよ。これをうまく太いパイプという、政府という、同化とは言わんけれども一体化路線ですから、そういうことが非常に功を奏していったんだと思いますよ。

#### ○野添文彬

その点で言うと、西銘さんは衆議院議員をやって、ずっとキャリアを積まれてきた方が、県知事選挙に出ると言った時には、保守の本命が来たなという印象を持たれていましたか？

#### ○石川元平

彼は、私は屋良朝苗のかばん持ちを主席公選の時にも八カ月やって、その後もずっと後援会の事務局長などもやりましたけれども。(西銘は)屋良の教え子なんですよね、県立二中のね。屋良が言う



には「西銘は、彼はプロの政治家だぞ」という。まさにそうですよ。清濁併せ呑むとか、とにかく「日本人になろうとしてなれない沖繩の心」とかと言ったりもしたり、とにかく剛腕でもあったわけですよね。お酒も好きだし。こうと決めたら、もうドーンとやっていくというふうな。これだけの統率力は確かに持ってましたし、いわゆる恩師からそれだけのまた評価も受けている人物でもありましたので、うまく政府はまたそれを使ったということだろうとも思いますよ。

#### ○野添文彬

逆に平良さんが病気で倒れられて県知事選挙が行われた際、革新の候補が中々決まらなかったと思うんですけど、革新側の人材不足というのは、すでにこの時期にあったんでしようか。福地さんも一応参議院議員のほうに出たけども、落選してしまいましたよね。

#### ○石川元平

これはあんまり新聞なども伝えられていません。広く認識はされていませんが、屋良から平良知事へのバトンタッチね。実は、屋良本人は副知事であった宮里、彼を本当は与党が推してくれたらと思っていました。我々も沖教組の顧問弁護士でしたのでね、教職員会の顧問弁護士で、ちやうど困難な教公二法闘争の中で、彼はまたうんと力を発揮してくれた等々あつて。政党の力を持って行かれて社大党の委員長、ところが任期半ばに宮崎へ出張中ですよね。血圧は低いほうだったんだけど、脳血栓で倒れて、そのまままた辞任というふうに進い込まれましたけれども。

その後も確かにそうですね、若手の有能なと言われた人はいないわけではなかったんですね。例えばいわゆる県労協議長、この県職労に委員長からね、仲吉良新なんていう人は僕らは非常に尊敬しておりましたね。歳はうちの福地などと一緒ぐらいで、今だったら八〇の二、三ですけれども、復帰闘争、それから平和、その他リードしてきたということもありますしね。革新陣営の中では弁舌がピカ一じゃなかったですかね。という魅力もたっぷりありました。自治労の全国の副委員長に引つ張られたんですよ。あれには僕ら反対

しましたけど、色々な事情があつて行って、結果はよくなかったですね。死んでしまった。当時、県職員、地方公務員ですから、当然選挙の時には公務員法の適用下、公職選挙法もそうですが、受けるわけですが。でありながら、彼は那覇警察署の近くで昼間、宣伝カーで選挙演説もしたりもしたんですね。「すまんけど、こっちは遠慮してくれんか」ということを言われたぐらい、そのぐらいの力のある人でしたよ。勇気もあるし、弁舌はたっし、こういう人がね、本當継いでいてくれたら。

さつき宮里松正という人も若かったんですよ。彼も米軍占領時代に戦果を挙げたのかな。いわゆるヤマトへ脱出をしていたと思うんですよ。苦学、向こうでして、色々弁護士資格も取つて。北部、やんばるの人ですけどね。うちの顧問弁護士でしたけども、暴力団でも「貴様あー」ということで睨みつけて返しよつたですよ。本當はだからそういう、色々ちよつと悔やまれるのは実はあるんですよ。あの時、例えば屋良の思いをみんなが汲んでいてくれたら、うまくいったはずだがなと思つたりもしますしね。

#### ○高橋順子

革新側も国政に出ているような人材の中から候補を立てようという意見は。

#### ○石川元平

国政は大体歳いつている人たちですから。上原康助は若かったけれども、社会党ですから。沖繩ではもう革新統一という時は、まずは党籍を持たない人。党籍を持った人で容認をされたのは、親泊那覇市長は確かに社大党に入っていたはずなんです。これを承知しながら那覇市長に。私も八年間後援会の副会長をやつたことがあるんですよ。これはもう非常におめでたい人でもあるが、また包容力がすごくあつて、保革を越えた人でしたから、もう十何年も務めることができましてけどね。

## ■「西銘県政の評価」

○櫻澤 誠

そうしましたら、続いて「西銘県政の評価」についてお願いします。

○石川元平

少しは触れてきましたけどね。私として、これは保守県政の中でかなりいじめられた側です。いわゆる一番いじめられたのは教組でしょうね。相手はよく知っているわけですよ、ツボどころ。今まで支えてきたその組織で、まずそれを何とかどう抑え込むかという。

「沖繩の心とは」と問われて、西銘は「ヤマトウンチュになりたくてなり切れない心」と言った人です。沖繩人としての誇りを持って国家権力とも対峙するのではという期待する向きもあつたけれども、国家権力体制べつたりになつた事大主義者のイメージというのが、これは私の西銘評ですね。

そして八七年の例の海邦国体、沖繩国体ですね。「天皇を招請して沖繩の戦後を終わらせたい」と言ったんですよ。これがね、まず特に我々労働組合、そういう県民の反発を受けて、この天皇の国体になることに対して怒りを持って抗議をいたしました。

那覇市民会館で、あの大ホールで県労協の中に国体民主化要求の対策会議をつくって、私は沖教組を代表してそこに参加していたものですから、そこで天皇の招請まかりならんということ、労働者決起大会をやった時のアピール文は僕のほうで担当して書きまして。その時、天皇の戦争責任と戦後責任を明確に出してアピール、それはある意味ですごく好評でして、これは今日でも、後でまた天皇に對する見方の中で申し上げたいと思いますけれども。

自民党公認の知事として、自民党政府の沖繩施策に乗って米軍基地の固定化容認、自衛隊容認、日米安保体制支持など、日米による沖繩の軍事植民地化に手を染めた人だというふうには。

地方自治の改正に伴つてもう一つ忘れられないのは、六月二三日の慰霊の日、地方公務員法が改正されて、いわゆる週休二日制が実施されるに伴つて、沖繩の慰霊の日も廃止しようということで、正式に県議会に知事提案がされるんです。これは大変だということで、一フイート運動が中心になりましたね、あらゆる集会や学習会、街頭署名運動等々やってきました。県民総遺族という沖繩ですから、当然これは県議会の保守の人たちにも我々の主張はよく理解されました。知事の提案、これはおかしいじゃないのかということになって、審議未了の形でこれはね、廃案になりました。ということなども実はあつて、あの時は評判を下げたと思います。知事に対するね。こんなこともまたありました。二期目の途中に主任制闘争が、これは教公二法の闘いの後に、次いだ非常に大きな長い闘いになりましたけれども、これはもう全国的に沖繩が最後までもちこたえました。押し切られはしました。この段階ですね、私はプロの政治家と言つたんですが、教育のことについて本当によく知っているならば、そこまでやり切れなかつただろうと思うんですが、行政の性に合つた県の総務部長経験者など、新垣雄久とかね、池田光男とか、高良、こういう人たちを教育長に持つてきたんです。教育の専門家じゃありませんから、ある意味で知事の意向を受けて学校現場に對する管理体制は何でもやってくるわけですよ。これに反対したけど、やつたら処分等の弾圧を受けました。こういう繰り返しで、我々からすると沖繩の自治をかなり、いわゆるブレーキをかけた一番の人じゃないかというふうなその思いですね。

## ■「西銘県政の評価」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。おそらく最後の教育長の関わる話というのは、後の主任制闘争の中で出てくる話だと思つたので、そこは

ちよつと今は省いていきたいと思えますけれども。

西銘県政のその基地問題への取り組みというか、対応の話ですね。野添先生の御専門なので、私が余り色々言うことではないんですけども、西銘さんが渡米をして、整理縮小を要求する。要するに基本的に安保は肯定するし、基地の受け入れを別に拒否するわけではないけれども、整理縮小はしてくれという立場でアメリカに渡って色々交渉したという事実があつて、そこについてはどういうふうにお考えになりますか。

#### ○石川元平

例えば今でしたら、伊波洋一市長が、市長ですけれども行つて、大田氏も行きましたね。行つた時はかなり県民的な論議、一応、ただ県知事としてのお考えだけじゃなくて、もちろん県民に対する政策があるわけですけれども、いろんな再確認をして、それを引つ下げていくというふうなことの印象、市長の訪米の何かでもそうです。帰つて来てからの報告会なども。そういうことがまるでなかつたという感じですね。ですから、これはもちろん政府のある意味で意を体して、その範疇ですか。彼は整理縮小を言ったかもしれないけれども、安保管認だし、今のこの現状を否定するもんじゃないうこととを、これは県民の期待どころじゃなかつたような記憶ですね。

ほかの例えば大田知事などが行つた時などは、逆に沖縄の当時の野党、そして日本政府、外務省などはアメリカの国務、国防などに対して会わないようにとかね、世論の高揚に対しては。こういうところは逆にやっているんですよ、日本政府が。これは事実としてこういうことがやられていっているんです。邪魔をする。自ら行く時は日米のその合意の範疇でということですから、行く前も後も県民に対してのこういうことを持つて行くんだという、帰つて来たらこういうことをやってきたんだという、まるで印象に残っていないですね。当然、我々はそういうあまり期待していないというふうなことがあるんですけども。

#### ○櫻澤 誠

そもそも印象としては、まやかしいとか、そういうような。

#### ○石川元平

要するに政策、我々県民、知事選挙などではこういうことを並べてやっていますから、これ責められますから、ちゃんとかうやってきたという実績づくりの、そういうことぐらい。本人もある意味でこれであれば困るぐらいのそれがあるわけですから。すぐ失業、雇用問題などと絡ませましたのですね。保守県政は今でもそうですよ。こういうことで絡ませたので、いわゆる急激な基地の削減はだめだとかという。うまく政府がそれに乗つかつてくるわけですよ。

しかし、もう現在だったら中々そうは言えませんよ。堂々と那覇市長などが新都心は一八〇名しか働いていない所に二万を超す雇用効果が出て、経済効果もこれだけだということなことを具体的に総領事の前で堂々と行って、総領事もそうですと認めざるを得ないような状況に今ありますからね。那覇市長は知事当選させた時の後援会の会長ですよ。という、これは仲井眞県政だって、あるいはまた県議会が、普天間などもこれが解放、撤去された後に発生する雇用効果とか経済効果なんていうのは一応出ていますよ。ですから、経済と雇用問題では基地問題、彼らはちよつと話しにくい。争点として、中々。しかし、軍雇用員で八〇〇〇名前後いるわけですから、すぐ整理されてはという。すぐは整理できるはずはないけれども。だからなぜ僕などよく選挙の街宣などで、基地はむしろ沖縄の経済生活を圧迫をし、県民所得などにとつてもこういう影響を与えているんだということでききも話しましたが、七四%の基地があつて、基地が経済振興に寄与するならば、県民所得も全国平均の少なくとも上、行つたらんといかんじゃないのかという。これ本当は正論だけれども、そういうことは彼ら今やりにくいはずですよ。保守の側は。現在も具体的な例が美浜だとか、あちこちにたくさんありますもんね。解放された後の経済効果、雇用効果というのは。

#### ○高橋順子



この時期、西銘県政が続いていったと思うんですけど、一般の人々の暮らしの中で、実際の生活がよくなったみたいなイメージは、培われたんでしょうか。

#### ○石川元平

特に、復帰して、これは革新、保守を区別して、復帰してよくなったのは確かに、いわゆる学校ですよ。道路、港湾、目に見える。それは確かによくなっていますよね。復帰して一番よかったのは何かと言ったら、自由往来ですね。パスポートあったのが。これはもう誰でも評価するわけ。復帰してよかったと。だから、これ屋良先生が非常に気にしておったんだけど、ああいう形になって、かなり若い人たちが問われるんじゃないか。復帰してまじったという世論が多くなるんじゃないかと心配しておられた。結果としては、しかし、ずっと上がっているんですよ。今でもね。問題あるけれども、復帰はよかったという評価なんです。世論調査するところ、ところが、やっぱり屋良は非常に心を痛めましたよ。願った復帰にならなかったからね、これはかなりある意味では追及されているわけですよ。私を含めて。僕もいろんな所に引っ張り出されて、復帰推進論者として。屋良のかばん持ちをしたということなどで、本当にあの復帰がどうなったか、責任問われることもありますよ。復帰をおおったということだね。ありますけれども、じゃあ、しないでどうなっていたのかと。タイムス、新川氏などを含めて、七〇年代の日米の対応がはつきりしてからなんです。反復論者のそれはね。いわゆる六〇年代のそこからどうという話では実はないんですよ。だもんですから、ある意味で批判は非常にしやすいですね。また僕はある意味で非常に釈明に時間を与えてくれてありがたい気持ちで、色々言い訳もしてきますけどね。

#### ○野添文彬

櫻澤さんがおっしゃられたように、西銘はこの時期二回訪米して、たしか普天間基地の返還を要求しているんですよ。そういう意味では、九六年に普天間の返還問題の始まりとして位置付けられなく

はないと思います。ただ問題なのは、なぜこの時期に西銘がアメリカにわざわざ行って普天間の返還を求めたのかという、時代状況というのがわからないんですけども、当時、この西銘がこう支持率を低下させていって、何かこの県内の基地返還要求に応じていく必要があったとか、あるいは、当時の沖縄県の中で基地問題の位置付け方とか、何かもし記憶にありましたら教えていただければと思います。

#### ○石川元平

西銘が二度目行った時は何年？

#### ○野添文彬

えっと、八十何年でしたっけ？

#### ○石川元平

八〇年後半ですかね。

#### ○野添文彬

八六とか八七とかじゃなかったかな。この時。

#### ○石川元平

八六、七ぐらいでしょうね。そんなあんまり印象に残ってないですね。普天間、九六年のがあんまりにも衝撃が大きくて。いわゆる橋本モントール会談での一月二日でしたか。全面返還という。あの条件については辺野古になっているわけで、あんまりにも多過ぎて。その前に普天間返還に対する沖縄側からの要求はあったかな？

#### ○野添文彬

アメリカも、これは屋良朝博さんから聞いた話なんですけども、西銘さんはワインバーガー国防長官に会いたい、会いたいと言って、途中までは全然相手にされなかったのが、急にアメリカも態度を変えて、ワインバーガー国防長官が会ってくれたということで、アメリカもかなり配慮したようですよ。

#### ○石川元平

ワインバーガーという国防長官いましたね、当時ね。

○野添文彬

アメリカ側にも何か基地問題に配慮せざるを得ない理由とかがあったのかどうなのかということをご存知でしょうか。

○石川元平

アメリカの中ではもう常にそれはあるんじゃないですか。いわゆる海兵隊の駐留そのものに対する疑問を呈したのはずっと前からありますよね。国防、国務省、あるいはもちろんシンクタンク等を含めてのそれはありますから。ただ、西銘が、それがあんまり印象に残ってないですね。

○佐藤 学

最初の国外基地の閉鎖という話が出てきたのが八七年からですね。アメリカのBRACという。

○石川元平

八〇年代の後半です。

○佐藤 学

それはもう、その段階で何かそういう向こうが呼応するような条件があったかもしれないですね。

○野添文彬

それは冷戦後を見据えてということですか。

○石川元平

大きなそういう転機。実は、冷戦にあったわけですよ。当然。

○櫻澤 誠

西銘県政では、「ヤマトンチュになり切れない心」というところも含めて、沖縄の心というか、文化というか、そういう部分がある意味特徴付けるような行政もやっていたと思います。例えば県立芸大であったりとか、首里城の復元なんかも西銘県政の時に本格化していく。ただ、そのどちらも中央との関係性のもとにつくられていくという部分はもちろんあるわけですけども、それは見方によっては県だけではできないものなので、財政的に、あるいは人材的に利用していったというふうにとれなくもないところもある。その辺

の文化に関わっての西銘県政のいろんな取り組みに関して、例えば教組の中でどういう議論がその時になされたのか、批判という形になされたのか。その辺はどうだったんでしょうか。

○石川元平

芸大等々、沖縄文化のそれに対しては、これは反対する立場じゃなくて。こういうことについては戦後の特に学芸会とか運動会、体育祭なんかを通じて、我々ちよつと嘆かわしく思ったのは、やっぱり沖縄文化一体どうしたんだというふうな学校教育の中の位置付けですね。三線の音、全く出てこない。もう今は保育園からパーラーンクーやエイサーをやっていますよ。これ教育カリキュラムなどの位置付けをしっかりとやらなかったということ等ありますが、地域文化そのものに対して、また学校教育はあまり影響を与えなかったということなども出て、こういう反省から何をしたらと言ったら、七四年に初めてね、郷土の芸能文化に限った文化祭やろうということ、那覇市民会館大ホールでね、これをやったんだ。これは大変な成功でした。この象徴的なものが、高教組、各支部から出た物です。宮古、八重山、国頭、地方を代表するようなものを出してね、そのうちの高教組が出したものが、現在ユネスコの無形文化財になつている執心鐘入という組踊ですけどね。あの時、組踊部会が今ずっと続いているんです。

宮城稔という若手。沖縄を代表する四人の中の宮城能造という人がいて、この長男でしたけれども、このいわゆる組踊部会をずっと指導してきて、これを見事に舞台発表したわけですけども、個別的にはこの三線でも師範クラスはたくさんいるんですよ。踊りもそうですよ。この組踊としては、これをセットしたやつです。三線も、踊りも、セリフ。この高教組のそれはパリにも行きましたね。広島や大阪にも行きましたね。県内の学校はほとんど実際、沖縄の文学ということでのそれも教えていますが、実際、それを見せています。宮古や八重山、国頭地方をみんな含めた、代表する芸能文化を舞台発表させました。その一つがエイサーなんです。それ以降、私

は確実に県下に広まったと見ています。見直し、郷土文化に対する価値付けです。もう今では本当に保育園から小学校、中学校、高校まで。今年、卒業式の普天間高校へ行きましたけれども、創作エイサーなんていうかなりレベルの高いエイサーまで今やっています。高校生になるとね、やっぱりさすがと思いましたがね。

私は沖縄戦で打ちひしがれて、石川の収容所、僕らは田井等という名護の収容所に入れられて、十幾つかの収容所に入れられて打ちひしがれている時に、何でもって復興への、いわゆる元氣付け、これができたのかと。やっぱり文化力だと思いますね。実際そういうのが至るところで証明しているんですよ。食べるものも何もなければでも、アメリカの野戦病院の、野戦病院で言う布ですよね。あれの樫の木の棒だと思います。ああいうもので三線の棹をつくっているんですよ。そして、落下傘の糸だったり、あるいはこのばら線だったり、六斤缶というこのぐらいの、これ二つに切って三線のチーガと言いますが、三線の台ね。これで見事にカンカラ三線をつくって、チムナグサ、肝を癒す、心を癒すというようなことをすぐ始めているんですよ。それで芝居もやっています。あの時に幸い生きておったという有名な人たちがそこで、僕等一フィートの映像に出していますが、そこで舞台をつくってやっていますんですよ。屋嘉の収容所で。

もう一つ、石川市の一番中心にあります戦後教育の始まりの城前小学校という所。もう四月から始まっています。このみんながもう家族を失ったり、ばらばらになったりこうやってる状況の中で、又チヌスージというのがある、命のお祝いをしているんです。今非常に見直されていますけれども、小那覇ブーテンと言います。照屋林助の師匠です。嘉手納出身の、本当は本業歯医者さんだけれども又チヌスージ、漫談、これをやってみんなを元氣付けをした。最初は「何だ、この野郎。みんなが悲しんでいる時に」と思ったが、しかし、やっぱり元氣付けられたと。この人はある意味有名になって、かなり本業を忘れて興業であちこち回って、評判も出て、有名な弟

子をつくっていくことになるわけですから。命のお祝い、命ということに対する、ある意味で再発見。

これは慶良間のいわゆる強制集団死の中でもかなりのもうバンバン爆発して、いわゆる集団死をされている状況の中で、日本軍が渡した手榴弾が発火せずに、それをお母さんに止められて、死ぬのはいつでもできるから、すぐできるから生きるんだという。これ吉川という僕と同じぐらいのね、僕より一つぐらいいですかね。彼が校長になって、また平和運動で島のためには頑張っていますけど、渡嘉敷の出身ですよ。彼の一家、助かったのはお母さんのそういう力だと。又チヌスージ、命どう宝ということ。これはもうあちらこちらにあつて、これ通ずるものが戦後ですね。その文化力として継いでいる。

あと一つ、ついでに忘れんうちに申し上げますが、皆さん、興南高校の野球のハイサイおじさんじゃなくて、あれ聞いたことありませんか？ 喜納昌吉のあれはよく聞くんですよ。ハイサイおじさんのあれがリズムでバンバンやって、口笛やって応援にやりますけれども。ヒヤミカチ節、これは平良新助というアメリカ帰りの今帰仁村の出身です。これ有名なまた琉球古典研究家であり、文化人のね、作曲家でもあります。山内盛彬という人の作曲で。歌、やっただのは照屋林助なんです。速弾きでね、本当にこう湧き立てるような心。復興の歌です。「ヒヤヒヤヒヤ、ヒヤミカチウキリ」。この歌詞自体も実は本当にいいんです。平良新助はアメリカの財産は長男に託して、沖縄を元氣付けるために帰って来ているんですよ。こういう作詞して、有名な人が作曲をやって、これが六〇年代の初めの教職員会の総会後の懇親会などでもやんばるの校長などが三線を速弾きして歌っていましたよ。非常に元氣が、勇氣付けられました。

#### ○佐藤 学

登川誠仁さんがね。

#### ○石川元平



照屋林助が始めて、あと登川誠仁が速弾きでまた有名にした。そういう、だから復興への力、これはやっぱり長い歴史的な体験から繋いできた。僕は戦（いくさ）やってどうじゃなくて、国と国、島と島、当時は国のイメージじゃないですが、みんないわる共存共生をしていく、そういう琉球は万国津梁でありますよね。万国と言ったら世界。津梁という意味はかけ橋という意味ですから。鐘の銘文の最初に「三韓の秀をあつめ、大明を持つて輔車となし、日域をもつて唇齒となす」。これは今でも約四〇万の人が海外に皆住んでいるわけで、ですから、そういう根っこをたどっていけば、今、県の博物館・美術館で三線展やっていますけれども、ハワイからの、一世の人たちが持つて行った名器もたくさん来ているそうです。ぜひ見たいと思っていますが、そういう文化力。僕はね、それは軍事力に勝る、それが沖繩には実はあって、今、島言葉にも見られるような、そういうことに目覚める人たちがやっとなってきたなというふうなことで、今、私自身も実際関わっているんですよ。一石を投じてやりたいなと思っている。

#### ○佐藤 学

櫻澤先生の御質問に戻りますと、西銘知事というのはそういったその沖繩の文化力ということを、例えば県立芸大何等の施策にどれぐらい反映させる、具体化させようとしたということなのか、どのような後にその影響があったのでしょうか。

#### ○石川元平

これね、正しくはわかりませんが、僕ら、そういうことはもう積極的に運動したという記憶はありませんけれども、これに口を挟むようなことは全然いたしませんし、これはやっぱり多くの人たちが、これはもちろん保革を越えたそれですよ。さつき言った根っこ。しかも、文化人などの心ね、掴んで実現したものだとも思っていますよ。今、芸大で教授、三線弾きで島の後輩が比嘉康春君という、大山に住んでいるんですけどね。これ東京の大学などに行つてこれを教えていますが。そうね、たくさんの若手たちは今

卒業して、この子たちが組踊の若手の担い手などなって、今、国立劇場などでも頻繁にそれやっていますから。その意味ではいいことをやったと思いますよね。確かに。これはみんなが待つてましたというふうなことだろうと思いますよ。

ただあんまり、結局わからんのは、家元とか会主とか何とかという、こういうことのがあれが大和化したなという、これはあんまり感心しないようなことも見られますけどね。沖繩でもね。

### ■「主任制闘争」

#### ○櫻澤 誠

「主任制闘争」のところを引き続きよろしくお願いします。

#### ○石川元平

教公二法、これはもう身分法を名乗つて実は教職員を縛ろうとした、特に平和運動、復帰運動等に対してそれを取り締まろうといったことに対する、あれが戦後最大の闘争になって、六七年から七二年まで、その法律は沖繩にはなかったわけです。そういう状況にあつてもただ慢心したわけじゃなくて、責任感じて、かなりいろんなことをやって、行政がやらなかったことまでたくさん実績、戦災校舎のあれからすな、義務教育半額獲得のそういうものまでやってきたわけですけども。

一方、学校現場の雰囲気は占領体制と言われながらも、自主主体性、創造性が満ち溢れていたという。よく我々は当時の教職員会のいろんな文書の中に、こういう言葉がよく出てきます。これは屋良朝苗が進んでこういうことをまた言ってきたんですね。

どういうことかと言いますと、校長、教頭、今言えば管理者というもの。だから、この主任制も、主任も中間管理職なんです。こういう体制はなかったんです。復帰前も校長もいるし、教頭もいるし、あとは教員ですね。いますけれども、学校現場にはまた給食の

現業の方もいるし、その他の現業の方もいますけれども、これ沖縄ではオール教職員会にしていたわけですよ。教員組合だけじゃないんですね。教職員組合だったわけで、その中の雰囲気というものは、もう実にこれはもう今からしても羨ましいぐらいの現場の体制です。新採の人が来ると、ちゃんと先輩たちがうまくいろんなことにもちゃんと進んでやってくれる。これがもう全体としての繋がりにもなっていて、我々はいつでも、学校現場でも、どこでも自由にまた入っていつて懇談会もやるし、また何も聞き取りもします、調査もしますし。こういう体制に合った沖縄の教育現場に、この全くなじみのないようなものが撃ち込まれようとしたのが主任制なんです。

直接的には中間管理職ですね。この主任の中にもいろんな主任、教科主任、学年主任、教務主任等々を置いてですね、要するに学校の教員の数は一定限度しかないのに、もうこういうふうなことなどで責められると、あとは任務を与えられるわけですよ、この主任は。任務を与えられると、結局、これはね、今にずっと続いていて、一番自由だった沖縄でこういうのが持ち込まれたもんですから、その一番ひどいショックを今なお僕は受け続けていると思いますね。他のどの県よりも。この証拠は何か、証明するものとしては、いわゆる心身の異常を訴える教員の数が非常に多いということですよ。これは統計的に。

そして、その中でもいわゆる精神的なわずらいでもって休職をしている数がまた断トツ多いということです。これどこから出てきたのか。やっぱりその後に出てくる校長、教頭採用試験等の強行とか色々ありますけれども、一番の問題はこの主任制度だと思っただけです。わざわざ金をやってね、職場を分断をし、これまでであったとは全く変わった様相を呈して、いろんな職場の雰囲気や、こんなことをよく受けますね。子供の事件、事故や何かあると教職員集団の管理責任を含めて問われますけれども、実際の学校現場の教員の実態はどうかと言ったら、朝来ても子供とすぐ接する。そういうこ

とじゃなくて、家に持ち帰ってそのまま学校に来るわけだけれども、いわゆる職員朝礼みたいなのがあって、そこでも自由な発言もできないんだそうですね。ましてや組合の関係の、分会のちょっとした連絡報告なんて今全然させない。もう物を言わない状況の、一方的なこういう伝達、管理者によるそういうものだけがあって、授業にさっさと行って、今度終わって帰って来たら、子供らと何々するんだとか、ましてや遊ぶんだとかという、それじゃなくて、帰って来たらすぐテーブルに向って、もう今は便利なあれがあるわけですね。それに向かって事務処理している。周囲の対話もない。何かちよつとという、先輩に何かなくてもそういう言える雰囲気もないという。こういう、ある意味では息詰まるような状況の中で、結果としてあ、あいう、ある意味であれワーストの記録ですよ。全国的に見てもね。休職者の率、しかも精神的なものをはじめとした。

ということ等々が実はあるもんですから、私は一番このよって主たる原因は、こういう管理体制の強化をもくろんだ、この影響がもうもろに、ある意味で無菌状態みたいだった沖縄の学校現場に入り込んできて。非常にそういう衝撃を与えた制度だというふうには思っています。そういうことなもんですから、組合としてはもちろん全国でやられている日教組の方針等々も入っているいろんなことをやってきましたけれども、これを手当も支給するというわけですから、要らない手当を支給する。

押し切られる前に県教委交渉とか、教育長交渉とか、委員個別の要請だとか、あらゆることはやって市町村別にも色々こうやってきましたけれども、最後は市町村に移るわけですから、全国的にはある意味で最後まで頑張ったけれども、結局押し切られて、実態としてそういう制度の趣旨が生かされたような状況になっっている。支給される手当を返還をするという、私などの委員長時代、こうやってきましたけれども、自分の懐に入れるんじゃない、これを拒否する、返還をしようという、あんまり成績は上がっていないようです。あれは本当はまじめに全部でこう出してこうやってい

けば、かなりの金になるんですよ。この金を新しい子供たちへ教育のためにも、組織のためにも本当はできるんですね。一部でき、この金を支部に還元して宣伝車を買ったとかね、あるいは会館建設の足しにしたなんて、こういうのは実績としてありますけれども、本当はもう少し対抗するものとしては有効にこれをやっていけば、もっと対抗する、実りある運動もできるはずだと思いがら、今日に至っています。

## ■「主任制闘争」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。主任制を巡っては、ずっと他府県が実施されていく中で、最後の未実施県になるわけですよ。その際に、中央の日教組のほうも沖繩を是が非でも阻止しようというので、かなり力を入れたと思うんですけども、その際の日教組側とのやりとりとか、影響力というのはどうだったのでしょうか。

○石川元平

日教組は随分専従役員を派遣して支えてくれましたし、あるいはその闘争の結果から出てくる処分等々については、これを日教組からのいわゆる闘争支援というふうなことで、財政的な支援等も受けても来ましたし。ただ、これはまた後でちよつと組織問題にも通じて来るんですが。

かなり、厳しいやりとりが教育長の前で。場所はですね、沖繩配電ビルという一二階建ての。あれみんなもう壊されて新しいビルが建っていますけどね、三階ぐらいを県教育庁が占めておったんですよ。沖配ビルの前、中、これはもうある意味で一〇〇〇人を超える、我々この闘争の大事なそこを占拠してね。あるいはまたもう徹宵交渉などもね、教育長とやったり、そういう場に日教組の代表に来てもらったり。色々やったけども、最後はね、行政側は秘密会議で

すよ。泊の船員会館の会議室でもう決まったという。決まったということがぱーっと流れるわけね。これをまた撤回させるとか。個別の委員への取り組みを決めてね、誰それは首里のどこに住んでいる。いろんな個別の交渉をみんなやって、色々やりました。

この時の教育長は、個人的には非常にいい先生なんだけれども、元普天間高校の校長上がりでね。けれども、やっぱり人のよさだけでは防げないんですな。この本人が自分の手記を送ってくれましたよ、私に。選挙すると革新の応援するんだ。だから、こういう人でもこうせざるを得なかったんかなと。前田功というんですけどね。当時の教育長。

○櫻澤 誠

やっぱり七五、六年ぐらいから本格化していく中で、阻止しようとすることから言えば決定的な打撃になったのは、やっぱり県政が変わったという部分。

○石川元平

ええ、決定的ですね。それと後でちよつと触れられるかもしれませんが、組織内部でかなり問題がありましたね、進め方で。執行部はかなりやられました。同席した日教組もかなりやられました。いちいちちよつと言えませんがね。あといろんな組織問題の中でも影響出てきますね。これがある意味で強化にはならない方向にも行くんですよ。闘いそのものの趣旨はそうじゃなかったんだろ。けれどもね。進める過程の中で色々起きました。日教組の幹部がある徹宵交渉、同席をし、次の日は帰らざるを得なかったのかな。あるいはその場から、「暁の脱走」なんてことを言われておりました。「暁の脱走」というのは終戦直後の映画のあれですよ。山口淑子と誰でしたかな。池部良だったか。

映画のタイトルと同じように「暁の脱走」、徹宵交渉してますからね。そこらいろいろゆる逃走をしたと。だから「逃走本部」だなんて揶揄される。色々ありましたよな。



## 「教科書問題」

○櫻澤 誠

それでは引き続きまして、「教科書問題」ですね。

○石川元平

これは今もある問題でもありますが、一番の沖縄における発端は八二年六月に高等学校の歴史教科書問題の日本史で、文部省が不当に介入してきたという。具体的には、南京大虐殺と三・一朝鮮独立運動の関係の記述操作がありましたし、朝鮮侵略に侵入、進出等々の書き換え、これが中国、韓国でうんと問題になった。沖縄では住民虐殺の事実についての修正と削除要求が文部省からなされて、この調査官のコメント等で、『沖縄県史』は一級史料ではないなんというふうなことの発言が出て、大変な怒りを買ったということがあります。あと一つ、ひめゆり学徒に関する記述にも殉国美談に歪曲をした。

摩文仁にひめゆり平和祈念資料館というのがあります。これを直接建設しようというきっかけ、つくったの実はこの教科書問題なんですね。まだいわゆる定年になっていない方々がかなり辞めました。というのは、学友たちの思いをね、こういう形で歪められて、自分たちは学友たちのために生かされているというふうな強い思いを持って、教壇にも立ってこられた方々でありましたから、何人もの方々が定年前に学校辞めて、この資料館をつくらうという話になって。これはまた沖教組、組織としても全面的にバックアップをして、激励をしていきました。そんなことなどがあって、ひめゆり平和祈念資料館は当初の予定よりもずっと上回るこの見学者、来館者があって、これは場所も第三外科壕のすぐ裏ということで立地もよろしいんですね。こういうことなどもあります。

あと八八年に家永教科書第三次訴訟というのが、これは沖縄で出張法廷が取り組まれました。主に三つのことをですね、裁判に関わ

る一番大事な四人の沖縄戦研究者たちを立てて、いわゆる出張法廷で証言をさせた。これは県内外にかなり大きく新聞、テレビ、その他のあれでアピールされたと思います。大田昌秀、安仁屋政昭、それから金城重明、山川宗彦です。この四名が証言をしたと。これは記録にもなっています。

合わせて、県下各グループごとのシンポジウム開催をいたしました。この出張法廷が開かれることで、沖縄戦の新たな証言を発掘しようじゃないかという、そういう契機にまた実際になりました。私は北部担当したんですけども、向こうでシンポジウムを開催し、塩屋湾の片隅に、今、白浜という所があるんですが、渡野喜屋という、三〇名余りの住民が日本軍の手榴弾によって虐殺をされるということ等を含めて、またその近くで避難民が日本軍によって斬首されるというふうな、こういう事例等々がたくさん出てきましたね、これはもう県下伊江島や南部や、中部、あちらこちらでそういう発掘、新たな証言発掘の機会にもなりました。

あと一つはですね、世界の教科書展を実はやっただです。現在、今、牧志にジュンク堂というのがあります。あれがね、前は確かダイエー。

○黒柳保則

ダイナハですね。

○石川元平

ダイナハか。あって、ワンフロア、広いフロア使えたんですよ。そこで世界の教科書展という、アジアを中心とした諸国の教科書展示をやって。国内のものについては、明治からの、沖縄県にならな以前からのね、そういう教科書展を含めてやりました。

そうしたらびっくりすることが実はあってね、「沖縄の土人」と書いてあるんですよ。土人でいいんだけどね。あえていわゆるこっちは日本じゃないぞというふうな見方で書かれているわけ、全体を通してね。ですから、武力併合をしたあれがよくわかりました。ハブ、毒蛇がいるぞと。これに注意しろと。駐留する日本軍に対する

ね、そういうふうなこととか。

あるいは沖繩の人間は着物の着方もね、外から帯を締めているのわからない。ハマチドリ、古典創作舞踊で正しいのがありますけど、チジューヤーとも言いますが、いわゆる紺のカスリを着てね、紫のハチマキ巻いて、しなやかに踊る、もうすごい踊りがありますけれど、あれはね、帯が見えないんですよ。ウシンチーと言って、内帯をしたところにこれを押し込んでいます。そして、高温多湿な所ですから、袖に風を通すんですね。体が蒸れないと。野良着でもそんなことを挿絵でやっているわけですよ。いかにもおかしいですよ。しかも、頭の上に何か荷物をこうやって。こんな格好の挿絵を載せたりね。

もうとにかく本土と違うような、そういう記述にみんななっていて、私は現在も続く構造的差別と言われる根っこのは、やっぱり明治ごろから教科書の中で形付け、意識付けられて、アジア太平洋戦争で戦後を迎えた。全く戦災を受けていない所もあるわけですよ。全国的に見たらね。一定、数年の占領期間があったけれども、あの名残りがまだ払拭されていない面がかなりあるな。これを復帰オールドで六四年に北海道と東北に行きました時に、組合の幹部たちに会っているんですよ。だけれども、私ウチナンチュオと思っていないですよ。沖繩はみんな土人、玉砕して犠牲になっている。ヤマトから沖繩に行って、この運動をしている人間と思っているわけ。「私、沖繩の土人ですよ」と言ったら、みんなはもう恐縮しておいたけどもね。「ハワイのどこですか？」こういう質問、実はたくさんありますね。

こういうの教科書開けば余りにも多いもんだから。あと一つ音楽の、これは明治一四年の一八八一年の文部省の小学校検定済みの唱歌で、「蛍の光」、ご存じだと思っけど、この四節の中にね、「千島の奥も沖繩も 八洲のうちの護りなり」と出てくる。去年の年末、大みそかの紅白の締めは何でしたか？「蛍の光」ですよ。「蛍の光」を歌って恥じない。確か一番だけではあったんだけど、僕

らにはもうすぐ四節も思い出す。そういう拡張主義、日本帝国主義のその歌ですよ。

だから、そういうことを含めて、今の竹富のあの問題等を見ますとね、何が地方分権か、何が地方自治かと。今騒がれている問題、以前の基本的なことがなぜ問われないんだと。そういうことで、来るんじゃないかと、島田教育長を呼び出して。県教育委はね。委員長は女性なんだけれども、沖国大の富川（盛武）先生もおられるわけ。あの皆さんはね、いい合議しているわけですよ。屈しない。沖繩の知恵を出して、沖繩ではジンブンと言いますがね、ジンブンを出して対応している。竹富とも連携とって。西表を含めて、小浜とかたくさんの島々を集めて竹富町なんです。これを石垣と与那国で合意した、あの合意に従わせろというのは違うんじゃないか。全体協議会の中ではちゃんと確認された事項、それを義家（弘介）とかという政務官などが、教育委員会の最中にFAXなどで流しているんですよ。こういうことにやりなさいというふうなこと。それを守つたのが今の教育長の名は玉津です。ちなみに世界の教科書展開催をした世話役をやったのが、新城俊昭はわかるでしょう。宜野湾高校定年迎えて、彼は今沖繩大学で。いわゆる我々の期待を上回るようなほど頑張っていますよ。たくさんの副読本、教科書も出しています。一緒にやったのが、玉津なんです。県のね、県教委にもいて、平和祈念資料館の担当もしたんですよ。たくさんの講話をしている。玉津（博克）の名前まで書きました。現在の石垣の教育長です。

例えば私はできなかったんだけどやりたかったのは、音楽でもいいんです、沖繩の。わらべ歌だけでもなくて、奄美まで含めた当時の琉球の。今、例えば古典やっている、民謡やっている。奄美のがたくさんあるんですよ、いっぱい。これ含めて、子供らでも教えられるような。沖繩メーカーがたくさんありますのでね。学校でやろう、音楽の冊子として。

あと一つは何と言っても、島言葉ですよ。要するに、国連が認め、ユネスコが認めた琉球諸語、もう今たくさんこういう論議は深

まっていますから、県としては頑張っているんだ、地域でね。ところが、一斉に全県下でやられるための教育課程をきちっと位置付けして、副読本までつくらんといかんです。少なくとも小中高に向けてね、それを。だから、そういうことなら私は本当はやるうとしたんですよ。不発に終わったけれども、今はまだこれを、この思いはあるから、あちこちにまだこのメッセージはずっと送り続けますが、こういう教科書問題は沖縄のもっと独自のやつを使って、これこそがと言われるようなものを本当はやりたいなと思っっているんですよ。ただ、向こうから攻撃仕掛けられたものを防御するだけじゃなくてね。いや、これはこの後、僕は近い将来できると思っていますけどね、今そういう機運は大いにありますから。

#### ○佐藤 学

名護市史の統計集に引用されている所では、一九〇六年の当時の琉球新報の記事があつて、それに沖縄では歴史教育がなされていないと。国の教育、日本の教育をしなきゃいかんという話で、結局沖縄の子供たちは歴史のない、歴史を学ばない、歴史がない子供たちになっているということが書かれていて、今そういうことをよく議論をするのですが、ずっと同じなのかなということをおもいました。

### ■「教科書問題」の質問・応答

#### ○櫻澤 誠

八二年に教科書問題が起こった時に、沖縄側で一斉に批判が起こる前段階として、七〇年代に県の平和祈念資料館の、旧館のほうの展示のやり直しの議論がありますよね。

#### ○石川元平

七五年、開館したのね。

#### ○櫻澤 誠

ええ。

#### ○石川元平

平良知事時代。

#### ○櫻澤 誠

当初の展示内容というのは、軍中心で、それを改めて住民の視点から作り直していく、そういう作業がありましたけれども、教組の動きも含めてどうだったんでしょうか。

#### ○石川元平

現在の沖縄県平和祈念資料館、前のものの面積にすると約一〇倍ですよ。前の平良知事時代の、あれも名前は沖縄県平和祈念資料館でしたけれども、旧館と呼んで、もう今はありません。七五年にオープンしましたけれども、さつきありましたように、いわゆる戦争、砲弾、それから軍隊が着用した軍事に関するような展示があつて、沖縄戦の何を伝えたいのかということはかなり論議があつた。

私も大田県知事の頃、今の新しい平和祈念資料館の建設推進委員をやったんです。僕などは基本構想を担当したものですから。随分論議をして、一八〇度転換をしたのは、住民の視点で今度はつくるうと。じゃないと後世の批判に耐えられないという。だから今度の新しいのは徹底した住民視線の、全ての展示を含めてですよ。あの構造自体がみんなそうなっていますけれども、その中でも展示の段階で今度の新しいものもね、いわゆるガマの中で陸軍兵が入ってきて、がたがた震えているのに、日本兵に対する怯えなんです。ただけれども、これが入り口のほうに向けさせられたという。よそから守られているのか、全然違うんですよ。克服されていません、まだ。

こういうことも実はありますが、県史を出す過程でのいろんな収集もあるし、それから沖縄では他県以上に、ほとんどの市町村でそういう沖縄戦の戦後史ができていますよね。これは非常に重要だと思つて、所によつては字誌ができています。字誌の中でも沖縄戦関係が、ある意味では非常にページ数を占めていると。こつちも



写真集も出ています、宇宜野湾のね。等々を含めて、ある意味ではこういうものが。文部省は否定をしたわけだけれども。

さっきの資料館展示の段階では、やっぱり戦争記念館じゃないのかという批判が出たことは事実です。それと今の資料館の前にね、ある日突然、何年かな、もう二〇年ぐらい前になりますかな。日本軍のいわゆる特攻艇ですよ。あれを展示したことがあるんです。随分錆びていたけれども、特攻艇。爆弾を前に積んで、いわゆる普通の魚雷は無人ですよ。ところが人間が乗って敵艦にぶち当たるといふ。それとともに、戦車だったかな、展示されたから、これにはもう大反対、怒りましたよね。あれは間もなく撤去されて、今あの前は何にもない。

ついでにちよつと申し上げると、前の資料館では沖縄戦の犠牲者数二〇万余となっていたんです。今度の五〇年で我々がつくった今の新資料館では二〇数万人というふうな犠牲者の数。これはその後の調査研究、その成果を、ほかのものはほとんどいじくりませんでしたけれども、設立の理念の中でこの数字だけ変えました。これは全会一致で。もちろん専門家もみんないる中でしたので、そういうことなどで住民の戦争体験を主に、今展示されているのは一部ですけれども、たくさん映像が撮られ、それから証言がたくさんとられているんですよ。このごく一部が展示されているというふうな状況ですね。

#### ○櫻澤 誠

家永教科書裁判の出張法廷に合わせて、新しい証言を発掘していく時に北部を担当されたということでしたけれども、それは具体的な作業の仕方としては一軒一軒回っていくというような形なんですか。それともある程度、情報を得た上でピンポイントで聞き取りに行つてという。

#### ○石川元平

いつ行くか、この教科書裁判と絡んで沖縄戦関係のシンポジウムを開催するというを一応、組織が各学校を中心にして地域にも

宣伝をしまして。すぐ発掘などということではなくて、こういうメッセージを発したことによって、各地域で新しい証言が、これは全県下であります。こういうことがたくさん出て、これが記録にもなっています。これに加えて、さっき申し上げた市町村単位、字誌単位みたいなものでうんと出てきているような今の状況にありますから。

ですから、いわゆる政府の沖縄戦に対する、まだ沖縄県の高校歴史教科書は全く応じていないけれども、確信を持ってこっちは今そういうことを信じて。

例えば広島では、原爆の日ね、一斉に休みにして喪に服するといふあれはないんですよ。学校、みんな出校日なんです。これは僕、広島に行つてきましたけれども、沖縄の慰霊の日の休日を、条例を勝ち取つた話をしましたらみんなびつくりしていましたけれども。ここでは全県的なものもやる、それから学校別の同窓的なものもやるんですよ。市町村がやるものがあるし、各地域でやる、それをみんな含めての喪に服する日なわけで、そこは非常に徹底をしています。我が家でも妹一人亡くしましたけれども、その日はちゃんと一定のお供えしてやりますので、仏壇にね。こういうことは各家庭でみんなやられているはずですよ。これはある意味で非常に強いですよ。こういうことは、伝えられていきます。

#### ○櫻澤 誠

ほかに質問はありますか。

#### ○高橋順子

一九八二年の教科書検定問題も全国的に注目されたと思うんですけども、この時にも八八年のような地域の戦争体験の掘り起こし作業を沖教組でされたのでしょうか。

#### ○石川元平

これは沖教組の中に教育研究集会というのがあります。その中に平和教育分科会というのがあって、ここは基地問題と沖縄戦が主ですけれども、個別にかなりやられていますね。

○高橋順子

はい。

○石川元平

全体としてどれだけ徹底したかは、かなり地域ではある意味で主導して、久米島でも、やんばる、中頭でもこれは続いているというふうに見ていますが。それから一フイート、実は担っているのも、教組がある意味で中心だったんですよ。だから福地と私が代表、副代表になってやってきました。これは地域で上映会をやる時にも必ずいろんな問題を提起をし、そして皆さんは自分たちの、映像の中にあれが出ていないかとか、いろんな関心を持って、できるだけ地域の場面を少し、全体の記録映画、仕上がったものとは別に、五〇時間を超えるフィルムの中からめぼしいものは発掘をして、何分ぐらいはできるだけこの地域のコマが探せるものはそれを見せたりというふうな、こんなことを含めてやってずっと続いてきましたので。こういうのは必ず見た人たちはこれを広めていきます。我々はまたそういうお願いをし、負の財産であるけれども、後世に繋いでいくためにはこれをどうするかと。

今ひめゆりではね、後で出て来るからいいんだが、若い学芸員たちを育ててうまくやっているんですよ。もう高齢化してね、一番若い人でも今の館長、島袋淑子さんが八五かですからね。

文化財指定、戦争遺跡を一番早かったのは南風原の野戦病院跡ですね。壕の中で二〇号というのがあります。これは公開されています。前に憲法九条の碑もありますけれども、そこも文化財指定されています。最近新聞に載ったものでは、渡嘉敷島の特攻艇秘匿壕ですね。それが戦争遺跡指定されています。こういうのがあちらこちらに実はあるんですよ。これをもっと増やしてということ、もつと代表的なものには実は三二軍壕なんです。それが今、県政との間で展示の問題を含めてちょっと問題になっているんです。これは県政をかえればできることです。大田県政、三選の後、確実にそこは大事な語り継ぎの場所にしようという、戦争遺跡にしようという、

そういう話まで我々はやっていましたのでね。

○高橋順子

はい。

○石川元平

本当に沖縄文化、古都の真ん中。しかもヤマトウで言えば宮城の地下に司令部をつくるようなものだから、本土決戦を決意して、宮城や、古都奈良や京都に司令部を構えますか。こういう問いかけを僕はたまにやったりするので、そうすると、「あー」って。沖縄でやったんですから。だから戦前、二十幾つかの国宝があるんですよ。もう今は一つもありません。復元はされたけれども、国宝にはなっていないですね。僕も元々は祖先は首里なんです。だから愛着があるわけで、家系図などが残っているからね。

○高橋順子

はい。

○石川元平

そういう我が祖先の墓は首里の向かいの識名という所に古い墓がありますよ、今でもね。そういうことを含めてもやはり色々あります。

○高橋順子

ひめゆり平和祈念資料館が建設されて、そこで先生方が色々お話される機会がとて増えたと思うんですけども、資料館ができる前もひめゆりのお話を、学校現場で盛んにされていらっしやったのでしょうか。

○石川元平

これは非常に少なかったようですね。直接色々皆さんのお話を聞きする機会がありましたけれども、例えば最初にできた今井正の「ひめゆりの塔」、あれを一般公開前に見せられたわけですね、試写会。そうしたらまず第一印象、「自分たちの経験はそんなものじゃない」と。大いなる反発をして談判したそうです、今井正監督と。やったけれども、要するに芸術性をアピールされて、自分たち

の本当のひめゆりの戦争体験とは違うんだなんていうことで、もう涙をのんだという話を聞かされました。あれを実際に見たらそう感じます。例えば水浴びしてはしゃいでいる姿などがあつたりね、踊りのそれがあつたり、こんな状況ではないんです。とつてもそんなものじゃなかったと。

後で話しますが、三月に卒業を間近にして動員されたわけよね。あと南風原で三角兵舎で一応卒業式をやったことになっていなくても、その後、第三外科壕、今有名なのは第三、近くに第一がありますけれども、一八日に解散命令ですよ。六月一八日といつたら、いわゆる第一〇軍アメリカの司令官が糸満真栄平で彼は戦死するんですね。もうアメリカは見境もなく攻撃を仕掛けてくる。解散命令出たら、こちらから出て行けなんです。安全な場所だといつてガマにみんな逃げているのに、ここから出て行けなんです。ですから、ひめゆりの犠牲の大半は一八日以降ですよ、ガマから追いつて後。だからいわゆる戦争、軍隊のそれを考える意味においては、そこらを十分知らないよね。

### ○高橋順子

はい。

### ○石川元平

全然これはもう、いわゆる殉国美談にされて、尽してどうのこうのしたという、そういうことになりかねませんので、そのことに関しては栗栖ですね、統合幕僚会議議長が、これは石原先生から聞いたんだけど、「軍隊は住民、国民を守る存在ではない」と。「国家体制を守るのが軍隊の任務」とはつきり言った、参院選に出た彼が。記録に残していると言うんだよ。だから本質はそれですよ。これは僕は沖縄戦で体験をしたわけで、軍隊は住民を守る存在ではない。軍隊のいる所が戦場になるんですよ。沖縄はまさにそうですよ。何かあつたら必ずこういう戦場にされかねない。だからそれを沖縄戦から何を学ぶかという場合には、今振り返ってどうするべきかということだろうと思っっているんですよ。

### ○高橋順子

八八年の時にシンポジウムを開催する運びとなったのは、家永裁判が、出張法廷があつたと思うんですけども、それまでの八二年とかとは違って、なぜその時に県内でシンポジウムをやるうという話になったのでしょうか。

### ○石川元平

これは個別にはそれぞれの中で沖縄戦を体験しているんだけど、やっぱりそれをもっとまとめて、再度発掘する、そういうチャンスにしようという、これはきつかけになりましたよ。しかも四名の専門の先生、沖縄戦研究者の方々が実際に証言をしてくれたので、これはまた沖縄のマスコミが大きくそれを報道してくれたということなどがあつて、かなり関心も広まっていつて、今までひめゆり、もちろん男子の健児隊もいるんだけど、口を割らなかつた人たちがやっぱり固い口を開いて語るようになった。

ただ現在はね、もう本土のほうから要請があつても皆さん、ほとんど行けないそうです。いわゆる沖縄戦の講話をお聞きしたいということに依頼があるようですが、ほとんど応じられないと島袋館長はそうおっしゃっていますね。だから今、一生懸命若い皆さんにそれを受け継いでいるところですよ。ということで、学芸員の皆さんをそれでかなり強化されているようです。

### ○高橋順子

このシンポジウムの記録は沖縄組が発行しているものがあるんですよか。

### ○石川元平

おそらく沖縄組は記録の中にあると思うけれども、これをまとめたものとしてはなかったんじゃないかな。僕がやった北部では、まとめた記録にはなっていないと思います。

### ○高橋順子

ありがとうございます。



## ■「日の丸・君が代」闘争（日の丸掲揚運動への批判も含めて）」

○櫻澤 誠

そうしましたら、「日の丸・君が代」闘争」についてお願いいたします。

○石川元平

復帰前、日の丸を使って、相当効果があった闘いをやってきたんですけれども、六五年、佐藤来沖の後から次第にそういう大衆闘争の中から、学校現場の中からも日の丸が消えていって、現実はどうほとんど皆無の状況。ただ現在は学校の入学、卒業式などには日の丸、これはちゃんと中央に掲揚という形でやられています。

八五年にですね、きっかけは文部省の悉皆調査ですよ。これは二年後の沖縄海邦国体を視野に入れてのものだと、当時そういう認識をしました。今もってこれはその認識は正しかったと思っていいます。私は県労協の国体対策委員をやっていて、教組の内に向けては教育文化部長がすべて、各現場に対するいろんなことをやっていますけれども、外との関係のものはみんな私のほうで担当してやってきました。

この時、『総評新聞』というタブロイド判の大きさのそれがあって、私は日の丸掲揚のことを頼まれ、国体との関係ですが、何千字かな、それを書いたことがあります。そこでも言ったことは、第二の皇民化を狙った攻撃だという認識を持ちました。しかも沖縄だけだったが目立ちますので、沖縄国体をついでに、日の丸・君が代すべてゼロだった沖縄からまた全国へ向けてというふうな、こういうことに利用されたのが国体でもあったわけですね。復帰前は日の丸を立てちゃだめだという、復帰後は立てよという、いずれもこれは自由なんです。人間の本来、内心に関わることに、そういう

るべきものを一方は掲げようという、アメリカはニミッツ布告の中でちゃんとそう打ち込んであるんですね。日本の行政権をとめたんです。日の丸・君が代も禁止をしたんです。そういう状況で全く逆なことが起こったわけですね。

戦前の教育、これは教師を含めてですね、戦争責任などの総括をしないで、戦後、または天皇を頂点とした国家体制の象徴として政治利用をしていこうとしているということで、日の丸だけじゃなくて、沖縄国体関連では天皇制に対する連続講座なども実は開いていきました。これは、本土からかなり著名な学者等もお呼びをして、やつぱりそこでみんな学んだのは、この日の丸が天皇制を象徴するものだという。君が代もそうです。そしてその頂点に天皇制があるんだというふうな。で、沖縄は一番その下層の中に位置付けられているんだという。これは戦前も今も変わらない。こういう構造を学習をする中で、西銘知事が天皇を招請して沖縄の戦後を終わらせるという政治的発言までやったものから、天皇来沖反対の大きなのろしを上げて、あまり不徹底で十分認知されていなかった天皇裕仁の戦争責任、つまりこれは四五年二月一四日の近衛上奏をもっと戦果を上げてからということ沖縄戦に突入をしたという、こういう経過と。

戦後のサンフランシスコ講和条約締結に向けても、新憲法が制定されて、天皇の国事行為は全て約一〇項目に限定されているのに、沖縄の占領を二五年、五〇年、それ以上継続したほうがいいという、しかもこれ、赤化、共産化を防ぐためという、その冷戦体制を、こういうふうなことの構造を天皇がアメリカにそれを発し、いわゆるそのとおりの講和になっているんですね。五一年の講和は。吉田全権は、だからそれを担って、しかも安保と地位協定に関しては、彼はアメリカの、いわゆる今の従属関係を求められるということを知っているものから、彼は一人で責任取ったんですね。

ということも含めて、この日の丸に対することは、この反動として随分県民が自覚をしてきたんだろうと思つて、現在は全く見る

このできない状況になっていますが。

ただ、校長など、これはさっきの管理体制と関わりありますが、卒業式ですよ、演壇を上がっていく時に最敬礼するんですよ、日の丸に。で、挨拶が終わった後も、また最敬礼してから壇上をおりるんですね。やっぱり天皇の象徴だからだと思っんですね、ただ国旗じゃなくて、天皇の象徴だから、それに最敬礼をする。それで、これは昔の何が変わるかと。あるいは昔もそこまで徹底しなかったということ。僕は先輩教師たちから聞かされましたよ、「昔、そこまでやらなかったよ」と。これ締めつけですよ。今、戦前よりひどい状況だという言い方でもあるわけですが。で、こういう心の支配まで狙われた、第二の皇民化を狙った、そういう危機的な受けとめ方をしたものですから、それにかかなり抵抗をやってきました。

## ■「屋良知事と石川氏の天皇制についての認識」

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。日の丸・君が代闘争をした八〇年代半ばというのは、その次の部分でもある天皇制が問われ直すということも関わっていますし、一緒に話していただいて。

### ○石川元平

一緒にしましょうか。知事と私の天皇制についての認識ですが、直接、天皇についてどうというような話は、やる機会はなかったけれども、端々に、僕はずっとそばで聞いてきています。

五三年の戦災校舎復興運動ということ、沖縄教職員会が手始めに大きな運動をやったんですが、その時に北海道から鹿児島まで回り、そして有力な方々にたくさん会っているんですね。そのうちの一人が高松宮なわけです。ある人の勧めによって高松宮に会ったんだそうです。

その機会の印象を、『沖縄教職員会一六年』という中にあります

けれども、人ごとのように。屋良は物すごい熱血漢ですからね、非常に冷静。おそらく皇族というようなことでもあつて襟を正して会ったと思うけれども、かなりそういう沖縄の思いを伝えたと思うんだけれども、非常に失望したということの後でね。こんなことを言ったと言うんですよ。本土の戦災のことを持ち出してね、アメリカのロックフェラー財団、あるいはカーネギー財団などへ、向こうへの要請をしたことがあるのかという話にすりかえられたと言っています。これは、屋良の全体のあれを見ると、非常に悪い印象ですね。まず皇族の中で非常に悪い印象。彼は戦後初めて皇族に会ったと思うんだけれども。

その後、昭和天皇の死去の際、かねてよりNHKから取材の申し込みがあつて、応じていいよという約束をしていたらしいんですよ。NHKは屋良家に向いて取材をやったら、本人自体は不元気な状態。健康な生き生きとした目じゃなくて、脂目、沖縄でアンダミーと言いますけれども、私はその異変にすぐ気がつきました。本人自体が具合悪いんじゃないのかと、僕は駆けつけたんですよ。そうしたら、やっぱり具合悪かったです。後に検査したら、脳に腫瘍ができていた。この影響で、数年間病床に伏すんですよ、屋良はね。ところが、あれだけ義理がたい人間だったものですから、取材に応じた。ですから、この昭和天皇に対する、どうという、戦争責任、戦後責任は直接それを交えて話すチャンスはありませんでしたけれども、私にとっては屋良のこの異変のほうはずっと心に残ってですね。

現天皇に対して、七五年の海洋博に来ることになって、屋良も直に対応するというふうなことなどもあつて、特にひめゆりの第三外科壕、参拝に行った時。糸満でも行く前に皇太子の車列に対し、何かあつたらしいけれども。

最近、このひめゆりの火災瓶事件のことが大きく写真入りで出ましたけれども。この時にも同行し、案内したひめゆりの同窓会を代表した人が、教職員会の婦人部長をした人です。源ゆきと言ってね、

彼女が驚いた。これが新聞で、写真などで大きく出ていますけれども。

で、そのこととの関わりでは、屋良はかなり負い目を感じるような話をしていましたし。ただね、こんなことでもびつくりしていません。来る前までに、かなり屋良主席知事に対して、調べてきている、皇太子自体が。こんなこと言ったと言うんですよ。琉歌を詠まれるということはよく知られて、これ後でもう少し申し上げますが、屋良が初めて会った際に屋良家の家系図のことを話しておられた。第二尚氏（しようし）、向氏（しようじ）ですと、その話までされて。びつくりもしたけれども、非常に親しみを感じておられたと思います。一応屋良の認識はこの程度にしておいてですね。

そこまできなりの徹底をして、沖繩に対する、いわゆる負い目に対する自分の親父、天皇裕仁に対するその罪滅ぼしなんでしょうか、沖繩に対する思いを一生懸命考えていたのかなという感じを受けて皆さん、今年の正月かな、文藝春秋、ごらんになりませんでした？かなり特集がされていますが。あれに、やっぱり琉歌を詠む、いわゆる天皇のそれが、かなり丁寧に。僕自身ちよつと認識を新たにしたのは、いわゆる現在の今上天皇に御進講したのは亡くなった外間守善なんです。その影響で琉歌を詠むようになったのではないかを私は思っていた。ところがそうじゃなくて、あの文春の記事を見ますと、外間守善が驚いたと。天皇が琉歌を詠まれることに驚いたと、独学で沖繩の歴史を勉強したと。で、琉歌を詠むまでに至ったという趣旨のことが書かれているものですからこれ自体、僕の認識をまず改めました。

ところが、結果としては一昨年の四・二八に政治利用されて天皇陛下万歳までされましたよね。あの中に、どういう気持ちでおられたのかなという。いや、天皇のそういう心情などは全く顧みずに利用するのかなと。今のあの安倍政権はという。ある意味もつとね、怖いなという。

私はつぶさに言いますのは、天皇裕仁の戦争責任は、これはもう

消しがたい、これはきちつと事実として語り継いでいかなく  
てはならないし、そのことに關しては沖繩のさっきの平和祈念資料館の中にも、きちつとそれは記録としても、凶録の中でも残しています。あれから削除されることがないように、監視もせんといかんです。そういうヤマトンチュにお話をする時は、二月一四日に近衛上奏を受け入れておれば、沖繩戦はもちろん、その後の広島・長崎も、その後に続いた本土の空襲もなくて済んであろうということに繋げていけば、実際オリンピック作戦、コロネット作戦という本土決戦のシナリオがあるんですから、そういうことを申し上げているわけで。あと一つは戦後責任のことについては、やっぱりこれはさっき申し上げたけれども、進藤栄一先生の、それも僕ら後で知るんだけど、その前からこういう認識はちよつと持っていましたね。いわゆる天皇が新憲法の条項に違反をして、最大の政治行為をした。例えば社会党の党首であった女性党首も、憲法学者であったはずだが、沖繩にも何度も来たんですよ、こういうことなどを含めてあれをアピールしてくれなかったのかなという、そういう話も聞きたかったなという、ちよつと不満でもありましたけどね。率直に。

一国の領土を切り売りする、それを先導的役目を果たしているわけだから、それ以上の政治行為はないと思っているんだけど、それにメスを入れて、沖繩側に問いかけてくるものがほとんどなかったという印象なんです。沖繩から逆に、そうじゃなかったのかと今、我々言い続けて、その後で進藤先生が、資料を発掘してアピールしてくれたいという、こういうことはまず肝に銘じておきたいなという、そういうことです。

あとですね、沖繩の人に非常に受け入れられていることに、去年の六月二三日に、戦後七〇年近くもなつてね、今ごろ読谷村の上陸地点に、読谷村楚辺に、「艦砲ぬ喰（く）えー残（ぬく）さー」という歌碑が立つたんです。これは実に見事なものです。読谷山を思わすようなスケールの大きいんですよ、歌碑そのものはね。そし



てその前の芝生も何百名も座れるような、その場所で、しかも海をバック、ユウバンタ、夕日を眺める丘みたいな所ですが、そこをバックにして立っているものですから。

その歌詞が五番まであって、たくさんあるんだけど、四番にこう読みます、「我親（わうや）喰（く）わたるあの戦」、自分の親を喰ってしまったあの戦争という意味ですね。「我島（わしま）」、この島を「喰わたる」、喰ってしまった、「あの艦砲」、艦砲射撃のことです。「生り変わていん忘らりゆみ」、生まれ変わっても忘れられることはできないよと。「誰（たあ）があぬ様強いいんじゃやら」、誰がああ戦争をしかしたのか、「恨でん悔でん飽きじゃらん」、恨んでも悔やんでも諦めることができない、「子孫（しすん）末代（まちでえ）遺言（いぐん）さな」、子孫末代遺言していこうというふうな。

これは戦後一番の反戦歌と、もう今はそういう評価ですね。あの読谷村ですから、これは今後も大事にされると思います。サトウキビ畑の歌碑が、波平という残波に行く所にまたあって、チビチリガマやシムクガマがあり、もちろん自治の里、平和の里の役場があり、また座喜味城跡がありますね。見どころいっぱいの中に、これがやられて、私などもかなり宣伝マン務めましたけれども。こういうことで、歌い継がれていくであろうことですね。比嘉恒敏さんという作詩作曲をされた、これデイゴ娘のお父さんですが、直に私、お話を聞く機会があった、もう亡くなりましたけれども、弟にもお会いをしてお話を聞く機会もあつたものですから、この民謡が去年、歌碑としてたくさん村内外の人の、そういうカンパによつて打ち建てられたというようなことは、すごいこと。ここでも誰がああ戦争をしかしたのかという。天皇です。戦争責任を問うているんですよ。だから恨んでも悔やんでも諦めないよと、子孫末代遺言していこう、語り継いでいこうという。これから大事に生かすべきだと思いますね。

しかし、そういう天皇制、私はじゃあどう見るかといいますと、

栗栖が、やっぱり日本の軍隊は、あるいは自衛隊は国家体制を守るためにこそある。これは国民や住民を守る存在じゃないよということとを明確に言い、記録にも、著書にも残してあります。これは我々がフイート運動をして、沖縄戦体験者が感じたことと全く同じなことですよね。軍隊は住民を守る存在じゃなかったし、基地の軍隊のある所で戦争は起こったという、こういうことに照らしてですね、結論として、そういう戦争屋にね、支配層に利用される存在としてあるんですね、天皇は。

ですからある意味で、いわゆる今上天皇がどんなにこやかにお話しされて、琉歌とか、等々でね、沖縄に対する思いを述べられたにしても、やっぱり我々のこれからの未来のことを考えますと、このまさに今、普天間基地や辺野古の新基地建設をやられるという時代、あの隠れた意図は、私は憲法改正、その前にも幾つもの法の整備がされて、憲法が改悪されて徴兵制が敷かれて、教え子が軍隊に送られていったつても、むしろそういうやつを首にするような、こういうことが教育現場にも、攻撃がかかってくる等々が容易に想定される時代にもうなつてしまっている。

ですからその意味では、第三の琉球処分という話までやりましたけれども、新しい沖縄に対する処分の始まりが、いわゆる国家権力を持つてしての名護への基地建設、沖縄県民、いわゆる建白書無視の、そういう対応だと思っているんですね。これは人権を守る、あるいはまた民主主義国家のやることですかと。既に憲法は、もうそっちのけで、そういう強権的な、ファシズム的な、そういう国家体制になりつつあるんじゃないのかという大変な危機感を持っているわけですから、天皇のために命を亡くした我が同胞のためにも、これは天皇制そのものがうまく利用されてやられる国家体制である限りはですね、これはやっぱり制度そのものをなくしたほうがいいというのが結論ですね。非常に難しいとは思いますが、個人的な思いとしては、やっぱりそういう強い思いですね。

## ■「日の丸・君が代」闘争（日の丸掲揚運動への批判も含めて）」「屋良知事と石川氏の天皇制について

### 「日の丸・君が代」闘争の質問・応答

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら、ちよつと繋げてお話しただいたので、日の丸・君が代闘争のところから天皇制の問題まで含めて、質問させていただければと思います。

一つ伺いたいのは、次の教組の変容の話とも関わるんですが、日の丸・君が代の強制の問題というのは、この国体を前にした時に初めて起こってくるものでは多分なくて、現場レベルでは、もう少し前の段階から、校長が掲揚しようとするのに対して現場の教員がそれに抗議をしたり、反対をしてやめさせるというようなことについてのは、七〇年代の終わりぐらいにはあったのではないかと思うのですけれども。

#### ○石川元平

八七年が国体だから、じゃあその前の話ね。

#### ○櫻澤 誠

はい。突然というわけではなくて、徐々に教員の中でも、管理職と現場教員との対立が起こったり、あるいは教組の組織率が次第に下がっていく中で、八五年以降集中的に狙われたという側面もおそらくあるんじゃないかなと思うのですけれども。

#### ○石川元平

復帰前は、要するにオール教職員。学校に勤める全ての体制、教職員会、組織員だと。だから学校の分会長という学校の責任者が校長であったり、教頭であったりも随分ありました。あるいは平教諭ももちろんいたわけけれども、これが復帰によって、いわゆる地

公法が押しつけられて管理職と一般の教職員が同一の組合をつくれないうことになったわけですよ。今の御指摘のようなあれは次第に出てきます。これはね、実態としては。

今、頭に浮かんだけど、那覇にああいう校長がいたなど。いわゆる教育会館にも文句言いに来るんですよ。具志という小祿の校長だったけれども。よく訪れるけれども、建設的なあれじゃなくて、文句言いに来る。やっぱり個別であるけれども、あちらこちらに当時、散在してましたね。やっぱりきちつとした教育と教師の戦争責任等に対する総括が不十分だったせいだと思っんですよ、これは。こういう状況の中で、いわゆるヤマトへも復帰をしたと。いわゆる本場の日本人になるように日本の教育をしよう、シンボリックなそれを掲げようというふうな。これは個別的には、かなりありましたよ、運動会、その他ね。

しかし、あの当時はまた校長・教頭組合というのも事実ありましたのでね。この普天間の照屋正雄は僕らの四・二八会の親分ですけど、でも、書記長も我々の四・二八会のメンバーとして頑張っている、それいましたので、この人たちが、最後に色々抵抗したんですよ。あの日の丸・君が代強制等にもね。個別的には、そういう校長・教頭組合にも入らないで、いわゆる目は本土の中央に向いているというふうな、そしてまた、そういうことによって、保守派のあれから認められたいとかという、いろんなそれも、個別にはあったと思います。

こういう校長などがいたのも事実だし、しかし総体としては、こういうものが通るといふあれではなかったですね。だから堰を切ったように攻撃かけられたのは八五年の悉皆調査以来。自民党は、ただ文部省、あるいは自民党というだけじゃなくて、自民党の青年部、婦人部、幹事長、県でのあらゆる組織を個別にやって、これをまた再度、こんなことを何度もやっているんですね。これでもかこれでもかというふうな、こんなことなどまでやったものだからね、あれがほんとに政治的な意図を持って。僕、さつき言いましたよう

に、沖縄はまた第二の皇民化というふうなことで狙われているかと。

第一の皇民化の話で、これ十分説明しませんでしたけれども、師範学校などを各県よりも先駆けて沖縄につくられた。そして、日の丸、あるいは御真影、天皇・皇后の写真も先駆けて沖縄に下賜をされたという、これは事実としてあるんですね。ですから、沖縄の次に九五年、台湾ですよ。そしてその後、一五年越しの一九一〇年の朝鮮併合ですよ。というふうなことに沖縄でかなりの実績をつくって台湾に、それから朝鮮半島ということで、これはちゃんと歴史的な証明として、こういうふうなことがやられたということも、これ言えますのでですね。

ですから、我々が「教え子を再び戦場に送らない」とオウム返しに言うのは易いけれども、本当の意味での教師と教育の戦争責任ですよ。これは、僕らが退任するまで不十分だったという、この反省に基づいて実は『沖縄をどう教えるか』の本をつくったんです。私、有銘政夫、崎原盛秀、三名。この中には、かなりの部分、非常に掘り下げて教育と教師の戦争責任などをただしています。そして、いわゆる侵略戦争に対する関係、あるいは台湾における霧社事件等々を含めて、かなり中には入れたつもりですけどね。

ただ、女性教師は『ぶっそうげの花ゆれて』という体験記録を何集も出したんです。これでかなり女教師は偉いですよ、男教師以上に徹底した沖縄戦に対する、あるいは教師と教育の戦争責任をかなりただしてやってきました。男どもに対して、ぜひそういう組織として記録をちゃんと残そうということ働きかけたことがあるんですね。個別には何名かの人たちを出しているんですよ。ところが、まとまった組織として戦争に協力した、そして実際に兵隊にも行ってね、あるいは中国戦線でも人殺しまでやってきたでしょうとは言わなかったけれども、そういういろんなことを見てきたでしょうと、そういうふうなこともきちっと記録に残すべきじゃないのかと。

照屋正雄氏、彼は記録残しました。ところがあれ、個人の記録な

んですよ。そうじゃなくて、まとまった記録、ほんとは残せば、もう少し徹底したかなとも思いますけどね。

#### ○櫻澤 誠

もう一つ質問ですが、例えば六〇年代の沖縄の一つの象徴がコザだとすると、やっぱり八〇年代、一つの大きな象徴というのは読谷だと思いませんか。

#### ○石川元平

ええ、はい。

#### ○櫻澤 誠

日の丸・君が代の時も、国体のソフトボール大会の時もちろんですけれども。僕が改めて言うまでもないですが、八二年の教科書問題があつて、そこでチビチリガマの話が出てきて、そのガマの前に像を金城実さんがつくる。そういう流れの中で、色々読谷の中で活動していて、その延長線上に読谷高校の。

#### ○石川元平

女生徒が。

#### ○櫻澤 誠

女生徒が日の丸をドブにつけて投げ捨てたという話があつて、さらにその延長に知花さんが、そういうことをさせてしまったということも含めて、ソフトボール会場で日の丸を引きずり下して火をつけるという。そういう一連の、八〇年代の沖縄をまさに象徴するような読谷での動きがある。その一方で、その時期というのは、民主主義の先端を行くような、山内徳信さんが読谷村長をやっているという。常々石川先生も読谷のことをおっしゃいますけれども、その読谷で八〇年代にこれだけそういうものが象徴的にあらわれたということについては、どういうふうに思われますか。

#### ○石川元平

たくさんあると思いますが、象徴的なのは、まず上陸地点ですよ。沖縄戦は、こちらから始まったんだというふうな。

そして、米軍にとって、一般の人が危険なように見えないけれど



も、あのトリーステーションとか、象のオリなんていうのは謀略通信基地なんですね。そして関連する通信施設を、今のちようど役場のある所、それ造ろうとして基礎工事まで終わっていたんですよ。これをとめさせた。たまたま条件よかつたのは、カーター大統領

だった頃です。カーター大統領に直訴して、大統領から現地の司令官に待たされたが、話し合いをしようという。で、話し合いの結果、これはもう造らないということになって、そこに役場を造った。役場だけじゃないですよ、読谷山花織（ゆんたんざはなうい）という伝統工芸館、そして社会福祉センター、体育館みたいなものがある。ソフトボール会場とか、もう今は日本で二番目に立派なサッカースタジアムとか色々なものがそこに集中しています。要するに平和の里、自治の里と銘打った、それを象徴するような、もちろん憲法の九条のあれがあったり。そして読谷村はこうつくるといふふうな、あの鳳計画というフンシー、韓国の風水の専門の大学の先生にちゃんとお見立てをして、自分たちの村づくりが間違いないということ、どこに何を造って、地形図、地勢はこういう図だよ、やったら、お墨つきをもらってやった。こういう説明までやっているんです、アメリカ側に。ある意味で神のお告げみたいな、この力まで利用してやったらアメリカ側も聞いたわけですよ。

そして、私も一回呼ばれたことあるけれども、起工式、それから落成式に制服姿で来るんですよ、アメリカは、マリンの部隊の責任者が来るんですよ。そこで一緒に酒飲んで、ごちそうを食べて。日本の自衛隊なら、決してやりませんね。もうとにかくあの手この手、攻めたり引いたりという、いろんなことをやって、この結果が補助飛行場を全面撤去。これは、ある意味で村長が中心になって、議会議長がセットして村民への動員をかけるんですよ。村役場の職員はもちろん、この村民に対して動員。実力阻止闘争だもの。

事件もあつたからね。棚原孝子ちゃんというのが六五年にトレーラーに圧殺をされて死亡と。その後、危険なものがあつちこつちに色々ありましたので。ですから最初にやったのは不発弾処理場です

ね、撤去させて。そこに壺屋で登り窯が使えなくなった、民家が集中して。で、読谷壺屋村ができて、やちむんの里になって、今、読谷にはアリビラという日航のいいホテルがあるんですよ。残波のロイヤルホテルがあり、すごいまたサッカースタジアムがもう一つ残波にあって、憩いの里になっています。

そこは何だったかと言ったら、日本軍が造ってなかった日本本土攻撃のためのボードポイントという飛行場ですよ、二〇〇〇メートルを超す。B52が離発着できるような滑走路を、戦後、アメリカが造った。長崎に爆弾を落とすとしたB29は、あの小倉とか、あつちこつち回って場所を探しているうちに燃料をかなり使って、テナアンに帰還する燃料がないということで、読谷におり立って給油して向こうに、そういう場所。

そこは戦後ね、もう一つはナイキ基地ができたんですよ。その阻止行動に我々行って。目の前で強硬実験するわけですよ。これも読谷村民だけじゃなくして、いわゆる県内のそういう平和団体等を動員して、阻止闘争等をやつてですね、あれ、完全に撤去させたわけ。それが今、あの残波を中心とした、しかもまたあの滑走路のあつたような場所、海岸線にアリビラ含めて、見事な菊栽培なども、それですよ。沖繩の今、一〇名ぐらい人間国宝がいますが、ほとんど読谷村に在住しています。

三月四日のさんしんの日のそれは、読谷の鳳ホールが拠点なんですよ。これは、全世界に発信されます。イギリスにも、ハワイにも、あの南米。今、映像でこうできるんですよ、同時にね。こういう発信地にもなっているということ等々ありますものから、本当に沖繩戦体験をし、そして戦後体験をした、それが、その村がほんとに平和の里と自治の里ということで、現在、非常に固まりつつあつて。

もう一つ、僕も一つ関わつたのは、ヨミタン大学の第一回目の講座、僕が担当してやりました。その場でも屋良朝苗記念館を造りましょうということ、その沖教組で保管された資料がみんな読谷村

に、屋良朝苗日記ともどもね、僕が持っていた個人的なものもみんな向こうに寄託をして、今、その資料を大事に向こうは保管をし。で、屋良朝苗顕彰事業推進期成会というものもつくられて、僕、顧問なんですよ。山内徳信氏が実行委員長になって、こういう事業をやろうというふうなことなんでしょう。

今だから、そういうものまで展望しての、いわゆる新しい村づくりがというふうなことです。これはもう基地を撤去させた後の、あの平和な生き方を象徴するような、しかも歴史的にも非常に沖縄的なフンシーミー、風水のあれがあった、敵対するアメリカ側も納得させるぐらいの説得力を持った対応によって、今の計画が進んでいると。

あと一つは、今、向こうへ行ったら、ちよつと戸惑うぐらい。元いた人たちは、ちよつとびっくりする、道路事情が全然違っている。中に、片一方二車線の道路が縦横に今、走ってしまっている。読谷の役場の東側、元滑走路を利用して大きな道路が今、造られて、まだ貫通はしてないけれども、ほとんどやがて終わる。南側からの、嘉手納から行く、そこは今、トンネル工事が一部始まっているんですね。こういうことがなされようとして、フアーマーズなども既にできているものです。読谷中学が西にあったのが、もう役場の近く、いわゆる元の学校敷地に戻って、すごくいい村に。人口だけが一番だけじゃなくて、そういう村づくりがされようとしていますのでね。僕自身が非常に関心を持って今、関わろうとする。また、そこまではガンジューじゃないといかんなど思っているんですよ。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。ほかに質問いかがでしょうか。

#### ○高橋順子

櫻澤さんが先ほど御質問されたことと関わりまして、八五年の悉皆調査を機に沖縄でも、日の丸掲揚率が一〇〇%近くにはね上がったことが有名だと思うんですけども、広島の学校では、板挟みになった高校の校長先生が自殺したとか。沖縄の現場の様子は、どう

いう感じだったのでしょうか。

#### ○石川元平

これは要するに掲揚という、正面にね、求められたのはそれですね。掲揚したということで、みんな一〇〇%という、その中でも、掲揚の仕方、さまざまな抵抗闘争のあれが。たとえば校旗と一緒に三脚でこれ立てた、あれははためきませんから見えないですよ、これも掲揚。

#### ○高橋順子

なるほど。

#### ○石川元平

こういうことみんな含めての数字ですね。今は、正面が中心になつていいのか。要するに一〇〇%になったという、あの事実のあれは、こういうことをみんな含めての数ですね。

それから式が終わってから立てたなんていうふうなことなどもありましたよ。式が終わってから、要するに立てたという事実を報告する。

#### ○高橋順子

通達に合わせて、結果を、そういう形に。

#### ○石川元平

ですから、こういうことが実態として地域に伝わりますからね。じゃあなぜ正月や祝日に掲げられないのと。これ、何の意味も持たないですよ。一〇〇%の意味持たないですよ、それは。

#### ○高橋順子

今のことに関わって八七年の国体が終わった後も、そのような強い通達は続いたんでしょうか。

#### ○石川元平

ええ、続きます。これは、むしろその後、続いたんですよ。一気に一〇〇%にはなっていないです。抵抗して頑張ったような所などね、本部高校などでも生徒は全体集会などを持って、どうするか論議もやっていますよ。あちらこちらで、学校、いわゆる職員で、

これは立てんという合意したけれども、校長がいつの間にか単独で強行したという。あれは、盲学校だったと思いますが、その校長なども、ある意味で有名ですね。知れるようになってね、こういうある意味でひきょうなことをやったなんていうふうなことで。

最近では、むしろさつき申し上げた異常な最敬礼みたいなね、こういうことにある意味で非常にちよつと違和感を覚えるんですがね。

#### ○高橋順子

はい。先ほど櫻澤さんが、日の丸をソフトボール会場で焼き捨てた事件が、それまでの読谷の状況から、そのような出来事に繋がっていったという御質問をされたと思うんですけども、やっぱりそういう空気っていうのは、沖縄中であつたんでしょか。それとも読谷だから、そういうことが起こつたというふうな感じで。

#### ○石川元平

いや、これは読谷では非常に強い、ああいう形で女生徒がいて、校門の近くの溝だと思ふんですよね、側溝に投げ捨てたという。知花君はまた焼いたわけですから、それぞれ理由があるわけですよ。高橋順子は。

#### ○石川元平

ただ、その事実だけじゃなくて、なぜこうやったのかという。読谷村はソフトボール会場で、いわゆるソフトボール協会の決められた要綱どおりしなければ、そこでの実施はしないというところの圧力までかかったんです。知花君が一番怒つた理由の一つ、それですね。そこまでやったのは、やっぱり沖縄の犠牲を何と見ているかという一つの怒りですよ。そこに上陸地点、チビチリガマの犠牲等々のそれがあるわけですね。だから、これはもうやっぱり体をもつてせざるを得ないような。これはうんと県内には知られまして、これ裁判になりました。

裁判になった時の裁判長は前田、後は社大党の県議になった方ですが、前田判決というのが出ますよ。前田判決は、この事件に対し

て「国旗」という表現を使っていません。「日の丸旗」と言っています。これ、勇気ある判決だと思えますよ。やっぱり国旗としてのあれは、裁判所も認知してなかった。僕ら非常に拍手しましたけどね。

そういうことなどで、知花君は色々議員になったりやってきましたけれども、今現在、僧侶です。お坊さんになっていきますよ。お坊さんになっての力はまた増していると思えますね。この前も慰霊祭やっていきますね、彼がやったみたいですよ、読経を。遺族でもありますから。

#### ○高橋順子

はい。

#### ○石川元平

これまた戦跡もかなり残っているんです。いわゆる飛行機を格納する掩体壕も残っていますしね。それから忠魂の碑など、あれを機銃の後、欠けたまんまにして、これも残しているんですね。これはあまり知られていませんが、今のようないんたは発達していませんので、海底ケーブルを通して台湾、サイパン、それからヤツプ島、あとはもちろん日本本土です。こういうことで電信屋というのが置かれていたんです。置かれたのは読谷村と八重山の川平湾に行く、左側にありますけど、あれ、完全に残っています。機銃やその跡まで残って、碑もあります。読谷の場合は、碑文だけありますけれども。

こういういろんなものが、実は読谷村では学ぶのが実にたくさんあって、我々もまだ入っていないような、あれは渡慶次でしたかね、民家のすぐ庭、そこにたくさんの方が避難をしていたというガマなども、一見したら井戸なんだけれども、いや、これは井戸じゃなくて、ここから隠れて、そこに何十名の方が助かった場所があるとか、たくさん実はあるんですよ。

そういうことを守って、大事にしようと、生かそうというふうな地域としてあるものですから。たまたまた屋良朝苗の出身地であ



るという。あの知花英夫県議会議長、あの知事選では敗れましたけれども。出身地でもあって。

○高橋順子

はい、ありがとうございます。

## ■「一九七〇〜八〇年代の教組内部の変容（日教組との関係、管理職との対立、内部対立）」「四〇

### 〇日抗争」、連合結成前後」

○櫻澤 誠

そうしましたら、教組関連の二つを一緒にお話ししていただくというのでお願いします。

○石川元平

ちよつと関連もしますので、それでは。これ、あんまり本当は話したくはないものではあるが、しかし、この程度話したほうがいいのかなど思っています。

まず、これは特に日教組加盟に向けての内部の色々ありましたけれども、これもちよつと話したのかなと思いますね、日教組に加盟した理由が公選教委の剥奪された教公二法が押しつけられて、本土の法制度下にいや応なく組み入れられていったというふうなことがあったものですから、この日本の教育を共同の責任でというふうなことでやって、あるいはかなわなかった復帰をというふうなことなどで、その実現のためにまた全国連帯でというふうなことがありましたけれども。ただ、そうは言っても社会党一党支持というふうなことでありまして、日教組の定期大会、機関会議などでも、壮絶なそういう論争がずっと僕ら見せつけられてきました、内部のね。ですから、どの県とどの県は、まあ大体わかるんですよ、

聞かない前からもうね、どういう意見を出すのか。我々としては執行部の主流派には属しながらも、一党支持というふうなこの方針はずっと変えずにきました。おそらく、これは今日まで。しかしもう今は社会党など、それなくなりましてのでね、今はもう連合の政治方針の中に入っていますので、もう今現在は、その論議はききませんけれども、連合結成前までは我々としては沖縄的な方針はきちつと守ってきながら、日教組との関係は一応主流派に属して、かなり財政的な支援も受けながらですね、それはうまく利用もしてきたというふうな、そして沖縄の闘いへの対応もやってもらったというふうな評価をしています。

管理職はですね、前にもちよつと話したとおり、オール教職員が教職員会の時代になりましたけれども、本土の法制下に入ってから、いわゆる同じ組織下、組合の中には組織できないということなども色々あって、そして校長、教頭の管理職選考試験というのが導入されたことによつてですね、この職場の雰囲気が変わっていったということも現場から聞こえてきて。例えば子供たちの教育以上に、校長になろう、教頭になろうという人たちは、ヒラメ教員という言い方をした。上だけ見て、しかもどこどこで校長、教頭の管理職選考試験の塾があるらしいよと、そこに通つてどうのというふうな、こういう不満なども聞かれるようになったりもしてきましたね。先ほど話したのは、一方では校長・教頭組合もあって、復帰前と一緒にお互いに切磋琢磨してきたというのがありましたけれども、人間のさがでしょうかね、管理職になつて偉くなりたいとかというふうな、こういうのも、これは実態としてありました。組合の元役員の中でも一部そういうようなことがありました、本部支部の役員なんか務めたい人の中ですね。

こういうことがまたありましたね。自衛隊闘争はかなり厳しく復帰前から復帰協や、あるいは他の労働団体等々もやって、これは本土ではちよつと考えられないような成人式への参加拒否だとか、一部ひどいものになると琉球大学への入学を拒否する闘いなんていう

のも国公労が組んだりもしましたね。あるいはこの幾つかの公務員関係の組合が、その反対闘争、六つぐらいの組織でつくって、これを全県下で広げる等々、いろんなことやったこともありすけれども、自衛隊募集のこの情報が校長、教頭から直接我々に通告を受けたりということなども実はあつたんですよ。だから管理職との関係でも、管理職組合に入っている人がいるし、組合に入っていない人でも、いわゆる沖教組に対するこういう情報等々の提供はかなりあつて、これを自衛隊募集事務所に対して我々はその情報を持って、いわゆる抗議行動をしたりというふうな、こういうふうなこともありました。

それから教組の内部のことですが、この主任制闘争のことも「暁の脱走」の話もしましたけれども、具体的にこれ、数年がかりの取り組みなものですから、これは学校現場や、実際の教育長との交渉の現場、あるいはまた各県教委委員個別の対応とか。それからもちろん父母、地域への働きかけ等々ですね。トップ交渉も、これはいろんな闘いの中ではありませんかと思うけれども、そのことも非常に問題になったりしましてね。交渉の場で、例えば委員長が教育長の目の前でひどく攻撃を受けるとか、いろんなことが実はあつたりもしました。

日教組加盟、その前後は、いわゆる社・共対立みたいな話をやっていたんですが、その後ね、プラスして、いわゆるセクト的な介入が随分出てくるようになるんですね。これは、いろんな組合の正式な方針を決める、特に定期大会等々の場、あるいは役員選挙する時などでも、そういうグループの意思を候補者の位置付けにはめ込もうとしたりね。

沖教組の初代委員長は平敷静男と言って、教職員会三代目の会長が沖教組の初代の委員長を兼ねましたのでね。それから次に比屋根清一、三代が福地だ。僕、四代目なんです。現在、七代か八代ぐらいですね。

自分はそういう屋良が築いてきた、いい意味での主流、本流を自

負しているという。特に福地や私などはね。また、福地や私を支持する支部の団体、『沖繩をどう教えるか』をやった、中頭支部の委員長をやつて、公用地違憲共闘の議長を長く務めた、反戦地主でもあります有銘だとか、CTS闘争のリーダーだった崎原（盛秀）。今もつて変わらないうすね、こういう人たちの姿勢は。僕は変わっていないと思つてから。

ただ、変わった人たちがいるんですよ。連合加盟に対して、いろんな選挙や、この管理職試験、こういうふうな主任制の闘争などでは、非常に先鋭的な元気のある、例えば委員長三役をダラ幹と言つてののしつたり、こういう人たちが「バスに乗りおくれるな」というふうなことで、連合へのそれをね。何ていうか、我々は追い込まれた。八八年がピークだったかな。福地が委員長ですよ。私が副委員長ですよ。そして、教組で一番大きい、強い我々の、ある意味で屋台骨と、中頭の支部の委員長、有銘氏。我々の反対を押し切つて、いわゆる連合加盟の決定をされた。組織の規約、規定がありますけどね、それにもつとらずに、連合への準備会へ参加したことをもつて加盟とみなすという、数の力でそういう決定をしたりもしたんですよ。これには、我々は承服できなかったんですが、結果としてはそういう押し切り方をされて、やった論理が体制の、表現では「バスに乗りおくれるな」と。乗ってしまった後の結果どうなったかという。

その後、僕が委員長になつて、何人かは謝りに来ましたね。このセクトに入っている人たち、何人かは「ああいう対応して申しわけありませんでした」と言つての反省のそれがあつたし、全く反省はないままに別の所に行った人もいますよ。あるいは、それは一本筋を通している人たちはまだいます、卒業後もね。こういう社・共というよりはもっと深刻な組織内部には、こういう影響などがあつて、組織率が非常に低下していることに拍車をかけたと思つていられるんですよ、実はね。一生懸命組織加入を呼びかけて、こうやるんだけど、中々実績が上がらない。

そして、大きかったものではすね、ある意味で今の高等学校、県立です。法源は違うんですね、政府立で既に地公法が適用されていたんですよ、教公二法闘争の時ね。あとは公立ですから、市町村ね。そういう違いがあつたけれども、その連合加盟をやる労線統一のその論議の中で高教組は一定の批判をしたんですね。それに連合への加盟というものを。

今、県当局を相手に賃金とか労働条件改善は公務員関係の労働組合四つの団体が教職員組合とか、沖教組とか、高教組とか、県職労とか、全水労とかね、一緒になって統一交渉するんです。賃金ベースアップの要求、あるいは労働条件改善、その他ね。自衛隊闘争なども、自衛隊闘争では国公労が加わりましたけれども。そういう関係にある中で、この四者の中の高教組が一定、連合を批判したということ、沖教組以外の組織から、いわゆる異議が出ましてね。四者共闘に加えるべきじゃないというようなことで排除されたことがある、高教組が。

あわせて沖教組の内部でも高教組批判が出てきて。じゃあ、高教組と沖教組はどういう関係だったかと言ったら、教職員会の頃は高校部です。教職員会の中の、例えば幼稚園部、いろんな部が、青年部、婦人部、校長部、高校部、「部」だった。養護教諭部という、こういう専門的的位置付けで高等学校は一つ。規約の中では、各地域、これはそれぞれの単組としての性格をもっていたんですね。教職員会は連合体だったんです。中頭教職員会、国頭、辺土名地区教職員会、何々教職員会と単組としてあったものがね、束ねて沖縄教職員会という連合体に。

高教組は、要するに全県下にあつて、各支部のそういうったそれに加わったかという、そうじゃなくて、全県下を一つの組合に組織化してありましたから。当然、教職員会の方針に基づいて高教組をつくっていったわけで、規約の位置付けは各支部に準ずる単一体的連合体という位置付けをして、これですつと続けて、何の不自由もなく運営もやってきたんです。それが、いわゆる連合加盟のこの段

階になつて、高教組を沖教組の内部から批判する声が出てきたと。

ということなどが実はあつて、高教組は連合加盟を、これはある意味で断り続けたわけで、沖教組は連合へ加盟するという超法規的な、準備会に参加したことをもって加盟とみなすという超法規的な、そういう決定を多数支持でやられてしまつて、そこにしかしバックで糸を引いたのは日教組本部です。日教組本部からそういうことで、よろしいと言われたという。これには、さすがに福地も私も、委員長、副委員長や有銘、支部の委員長などを含めて猛烈に反対しましたが、数の力で押し切られましたよ。だから数は、そういうことをやるんですね。

じゃあどうなつたかといいますが、高教組はこういう動きに対して沖教組におれないというふうなことですね、分離独立をしました。けんか別れだけは何としても、これはやつてほしくないということ、これ、僕はかなり苦労しましたよ。そういう僕などに対しては、連合批判をする高教組派というふうにも見られたりしたんです。当然、福地もそうですけどね。しかし、形の上では、いわゆる財産、預貯金等々の、そういうのがありますから、これは円満にやつて、感謝状を、記念品贈呈などをやつてすね、高教組分離独立をしましたけれども。

このままではいかんというのが、また僕の考えで、このままでは沖縄の教育問題、あるいは県民課題に対して非常にマイナス要因が強くなるというふうなことで、何としても再度、単一体的連合体というところには持つていけませんけれども、協議体をつくらうという。これ、私は決して慌てませんでした。一〇年がかりです、九六年の五月一〇日に高教組・沖教組協議会を結成、これが今まで続いているんです。これ、非常にいい関係です。ある意味で、何でも一緒にできます。ほとんど教職員会と同じ時代のような関係が今、できています。これ、壊すのは簡単だけれどね、その中で高教組の委員長は三名ぐらいいかりました。与那覇章という委員長の頃に手打ち式ができて、それで私、めでたく沖教組も卒業することがで



きたんですね。

ちようどそのことと、あれだけの戦後最大の教育闘争と言われながら三〇年間、教公二法阻止闘争史ができてなかったんです。これ、編集委員長になりました、まだまだ元氣な皆さんがいましたので、三一年振りに『教公二法闘争史』を発刊することができた。これは高教組と一体となった大事な闘いでもありましたので。大事なこういう使命はね、やってきたつもりです。

あとですね、もう一つ、それにつけ加えて、役員選挙も代議員をもつての投票じゃないんです。組合員全員投票ですよ。ですから、この選挙期間が一カ月ぐらいありますのでね、かなりの所、回らざるを得ないような状況もありました。学校の職員朝礼の前に時間をもらって挨拶をするとか。私が行ったら、分会長もいるのに校長が出てきて自分が紹介すると言って、私を紹介して激励して、みんなよろしく言う校長もいますしね、色々ありました。

こういうふうな状況でしたけれども、私にも副委員長の時には、プロである私たちにも対立が出たりしましたよ。セクトの代表で出てきて。私の前の福地にも。彼はある意味で教職員会からの顔ですよ。しかも革新的な運動をやった沖繩の顔でもあった彼にも対抗を立ててきたりもしたんです。こういうことは、しのいできましたけどね。セクトの人たちは機関会議では多数の中でも、組合員多数は握れなかったですね。

ですから、連合加盟は、非常に大きな内部で波風を立てた。そして役員選挙等々にも絡み。

私はある委員長と談判をしたことがあるんですよ、一介の部長の分際でね。現場経験のない人でもありましたので。このあるセクトのそれに乗らなければ組織運営できないという、だから君たちもと言って、私もこの準備されたそこに乗れと来たんです。腹立って談判しましたよ。屋良、喜屋武、平敷先生方が築いてきた、これをあなたは壊すのかと、しかも、セクトに乗れと。ほんとは辞めたほうがいいと言いたかったけど。いや、本人が、僕たちが乗らなければ

ば辞めると言ったんですよ。辞めませんでしたよ。僕らに乗せるために自分は辞めるとまで言ったんですけど。彼に談判しましたよ、組織内でも一対一でもやったし。呼ばれましてね、自宅にも行って。だから、僕が委員長になる予定は、実はなかったんですよ、自分の計算上も。こういうことで乗り切ってきましたのでね。やっぱりこの、石川立てて、自分達でまた守るからという、こういう態勢で有銘、以下皆さんが。僕が、だから八カ年務めたのは、そういうバックのおかげで、あとはほとんど無投票ですよ、その後はね。そこに安閑としているわけではなかったけれども、まじめに色々大田県政、またちようど在任中でしたから、そのもとでやってきたという。個人的なことまで申し上げましたけれども。

そしてあとね、四〇〇日抗争、このことをちよつと話しましようね。沖繩からちよつと離れて、連合結成の時に総評と、特に同盟、中立労連等々あったものを統一したわけですね。選挙闘争と平和、これは連合が中心にやるという。つまり、これまで総評に加盟していたような、このグループではやりませんよということ。連合になって、僕は沖教組の委員長ですから、自動的に連合沖繩の副会長をやりました。

連合の平和集会にということ、広島へ行きましたよ。長崎行って、次、納沙布岬での北方領土問題で行きました。ああいうものを見て、これが連合の平和運動かと腹立って、けんかというか怒りましたよ、あの担当部長とね。沖繩を何と見ているかと、沖繩戦を体験し、あれだけ基地に苦しめられているこの沖繩を通り越して、八月六日から九日、北方領土、これが連合の平和運動かと言ってね、随分談判をして沖繩から始めさせましたんですよ。南部でテントを張って、こういうことをさせたこともありますし、大田知事を呼んで読谷の座喜味城跡でね、講演会を持ったりいろんなことをやったりもしてきましたけれども、ある意味で沖繩的な平和運動にはなっていないですね、全く。

もう一つこれがあります。今、中部地区労は元氣ですね。僕も〇

B会です。北部地区労も元気です。これをなくそうとしたんですよ。連合沖縄をつくる場合にも、いわゆる各地区労としてあるものを、地区協議会に変えようとした。規約上そうなっています。これ、抵抗して僕らつくらさなかったんです。それがあのおかげで今、民間を含めて中部地区労はがっちり頑張っていますよ。普天間の大山第一ゲート、中部地区労OBが中心です。行動を、早朝頑張っているのはね。

こういうことなど含めて、本土の大きな体制の流れは、沖縄としては非常に用心しないとけないなという思いを実は強く持っていることですね。

あと一つは、だから今、日教組の例えば委員長の名前とかね、離れてもそういうことをもつと知らないといけないのだけでも、中々覚えきれません。日教組というような運動が出てきませんね、教育運動やその他でね。ほとんど、基本法改正から今の教育委員会制度、いわゆる戦後体制を、教育体系を変えようという中においても現場を代表する人たちはもう声が出てこない、見えない。情けないです、そんなことでは。まずそんな思いです。

## ■「一九七〇〜八〇年代の教組内部の変容（日教

## 組との関係、管理職との対立、内部対立）」「四〇

## 〇日抗争」、連合結成前後」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。中々最初におっしゃってましたようにお話できないこともあるとは思いますが、例えば『沖縄県高教組二十五周年運動史』の中で、このあたりの話を少し具体的に書いていますけれども、その中で読んでよくわからなかった部

分の一つとして、例えば日の丸・君が代の闘争が行われている時あたりに、ずっと慣例として沖教組の副委員長に高教組の委員長がなることになってきたのが、それが否決された問題があったとか、もう少し前から対立の伏線があったと思うんですけど、その副委員長人事が否決されるというのは、どういう話があったんでしょうか。

### ○石川元平

誰が否決。高教組の委員長と言ってもね、歴代ずっとわかるわけだけども、要するに社会党系、共産党系の人になったりはあるんですよ。おそらくその変わり目だろうと思います。高教組の委員長が沖教組の副委員長になるという、ずっとこういうことで慣行にもなっているし、それ守られてきた。守られなかったことがあったのかな。

### ○櫻澤 誠

あまり明確に御記憶にないですか。

### ○石川元平

うん。

### ○櫻澤 誠

そんなに。

### ○石川元平

そんなに闘争の中で相違する、特に高教組との関係でというのは、あまりぱつと今。高校がやりたいということであつたのに、沖教組がまたブレーキをかけた、これはあつたかもしれない。今、急に思い出さないんですけどね。

### ○櫻澤 誠

わかりました。それから連合加盟に関してですが、委員長が福地さん、副委員長が石川先生、そして中頭の委員長だった有銘先生、そういう中心の執行部が反対をする中で数で押し切られたということでしたけれども、言ってみたら執行部不信任みたいな話なわけですよ。だけれども、それでクーデターのような形で全部総入れかえになるわけではなく、執行部としては継続していく。さらに石川

先生は九一年に委員長になられるという。そのあたりは、連合加盟自体が至上命題で、それさえ通れば、また執行部を信任するという、そういう感じなんですか。

○石川元平

結果として、そうなったと思いますね。一定期間を経てしまったと思ったり、非常に多いと思うんです。批判をしましたから、堂々と。「バスに乗りおくれるな」と言った人たちが連合批判を。これは機関会議の中でも、あるいはまた大衆的な集まりなどの中でも出てきましたよ。あれは、僕なんかから見ると実に滑稽なことでもあったわけだけども。

日教組からの、いわゆる準備会参加をもって加盟とみなすという、そういうお墨つきをもらってね。これを金科玉条にして押し切ったというような、それありましたけれども。組合には定款があつて、諸規程があつて、例えば文書等の書記局に関する運営は、書記局規定があつて、文書の発出などは全て委員長名をもってやるとか色々あるんですよ。こういうこと守らないでね。ある書記長が私的なもので日教組にこれを立てて、それを受け取って、それをもって、やっぱりみなすという。これは委員長も私のほうも、わからないうちに、こういうことがされて、これがセクトを中心とした多数派でもって広められてね。ということなどが事実として実はあつて、これは重大な規約違反という。ところが、そういうことにも耳貸さないうというような状況。

ですから、連合加盟反対の那覇支部などに、裁判提訴でも何でもやったら君たち勝つぞと僕は言ったことあるんだけどね。やれなかつたけどね。那覇支部などが訴えたら一悶着起こったかもしれない。

## ■「一フイート運動の会（一九八三年～二〇一三

年）」

○櫻澤 誠

それでは一フイート運動とひめゆりの設立を続けてお願いします。

○石川元平

一フイートはさつきちよつと話したかと思いますが、これは最初の会則の名称は、「子どもたちに沖縄戦を伝える一フイート運動の会」、あくまでも戦争体験のない子どもたちに伝えるために立ち上げた組織。琉大の仲宗根政善先生、いわゆるひめゆりの引率教師だった、その人を初代の代表にして、あと二代目、沖縄タイムス、あの「鉄の暴風」を書いた詩人の牧港篤三、三代目がうちの福地がやつて、そのもとで私、副代表を務めて三〇年の歴史に一定区切りをつけようということ、去年三月一五日に『未来への道標』という三〇年記念誌と、それから三月一五日の解散総会を持って、あと事務局などの清算等々全て、NPO法人になっていましたので、そういう清算を全てつがなく終えました。

何と言つても県民の財産であるアメリカから購入しました、八八八九万円の募金を集めたということに最終的になって、買い取りをしたのが一フイート、五〇時間分ですね。これだけで音なしの実写フィルムの上映から始まって、あと四つの記録映画をつくりました。「沖縄戦 未来への証言」から「ドキュメント沖縄戦」「沖縄戦の証言」、これは和・英両方ですね。「軍隊がいた島々慶良間の証言」、これ教科書問題、直接これを問題にして映画化したものですよ、慶良間のね。

「未来への証言」も一部英語版にしまして、二〇〇〇年に沖縄でサミットが開かれた時に、国連を含めたサミット参加国の首脳には事前に、これ全て送りました。それから第三回国連軍縮特別総会が八八年にあった時には、NGO要請団として中村文子事務局長等が参加をしましてね、この記録映画を持って。国連の明石事務次長に



非常にお世話になったようです。主要国に記録映画を贈呈したり。ワシントン、ニューヨーク、ロスやハワイや主たる所でみんな上映運動と講演会等もやってきているんですね。あとアメリカ以外にもロシアを含めてですね、アジア、アフリカ含めて、これはかなり行き届いています、この記録はですね。

最初はビデオでありましたけれども、これをDVD化したために非常に保管にも喜ばれて。私が学校用品の代表者をしておりましたので、子供たちにこれをどう伝えるかということで始まった運動の趣旨からして、このつくられた作品は、どこが受け継ぐかということとで論議しましてね。これは満場一致で、理事会でも、私が提案をしたとおり意義なく学校用品株式会社で、現在これは全部引き継いで販売されるようになっていきますね。

こういうことがあって、現物の県民の財産と言うべきこの一千万フィートの実写フィルムにプラスして、まだ我々自身も見ていないものもありましたけれども、それを含めて県の公文書館にみんな寄贈、そして向こうはまた喜んで引き取ってもらいました。これを見たいということであれば、向こうで見られるようになっていきますよ、今。個人でもいいしね。そのほか、一フィートにはたくさんそのほかの、一フィートの看板、県公文書館へ渡した以外に余分の記録もありましたので、それは大田、我々の顧問であった、今、新しく沖縄国際平和研究所を設立されていますので、記録類含めてね。いわゆるガマ調査とか、遺品調査などみんなやっただんですよ。こういうふうなのを含めて、何十箱かですよ、それ全て向こうに行っています。

そういうことなどがあって、めでたく終わりましたが、その中でも、さつきも少し触れましたけれども、西銘県政の時に慰霊の日を廃止しようということで議会に提案されたけれども、粘り強く、一フィート運動が中心になりました、冲教組、高教組、その他団体を含めてですね、要請をし続けたところ、これは保革を超えて残すべきだというふうなことになって、これは廃案になりました。これが

非常に私は大きかったと思いますね。運動をやった功績として、このことは非常に大事な足跡を残していくことができたということ

で。県民に対しては、一月二日に記者会見をしまして広く、これはもうマスコミも動員しておりましたので、この終息に当たって、こういう理由で一定の役割を果たし、これからまたこれを若い人たちが、きつとこれを受け継いでいってくれるであろうと。今、いろんなことを、また若い者たちが、芽が出てきておりましてね。一定の節目ができたというふうに思っています。

あとは中村文子氏はね、かなりマスコミなどから注目された人でした。告別式の時にも、私、弔辞を読みましたけれども、自らに対して厳しく軍国教師であったことの反省の上に立って、この運動の推進をしてきたということですから、重みのある活躍をしてくれた。

## ■「ひめゆり平和祈念資料館設立運動」

○石川元平

ひめゆりについても少し前にも触れましたが、教科書問題で、いわゆるああいう記述のされ方が自分たちの学友たちに対して申しわけないというようなことで、定年を待たずに決心をして、いわゆる祈念館を造る。実際に、ああいう実は展示の専門家は中山良彦さんなんです。国内でもかなり知られた人間ですが、彼が指揮をして、何回かリニューアルもされていましてね。その間に、いわゆる若い人たちへの継承というふうなことなども今、視野に入れてやられているという。それからひめゆりだけが際立ってという、それはありますけれども、九つかな、戦前、女子の学校があったんですよ、宮古、八重山含めてね。

僕、この中山きく先生なども懇意にしておりますが、こういう先輩方、偉かったなと思うのは、一方の白梅、今の那覇の商業高校

のすぐ裏の、そこが元の学園の敷地なんです。銅像があつて、見事に梅を咲かせています、今でもね。一本ですけどね、かなり大きくなつて、よう咲いてくれます。この白梅の皆さんとひめゆりの皆さんの、非常に意気投合しまして、女学校の全体の記録を残そうということ、記録として出された。そういうことなども非常によかつたと思うし、また、ひめゆりのあの祈念資料館の中に、ほかの女子学徒隊のことなども展示でちゃんと説明されているんですね。こういうことなど等もあつて。

あと、ちよつと話しましたね、映画化の問題でのことなどを。

繰り返しますが、六・一八はやっぱり忘れてはいかんということですね。ひめゆりを語る場合ね。圧倒的多数、五分の四ぐらいの人たちが、それ以降の犠牲者なんです。要するに安全な壕から追い出されたんですから。だから、これがまた軍隊の本質だよということも、きちつと説明しないといけないのです。殉国美談にされて。その学友たちがどういう形で死んでいったのかというふうなね。荒崎海岸という所には、生き残りの宮城喜久子という方が、まだ首里に元気でおりますけどね。こういう人たちの話を聞くにつけても（宮城喜久子氏は二〇一四年一月三十一日に死去）。

あと一つ忘れてならないのはですね、ガマを保存し、土地を事前ですよ、購入して、それを無償で同窓会に提供した二世がいたということ。これは戦後ですね、私が最初、ひめゆり、健児の塔へ行つたのは小学四年生の時です。アメリカのジープとGMCの間ぐらいのがちようどありましてね、それでヤンバルから南部戦跡にということで行つた時に、ひめゆりのガマにも健児の塔にも入りましたら、まだ遺骨がそのままです。遺品もそのままの状態、これ四八年です。その土地を購入した二世はなぜ購入する決心がついたかと言つたら、僕らがちようど見たのと同じような状況だった。その現場で、いわゆる戦勝者の軍隊、アメリカ兵たちがチューインガムをかみかみ、コーラを飲み飲みしてね、実にふざけたような格好等、見るに堪えなかつたという。何としてもそこを聖地として残さ

なければならぬということ、いわゆる私財をはたいてその土地を購入し、長いことこれ、伝えられなかつた。これあまり、また広く知られてないと思います。これをひめゆり同窓会に寄贈したわけです。これがあつたということね。

だから二世の存在。沖繩の人たちの救出作戦に日本語で通じない人たちにはウチナーグチで語つて、信用してガマから出てきて救われたという、そういう存在非常に大きいです。全体として上陸部隊が一八万人余ですけども、その五〇〇〇名程の、あれは二世部隊、いわゆるある意味でそれをわかつているわけですから。戦争前からちゃんと日本と沖繩の関係、みんな調べているんですね。アメリカ、科学戦やつたんですよ、徹底して。歴史や文化、みんな調べています、言葉も。沖繩戦にまた参戦しています。

サンフランシスコから一〇万人分の食料、テントや医療品もちやんと送つて、事後のことまで。これ、不十分ではありましたがね。僕らも捕虜収容所に入ってわかりますけれども。それでもこういう体制をとつて、僕らある意味で生き返らせたわけだから。

今、有名なのは第三外科壕です。その直線距離にして、右斜め前方一五〇メートルぐらいの所に第一外科壕があつて、第二外科壕はまだ私なども行つたことがないですが、これは人知れずあるようです。

## ■「命どろぼう」の沖繩の平和思想

### ○櫻澤 誠

最後に、本日、石川先生のほうでご用意いただいた「命どろぼう」の沖繩の平和思想についてお願いします。

### ○石川元平

こういう一フィート運動、沖繩戦からひめゆり学徒たちの、その思いを結実させた施設だとか、また平和祈念資料館等々、見ていき

ますとね、私はそこに「命（ぬち）どう宝」という、命こそが最高の宝なんだよという思いに行き着く。早稲田大学の鹿野先生は、沖繩の平和思想と言っておりますが、思いとしては私もそういう共通するものを持っておりましてね。この命どう宝というのを最初に詠んだのは、琉球王尚泰ですね。

尚泰は、あの史劇、「首里城明け渡し」では筋骨きどおりだと、真実を伝えていると思うんですが、連行されているんですよ、松田処分官にね。王妃も伴っていませんよ。重鎮も一緒じゃないですよ。あれは今流に言えば、あの連行は拉致です。こういう中で、那覇港から旅立つ時の歌が。これは尚泰自身が詠んだのか、説は分かれていません。歴史家の山里永吉が、そういう歴史的事実に基づいて、これ後世に伝えようということで、いわゆる史劇にして尚泰をしてこれを言わしめたというふうな琉歌ですね。

こう詠みます。「戦世（いくさゆ）ん終（し）まち」、終わるのは「終（し）まち」です、済ませてという意味ですね。「戦世（いくさゆ）ん終（し）まち、弥勒（みるく）」、「弥勒（みるく）」はヤマトの「弥勒（みるく）」のこと、一緒です。「弥勒（みるく）く）世（ゆ）んやがてい」、弥勒の平和な世の中もやがてやってくるよと。「嘆くなよ」、これは方言では「ナジク」と言います、「嘆（なじ）くなよ臣下、命どう宝」というふうに。これは、八・八・六の琉歌にして、実際この史劇見ましたけどね、伝わってきました。今に伝わるような、感ずるんですね。昔と変わらない、国、中央と沖繩との関係、そうあるんだなど。だから今、拉致問題は朝鮮、いわゆる北朝鮮に拉致された、それだけじゃなくて沖繩の中にも昔からあったんだというふうな、そんな思いをしまして。

渡嘉敷の島で、退職した校長が家族で生き残ったんですが、「命どう宝やさ」、命が宝なんだよとお母さんの、その言葉に死ぬのをやめて、家族が救われたという。これ、同じようなことは共通してあるんですよ。沖繩のこれは、僕は長い伝統的なものというふうに受けとめるべきだと思うし。命（ぬち）のスーヅの話もしまし

たね、命のお祝い。

例えば、私の今、平和運動する一番の中心に、肝っ玉になっているのは、私の自作のこの言葉なんです。「戦世（いくさゆ）ぬ哀り、忘（わし）てい忘らりみ、いちぬ世（ゆ）になていん命どう宝」、戦世の哀れな姿、忘れようにも忘れることができない、いつの世になっても命こそが一番の宝なんだ。「いつの世になっても」というようなところに、僕は一番意味を持たせたつもりです。時代を越えて、これが風化していくんじゃない、命こそは普遍的価値を持つものだというふうな、こういうことで、これは僕は自分のうちの床の間に飾ってあります、自分で軸装にしたものをね。

最近、非常にまた勇気付けられたのが、早大の鹿野教授の沖繩の思想は命の思想と言って、これ非常に励まされた気持ちがありました。『沖繩の戦後思想を考える』というのを、ぜひこれを精読してみたいというふうな、そんな感じしております。

沖繩の黄金（くがに）言葉にですね、「手（てい）ぬ出（い）じらー意地（いじ）引き」、手が出そうになつたらけんかしますよ、子供でも誰でも、こう手が出そうになつたら意地を引きなさい、気持ちを引きなさい。逆に意地が出そうになつたら、手を引きなさい。これは、広くお年寄りたちはこんな言葉はよく知られて、また子や孫たちにも言ってお聞かせてきています。

琉球王朝時代を象徴するものとして今、万国津梁の鐘という首里城正殿の鐘です。その鐘の中にいわゆる「三韓の秀を鍾め」というのがあるし、「大明を以て輔車となし」とか、「日域を以て唇齒となす」なんていう。これは世界へのかけ橋という意味ですから、万国津梁は。沖繩が実際そうなっているということです。世界に四〇万人のウチナンチュがいるんですから。ただ沖繩県人は入りませんよ、ウチナンチュなんです。だから五年越しのウチナンチュ大会は、沖繩県人大会じゃないですよ、ウチナンチュ大会なんです。

そしてこの出会いの事を、これ「イチャリバ」というふうに沖繩



で発音します。「行逢（いちやり）ば兄弟（ちよーでー）、「何（ぬー）の隔ていぬあが」、こういう発音します。だから会った時期からもう兄弟、お互いに。そういうことでの、これは共存共生の、そういう生き方だと思えますね。

そういうことがあったために、小さな沖縄王国ではあったのですが、アメリカともフランスともオランダとも修好条約を結んで。これ、国際条約ですよ。平和裏に暮らしてきた。ただ、明治政府が軍隊を持ってきて逆に、武力併合した。

それとですね、次に精神風土、これも雑把みたいですけど、しかしこれある意味で非常に重要なことなので。ニライ・カナイ思想、これは「ニレー・カネー」とも言う、これ、水平思考なんです。海のかなたに。天孫降臨じゃないんですよ。平等の地平ですね。

ということと、祖先崇拜、これは必ずしもそれだけがいいとは限りませんが、これで沖縄社会、非常によくおさまって一族も結束が固まっている。象徴するのが墓と仏壇ですけどね。つい最近、四月五日ごろから清明の入り。二四季のうちの一つなだけども、これ中国から伝わった行事。これもですね、これ大半がそうですが、客家（はつか）ということ聞いたことがありますか。中国の中にあるグループです。鄧小平など、孫文など、そうですね。中国の中でも非常にすぐれた、また結束の強い、もともと中国の北のほうにいたと言いますが、現在では福建を中心とする南方ですね。台湾もそうらしいです。

その沖縄に大挙してきた人たち、これほとんど客家なんです。象徴的な人が、あの有名な蔡温です。すごい頭脳集団がやってきまして、そして、日本で言えば東大に無試験で留学をさせたんですね。たくさんそういうので、いわゆる人材育成をし、これで琉球王国を支えた。ですから、そういう知恵が出たというんです、小国であつてもね。

それから、平ウコウというのを見たことありますか。線香を六本束ねたような板になっているんですよ、黒い。読谷など有名、平ウ

コウづくり。この意味を、私は五年ぐらい前に母親亡くしましたけれども、兄から教えられました。これをやる時に、おまえ、意味を知っておけということ。こういう意味らしいんですよ、六と六足したら一二本ですね。「一二」という数字は、実はあらゆる、いわゆる東洋でも中国でも朝鮮でも日本でも沖縄でも、時間と空間をあらわすんですね。十千十二支にも結びつくし、人間は必ず誰か千支は何と言ったら、何かに属しますね。ですから一二本の線香を立てると、いわゆるお墓に行けない兄弟の分を含めて、これでみんな代役することができるといふ。ある意味、思いやりです。じゃあプラス三というの、どういう意味かという。一二本と言ったら平ウコウの二つなんです。プラスして、平ウコウを二つに割りましてね、三本、これを合計して香炉に立ててウートーやるんですが。天と地と海の神に対するお祈りだということですね。

それから沖縄の三神と言って、ヒヌカン（火の神）、沖縄の特に女性は自分の台所のそこに一定のあれを、ほとんどが持っています。いわゆる親から譲られた香炉みたいなものです。それを持って、これは灰をみんな受け継いできて。我が家にもあります。これを毎朝、それに対してうちのお上もウートーするんですよ。火の神、これが最高の、うちの中では仏壇以上に権威があるんだそうです。まずはそれが、火の神。

それからウナイ神、女性。（腕に付けたものを示して）僕がこれ今なぜやっているかといいますと、天の四つの四神というのがありますね、高松塚で出てくる白虎だとか、青竜だとか。

#### ○櫻澤 誠

朱雀、玄武。

#### ○石川元平

ありますね。これやったほうがいいよと言って僕に勧める人がいるものですから。これやって、別にいい気持ちです。これ、四神のこれが彫られているんですよ。あと水晶ですからね。あと一つは実は妹がね、兄貴はあっちこっち飛び回って、うちにもいない、これ

非常に気になるって言うんですね。だから、ちゃんとこれをやって、外には出歩きなさいというような。妹はウナイ神ですよ、神様ですからね、私の。男に「イキー」と言います。イキーを守るのはウナイ神だと言うんですよ。

一つだけ脱線すると、古典音楽をやっているんですよ、僕は今ね。古典音楽の中にも、方言で「シラトウヤブシ」って言いながら、白鳥節というのがあって、カモメのことなんですよ。けれども、いわゆる万国津梁の民ですから、航海したんですね。あれはサバニであったり、マーラン船であったり、そういう海を旅することが多いですから、ある時船のへさきに白い鳥が止まっていると。これは琉歌に詠まれているんですよ。船のことを「ウニ」とも言います。「ウニヌタカトウムニ、シラトウヤがイチョーン」、船の高い所、そこに白鳥が止まっているよ。「シラトウヤアラン、ウミナイウシジ」、シラトウヤではないよ、いわゆるセジの身がわりだ、化身だと言うんですよ。この曲は弾いても、何度弾いても意味がすごく響きで、非常に気持ちもすっとします。この古典の中の古典でもウナイ神というのがあってね。

一つはね、これは古謝美佐子が歌って有名になった童神（わらびがみ）、天真らんまんな子供は、やっぱり性善説ですよ。童神と言います。子供は、ですから何か、非常にびっくりしたり、命を落とすような目に遭ったりする時は、魂が抜けてマブイグミまでするんですよ。丁寧な、そういうごちそうもつくって、励まして、シャーマンみたいな人をやる所もあるし、でなければオジー、オバー、特にオバーたちがね、魂が抜けたのを、ちゃんとマブイグミ、これを海勢頭豊が好きなマブイグミの彼は色々やっていますけどね。これも実は、しきたりとして今でもあります。

そんなことなどがあることと、それから沖縄に決してね、昔の人たちは学校の成績、「リキヤーなりよー」、そういう言い方しませんね。「ソーイリヨー」と言いますね。「ソー」と言ったら「魂」、魂という解釈も一つできますが、沖縄では本土で言えば「心」のこ

とを沖縄では「チムググル」と言いますよね。「チム」も「心」も二つ重ねる、こういうことであるんな言い方します。「チムジュラサ」とか、「チムガナサ」とか、いろんな「チム」を使うことが非常に多いですが、この魂が何ていうの、立派に育ちなさいよという意味、そういう意味で。頭のいい子にならなさいよとは言わないですね。人間的に、やっぱり立派にならなさいよという。

大みそかの日に、ネズミに食事を与える、ごちそうを与えることまで沖縄ではやったりもします。うちの母などやっていましたね。うちの守り神、野良のうちは、ハブなどもよく入ってくるので、これネズミがちゃんと知らせてくれると。共生共存しているわけですね、ネズミが守ってくれると。これ言葉もあるんですけどね、実は。オジー、オバーみたいな格好の言葉使って、おあがりくださいみたいなことでお供えをして、食べさせるということもあるんですよ。

結（ゆい）のことはよく、ユイマールのことはよく知られていますが、最後にサンザンという言葉です。海勢頭豊がザンの歌もつくっていますね、彼、「ザンの海」という。ザンは、彼は、いわゆるジュゴンのことです。ジュゴンは、しかし何に似ていますか。

#### ○高橋順子 人魚？

#### ○石川元平

勾玉に似ていませんか。海勢頭豊は非常に詳しい解説を、彼、書物でもってやります。歌でもやります。本土でもそうです。古い仏閣の跡や、沖縄でも聖地のね、いわゆる城跡ですよ。それから元知念村、南城市の岩場ですよ。

#### ○高橋順子

斎場御嶽（せーふあーうたき）。

#### ○石川元平

斎場ですよ、斎場御嶽。発掘すると、金とめのうなどの勾玉が出てくるんですよ。これは、物すごく古いんです。これはまた本土に

も共通してあるという。

これをね、じゃあ沖繩ではどういう利用をしているかといいますと、シーミーなどのごちそうを墓に持って行きますね。包んで、ただ持って行きませぬ。サンを結うんです。このザンの形にしたものを、適当な葉っぱで結んで、ごちそうの上に載っけて包んで、いわゆる守らすんですよ、それに。

そして、旧の何月何日ということ、シバサシという一つの、ちよつとした家内行事があります。軒々に、特に四つ角などにスキでサンを結って、これをずつとさしておきます。ある意味で、うちの守り神だと言います。小さくすれば、こんな小さなサンなんです、ザンなんです。これ、ずつと受け継がれている。

こういうことをたどっていけば、ヤマトとのいろんなもの解明できるものが、海勢頭君はあると言っているんです。沖繩がリードする要素があると言っているんですよ。だから、こんなことの事実があるものですから、そういう本土には、あるいはあつたかもしれないが失ってしまった特異な精神風土が今かなり、まだまだあるということなどがあるものですから。こういうことを含めてですね、沖繩では命というものの重さをね、やっぱりこれからも私は考えていきたいなということ、ちよつとまとめてみました。

あとは、やっぱり大震災がありました時に、私はもうつくづくね、世界の人々が目覚めるような、こういうことに、あの災いをもって福となししめることができないかなと思つたのは、この世界のもろ人が、あの状況を見て、この軍事にまさる生き方ですよ。これを防ぐ生き方、どうすれば命を守って、そして共生ができるのかという、こういうことを、これは短歌に詠んで『赤木』などで発表しましたけれども、そういうことにも繋げたいと思ひまして。沖繩には、軍事力にまさる文化力、これは潜在的にかなりあって、沖繩のしまくとうばの、これをもつと発揚していけばですね、若い人たちにもその認識を持たせることができ、この未来を担う子供たち、孫たちにも受け継いで、これは必ずかなりの世界の人類に、もちろん

国連にも評価されるようなこととなつて、この島が守られて軍事のようなものは撤去させる。そういう国際世論づくりもできて、内なる我々の心の中にも、そういう思いが築かれていってというような、この思いが実はあるものですから。

あと、未解決の問題としてね、これはもう御存じのことでしょうけれども、未拾骨遺骨が四〇〇〇体前後あるんですよ。政府は数百体と言っているんです。これ、絶対違います。朝鮮半島だけからの強制連行を見ても、ある研究者によると一万三〇〇〇名以上、沖繩で軍夫は死んでいると見ているんですよ。どれだけ元気に帰ったかの記録がないんですよ。一部ヨンヤンなどに碑がありますけどね。特に盧武鉉（ノムヒョン）政権になつてから調査委員会が設置されて、これずつと継続をしているということは、ぜひ承知しておいてほしいな。強制連行のことなども視野に入れて、これは解明をすべきだと思つていますし。

不発弾は年から年中やっていますが、三三〇〇万発以上の銃弾、大小撃ち込まれたんですね。どれだけの確率で不発弾になるということは、ちゃんと数字が、式があるらしいです。これから割り出して、現在、二〇〇〇トンを超える不発弾がまだ地中に埋もれたまま、一部海を含めてね。宮古などでは、たまに港の中で、これも処理がされたりもしておりますので。

それでも忘れませんのは、野中官房長官時代に国会において、政府の責任において沖繩戦の調査をするという約束したんですよ。ところが、いまだ果たされていません。ですから、これからのいろんな基地問題、これからの危険のそれを訴える場合には戦争をしでかしはしますよ。ところが責任を取らないということ。これも責任取らない一つの例。さつきから鉄道の話や、いろんなこともやってきましたけれども。

そして、今、安倍晋三を中心にこういう世の中つくりようとしていますが、この人たちが行くんじゃないですよ。安倍のオジー、戦争犯罪人ですよ。安保を築いた人たちですよ。その副総理の麻生は、



吉田茂の孫でしょう。五一年の直接沖繩の基地。色々企業としてまた強制連行の賠償問題にも絡んでいる。そういう人たちは子や孫たちを含めて行かないですよ。だからルールを敷くのは、こういう人たちだけども、鉄砲を担がされて行くのは一般の民衆だよということを、多くの人がわかれば、圧倒的多数を占めれば、とめることができるわけですから。だからそういうことを沖繩からは強く訴えていかないといけないという。

核抜きことは資料を含めて、この間言ってきました。私なども国連にじかに安保理に要請したこともあって。四二年が過ぎて、今ドラム缶のだとか、何とか、そんなことを今、騒いでいますが、肝心な核ということなどについては、ゆめゆめ忘れていけない大きな未解明のこれが残っているというふうなことを含めて、大体以上です。

○櫻澤 誠

ありがとうございます。時間もありませんが、もしどうしてもという質問があれば。

○石川元平

繰り返しも随分やってきた回でもありましたけどね。

○櫻澤 誠

そうですね。またおそらく次回、近年のことも含めてということになると思いますので、今日はこれで終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。

## 第6回 インタビュー

---

日 時	2014年6月28日（土） 13:30～19:00
場 所	沖縄国際大学13号館1階研究所会議室
話し手	石川元平
聞き手	佐藤学 黒柳保則 野添文彬 櫻澤誠 高橋順子

## ■「大浜方栄発言について」

○櫻澤 誠

それでは最終回を始めたいと思います。黒柳先生とご相談をして、石川先生には事前にお伝えしてあるのですが、前回、七〇年代終わりから八〇年代にかけてのお話を伺う際に、教育関係では避けて通れない一つの出来事だったと思うんですけども、大浜方栄氏の『教師は学力低下の最大責任者』、そういう発言をして物議をかもしたという、そのあたりのことについて伺えていなかったのも、最初にちよつとそのことについて触れていた上で、今日の話を進めていければというふうに思っております。

○石川元平

大浜県教育委員長、七七年一月五日に就任をしましてですね、彼が著書を出したのが七九年の五月一五日。いわゆる保守県政誕生後なんだけれども、七七年に、平良幸市知事時代になぜかとよくわからない。革新知事時代になぜ彼が。お医者さんで、後に参議院になった方ですが。その年、一月に教育庁は第一回基礎学力調査予備実験テストなるものを始めて、一二月三日に沖教組学力問題で県教委と話し合い。その七〇年代の後半はですね、もう主任制やら、このさまざまな県内でのいろんな取り組みがあつて、話し合いに私出席したかどうかよくわからなかった。いずれにしてもそういううちの資料にはそういうことになっていて。

七八年にはですね、歴史的に非常に重要な、日教組の第二七次の全国教研が沖縄で開催をされたという。これはもう社会現象的には右翼の妨害がうんと掻き立てられた中でしたけれども、進軍ラップで乗り込んできて、あとは沖縄民謡で帰ったというふうな、こういうことなどがあつて。これはほかの労働団体、いろんな県民の支えがあつて、全く他県でやられているようなああいふ妨害は出なかった教研でした。

二月一五日にいわゆる県教育庁基礎学力テストを実施しています。主任制等の話が、これも具体的に県教育庁から、もう腹を固めてこれを実施したいということでも申し入れる文書がなされている。二月一日には西銘順治、いわゆる保守知事が誕生するわけですね。

七九年になりますと、さっきのコラム、二五〇ページぐらいになるんではないかね、刊行されると。これにはかなりびっくりしたというふうなね。現場もそうですが、多くの県民がびっくりもし、あの意味ではまたこれを、この沖縄では「シタイヒヤー」と言うんですが、「ああ、ようやくくれた」というあれも当然あるわけ。八〇年に県教育委員長が大浜から翁長助裕に変わって、彼ももちろん、もう生粋の保守派の論客でした。大浜は参議院になるんですが、これはもう私のあくまでも推測ですけどもね、大浜の意図が那邊にあつたのかという。本当に純粹に子供と教育のことを心配してのいわゆる教師批判でも、沖教組批判でもある、そういう提言だったのかなという、これはちよつと疑問視するわけですね。西銘知事の出現で政治的意図を持ってなされたものなのか。新聞などでは全く伝えられませんでしたけれども、かなりの野心家でもありますのでね。私はそういうことであろうと。教師批判をすることによって、保守層を固めて、政界進出の足場となつた、この手段に使つたのではないのか。

沖縄ではいつの選挙でもですね、これはもう大方の専門家の見方ですが、保守票と革新票、基礎票ではどっこいと見ているんですよ。だから、あとの浮動票、あるいは買収するとか効き目のある、これほどが多くなるかによって当落が決まるという。そういうことで足固めになつたのではないのか。

それ以降、いわゆる全国状況もあるけれども、県教育庁の主要施策の中に学力向上が位置付けられ、これは今日まで学対事業ということで続いてきています。

九一年四月一五日には琉球新報、NHK主催で新報の泉崎ホール



です、教育ティーチングが開催されて、論議される中身はもう学力向上問題。これに私が沖教組からパネリストで参加をいたしました。録画されたのも家にありますけれども。私の頭の中には村松喬が「教育の森」で連載をした愛媛、香川のことなどが強く。あれは沖縄多くの人がそれを知っているわけですね。全国一位になるということ、学校現場でどういふことがなされたかというふうな、このことを強く指摘をし。それからもう一つは沖縄と本土の子供たちの学力差を、同じ一〇〇メートル競走ならスタートラインに立たせて本当に勝負できるのかと。こういう比較をやっているのかと。違うんじゃないのかと。沖縄の子供たちを三〇メートル前に立たせて「よいい、どん」だったらいい。そのぐらいのまだ教育格差、経済的格差、これがある状況の中で、いわゆる単純に本土との比較で沖縄の子供たちに、あるいは現場教師たちにムチを入れるというようなことは、それ自体罪なことではないのかという、こういう趣旨のことを私は言った記憶があります。これは、今日でも変わらないうんですが、本格的にいゆる学力テストが今日実施されても、経済格差が最大の要因だということ、文部省自身がそれを認めて、そういうことの弊害がないようにというふうなことで、一部施策の中で、大学等を含めてね、貧困の差でそういう子供のあれが阻害されないようにというふうなことを。これはある意味で非常にいいことなんだけれども。ですから、学力問題にはそういうことも含まれているということですね。

## ■「大浜方栄発言について」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら、今のお話に関わって質問をさせていただければと思います。復帰後はもちろん公選制ではなくなっていて、革新県政のもとにおいて教育委員として選ばれる

という形になるわけですけど、教育委員の選定の仕方などに教組として色々意見を言ったり、関わったりというようなことというのはあったんですか？

○石川元平

ありましたね、これは。我々が推薦する人が県教委になる。僕の記憶に非常に明確なのは、大田県政。私は八年間、教組委員長をやりましたけれども、沖教組と高教組です。事前にどういふ人物がいるかと。いわゆる教育専門家としての、高校出身の退職校長が多く選ばれる傾向にあったんですね。

この教育委員、これはアメリカから導入された戦後の制度。これはちょうど私、今の裁判員制度がある意味で似た素人の支配なんですね。専門家じゃなくて、あらゆる階層の人たちからの判断を大事にするというふうなのが、アメリカにおけるいわゆる教育委員制度でもあったし、それから今の司法の場における裁判員制度はまさにそれだということでありましたから。例えば高江洲義幹という歯医者さんがいますけどね。非常に教育に熱心で、学校教育に、特に音楽の分野などは現場でも知られている、こういう人を推薦したり。あるいは後で県議会議員にもなった宜野湾の普天間第二小学校のPTA会長をされた女性、野嵩の渡嘉敷喜代子という方がおります。やっぱり女性のあれも必要だという、これは知事の意向でもありましたので、そうかということ、高教組とも相談をして、私の名義で推薦をし、こういうふうなことでうまく。彼女は後で社民党になっただけでも、当初からそういうのじゃなかったですね。あくまでも普天間第二小学校のPTA会長ということで、活躍している姿がありました。そういうことなどで、我々は教育団体であるわけですから、意向で推薦をし、それがほとんどそのまま承認をされるという。

○櫻澤 誠

それは委員長であった九〇年代の大田県政の時ということですけど、この七〇年代の頃というのはどういふ感じですか。

○石川元平

明確なそういう推薦の依頼なんていうのはあったかな。だから、屋良から平良幸市の革新県政の時代になぜ彼がというふうな、ちよつと調べてもよくわかんなかったですね。またそういうものに我々の注意が喚起されてもいかなかったかなという感じもあるんですけどね。

○櫻澤 誠

この発言までは、大浜さんはそんなに政治的な発言をするような人ではなかったですか。

○石川元平

ないですね。医者としてはかなり知られた人でしたけどね。だから、彼はその地位をある意味でうまく利用してね、参議院にもなつたでしょう。県民のあれだけの地固めをして、参議院にもなつて、その影響力で医療関係のね、おもと会というのがあるんですね。与那原にも看護師の養成学校。元琉球ホテル、東急ホテルだった所にあのでっかいおもと苑があり、宜野湾などにも嘉数にということがあつて、県下に。事業家にもなつてましたね、晩年は。

○櫻澤 誠

それ以降の大浜さんの動きを見ると、明確にそういう政治的な方向に動いていくような時期のような感じもしなくもないですね。

○石川元平

私はそう見えています。西銘知事の出現によって、もう待つてましたとばかりに、選交代もうまくやって、そしてその固めてあるバックに参議院にというふうな。何期も参議院やっているんですよ、また。議員やってから沖縄は幅広くやっていますよ、医療を中心にね。これは県民的にはそういう意味では評価する動きは確かにあると思います。私は個人的には、うちの親戚の結婚式で彼の祝辞を受けたということなどもあつて、挨拶程度にですが、そのほかにはもう個人的なお付き合いはほとんどなかったんですね。

## ■「教組委員長になるまで」

○櫻澤 誠

そうしましたら、本来の今日の内容である、教組委員長になられるまでの話をお願いします。

○石川元平

まず沖教組委員長になるまでというふうなことで、これまでも少しは話もしてきたかと思いますが、七一年九月二九日に教職員会解散をいたします。その当時は私、教育文化部、教文部と言ってますが、そのこの副部長と青年部の副部長を兼ねておりました。翌九月三〇日に沖縄教職員組合結成、これは教職員会から移行をしたわけですね。そして、中央執行委員という肩書きでいろんな部署の部長をこの後で分けるわけですけども、選挙の時はもう中央執行委員というふうな。総務部長を皮切りに組織部長、法制部長、副委員長を経て九一年四月から九九年三月までの八年間、中央執行委員長を務めるというふうなことになります。

組合の役員選挙はですね、組合員全員による投票なんです。ですから、宮古、八重山、離島全てです、これは。そして、やはり幼稚園から一部大学まで含めてのこういう全員投票。役員選挙もね、ほとんどの選挙が、これもちよつと話をしてきましたとおり、主流対反主流という形で争われて。具体的には中頭対那覇という。組合員数も大体似ているんですよ、当時ね。中頭がやや多い程度でしたが。そういう対抗意識をおおる形で実施されてきました。那覇にはね、いわゆる共産党のレッテルを貼つてですね、中頭はこの反共的含みを持たせて那覇以外の各種組合員の支持が得られるような、この意味ではすごく巧妙な戦術。これは高度な知能的な。模擬投票用紙なるものを作つてね、これも「アンチョコ」と呼ばれましたけども、こういうものも用意をして。こういうようなことまで実際やられてました。

本土との系列化の影響も当然ありましてね、セクトが巧妙に主流に潜り込んできた。これが具体的には、前回話したように、ある時の選挙では、委員長が「セクトに乗らなければ組織運営はできない」と言ってきたんです。

私が副委員長、当時、福地が委員長ですが、立候補した時など、主流と称するグループは福地と石川に対抗馬を立ててきました。福地というのは皆さんご存じかと思いますが、これはある意味でこの比屋根というトップの委員長がいたんですけれども、副委員長であつても比屋根が沖教組の顔とは見ていないんですね、世間ではね。そういう意味で福地が沖教組の顔と目されていた。対抗馬を立ててきた、私にも。それはもういわゆる沖教組から排除しようという企みだったわけけれども。これはもうトップにも、私もズバリ言っただけけれども、主流、反主流ということじゃなくて、我々こそ本流だと言ったんですね。だから、ああいうセクトに乗るような、そういうことは拒否をしたわけですけども。

我々の姿勢については高教組、執行部、それから県労協関係などからですね、もう沖教組の選挙のことは伝わっていくんですよ。そういうところから非常に激励をされてきたし、また「はぐれ三羽ガラス」と言われたこともあるんですね。そう言われながらも僕らは激励をされたことがあります。

沖教組の委員長は初代平敷、二代比屋根、三代福地、四代私で受け継がれてきました。私の委員長選挙の際にはね、対抗馬出ないんですよ。専従役員の中には書記長が私より四歳上。これはいわゆるセクトと見られた人物。もう一人は三歳上の専従がおりましたけれども、彼は琉大の学生会長経験者で、私はマリンの司令官と言っておったぐらいの元気があつて、いつも選挙になったら前面に出ているんですよ。僕なんかは本部務めで、いつも後方で策を立てるようなあれでしたけども、こういう状況だったんだけど、この彼は委員長を福地と争った人だったんですよ。積極的に私のもとで副委員長で頑張りたいというように言ってきたんです。また事実、なっ

て後もね、書記長とよく談判するんですよ。専従の会議の中でもね。そんなことなどがあつて、つまるところは無難な石川ということに落ち着いたのではというふうな感じでありました。どこからともなく大田知事の息がかかっているというふうな、これは大田知事との長い付き合い等々も色々あつて、これ後で出てきますがね、大田知事をどういふ関わりで担ぎ出し等々にあつたかというような、こういうことは少し後で触れますが。

石川丸ということで船出しましたものの、所詮は呉越同舟のようなスタートでありました。これがもう非常にまたはつきりしたのがね、連合加盟問題で、ある意味で高教組、追いやるような形になつたんですよ。最終的に円満な形はとりましたけどね。約八年ぐらいかけて高教組、委員長は何回も、三名ぐらい変わりましたけれども、粘り強く再統一の話し合いをやつて、九六年五月一〇日には沖教組と高教組の間で協議会が結成をされた。これは非常に円満な形で運営されて、沖繩の教育現場を担う組織がね、仲たがいはいかんというふうなことで、これはもう大人になつてきましてうまく、今日もそれが続いています。

## ■「教組委員長になるまで」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。最初に確認させていただきたいのは、お話の途中で石川先生を含めて「三羽ガラス」と言われたとおっしゃっていましたか、ほかはどなたですか？

### ○石川元平

亡くなりましたけどね、教育文化部長をしておった宮良豊吉という、これは音楽教師ですが、沖音協の会長もしておつて。六三年からの海上交換会にもずっとトランプペットを吹いて、中頭支部出身ですけどね。彼が教育文化部長として、当時は高教組も単一的連合



体ということ、沖教組の組合員でもあったわけですよ。役員も当然、高教組からも参加してましたので、松原というね、彼は社会科のいわゆる歴史でちょっと知られた人間でもありましたけども、彼を調査部長に迎えてという、そういうことです。はぐれ三羽ガラスなんて言われたのは、石川と宮良、松原の三名のことです。

ところが、僕らとしては堂々としたそれですよ。よそで大勢が暴れ回っているような感じの中でね。三名と言っても、その中で当然また福地はでんとしているわけですよ。彼はその中には加わってきませんので。淡々としていたから。会議中も物を書いていました。

#### ○櫻澤 誠

日教組との関係の中で、セクトに乗らなければというような話と  
いうのは、日教組は日教組の中で派閥、セクトがあるわけですよ。その沖繩に影響を及ぼそうとしているセクトというのは、全体の中ではどういいう位置にあるような勢力なんですか。

#### ○石川元平

あのね、日教組は非常に苦々しい思いで見えてきたわけです。日教組がね、そのセクトを利用したのは、連合加盟問題だけです。

いわゆる中央委員会や大会決議機関、いわゆる複数で行きますからね、裏会議、事前対策会議等々にはずっと我々が参加してきましたので。その一時期に一部入ったのはあるかな。書記長などが入っていましたから。ところが、そこは非常に用心深くずっと見られています。後でうまく利用するんですよ。連合に加盟を実現せんがために準備会に参加したことをもって加盟と見なすという指示を、そこからおりてきたんですよ。それを書記長グループが、もう数の上では多勢を握っておいりましたからということであって、日教組としては非常に彼らたちは警戒心を持って、これは最後までですよ。ただ、日教組の中にもいわゆる幾つかの県で元氣のある県、いわゆるそのグループを抱えていて、これは九州の所にありました。そういう所はいわゆる主流の中でもその方針はそういうことに影響を及ぼすような存在ではないというふうに、日教組の主流派は見て

おつたし、我々もその中に入って、我々が要するに沖教組の代表というようなことで九州ブロック、北海道等々。あと東北で宮城とか福島か、こういう所も出て連携等はやってきましたけれどもね。

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。

### ■「一九九〇年県知事選、大田県政との関わり」

#### ○櫻澤 誠

そうしましたら、続いて一九九〇年の県知事選についてお願いします。

#### ○石川元平

県知事選挙、大田県政との関わりですが、琉大教授だった大田昌秀氏担ぎ出しを自任する人は何人もいるんですよ。それはそれぞれあつていいと思うんだけど。福地と石川も。県労協幹部との話し合いの中でも、彼らも非公式にやっているんですよ。私たち二人直接お会いをして、後でちょっと触れますけれども、僕らにある意味で強力な大田を「うん」と言わせる材料を持つてましたのでね。実際、接触をしてきました。

彼はいわゆる東大の新聞でずっと研究してきたこともあつて、そういう広報学でも非常に豊かな知識を持って、またそういう意味で沖繩の選挙等を見て、というようなこともありました。たびたびいわゆる助言等を受けてきた経過もずっとありましてね。彼が六四歳の時に、琉大の定年六五歳ですけれども、一年前に辞めてもらって、後の取り組みを十分にやってほしい。当然、あとの一年間、その生活補償については組織で責任を持つというふうな、こういうことを彼の説得の一応材料としてやったわけです。具体的には組織内候補という位置付けをすれば、組織の関わり方は非常に強い、財政的な面も含めてのそれができますので。事実、またそういうことに

なりました。

八九年一月、これ後で選挙母体となる社大党、社会党県本、共産党県委員会、県労協センター、冲教組、高教組、全冲労連、七団体が出馬要請をします。公明党県本と革新市町村長会も出馬要請、別途ですね。これは後で選挙になってもこの体制はずっと続いていくというようなことになりません。実際、出馬表明が行われましたのが九〇年四月六日、八汐荘でありました。本人から、県労協吉元が事務局長ですが、社大党比嘉というのが書記長です、私、三人呼ばれて。いわゆる学者からいきなり政治の世界にとりような、そういうことになるわけですから、これまでの選挙の例色々あるから、まず出馬表明の挨拶文を三名で検討してくれということがあつて、三名で話し合いをした。私のほうで原案を作ることになつて、それを三名で一応仕上げて、本人に渡し。本人の後の出馬表明を見たら、僕らのものがどの程度参考になつたかなど。全く本人の言葉で、本人の思いで「ああ、さすが」と思うような、こういう出馬表明挨拶になつていました。

一九九〇年一月一日、一二年ぶりに革新県政を奪還をしたと。票差が三万六〇〇〇票。当時は新聞でも大差というような表現を使いました。

選挙後の大田県政との関わりですが、九一年に冲教組、僕が委員長になつてからは後援会副会長でずっと彼を支えてきました。九四年一月二〇日のいわゆる二期目の選挙では、これも地滑りの勝利を、一一万、これも最大の差をつけて二期目当選をいたしました。

九五年、いわゆる戦後五〇年事業ということで、三大事業を中心に一〇幾つかの五〇年事業を位置付けをして。よく知られているものは平和の礎建設ですね。それから冲縄県平和祈念資料館、これは七五年に、平良幸市知事時代に開館した平和祈念資料館があつたんですけれども、これはいわゆる戦争記念館じゃないのかと言われるぐらい、軍隊が冲縄戦にどう関わつたかというような、そういう展示が主になつていましたので、やはりあくまでも住民の視点を面

前にかかげて。ずっと、私もこの平和祈念資料館建設推進委員、基本構想を担当しましたので。これは広島、長崎や、あるいはピース大阪や立命館や、手分けをしましてね。外国を含めてスミソニアン、ヨーロッパにも行つてます。私たちは韓国へ行つて、独立記念館等々、関係施設を調査し、これをみんな持ち寄つてですね、これからの冲縄らしい資料館をどう建設をしていくかというような、こういうことになりました。それが現在のものです。あとはもう展示の段階でちよつと問題が発生しましたが、旧館の約一〇倍の面積の、現在のそれです。

冲縄国際平和研究所というのが実は大田知事の場合は、一番その思いが強かつたんですよ。これを建設をして、いわゆる世界の学者、研究者を、冲縄であらゆる国際的な会議を開いたり、そういう場をつくろうという。そこから発信をどうやっていくかというようなことに思いをいたしておりましたが、三期目の当選ならずでね、これは実現しませんでしたけれども。

それから九三年の全国植樹祭。西銘県政時代に北部の明治山というのがあるんですけどね。明治天皇のゆかりのある、冲縄にも那覇の明治橋が。県庁の前のは御成橋と言ふんですよ。そういうのがあつたりもしますが、明治山の原生林に近い、そこを伐採して、そこを会場にするとどうですか。なんたるこつちやと。我々が大田知事に建議と言いますか、意見を申し上げたんです。「木を切つて木を植えるとは何事か」というふうなことを。これは非常にいいと言つてすぐね。しかし北部の猛反発を受けながらですよ、会場を変更。要するに、植樹祭の理念は戦災に遭つた荒野に木を植える。その緑化運動と言ふようなことが趣旨ですから、一番ふさわしいのは南部だと言ふ、南部の山城という所ですね、これは実施をされたというふうな、こういうことです。

九七年の屋良元知事のいわゆる県民葬の実行委員。これはほとんどそういう官の立場が実行委員になつたんですが、民間から唯一私

になっている。広報担当やりましたから、これは記録を残すためには非常に入っていて良かったと思っっているんですね。県民葬のことは後で出ますのでね。

対馬丸は四四年の八月二一日に出港して、二二日に奄美の悪石島の約五〇〇メートルそこら。そこでボーフィン号によって撃沈をされる。この初の洋上慰霊祭にもちょうど大田県政時代でしたから、私も参加をいたしました。

九八年の県知事選挙、三選はなりませんでした。ある意味で最大のそれはですね、かなりの組織票を持っている公明党、(創価)学会。直前まで学会の最高幹部と私などは何名か那覇の重要な場所最後の確認までやっただけですよ。でありながら、大田の最後の打ち上げは普通の街頭の打ち上げではなくて、与儀公園でやっただけです。大々的に。県民大会のような形でたくさん集まって。そこにはその学会の責任者も来たんですよ。顔も合せました。

ところが、その晩です。どういう中央との関わりがあったのか。なぜそれがひっくり返ったのがわかったかと言ったら、教職員組合員の中にも学会員がいるんですよ。良心的な学会員から通報を受けました。変わりました、うんと用心せんと、もう大変ですよというように、こういう。そのとおりに。ですから選挙の開票のそこにも顔出しも、一切、姿、形、表しませんでした。ということなどが実はあって、負けることにはなつたけれども。

ということ、沖縄国際平和研究所の建設もかなわずに、現在、沖縄平和賞というものがありますけどね。これはそれに代わるものとして稲嶺知事が打ち出したものなんです。ですから、皆さん、どれくらいの印象を持っていますか？ 沖縄平和賞と言うとね。いろんなアジアだとかよその所に、これは約一〇〇〇万ですからね、副賞。僕が一フィートの副代表を長いことやってたけど、一フィートに声かかってきたんですよ。あれは論議の末、我々は拒否したんですよ。特に石原昌家氏、平和学のね、彼も一フィートの理事でしたから、一緒になって。後で、貰えば良かったと、一フィート潰さんで

も良かったのにと言う人もズバリいましたけどね。しかし、思いはこういう沖縄国際平和研究所を沖縄から新たに発信しようという、これを潰して何が平和賞かという。そして、その使われ方ですよ。東京で会議をみんなやるんです。副賞などのあれも東京で決めるんです。沖縄でうるしがあつたりはしますけどもね、ほとんど東京です。我々からすると、ヤマトンチュが大勢占める中でこれが決められていく。そして、決まったそれはあまり県民の記憶に残らない。唯一残っているのは、中村哲医師ですよ。あれだけはやっぱりね、その値することをやって、また沖縄にもたびたび来ての話、県民とのそういう繋がりもあつた人が、アフガンで、あんな困難な中であれだけの水利事業と医療の中で尽くしたという。そういうふうなことで、今でも非常に疑問を持たれている平和賞で。

いわゆる公式ではないけれども、当時ね、非常に問題になっていた立法院。あれはもうアメリカの占領支配を象徴する立法院としてありましたのでね。しかも、一九六七年二・二四の教公二法阻止闘争のシンボリックな建物でもありましたので。意義あるそれはぜひ保存しよう。専門家の方にも耐久性を実際にチェックをさせても大丈夫だという。大城隆太郎という一級建築士が設計をしたものでしたけれども。ということなどもあって、これはぜひ残そうなどという一つの約束です。

あと一つは、仲井眞知事になって三三軍司令部壕ね、説明板が問題になりましたね。中に、いわゆる従軍慰安婦に対するどうのと。とにかく日本政府などがあんまり喜ばないような文言がちよつと入っている。これを削除したんですね。それでかなり批判を受けたけれども、今でも訂正されずそのまま。大田県政三選がかなったならば、内部は落盤したり、色々爆弾を爆破して撤退したもんですから、あちらこちらで中はね、危険な状態、これはもう一次調査は済んでますけれども、これもきちつと整備をして、平和学習のメッカにするという、こういうことにしようということまで約束してあつたんですよ。これもかなわなかった。非常にそういうことが残念な



わけですね。

## ■「一九九〇年県知事選、大田県政との関わり」

### の質問・応答

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。一番最初におっしゃっていた、大田さんの担ぎ出しを自任する人は何人もいるという中で、特に最近だと研究とかでも引用されたりもするんですけど、県労協出身で副知事にもなった吉元さんなんか、九〇年の前の八六年の選挙の時にも声をかけていたというところも含めて、インタビューに答えられていて、それが一つ中心になっていったというような評価はされたりもしていますけれども、例えばそういうところとの関わりは。

#### ○石川元平

我々は、その前の選挙ではあんまり前面に出なかったですね、沖教組。僕等がちょっと認識していますのは、県労協サイドで具体的に動きがあつて、あとわからんところで政党関係も動いたと思えますが、しかし、政党の場合は他党の動きをよく見ますから。後のPR、選挙態勢の中での責任体制を含めて、政党などはいつともそう見ますので。七団体、こうやってもね、いつもこれは世間ではあんまりわからない。

僕は共闘会議の事務局長をやったこともあるんですよ。金かかるんですよ。この金をどう作るかという。これを前面に押し出してやりたいけれども、政党は必ず後ろに引けてしまうんですよ。こういうことの中で、みんな力を合わせてというようなことで出馬表明も同時に声かけたりもしますけれども。個別的にはいわゆる政治家の皆さんが、やったこともあるとは思いますがね。あんまり組織的というふうなことではあまり伝わってこなかったですね。

#### ○櫻澤 誠

県労協は組織的にも一番財源があるんでしょうか。

#### ○石川元平

いやいや、そんなに。協議体ですから、あれは。あとの指示系統を含めてね、これは二・四ゼネストの時にもちよつと話したかと思うんですが、協議体よりもつと単一的なぐらいの闘いをB52撤去などでは実は、またそれだけ執行部に委ねてやったんです。ところが、所詮協議体という弱さもちよつとあつてね。大きな団体が異議唱えたらもうあんまり強くは出れんというふうなこと。財政的にはそんなに豊かじゃなかったです、県労協。

これに比べると教組の場合は蓄えがある。かなり持っていましたね。ですから、一年前に辞めてもらつて、生活の面倒は見てきました。あまり財政的な具体的なことは言えんけれども、そういうことでもかなり責任を持ってやつてきたと。

#### ○櫻澤 誠

何か教組の役職に就くとか、雇用するような形ではなく。

#### ○石川元平

いやいや、それはもう自由に。彼はある意味で専門家ですからね。この間、負けた、勝つたはずと見てきて。それに僕らに色々、本人に関わらない選挙でもいろんな助言等を受けてきましたのでね。まずマスコミじゃないですよ。独自の世論調査、県民の。何を求めているかというようなことをね、これは別途チームを作つてね。こういうことなどは具体的取り組みの中で参考になつたと思います。

#### ○櫻澤 誠

もう一つ質問ですが、石川先生は当時、大田知事のブレインの一人と目されている存在であつたと思うんですけども。九五年以降の話についてはこれからもうしばらく続きますので、それはまた後で伺うとして。一期目の県政に関して、いわゆるブレインというような形で、公じゃなく色々相談を受けたりとか、庁舎で色々作業をしたりとか、そういうようなお話がもしあれば可能な範

困で伺えればと思います。

### ○石川元平

知事公舎、これは与儀のほうにありますけどね。そうね、ちょっと印象に残ってるのは、よく酒は飲みました。彼もウイスキー等でシーバスリーガル好きで。

それ以外に知事公舎でね、新年を迎えたことがあるんですよ。これは普通の、ただ新年の祝賀のあれではなくて、そこにアメリカの総領事呼んで、そこでいわゆる琉球古典音楽と古典舞踊等を鑑賞させました。一緒にやりました。あの当時のね、すごく印象に残っている総領事が、クリス・テンソンと言いましたね、奥さんが韓国人だったんですね。このクリス・テンソンはいわゆる日本語も非常に達者なもんですから。我々は、いわゆる米軍人軍属等々の事故、そういうことで総領事宛てに何度も抗議もやっただけですよ。それに対してもある意味ではまじめに聞いてもくれましたけれどもね。

嘉手納の基地のいろんな騒音、爆音問題等があった時に、彼はそれを嘉手納の司令官、空軍大佐なんですかね、彼と談判をして。要するにあれは近くに屋良小学校があつて、今の嘉手納道の駅の道開いた前にね、シンボルのな松があつたんですけどね。もう今は枯れてないです。小さな丘があるんです。そこが「安保の見える丘」。

「安保の丘」じゃないんです。今、「安保の丘」というふうな、施設局あたりがわざと書いてありますけど。沖縄から安保体制の矛盾が見えるということで、「安保の見える丘」だったんだけれども。

その一〇〇メートルちよつとぐらいの所に、ジェットエンジンの調整をする場所があつたんですよ。これがもう飛行機が飛ばなくともうるさい。これを司令官と談判をして奥のほうに移設をさせました。その時に司令官はね、「あんたはどこの公務員か」と言われたと。そうしたら、またこういう迷惑をかけた子供たち、特に隣接したこういう状況の中で迷惑をかけては「良き隣人」と言われないよと切り返したというんです。こういうこともやりながら。ですから彼と一緒にそういう知事公舎で酒を酌み交わしたり、嘉数の公邸

には何度か呼ばれました。すぐ、そこからまた普天間基地も見えるんですよ。彼が国務省に戻った後もお手紙をいただいたり、ということなどが。非常に強く印象に残っているものの一つですね。

あとメアなどとのあの差ですよ。普天間爆音訴訟団として直接会って退島要求したんですが、その文書を僕が書いたんですよ。その中にこういう総領事もいたんだぞという、クリス・テンソンのそれをね、例に出して、あなたの対応はどうなんだと。こういうことなどをちよつと思ひ出しました。

### ○櫻澤 誠

ほかにご質問いかがでしょうか。

### ○野添文彬

吉元さんが言われていることなんですけれども、一九八〇年代終わりになってくると、ゴルバチョフがソ連に出てきて、冷戦が終わるんじゃないかと予想されていたといえます。その冷戦が終わることを見越して、沖縄としてもそれに対応しなければいけないというところから大田県知事を担ぎ出していったということが言われています。それは吉元さん以外にも、石川先生も国際情勢の変化を睨みながら、基地問題を解決するための革新県政をやつていかなければいけないというお考えはあつたでしょうか。

### ○石川元平

吉元さんぐらいの大きなあれは持ち得てなかったと、正直思います。ただ、いわゆる後の平和学という、自らの体験のそれを通して平和な島にという、そのことは県民に広く知られていましたので、ぜひ彼の力で。西銘さんがやはりもう本土政府べつたりで、非常に強権的なあれでやってきましたのでね。そういう反動もあつて我々の、特に教組関係者の中にはそういう意味での平和な沖縄づくりに対する、また具体的に就任して後の期待もね、非常に強くあつて。そういうことではもう事あるごとにそういう懇談は強くやってきました。

### ○野添文彬

革新県政から西銘県政が生まれる時期は、革新県政下では沖縄は経済発展できないのではないかと気が持ちが県民にあったということも言われますが、逆にその保守県政から革新県政に変わる時というのは、このまま保守県政であつても何も変わらないといった閉塞感というのはあつたとお考えですか。

○石川元平

特に復帰前と復帰後を境に、前後ね、今日までそうですが。これ最近も県民所得差が出ましたね。沖縄は全国最下位で二〇一万と。東京が四三〇何万か、半分以上なんです。これはもう特に私などは強く、選挙の街宣やそういう場所で言ってきましたが、基地が例えば圧倒的に過重負担させられている。現在七四%。基地が県民生活の向上、所得含めて経済生活を向上させるのであれば、なぜ復帰何十年経つてもね、県民所得はこういう状況なのかと。

所得比較、具体的にこれを指摘をし、基地は経済発展の障害なんだという、そのことを翁長市長の言葉で一昨年からだ。この新都心の返還前は一八〇名しか働いてなかったと。僕の記憶は九〇〇名余だつたんですよ。ハウスメイドとガーデンボーイでね。ところが、最終的には二〇〇名足らずになつていたのかと。これは総領事の前で彼が言つて、現在二万人超えていますよということ、総領事はそうです。これは新聞にも出ましたけど、それぐらい要するに基地が経済発展の障害、阻害する原因になつていんだということ、これも数字がはつきりしましてね。

## ■「一九九五年米兵少女暴行事件、県民大会とその後の動向」

○櫻澤 誠

続きまして、米兵少女暴行事件のところからよろしく願ひしま

す。

○石川元平

一九九五年の米兵の少女暴行事件、これはちょうど私が沖教組で委員長をしていた時の事件でありまして、そのことと県民大会、その後の動向についてということですが、九五年九月四日に海兵隊二人、海軍一人による少女暴行事件。場所はこれ金武町で発生をいたしました。本当に勇気ある少女と家族の告発で事件が明るみになったわけです。やんばるのあまり基地問題でね、全く騒がれないような場所でその事件が発生をした。

一〇月五日、約一カ月後に沖教組、高教組、日教組主催で米兵による少女暴行事件糾弾総決起大会を普天間高校のグラウンドで開催をして、四〇〇〇名余が参加。これは実に、復帰後、教組的な単独としては最大規模の集まりになつて、石平の司令部まで抗議のデモをいたしました。

その主催者挨拶、私のほうでやったわけですが、まずはいわゆる子供の教育を担っているこの教組のそういう決起、これはかなりまた県民にも刺激をしたと思います。一〇・二一県民総決起大会にこれが繋がつていって、約八万五〇〇〇の結集と言われていますが、これは宮古、八重山含めると九万一〇〇〇ということ。組織内部ではね、宮古、八重山は一緒に決起したんだと。数字言うなら、この数字使ってくれて言われましたので。

いろんな意見、それぞれ複雑な思い、大田知事もその中で少女の尊厳、それを守れなかったというふうなことで、県民に対するお詫びの挨拶がありましたけども、四項目要求を決議の中に織り込みました。一は米軍人の綱紀粛正と軍人軍属による犯罪根絶、二は被害者に対する謝罪と完全補償ですが、全県民的には三、四ですね。三は日米地位協定を早急に見直せということ、四は基地の整理縮小促進。この少女暴行事件を契機に地位協定の問題をも、この間あらゆる団体で県議会や、地方議会や、あらゆる集会等で何十回、何百回やられてきたのか。これを運用見直しということで、今日まで全



く何のために、米軍に対する配慮で運用。県民の要求に対するそれには今日まで全く繋がっていないというふうな思い。

九六年四月一二日に橋本・モンデール会談。少女暴行事件等の関係で、あんまり解説されないんだけど、私は非常にこれにこだわりたいですね。橋本・モンデール会談で普天間基地の全面返還を發表するんです。これは私もがね、与儀公園で集会をやって、デモ行進で、牧志のバス停あたりでそれを聞いて、みんなバンザイした記憶があるんですよ。最初にこれ県内移設の条件付いていないので。これ全面返還じゃないかと。

九六年四月一七日、橋本・クリントン会談が開かれ、共同声明でこの安保の再定義がなされて。つまりアジア太平洋安保体制に変質拡大をされたという理解です。沖縄の痛ましい少女、この暴行事件と県民大会の要求が、いわゆる日米政府に逆手に取られて、この安保体制強化に利用されたという、ここでも県民の要求が踏みにじられてきたという強い思いをいたしました。

九六年九月四日、高校生による県民投票。これは一般の県民投票に先駆けて六八校が最終的には参加をして、四万四五八二人。投票率で九三・七％と。高校生の実行委員代表、投票結果を大田知事に報告をしております。まだ具体的に姿見えませんが、私はあの当時のこの実行委員のリーダーたちの中から、本当は沖縄の若い新しいリーダーが出てくるんじゃないかという、非常に期待を持って、今ちよつと探しているんですけど、まだ見当たらないんですけどね。私はそのことを、名護の市民投票等みんな含めて、『教育評論』に書いた記憶もあります。

九六年九月八日、県民投票で、これ四項目要求をいたしました。投票率は有権者の五九・五三％ですから、これも堂々とした投票率だと思えます。自民党と軍用地主会は邪魔をしたんですよ。そういう中でこういう投票率を見れば、これはもう大成功だと。全有権者の五三％を占めた。そして、米軍基地ノを明確に意思表示をしたという、そういう結果を示しました。

同じく九月一〇日ですが、大田・橋本会談が開かれて、閣議決定という、現在よく新聞に閣議決定という言葉が出ますが、これはかなりやっぱり拘束力を持つ、実効性のあることだそうです。閣議決定というその意味をあの時、吉元さんなどから僕は聞いた覚えがあります。

どういう内容かと言うと、一番目に普天間を返還すると。一〇四号、これはいわゆる実弾砲撃演習です。金武から恩納のブート岳と恩納岳に県道越えでなされた一五五ミリ実弾砲撃演習のことです。この解決に全力を尽くすと。それがもう具体的に、これは日出生台から矢臼別までの五カ所に移ったわけですが。二番目に米軍基地の整理縮小を推進する。米軍の兵力構成を含む軍事体制についての米軍の議論。これが米軍を幾らにするから、あとでずっとよくこんな論議も新聞を賑わしますが、最近では立ち消えの状況ですね。三番目に日米地位協定の課題についての見直し、改善に努力。非常に抽象的な表現ですけども。四番目、二一世紀・沖縄のグランドデザイン構想を踏まえ、沖縄県の自立と雇用の確保及び県民の生活向上に与党の協力を得て、全力を傾注する。このため、特別の調整費五〇億円の予算計上。これが新聞などに大きく出ましたね。五番目に、沖縄政策協議会を設置、官房長官、国務大臣、沖縄県知事で構成し、沖縄政策協議会というのが今日続いているんですね。県民要求をぶつける場所になればいいんですけども、政府に言いくるめられる。それがだから辺野古埋立承認みたいなことで現在使われているわけですね。こういうことで、ですから、ああいう不幸な少女暴行事件に端を発したのも、本当に日米安保体制強化に利用されてきた。この一連の流れ見るだけでもね、やっぱ非常に悔しい思いなんですよね。

## ■「一九九五年米兵少女暴行事件、県民大会とそ

## の後の動向」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。まず私のほうから伺いたいのは、少女暴行事件が発生してから県民総決起大会までの間ですね。そこに関わって、教組としてのもう少し具体的な動き、取り組みというところの部分で伺えればと思うんですけども。当時、小学六年生ですよ。沖教組としても直接関わりのある小学校の児童が襲われたということも含めて、非常に大きな衝撃があつて、すぐに動き出していると思うんですけども、その時にどういう議論があつて、どういう組織で動くという体制がとられたのかという、そのあたりを伺えればと思いますけど。

○石川元平

まず起こった場所が金武町、起こしたいわゆる米兵、そこにキャンプ・ハンセンとキャンプ・シュワープがあるわけですよ。いわゆる中部と比べると、もうある意味で辺境とも言つていいぐらいのあんな場所で、新聞も少女暴行事件と書いて、この事態にもかなり内部でちよつと抵抗もあつてですね、これ強姦事件と言うべきではないのかと色々あつたので、これね、非常に心を痛めましたね。少女暴行事件で走つたという、そういうふうなことがあつて、我々も決議はそういうことを使いましたけれども。まずやっぱり県民大会の前に、一〇月五日にいわゆるこのど真ん中で、普天間基地のあるど真ん中でやつて、司令部に押し掛けたというふうなことなどもありましたけども。

五五年の永山由美子ちゃん事件。あれは嘉手納のハート軍曹によるいわゆる暴行死体遺棄、嘉手納の軍用地内のちり捨て場みたいな所に死体遺棄して。それから五九年六月三〇日の宮森のジェット機事件等々ですね。このほかにもたくさんの子供に関する事件が相次いだもんですから、やっぱりそういうことがまた再来したなという

ふうなその思いで高教組、そして日教組も副委員長が来てくれましたけれども、共同主催でそれを手始めにやろうという。

あの状況ね、かなり調べたことがあります。わかつたことは、米兵は国道でありながら、完全武装をして行軍などもよくやつて、そして通学路でありながら。一方では、例えば実弾砲撃演習を金武でこれをやる。一方では、全く普通知られてないんですけども、民間地域で武装をしてですね、隠れて構えていると。これは新聞に、おそらく何度かはその問題が取り上げられて、こういうことは地位協定上も許されてないということなども、特にいわゆる金武、宜野座ですね。久志、この通学、通勤というふうなことの問題をかなり内部で論議しました。大きい都会地であれば駄目、しかし、ああいう辺地であればこんなこと。例えば部隊が強化されると軍人も多くなって基地も拡大されるわけですが、なお危険性が増すことに繋がりはせんかというふうな。

一〇四号越えの時に、これも強く我々がその撤回を要求した理由の一つに、石川高校に通う恩納村からの子供たちの通学がね、具体的に障害になったんです。一〇四号は止められたんですから、みんなね。その抗議に対して迂回路を造つたんですよ、何億単位でね。実弾砲撃演習をやつても、迂回路を通れば通学、通勤ができる、これはあとの話なんですよね。当初はもう子供たち、本当に学校に行けない状況なども出てきた。

やんばるのことに ついても、県民の中ではあんまり理解が得られてない状況もありましたけれども、いわゆるこういう所でこの事件が起こっているというふうなことなどは、非常に懸念をいたし。かなり責任を感じたという。教職員集団としてね。子供たちの安全な登下校等々との関わりで。

その決議文を持って、私は高教組の代表を含めてね、日教組の西澤副委員長を伴って、アメリカ大使館の日米安保条約課長にも抗議をし、それから日本政府の外務省の日米安保担当課長がいるんですね、名前も当時梅谷、梅本（和義）と言つたのかな？ 出世してま

すよね。彼は審議官ぐらいまでになって、後でいわゆる米軍再編のメンバーになるんですよ。これ何とも皮肉なね。強い抗議をやったけれども、もう全く、「上司に伝えます」ぐらいの対応しかやらなかった。アメリカはある意味で堂々と日本政府、いわゆる日米安保体制のもとでどうのこうのと、彼らが今言うようなことで、そしていわゆる実際の問題としては日本政府の問題だと言わんばかりの対応をしていたのが印象に残りますけどね。そういう決議文を持つてのそういう行動をやつて、この件に対してはもう本当にかんりの色々盛り上がりがありましたよね。

#### ○櫻澤 誠

県民総決起大会が開かれるまでに関して、例えば、当時の女性団体のいろんな活動というのがひとつ大きな影響を持ったということ言われますけれども、教組としてその中でどういう形で関わっていかれたのかというあたりも伺えればと思うんですけれども。

#### ○石川元平

一〇・二一の具体的なあれだな。あんまりぴんと、今。

#### ○櫻澤 誠

例えば、いわゆる革新的なイメージが強くなり過ぎると、県民と一緒に集まるといことがしにくいので、あまり前面には出なかつたとか、そういうような話もあつたということ伺ったことがあるのですけれども。

#### ○石川元平

とにかくこれはもうある意味で、初めての総決起、数の上でもそうなりましたので、復帰後ね。大田県政を支える組織としての自負はあつたけれども、僕自身そうですね。独自の集会やつて、僕が主催挨拶をし、随分啓発をしてきたということはあるけれども、一〇・二一、それに向けた、それはむしろあまり主導したというふうな記憶はないな。

### ■「屋良朝苗氏死去、県民葬（一九九七年）」

#### ○櫻澤 誠

そうしましたら、引き続き県民葬のところをお願いします。

#### ○石川元平

これは九七年四月二日でありますけれども、その前に死去されたのが九七年、平成九年二月一四日。直接の死因は心不全による死去。享年九四歳にいられた。長いことね、病床に伏しておられたんですよ。体の具合が悪くなつたのはですね、天皇の死去の頃です。天皇が死去する際は屋良朝苗、沖縄の天皇とも言われたことも実はあつて、ぜひコメントを聞きたいと。あれは前に約束したらしいんです。NHKの記者にコメントを求められたんですね。そうしたら、体の具合が悪いのにコメント、これがテレビの映像で見たんですよ。私はすぐ異常を感じましたね。沖縄の言葉で「アンダミー」と言います。目が正常じゃないんですね。涙目でもない。涙が油で滲んだような、こういう目をされている。これはちよつと、随分体調悪いなというふうな。私はすぐ屋良家に出向いたんですよ。そうしたら、もう非常に体調が、具合悪くて休んでおられる。後でこれをね、精密検査等、もちろん子供も医者もいますけどね、二人も。後で詳しくやつたら、脳に腫瘍ができておつたんです。これがすごく長引いたんですよ。数年間です。ですから、八年ぐらい病。あとはもうね、病院での治療もそれは限られた、そういうものですから、お家で、晩年は。

私は何度もお家に通つて。いわゆる組織のもちろん跡を継いだ責任者というふうなこともあつて、後援会の最後の事務局長もやつていたし、また個人的にも媒酌人でもあるし、妻のいとこ叔父にも当たるし、もういろんなことなどがあつて、子供たちにも言わないようなことを、特にそういう沖縄、政治問題とか何とかということについては、いろんなことを僕に言つたり聞いたりするわけですよ。



今日も沖教組の五〇回記念大会レセプションをやっています。その中でちよつとしたメッセージを發しましたけれども、二度と国家権力的手段として沖繩が犠牲にされるような生き方しちやいかんぞという。もうこれがある意味で県民への遺訓でもあったわけですが、そういうことをたくさん聞いてきて、こういう復帰で本当に良かったのかということに大変悩んでおられてね、一種の悔恨ですね。特に若い人たちがこういう、いわゆる県民要求がかなわずにこんな形の復帰で、基地がとにかくもう強化される形での復帰になったということに対して、どう感じているんだろう。新聞社などでいわゆる復帰一〇年、この世論調査の結果やるんですね。やったら、いろんなこの反基地の強い思いありながらも、復帰して良かったというのは、数字は下がってはいないですよ。これだけはある意味で不思議な現象だなど思うんですが、これはやっぱり理由聞いたら、パスポートがなくなって往来も自由になった等々いろいろな。そういうことは本人としては非常に心配しておられたという。私はそのことをまた今多くの人に理解してもらおうとも思っているわけですが。

屋良家の葬儀、告別式はですね、二月一九日に那覇市西町にあります、真教寺というのがありますが、これは浄土真宗。屋良氏ご自身がやっぱり浄土真宗の信者。普通の信者じゃないですね。免許持っていたかどうか知りませんが、うちのワイフの親父などが亡くなった時は僧侶じゃなくて、屋良先生がみんなやったそうです。葬儀を取り仕切ったようですから。そういうことなどで、みどり丸という久米島航路の船が積み荷が原因で沈没をして、子供たちが数十人亡くなったんですが、それをご本人が久米島一軒一軒、子供たちの家を叩いて、やっぱりちゃんとした読経をあげてやったらしい。これはもう向こうの人たちには非常に感謝をされて、こういうことまでなさっているんですよ。大きなことは戦災校舎から色々ありますけどね、石川のジェット機の事件もそうです。そういうことまで徹底してやられた方なので、屋良家の個人葬については、ある意味でまた生前からの遺言みたいなことを「君たちで頼むぞ」と言っ

私、大城盛三、琉球政府の特別秘書やった方がいますが、新島正子という一高女の教え子がいますけれども、知念高校の教え子で、琉大名誉教授の安次富長昭と言いますが、等でいわゆる相談をして、一切の取り仕切りをやりました、真教寺で（新島正子氏は二〇一四年一〇月四日に死去、大城盛三氏は二〇一四年一月一〇日に死去）。

その時に天皇からの白い菊の供花が送られてきたんですよ。どうしようかと。いや、これは祭壇に飾らないわけにはいかないですから、これはまた大城盛三氏が特別な扱いはしないでおこうなど言いながら、一定の配慮をしました。遺影に近い所に。

無事それも終わって、あと県民葬。これは県としては初のそれになったんですよ。ですから、東北の山形でしたかな。県民葬やった経験のある県のを一応参考にしましてね。色々論議をして。実行委員会をやって、県民葬には約三五〇〇名が参列をしましたけれども、全員にパンフを配りました。屋良朝苗の県としての評価に関わる内容も、これに収めました。

県民葬には三権の長が参加しましたよ。各政党は全て党首が参加をして、県のコンベンションセンターでいたしました。

私自身の具体的な任務は、もちろん前列に座って弔辞奉読をする役目であったわけですが、一番良かったのはやっぱりこの記録を作る編集委員となって、タイトルもですね、屋良の思いをこのように込めて、『基地のない平和な沖繩を求めて』というタイトルにしたんです。

## ■「屋良朝苗氏死去、県民葬（一九九七年）」の質

### 問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。直接県民葬とは関係ないんですけれども、ぜひ伺いたいなと思ったことが一つありまして、石川先生が沖教組の委員長になられたことについて、屋良さんは直接どういふふうにおっしゃっていただけでしょうか。

#### ○石川元平

ご本人は非常に喜んでました。沖教組の委員長なんだけれども、屋良先生の奥さん、元小学校の教員なんです。私が自宅訪ねると、屋良先生も二階で仕事をね、執務をしておられる。そうしたら、二階への合図ですが、よくなるリンをこうして「お父さん、教職員会長石川さんが見えだよ」と。教職員会長と、そう呼んでくれました。

直接いろんなことを、自分がやり残したことを、やってきたことを直接聞けるということ、新聞はまあ全ては目を通さなかったのかな。いろんなことを聞くんですよ。要するに、さっきも言ったけれども、特に本人としては悔やんでいる。やっぱり今の若者たちがどう評価を。若者たち、こういうのを歩まされるわけですよ、歴史の中ではね。誠に申し訳なかったみたいな気持ちを、もうずっと最後までそういう気持ちでいかれました。

それからね、新聞でも、新報、タイムスに出ましたけれども、屋良朝苗顕彰期成会が読谷村にできまして、これが山内徳信さんが実行委員長でね、これから幾つかの事業を、ハード、ソフトを含めてやりますが、銅像を建てたり、演劇をやったり、記念誌を発行したり、生誕の地にまた碑を立てようという、こういうことなど色々あります。私と私の前の委員長福地曠昭、大城盛三、安次富長昭、この四名はこの顕彰期成会の顧問になっているんです。

ということ、私としては「屋良朝苗日記」が三〇回、琉球新報に、これはもう復帰四〇年を、そういう事業として琉球新報からいち早く相談がありましたのでね。それに私、相談役になって三〇回のそれにずっと関わってきましたけれども。

屋良朝苗日記一二六冊ありますけれども、これとそのほかにい

ろんな遺品等がありまして、私個人で持っているその屋良関係の当時のいろんな文物もありましたので。それで一番大きいものは沖教組の資料室の全てはね、これ何万冊かは知りませんが、大小、これ全て読谷村に寄託してあります。それを生かしてくれというのが、私は前の村長との約束なんです。リストも作ってね、そういう約束で。ですから、これで終わりじゃないんです。できたらネーミングも大事だから、屋良朝苗記念館だったら、今でも読谷村はあまりにも有名ですが、もつとそういう文化と平和とね、自治の発信地になるよというよいうな、そういうことで実はオーケーをして、一応みんな向こうで保管をしてもらっています。これはもう必ずその資料館、ネーミング別にして作りますというよいうことで、今、石嶺村長とも再確認もしていますのでね。また山内元村長とも同時にそんな確認もしておりますから、ここまでは見届けていきたいなという。あと何年かかるかわからんけれども、そんな思いで実は屋良先生との関係はしばらく切れそうにありません。

### ■「革新県政から保守県政へ」

#### ○櫻澤 誠

そうしましたら、続いて「革新県政から保守県政へ」のところをよろしく願います。

#### ○石川元平

革新県政から保守県政へという、大田県政から稲嶺県政ということですが、九八年一月の県知事選挙で大田三選ならず、稲嶺恵一保守県政の出現を許してしまっただけという。政府自民党は九六年九月の大田・橋本会談からわずか三カ月後の九六年一月にSACO最終報告で普天間基地を本島東海岸に移設と。これがこの合意ですよ、今までずっと日米合意、日米合意と。

九七年一二月にそれに反発をする名護の市民投票がなされて、海

上基地反対が多数を占めました。市民意思が内外にアピールをされた。

九八年の県知事選挙では、県政奪還のために政府自民党は三億円の官房機密費を投入したと言われました。一方、沖縄県及び各市町村に対する交付金をストップさせるなど、なりふり構わぬすさまじい介入をしてきたと。私の記憶では、ちょうど水道のですね、蛇口を止める。このような兵糧責めに遭ったという記憶、思いです。多くの自治体や企業がですね、背に腹は代えられないと。これは言葉の上でも何度も聞いた覚えがあります。保守側になびいていったと。

当時、「ん？これは何？」と言ったのがあるんですよ。これが失業率九・四だったのかな。この大学の前にも出たと思いますよ。例えば国場の沖大の前あたりね。あちこちにこんな目立つように「失業率何%」というのが、知事選とか何とかこれ一切関係なく。後でこの「革新不況」というものがまた次出てくるんですよ。やっぱりその辺から意図が、しかしもう、かなり効いているんですよ、これ自体ね、島中に張り出されて。これは後でわかったことだけれども、世界的な広告会社で。名護の市長選、それにも関わった広告会社ですよ。そこがね、バックでずっと関わったということが後でわかるんですよ。こういう宣伝が非常に有効に働いたのではないのかということ、もちろんこちらの体制の問題も色々ありますけれども、それを打ち負かすぐらいの体制がつけなかったという。あるいは平和行政にあれだけのことをやりながら、負けてしまったというふうな、それもあるわけですけれども。この稲嶺保守県政の誕生を受けて、沖縄の革新、自治体にも変化が起こってきます。

二〇〇〇年十一月の県都那覇市長選で三二年間続いた革新市政に幕が引かれ。平良良松という非常におおらかな市長が一六年くらいで、やや同じぐらい親泊康晴という。あの時は非常に安泰しておったんですけども。その親泊市政から跡を継ぐ女性が、堀川美智子さん出ましたけれども、いわゆる市政の継続はなりませんでした。これは那覇だけじゃなくて、二〇〇一年、浦添市、宮城健一と

いうね、この冲教組の法制部長もやって、県議もやった人間でしたけれども。浦添でも名護市でも革新市政が敗れていったという。二〇〇二年には沖縄市長選でもばたばたというふうな、こういうことが起こりました。

九九年一月二二日、稲嶺知事、普天間基地の県内移設を表明して、辺野古沖。これはあえて言いますが、これたしか一五年と言っただろうと思います。軍民共用一五年使用で撤去可能な海上基地。いろんな言い方がありましたね。メガフロートと言いましたかね。浮き栈橋みたいなね。いろんな構想が出てきましたけれども、でありながら二〇〇二年一月には知事選で再選をされるという、この保守の潮流を止めることができなかったという、そんなところですね。

SACO、これは間違いないでしょうね。沖縄における施設及び区域に関する特別行動委員会。よく新聞、テレビなどではいわゆる日本の外務、防衛、それでアメリカの国務、国防、それぞれの長官責任者が調印をして、記者会見等のあれがなされますけれども。さっき申し上げたように、例えば日米安保条約課長からあと審議官などになった、これはこういうクラスで協議を、合意をして、あとは手打ち式ですよ。いわゆる両方の防衛、外務の長官が出席でやるのは。梅本と言ったと思いますよ。私が抗議した時の日米安保条約課長、出世しているんですよ。外務省の中でも北米局だそうです。実権を握っているのは。一番出世するのは。

## ■「革新県政から保守県政へ」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。今のところに関わってご質問いかがでしょうか。

### ○高橋順子



選挙の前の年に屋良先生がお亡くなりになっていますが、影響はあったんでしょうか。

○石川元平

選挙への影響は具体的にはなかったんじゃないでしょうかね。

○櫻澤 誠

次の評価にも関わる話かもしれないんですけど、稲嶺恵一さんは、大田さんの最初の選挙の頃のあたりは、むしろ支持をしていたんですよね。その頃からの関わりというのがおそらくあると思うんですけれども。

○石川元平

彼はね、個人的には親しく挨拶をしたり、やってるんだけど、元本土の自動車関係の労働組合の委員長か役員もしたらしくて、あと経営協の責任者になるんですね。連合沖縄との交渉の相手になったりもしましたけれども、人間的にはすごく、ある意味で非常に親しみやすい、いい人ですよ。だけれども、やっぱりこのいい人はまた利用もされやすい。やんばるの出身でもあるからね、個人的には非常にもうちよつと仲のいい感じの、こんなことやったりもしているんだけれども。しかし本人は稲嶺一郎という七〇年の初の国政選挙で参議院に出て、喜屋武ももちろんトップ当選したんですけれども、それ以来、かなり長い間。経済界から参議院議員になった、政治家になった人の息子なんですよね。そういうことなどもあって、しかもりゆうせきです。

私、りゆうせきのぴたホームという家を造ったんですけどね。ほかのにすれば良かったかなと。色々後のことを考えたら、やっぱり複雑な思いがある。

○櫻澤 誠

最初の頃というのは、稲嶺さんは大田さんの何に期待して押した形になってたんですか。

○石川元平

それちよつと詳しくよくわからんですね。一般的に、やっぱり沖

縄をいい方向に導いてくれる、そういうことじゃないでしょうかね。普通言って、沖縄の人はある意味で総遺族的なそれがありますのでね。基地問題、その他、いわゆる平和行政等々については、これは保革超えた一定評価をやるんですよ。しかし、いざ選挙で選択となった場合に、さつき言った背に腹は代えられないみたいなことで。去年もある結婚式場で二人とも祝辞を述べていました。元知事二人がね。そういうことで、二人はそういう親しいあれがあるんですよ。だから僕らともそういうことはやるんだけど、やっぱりバックに控えているのは利用されると、これはやっぱりね。

○櫻澤 誠

大田さんの一期目の時は、要するに稲嶺さんも財界からの支持をしていた側であったし、あるいは今の仲井眞さんなんかは副知事として入ってきていた。その頃に一緒にやっていた人たちがその後、ある意味割れていくことになるわけですね。そこは単なる保革では割り切れないような。

○石川元平

これはね、仲井眞も通産省にいて、要するに本土とのある意味での革新になってのパイプですよ。これを引き受けた。どうしても突っぱねる役目が知事は大体そういうことですから、それだけではいけないというようなことなどがあって、これは前の（屋良主席時代の）富川という総務局長もそうなんですよ。あれはかなり批判されて、やめさせられますけれども。

仲井眞にもやっただけれども、所詮、ですから県民のこれだけの思いを無視して沖縄にもいい病院もあるのに、わざわざ東京の病院、隠れみのにして、しかも県人会の会長などの面会も断って、あとはいわゆる官房長官、その他でずっと密談を続けていたというのがバレたわけですね。だから、こういうことしかできない、手法しかやらない人ですから、結局、通産官僚のそのまんまを持ち込んで、これから抜け切れないということ。

もう一つが彼、自衛隊協力会の会長だったんですよ。電力の会長、

社長時代ね。ということなどもあって、地はやっぱりそういう主義の人という。そこまであんまり吟味して、投票したのかわからんけれども、色々そういうことなどが実はあってね。

#### ○櫻澤 誠

ほかに質問いかがですか。

#### ○佐藤 学

伺いにくいような話なんですけれども、その大田知事が辺野古、それとも移転に関しての、移設に関してのことで態度、反対ということの中々言われなかったということ。

それで一方、運動している人たちから見ると、何でかということのその不満があった。で、今度その県内移設、当時反対ということに、言われた部分等が今度逆手に取られて、橋本政権からはその裏切りだみたいなことを言われて、最後のところがどうもうまくいかなかった。僕は今に続いてしまっている部分もあるような、本当に県庁の人の話を聞くと、本当に最後にあれを国から締め上げられたと、干されたということの恐怖がずっと残っているとやうですね。東京事務所が政府に一切接触できなくなるとかという話。県庁の中にも組織的な恐怖として残っているみたいなことが言われていて、吉元さんが副知事に承認をされなかったところで、大田知事がうまくできなかったというやうなことがよく言われるんですけど、これ石川先生から見ると、その大田県政最後の一年間ぐらい、どのやうに今。

#### ○石川元平

ある意味で、当時誤解というか、ちよつと非常にわかりにくい感じ。吉元さんも裏で随分色々やっていますし。それからまた今でも橋本、特に梶山官房長官などは非常に評価をし、ああいう人が生きておれば今のやうなあれにならなかつたみたいなことまで言われたりもしますけれども。しかし、さつき何項目かの約束事もしていけば改善のあれもできたはずだけだね。逆の意味で沖縄政策協議会も全く逆に利用されてというやうなこと、色々ありますから。ただ

やつぱり、大田もこの辺野古を容認していたからあんなことを言つたんじゃないのかと、色々憶測もありましてね。しかし、彼自体は明確にあの立場がどうだったんだというやうなことを、もちろん文章化して残してもいますし。ただ、国家権力がやろうと思えば恐ろしいことをやるなという感じしますよね。法律で決まって、財政の枠も決まっているものを止めるんですから。

#### ○佐藤 学

それはおそらく今に直接繋がる話になると思うんです。次の知事選挙で、もしもどなたかが本当にその辺野古止めるとやうな形でやつた時には、大田県政の最後の一年間から始めないといけないという。

### ■「稲嶺県政に対する評価」

#### ○櫻澤 誠

では、続いて「稲嶺県政に対する評価」のほうをお願いします。

#### ○石川元平

さつき、ちよつと申し上げたんですけれども、稲嶺さんのお父さん、一郎と言ったんですけれども、経済界から参議院に当選をされて、満鉄出身ですね。稲嶺さん自身は、人間的には非常に物腰柔らかで、清廉な印象を受けるやんばる出身ということもあって、個人的には挨拶を交わし合う間柄ではありません。しかし、政治的には日米安保体制に反対して、日米両政府の沖縄基地政策に反対する大田県政を、もうある意味でそこから奪還をしたわけですから、政府自民党の期待を担って知事になった人である。そういう良い評価はあんまりできないということですね。それこそ評価の全てと言っても良いが、名護市民投票で海上基地「ノー」という市民意志が示されたにもかかわらず、九九年一月二二日に普天間基地の県内移設を認める海上基地建設を受け入れたことは禍根を残して今日に尾を引いていると。

二〇〇〇年四月にオープンした沖縄県平和祈念資料館の展示問題で、ガマ展示があるわけですけどね、二階の一部にね。あのガマの中で銃剣を持つ日本兵の動き、おじーとおばーと子供たちが、ガタガタ震えているんですよ、こうして縮こまってね。震えて、子供の口をふさいで。これで殺されたのたくさんいるわけですよ。親が子供をね。これはもう全県下にある。これを象徴的なもので展示してあるのに、銃剣を持った日本兵が外へ向けて、入り口に。となると、入り口から入ってくるのを防ぐ。こっちは防衛をしている。まるっきり逆の展示になっているんですよ。これで大問題になったんです。かなりいろんな論議やっただけでも、展示の中では石原昌家氏も関わったと思うけども、これがずっと訂正もされずということとは、教科書問題のある意味で根っこなんです。こういうことを見るとね、やっぱりこれはうまく国に利用されたという、こういうことです。

そしてね、さつき大田が落ちた理由の一つに、官房機密費三億という、これは国会でも照屋寛徳が取り上げたけれども、要するにあの時は初めてわかったわけですよ。機密費には何も領収書とか、証拠となるのを示す必要はない。全くフリーに、自由に使える金だと。これがたしか一二億あると聞きましたね。そのうちの三億を照屋寛徳は沖縄知事選に、大田の三期目のその時に使ったのではないかと追及。もう、いわゆるちゃんとした一定のあれを持っているから、ああいう公の場で追及したと思うけれども、あとはうやむやにされた。だから、名護の市民投票、市長選挙でどれだけ使う、あるいはこの後の秋の県知事選挙でどれだけ使われているか。さつき世界的広告会社と言いましたけれども、電通だと思えます。もういわゆる専門的なそれを駆使して、物すごい金を使って、かなりの期間も長期滞在をしてこうやるわけですから。そんなことなどもあってですね、非常に人間的にいい人ではあるが、うまく政府に利用された人としての評価しかできないということですね。

## ■「稲嶺県政に対する評価」の質問・応答

### ○櫻澤 誠

稲嶺県政に対する評価は今おっしゃった形であると。ちょっと離れますけど、ここ数年、大田さんと稲嶺さんが割と一緒になっていろんな場で現県政批判というか、そういうことを盛んにされていますけど、そこに関してはどういうふうに見てらっしゃいますか。

### ○石川元平

これはもう率直に言って評価しますね。結局はね、これ剥がれるとウチナンチュになるんですよ。沖縄人に戻るんですよ。これが非常に大事だと思います。ですから、私は去年一月二八日の建白書というのを非常に評価します。これはそんなに多くのことじゃないですよ。実にあっさりしたものなんだけれども、やっぱりこれにそうだという、ここに書かれていないいろんなことを持ちてね、賛同する保革を越えた。これは僕は本当にウチナンチュだと思いますよ。こういう人たちが今、ある意味で県政野党が、ある意味で例えば翁長を念頭に入れて知事選やろうとしたら、「いやいや、俺たちが先に」と。競争じゃないけれども、経済界がむしろね、そして一部、那覇市議会の自民党の会派が県連からの処分をちらつかせながらも撤回もせずに。これはもう市長と意志が通じ合っているからだと思います。こういうことは、私はいわゆるそういう政党的な、党派的な、この間また我々が関わってきた、あれを越えたところの、かなり沖縄の歴史から学んできた、これから切り開いていこうとする、そういう決意があると見ているんですよ。

### ○佐藤 学

稲嶺さん、稲嶺知事の評価にも繋がるんですけど、つい忘れちゃっているんですけど、自分なんか。稲嶺さんは現行のそのいわゆるV字案に反対したまま辞められているんですよ。

### ○石川元平



はい。

### ○佐藤 学

だから、彼は今のV字案は受け入れないという立場で任期が終わっていて、だから、そこんとところで言うのと、その筋は通されているということ、まずその前のところで、最初は海上ヘリ基地だったんですよね。移設可能なヘリポートという話だったので、さらにもっと前の話になると、下河辺淳さんの、そのオーラルを早稲田の江上先生がとったやつで、最初にアメリカと交渉している中で、下河辺メモを作る中では、アメリカは直径三〇メートルのヘリ着地帯があれば普天間の代わりはいいと言ったんだと。そう繰り返しているんですよね。

それを自分が本に引用して、それでまた三、四年前に下河辺さんのところに裏を取りに行った新聞記者がいて、下河辺さんは今でも同じことを言っておられると。米軍が最初に言っていたのが三〇メートルのヘリ着地帯がシュワープ陸上になれば、普天間は返還の対象にしている。それがどんどんかくなっている、さらにそのメガフロート、要するに移設可能なメガフロートを止めたのは、これは沖縄に金が落ちないと。向こうの造船会社に行ってしまう。これ全部稲嶺さんのもとでやられたことで、最終的にその沖合二キロの埋め立て案になったのは、これ稲嶺さんのもとで決めたことで、それが駄目になったので、最後そのV字案を頭越して駄目だと言ったら、国との間ですごく、物すごい振れがあったような気がするんです。やっぱり同じ、その大田知事の最後のほうと同じで、国の圧力というのはすごいものがあつたんだらうなというふうに思うんですけど、とにかく何かその稲嶺知事の評価というの、学生に説明する時にですね。言葉に窮する時がありましたね。

### ○石川元平

そうですね、彼は。ですから沖合に撤去可能な、ただそれだけではなくて、軍民共用で北部の振興に役立つんだというふうなことがあるんですよね。

### ○佐藤 学

撤去可能はやめるわけです。撤去可能はもう止めて、代わりにその軍民共用で民間の空港にすると。県民の財産という話をされたわけですよ。だから、そういうところでその稲嶺知事も、おそらくはその国からの圧力があつて、大田知事と同じような形で、その圧力を受けながらという話だったんだらうなというのは今思っております。

### ○石川元平

想定されますね。今、よく新聞でもたびたび出ますよね、大きくね。あの姿勢はやっぱり、これはもう評価をすべく。経済界のかなり大御所たちが堂々とというふうな。特に平良（朝敬）、かりゆしは前の名護の市長選、わかりませんが、金秀には私はびっくりしましたね。親父さんはやっぱり事務総長ですもん、知事選のあいつた自民と保守陣営の。すごい人ですよ。元はちっちゃな鉄工所の鍛冶屋から始まった。そういう苦労人で、それが今は大変でしょう。コンビニ、金秀からこっちにもあつたりするから。

私もね、金秀では物を買わないということ、妻に宣言していたんですよ。ところが、もう最近はマイルカードを。いやいや、教公二法闘争の時に不買運動をしましてね。いわゆるあの時は星克という民主党の文教委員長が、コルゲートの社長か会長をやっていますのでね、コルゲートは使わない。それで赤マルソウの醤油、寒川の上にありますよ。これも具志堅宗精ですよ。この赤マルソウは買わないとかね。それからたばこで琉煙、琉球煙草のたばこは吸わないとかね。こういうのを決めて、不買運動をやった、徹底してあれはかなり効果がありましたよ。こんなことをやった経験あるから、金秀と、続けてあつたんですよ。最近解除しました。我が家でも。

## ■「辺野古移設をめぐる」

## ○櫻澤 誠

では、ちよつと今日は色々項目の立て方がランダムになっていて、ちよつと重なる部分も結構あるんですけども、続いて「辺野古移設をめぐって」のところをお願いします。

## ○石川元平

辺野古移設ですね、改めて。米軍は六〇年代中頃から辺野古新基地の計画をしていたと。これは大田氏も言っています。真喜志（好一）一級建築士もその資料をたびたび新聞でも発表をしたりしています。ところが、できなかったのは財政問題ですね。これはもう一〇〇％アメリカが負担せんといけない、復帰前は。だったもんですから、これが最大の理由であつただろうと。沖縄復帰によつて安保が適用となり、財政的にも日本政府に負担させることによつて、当初計画を実現させようとしているというのが今の見方です。ですから、屈辱的なこの日米安保体制を見る思いがするわけですね。辺野古問題一つ取つてみても。

日本政府は県民要求よりもアメリカ側の要求を尊重。日本政府の一番の狙いは、現在の日米安保体制下で近い将来の恒久的な日本軍基地を建設したいという思いがあるのではないか。これはもう私の一貫した強い思いです。オール沖縄の反対以上の国家権力の野心が今あらわになっているというふうに思います。

このことはもつととうんと啓発していかんと思いませんが、新基地が完成すると核化学生物兵器、これはNBCとも言われていますね。この兵器の貯蔵疑惑のある辺野古弾薬庫とセットされると、恐ろしい基地になるわけですね。大浦湾の軍港化が進む。これも最近の新聞に出ましたね。二〇〇五年の日米による軍事基地再編協議で、米軍のほうからホバークラフト型揚陸艇や高速輸送船が運用できる軍港機能の整備を要求してきたと。施設局が県に提出した申請書の中にも、米側構想どおりの整備が入っているという。つまり、護岸のこういふことじゃなくて、斜めで乗り揚げてできるよ

うな、こういうふうな計画が入っているという。市街地から離れた北部やんばるで基地の自由使用が一層進む。これは私はですからね、先ほど少女暴行事件のように、この通学、通勤の危険性を訴えてきましたけれども、一層その不安がやっぱり増すなというふうな、こんな感じですよ。

完成した暁には、嘉手納基地以上の機能を持つ侵略基地になるのではないのかと。こういうことをですね、県民の、これだけのオール沖縄の反対を押し切つて、やろうとするこの国家権力というのは、アジア太平洋戦争の総括をしないばかりか、やっぱり五〇年からの、いわゆる朝鮮戦争からベトナムと続く、これは侵略戦争、沖縄はその拠点にされてきた。そういうことなどのいわゆる反省等、全くなされない。だから、そういう恐ろしいことのを進めようとしているんじゃないのかなというふうな思いです。

こういう、今闘いの最中にもちろんあるわけですが、沖縄はこれからどうするかということでは、建白書への思いを実現させるために島ぐるみ超党派、オール沖縄の再構築が当然望まれ、今、そういう方向に動いているというふうに見ます。

具体的には、沖縄建白書の実現を目指し、未来を拓く島ぐるみ会議というのが、私も呼びかけ人の一人ですが、それが七月二七日になされる予定です。同日に建白書の実現を目指す議員団会議、これはいわゆる那覇の自民党市議団等々を含めて、那覇の市議団の中には議長も含んでいるんですよ、発足総会を開く予定です。今日の新聞を見ますと、あの経済人のグループが八月七日でしたか、一〇〇〇人超の経済人のいわゆる翁長さんに期待をする人たちの決起集会的なものを構想し、呼びかけをしていると。

この現地闘争、過去のさまざまな闘いがあつたわけですから、創意工夫はある。さまざまな市民団体、あるいは現地等々、あるいはまた本土からの応援等を含めた、こういうさまざまな現地闘争が取り組まれるであろう。普天間爆音も宣伝カー、実は持ってまして、これ毎週土曜日に現地の集会等もこれから持たれる計画でもあ

ります。その時には普天間爆音の宣伝カー、これをぜひ出していいんじゃないのかという、いわゆる団体の顔もね、見せながら、そうすると個人が集まる人たちの頑張りに応えることにもなるんじゃないか。このことを幹事会でも一応決定をいたしました。

さて、何と言つてもまた最大の政治決戦、一月の県知事選ですから、反対勢力のいわゆる辺野古移設ノアの知事を誕生させることによつて、もう既に世界的なこの良識ある人たちの支援のそれがあるわけですけれども、この大きな転機にまた繋ぐことができるであろう。

私の琉歌というのがあります。これは『赤木』一〇号を五月一日に私の友人、栄野川安邦と、高作正博先生の総合雑誌に出したものですけれども、言葉の上で言っちゃわからんけれども、この文字を読めば大体思いはね、伝わると思えますから。「シタイヒャー！ ススム 銭雨も凌ぎ 名護人の意地り 肝も晴れて」御参考にしていただければと思いますし。

そういう社会詠ですね。こういうのが琉球新報、沖縄タイムスの歌壇の中に多く出るといふのも沖縄の特徴だそうです。文芸評論、これは新聞等でもそういうのたびたび出ますけれども、本土と比べて圧倒的に社会問題を歌にする、詩歌にするというのが沖縄では非常に特徴的に多いという。それをチェックしていくと、やっぱり戦争や平和、沖縄戦、基地問題等々に対するを詠んだら、あれは非常に多いですね。

○櫻澤 誠  
ありがとうございます。

## ■「普天間米軍基地爆音訴訟（二〇〇二年）」

○櫻澤 誠

続いて爆音訴訟についてお願いします。

○石川元平

こちらの大学にも関わることでありますが、我々は普通、普天間米軍基地爆音訴訟というふうに呼んでいます。これは二〇〇二年から始まって「静かな日々を返せ」という黄色い横幕、象徴的なこれをずっと事務所の上にも掲げて、公判や色々なもろもろの集会等にもこれを掲げて、我々は闘っておりませんが、第一次の訴訟の原告は四〇〇人でした。この一次訴訟で、裁判所がですね、普天間基地の運用による爆音の違法性を認めました。認めただけじゃなく、全国では今七カ所の爆音訴訟がありますけれども、もちろんヘリが主なその運用、普天間基地の実態もありました。低周波被害というのが、初めてこれが裁判で認定されました。その結果が、嘉手納や他の訴訟の二倍強ですね、上回る補償金を勝ち取ることができました。

ところが、最大の狙いは、やはり飛行機を飛ばすなという、飛行差し止めなんです。それが例の第三者行為論という。砂川事件の地裁判決、伊達判決で、米軍の駐留は九条に違反する軍隊であるというふうなことで、その被告に対して無罪が言い渡されたけれども、高裁を飛び越して最高裁にすぐ行って。そこで当時の田中（耕太郎）裁判長ですね。裁判判決を出す前に米大使館筋と通じて、ちゃんとその結果も伝えておった。これも最近の新聞などでも報じられていることでもあります。その第三者行為論、これは日米安保条約に基づいて駐留している米軍は、高度の政治性があり、司法審査権の範囲外とすると。こういうふうなことでずっと逃げて、普天間の訴訟の中でも、そういう判決の内容になっています。ところが、その後、ずっと爆音が続いているわけですから。しかも、もう一八年になるわけですね。九六年のそれから。

ということもあって、二〇一二年の三月に、今度は宜野湾市内だけじゃなくてですね、一部浦添市港川、この進入路です。そして北中城ですね。いわゆる北側に伸びる区域ですね。この住民を含めて三二九人が原告になって、第二次訴訟を起こしました。さらに、



同年一二月に二八八人が追加提訴しまして、二次訴訟の原告団、合計三四一七人。これは第一次訴訟の約八倍の規模になったと。これだけ爆音被害に対する切実な市民の願いが数字に表れた結果であるというふうに見えます。第二次訴訟でも一番の目標は、普天間基地からの爆音をなくすこと。そしてこれは基地の閉鎖にも繋がる目標であるというふうな位置付けをしています。そのためにですね、被告、国への請求として、爆音を発する飛行の差し止め、それから爆音被害に対する損害賠償、そのために飛行差し止めを実現させたいという。この第三者行為論をもってこの間、退けてきましたけれども、それを覆していこうという。

裁判所が米軍はいわゆる外国の軍隊だから訴えることはできないというの、我が国の最高法規の憲法よりも、日米安保が優位という捉え方で、安倍が言う、現在の総理が言う四・二八などでも言ってきた、完全な主権国家、つまり独立国家とも矛盾をする。主権国家として日本政府の力で爆音を止めるために、できる措置があるはずだということを経験所に突き付けて、現在いるところ。更に、爆音放置は憲法違反だということをも宣言をさせたい。二〇一二年一二月の追加提訴の段階です、普天間基地の騒音爆音の継続を放置している状態は、人格権や平和的生存権等を侵害する憲法違反の状態であるということの確認を求め、差止めや将来請求を追加したと。どんなに爆音の違法性が認定されても、差し止めや将来請求が認められず、事実上、不法行為を止める手段がないのであれば、違法からの救済という裁判を受ける権利自体が侵害されているのではないのかという、こういう問題意識であります。全国七つの訴訟の中で、憲法を面前に出して争うということは、これまでないようです。我が普天間の弁護団が、よく決意をしてくれましたというふうな、我々訴訟団としても非常に力強く思っているところ。こんな本当は闘いをしたいんですね。被告の賠償を拡大させたい。損害賠償ですね。これは、いわゆるオスプレイの配備による爆音被害の増大、これは琉大の渡嘉敷（健）准教授などのたびたびの新聞等でも、また現

場の測定等々、普天間第二小学校などでもやられて、上大謝名等でもやられて、伊江島その他でもやられています、CH53ヘリの九倍の振動を与えるという、こんなにひどいのかという感じなわけですね。これは具体的な数字がこの間、色々出ていますので、当然、裁判の中で、こういうことも色々な形で映像等含めてね。上大謝名と野嵩、テレビの画面が黒に消えるんだそうです、何秒か。こういうことがあちこちで出ているんですね。最近だったら、愛知でも、うちのテレビでもたびたびそういうことがあるという、そういう人が出てきて。

これは目に見える確認なんだけれども、特に爆音、低周波は心身に及ぼす悪影響がひどいんだそうですよ。これは前の裁判で、低体重児の出生率が非常に比率が多いんだとか。例えば僕などは那覇で多く仕事をしましたものから、定年までは非常に元気だったんですね。ところが、地域で多く生活するようになって、耳が難聴になつている。血圧が上がって、常時、降圧剤を飲まされているというふうな、こういうのが一般に多いわけですよ。特に発達途上の子供に対する影響が大きいのだそうで、これは大田県政時代に、世界的な京都大学の松井先生、平松先生、こういう方々と沖縄県の中部の病院長その他専門の皆さんでチームをつくつてのね、こんなに厚いのがこちらにあると思うんですが、この音響調査。あの当時、三〇年、おそらくうちにはこれを超えるあれは出てこないだろうと言われるぐらいの実はすごい報告書で。これを裁判所が認めて、いわゆる低周波音を認めて、被害額を二倍にする結果になって、高裁でそれが出たものだから、国は上告できなかったんですよ。だから、それは確定をしたんです。

関連をして、厚木の爆音第四次訴訟が最近出ましたね。新聞にも大きく出まして、自衛隊機の夜間の飛行差し止めが命じられました。飛行差し止めは初めてですね。ただそれは、米軍機に及んでいないということ、ここでも第三者行為論で退けられています。これは最高裁判決の壁という。これをどう突き崩すかですが、評価としては

一步前進だという評価をしています。

嘉手納爆音の第一次訴訟の裁判長の十戒という言葉を書いています。飛鷹が、「静かな日々を返せ」の中で、いわゆる判決文の中に、飛行差し止めのそれを本人はその思いを下そうとしたんですね。しかし最終的にはできなかったようだけれども、やっぱり裁判長がそこまで思いが及んだというふうなこと。この後、うちの弁護士もね、かなり元気をもらって、直接お会いもしたようです、この裁判長と要するに流れとしては、やがて最高裁の壁も突き崩せる状況が来るのかなという感じもするわけで。

我々、復帰闘争の教訓の関連から言いますと、サンフランシスコ講和条約三条で、これも国際条約でアメリカの施政権下に置かれたわけですが、アメリカが信託統治にする間というふうな文言がなっている。しかし、アメリカは信託統治などする意思はないし、ずっと実効支配を続けてきたわけですね。しかし、そのサンフランシスコ講和条約という国際条約のその壁を打破をして、七二年に復帰を勝ち取ったという、その実績があるわけですね。したがって、安保条約は二国間条約、地位協定の改訂さえできないということは許されないのじゃないのかと。いわゆる、廃棄通告をすれば一年後には、これは消滅するというふうな、こういうふうなことなども、やっぱり教訓化していかなくちゃならないのではないのかと。

日米安保・地位協定が、国の最高法規の上位に君臨するというのは、まさに対米従属で、米軍に基地の管理権、使用権を委ねている現実は、とても主権国家、独立国家とは言えない。四・二八を完全な主権回復の日という、安倍政権下で司法の場においても、真に主権国家としての憲法判断を下すよう、沖縄から強く迫る必要があると考えます。

二〇一四年六月一七日、砂川事件の元被告らは、免訴を求めて東京地裁に再審請求をしています。安倍首相が砂川事件の最高裁判決を集団的自衛権行使容認の論拠に利用していることへの抗議の意思表示も込めてのものであります。

## ■「普天間米軍基地爆音訴訟（二〇〇二年）」の 質問・応答

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら、質問を進めていきたいと思えますけれども、ちよつと私も不勉強な部分もあって、確認の意味も込めてなんですけれども、普天間とその他国内の爆音訴訟との関係などについて補足して頂ければと思うのですが。

### ○石川元平

嘉手納と普天間は、私たちは兄弟分と呼んでいましてね、向こうは今、四次です。で、小松、一番最後に提訴しましたのが岩国ですね。岩国を含めて七つの今、爆音訴訟が争われていまして、普天間の時も、大事な時には各訴訟団にも呼びかけをして来ていただいて、公判に立ち入って、前後の集会にも参加をしてもらうとか、あるいは、それを利用して連絡協議会を持つようになっていきます。そういう組織をつくっていきまして、この前の厚木の四次訴訟には、普天間からも事務局次長の桃原（功）、議員も一人、派遣をいたしましたし、そういういわゆる連帯する組織を持って、共同で頑張っているというような状況です。

### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。それではご質問いかがでしょうか。

### ○黒柳保則

「第三者行為論」という言葉が出てきたのですが、「統治行為論」という言葉も聞いたことがあります。高度の政治性を有する事柄については司法権が及ばないというのは、砂川事件の判決などにおいて「統治行為論」で説明されたと思うのですが、「第三者行為論」とも言うのでしょうか。

○櫻澤 誠

そうですね。弁護団長さんとかも第三者行為論という言い方をされています。

○石川元平

要するに、米軍、米国、この第三者が犯している、いわゆる騒音だというふうなことで、この前の厚木の中でも第三者行為論というような言い方をしていますが。

○黒柳保則

ここ（配布資料）にもありますね。

○石川元平

ええ。統治行為論、統治を実際行っている。これはしかし、日本の国内におけるそれは憲法のもとに日本政府の法制度、権能によって統治はされているはずなんですよね。これだけ枠を外してアメリカのあれは裁けないという。言っていることは大体同じじゃないでしょうか。

○黒柳保則

不勉強で、「第三者行為論」という言葉を聞いたことがなかったので。

○石川元平

同じ意味に。

○黒柳保則

統治という現象を問題にしているという点では、同じような意味なんじゃないかね。

○石川元平

そんな気がすると思いますよ。

○黒柳保則

なるほど。自衛隊機であれば止められるが、要するに米軍だと第三者であるから、統治権が及ばない、というふうなことでしょうか。

○石川元平

そういうことで逃げているわけですよ。

○黒柳保則

逃げているわけですね。ありがとうございます。勉強させていただきます。

○石川元平

伊達判決の伊達裁判長はですね、後に沖縄の裁判闘争なんかにも非常にご支援いただいて。そして日教組の顧問団の一員でもあられて、何度かお会いしたことがあります。伊達秋雄といいましたかな。

○黒柳保則

ありがとうございます。

○櫻澤 誠

ほかにいかがですか。爆音訴訟などの議論をする際に、例えば判決で賠償の請求が確定をしても、実質的にアメリカ側が支払っていないという話か。

○石川元平

守られていない地位協定のそれが。何対何というようなことで、比率も決まっているんですが、立て替えみたいな形で、いわゆる裁判ですから期限もちゃんとあるわけで、日本政府が払わざるを得ない。嘉手納の例だとね、二万人超えるわけでしょう。ものすごい額になるはずですよ、これは。で、厚木も増えているんですよ賠償金も、何十億だよ。こういうことでやると、これは一括交付金以上になるんじゃないですかね。

○櫻澤 誠

爆音訴訟に関して、批判的な立場の人から言わせると、よく言われるのは、「第一次訴訟で勝利をして、お金を獲得できたから次から人が増えたんだ」みたいな言われ方をすることがありますね。

○石川元平

これはあります、確かに。

○櫻澤 誠

そうですね。

○石川元平



ズバリそういう人がいるそうです。まあまあ、こういう人がいたって、体制としては、さつき説明したような目標で差し止めをする。そして、普天間基地の撤去に繋げるという、そういう展望を持ってやっていますから。いや、この中では増えていませんが、もう一つの訴訟があるんですよ。宜野湾市内に。それはどうも、いわゆる政党がらみで、ある人がらみということやられているものですが、これは進まないだろうというふうに見えますよ。いわゆる勧誘の仕方が、名前を連ねてこう出せば、普天間の爆音訴訟のように闘わなくても、補償だけは貰える。ということと触れて、二〇〇〇名前後を集めたというのがあるんですが、どんなに日本政府が墮落したといつても、裁判所がこういうところの賠償まで認めるはずない。これはうちの弁護士団、我々の判断でもありますが。

あれはもうはつきり政治的な意図を持ってやろうとしたけれども、二〇〇〇円ずつ払って、あとはその金がどうなっているかという問題も起こるはずですよ。

## ■「教科書問題」、「集団自決」、県民大会（二〇〇七年）」

○櫻澤 誠

そうしましたら、二〇〇七年の教科書問題についてお願いします。

○石川元平  
この写真だけちよつと見てほしいんです。よく一八七九年琉球処分と話しますよね。武力併合という。これをまさに象徴している写真。これは五月四日に新報、タイムスが同時に二九点かのあれをね発表した。特集を組んでね。これに私自身、非常にびっくりもして、思ったより以上の象徴的な写真。

守札の門が正門だと思っっている人いますが、歓会門なんですよ、

首里城の正門は。石の門ですよ。そこに、この中ではちよつと見えないんですが、右側のそこに、表情までこの写真ではちよつとはつきりしませんけれども、九名の日本兵が着剣をしていますね。これがまさに武力併合の象徴的な写真として。

前後しましてね、いわゆる沖縄が主権国家であったという証になる琉米修好条約ですね。それから琉蘭、琉仏、この三つの条約、これは全て没収されるんですね、明治政府に。これも実は写しが新聞にも出ました。これは琉球新報でまだ続いていますよ。この間の歴史の中で、余り学べなかったことをよく頑張っているなというふうなことで、これはきつとまた後世にも非常に評価される新聞社のそういう情熱的な取り組みだというふうに見ておりますが。

さて、じゃあ教科書問題、集団自決、県民大会、そのことについてちよつと触れていきたいと思えます。

二〇〇七年三月二〇日、いわゆる文科省は、平成二〇年度から使用される高等学校教科書の検定結果を公表いたしました。七つの地獄を重ねたようなと形容される沖縄地上戦の象徴的な集団自決。我々は、これを「強制集団死」というふうに呼んでいます。これまで日本軍の関与を明記していた高校日本史教科書が国の検定意見によつて、「日本軍による強制誘導等」の表現、これが削除・修正をされるということが起こったわけです。文科省の検定意見は、沖縄戦の実態について、誤解する恐れがある表現ということで、削除・修正させたんですね。この文科省による沖縄戦の史実の改ざんに対して、体験者を中心に、やり場のない怒りが島中に充満し、県議会における二度の意見書決議、四一市町村議会全ての意見書決議、更に県内地方四団体、婦人会とか青年団とか連合も入っていたのですかね。民間団体が相次いで文科省へ抗議・要請するなど発展をして、二〇〇七年、九・二九のですね、教科書検定意見撤回を求める県民大会が一万六〇〇〇人の参加で成功いたしました。

県民大会決議を受けて、一〇月一五、一六日の両日、一〇〇人を超える東京行動要請団が組織され、文科大臣、官房長官、総理大臣、

各政党、衆参全国会議員への要請行動のほか、教科書協会及び教科書出版五社、これは山川出版、東京書籍、三省堂、実教出版、清水書院へ要請がなされました。私もそれには参加をいたしました。一五日には東京県人会主催による一〇・一五教科書検定意見撤回を求める総決起大会が星陵会館で開催され、沖縄県人の怒りを共有いたしました。しかし、沖縄県民の総意ともいえる検定意見の撤回と、軍の関与についての記述回復の要求は、今日に至るまで実現されていません。

関連をする動きについてありますが、第一次安倍内閣当時、伊吹自民党幹事長が文科大臣だった頃、これは八月であります。沖縄の自民党国会議員団でつくる「五の日の会」というのが、実は当時、仲村正治会長を中心につくられています。現在は「かけはしの会」という。その沖縄の国会議員団に対して、伊吹氏は「教科書会社に訂正申請を沖縄からこれをしてはどうか」というふうなことの持ちかけをしているんですね。九・二九県民大会に超党派で取り組みながら、「五の日の会」と仲井眞知事が話し合いをして、県民大会の趣旨に反する行動をとっています。仲井眞など、最終的には県民大会に出てきましたね。新聞にも、よく何回か出ましたけど、皆と一緒にかりゆしウエアの黄色いのを、こんなことを勧められながらも、当時、青いかりゆしウエアで、鉢巻もしないで壇上に一人ぼつんと目立ってたんですね。おそらく、あからさまに反旗を翻すことはできなかつたけれども、国会議員らと一緒にこんなことをやっただろうと思っっています。

沖縄戦の史実改ざんは、文科省のやらせであったという。これはですね、具体的にこういうことです。教科書検定審議会委員は、専門分野、研究・業績からして、沖縄戦への知識が浅く、学術的審議などできない委員で構成。検定意見は文科省の自作自演であったということが後でバレました。審議会は、調査官が指導しましたけれども、調査官二人、これ名前も挙げてあります。照沼（康孝）主任調査官、それから村瀬（信一）調査官はですね、新しい歴史教科書

をつくる会から発行された『新しい歴史教科書』、これは扶桑社でしたね、監修者で伊藤隆東大名誉教授の門下生だったんですね。伊藤氏は、沖縄戦の集団自決では、日本軍の軍命はなかったと主張する人物です。二人の調査官は、伊藤氏と共同研究の実績や共著があり、ほかに審議会委員二人も伊藤氏の指導を受けていることがわかりました。

沖縄戦記録一フイート運動の会は、四本の記録映画をつくりましたけれども、一番最後ですね「軍隊がいた島ー慶良間の証言」を通して、日本軍の関与を明らかにいたしました。沖縄タイムスは命の大事さを語り継ぐという「命語り（ぬちがたい）」、こういう特集を組みましてね、挑まれる沖縄戦、その第一回目に北村登美さん、渡嘉敷島の生き残りですが、当時九七歳の証言を初め、七五回にわたって慶良間の生存者の体験連載を続けました。この北村さん、今月一六日に一〇四歳で亡くなられました。私がね、うちのいわゆる「軍隊がいた島」あの中でも、何度か最初の部分と最後の場面にこのおばあちゃんに出てもらうんですけども、このおばあちゃん琉歌を詠まれるんですよ。うちの映画の中にも入れてありますが、こういう歌を詠んだんです。「ボケの来んうちに、カチトウミテイウチョテイ」ボケが来ないうちに書きとどめておいてという意味ですね。「ウミナシグワミナニ」愛する子や孫たち皆にとという意味ですね。ナシグワというのは、産んだ子、孫という意味です。「カタレーウチユン」語っておきたいものだという思いを詠まれたもので、すごい歌だと思っただけ。

八重山竹富町のその後ですが、文科省と小さな島の争いが、とりわけ沖縄で注目をされて、いわゆる義務教育費負担法の改正までやって、竹富のあれをつぶそうとしたけれども、一生懸命勉強して、ちゃんと抜け道があった。それは沖縄県教委も偉いと私は思いました。あつて、それを拒否をして、これにはさすがに文科省も異議を唱えられなかったということで、独自の採用地区に指定されて、これはもう固まったわけですね。竹富町と言いましても、ご存じのよ

うに、本当に文化のまちの小さな竹富島というのがありますが、西表島まで含めて皆、小浜だとか、あれ含めて竹富町なんですよ。その町役場は石垣市にあるんですよ。

沖縄にこういう諺が、昔ね、よくおじい、おばあから聞かされたのはね、今の中国のことを沖縄では、象徴的に唐と言うんですね。「トウヤカラカサ」唐笠さしての唐笠です。「ヤマトオ、ウマヌチマダグトウ」大和は馬の蹄。比較してください。「ウチナーやハイヌサチ」針の先だという。こういう比喩を並べて、これはおそらく親中派が今で言うあれとして、我が家も第一尚氏の流れを汲む祖母が、偉いおばあがいたみたいで、こういうことをずっと聞かされてきたんですよ。そういうことなどがありまして、国家権力に対して、一八重山の島々たくさんある中の竹富の教委が、慶田盛（安三）というんだよ、教育長ね。初め女性委員長含めて、よー頑張ったなど。

僕ら四・二八会というのをつくっているんですよ、五二年四月二八日の屈辱の日を忘れまいということ。色々なことをやってきて、与論に碑を立てる運動を成功させてきましたし、ベトナム反戦の旅、その他サイパンへ反戦の旅とか色々なことをやってきまして、それはかなり形も残してきたというのがありますけれども、この竹富町に対しても丁重なメッセージで激励をしました。その激励文は僕が起案しました。専門家の委員はね、あらゆる階層の人を入れて、素人が統制する、支配するということよな、こういう思いで、沖縄では復帰前、教育委員の公選制を守ってきたんだというよな趣旨を含めて、よく皆さん頑張ってくれた。これからも頑張ってくれ、皆がついているというよな、県内外の支援のあれが皆さんのバックにはいるんだという思いで励ました。そんな経験がある教科書問題なんですよ。

## ■「教科書問題」、「集団自決」、県民大会（二〇〇

### 七年）」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。そうしましたら、ご質問いかがでしょうか。

○佐藤 学

ちよつとずれちやう話なんですけど、一つ伺いたくて、多分、伺える時がないので伺いたいんですけど、歴史に関してですね、沖縄で育った学生たちは、沖縄の歴史を学校でどこでも習わないわけです。本当に全く欠落したまま学生になっていまして、石川先生、「琉球政府」という言葉を聞いたことがある僕の学部学生、三、四年生で一割、二割しかないんですね。本当に歴史を教える、沖縄の歴史ということ、結局、中学校、高校で日本史の中では出てきませんから、ほとんど。沖縄戦は出てくるかもしれないけど、あとは「復帰」というのは、本当にぼんぼんとあるだけで、今に繋がることは何も知らない。今は高校で琉球、沖縄の歴史を、高校だと指導要領の外で教えることができるので、高校で琉球、沖縄史をカリキュラムに入れるようにという陳情を出しまして、それは県議会では採択されたんですね。一つ伺いたいのには、教員組合の中で、沖縄の子供たちに沖縄の歴史を教えなきゃいけないという、何かそういう議論はされたことおありですか。

○石川元平

これはね、教育研究集会は年間を通して続いていますから、これは近隣の学校、市町村、それから、またこれが持っている支部教員というのがある、それをまとめて中央教研、県内の中央教研やるんですが、この教科の部分と教科外含めての分科会が十幾つかありましてね、この中でも論議をずっとやっているんですよ。特に今の基地問題等々の関わりで、沖縄の近現代史はぜひともこれは通過せんとだめだという、こういう強い思いを持ってやっているんです。



が、残念ながら、非常に不徹底。というのは、きちんとした副読本がない。いわゆる一斉に配られていないわけです。ですから、意識のある所はやられている。例えば、宜野湾高校で定年を迎えた新城俊昭君などは、今は沖大でやっていますけれども、彼独自に琉球・沖縄史の副読本を出して、これを採用している学校もあるんですね。けれども、これがいわゆる県下統一されていないと。また、教える側の力量の問題も現実にも絡んでくるわけですね。ですから、年月を入れてこれはやってこない、本当は子供たちに教えられない。こんな実は思いがあつてね、七、八年前に、最低これだけのことは知ってほしいということで、私、有銘政夫と崎原盛秀と相談をしましてね、僕が編集委員長になって、『沖縄をどう教えるか』という。これはある意味です。非常に易しいものからずっと進化して、後はいわゆる沖縄戦ですと教育と教師の戦争責任まで。あるいは沖縄だけのそれじゃなくて外国への加害責任等含めてですね、この中にかんりの歴史の部分を入れてあるんです。入れてありますけれども、どうしてもね、県議会が出たそれを、県教委の中で、沖縄の独自のカリキュラムに位置付けをして、そして副読本までつくらないといけないですね。

しかし今、「しまくとうば」というたった一つ、那覇市長などが偉いのは、彼は職員採用などにもそれを利用してあるんですね。市役所を訪れる窓口にも「ハイサイ、ハイタイ」から始まるということがあつて、独自の今、那覇市は副読本を出しているんです。これをね、ただできる所とできない所を、ほったらかしたらだめなんです。これを県の教育委員会の中できちんとカリキュラムに位置付けをして、最低これだけということ。

僕は佐藤優のあれに賛成なんです。沖縄の標準語、これはいわゆる首里、那覇ですからね。これはまた僕などはその育ちなんです。僕は、家ではほとんどしまくとうばです。それで演説できますよ。だから今、琉歌もやるんで。県教委の中でカリキュラムに位置付けをして、最低これだけというものを、いわゆる上・中・下

でも、これを分けましてね。これを一斉にやらせて、プラスして地域のものを利用すればいいと思うので。僕はもう今七六ですけれども、僕らは沖縄戦体験もあるわけですよ。話すこともできる。しまくとうばも話すことができるんです。この人たちがね、あと五年、一〇年はもちませんね。まだ健在のうちに位置付けして、少なくとも副読本を一斉にこうやってやれば、学校の教員がね、直接関わらなくてもね、地域の埋もれた人材をね、どんどん。総合学習というのは、これは校長の判断でどんどんできるようになっていくんです。既にやっている人たちがいるんですよ。桑江夫妻などね、中部を中心にどんどんやっているんですよ。それは点の存在なんです、まだね。

ですから、歴史や文化ですよ、こういう位置付けを。言葉は僕は最大の文化だと思ってるから。これもハワイの実践例がありますね。これにそのアイデンティティーをきちんと確立をして、自覚をして、自信を持ってやれば、その他に非常に好影響を及ぼしている。これはハワイその他の例でも、世界的に幾つもあるので、沖縄がそれを持った時に、政府との本当の意味での解決ができると思うんです。そういう思いで今、しまくとうばの、あれに僕もちよつと入会をして、この後非常にこういう役目がまだあるなという感じをいたしますけどね。

ですから、こういうことなどもね、見せませんとね。ただ琉球処分ですと片付けられたら、「ん、何で沖縄悪い事したの？ 悪い事して処分されたの？ その結果が今の沖縄県になったの？」というような。「命ドウ宝」の冒頭にね、「ンカシ、シヨウタイヤ」連行のことを拉致されて。今流に言えば拉致なんです。尚泰王はね、拉致されて行ったのだと。東京にですよ。「クリドウ、イクサユヌ、ハジミサラミ」これが戦世、これで軍隊を実は派遣をし、南進政策の拠点にするために、沖縄を併合したんですよ。最大の目的は。だから軍隊のいた島が戦争を招いたでしょう。それで沖縄戦の被害を味わったんですよ。こういうことを教えなさいかんです。歴史の

中でもはつきり。だから、そういう意味で、非常にこれは重要な写真です。こういうことで、これはぜひ頑張っていきましょう。

#### ○櫻澤 誠

教科書問題に関連して、おそらく沖繩戦に対してのこうした集団自決の問題なんかが起こった時に、一斉にばーつと反発が出る前提としては、学校教育であるとか、そういう所で教えられるのとはまた別の側面での沖繩戦に対しての伝わり方というか、そういうものが一つ重要なものとしてあるんだろうと思うんですけど、そのあたりはどういうふうな。

#### ○石川元平

今度僕が非常に感心したのは、サイパン、テニアンについてのそれを特集でうんと組みましたね。新報、タイムスがね。いつもより丁寧に記者たちがずっと連載を続けて、証言者のその声を伝えるというふうなことなどをやってきて。ですから、沖繩戦だけが語られたものが、今度は広い意味でアジア・太平洋戦争の中で、こういう形で追い込まれて沖繩戦に。こういう流れもかなり学習することができたんじゃないのかということと、この九・二九の集会でね、非常にまたすごいなと思ったのは、三世代、おじいさんと子供と孫、この姿をたくさん見たんですよ。やっぱり学校できちんとやらなくても、家庭を通しておじいから子供に、子供から孫にというふうな、こういうふうなことがなされる、これが沖繩にはあるな。そんな思い等をやりましてね。このことはしかし、教組としては一つの反省をしないといかんわけですよ。甘んじることなくね。まだまだ体験者が元気なうちに、幾らでも地域にあるんですよ。南部だけが戦場でも何でもないんだよね、全県下で沖繩戦は、それはあるわけですから。

#### ○櫻澤 誠

僕も実際にその場所にいましたけど、九・二九の時には三世代にわたってということが言われて、それは例えば九五年の一〇・二一の時とは、やっぱりちよつと違う。

#### ○石川元平

違う状況がありました。

#### ○櫻澤 誠

一〇・二一の時は、高校生が参加したりというのはもちろんあるわけですけど、家族連れでみたいな感じでは全然なかった。

#### ○石川元平

そうですね。ですから、北村登美さんのそれを紹介しましたけれども。自分の決意だけではなくてね、自分の思いを外にアピールするような形で僕は歌を詠んだと思います。自分のものだけにとどめないでね。こういう形でやっていこうじゃないかというふうな。

#### ○高橋順子

竹富町の教科書問題についてなんですけれども、人数が少ない中で教組の方が現地ですごく頑張っていると聞いたりするんですが、それは何か地域的な特徴があるんでしょうか。

#### ○石川元平

これは実は文科省がね、屈服させようとする一つの理由の中に、教科書を採択する場合、事前研究が必要なんです。全ての教科書を研究して、いわゆる優劣といいますか、採用のそれを決定していくわけけれども、あの小さな島でね、そういう共同研究ができるのか。人材ですよ。そういうのを大きな理由にしたんですよ。

そしたらご心配ご無用。八重山は退職教師が一番頑張っているところですよ。八重山にはね、ほかにない、広島のどこかにあると聞きましたけれども、ペスタロッツチ祭というのがあるんですよ。ペスタロッツチの教育理念、これを学んで今に生かそうというふうな伝統的な取り組みがなされていることもあって、退職した人たちの結びつきが非常に強いです。この人たちがバックにいるということですよ。もちろん沖教組の委員長、私の後の何回目の委員長かな、大浜君という、それも石垣に住んでいます。彼ともよく連携をとったりもしましたけどね。我々がバックで頑張っていますよ。そして退職教の八重山支部というのがありますが、そういう人たちが非常に

頑張っています。

もう一つは、本土から移住してきた人たちの中でも頑張っている人がいる。だから、バックにそういう。これはね、慶田盛教育長とのやり取りの中でこういうこともちゃんと触れられたと思いますよ。「ご心配ご無用」というようなことですね。

#### ○高橋順子

現役の先生の中で、教組に入っている人が少ないというのは。

#### ○石川元平

昔と比べると。八重山支部という所は、反日教組団体、日教連がうんと数十名を結集して。これはほかの支部、ほかの地域にはない所、そういう地域でもありました。これはね、色々教組運動の中で、例えば人事異動のトラブルで学期を遅らせたこともあるんですね。八重山。こういうことに付け込んできてね。

これも私が法制部長をしている時に直接関わったんですが、日教組の教研集會に、八重山の更に西表の出身、船浮中学の出身で、この女性教師が平和問題で正会員に選ばれて参加することになって、校長に申請したら、校長が拒否をしたんですね。校長は労働基準法上、時期変更権の権限はあるけれども、正当なそういう権利行使じゃなければいかん、管理者でも。で、不許可になったけれども、相談を受けまして、「組織が全責任を持つから行け」と。「いかなる後の事があつたつて」ということで行かせたんですね。そうしたら案の定、校長の命に従わず出張したということで処分を受けましたね、賃金カットなどもされました。

これを裁判を起こして日教組事件に認定させました。で、私はそのために八重山、西表にこの弁護士団を二回連れて行きました。すると俄然、何年も続くやつを、うんとスピード感を持ってやってくれてね。これがたまたま大田県政時代でもあつて、我々が地裁判決で勝ったんですよ。控訴するかどうか注目された時に大田知事はしない。大田知事も被告の一人に当然なるんです、あの場合は。教育行政の最高のあれは知事ですから。この校長は、生長の家の信者で

した。今でも裏で、玉津などを支援する、それで頑張っているんですよ。ということなどもあつて、控訴できませんで確定したんです。だから、年休問題で確定判決が出た。これはおそらく、今でも利用しようと思えばできる判例として、きちんと残っていますからね。次第に反日教組団体、当然、反沖教組団体、それは自然淘汰されて、ほとんどなくなっていると思うが、しかし、かといって組合員が一気に元に戻るなんていうようなことは、中々困難な状態だとも思っていますね。

### ■「民主党・鳩山政権の評価」

#### ○櫻澤 誠

そうしましたら、鳩山政権の評価のところについてお願いします。

#### ○石川元平

民主党鳩山政権の評価についてですが、長い自民政権から民主党政権が変わって、県民の間には日本の外交政策、これは特に対米政策の変更と、沖繩政策の変更にも期待する声もかなりありました。たくさん聞いてきました私も。私自身、所信表明演説の中における東アジア政策というのが非常に特徴だったと記憶しています。鳩山政権になって、普天間基地の県外移設を約束された時には、これで山が動くかという、そういう期待感も持ちました。しかし、政党内に爆弾を抱えてというのは、これはいわゆる親米右派勢力のことです。前原みたいなですね。抱えて誕生した政権の県外公約はつぶされて、県民の期待は裏切られることになりました。そこで再認識させられたのは、政権が変わっても国家権力、これは官僚と政権の対沖繩政策は変わらないということを思い知らされました。明治から続く、日本という国の沖繩に対する構造的差別の存在についてであります。鳩山自身は県外を裏切ったことで、来沖をしまして謝罪もいたしました。私も、佐藤先生、一緒に行かなかった？



○佐藤 学

行きましたよ。

○石川元平

第二小学校に行ったでしょう？

○佐藤 学

行きましたよ。私、怒鳴った。

○石川元平

我々は一〇〇名の中に入って、あれを聞きましたよ。そこですよ、問題はね。これをなぜやらなかったのかというのが今もってね。政権を投げ出す前にですよ、国の安全保障体制、とりわけ日米安保体制と沖縄基地問題、これはすぐれて日本問題でありますから、これを国民に信を問うということができなかったのかということです。いわゆる民主党政権への大変革のチャンスに、総理しか持ちえなかった伝家の宝刀を抜いてほしかったのに、それをしなかったということなんです。実際に衆議院解散をして、結果がどうなるうとも、その時の国民のそれぞれの責任は後世に残せたと思うんですね。ところが、そのチャンスを逃してしまつたと。鳩山政権は自民党政権で築かれた国の基本政策の転換を図るということでは、党内をはじめ支持基盤が脆弱すぎたと。そのことが結果として、沖縄との公約も裏切ることになり、政治不信を招いて政権を明け渡してしまつたというふうなことです。

翻つて今ですね、今年の五月三十一日です。私にも案内が来ましたけれども、「東アジア共同体と沖縄の未来をどう拓くか」というシンポジウムが那覇のロワジュールホテルで開催されました。那覇市にまた事務所も設置をしてあるんですね。これは軽く見られるかと言ったら、タイムス、新報、両紙が特集を組んで伝えているんですよ。僕は行けなかったけれども、これをかなり読みました。

ヤマトから七月一二、一三、一四日、全国地方議員交流会というのを沖縄で持つんですが、これも私、世話をしているんですが、やっぱり沖縄のこの後の方向とも絡んで東アジア共同体、沖縄のい

わゆる万国津梁という、前にも言ったかもしれませんが。二〇〇〇年の沖縄サミットをやった時に、部瀬名のあの建物に、名前も「万国津梁館」と名付けたんですね。

今流に言うところ、万国津梁というのは世界への架け橋という意味です。小さな島国だけれども、三六〇度にかけているという意味です。その結果、今ね、四〇万のウチナンチュが各五大陸にいるんですよ。チリの一帯の先にも住んでいるんです。ウチナンチュが。僕が北欧に行った時に、我々をガイドしてくれたノルウェーのガイドはウチナンチュでした。びっくりしましたが、サipanに行つて戦跡周りをしたら、ガイドが名護の玉城さんという女性でした。もうびっくりするようなことが色々ありましてね。

ですから、島国だから隔絶されてどうというあれじゃなくて、開かれた発想を持つて、共生の資質を持つていっているんです。ですから、国境なんていう意識は昔からないんです。ウチナンチュの中に。だから国民意識、正確な意味で、現在の国家意識の中のそういうものはないですよ。だから、それはEUやね、もう既に進んでいる所があるじゃないですか、大きな地域としてもね。こういう思いを持つた、そういう民族、ウチナンチュなものですから。この中にね、今まで乗り越えられなかった色々な提案やそういうものが私は出て来るんじゃないかと期待するんですね。そうじゃなければ対抗できませんのでね、国家権力へは。建白書体制のこのグループは、少なくとも、かなりの人が共感を持つて連携をしていくんじゃないのかなという思いを持つていましてね。

## ■「民主党・鳩山政権の評価」の質問・応答

○櫻澤 誠

ありがとうございます。ご質問いかがでしょうか。

○佐藤 学

鳩山さんがすべきだったことは、日米合意を結ばないで、結ばないで政権を放り出していればよかったです。

○石川元平

そうなりますね。

○佐藤 学

それだけです、それ以上の事なんか何も望まない。最後にあんな事しないで投げ出していけば、まだ少しはこんなことになってなかったと僕は。結局、今になって色々な事をやるというのはおかしな話で。

○石川元平

まあ、取り繕ってという感じもしないでもないけど。

○佐藤 学

こういう事になっているということ、辞めた後から言われているわけでしょう。総理に私がこんな事を力んで言う場合ではないのでやめますけれども、総理大臣というのはすごい力を持っているにもかかわらず、いじめられましたみたいなことを、辞めた後でインタビューで答えるって、それは、結局それをしないで辞めちゃったというところに、彼が沖繩をどう見ているのか、どのように考えていたか、辺野古をどう考えていたかよくわかる、表れていたと思います。

○石川元平

もまれてなくてお坊ちゃんであった証拠でもあるのかなど。というのは、前原だとか、閣僚になっている人たち、一部の官僚含めて、「これで行くぞ」というふうなことで確認をしながら、これは嚴重な箝口令も敷いていながら、すぐ翌日の新聞にぱつと大きく出たでしょう。

○佐藤 学

という話をね、されたんですけど、僕、あの時に「この人は怖い野郎だな」と思ったんです。こうやって「宇宙人だ」みたいに、こうやって乗り切ってきた人なんだとか思っ、ちよつとだから、

何かね沖繩の人たちは優しいなと思っ、てですね。

○石川元平

このね、前原というのも、私は完全な親米右派勢力と見ているんですが、宜野湾の市民会館大ホールで、そういうシンポジウムを開いた時に、各政党代表は皆に、いわゆる考えを述べさせて、ディスカッションをする中で、一方的に言っ、て、飛行機の何で逃げるように帰ったんですよ。あの時から、彼の主張自体がね、全く相いれないような、国からの目線、で沖繩問題を、そういうことを堂々と言っ、て、さつと逃げるように帰りましたから、こういう人が民主党政権、鳩山政権になつ、ても、こういう位置に就いて、やっぱりこのことについては大きなクエッションマークを持つておつ、たんですけどね。

## ■「反基地運動の高揚、県民大会（二〇一〇年、

### 二〇一二年）」

○櫻澤 誠

それでは、反基地運動の高揚、二〇一〇年、二〇一二年の県民大会についてお願いします。

○石川元平

反基地運動の高揚、県民大会についてであります。これは大きく二〇一〇年と二〇一二年という事で分けてあります。

まず、二〇一〇年についてであります。二〇一〇年一月二四日に名護市長選挙が行われて、「海にも陸にも基地はつくらせない」と言っ、て、辺野古新基地建設に反対をした稲嶺進氏が初当選をいたしました。五月四日には、鳩山首相が宜野湾市の第二小学校、先ほども出ました県外を撤回したこと、謝罪にみえました。北澤防衛大臣は仲井眞知事と会談をしたということも当時の新聞に出ています。五月二八日には、日米両政府、辺野古合意の共同声明をまた発表し

ております。六月二日に、鳩山首相が両院議員総会で辞任表明をして、菅内閣へ引き継がれていきます。九月一二日に名護市議会議員選挙があつて、稲嶺与党が一六対一一で圧勝をし、これが今日までずっと続いているということです。一月二八日には、県知事選挙で「普天間基地閉鎖・返還、辺野古新基地建設反対」を掲げた伊波洋一、当時宜野湾の市長だったんですけれども惜敗をする。保守県政が二期目へと。同時に、同日でしたけれども、宜野湾市長選挙では革新の安里猛候補が当選をするということです。

その年の一月二二日にはすね、NHK教育テレビで「歴史は眠らない―沖縄・日本四〇〇年」「沖縄返還への道」というものが放映されました。これは、屋良元知事の日記を元に、その苦悩を描きながら屋良の日本観、これは私が勝手に入れたんですが、屋良朝苗が日本政府、日本に対してどういう思いを持っていたのかという、これまでの屋良の著書、マスコミ関係、色々なものの中には表れていないものも探ってみたいということもあつて。担当したディレクターが吉田功といつて、ものすごく沖縄にこだわった中堅の若いディレクターに一応任せたんなんです。それでは務まらないといふことで、自分が引き取つてということ。何回かお会いをして、その前後の論議を交わしながらすね、制作をされたものですが。解説は小森東大教授が。象徴的な、最初に辺戸岬の復帰闘争碑から出ましたね。そして嘉手納基地のそこを歩きながらという。沖縄の当時、黄色のあれを着てくれたんですよ、黄色のシャツをね。これはまた再放送もされますが、沖縄返還協定が国会で審議をされている時に、屋良は「復帰措置に関する建議書」なるものを持つて。これは県民各層から集めた、沖縄の復帰はこういう復帰の形にしてほしいという、もちろん基地のない復帰です。安保も「ノー」、自衛隊も「ノー」ですよという、県民要求を皆で吸い上げて、こういう建議書を持つて。この情報は、もちろん当時、自民党国会に伝わるわけですから、ちやうど審議の最中に、衆議院の沖縄返還協定特別委員会、当時、上原康助が済んですね。瀬長亀次郎、こ

のさなかに打ち切られたんです。自民党から緊急動議が出て。まだ安里積千代もやっていなかったはず。打ち切られて、すぐ強行採決なんです。屋良が羽田に着く頃は、もうこれは強行された、マスコミが大騒ぎをして、翌日、総理以下衆参両院議長その他、関係閣僚に抗議をしながらも、それは手交せざるを得なかったんです。七一年一月一七日です、返還協定が強行採決されたのは。

この時の屋良朝苗日記に必ず出てくるであろうと。出てきたんですよ。これは吉田ディレクターと僕の思いが非常に一致して、放映した時には「見ましたか、どうでしたか」と言ったら、「いいのをつくってくれて、ありがとう」と僕は言ったんですが、要するに、沖縄の思いなどは、弊履のように扱われた。この「弊履」という意味がわかりませんでした。辞書を引いたら、破れた草履です。ね、のように扱われた。もうこれはものすごいショックでしょうね。あの思い。こんな事は僕なんか聞いたことなかったんですよ。屋良本人からね、そういう日本政府への思いを聞いたことがなかった。日記の中には、こういうふうな、あれは4Bの鉛筆で書かれていまして、強くそれが印象に残った。

タイトルが「歴史は眠らない」なんです。体制の側は眠らせたんです。都合の悪いのは。沖縄戦も。あるいはサンフランシスコ講和条約、そういうのは眠らせて、これからは前だけという、こんなことなんだけれども。「沖縄・日本四〇〇年」という、これはいわゆる島津の侵攻から入ってあったもので、これは中々広い視野で捉えた番組で、また沖縄がああいう処分に遭つたために、これはいい番組をつくってくれたというような、こんな思いでした。

その知事選挙では敗れるんですが、六月七日にすね、伊波洋一とともに、大田元知事に呼ばれました。いわゆる候補者の中に、もちろん伊波洋一も出ている状態でしたけれども、大学人も何名か出ましたね。そういう中で、すぐ会いたいということで、二人で会いに行きました。やっぱり結論的に早く立候補の受諾をして、出馬表明すべきだという。そのためには色々なことを受けましたけれ



ども、相手の関係、これを分析をしておられて、また自らの体験を踏まえて、色々な助言等もしてくれました。その後もちよつとあつた記憶がありますが、これが非常に強烈に印象に残っていました、「必ず勝てるぞ」という励ましを受けたんですけどね。最終的には、先ほど来言っているように、政府の国家権力の総力ですよ。国家権力と言えば、六八年の主席公選から見えてきた幾つもの三権力ですよ。日本政府というアメリカ政府。そして、いわゆる沖繩のですよ。こういうのを相手にしての闘いですから。沖繩では世論調査などもやりません。誰がいわゆる優勢、リードと言つても決して勝てないんです。これはかなりの二桁。伊波洋一は落ちた後、市長に立候補して、それでも九〇〇票で落ちるんですけども、二桁のリードという裏を取つてみれば、こんな情報なんです。沖繩タイムスの世論調査でしたけれどもね、あれからどんな事をやられたか。

ちよつと脱線します。こんなことです。投票率というのは大体見通しはつくんです。投票して保革の基礎票もほぼどつこいと言いましたけれども。特に今までは投票に行かなかつたような人たちを必ず行かせるために、ある程度金を握らせて。全く選挙の何もわからないような若者たちを含めてね、そういうのを集めて、うまくそういうことがやられたようです。だから、これを超えた色々なことがまたやられているかもしれないという、二〇一〇年の名護では勝つたけれども、一大政治決戦の知事選の敗北が今日にまた尾を引いてきたという。ある意味で、屋良のこういうふうな思いも伝わつて、本当はこういうものをうまく活用してやれば、もつと復帰運動闘争を体験した人たちから、また逆にできたんだらうと思うが、これは一定あれもこれもというような状況の中でね、うまくいきませんでした。

次に行きましてね、二〇一二年、これはちよつど復帰四〇年の年です。ずつとこの間、一九六〇年から私は色々なそういう事に関わつてきての三つの思いというのは、どちらかというと、その思いは怒りですね。象徴的なものとして三つ挙げましたのは、戦後六七

年、いわゆる国際法、これはハーグ陸戦条約に違反して、アメリカの占領軍が住宅地に基地をつくつて、ちよつどこのあたりは、旧役場と国民学校などがあつた場所なんです。これよりもちよつと向こう、滑走路のあるあたりがね。普天間神宮から首里に通ずるナムチと言われる沖繩一の松並木があつて、こういう住宅地を押しつぶして、日本軍が使つたんでもない新しい基地をつくつた。だから、その占領軍が居続けている実態への怒りであつたし、それから「世界一危険」と裁判所も認めた普天間飛行場、ラムズフェルドもその上を飛んだんです。同じような趣旨の事を言っているんですよ、ラムズフェルドがね。二〇〇三年一月だつたと思いません。その飛行場の危険性を放置し、市民の人権、平和的生存権を侵害し続けることへの怒りであるし、辺野古新基地建設、南西諸島への、自衛隊の増強など、沖繩が再び捨て石にされようとしていることへの怒りという、私の個人的な怒りの集約は、こういうことでありました。あと、二月一二日に宜野湾の市長選があつて、伊波洋一が九〇〇票差で惜敗をいたします。

県内外のマスコミ取材で、復帰運動の誤り、これは私が直接経験したことです。二七度線海上集会、復帰四〇年ですから、沖繩に對して、本土の三大新聞をはじめ、かなり九州含め県内はもちろんですけれども、一社延べ二〇回以上、一社で人をかえて、日にちをかえての取材等も何度も受けたりもし、そして、それはもう殆んどまた取材を受けた結果は送つてくれましたけれども、二七度線初めて海上集会をやつたのは、六三年四月二十八日から終わったのが六九年の四・二八なんだけれども、所によつては七〇年まで続いたとか、七二年まで続いたというものがマスコミとして活字になって、あるいは映像として言われてきた。これは違ふよ。これはね、取材を受けたということ、私からむしろ働きかけて、そういう誤った宣伝がされているから、この際、明らかにしておきたいということ、私から直接声をかけたら、かなりの人から反応があつて、それは結果としては読売まで全て六三年四・二八から六九年四・二八

まで、七年間にわたつてというふうには、そういうことにこれが確定しました。だから、やっぱり体験者は必要だと、こういう時に思うわけですよ。そのまま見過ごしてしまつたら、そのまままた流れしてしまう。

あと一つはね、四〇年ですから二年前、普天間の野外海浜公園のあれで、県民大会を開いてアピール文の中に「沖繩は米国の信託統治に置かれた云々」があるんですよ。これに気が付いて、この集会の最後にアピールを発表するものですから、ちよつと若いのを呼んで、進行している山城君に、「これは誤り、これを持って行け」と言つて、直前に訂正させました。こういう、いや、これはね単独の起案で済ませる問題じゃなくて、幹事会で皆で協議しているはずなんだと。この県民大会のアピール文ぐらいはと思つたんですが、こういうのが出てくるんですよ。

#### ○佐藤 学

いろんな人が、いろんな団体がいろんな事を言つて、それをまとめて一つの文章にするから、文章の繋がりがめちやくちやになつているのを見逃しちやつたんだらうと。僕は関わっていないので、わかりませんけれども。

#### ○石川元平

本当にね、そういうことなどが具体的にあつてですね。その後、六月一〇日の歴史的意義を持つ選挙でね、革新野党が多数を占めているんです。今は何対何か、今は空席がありますからね。とにかく五席以上の差を持っているんですよ。これは圧倒的多数と今は言つていいぐらいの安定した野党勢力なんですよ。こういうことで、またこの後も頑張つてほしいなと願っていますよ、七月四日に「オスプレイ配備反対キャラバン隊」が県庁広場前で出発式を行いました、那覇から宜野湾、嘉手納防衛施設局を通つて名護へという、こういうことでオスプレイ反対の具体的な取り組みが始まったのはそこからかなという感じがいたしました。九日には、「オスプレイ配備反対県民総決起大会」が一〇万一〇〇〇名参加で大成功を収めた

と。これは宮古集會に一五〇〇人、八重山集會に五〇〇人という発表がされました。九月二八から三〇日、これも歴史、有史以来初めて、この米軍普天間基地を封鎖をしたわけですね。後半は台風のそういう余波もありましたけれども、普天間基地第一ゲート、第三ゲートをオスプレイ配備反対の座り込み団が封鎖。これは二八の前に県民の実行委員会も第三ゲート前で集會を開いたり、そういう非常な高まりの中で、この封鎖行動に入ったということです。三〇日に、米軍のMP隊が結局、ゲートを開放。そういう通告を受けて県警の機動隊が具体的に動いて、暴力的に排除するという。けが人も多数出ています。ところが逮捕者は出てないんですね。一時、有力な人たちが装甲車の中に押し込められて身動きできずに、ある意味で、余り統制もとれなかつたとか。いづれにしても、この普天間の報告書の第四号には表紙に、あの場面のカラー写真を使つたんですよ。宣伝カーも四台、これはレッカー移動。車もね、あらゆる物で封鎖した。人間の力だけじゃなくて。だから、そういうふうなものはレッカー移動させるなど。でも、こういうことの可能性があるというふうなことは、この後も色々利用できると思います。

オスプレイ飛来が具体的に一〇月一日に六機、二日に三機、六日に三機で合計一二機。当初は一二機ということで配備されて、その後、一二機追加されて、今は二四機体制に確かなつていていると思います。それを負担軽減ということ、本土にどうのということが今言われているわけですね。野嵩第三ゲート、第一ゲートでは連日抗議行動、今日もです。第一ゲートではですね、沖繩でサラバンジの会が向こうでの行動、早朝行動担っている。サラバンジというと、日本的な言い方をすると、働き盛りという意味ですね。実態は退職者だが、やっぱり働き盛りを自負をして、基地問題で働き盛りになっているわけですけどね。第三ゲートは市民連絡会、その他個人参加含めて、連日組まれています。

ただ、オスプレイ配備の前にね、そこを使用した三三〇号寄りのゲート前のちよつとしたスペースがあつたんですよ、一〇〇メートル

ルぐらいの。これなどが新たに二重フェンスされて、新たな看板が出されたんですね。そういう集会をやるなどかというような、こんな条件がやられていますけれども。あと、本当に見事なきれいな抵抗の手段として、粘着テープですよ、赤・青・黄色、特に赤と黄色。いろんな形の、いわゆる「アメリカ軍は出て行け」とか、もう芸術的なそういう文様を掲げて。それをまた取るグループがいるわけですよ。それを大体、月曜から始まって約一〇〇メートルのをやっている、上にも、もうあらゆる所にやっつて、また見苦しいものだけじゃなくして、きれいな文様をつけたり、意思表示だけはばっちり伝わるような、こういうことをやっつて。次はまた土日を利用して、これを剥すグループが。こんなことの繰り返しを、これ数カ月続いてきました。今はちよつとありません。というのは、警告が出たんです。軽犯罪法ということではあるけれども、やっぱりこれを多発させるとちよつと具合が悪いというような判断等になって、これは今はきれいになっていますが。

沖繩的な「サン」というのを聞いたことありますか。勾玉ご存じでしょう、僕もちよつと歌に詠みましたけれども、マガタマ、あれは祈りに使われますね、日本でも。海勢頭豊君に言わせると、あの勾玉は「ザン」、いわゆるジュゴンのことを「ザン」と言うんですよ。また「サン」とも言う。沖繩の精神風土の中で、屋敷の四つの隅にスキの、それで「サン」を結うんです。ちよつと勾玉のよな造形的なあいう形になります。魔除けです。これをね、スキのあれを、一番高いあのフェンスの上に差していたらしい。これはシバサシと言うんですよ。あんなもの誰が考えたか知らないが、色々な知恵が出てくるんですよ、そういう事も実はやりながらだけでもしかし、最近はそのれも一応引いたみたいないな形にして、次に何ができるかと。

今、継続して中ではのぼり、あるいはまたかなり大きな赤旗をなびかせて。横幕は昨日通ったら、かなり増えていましたね。六本ぐらいの横幕。これには本土から観光で来る人も飛び入りでやっ

りもするんだそうです。こういう人たちを含めてね。私は早稲田の学生三〇名ぐらいに、一時間余りかけて、将来、こういう人たちが官僚にもなるだろうし、また色々な立場で指導者になるであろうと思つて話をしましたが、あらゆる取り組みがそこでやられてもいるわけですね。

ひとまず、この二〇一〇年から一二年にわたる取り組み。最大のもは九月九日のオスプレイ、この県民大会だったと思います。ところが押し切られて、配備はされてきて、その怒りは今でも収まらずでなくて、新たな闘いが、いわゆる建白書の体制が今、持続をしているというふうに見ていただきたいと思います。

## ■「反基地運動の高揚、県民大会（二〇一〇年、

### 二〇一二年）」の質問・応答

#### ○櫻澤 誠

ありがとうございます。二〇一〇年の四・二五のことが触れられていなかったと思うんですけども、何か加えてあれば。四・二五の読谷での県外・国外移設を求める大会のことは。

#### ○石川元平

はいはい。これはちよつと抜かしましたね。あれは晴れた非常にいい天気で、本土からも大阪の私の友人なども来てくれて。宜野湾は各字のエイサーの旗頭を持って。あの時は、かなりの青年団なども旗頭を持って参加を。いつもの大会とは違った雰囲気の大大会が持たれた、それでもありましたね。

#### ○佐藤 学

質問というか、あの時に海浜公園が使えなかったのが、高校総体があつて、それで芝生の養生に間に合わないだろうとかいう。

#### ○石川元平



理由でしたね、今、思い出した。

○佐藤 学

それで読谷になった。それは嘘だという、芝生の業者に友人がいて、それで何週間かあって、それで養生できないわけがないと。それで、この海浜公園は宜野湾市なんですよね。本当は使えないわけではないのという話があったんですけど、何かご存じのこととおありですか。結局、読谷でやったので、遠い場所もあれだし、アクセス道路が悪くて会場に入れなかった人たちがいっぱい。

○石川元平

思い出しましたよ。終わってからね、あれ出るにも時間がかかりましてね。そうしたら、今から行くというのに、ものすごくすれ違ったんですよ。だから数はね、本当は実態はうんと増えている。だって、向こうに行くのは初めてですから、進入路が余り整備もされていないという状況等があった。

○佐藤 学

自分は歩いて行ったなど。そのことで歩いて行ったんですけど。

○石川元平

それでかなり強い思いを持って、あれだけ馳せ参じてくれたなどいう。

○佐藤 学

そうなんですよね。

○石川元平

今は携帯を皆、持っていますから。「いや、もう終わるよ、ないよ」と言いながらも、「いや、それでも行きたいさー」というふうなことで、会場には行ったというふうな人たちも随分出てきたわけです。閉会后。それが確かにありました。これもちよつと付け加えないと。

○佐藤 学

海浜公園を使わなかったというのは、実は何かの陰謀ではないかみたいな話があったんですけど。

○石川元平

これはですね、市職を通して、かなり我々もチェックしたと思えますけれども、これはちよつと突破できなかったんですね。

○佐藤 学

わかりました。

## ■「戦後沖縄の「革新」と「保守」それぞれの成

### 果と限界」

○櫻澤 誠

最後に、「革新」と「保守」それぞれの成果と限界、そして、「復帰」とは何だったのかについてお話をさせていただいて、それでは今日は終わりとということにしたいと思います。

○石川元平

それでは、戦後沖縄の「革新」と「保守」それぞれの成果と限界。私の主観も当然入りますが、私もそういう共同会議に参加をし、ある時期、事務局長というふうなことをやって、直接また屋良、喜屋武、その出身母体でもありましたので、これは大田まで含めてですが、そういう私の体験からですね、一定の整理をしてみました。

一番目に、米軍の軍事占領支配に反対し、即時祖国復帰の要求を掲げ、日米安保体制、自衛隊にも反対して闘い続けてきたという、一時的なものじゃなくてですね、それが革新と呼ばれてきた。自分たちの自負だけじゃなくて、世間からもそういうふうに見られてきました。

二番目に、六二年「立法院決議」というのがありますが、これは復帰自体、保守勢力もですね、これに反対ではなくて、だから全会一致で六二年に立法院決議なるものが、いわゆる復帰要求ということでされています。ところがですね、米国の施政権下に置かれた現

状を容認をし、結果として基地も日米安保も認めて、米占領体制維持に協力してきたのが保守である。だから、西銘さんなどが、彼自体は元社大党の出身でもあったわけだけれども、屋良さんと一緒に争った時には口を滑らせて、いわゆる復帰反対とも受け取られるような、こういう発言。いわゆる、復帰尚早論、今は復帰すべきじゃないというようなことで、基地経済のもとで、もっと経済発展をしてからなんていうようなことも盛んに言われた時代です。こういう人たちが「保守」というような規定をして、今日まで来たわけですが。

三番目には、「保・革」の旗印を鮮明にして、初めて全県選挙で争われたのが六八年の屋良対西銘の主席公選でありました。

四番目に、「革新共闘」をはじめとする沖縄革新運動の成果ということで、何点かまとめてみました。①として、沖縄に米軍占領支配に抗する革新勢力が存在しなかったならば、「サンフランシスコ講和条約」でうたわれた「米国の信託統治領」のような、国籍不明の地域になっていたのではないかと捉え方もできます。復帰闘争は、いわゆる「サンフランシスコ講和条約」という国際条約も打破して、初歩的ではあるが「復帰」という金字塔を打ち立てることができた。

②として、国連憲章や国連における植民地解放宣言、国際人権規約及び日本国憲法の理念を追求し続けてきたと。これは今の普天間の具体的な例なども挙げましたけれども、いわゆる、ただ護憲というふうな言い方だけじゃないですね。憲法を生かす。憲法で闘うというふうなことで、これは色々な地域で、これが具体的になされてきています。沖縄県憲法普及協議会というのが、私も入っているそれがありますけれども、そこは憲法手帳なるものも発行し、毎年五月三日に那覇市民会館大ホールを埋め尽くすぐらいの集会を、ずっと今日までも持ち続けています。

③として、米占領体制下、県民の人権を守り、子供たちの教育条件整備から主席公選、国政参加、「日の丸」掲揚、渡航制限撤廃、

その他、自治権拡大などですね、血と汗の闘いをもって勝ち取ったのが「七二年復帰」であったわけですね。革新勢力を中心とする大衆闘争の成果であったというふうに思います。

④として、「七二年復帰」の欺瞞性を糺し、「建白書」に見られる「オール沖縄」の態勢づくりも、復帰運動の成果とその反省、教訓を生かしたものとして今後の成果が期待をされるということです。⑤として、本土の右傾化に警鐘を鳴らし続けてきたのも革新勢力でありました。

これは一つの私たちの具体的な例、一〇四号越えの一五五ミリ実弾砲撃演習、さきに橋本・大田協議の中で、その移設にも触れられましたけれども、沖縄から撤去されるのは、いわゆる米本国であればよかつたわけだけれども、これは日出生台から矢白別までの五つの場所にということで、これが非常に気になりまして、私自身、その当時の、今の平和運動センターという、そのちよつと幹事をしておりましたので。

あとですね、これは私が委員長になってからですね、委員長の後半ですね。北海道のほうから、根室で国民北方領土返還集会を開く。要するに北方領土、領土返還問題です。この沖縄復帰運動の基調報告をしてほしいという要請がありましたので、私は根室のその集会場へ行きました。毛ガニとかたくさん御馳走になりましたけれども、そこでお話しをし。

一方では子供たちがフォーラムみたいなことを開いてやって、これもちよつと覗く機会がありましたけれども。向こうでは、ビザなし交流ですか、北方領土の子供たちと北海道の子供たちが交流しているんですね。こういう事業をして、子供たちはあの美しい自然を見ているんですよ。で、非常に印象に残ったのは、いわゆる無条件で返還しないほうがいい、小学生から高校生までいましたけどね、何人かがそういうことを言っているんですね。理由は、自分たちの友達に住んでいるあの自然、そのまま返還したら、日本はすぐ開発して利用してしまう。それでは、あの綺麗な自然が破壊されてしま

うというので、共同管理したほうが良いというようなことを子供たちが意見等で出しているんですよ。「ああ、これはいいな」と。

私が臨んだのは講演会でありましたので、ディスカッションはなかったんだけど、結論は「早く、北方領土四島を返せ」なんですよね。そのために沖繩のあれを聞きたいという。私はそこでね、一〇四号実弾砲撃演習の、いわゆるそういう海兵隊が北海道にもやってくると。しかも、北方領土を所管するのは、あれは根室なんです。矢臼別は根室の所管なんです、演習場も。同一の場所ですよ、区域。海兵隊の実弾砲撃演習も、北方領土をあれするのも根室の管轄なんです。そこでちよつと警鐘を発しておきました。北海道には、稚内に自衛隊の基地はあるんです。ところが、米軍のそれは無いんですよ。そこにね、最も、いわゆる我々が侵略軍と見ている海兵隊が、そこでドンパチをやる。そうなったら、ロシア、ソビエトを刺激しないはずがないと。そのまま返したら、必ずそこに、あいくちを突きつけるような基地だって造るよと。だから、この矢臼別への移設については、ぜひ反対をして、これは止めておかないと、必ず北方領土問題に悪影響を及ぼしますよということ、僕は警鐘を発してきました。ところが予定通りになっちゃって。あれから、北方領土問題は本当に立ち消えになりましたよ。また思ったのは、いわゆる政府、外務省というのがあって、そのことに関わってきた人たちが、政治家含めてあるはずなのに、これだけの見通しさえ持ち得なかったのか。北方領土問題などどうなっても、矢臼別でのあれを許容したのかという。こんなことを含めて非常な今もって大きな疑問なんです。全く大きな流れを見てないなというふうな感じを強く受けました。

それから、革新運動の限界についてですけどね。実際にこれに関わってきた者として、革新共闘を初めとする革新運動、選挙だけではありませんが、六八年の主席公選を契機に構築をされました。それは必然的に対立する勢力を生み出す。当然なんです、これは。したがって、国家権力の介入を許す結果、その素地をつくる。これ

は残念ながら、そういうことを結果するわけです。

沖繩問題は、保守・革新の枠を超えた問題ということに、二〇一二年、つまり復帰四〇年以降、多くの県民が目覚めたのではないのか。その意味で「建白書」の実現を求めるオール沖繩の再構築は、沖繩の明日を切り拓く大きな力になるのではないかと。

保守のことについてはあまり。保守でも一定当然限界があるわけで、米占領支配下から今日まで、国家体制の与党としての存在は、沖繩の歴史上も長続きはしない。これは歴史が物語っています。沖繩には常に約半数の反体制ともいえる批判勢力が存在するからであります。保守側の限界は、私からはちよつと触れないことにいたします。

## ■「復帰」とは何だったのか。自治州構想や独立論などをふまえて」

○石川元平

あとですね、「復帰」とは何だったのか。自治州構想や独立論などをふまえてというふうなことです。一番目に、「復帰」とは、何度も申し上げてきていますが、日本は敗戦の教訓と反省から、「平和憲法」を持つ国に生まれ変わった。こうずつと理解してきたわけですね。「サンフランシスコ講和条約」によって、米軍の占領支配下に置かれた現状から脱却をして、人権と本土の人々と同様な平和憲法体制の恵沢に浴したいという強い願望から「復帰」運動が始まりました。所詮それは民族主義的色彩を帯びた運動でもありません。これは「日の丸」掲揚運動に象徴されるようなものです。

しかし、二番目に、六五年の佐藤来沖とベトナム戦争、ちよつと六五年からベトナム戦争、沖繩の海兵隊がダナンに上陸するんですよ。足場にされる基地沖繩の実態を見、これはまたB52がまだ



押し寄せて来るとかね、六七年の佐藤・ジョンソン会談、決定的になった六九年の佐藤・ニクソン会談、共同声明が発せられます。によつて、「七二年復帰」、施政権返還は、沖縄県民の要求する復帰にはならないことが明らかになりました。施政権は米国から日本に返還されるものの、米軍基地は居残り、「核密約」、「基地自由使用」という、これはずっと五・一五以降ですね、これは西山記者のあれにも、色々な形でこれも、今もって問われ続けているんですけど、その欺瞞的返還であつたからであります。沖縄県民の要求、これはもう、繰り返すまでもないと思いますが、六八年の主席公選で屋良が掲げたですね、これは復帰協の基本スローガンでもあつた「即時無条件全面返還」つまり、基地のない宮古・八重山は先に返していいのではないかと、地域分離返還もあつたんですね。それから教育、戸籍等々、基地に直接影響を与えないものについては機能別に返還していいのではないのかと。これは森構想とも言われた、森（清）総務長官が打ち出したこういうものもあつた。ところが、こういうものは全てだめですと。核抜きだけでもと、色々ありましたけれども。核も基地もない沖縄という、これが「即時無条件全面返還」。これは復帰協の基本スローガンとしていて、屋良はそれを掲げて当選をしたんです。だから、県民の意思がどこにあつたかが明らかになり、日米政府は、それでおつたまげたわけでありませう。

三番目に、県民要求が裏切られた後は、いわゆる復帰運動からです、闘争というふうなことに発展をして、「日米共同声明路線による沖縄返還糾弾」と、それから「佐藤内閣打倒」などを掲げた怒りの闘いに高揚していったと。「反戦復帰」とか「完全復帰」とかという色々な言葉が使われたりもしましたけれども。

四番目に、七〇年代後半から日本政府の沖縄への対応を批判的に見てきたマスコミ、文化人から「反復帰論」が唱えられるようになってきたが、大きな潮流にはならなかつた。

五番目に、自治州構想は、国の「道州制」論議の中で、沖縄県内

でも行政経験者、自治労OBが中心ですが、学者・文化人、あるいは市民団体などがさまざまな構想を打ち出してきました。私が関係する「琉球自治州の会」でも、『琉球自治州の構想』自立を求めて』を世に送りました。二〇〇五年一月一日。これの平和外交政策を僕が担当するということになったわけですが。しかし、琉球自治州の会もですね、その後、客観情勢の変化もあり、組織名も「琉球・沖縄の自己決定権を樹立する会」に衣替えをして、現在、再出発の準備を進めている段階です。

六番目に、「復帰四〇年」の二〇一二年五月一日には、「琉球民族独立総合研究会」が設立をされました。「独立」という形で現在の植民地支配の打破、脱却を目指そうという、そういう学会であります。いつか紹介したと思いますが、この『時の眼ー沖縄』という、これ批評誌『N27』という、これは北緯二七度線のNです。で、これも紹介だけになります、一一二ページから一一五ページに関連する資料が載っていますから、ご参考にしてください。

七番目に、「独立」論についてのさまざまな言説があります。これもね、うまく、この『N27』の中で、「『独立』論についての覚書」ということで、新川明の論考が参考になります。

八番目に、今月二六日、沖縄タイムスの一面の下のほうに『琉球共和社会憲法の潜勢力』、潜んでいて表に現れない力という意味だそうですが、これは川満信一。この琉球共和社会憲法の立案者です。沖縄タイムス元記者でね、詩人で。それと仲里効、若い評論家と思つたんだが、もう仲里君も六〇ぐらいになつたのかな。雑誌を創り始めたあの頃はね。もう白髪が生えて、僕らと同じぐらいに見えます。が編集した、それが紹介を実はされていて、サブタイトルを見ると「群島・アジア・越境の思想」というようなことで、未来社から出ています。

後半の部分は、ただそういう紹介になりましたが、今後、皆さんが色々調査・研究する上でお役に立てればと思つてひとまず。

○櫻澤 誠

ありがとうございます。本当は石川先生ご自身のご意見などをも  
う少し伺いたいたいところなんですが、お時間にもありますので、  
これで終わらせていただきたいと思います。本当に六回、半年余り  
にわたって、どうもありがとうございました。